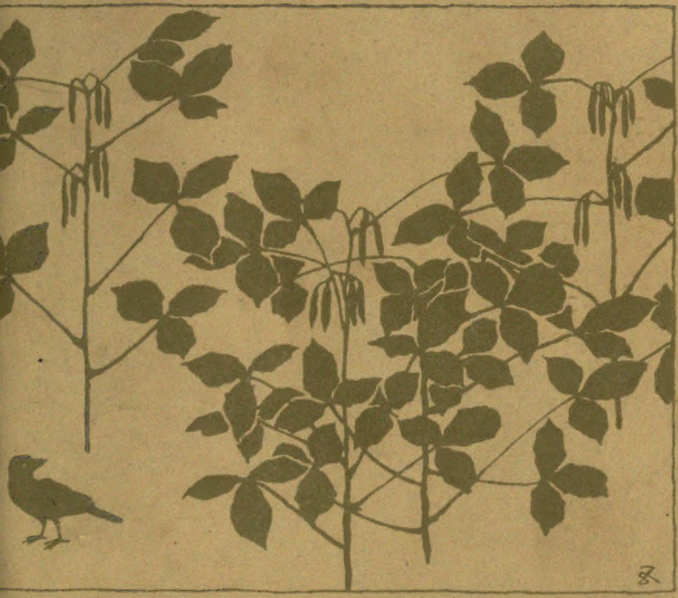




大正二年六月九日印刷
大正二年六月十二日發行

有朋堂文庫
南總里見八犬傳三（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

其名は豫知られたる、犬江親兵衛仁こゝにあり、住れやッ。と喚りて。走り出來る大童子、是甚なる打扮ぞ。但見る身の長三尺四五寸、面の色は薄紅にて、桃の花を連ねし似く、肌膚は白く、肉肥て、骨逞しき勇士の相貌、身には段々筋の山樵衣の、下に錦の襦袢を被て、手には六尺許なる、素朴の樫の自然棒を、最も輕氣に腋挾み、腰に一口の短刀を、璫下しに帶做て、振亂したる額髪は、年才より長ある神童の、威風に駭く尶尬兒們は、舌を吐さ目を注して、左右なく找み難たりける。この段特に長やかなれば、集を套ね卷を更て、第七卷の首に解ん。本集下帙も亦六卷あり、看官姑且渴を忍びて、續出す日を等かねし。

柴鶺鴒、珍らしき、人來と鳴くや、我も亦、經こそ讀め墓參り、路の小草も目にぞ馮く、現托生の蓮華草、導き給へ佛の座、心づくしも幾春を、今は杉菜と臺に立つ、色美しき草も木も、竟に悉皆成佛の、功德を徐に念じつゝ、山又山を向上れば、奇嵒突立して、造物天然の妙工を見はし、嶮邊逈に直下せば、白雲聳起りて、谷神窅然と玄牝の門を開けり。然ば流水に零る桃花は、武陵の仙境遠きにあらず、偃松に羅る藤葛は、天台の石橋危きに似たり。現眼に觀耳に听くもの、皆悉浮世の塵を、洗流せる靈場佳景、むかし見つるに彌增たる、義實憶はず、杖を住めて、一霎時憩ひて、伏姬の、住捨られし嵒嵎に、稍近著んとし給ふ程に、左右に間なき樹蔭より、弦音高く射出す獵箭に、先に立たる近習の侍、小水門目は高股を、射られて托地と轉輾ぶ、程しもあらず又二の箭に、後方に從ふ鮹船貝六、こも亦膝を下卬に、射さして苦と叫びもあへず、仰反ながら仆れけり。登時左右の樹間より、顯れ出る尶尬兒四五名、手に〳〵持る竹槍を、頻搨て喚る聲も齊一、やをれ義實、我們は、昔年汝に亡されたる、滿呂安西、及神餘の與に、けふこそ復す怨の槍尖を、受ても見よや。と罵りて、右ひだりより競ひ蒐るを、義實怯たる氣色もなく、寄せば擊ん、と杖うち棄て、刀の琫甘げつ、寇を疾視て立給ふ。浩處に傍なる、樹の蔭に又人ありて、天地に响く聲をふり立、やをれ尶尬兒們、無禮をすな。里見殿


南總里見八犬傳第九輯巻之六
神童再出世
老侠に謁す



切て十名二十名、從ひまつらば後安けん。餘人は左まれ右もあれ、小臣は那里までも、おん伴をこそせまくほしけれ。親が這里にて身故りしとて、今さら不祥とせられんは、恐れながら本意にあらず。と惴るを義實聞あへず、否這山は昔より、猛獸毒蛇あることを聞かず。久しく人迹絶たりとても、何等の憚あるべきや。且伏姫の亡魂は、這山に留りて、親の守りになりもやせん。益なき言に、時をな移しそ。但よく人馬を聚合して、かへさを等こそよかめれ。と諭して河原に下立て、出たる石を踏傳ひて、前面の岸に登り給ふに、水涸たれば、野袴の、裙も濡さで易かりける。是よりして義實主は、三個の近習を從へて、みづから山踏をし給ふこと、幾町にか及ぶ程に、忽地後方を見かへりて、東峯萌三に宣ふやう、心屬なき事こそあれ。伏姫が墓に水を手向る折、石滴を汲拿る東西なくては、手を空しうする外はあらじ。汝は快く走かへりて、馬柄杓を携來つべく、且奴隷を領て、近村へ、赴きて花を求め、そも携て、後より來よ。折から二月の下浣なれば、這山にも花はあれど、這里なるを手折て、這里なる墓へ、手向んは疎略に似たり。快々せよ。といそがし給へば、萌三は應をしつゝ、軈て踵を旋らして、今來し路へ走りけり。恁而義實、主從三名、なほも程ある伏姫の、墳墓を投て登り給へば、三月に隣る峯上の櫻、這里も那里も開初て、花香寄する春の風、吹くとはなしに霞こめし、谷の

實朝臣は、近習們を從へて。寺門を出つゝ、笠深くして、馬に跨んとし給ふ折、那富山の河水の、涸たりといふ事の趣を、照文並に近習們に、辭せわしく囁き知らして、我は是より富山に登りて、絕て久しき伏姬の、墳墓を見まく欲す。このこゝろを得て伴せよ。と仰を大家承りて、雜色にも奴隷にも、件のよしを下知しつゝ、那山へ倶しまゐらせけり。爾程に義實朝臣は、馬の脚搔をはやめつゝ、軈て富山に赴きて、那山河の頭に來つゝ、那這と看亙し給ふに、現風聲に違ふことなく、這川都て涸竭して、水は毫もなかりけり。然ば照文を首として、おん伴の每は、聞しに優たる光景に、驚き思ざるはなく、奴隷は倶に舌を吐きて、奇也々々。と稱へたり。登時義實は、馬より閃りと下立つゝ、准備の発兒に尻を掛て、照文に宣ふやう、登山に伴當多かるは、倒に路次の煩ひならん。且十一郞が親蠶崎照武は、當初八房の犬に伴れたる、伏姬を趕留んとて、這川にして事ありければ、先蹤尤不祥也。照文は這里に留りて、我かへり來ぬるを等ね。是より我身に從へんものは、東峯萠三、小水門目、鮹船貝六們三名にて事足りてん、その餘は姑且要なし。と聞え知らしつ、鞋奴に、持せし草鞋に穿更さして、杖を携遽しく、身を起さんとし給ひしを、照文霎時、と禁め稟さく、御諚うけぱり候へども、年居多人迹絕たる、高峯に登らせ給ふに及びて、纔に三個のおん伴當は、物體なく候はずや。

筒の柳筥に藏めつゝ、伴の奴隷に駝したり。又老侯の茶辨當、伴當の割籠なゞども、脫落あるべき事ならねども、諄々しさに具にせず。却說里見義實朝臣は、走驪と命けたる、三歳驪の駿足にうち跨て、那富山の麓路なる、大山寺に詣給ひしかば、住持は大衆を領て、みづから出迎て、佛殿へ導きたり。登時義實朝臣は、准備の禮服に更めて、本尊を拜み奉り、次に伏姬の位牌に燒香して、祈念を凝し給ふこと半晌許。既にして退きて、禮服を脫祛けて、舊の野服に更給へば、僧衆客殿に請待して、茶をまゐらせ果子をまゐらせ、住持も侍りて、おん布施の、歡びを舒などしつゝ、一霎時慰めまうしたる、語次に住持のいふやう、豫知食すごとく、當寺より遠からぬ、富山の腰なる山河は、流水久しく淵を做して、人皆涉ることを得ざりしに、隔昨の曉より、那山河の水猛可に涸て、砂石を顯すまでになりたり。然ば三尺の童子といふとも、皆憑涉すべけれども、登山の後にその水の、又推來たることあらば、還るに路のなからんかとて、間近き里の老弱も、怗みていまだ涉らずといふ、風聲隱れ候はず。廿稔あまり淵を做したる、激流の一朝に、涸竭せしは、是も亦、奇しき事にて候はずや。といふを義實うち听給ひて、そは幸ひある事ならん。是よりの後木樵り炭造く、民の便宜になりぬべし。と回答て驟て遽しく、告別して出給へば、住持は亦復大衆と俱に、玄關まで送りまゐらせけり。却說義

えしを、徵迎んはさすがにて、當家の武德は衰たる歟、と思れもせば恥しからん。初義通の伴當們が、再生の奇特ありしも、又館山の賊徒の首級を、樹杪に梟たるも、猜するに我亡女、伏姬の神靈の、冥助にこそありつらめ。烈女の魂今なほ滅びず、那靈恁まで灼然なりし歟。爾後は義成を、帮助んとせられずや。今に至りて義通を、拯ひ拿るべき便宜もなく、躬方の士卒はいたづらに、城を睨て日を彌るとのみ、人傳に聞くうれはしさよ。儵れば星移りて、廿稔あまりの昔になりぬ。伏姬が自殺の後、那里の山河、水十倍して、今なほ一日も瀬を見さず。この故に、渡せる橋は推流され、舟も筏も棹屆かねば、樵夫牧童だも登り得ず、人跡久しく絕しより、我も亦伏姬の、墳墓を見るよしもなし。只年々の忌日每に、大山寺へ參詣して、他が菩提を弔ふのみ。然ば明日件の寺へ、詣て那神靈の、冥助を悄々地に祈りなば、感應せられて、義成が、武運芽出たく、十全の、勝利を得ぬる事もあらん。嗚呼しかなり、と心ひとつに、旣に尋思をし給ひしかば、その宵蜑崎照文們に、よしを示し伴徇させて、次の日の未明より、瀧田の城をぞ出給ふ。微行の事にしあれば、伴當は最寠して、照文竝に近習には、東峯萠三、小水門目、鮹船貝六郎なンど喚做たる、四五名の後生のみ、この餘雜色奴僕に至るまで、四五十名に過ざれども、大山寺にて、燒香の折の禮服、及布施物なンどは、都て照文が奉りて、兩

くもありしを、義成緊しく制させて、倘軍令に背くものは、首を刎ん、と徇られしかば、性起る勇士も猛卒も、倶に安からぬ胸を鎮めて、やうやく思ひ止りけり。左右する程に春も良、二月下旬になるものから、素藤ば一番も、士卒を出して、敵を襲はず。寄隊は迥に城を眺めて、長き日ぐらし銷し難たる、鬱をやる方なかりけり。然ば素藤この折に、風ある夜艾士卒を出して、寄隊の本陣を火攻せば、そは必勝の勢ひならんに、他は奸智に長たるのみ、素より六韜三略の、兵書を知れるものならねば、然る軍略は思ひもかけず、いたづらに日を彌りたり。話分兩頭。爾程に、瀧田の老侯義實朝臣（里見治部大輔）は、嚮に蚕崎十一郎照文を、新戸の陣所へ遣して、那里の勝敗を听せ給ひしに、始逆將素藤が、義通君を城樓に登して、譴要みつつ寄隊に向ひて、非禮の婚姻を討めし事、この折、後に東辰相が、素藤を射て、瘢を負せし事、この日蚕崎照文が、老侯の使として、新戸の陣に來ぬるに及びて、義成朝臣はゆくりなく、神と親との教を悟りて、是後火速に寇を攻めず、遠巻にして便宜の折を、等んと宣ひし事の趣、都て分明なりしかば、聊慰め給ふものから、それより三十許日を歴て、二月下旬になるまでに、躬方に利あるよしは聞えず。義通君の存亡を、知るよしとてもなかりしかば、左に右胸は安からで、熟思ひ給ふやう、慿る折に那犬士們が、在らば幇助になりぬべし。穗北に止宿と聞

感狀を賜りて、その軍功の賞大かたならず。這宅、小森高宗、浦安友勝們の諸勇士をも、漏さず倶に召寄て、或はその勇戰を譽め、或はその忠諫を賞し給ひて、然而瀧田殿より賜したる、樽を開き乾魚を頒ちて、隈なく拿らし給ひしかば、雜兵に至るまで、恩を拜し德を稱へて、歡び勇ざるはなかりけり。却說里見義成主は、次の日二千餘の、諸軍兵を隊部して、未明より館山の、城へ推寄給ひしかども、遠巻にして攻も撃ず。城を去ること二町有餘、究竟の地方を擇て、一日に陣屋を建連て、雨露を禦ぐ准備あり。夜は篝火を燒續けて、夜撃朝蒐の用心に懈らず。昨日撃捕たる、城兵の首級を梟竝べて、をさ〳〵武威を赫奕し、よく敵城の咽吭を扼りて、飛鳥だにも漏すまじき、冲對の堅陣濃やかなるものから、舘山の城內にも、戰栗箭種火藥に、匱しきことのなかりしかば、恁りけれども氣を屈せず。素藤は倒に、攻撃れぬを幸ひにして、矢傷を療養したりしに、既に日屬を歷る隨に、その瘡痍瘥り果しかば、卒や寄隊の奴們に、打眠を覺させくれんずとて、士卒に下知して、間なく時なく、鼓を鳴らし鬨の聲を颺などして、撃出んとする勢ひを示し、ある時は又義通君を、城樓に吊登して、譴要むに、大音なる士卒を擇て、罵らすること初のごとく、寄隊を連りに招く光景、間遠ければ朦朧にて、寄隊の陣へは聲届ねども、然りとて見えぬにあらざれば、里見の士卒は怒に得堪ず、攻蒐らんとて鬨

ひしを、思ひ難つゝ、二たびは、問まつらんもさすがにて、惑ひは今に解ざりき。いかなる情由に候やらん。と報るを義成うち听て、眉根を顰め手を叉き、沈吟じ給ふこと、既にして半晌許、忽地莞爾とうち笑て、十一郎はまだ悟らずや。我その御意を思ひ得たり。夫家にして豕なきは、則是宀の字にて、二十たび見るは、廾也見なり。この三字を合すれば、寛の一字になれる也。寛は緩也、ゆるやか也。然ば素藤を攻撃つに、性急にせで寛やかに、計れと仰する隱語ならん。この義は豫傳へ聞たる、神の託宣示現のよしあり。そを忘れたるにあらねども、人傳なれば然ばかりに、信用んとも欲りせざりしは、鈍や凡夫の狐疑にして、方僅緩急の利害を知りぬ。神と親との教誨に悖らば、みづから帮助を失ふ也。我明日よりは館山を、遠巻にして急に攻めず、徐に便宜を等べきのみ。歸城の折に、これらのよしを、聞えあげよ。と睿智の決斷、いと正首に示させ給へば、照文深く感悦して、仰うけばり奉りぬ。立かへる日を大殿の、さぞ等不娯しく思召らめ。今宵は且大樟村まで、退きて明日の歸路をいそがん。身の暇を賜るべし。と稟して軈て辰相們にも、告別して立程に、當陣の雜兵居多出て、照文が馬に駝して、齎したる樽を運び、乾魚の苞も拿入れて、収納はやくも事果しかば、照文は伴當を、いそがし立つゝ、幾十疋の、馬を還して、大樟の、歇店を投て退りけり。爾後又義成主は、辰相逸時良于們に、

條は大殿の、御感悅一入ならん、と思ひ奉るよしさへあり、よき家裏に候ひき。歸著の折に聞えあげてん。恐れながら臣們だも、感佩この義に候。と只管稱へて已ざりしを、義成听つゝ含笑て、そは歡しき事ながら、今も今とて六郎と、大人のおん噂をしたりしに、思ひがけなくおん使を、賜りて御安否を、承るこそ幸ひなれ。今番蟇田素藤を、征伐の事に就て、家尊の大人の汝達に、宣はせしよしありもやせん。我後學にせまく欲し、有歟なしや。と叮寧に、問れて照文、然候。いぬる比おん夜勤の折、唐山漢楚の戰ひの、おん物語を承りしに、大殿の宣ふやう、昔漢の高祖が、滎陽の廣武山に、項羽を圍み攻し折、項羽は防禦に術計盡て、曩に虜にしたりける、高祖の父劉太公を、緊しく細り屛に登して、漢王はやく降參せずば、今眼前に太公を、屠ん、と軍兵に、喚らせたる事ありけり。憶ふに今番素藤も、亦那項羽が顰に倣ふて、義通を像の如くに、計ふて寄隊を折く、豫の計較ならんかし。しからんには義成に、漢の高祖の膽勇ありとも、敵と勢ひと同じからねば、必難義に及びやせん。胸苦しきはこの事のみ、といと不樂しげに仰せしかば、小臣初てその義を曉得て、然らば甚たる計略をもて、御曹司を救ひ拿り、まゐらすべうもや、と問奉りしに、否、我も亦機に臨ねば、思ひ得たりし事はなけれど、家に豕なし。二十たび見ば、神の敎に稱ひやせん。是より外に術はあらじ、と仰示させ給

に贈らせ給へり。就て戰ひの光景をも、承りて還れとある、仰を照文奉りて、おん使にまゐりたり。願ふは敵の强弱を、仰示さるべうもや。といふに義成膝を找めて、そは辱き二種の恩貺、諸軍兵に配分して、御恩に預らせ候はん。著陣の後、幾日もあらぬに、恁御こゝろを添られて、遠路を斁せ給はぬまでに、軍士を慰め給ひしは、義成が身に執て、謝し奉る所を知らず、都て拜戴仕りぬ。歡びこれに優ものなし。却おん荅は是まで也。又城攻の趣は、一朝に解盡しがたかり。そは緩やかに相譚ふべけれ。と仰に照文こゝろ得果て、遽しく身を起し、然而下座に立替り、又義成にうち對ひて、おそる〳〵無異を祝して、辰相們に對面をすれば、辰相も亦歡びを、述て長途を勞ひたる、言果て又辰相は、照文にうち對ひて、昨今城攻の趣は、箇樣々々に候とて、敵の擧動、躬方の進退、義通君の光景さへ、首より尾まで、いと詳に解示せば、照文耳を傾けて、連りに膝の找むを覺ず。或は驚き或は歡ぶ、嘆賞の聲を得絕ず。听果て恭しく、義成主に、勝軍の壽を演て稟すやう、約けふのおん進退は、不用意にして、大利となりぬる、御運愛たき所以にはあれど、君賢にして、臣も賢なる、忠孝兩ながら虛しからざる、德誼の至りと稟さんも、倒に惶かるべし。然ば退き給ひしは、御孝行の所以なれども、そは兵法の旨に稱ひて、敵に驕らせ給ひしかば、素藤は毛を吹て、漫に疵を求めたり。この一

けふ汝が、家嚴君の御内意あり、といひしは一時の虚談也とも、そはわが與には虚談ならで、卽親の仰におなじ。倘そのことの徹りせば、我いかにして退くべき。誠に親の御こゝろも、けふ辰相が諫言と、期せず符節を合するごとく、さぞ胸苦しく這方の天を、想像りてや在すらん。欲する所は義通を、快とり復し寇を夷げて、いかで大人の御こゝろを、休めまつらんと思ふのみ。必克べき勢ひを、我兒の所以に折かるゝ、時の不祥を爭何はせん。儘せぬものは江湖の上の、經にはあれど、禍鬼の、暴虐に遇る薄情さよ。といひも盡さで、嘆息を、咳きに打紛らし給へば、辰相も感涙の、拭むを覺ず額づきて、現有がたき御孝行、寬仁大度にましまさずば、愆る御諚を承らんや。君が千慮の一失を、諫めまつるは臣子の職分、そも易からぬ事ながら、敎る所を臣とせで、よく其諫を容給はんは、いよ〳〵難き事なるべし。寔にこよなき臣們が大幸、誠惶し、かしこし。と稱へて君臣和順の會計、なほ閑談にぞ及れける。浩處に瀧田より、老侯義實朝臣のおん使として、蜑崎十一郎照文が、居多の小荷駝を牽しつゝ、まゐりたり。と聞えしかば、義成は、辰相們と、共にみづからこれを迎へて、上坐に登しつゝ、謹て來命の趣を所給へば、照文も恭しく、おん使のよしを告ていふやう、今番館山の城攻は、以ある強敵なるをもて、大殿御こゝろ安からず。軍士を慰め給はんとて、美酒十駝、乾魚百苞を、御當陣

戰ひし事の趣、素藤は辰相に、肘を射られて、城内へ、逃籠りたる爲體、この餘の城兵宗徒の猛者、曾平瀬十郎卒良井尻九郎とか喚做たるを、逸時良于が擊捕りし事、都て遺なく聞えあげて、又稟すやう、既にして戰歿の、賊徒は無慮二百餘名、御方の刀瘡兒は、十四五名のみ。素藤は慫に、君を窘んとしたれども、御曹司を害し得ずして、那身は反て矢傷を受たり。是その利の二ッ也。又素藤は、士卒を擊して、那身も痛瘡を負ひしかば、是よりいよく胆落て、縱手繁く攻められずとも、久しからずして誅伏せん。是その利の三にこそ候へ。憖れば、御陣を退けられしは、御名譽にして、おん恥辱にあらず。是併御方の勇戰、就中逸時良于們が、智計その圖に當りし故也。但小臣のみ大功あらで、反て紿きまうせし罪あり。御刑罰は君の隨意、毫も恨候はず。と憚る氣色もなく稟しゝを、義成熟うち听給ひて、且感心大かたならず、憶ず持たる扇を抗て、股膝を托地とうち鳴らして、適微妙き六郎が、けふの働き多く得がたし。又只汝のみならで、我軍に從ふもの、或は馬前に主を諫め、或は後陣に敵を挫ぎて、怨を復し恥を雪めし、忠信と云、智勇といひ、憑しからずと思ふものなし。然ば孝經の爭諫章に、諸侯に爭臣五人あれば、其國を失はず、とかき志されし孔子の教は、素讀の童蒙も知ることながら、得がたかるべき爭臣を、憖まで我は多く持り。分に過たる幸ひなるかな。因ておもふに、

異日凱陣したりとも、我身何等の面目ありて、大人に見參まうさんや。抑大人の御内翰に、甚なる事を寫せ給ひし。御教訓の趣を、聞まほしけれ、甚麽ぞや。と怨じて頻りに問給へば、辰相は稍暫く、額づきたる頭を擡げて、御諚承り候ひぬ。いと憚りあることながら、嚮におん怒の激しかりしかば、非除臣們がいかばかりに、犯して諫め稟すとも、御許容あるべき時誼なられば、已ことを得ず、權謀をもて御欝忿を、推鎭め奉りき。然ば大殿より御内翰を、賜りたることもなく、御教諭を稟まつりしことは、一毫も候はねど、君御孝行にましませば、何事も大殿の、御諚とあれば、承させ給ひて、損益まれ、賞罰まれ、御意に儘せよ、と仰られしは、一朝の事にあらず。この義によりて云云、と稟して諫めまつりしかば、果して多辯に及ばずして、立地に御許容ありき。そは臣として君を紿く、罪を見かへる折にあらねば、世の常言に、窮する時には、親を出せといふことあるに、似たる拙策にこそ候なれ。この故に烈火のごとき、御震怒を鎭め給ひて、御退陣ませしかば、御方に三椿の大利あり。第一は御曹司の、御命に恙なければ、是より後も質として、那城内に屛籠置れん。是その利の一ッ也。又君猛可に圍を解きて、當所に退き給ひたればこそ、素藤みづから城より出て、御方の大利に及びたり。その故は箇樣々々。とかの折田稅逸時が、籌策により、二隊に分ちて、敵を前後に挾みて、攻

館山の城に籠りたる、夷灊の野武士也けるが、倶に逸時良于と戰ふて撃れにけり。這們を宗徒の兵として、侍品の首三十餘級、鎗眉尖刀の尖に串きて、新戸の陣所へかへり來ぬるを、途に立て觀る里人多かり。爾程に義成主は、辰相に諫られ、心ならずも圍を解かして、新戸へ退き給ふ程に、辰相們が隊兵の退後れたりければ、城兵に喰留られけん、後陣に戰ひあり、と聞えしかば、義成驚き士卒に下知して、拿て返さんとし給ひしに、その戰ひは既に果て、躬方十二分に克にき、と再度の注進安定也。この故に義成は、軈て新戸に歸著して、辰相們を等給ひしに、後陣も程なく還りにければ、義成は遽しく、辰相を召し給ふに、面色いまだ快らず、來ぬるを遲しと聲高やかに、やをれ六郎、けふ素藤們が烏滸の擧動、忍ぶべきにあらざれば、我義通を箭尖にかけて、後安く敵城を、攻破らんと欲せしを、汝は疎忽とおもひし歟。縱汝が千萬言、面を犯して諫るとて、名をも羞をも見かへらで、一歩も退く我ならねども、思ひがけなく家嚴君の、先見前知をはしませし、と稟しょよしの輕からねば、その一言に力暨ばず、遂に己を虛して、敵を後陣に任せしに、素藤果して城戸を開きて、趕撃んとせし程に、戰ひあり、と聞えしのみ。その折我は迥にして、那隊にあはぬは遺恨の事也。幸ひにして若們が、聊か捷利を得たりと聞けば、咎るよしもなき事ながら、萬にひとつ躬方輸なば、又但恥の上の恥也。

と駭噪ぎて、一人も敵に當るものなく、將卒共に度を喪ひて、撃るゝものぞ多かりける。そが中に素藤は、辛く一方を殺啓きて、城を臨て逃走るを、辰相看つゝ馬に拍れ、趕ふこと既に急にして、箭行近くなる隨に、弓に箭刺ひて、瞟と射る。覘錯はず素藤は、左の肘を篦深く射られて、馬より滾落んとせしを、左右に從ふ殘兵に、帮助られつゝ命を免れて、やうやく城に近づく程に、城内よりこれを相て、礪時顛八平田張盆作、二百餘名の隊勢を將て、走り出主を迎へて、大家ひとしく逃籠り、橋を引き城門を閉たる、手倆し速なりければ、入り後れたる城兵は、寄隊の爲に撃れけり。恁りし程に、辰相們は、這勢ひを拔ずして、快馮入りにせよやとて、七百餘騎を一隊にしつゝ、透間もなく趕蒐たれども、敵は逃脚早かるに、城より援兵出て、素藤を拯ひ、城門を閉て、矢砲を飛すこと繁かりければ、辰相們は士卒を制めて、趕捨にして、捷鬨を、揚つゝ徐に引返すを、城兵們は銃窓より、看るといへども初度に懲りけん、阿容々々として趕ざりけり。然ば、この日の戰ひに、辰相逸時良于們が隊に撃捕る所の、城兵無慮二百餘名、寄隊の刀瘡戰歿は、只是雜兵のみにして、十四五名に過ざりけり。現籌策合期して、恁全勝を得たれども、鈍や逆將素藤を、撃漏せしを飽ずといふめり。なれども、這日城兵に、曾平瀨十郎卒良井尻九郎と喚做たる、兩個の猛者あり。こは近曾素藤が隊に屬て、

ながら點頭のみ、異議に及ばず良于們と、共侶に士卒を將て、まだ遠からぬ義成の、殿をして徐行程に、城の大將素藤は、みづから城樓にうち登り、這光景を遥に看て、原來義成、恩愛の、やる方なさに逃吠しつゝ、圍を解て新戸のかたへ、退くとおぼえたり。遣るな兵毎、撃留めよ。と喚りつゝはや下立て、馬にうち跨、鎗腋夾て、勢ひ猛く出んとすれば、主に劣らぬ性急雄の、軍兵約四五百名、金鼓を鳴らし咄と噇て、城門を颯と推ひらき、反橋托地と遣返して、驀地にぞ趕ふたりける。登時辰相良于們は、敵の近づくを見かへりて、思設けし事なれば、毫も噪がずひらき合して、且戰ひ且走るを、素藤得たり。と隊兵を救めて、攻著々々揉だりければ、辰相們はいよゝます〳〵、怺難たる如くにしつゝ、潑と崩れて逃走るを、素藤はなほ漏さじとて、趕ふこと既に五六町、一叢繁き野林の傍を、憶ず走り過ぎしかば、忽地心つきにけん、四下を見かへり、馬を駐めて、兵毎惴るな。敵の伏兵、這頭に在らば、躬方の利ならず、退かずや。と喚りたる、その聲いまだ果ざる程に、はや間道より退き來て、件の樹蔭に埋伏したる、田税逸時が隊の士卒三百餘名、鬨を咄と發りつゝ、勢ひ宛脫兎のごとく、素藤が後陣のかたより、推包ん、と競ふて蒐れば、故意走りて思ひの隨に、敵を勾引し辰相良于、折こそよけれ、と瞬息間に、備を轉て建直して、はや前後よりさし夾みて、息をも養れず攻たりければ、城兵吐嗟、

赴く折、逸時、良于們を招近づけ、事恁々と聶き示して、馬に鞭ち馳去りたる、爾後件の兩人は、惴る躬方の軍兵に、よしを傳へ退聚合て、辰相の還るを等しに、姑且して躬方の雜兵、前門の攻口より走來つ、逸時良于們に下知を傳へて、館は既に退き給へり。各位は、その隊の士卒を、推纒め城を繞りて、殿りして退き給へ、と六郎殿の指揮也。やよとく〳〵。といそがして、飛が似くに走去けり。登時田税逸時は、登桐良于に聶くやう、聞くに、這處を戍る敵の頭人は、奧利淺木の膳碗們也。我們に酷く攻られて、臆病鬼の憑たらんに、退くとても趕ふべからず。前門の敵は、これと異也。館の退陣し給ふを見ば、素藤必士卒を出して、喚留んと欲するならん。今この勢を兩箇に分て、和殿はその一隊を領て、東老と共侶に、箇樣々々に計ひ給へ。洒家は悄々地に間路より退き、城兵出て趕ふならば、前後より夾みて、敵の大將を擊捕るべし。この義をな違へ給ひそ。といふに良于こゝろ得て、七百餘名の隊兵を、過半率て徐々と、前門の方まで退きて、却辰相に、逸時が計策を報にけり。爾程に、東辰相は、苦諫幸ひにその甲斐あり。義成軈て圍を解きて、新戸へ退陣し給ふ程に、萍び馬にうち乘て、一霎時其方を目送りつゝ、一騎舊處に在り。浩處に、後門に殘し置たる、登桐山八良于們は、四百餘名の士卒と俱に、はやくこの處まで退き來て、逸時にいはれしよしを、報るを辰相うち聞て、含笑

りて、御教諭を承まつりしよしあり、今さら思ひ合し候。誠や前漢なる賈誼が策に、鼠に投るに器を、忌とやらいふよしは、素より君の知召す所、いと憚りあることながら、短慮は功を做しがたかり。微臣不肖に候へども、御曹司も恙なく、上の御恥辱にもならざるやうに、計ふべき術候へば、姑且こゝを任させ給ひて、新戸の御陣に憩せ給はゞ、君臣上下の幸ひならん。とく／＼退り給はずや。と和解て聽て義成主の、馬の鑣を楚と拿て、牽旋らしつゝその駿足の、尻を托地と鞭しかば、馬は撻れて驀地に、退く主に隊伍を亂さで、前後に從ふ諸軍兵、初て胸を安くしつ、新戸の陣所へ倶しにけり。

第百三回

里見源老侯富山に亡女を弔ふ
犬江親兵衛高峰に勍寇を拉ぐ

單表、この日館山の城の後門を攻撃たる、東辰相が隊の先鋒の頭人は、田税戸賀九郎逸時、登桐山八良于と喚做たる、武勇一對の壯佼也けり。就中田税逸時は、いぬる日諏訪の社頭にて、賊徒の鳥銃に撃れたる、田税逸友の從父兄弟なりしかば、氏族の恥辱を雪ん、と思へば勇氣十倍して、專粉骨を竭せしに、這隊の大將辰相は、主君を諫まつらんとて、猛可に前門の攻口へ

我射て拿ん。若これをしも忍ぶとならば、何を忍ざるべきや。と鞍の前輪をうち鳴らしつゝ、進め〳〵。と嘗奬して、馬を乘よせ、弓拿直して、城樓を向上げ、箭を刺ひて、彎絞らんとし給ふを、馬の左右に從ふたる、昵近の諸侍、駭慌推禁めて、こは物體なし、おん憤りは、大家猜しまつれども、今御曹司を亡ひたまはゞ、素藤竝に賊兵們を、一個も漏さで撃果すとも、その甲斐や候べき。又せん術もをはしますらめ。只權且の御堪忍を、願しくこそ候なれ。と辯論ひとしく諫禀すを、義成肯ず、頭を掉て、若們が禀すよしは、我も思はざるにあらねども、世に恥を知らざれば、匹夫だも、そを人とせられず。況三軍に將たるものが、恁る恥辱に遇ひながら、阿容々々として退かば、上は父祖の名を降し、下は臣妾に侮られて、末代まで家の瑕瑾にならん。やをれ禁るな、放さずや。と敦圉き猛く弓をもて、左右を拂ひ給へども、誰か一人も退くべき。なほ云云と諫めたる、捫擇果しなかりけり。爾程に、この日城の後門へ寄たりける。東六郎辰相は、恁とも知らで在りけるに、然しも主君を諫難たる、近臣們が人を走らして、事恁々と報しかば、辰相聞つゝうち驚きて、只一騎馬を跳して、主の身邊に走らし來つ、鞍よりやをら下立て、主君に朝ひて諫るやう、御欝忿の趣は、はや人傳に承りぬ。いぬる比より、瀧田の大殿（義實をいふ）の、恁あるべしと、知食けん、御出陣の前日に、御内翰を賜

き隨に、去歳より籌策を旋らして、義通孺子を生拘りしは、害して怨を雪んとにあらず。先非を悔て、濱路姫を、當城におくり來されなば、その折這那牽換に、義通孺子を返すべし。惑ひを執て不字をいはれば、此方も屈せぬ武士の意地、今面前に義通を、屠りて聊憂目を見せん。恩仇兩箇は生死の大垠、この義を告て、賞罰を、決めよとある、主君の嚴命。回答遲くば、親子の別路、よく見給ひね。と唔きにほざきて、後方を佗と見かへれば、豫准備の雜兵が、義通君を綁縛めて、布囊を銜せしを、城樓の柱に拄著て、明晃々たる巨刀を、引拔きつ刃尖を、義通君の胸前へ、推著つゝ皆喚りて、回答遲し。と責たりける。登時自餘の城兵は、屏裡に立、頭を顯し、弓弦を彈き、盾を鳴らして、齊一咄と笑ひけり。然ば寄隊の諸軍兵は、思ひの隨に克誇て、乘入らんとせし勢ひを、方僅這一擧に折かれて、勇あるも勇なきも、進んとすれば、御曹司の、害され給はんことを怕れ、又退かんと欲すれば、いまだ大將の下知を听かず。進退こゝに谷りて、拳を握り齒を切り、城樓を疾視で立たりける。義成これを瞰して、怒りに得堪ず、聲ふり立て、逢き賊徒の擧動かな。尙幼弱なる義通を、人質にしつゝ要みて、飽まで我を辱るとも、我その非望を許さんや。その義ならば短兵急に、攻破りて素藤を、屠りて我這熱腸を冷さん。兵每挑みね、猶豫する事勿。慭に義通を、叛賊の手に亡れんより、遠箭に被て、

る、小森但一郎高宗と、浦安兵馬乘勝が弟也ける、浦安牛助友勝を先鋒として、東六郎辰相を後陣と定め、次の日新戸に著陣して、地理を擇て、屯を固くし、一日人馬の脚を休めて、その明旦舘山の、城へ推寄給ひけり。然ば先鋒に拔みたる、小森高宗と、浦安友勝は、快當城を攻破りて、父兄の恥を雪んず、と思へば衆に先だちて、塹を埋め塀際に近づきて、攻入らんと欲せしかども、城は究竟の要害にて、左右なく攻も落されず。義成これを瞰して、然のみ無謀の戰ひせば、雜兵多く撃れやせん。けふのみにやは限る事歟。と制めて新戸へ退陣しつゝ、次の日更に隊配して、却城の後門へは、東辰相を大將として、數百の精兵を差向給ひ、又前門へは、義成みづからうち向ひて、一千有餘の兵を、拔めて攻撃給ひしかば、城兵們も亦箭窻を開き、緊しく矢石を連發ちて、弦を先途と防ぎしかども、寄隊は毫も氣を屈せず、撃るゝ躬方を埋草にして、はや屏一重破りけり。登時前門の城樓上に、武者四五名立顯れて、聲高やかに喚るやう、里見殿にものまうさん。是は蟇田權頭に年來仕へて、股肱腹心と憑れたる、礪時願八業當、平田張盆作與冬們にて候也。抑 我主君權頭が、國主を恨みし根抵は、曩に令愛濱路小姐と、婚姻の事をしも、只管に請稟せしに、思ふにも似ず權頭が、前功を空にせられて、許容なかりしのみならず、みづから驕昂態て、誹謗の過言に及れしを、人傳に聞知りたる、遺恨やる方な

中榎本なる、城主千代丸豊俊は、曩に素藤が與に媒妁して、濱路姫上の御婚姻を、薦稟せしよしもあれば、免れがたしとや思ひけん、悄々地に人馬を整へて、籠城の准備あるに似たり。因てこの義を注進の爲、先我們のみ那里より、走りかへり候ひき。と喘々聞えあげしを、義成はやくうち听給ひて、しからんには士卒を分ちて、快件の三城を、攻撃ずばあるべからずとて、姑且這里に人馬を住めて、今番の先鋒後陣なる、貞行と直元を、中軍に召聚へ、件の事の趣を、箇樣々々と解示して、我汝達に一千の、精兵を授くべし。藏人は、武者助を副將として、這里より榎本の城へ推寄て、快豊俊を攻撃ね。那里の城を拔くならば、廳南椎津の二箇城は、降すにいとも易かりてん。機に臨み變に應ずる、軍慮を倶に旋らして、快大功を奏せよかし。とこころ得さしつ一千の、士卒をその隊に隷給ふ、軍配極めて速也。しかるに貞行直元は、舘山攻の先鋒後陣を、奉りしその日より、いかで素藤を生拘りて、先度の恥を雪んず、と思ふ心の勇れて、この地方まで來にけるに、今さら寇の本人ならぬ、豊俊們を討手として、他し城に向んことは、望しからずおもへども、素よりその身の名聞に、拘づらはんは、忠臣の、せざる所とおもひ復して、一義に及ばず共侶に、言承しつゝ隊兵を將て、千代丸豊俊が盾籠る、長柄郡榎本の、城を投てぞいそぎける。爾程に義成主は、更に叉部を定めて、小森衞門篤宗が獨子な

价をもて、この回の奇異、義通が安危まで、傳聞く毎に報稟せしかど、なほ胸苦しく御坐すらめ。我身出陣のおん告別に、まゐるべう思ひながら、軍議に暇なきをもて、その義に及びがたければ、荒川兵庫助を名代として、那里へまゐらすべけれとて、既に兵庫に吩咐おきぬ。景能も亦倶にまゐらば、那折の事詳に聞えて、慰め給ふよすがにもならめ。然とて路次をいそぐは要なし。自愛して轎子を、用ひんこと勿論なるべし。然ば戰場へ相從ふも、大人のおん許へ使しぬるも、勤務は同じ主君の與也。この義をな思ひ謬ちそ。と諭させて又淸澄にも、景能が事箇様々々。と叮寧にこゝろ得さしつ、兵庫助が瀧田殿より、立かへり來ぬるまで、木曾介は當城に、止宿すべし。と掟給ふ、小心脫落なかりけり。閒話除煩、却說里見安房守源義成朝臣は、三千餘騎を引卒して、稻村の城を進發しつゝ、安房上總の封疆なる、市坂を越給ふ程に、嚮に上總の諸城主へ、告文を齎して遣されたる、軍使十名のそが中に、三名許かへり來て、本陣へ報稟すやう、小可們は、榎本椎津廳南へ快赴きて、那里の三城主に、告文を遞與し、御諚を傳へて、その動靜を覘ひしに、件の城主達は、當初、蟇田素藤の吹擧により、倶に獨立の志を轉して、當家に歸服せし比より、素藤と疎からねば、おん疑ひを怕れ身を阽みて、蟇田に一味したりけん、陽には異議もなきものから、言語應對潔らで、その面色不快に見えたり。就

番の軍陣に從ふて、功をもて恥辱を雪めば、其身々々の所以のみならず、こは義通の與也かし。こゝろ得たる歟。と理を推て、諭させ給ふ明君の、德誼を胆に銘ずるまでに、歡び思ふ貞行直元、三家老們も共侶に、感淚坐に目を數瞬きて、各々歡びをぞ稟しける。君臣一致、世にしるき、素より武備の名家にあなれば、左右する程にはや、人馬の調煉整ひぬ、と聞えしかば、義成はその次の日に、出陣あるべし。と徇さして、今玆五歲になり給ふ、二男次丸（後に上總介實堯といひしはこれなり）に、老黨杉倉木曾介氏元と、荒川兵庫助淸澄を傅けて、留めて稻村の城を守らし、然而杉倉武者介直元を先鋒として、堀內藏人貞行を後陣とし、義成則中軍たり。この餘、東六郎辰相は、遊軍たるべし。期に莅て戰ひの、弱からん方を援けよとて、既に隊伍を定めらる。その勢約莫三千餘騎、文明十五年、春正月廿一日（毛野道節們が鈴茂林にて復讐の折と同日なり）逆將蟇田素藤を征伐の、首途と聞えけり。爾程に、嚮に義通の伴當の、死ざることを得たるそが中に、苫屋八郎景能を首として、銃瘡の大抵は、痊たる士卒もありしかば、いかで今番の御征伐に、從ひまつらんとて請稟しゝを、義成一切許し給はず、その兵每の志氣は、歡ぶべき筋なれども、いまだ全く痍平愈せで、戰場に赴くべからず。景能は先試みに、荒川兵庫に相副て、瀧田殿（義實をいふ）へ使に達ね。我大人へは日每々々に、急脚の使

今番出仕の恩免は、面正しくもなき事ながら、只君命の辱さに、人の毀笑を見かへらず、次の日禮服を整へて、三個の老臣と共侶に、君所に伺候したりしかば、義成驅て對面して、みづから慰め給ふやう、嚮に汝達が不覺の事、その顚末を詳に所にき。凡庸なる野狐なゝどの、所爲にしあらば、人柄に、似げなき不覺といひつべし。憶ふに這回の奇異妖怪は、是前未聞の事にして、躬方を祐る神佛あれば、敵にも資る邪神あらん。然ばにや義通の、伴當多く擊れしに、そを當城に領て返されて、過半甦生の幸ひあり。且賊徒の頭顱を拿て、路の並樹に梟られしも、則是當家を守り給ふ、神所行にこそありつらめ。又那館山の城内より、一夕に遠く地道を穿ちて、諏訪の社頭の木虛へ、伏勢を出せしは、是五月蠅成惡神の、蟇田が與にせしならん。そが中に、汝達を、欺きて途より返せしは、こも亦守る神所行にて、然しも可惜老黨を、擊せじとての冥助なりし歟、然らずば又蟇田が與に、利ならぬ智勇の覺ある、汝達を伴にあらせじとて、そも亦邪神のなせし事歟、凡慮に分別すべくもあらねど、幸ひにして我股肱の、敵の矢石に傷られざりしは、倒に躬方の利也。汝達那首に戰歿するとも、義通も亦免れ得ずは、後々までも躬方の不利也。慿れば汝達が妖怪に、魅されしは不覺に似て、反て主の與に宜き理あり。因て罪過の沙汰に及ばず。那折倶に立皈りたる、藏人が妻の親族們も、この義を以宥免す。今

城を獻ずる事もやあらん。御捷利疑ひなきもの歟。と具に注進したりける。是により義成は、又三家老と有司們を、召寄て宣ふやう、嚮に舘山へ遣したる、忍兒の注進、便宜を得たれば、我明後日の比出陣せん。賊將蟇田素藤は、必幻術あるものならん。そを折くには、獸血糞水韮大蒜なンどを、灑掛るに優ことなし。これらの准備もすべきものなり。その餘の事は箇樣箇樣。と軍兵の多寡、戰米の運送まで、事遺もなく部を定めて、又三家老に仰するやう、嚮には貞行直元們が事、汝達恩免を請ふといへども、宵衣旰食ふ、多務に紛れてけふまでは、その沙汰に及ざりき。六郎幷に兵庫助は、明旦貞行を、相具して出仕せよ。氏元も同時刻に、直元を將てまゐるべし。委曲はその折知るよしあらん。といと叮寧に示さるゝ。三家老們は歡びを、稟して有司と共侶に、退りて各暇なき、勤務にこの日を消しけり。爾程に、堀内藏人貞行と、杉倉武者助直元は、一期の不覺に必死を極めて、快實檢使を賜れかし、肚を斫らん、と思ひつゝ、各宿所に屛居て、咳きもせで在りしかば、宅眷は一入憂ひに沈みて、そを慰るよしもなく、はや四五日を過せしに、思ひがけなく三家老より、君命を傳られて、明朝出仕の恩免あり。我們同道すべしといふ、奉書到來したりしかば、一家兒の歡びは、枯木に花の開く心地して、日屬念ずる神佛に、賽願も暇なく、その准備をのみ急がすものから、貞行も直元も、

へ遣したる、三個の悄々使們がかへり來て、那里の動靜を報稟すやう、嚮に許多の伏兵をもて、御曹司を犯しまつりし、賊首は知召すごとく、蟇田素藤に紛れ候はず。然りけれども幸ひに、御曹司は恙もなく、那城內に拿籠られて、御座すといふ風聲あり。却素藤は籠城の、准備極めて嚴重にて、敵推寄なば一箭射んとて、土民を驅入れ、戰粟を積貯へ、且隣郡の城主們に、利害を說薦め、躬方として、掎角の勢ひを張んと欲す。しかるに往日諏訪の社頭にて、御曹司のおん伴當と戰ふて擊れたる、賊兵們が亡骸も、當日大風猛雨の折より、社頭にあらずなりにたる、その首級を十町許、こなたの並樹に梟てありしを、素藤はやく傳聞て、そは諏訪の神主們が、所行にこそあらんずらめとて、搦捕せんとしてけるに、件の神主葉門はさら也、八幡兩社の神主們も、逐電したり、と聞えしかば、素藤いよ〳〵怒に得堪ず。軈てその並樹の四下なる、莊客を皆搦捕して、緊しく拷問しゝかども、他們はその義に干らず、里見殿を守らせたまふ、神所行にてありけるよし、恁々の託宣ありき、と齊一陳じたりけれども、素藤毫も實事とせず、罪を件の莊客們に、負して死刑に行ひけり。這故に那城內なる、軍民は皆その猛威に憚りて、陽には軍令に從へども、陰には隙を覘ふて、逃去らんと欲するもの、尠からずと聞えたり。恁れば御方の大軍をもて、はやく那城を攻させ給はゞ、內應のものありて、火を放ち煙を颺て、

こそ長たりけめ。恁れば是小敵なりとて、必しも侮るべからず。然は思はずや。と示さるゝ、是や二代の良將の、高明睿智に悟啓けし、氏元只管感服して、又いふよしもなかりけり。登時荒川淸澄は、東辰相を見かへりて、共侶に稟すやう、敵を知り又己を知るといふ、兵書の旨に稱せ給へば、非除素藤、螳螂の、臂を張んと欲するとも、征伐踵を旋す隙なく、誅伏せん事疑ひなし、とは思ひ候へども、廳南の城主、武田信隆、椎津の城主、眞里谷信昭、榎本の城主、千代丸豐俊、約這三城主は、年來素藤と親しきもの也。就中千代丸氏は、曩に素藤が與に媒妁して、濱路姫上の御姻談を、執し稟せし事しもあれば、素藤件の三城主を、逆謀に引入れたる歟、これも亦知るべからず。再度の密使を遣して、いかで件の三城主の、動靜を撈らせ候はゞや。といへば義成頷きて、然ばとよ、その事なれ。後度の使价は十名許、はやく上總へ遣して、諸城主に徇示さんは、蟇田素藤謀叛により、義成みづから征伐すべし。しかれども那逆將は、才に一郡の孤城に據れり、各々加勢を出すに及ばず。皆その城を固く戍りて、をさ〳〵非常に備るを忠とせん。この義に違ふべからず、と告文を廻らさば、那豐俊們三城主の、順逆邪正も知るよしあらん。先這使价を快課せよ。我も日ならず出陣せん。宜人馬の點檢を、いそぐべし。と仰すれば、三家老們は異議もなく、言承してぞ退りける。却說這次の日に、嚮に館山

ば、始よりして逃たるにはあらじ。そが刀瘡兒には毉療を加えて、後の課役に充べきものぞ。ようせよかし。と惱なき、寛仁大度の君命に、有司はさら也、三家老們も、齊一嘖とぞ感じたる。そが中に杉倉氏元は、姑且して稟すやう、今番撃れし逆徒の首級を、路の並樹に梟られしも、風雨を起して御方の士卒を、當城へ領て返されて、過半甦生に及びしも、伏姫君の大神靈の、冥助には候はずや。傳聞にき、那犬士們が、必死の窮阨ありし折、伏姫上の明靈魂、他們が影に立、形に添て、屢救はせ給ひしといふ、事をし思ひ合すれば、他し神にはましまさじ。孝義心烈、和漢に罕なる、姫上なれば、亡後まで、懲は賞善罰惡の、神威折每に灼然也けん、最有がたく候へ。といふを義成聞あへず、我も亦如右思へども、幽冥の事、鬼神の出沒、ありとおもへば、則有り、无と思へば、則なし。この故に聖人は、怪力亂神を語らずといはずや。譬ば今番の神の冥助は、我姉上の神靈なる歟、或は當家を守らせ給ふ、他し神の靈驗なる歟、思ふて得べき由もなし。そを奇に惑ひ神助を憑みて、みづから守を外に做さんは、世に大將たるものの、本意にはあらずかし。然ば躬方に祥瑞あれば、敵にも亦奇しき事あり。那素藤が伏兵は、舘山の城内より、地道を潛りて、諏訪の社頭の、樟の樵へ出たるすら、做がたかるべき技なるに、風雨の折にその洞の、迹だにあらずなりしと聞けば、現素藤は鬼神を役ふ、幻術に

へ有しと云、事の趣を告知され、安房へ退らば、是等のよしを、里見の殿に聞えあげよ。素藤を攻給ふとも、只寛やかなるをよしとす。倘卽功を貪り給はゞ、損ありて益なからん。こも亦神の教也。この義を具に稟しね、といふかと思へば件の少女は、掻消す似く見えずなりにき。我們微賤の小卒なれども、御曹司の御先途に、戰歿もせで、阿容々々と、今さら還りまゐる事、罪を免るゝ處なし。なれども、神の示現あり、事祥瑞に候へば、注進の與證据の爲に、件の首級を些ばかり、齎してこそ候なれ。と皆不娯しげに告訴して、賊徒の頭顱を兩三級、有司の實檢に入れにけり。爾程に有司們は、件の事の趣を、先杉倉東荒川の、三家老に傳達して、主君に聞えあげしかば、義成これをうち聞て、三個の老を有司と倶に、召近づけて宣ふやう、初那神主們が、訴の事の趣、怪談にして、證据なければ、敵の間者であらん歟、と思ひしは是凡夫の疑心、今又弱方の雜兵們が、還りまゐりて稟せしよしの、這那既に吻合したれば、疑霧越に霽て、正に當家を守らせ給ふ、神の冥助を感悟せり。然ば義通幼弱にて、敵の擒になりたりとも、他が與に會稽の、耻を雪ん事易かるべし。有司們は、三社の神主を、皆獄舍より饒出して、姑且當城に留置ね。又件の雜兵們は、數にも足らぬ小卒ならずや。死すべき處に死なずして、免れてかへり來たれば、とて、咎むべきものにはあらず。況その每に、痍を負たるも多しと聞け

否、我も疑ひなきにあらねど、爾までに手暴くせんは要なし。嚮に舘山へとて遣したる、悄々使の還りなば、他們が虛實も知るよしあらん。有司們は、その三個の神主を、姑且獄舍に繫ぎ措ね。然ばとて暴々しく、他們を呵責すべからず。罪の疑しきものなれば、心を用ひ勦りて、酒肉を與て慰めよ。と最叮嚀に仰すれば、有司は異議なくこゝろ得果て、儀のごとくに相計ひけり。恁而その詰朝、義通の伴當の、撃漏されたる雜兵四五十名、刀鎗兒を帮助てかへり來つ、昨日上總にてありし事、社頭の凶變、逆徒の出沒、箇樣々々と聞えあげて、小可們は阿容々々と、命を惜みしに候はねども、憖に敵の鋒頭を、免れたるのみ、俺我每が、捷を拿るべきよしのなければ、還りまゐりて那凶變を、告まつらん、と思ひつゝ、刀鎗兒を肩に掖被て、辛く退き候ひしに、檢し給ふ如く深痍淺瘡の、兵每過半に候へば、昨夜通宵走りても、左に右路次の果敢ゆかで、目今歸著仕りぬ。爾るに我們那折に、山蔭に退きて、刀瘡兒を勦りなどせし程に、猛可に雷雨降そゝぎて、鋭風烈しかりければ、大家樹下に立聚ひ、霽るゝに及びて出て來ぬるに、那諏訪の神祠より、十町許こなたなる、路傍の並樹の枝に、梟たる首級多くあり。こゝろ得がたく思ひし折、路ゆく里の小女に遇ひぬ。そを遽しく喚留めて、首級の事を尋ね候ひしに、皆是賊徒の首級にて、神の梟させ給ひし也。その故は箇樣々々、と其首に近き里人に、託宣さ

りかへり來つ、然而舊職に補せられて、今番御曹司の御參詣を、相歡びて候ひしのみ。那人の逆謀には、素より毫も干からず、伎倆を夢にも知らざれども、仕へまつれる諏訪明神の、社頭にて事の起りしかば、有繫に後安からず。遮莫蟇田は領主でも、安房上總下總まで、都てその地にありと在るもの、誰か一人も當館の、民ならずやは候べき。快このよしを訴まつらば、赤き心を知召す、よしなからずや、と思ひつゝ、夜も日も走りて、眞夜半に、恁は推參仕りぬ。これらのよしも賢査を、願はしくこそ候なれ。と又他事もなく陳じけり。恁而有司は件のよしを、はやくも聞えあげたるに、這時杉倉東荒川の三家老は、なほ評定の席に在り、義成よしをうち聞つゝ、又その席に出まして、三家老們に、殿臺なる、諏訪の神主葉門們が、訴の趣の、虛實什麽。と問給へば、氏元清澄辰相們は、倶に頭を傾けつゝ、迭代に稟すやう、件の葉門が訴にて、思廻らし候へば、賊首蟇田素藤は、鬼神を使ふ幻術に、熟せしものにや候はん。然らずば一夜に地道を穿ちて、那樟樹の虛内に、出入りすべくも候はず。恁れば路の樹の枝に、梟たりと見せし賊徒の首級も、又那怪しき小娘も、皆是他が幻術にて、御方に心を饒さする、計策に候はずや。この疑心をもて推すときは、八幡諏訪の三神主も、眞の忠訴ならずして、敵の間者歟、料りがたかり。緊しく拷問仕らば、實を吐くこと候はん。といふを義成推禁めて、

是により怨敵は、正に素藤なりし事、いよ〳〵疑ひなきものから、なほ風聲のよしなれば、義成朝臣は、その忠告の、速なるを譽させて、留めて再度の注進の、ありもやせん、と等給ふ程に、這夜子の比及に、城の門戸を敲くものあり。當番の士卒、誰と問へば、是則別人ならず、上總の殿臺の頭なる、諏訪の神主梶野葉門、と其邊なる、宇佐八幡の神主某乙が、火速の注進ありてまゐりぬ。有司に見參を請ふといひけり。遮莫丙夜の事なれば、そが儘内へは容れずして、事の由を鞫るに、又那逆徒の一條にて、听措くべきにあらざれば、よしを有司に聞えあげ、免許を得て、葉門們を、問注所に案内をしつゝ、軈て詮議に及れしかば、葉門們は、素藤が、逆謀の爲體、風雨によりて敵御方の、屍骸はあらずなりし事、又那老樟の虚の内に、猛可にいで來し洞穴あり。風雨の折にや埋れけん、迹だに見えずなりし事、又那神祠を相距ること、約莫十町ばかりこなたなる、路傍の並樹の枝毎に、多く梟たる首級ありし事、その首級は、義通君の、伴當と戰ふて、撃れし舘山方の雜兵なるを、始は知るよしなかりしに、よしを女の子の告るによりて、才に聞知りたりし事、又那怪しき女の子の事、神の示現の箇樣々々と、告示されし顚末を、遺なく訴稟すにぞ、有司們は駭然と、又這奇異に呆惑ひて、なほ云云と鞫れば、梶野葉門が稟すやう、在下們は去歲の冬、新領主蟇田殿の、三社を修造したりと聞て、他鄉よ

死を刑首に免れて、賸當城へ返されたる、天資神助の奇特を思へば、御曹司も恙ましまさで、御歸館の日のありもやせん。只面なきは我們のみ、おん伴の人々と、齊一戰歿したらんには、甦生の幸ひあらずとも、臣たる方に稱んに、薄情や、女々しく妖怪に、魅されつゝ中途より、退りて君の御先途に、遇ぬ恨を爭何はせん。慌りて益なき所行也とも、一騎敵城にうち向ひて、屍を那里に曝さん歟、然らずば皺肚搔斫るより、外に了簡なきものから、這身に不測の罪あるに、上の御憲斷を俟ずして、恣に身を殺しなば、不覺の上の不覺といはれん。願ふは檢使を賜りて、自殺を許され奉らば、そは切てもの事なるべし。この義を憑みまうすのみ。と陪話れば亦直元も、親と貞行を見かへりて、そは某も同意也。覺期極めし身にしあるを、今更深念に及んや。といふに氏元咨嘆して、いはるゝ趣こゝろ得たり。堀内氏は宿所に退りて、おん下知を俟給へ。孩兒も愼みをるべきもの也。賞罰は君にあり、臣たるものが罪ありとても、自殺を急ぐことかは。と卿語がましく慰めて、辭して評議の席へとて、いそしく出てゆきしかば、貞行は直元に、告別しつ、伴當を領て、悄々地に宿所へ退りける。却說この日晡時に、殿臺の頭なる、正八幡の神主は、一騎稻村の城へ馳著て、有司に就て、恁々と、蟇田素藤が謀叛の趣、里見の伴當多く擊れて、義通擒になり給ひしといふ、風聲紛れなきよしを、具に訴稟しけり。

大かたならず撃れしに、命芽出たく、路十數里を、隔し上總の殿臺より、這城内へ返されしは、往昔にも例を聞くことなく、後世はなほ有がたからん。よりて憶ふに、和殿們の、不覺も亦凡庸をもて、然ばかりには論じがたかり。そは左まれ右もあれ、件の事の趣の、詳に聞えしより、臣們が當惑、いへばさら也、我君驚訝り給ふ、おん胸いよ〳〵安からず。況御曹司のおん母上、竝に胞姊妹の姫上達、及給事の女房們まで、よしを聞つゝ皆うち泣て、悔の八千回郎君の、安危を思ひやる瀨なき、涙の川に水增て、深き恨によるべの岸も、なぐさめ難し憂患悲泣、いはでも査し給へかし。こゝをもて瀧田へは、急脚のおん使を遣させて、よしを大殿（義實をいふ）に告奉らせ、又殿臺、舘山の邊へは、悄々使を遣して、逆徒は只那素藤なるや、且御曹司の御安否を、悄々地に探りまゐらせよとて、はやくその義を命ぜられ、然而老臣們を召聚合て、評議を凝させ給へども、正可に認めし敵ならねば、いまだ征伐の義には及れず。恁る時誼にて候ひきとて、一五一十を解示す、世に未曾有の奇話怪談に、貞行と直元は、醉るがごとく醒るに似て、駭然たる目を注しつゝ、且羞て後悔の、こゝに達よしあらざれば、歎息の外なかりけり。姑して貞行は、貌を更め恭しく、氏元にうち對ひて、思ひがけなき奇々怪怪、倚伏は糾ふ纏に似て、凶中にも吉事あり、不幸の中にも幸あればこそ、おん伴の每の、必

しまつらず。軈て肱腋に搔稠て、禽にしつゝ退く程に、間遠かる在下們まで、吁嗟とばかり驚悶えて、拯ひまゐらせん、と欲せしかども、亦復賊徒の連發つ、銃响劇しかりければ、大家ひとしく撃仆されて、その後の事を知ずといひけり。又那神社の鷄栖の頭に、さむらひたるおん作當們は、社頭の銃响に駭喫ぎて、稠入らんとしたる折、賊の伏兵猛可に起りて、前後より挾み、頻りに發つ鳥銃に、當るべくも候はねば、免るゝものは稀なりけん、我們は同枕に仆れしより、後の事を得知らず。社頭の方より揉合されし、その隊の賊徒の頭人は、今朝館山より、御曹司の、おん鄕導にまゐらせたる、蟇田の老黨奥利本膳盛衡に好似たり。其かあらぬか、混亂の、折なりければ定安ならねど、大槩は違ふまじくや。既にして我們は、皆是必死の者なりしに、甚麼なる神佛の祐助によりけん、不思議に這里まで領て返されて、甦生の幸ひあるものから、只痛はしきは御曹司の、おんうへにこそましますなれ、とおそる〳〵聞えあげたる、陳謝孰も異ならねば、更に疑ふべきよしもなし。恁れば賊の大將は、必是館山なる、蟇田權頭素藤にぞあらんずらん。他は曩に榎本の城主なる、千代丸豐俊主を媒妁にして、濱路姫を娶らんとて、只管に請稟されしを、館（義成をいふ）の許し給はねば、那人遺恨に堪難て、恁る逆謀を做しゝならん、とは思へども思ひ難しは、敵の進退、奇異のみならず、御曹司のおん作當は、

程遠からぬ、諏訪の神社へ詣給ふ程に、社頭に最大きなる、樟樹一株あり、その幹約莫十圍有餘、中心は朽て空虚になりたり。這樟の事はしも、上總に二木の名物なれば、亦怪むに足らねども、小森浦安們は、その前夜に、事熟たる老兵を、三所の社頭へ遣して、那里の爲體を檢させしに、異なる事はなきものから、當朝那樹下には、警固の雜兵十名有餘を、立して非常に備へたり。爾程に御曹司は、樟の頭を過らせ給ひて、本社へ近づき給ふ折から、突然として樹の虚より、撃出す鳥銃の、响き繁かる賊の伏兵、防禦に遑あらざれば、非常の與に備へたる、雜兵們も皆在るに甲斐なく、主君の左右に從ひまつりし、小森衛門、浦安兵馬は、窮所を撃して仆れたり。是にぞ駭く近習の每、皆郎君の盾になりて、又撃るゝもの尠からず。登時件の樹の樵より、居多の賊徒顯れ出て、手に〳〵持る器械を、振晃めかして競ひ蒐るを、おん伴の人々は、うち向ひ遮制めて、挑戰ふ程しもあらせず、又那幹虚より發出す、鳥銃に又多く撃れて、御曹司の左右には、防ぐ近臣あらずなりしを、一個の賊兵はやく見て、驀地に走り蒐りて、犯しまつらんとしてければ、御曹司はおん佩刀を、晃りと拔て薙給ふ。尙幼弱にましませども、自然と備る武將の太刀風、當るべくもあらざりけん、件の賊徒は表脛を、斫られて撻と仆れたる、後方に覗ふ一個の敵あり、そは賊の大將ならん、透を得たり、と御曹司に、無手と組で動

して地上にあり。悉而雲霽風歇て、照る日隈なくなりしかば、本番の雜兵立出て、驚怪みて、そを檢せしに、皆是御内の士卒にて、隔昨の朝、御曹司に、倶して上總へ赴きたる、毎ならずといふものなく、小森篤宗浦安乘勝、田稅逸友苫屋景能、這宅も都て那身々々に、重瘡を負ぬはなかりけり。そが中に、篤宗乘勝逸友は、或は背、或は項、乳の側兩手の髁なンどを、酷く撃れし鐵砲瘡あり。寔に大事の傷瘡なれども、幸ひにして裏を缺れず、銃丸は骨の間にあり。孰も重瘡に堪ざりけん、死して程經しに似たれども、寸口の脈絶ずして、胸膈温なるも多かり。と注進はやく聞えしかば、君臣共に胸を潰して、軈て有司におん下知あり、實檢を遂げ、醫師を聚合て、專療治を藎させしかば、篤宗乘勝逸友景能、都て侍品二十餘名、雜兵一百十數名、各甦生したりける。這宅窮所の深瘡にて、藥療の術の屆ざりける、雜兵二十許名あり。又篤宗乘勝逸友們は、醫療立地にその効見えて、死ざることを得たれども、纔に呼吸の暢ふのみにて、ものいふべうもあらざれば、然る毎は篌輿に乘して、各宿所へ送遣し、死たるものは、親族妻子に、賜ふて安葬るべきよしを命ぜられ、然而氣力本復したる、苫屋八郎景能們を、問注所へ召聚合て、事の仔細を尋問れしに、景能們が稟すやう、昨夜御曹司は、夷灊の新戸に、御止宿ましまして、今朝那殿臺の頭なる、兩社の八幡へ、御參詣事訖りて、其首より又

ら也、藏人は開基以來、我君二世の股肱にて、武勇才略ありながら、妖怪變化の爲にしも、魅されけん、是非なさよ。といふ詞いまだ訖らず、貞行悄々地に這里に來て、對面を請ふ、と聞えしかば、氏元は直元と、倶に閑室に迎入れて、賓主の席定りければ、貞行は面なげに、氏元にうち對ひて、某不覺の顚末は、宿所に還りて初て知りぬ。既に件の趣は、令息に聞給ひけん。昨日大樟にて受とりたる、各連署の下知狀を、拿出て再見てけるに、有しには似ず、素楮なりき。恁れば、おん使と稱たる、那鮠內葉四郎も、その人にあらずして、妖怪にこそ候はめ。稟解くべきよしもなき、罪を怕れ命を惜みて、獨悄々地に來つるにあらず。是に就ても郎君の、おん上さへに心もとなし。乍麽いかにして可らんや、敎給へ。と不樂しげに、問へば氏元嗟嘆して、事の疑惑は然ぞあらん。目今孩兒に恁々と、解示さんと思ひし折也。那鮠內葉四郎は、昨日も終日衙所に在り、又今さらに疑ふべからず。下知狀の一條は、照据なきに似たれども、なほ一層の大奇事あり。是により和殿們が、途よりかへり來ぬるよしも、曩に聞知り候ひき。といふに貞行直元は、共侶に又驚きて、そは亦甚麽なる故に歟。と問へば氏元、然ばとよ、けふ亭午の左側に、蒼天猛可に結陰り、劼風颯と吹暴て、咫尺もわかずなりし折から、怪しむべし、這大城の東門內に、人空中より吹落されけん、俯累りし、士卒百五六十名、皆氣絕


宇佐の神主
両社の神主路に怪異に遇ふ



辭し退きて、次の日未下刻時候、稻村の城にかへり來つ、先件の若黨を、同僚許遣して、歸著のよしを報知しつゝ、各々宿所へ赴きしに、貞行が妻は恙はあらず、直元が妻も亦、異なることのなかりしかば、迭に驚訝りて、その故を問ひ問るゝに、あるべき事にもあらざれば、皆怪みに勝ずして、呆れざるものなかりけり。然ば直元の父、木曾介氏元は、この折評議の席を退りて、又まゐらんとせし程に、直元們が召に應じて、歸著のよしをうち聞て、軈て對面してよしを尋るに、直元答て、然候。昨日御曹司は恙もなく、上總の大樟まで到らせ給ひし折、大城より遣されたる、那舘内藥四郎が、馬を走らし赴蒐來て、よしを告て、奉書を遞與しぬ。その事の趣は、堀内生の妻は身故り、兒が妻も亦、難産の艱みにて、生れし兒は死胎也。恪れば忌服産穢に係れり。神事のおん件に達べからず。只這兩人のみならず、貞行が妻の親族の、忌服を稟る毎あらば、貞行直元們と共侶に、かへり參るべしとある、おん下知分明なりければ、已ことを得ず、事恪々、と小森浦安們に告知して、幼君守護の大任を、委ねて其首より退りたる、侍品四五名あり。そは某甲某乙なり。爾るに目今かへり來て、事の相違に驚れぬる、一期の不覺この上なし。只是狐狸の所爲なりし歟、怪しき事に候ひき。とおそるゝ陳ずれば、氏元憶はず嘆息して、約莫今番の奇異瑰怪は、只その一條のみならず。和郎が不覺を、いへばさ

傳へも聞給はずや。嚮に神の託宣あり、里見の伴當撃れし後、風を起し雨を降して、敵躬方の亡骸を、搔遣ひ給ひしは、安房の富山に迹垂在す、神女の靈驗也、と欺聞にき。然ば神女の託宣に、今茲は義通災厄あり。そは天命にて免れがたかり。この故に八幡諏訪の、神力も甲斐なきに似たり。なれども命に恙なきは、神の助あれば也。恁れば撃れし伴當們も、命數其首に盡ざるは、囘陽の時なきにあらず。そを里見殿怒に乘して、克を一時に拿んと欲せば、士卒を多く喪ひて、事に益なきのみならず、反て敵の辱に遇んのみ。安房へ赴く者あらば、この義を國主へ告よかし、と宣示させ給ひしとよ。おん身們稻村へまゐり給はゞ、是等のよしを里見の殿に、聞えあげ給へかし。浮たる言にはあらざるを、思ひ恥し給はなん。やよや疑ひ給ふな。と解示して又走ゆくを、薬門は、ヤヤと喚禁めて、再問ん、と見かへれば、狀形は消てなかりけり。今又恁る奇異神靈に、誰か驚怕れざるべき。大家ひとしく感嘆して、大かたならぬ示現應報、凡慮の及ぶ所にあらず。是併明君の、善政德義徹りせば、恁る神祐示現あらんや。日は暮るゝとも通宵、走りて國主へ注進せん。卒快々。といそがしつ、急されつゝ脚曳の、山路數はで捷かる方を、俱に安房へぞ赴きける。休題再說。今番里見義通の伴長也ける、堀內藏人貞行、杉倉武者助直元們は、その妻の死穢產穢により、召還さるゝよし聞えたる、大樟村より

ずや。と問ひつゝ告る奇瑰の一條、疑ふべくもあらざれば、宇佐の神社の神主は、憶はず連りに駭嘆じて、そは古今に例稀なる、靈驗にこそ候ひけれ。旣に猜せられたる如く、咱們も異變を注進に、稲村殿（義成をいふ）へゆかまく欲す。這義は、和殿と我のみならず、正八幡の神主は、今朝御曹司のまゐらせ給ひし、駛馬にうち跨て、安房を投て走らしたり。と方僅人の噂に听にき。騎馬には及ぶべくもあらねど、いとゞ去向のいそがるゝに、卒給へ、共侶に、稲村殿へ推參せん。といふに葉門は歡びて、再議に及ばず、うち連立て、只管路次をいそぐにぞ、この地に留る央奴們は、告別しつ、首途を、祝して宿所へ退りけり。爾程に葉門們は、ゆくこといまだ十町に足らず。と見れば路の右ひだりに、並柆たる樹杪に、梟たる人の首級多かり。葉門も、宇佐の神主主僕も、心ともなく、瞻仰て、他は甚麼。とばかりに、俱に驚訝りて、姑且杖を住めけり。浩處に前面より、地方の民の女兒にやあらん、年十一二なる女子が、最小なる狗子の、雨に濡れたるを勦り抱きて、走りて這方へ來にけるを、葉門は、ヤヤと喚掛て、喃女子、這首級は、蟇田殿の梟させたる、國主の公子義通君の、作當なる歟、知ずや。と問へば女子は頭を掉て、否、梟られたる這首毎は、里見樣の作當には侍らず、皆館山の城兵也。嚮に諏訪の社の頭にて、里見義通君の作當と、戰ふて撃れしを、神の梟させ給ひしならん。いまだ

て、烈しかりける、風雨の中に、是等の奇特ありければ、那地に古蹟ありと聞く、役行者に驅使れたる、神龍などの所行なりし歟、是も亦知り叵かり。そは左まれ右もあれ、恁る靈異を見るからは、いよ〳〵猶豫すべからず。洒家は、安房へ快赴きて、よしを里見殿へ聞えあげん。この事後に領主に聞えて、非理の怒りに遇ふとても、我宅眷は、まだ喚拿らで、他郷に在れば、後安かり。各々もこのこゝろを得て、問るゝとても我往方を、蟇田殿にな知せそ。と囁きつ宿所に入りて、行裝して出んとすれば、央奴們も一兩名、葉門が伴に立んとて、皆手傳ふて荷造りたる、行裹を受拿て、朸に掛て等て在り、准備はやくも整ひければ、葉門は奥より出て來つ。這地に留る央奴們は、送りて路にて別れんとて、齊一外面へ出てゆく程に、這頭を過る旅客あり、才に一個の伴當に、行李を駝して來にけるを、と見れば是別人ならず、宇佐の神社の神主なれば、葉門は訝り喚留めて、什麼同職は、慌しげに、那里へ赴き給ふやらん。當社には嚮に風雨の折、箇樣々々の奇しき事あり。然らでも蟇田の謀叛により、里見殿の公子の、禽にせられ給ひたる、そは當社へ參詣の、折からの事也ければ、心苦しさ、いふべうも候はず。爾るに件の神異の事あり、戰歿したる敵御方の、亡骸はなごりなく、風雨の折に紛失したる、よしさへ國主へ告まつらんとて、目今出てゆく折也。和殿の旅をし給ふも、安房へ告訴の爲なら

る心地なかりけり。爾程に風雨は、いよゝます〳〵吹暴れて、殷々と鳴亘る、天津叢雲の起住ひ、現龍などの巻くにやあらん、門扇瑞籬孫廂、石も瓦も地を拂ふて、起し升するとおぼしきに、樹の折るゝ音、四下に响きて、天地反覆しぬるや、と戰慄れ俯累りて、大家ものも得いはざりしに、約莫半晌許にして、風和ぎ雨霽て、日影朗になりしかば、葉門竝に央奴們は、やうやくに胸おちゐて、共侶に又出て見れば、奇なる哉、里見の士卒も、及城方の雜兵の、亡骸も咸旋風に拿られて、那里へか吹遣ひけん、只その屍骸のなきのみならず、那這に溜り塗れし、鮮血は都て迹もなく、疾雨に皆洗流されて、不淨は毫もあらずなりたる、事の不思議に衆人は、さても〳〵。とばかりに、今さらに又呆惑ひて、なほ那這と見かへるに、大樟は大枝小枝も、多く風に吹折られて、樹下明くなりたるが、朽虛の内にいで來たる、洞さへ件の風雨に、埋れたる歟、崩たる歟、迹だにあらずなりしかば、大家訝るそが中に、葉門はいよ〳〵奇也と稱へて、呆るゝこと半晌許、央奴們を見かへりて、和主們は、いまだ思はずや、嚮には殊なる風雨を起して、這頭に多かる戰歿の、人々の亡骸を、那里へ歟起し遣りて、不淨を洗ひ給ひしも、又這樟樹の朽虛の内に、いで來たり、と見し洞穴の、迹だにあらずなりぬるも、天變地妖の所以のみならず、こは是當社の神所爲歟。猶倩と思惟るに、初一朶の叢雲の、安房の方より天引來

の樹虚には、最大きなる洞穴いで來て、人の出入せしなるべし、洞の口に足跡多かり。原來館山の城内より、地を這樹虚へ穿通して、那隊兵を出しにけん、奇なり奇也。とばかりに、呆れて一霎時立在しを、央奴們も訝りて、皆立寄つゝこれを見て、駭き怪まざるものなく、倶に云云と評するを、葉門は急に推禁めて、益なき評議に時をな移しそ。洒家は、安房へ赴きて、稲村殿へ告訴せん。恁居多なる人の亡骸を、出し遣ること輒からず。然ばとてうち棄置て、社頭を穢しまつらんは、最も惶き事ならずや。願ふは和主們宿所に還りて、やよ村人を驅催して、野まれ山まれ瘞めなば、多く得がたき陰德ならん。この義を承引給へかし。と憑めば、大家眉を顰めて、そはこゝろ得て侍れども、我村人は、いぬる日より、臨時の課役に驅拏られて、皆館山の城内に在り。縱殘れる者ありとても、里見殿の伴當の、亡骸を瘞めなば、舘山殿(素藤をいふ)に疑れて、罪得がましき所行なるに、憑るゝとて爭何はせん。といふに葉門は困じ果て、なほ左に右と相譚ふ折から、但見る安房の方よりして、一朶の叢雲天引來て、社頭を掩ふ程しもあらず、滿天猛可に結陰りて、時にざりける迅雷電に、風亦颯と吹起りて、沙石を飛し樹を仆す、物凄じき雨の脚は、宛盆を覆すが似く、黑白も別ずなりしかば、葉門はさら也、央奴們も、駭怕れ頭を抱えて、走りて本社に逃籠り、皆神前に平伏して、神の冥助を祈るのみ、活た

傷られ血に塗れたる、屍骸は社頭に累々たり。登時葉門は思ふやう、蟇田主の逆謀は、我身に干る事なけれども、那人當社を修復して、我を舊職にかへせしは、神を敬ふ誠心ならず、里見殿を欺きて、義通君を禽にすべき、與なりけり、と人みないはん。加旃國主の士卒の、撃れしも、這社へ、是參詣の折なれば、里見殿の我をさへ、逆徒なりき、と思ひ給はん。始終の勝負を思量るに、蟇田は計略その圖に當りて、一旦勝利を得たれども、勢ひ一城の主に過ぎず。里見の武威はいはでもしるき、房總二國の大軍もて、推寄來つゝ攻撃れなば、防ぐに術のなかるべき、蟇田の滅亡疑ひなし。所詮この凶變を、はやく稻村の城へ訴て、我身に毫も干らぬ、心の誠を表さば、倒に後安かるべし。そを愁に阽みて、安房へ得ゆかで、逐電せば、暗からぬ身を闇くして、江湖上陝くなるのみならず、國主の忿怒酷しくは、當社を破却せられん歟、是も亦知るべからず。しからんには身の禍を、當社の神に移すに似たる、冥罰久後心もとなし。非除是等の趣を、訴てもなほ疑れて、拿籠られなば、それまでの、禍福を時運に儘せんのみ。地方も地方、折歹しとて、後の汚名を思はずに、那里へ影を躱さんや。と獨深念を決めしが、然るにても蟇田殿は、孰の程に勲隊兵を、這樹の朽虚に籠置きけん、こゝろ得がたき事なりき。とうち吃きつゝ樟樹の、頭へ軈て立寄りて、朽虚の内をよく見るに、怪しむべし、這箇

第九輯　卷之六

第百二回

伏姫靈を顯して敗損を補ふ　義成兵を制めて家訓を聽く

單表、殿臺の頭なる、諏訪の神社の神主は、梶野葉門と喚做したる、その性老實兒なれば、國主の嫡男義通君の、參詣あるべし、と聞えしより、當社の榮この時なめり、と思へば歡びに堪ずして、豫受地子の莊客を、幾名歟央ひなどして、專神事の准備をしつゝ、その參向を等たりけるに、旣にして義通の、當社へ詣給ふ折、思ひがけなき鬪戰起りて、里見の士卒は遺なく擊れ、剩御曹司義通君は、禽になりて、將てゆかれたる、事の譟劇に駭怕れて、央奴們と共侶に、躱れて動靜を覗しに、件の逆徒の大將は、則是別人ならず、この地の領主、館山なる、蟇田素藤でありけるを、相ること分明なるものから、野心の所以を知ざれば、左さま右さま思ひ難たる、胸安からでありける程に、鬪戰はやくも事果て、逆徒は退去りしかば、央奴們を誘引立て、おそる／＼出て來つ、見れば無慙や里見の伴當、老黨若黨數を盡して、皆是鳥銃劍戟に、身を

宛百千の霹靂の、墜蒐れるに異ならず。憐むべし里見の士卒は、又茲にても幾十人歟、撃れて撑と仆れけり。登時頗八盆作は、賊徒を找め槍を拈て、三七二十七に嘷て蒐れば、里見の士卒は、既にはや、多く躬方を撃せしかども、毫も撓まず、踏住りて、這里を先途と戰ふ程に、裏面なる奥利本膳們は、義通の老黨近習を、大かたならず撃果したる、賊徒を驅て出て來つ、又前後より挾みて、息をも養ず攻めしかば、然しも里見の伴當は、悍からざるにあらねども、大刀折れ勢ひ窮りて、名を思ひ恥を知るものは、敵と引組み刺違へて、屍を其首に曝すは多く、その餘名もなき雑兵の、命を免れしは纔にて、戰ひ越に果にけり。恁而頗八盆作は、素藤の逸早く、義通を擒にしたる、その事の趣を、本膳們にうち听て、造化精妙。と不勝の歡び、卽便敵の馬武具を、一隻も遺さず雑兵們に、奪拿らしつ、常の路を、走りて軈て凱陣す。登時奥利本膳は、預けられたる隊兵を、俱して又那大樟の、朽虚より地道を潛りつゝ、俱に館山へ還りけり。畢竟義通敵に拿られて、伴當多く戰歿したる、後の話說甚麽ぞや。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

けるを、義通透さず小刀を拔て、殺拂ひ給ふ刃尖に、件の賊徒は右手を斫られて、苦と叫びて仆れたる、折から近づく賊將あり、是則素藤也。義通の後方より、利手を拿て動せず、持たる小刀を打落すを、なほ放さじ、と角ひ給へど、當春才に十一の、小腕に衞りを喪ひては、勢ひ暴たる强敵に、當るべくもあらざれば、竟に刃を挑拿られて、吐嗟と叫び給ふ間もなく、素藤は義通を、揉縮め肱腋に抱きて、又那木虛へ引かへすを、田税逸友、苫屋景能、ひとしく遙に見かへりて、驚怒りて共侶に、拄る賊徒を殺拂、殺拂つゝ趕ふ程に、虛の内より又打出す、箭响高き鳥銃に、逸友も景能も、撃れて矢場に仆れけり。恁りし程に素藤は、義通を生拘りて、地道を潛りて、城内なる、洞口より出て來つ、留守を委ねし碗九郎們に、示し誇りつ、義通を、緊しく一室に閉籠けり。是より先に、諏訪の神社の、鷄栖の頭に下向を等たる、里見の伴當なほ多かり、遙に聞ゆる銃响と、叫ぶ居多の人聲に、大家駭き噪立て、原來社頭に異變あるらん、尋思に及ばず稠入て、安危を伺ひ奉らずや。と罵りつ、弓手銃手、歩竝取次に槍の鞘、外すを遲しと惴雄の、士卒前後を爭ふて、走り入らんとせし程に、思ひがけなき後の方より、素藤が伏兵二三百名、忽然として聚合來つ、眞先に找む賊徒の頭人、是則別人ならず、礪時願八、平田張盆作、左右に備し雜兵に、幾十挺の鳥銃を、一度に連發さすれば、响き天地を動して、





に那大樟の、一樹觀に達つ千枝の陰、青葱として世に稀なれば、大家驚き見かへれども、御曹司は貴介の本性、童子に似げなく、外視も觸らで、其頭に近著給ふ程に、案内に立たる本膳は、神主遲し。と呟きつゝ、本社のかたへ走る折、故意端緒を斷らしたる、半履一隻脫棄て、はやく樹陰に退きたる、程しもあらず義通君は、樟の頭を徐々と、過り給ふこと幾ならず、忽然として那樹の虛より、連放る鳥銃の、响と共に、幼君の、左右に從ふ兩個の老黨、小森篤宗は、背を擊れ、又浦安乘勝は項を痛く擊傷られ、仆れて倶に息絶たる、這大變に胸を潰せし、田稅逸友、苫屋景能、その宅昵近扈從の甸、齊一吐嗟、とばかりに、走聚ひて、幼君の、盾になりつゝ果敢なくも、擊るゝものぞ多かりける。爾程に大樟の、頭に警固の雜兵們は、頭の上を蜚ぶ銃丸に、衛る甲斐もなく駭噪ぎて、擊るゝもあり、逃るもあり、物の要には達よしあらで、進退都て度を失ひたる、折を得たり、と木の虛より、顯れ出る居多の賊兵、或は短槍小眉尖刀を、晃めかしつゝ走蒐るを、御曹司の近習們は、なほも寄せじ、と推隔、推隔つゝ殺結ぶ、いとも烈しき奮擊突戰、いまだ勝負を分ざりけるに、又那奧利本膳が、本社の警固と伴て、出し置たる、二三十個の隊兵を、先に拔めつ、横ざまに、咄と喊きて駈破れば、里見の士卒多く擊れて、御曹司の身邊には、衛るものあらずなりしかば、一個の賊兵走蒐りて、搦捕んとして

へば、鷄栖の側に制騎牌あり、賴朝以來の舊制なるべし。因て人馬を駐めさせて、轎子を出給へば、右に小森篤宗あり、左に浦安乘勝あり、田稅逸友は先に立ち、苫屋景能は後に跟て、幼君の大刀を持たり。這餘の近習、童扈從と共に十四五名、警固の雜兵四五十名、齊々整々として、石階の上下左右に星列す、威儀儼然たる光景也。恁りし程に義通は、拔みて本宮に登り給へば、當社の神主出迎へて、幣帛を奉り、武運長久の壽詞を唱ふ。登時浦安乘勝奉りて、駿馬一疋、大刀一口、白銀三十挺を獻供の、目錄を遞與しけり。恁而義通は、內陣にて拜禮あり。その間、神樂堂なる禰宜們が吹鼓、折を得貌に、田舍神樂を奏したり。事果て、義通は、宇佐の神社に詣給ふ。作法朔に異ならず。只その獻供同じからで、大刀馬代なる白銀をのみ、三十挺まゐらせらる、源家の氏神ならねば也。當社も拜禮事果て、諏訪の神社へ赴き給へば、那大樟樹の頭には、小森篤宗の指揮により、御內の雜兵十名許、この餘も遐邇に警固あり、各桿棒を衝植て、專非常に備へしが、既にして御曹司の、詣來給ふと聞えしかば、大家棒を傍に置て、跪坐て遙に拜迎す。爾程に、里見御曹司義通君は、亦復諏訪の鷄栖前より、轎子を立出て、老黨近習に守護せられ、拔みて本社に詣給ふ、その路一町有餘あり。甃石の左右なる、松柏多く竝竝たる、老樹ならずといふものなく、幾世歷にけん上久て、苔滑に路直かり。そが中

願ふはかへさに駕を枉られて、當城へ立寄給はゞ、いよ〳〵面目なるべし、と稟せとの義に候。とおそる〳〵演しかば、篤宗これをうち听て、城主の好意多く得がたし。遮莫今番は社參のみ。公子幼少なるもて、外へな立寄り候ひそ。と館（義成をいふ）の豫て嚴命あり。且淸道の事なども、伴當多く候へば、その義も亦无益に似たり。那三社へは伴當に、案内の者も候へば、和殿を勞するに及ぶべからず。是我們が私議ならぬ、館の御諚に候へば、是等のよしを御主人へ、宜く傳達あらまほしけれ。御親切の趣は、後刻披露仕らん。快々退り給ひね。といそがし立て從ねば、本膳は强難て、伴當を將てその夜芟、館山の城へ還りけり。恁而その詰旦、御曹司義通君は、烏帽子裝束晴やかに、轎子にうち乘て、新戸の旅館を立出給へば、老黨小森衞門篤宗、小傅浦安兵馬乘勝、近臣田税力助逸友、苫屋八郎景能們はさら也、侍品二十餘名、雜兵都て二百餘名、前後左右に從ひて、先殿臺の頭なる、正八幡の神社へとて、倶しまゐらする程に、又那奥利本膳は、十字街衞の雜兵を、幾名歟從へて、夙めて途に出迎へて、案内に立、先を逐して、路次の非常を警めけり。彌程に、近邨の莊客幾百歟、公子の社參を拜見せんとて、晴たる天に、簑を著たるも、多く路傍に聚合たりしを、後に思ひ合すれば、そは素藤の伏兵にて、簑は下なる戎衣を、隱さんとての所爲なりけり。既にして義通は、件の社前に到り給

最大きなる松杉あるのみ。就中諏訪の神社には、十抱許の大樟の、その幹朽虚になりたるあり、寔に稀有なる老樹にて、内に數人を坐らすべし。と報るを篤宗乘勝は、听つゝ倶に眉を顰めて、しからば明日御參詣の折、その樹下には雜兵を、立して非常に備ふべし。御封内なりとても、館山の城主は、譜第にあらず。今の世の人心、料りがたかるものなれば、只小心にしくことなし。非除野心の者はなくとも、爾る老樹の朽虚などには、毒蛇の隱れ住むことあり、遺なくこの意を得られよとて、その夜士卒に徇示せしを、思慮なき壯佼、雜兵們は、安きに熟て諾はず、當國久しく靜謐なるに、那里に野心の毎あらん。況件の社の頭には、毒蛇なンどの栖むべくもあらず。そは用心に過ぎたりとて、あざみ笑ふも多かりけり。是より先に素藤は、館山の城よりして、老黨奧利本膳を、新戸の旅館へ遣して、美酒佳肴の人情あり、御曹司到著の、賀びを演しかば、小森篤宗對面して、なほその來意を鞫るに、本膳答て、然候。素藤宿望虚しからで、御曹司の遠く來まして、三社へ詣給はする、面目何事か是に優すべき。今宵御旅館へ伺候して、見參せまく思ひ候ひしに、折から風寒に冒されて、昨今病臥の爲體、失敬至極、是非に及ばず。是により、陪臣奧利本膳をもて、路次の安否を拜問の與、謹で獻芹の愚衷を表せり。本膳を留置れて、明日嚮導になされよかし。路次の警固は、未明より、士卒を多く出すべし。

小勢にては、左右を拉ぐに不便也。いかにすべき、と思ひ難て、獨肝胆を摧く程に、はや黃昏になりし時候、城内をうち巡る、雜兵們が訴あり、その事極めて奇怪にて、城の東門の樹下に、大きなる洞穴猛可にいで來て、その深さ計りがたかり。因て先試に、潛り入り候ひしに、奥はいと廣やかにて、諏訪の社木の大樟の、朽虚の内に續きたり。恁れば、這城内より、那木虚中に到んこと、地道の往還自由也。不思議の事に候はずや。と告るに素藤驚きて、且歡びも大かたならず、是も亦八百比丘尼の、我宿望を資にけん、那術なること疑ひなし。いでいでと。いひつゝも、兩個の近習に燈燭を、秉らしてみづから走り出て、件の洞を檢するに、そのいふ處に違はねば、速に隊配して、這地道より一百人、又外面より三百餘人、内外一度に起立て、義通の作當を、一個も漏さず擊捕るべし。我も亦地道より、那社頭に赴きて、手親小冠者を禽にせん。この餘の事は箇樣々々。とその進退を定るにぞ、礪時願八、平田張盆作、淺木碗九郎們を首として、士卒齊一勇立て、はやく准備をしたりける。休題再說。這夕御曹司義通は、新戸に到著し給ひければ、村長の家を旅館にして、明日の社參の准備あり。この折春の日いまだ暮ず、下晡なりければ、伴長小森篤宗は、浦安乘勝と商量して、事熟たる老兵を、殿臺の頭へ遣しつ、先那三社の光景を見せけるに、日暮て老兵們かへり來て、那三社の頭には、

胎とあれば、本意に違ひて、只その妻の恙なきを、切てもの事に思ふなるべし。恁而件の人々は、かへりゆくこと三里許、既にして日の暮れしかば、其首に歇店を投めてぞ、次の日稻村へ還りける。話分兩頭。爾程に、蟇田權頭素藤は、豫の計略その圖に當りて、今茲正月十三日に、義通の發駕の事、豫その聞えあるにより、先祕密使をもて、路次の動靜を探らするに、その者十四日の下晡にかへり來つ、扨も今番義通の、從駕の士卒二百四五十名、倶に幼君を守護しつゝ、今日未下刻、大樟村まで來ぬる折、稻村より騎馬の使あり、伴の老黨堀内貞行が妻は身故り、杉倉直元が妻は、難産の聞えあり、神事に從ふべからずとて、召還され候ひき。又那老黨のみならず、貞行が妻の親族も、今番の伴當の內中に在り、他們も忌服に係るをもて、身の暇を賜りて、大樟村よりかへされたる、侍品六七名あり。そが再伴も尠からねば、後陣はあらずなりにき。と報るに素藤歡びの、手を憶ずも、額に加えて、そは又得がたき造化なるかな。八百比丘尼が別に莅て、那四家老は、智勇あり、義通に倶して來なば、事の障りになりもやせん。奇術を以追退けん、といはれしよしの果して違はず。今宵諏訪の社頭なる、大樟樹の朽虛の內に、精兵を躱し置て、明日社參の折、義通を、擒にせんこと勿論なれども、多勢をもてせば、前驅りの、伴當們に見出されて、事の難義になりもやせん。然ばとて

にければ、貞行と直元は、稻村より到來したる、奉書を篤宗乘勝們に見せていふやう、我們不慮の服穢によりて、快立かへり候へとある、おん下知旣にかくの如し。こは本意ならぬ事なから、神事なれば、ちから及ばず。和殿們守護の大任に在り、這地も御領也といへども、只小心にしくことなし。この義をこゝろ得給ひねかし。といふに篤宗乘勝は、異議に及ばず諾なひて、卑職們不才なれども、忠義は人に讓るべくも思はず。おん伴の義は心安かれ。日夜の侍衛由斷なく、兩三日の程にして、御歸城に暨ぶべし。快々退り給ひね。といふに貞行直元は、各各服穢に憚りて、御曹司に見參せず、其首より軈て引返すに、貞行が妻の親族も、四五名件當の內にあり、他們も忌服に係るをもて、貞行直元と共侶に、辭して稻村へ還るにぞ、侍品六七名、再伴は四五十名、この折猛可に減じけり。恁りし程に稻村より、騎馬の使に立られたる若黨は、鮀內葉四郞と喚做して、家老隷の番士なるが、貞行と直元の、承書を受とりて、在下はこのよしを、はやく注進すべけれとて、件の人々に先だちて、馬にうち跨り鞭を鳴らして、稻村を投てかへり去りしかば、召返さるゝ每は、今さらに路次をいそがず。聞くに、堀內貞行が妻は、去歲より、積聚の病著に臥てあり。然とても昨今、身故るべうは思はざりしに、折歹しとて嘆ずるのみ。又直元が妻は懷胎にて、臨月は仲春ならんに、一月はやく生れたる、死

ざれども、首途の次の日（正月十四日）には、はやく新戸に到り給はん。其里に一宿人馬を憩へて、本月十五日の早朝より、三所の社參あるべしとて、伴當に徇示したり。間話除繁。却說義通御曹司は、居多の伴當に俱せられて、正月十四日の未下刻、旣にして上總なる、大樟村まで來給ふ程に、忽地騎馬の青侍あり。稻村の城より走らし來て、御曹司の後陣なる、堀内藏人貞行、杉倉武者助直元に報るやう、昨日公子御發駕の後、堀内主の令政は、持病の積聚暴に發りて、鍼灸藥餌の驗なく、昨夜身故り給ひにき。又杉倉主の渾家は、昨夜難產の恙あり。辛くして生れたる、赤子は則死胎にて、產婦は幸ひに免れ給ひぬ。是により御沙汰あり。藏人竝に武者助們は、服穢產穢の障あり、社參のおん伴に達べからず。當職を、小森衞門篤宗と、浦安兵馬乘勝に相委ねて、速に退きかへり參るべし。勿論貞行が妻の親類に、その忌服を稟る者、おん伴に在るならば、貞行同斷たるべし、とおん下知の、おん使にこそ候なれ。各々承知し給ふべし。と詞急迫しく演傳へて、杉倉氏元、荒川淸澄、東辰相が連署の奉書を、貞行直元に遞與しょかば、兩人俱にうち驚きて、恁れば猶豫すべからずとて、隨便人を走らして、小森衞門、浦安兵馬に、事恁々と告にけり。這時御曹司義通は、大樟の村長許、一霎時人馬を駐させて、小休の折なりければ、小森浦安の兩伴長は、よしを御曹司に聞えあげて、軈て後陣に來

れば、心安きに似たれども、義通幼少なるをもて、究竟の老黨若黨を、多く隷られたるならん。因て當時の地理を攷るに、安房國長狹郡稻村の城は、その地、同國安房郡、長須賀を距ること、一里許也といへども、今その古城迹詳ならず。却長狹郡稻村より、上總國夷灊郡、昔善村に赴くに、その路程、一日には遠かるべく、二日には易かり。先稻村より數里にして、天津に到る。天津より濱荻、濱荻より內浦、內浦より小湊までは、安房國長狹郡也。件の內浦に、遺誡と喚做す島あり。殺生禁斷の地也といふ。小湊は、日蓮誕生の古迹なる事、世の人の知る處なり。然而小湊より、市が坂に到れば、這地方を、房總の封疆とす。坂を登れば上總國夷灊郡に屬する也。市が坂より臺宿、上野、勾屋、山田、鰕山、最上坂、大樟、羽賀、館山、小幡、昔善（今は布施に作る）是也。則安房の天津より、上總の昔善に赴くに、路程十里有餘といへば、稻村より赴きても、十三四里に過ざるべし。しかれども、羽賀館山の間、山路險阻にして、且岐路多かり。倘獨行のもの、はやく土民を央ふて、鄕導に傚さゞれば、迷ざるものあること稀也。因て羽賀館山を過らずして、大樟より、新戸と喚做す村落に赴けば、その路頗遠しといへども、岐道の迷ひなかるべし。こゝをもて里見の老黨、堀內杉倉小森浦安們、豫より相計ひて、羽賀館山の山路を過らず、大樟より新戸へ倶するに、義通幼少たるをもて、一日七里に過

明年正月十五日に、嫡男太郎義通に、詣させんといはれしよしを、箇様々々と報げしかば、素藤斜ならず歡びて、肚裏に思ふやう、八百比丘尼の計る處、果して毫も差ふことなく、義成は參詣せで、その子義通を遣すは、我圈套に入りたる也。然らば先籠城の、準備をせずはあるべからずとて、捌て老黨顚八、盆作碗九郎本膳に、件の祕計を囁き示して、悄々に城内へ、多く戰米を拿入れつ、矢種を貯へ、焰硝を買せなどして、那期を遲しと等たりける。恁而今茲も果敢なく暮れて、明れば文明十五年、癸卯の春正月十一日、(毛野道節が鈴茂林の復讐と同年同月也。但その日子同じからざるのみ。)この日稻村の城内には、里見安房守義成の嫡男、太郎御曹司義通の、鎧の初擐の祝義あり。又上總なる、館山の城主蟇田素藤が、去歳の冬より蔫稟たる、同處殿臺の頭なる、兩社の八幡、竝に諏訪の神社へも、詣て奉幣あるべしとて、十三日の朝巳の時に、御曹司發駕と聞えたる、第一の伴長は、老黨堀内藏人貞行、竝に杉倉木曾介氏元の長男、杉倉武者助直元、孀母夫小森衞門篤宗、小傳 浦安兵馬乘勝、近習田稅力助逸友、苫屋八郎景能、這們を宗徒の從騎として、侍品三十名、雜兵二百五十名、長幹の鎗三十條、弓二十張、鳥銃二十挺、乘馬十疋、小荷駄三十疋、醫師二員、宰領の雜色十名、今番を晴と打扮たる、前駈後從の華美に、上總を投てぞ倶したるける。去向は隣國なるものから、皆是里見の封內な

は國主、御參詣ましくて、奉幣の義を行ひ給はゞ、鎌倉將軍の先例に、稱ふて神慮も感應あらん。三社の神人舊記を捧げて、請奉る事右の如し。這義御許容あるべきや。と舊例を援き、意見を演て、社參を薦め稟しゝかば、義成これを聞給ひて、その歡び大かたならず。件の三社の事はしも、我豫より听知りたり。宇佐八幡と諏訪の神社は、むかし上總介廣常が、鎌倉殿(賴朝)のおん爲にとて、建立したる舊社也。爾後又賴朝の沙汰として、同處に鶴岡の正八幡を、勸請ありしよしなれば、當家尤尊信すべき、神宮たること勿論也。明年正月十一日には、嫡子太郎義通に、初甲を擐せまく欲す。恁れば件の三社へは、義通を參詣させん。然らば先祖八幡殿(義家)の、吉例に相稱ひて、我兒の武運を祈るに方あり。因て正月十五日を、社參の本日と豫定て、程を料りて出し遣るべし。その折に古例を尋て、神田を寄附すべければ、先この旨を存ずべし。但し童子の事なれば、館山へは立よらせず。その日詣てその日に退く、社參のみの旅なれば、饗應の儲などは、必是無用の所作也。是等のよしを權頭に、よく傳へよ。と言示して、三社の神主と碗九郎們に、牽出物を賜りて、館山へ還し給ひけり。爾程に素藤は、稻村の首尾什麼ぞ、と思へばいまだ胸安からで、碗九郎們が還るを等しに、四五日にして淺木碗九郎は、三社の神主を相俱して、稻村よりかへり來つ。卽便主の素藤に、國主喜悅の事の趣、

の勝利となすべし。よくし給へ。と愲語て、素藤が禁るを、毫も聽かず、飄然と、立出しより信たえて、往方も知ずなりにけり。單表、兩社の八幡及諏訪の神主們は、曩に小鞠谷如滿に、神領を滅却せられしより、各他郷に離散して、年來を歷たりしに、今番當領主の沙汰として、三社を修復の幸ひあり。神事を舊に復さるゝといふ、風聲遙に聞えしかば、舊記を抱きて共侶に、殿臺にかへり來つ。隨便素藤に愬訴して、舊職再補を乞けるに、素藤豫計較あれば、舊記を考へ、虛實を糾して、件の三個の神主に、些の神領を拿らし職に復して、昔のごとく祭禮を、執行すべし。と命じけり。左右する程に、這年（文明十四年）の冬十二月の中浣に至りて、三社の修復落成しけり。丹赭の玉垣白木の雞栖も、壯嚴昔に及ねども、神威は有繋に光を增て、最大尊く見え給ふ。是により素藤は、件の三個の神主と、老黨淺木碗九郎を、稻村の城へ遣して、國主義成朝臣に告るやう、素藤が領する處の、殿臺の頭なる、兩所の八幡大神宮、竝に諏訪明神は、昔鎌倉の右幕下賴朝卿の創立にて、源家に由緒ある大社なりしを、先代小鞠谷如滿が、神領を沒收して、神主を逐ひしより、三社倶に頹破して、年來に及びしかば、素藤修復せまく思へど、年々財用足らざれば、亦復居多の年を歷て、稍再興の功を果せり。恁どれも恣に、奉幣の義を行はず。件の三社は、素藤が、藏邑にあるものから、原是源家の氏神也。願ふ

又正八幡は、普善上下の、村人們が城隍神なれば、富民は財を出し、寒民は、力役して、力を勠し勞を厭はで、修造の功を果すべし。倘この旨に從はで、事の不便をいふものあらば、搦捕り首を刎て、後の私論を箴むべし。願八竝に盆作は、件の作事の頭人として、我郡民們に下知を傳へよ。落成は、年内を、限りとして功を果しね。等閑にな思ひそ。と最も緊しく吩咐れば、大家異議なく言承して、軈て夷灊の郡民に、下知して土木の工を興す。催促火速なりければ、夷灊の民們は、驚憂ひて、推辭んと欲すれば、罪せられんことを怕れ、又從んと欲すれば、年來重き租税に勞れて、財用早に整はず。事の難義に逼れども、命に換る課役と思へば、領主の酒色の奢侈の與に、責拿らるゝ錢財にもあらず、地方に舊りたる八幡諏訪の、神社の修復の課役なれば、是切てもの事也とて、修造に力を勠しつゝ、日每に懈る者はなけれど、頭人願八盆作は、己に得なきを歡ばず、事に假托け、理を非に枉けて、難義を課する事多かれば、民們はこれに亦困じて、その虐を免れんとて、件の兩個の頭人に、人情を屢したれば、出銀豫の帳算に、倍して一郡瘦にけり。恁りし程に女僧妙椿は、有一日素藤に別を告て、那計略の趣は、後々の手段まで、遺なく示しまゐらせたるに、老尼が這里に在んは要なし。然るをなほ逗留せば、人の怪むこともあらんに、身の暇を賜へかし。機に臨ば又おん身を帮助て、事十二分

なば、その期の變爻料がたかり。そも亦老尼が奇術あり。この餘の手段は恁々也、箇樣〳〵。と尋き示せば、素藤膝の找むを覺ず、滿面笑つゝうち點頭て、神出鬼沒の妙策なるかな。その伏兵を用ひんには、諏訪の社頭の老樟の、虛こそ究竟なるべけれ。といへば然なり。と領きて、那里の樝はよけれども、先走の件當們に、見出されなば、爭何はせん。そも亦老尼がせん術あり。期に及ばゝ悟り給はん。却義通を生拘りて、這城內に閉籠置ば、義成怒て多勢を率て、當城を圍み攻むべし。防戰難義に及ぶとも、義通を縛めて、城樓に登し敵に示して、箇樣〳〵に喚らば、寄手は都て義通を、思ふの故に、箭も放ち得ず、銃丸も飛さで攻擊不便の、勢ひ折けて阿容〳〵と、和談にこそ及ぶべけれ。その折に思ひの隨に、何まれ那まれ誓盟して、義通と引換に、濱路姬を受取り給はゞ、事十二分の利運也。是より里見の武威衰へなば、上總を略し、安房をも降して、地を房總に開かんことの、企及びがたきにあらず。先那修復をいそがし給へ。期に後れては要なきに。と胸逞しく吹入む毒氣を、素藤諾なひ且感じ、且歡びて、別義に及ばず。次の日老黨頑八盆作、本膳碗九郎を喚聚合て、三社修復の計議あり。兩所の八幡、諏訪の神社は、賴朝以來の靈地なるに、頹敗既に久しきに至れり。宜く村長們に課て、速に修復すべし。就中諏訪の神社は、神水の奇特によりて、千百人の病疫の、必死を救れし神德あり。

に、宣はざりしを、傳聞の、謬もあるべき歟、是も亦知るべからず。徐に計らせ給ひね。とおそる〳〵諫るを、素藤は應もせず、童扈從に刀を拿らして、離根亭に赴きて、妙椿に件の趣を、告て亦復罵るを、妙椿急に推禁めて、噫益もなや。今這里で、飽まで罵り給ひなば、人に知られて、譏言の、媒にならんのみ。事尋常で整ずは、智をもて謀りて、本意を遂なん。左右を遠ざけ給はずや。といふに素藤目を注して、童扈從を退かしつゝ、亦復妙椿にうち對ひて、教諭の一言、愚意に愜へり。その計略は甚麼ぞや。と問へば、妙椿聲を低めて、然ばとよ听給へ。里見義成の嫡子と聞えし、太郎御曹司義通は、今茲甫十歳也。明年の春正月には、鎧の著初あり、と風聲す。就て殿臺の頭なる、正八幡宇佐八幡諏訪の三社を修復し給へ。土木の功をいそがして、今茲十二月に落成せば、よしを稻村へ訴て、初參を請ひ給へかし。安房にも亦八幡の、神社なきにあらねども、這里なる兩社と諏訪明神は、鎌倉將軍の時、勸請せられて、源家にわきて由緒あり。恁れば義成歡びて、その子の社參を諾はん。義通この地に來ぬるに及びて、伏兵をもて擒にすべし。その計較は箇樣々々、恁々の機變を旨とす。勿論童子の事なれば、四家老の内中、一兩名、守護して必倶して來つべし。杉倉木曾介氏元は、齢七十に餘るをもて、恁る伴には達べからず。堀内貞行、東荒川も、智勇凡庸の敵手にあらず。他們に機密を知られ

なれば、その門第相應しからず。且素藤は、初老の人也、我女兒濱路とは、二三十歲の長短あらん。恁れば年庚も相應しからず。只這障りのみならず、濱路は四個の女兒ありて、いまだ所緣を卜めぬに、女兒を超て先他を、人の妻に做すときは、順逆の理も亦錯へり。ここをもて那人の、需には應じがたかり。いといひがたき事なれども、いはで推辭ば疑れん。この義を以左も右も、宜く傳へ給はるべし、と仰られ候とぞ。千代丸殿もいかばかり歟、胸苦しくは思ひ給へど、右のごとき首尾なれば、思ひ絕させ給ひね、と稟せとて、某には、身の暇を給はりぬ。豐俊主もこの月下旬に、榎本へ還り給ふならん。といふを素藤聞あへず、忽地聲を苛立て、そは安からぬ事にこそあれ。人には時運盛衰あり。里見も初は安西が、食客より發跡て、山下を討ち、麿安西が、所領を奪略りしにあらずや。我も亦小鞠谷の、賊臣遠親を誅戮して、衆に推されて、當城の主になりたるその義その勇、誰か甲乙ありといはんや。なれども領地に大小あり、勢ひ同じからざれば、權且他が下風に立て、廳南椎津榎本の、三城主們が、野心を諭して、稻村へ、參勤を薦めしより、けふまで上總は無異なるに、功を賞する心もなく、獨みづから昂態て、飽まで我を辱めたる、這奴が廣言のいと憎さよ。いかにすべき。と敦圍くを、本膳並に近習們も、慰難て共侶に、おん理りに候へども、短慮は功を做しがたし。里見殿は爾ばかり

しを囁き示せば、大家倶に壽きて、そは歡しき事にこそ候へ。國主の爲には功をはします、相公の御所望ならんには、那里にも異議あるべからず。縁談既に成熟して、里見殿の壻になりたまはゞ、錦の上に花を添る、當家の繁昌疑ひなし。快吉左右のあれかし。と只管稱て已ざりけり。恁りし程に奧利本膳は、行裝を整て、伴當を將て、豐俊に趕著んとて、東西拿あへず、安房を投てぞ急ぎたる。這日又素藤は、八百比丘尼を留置く、離根亭に赴きて、榎本の城主千代丸豐俊を、媒妁に憑みたる、事恁々と報知して、我は里見に大功あり。月老も亦その人なれば、婚姻必成就せん。こは女菩薩の引接にて、美婦を娶れる歡びを、査し給へ。と說誇れば、妙椿頭を傾けて、そは然る所因もあるべきか、吉凶いまだ知り易からず。事倘成らずば、又別に、せん術もあらんかし。空歡びをなしたまひそ。といふに素藤興覺て、又いふこともなかりけり。是よりの後素藤は、稻村の吉左右を、今日歟明日歟と等つ程に、約莫五七日を經て、奧利本膳盛衡は、稻村よりかへり來て、素藤に報るやう、御所望の一條は、千代丸殿の云云と、骨を折り給ひしかども、事整ひ候はず。里見殿の宣ふやう、素藤拙女を所望の事、いかにせん障り多かり。婚姻は人の大禮、再しがたきものなれば、迭によくその門第と、年庚を擇むべし。蟇田は京家の人といへども、本貫家系詳ならず。我家は淸和源氏、大新田の嫡流

なきによりて也。しかるに里見殿の第五の息女に、濱路姫と喚做すあり。仇き折鷲に捉られて、甲斐國へ將てゆかれしを、那里の民に拯れて、民間に成長りたるが、去歳の冬、人に送られて、故郷へ還ることを得たり、といぬる日、ある人の噂に聞にき。正可に國主の女兒也とも、薄命にして、民間に、年來を歷たらんには、大諸侯は娶るべからず。某は又下民の情に、通ぜし妻を得まく欲りす。願ふは賢契我與に、這赤繩を繫ぎ給へ。いかでく。と餘義もなく、憑めば豐俊沈吟じて、そはこゝろ得て候へども、婚緣の事はしも、智辯も用ひがたき事あり。況某は世才なし。心もとなき事ながら、先那里の四家老に、談じて可否を試ん。老黨一名を某に、隸て稻村へ遣し給はゞ、尤便宜に候はん。有無の答はその人々に、示して還し候はん。といふに素藤點頭て、宜ふ趣その理あり。家臣奧利本膳盛衡、竝に淺木碗九郎嘉倶と喚做すものは、曩に稻村へ遣して、義成主に見參したれば、今番も又件の本膳を遣すべし。おん見を給はり候へとて、遽しく本膳を、召よせつ、よしを示して、豐俊に引汲し、千代丸殿に從ひて、安房へゆくべしとぞ命じける。要談既に果しかば、豐俊は傍難を、憚りて止宿せず。御家臣は、一日半日、後るゝとも路にて等ん、いそがし給へ。と期を推して、告別しつ、伴當を、倶して安房へぞ赴きける。爾程に素藤は、礪時願八、平田張盆作、淺木碗九郎們を召近著て、件のよ

まほしとて、是より妙椿を城内に、留めて敢外へ出さず、婀嬛毎を侍らして、管待大かたならざりけり。

第百一回

老尼計を薦て舊祠新に葺る
逆將人を樹にして公子衛を喪ふ

却說蟇田權頭素藤は、濱路姫を娶んとて、そが氷人をこゝろに擇むに、いまだ人を得ざりしに、有一日同國長柄郡、榎本の城主なる千代丸圖書介豐俊が、重陽の祝義に、稻村殿(里見義成)へ參勤すとて、伴當居多從へて、館山の城へ立寄ければ、素藤歡び對面して、盃を薦めつゝ、迭に無異を祝したる、語次に素藤は、豐俊に悄語くやう、言卒爾には似たれども、某已がたき志願あり。願ふは賢契を煩さん、甚麽承引給はんや。といふを豐俊聞あへず、そは何事歟知らねども、曩には和殿の敎諭により、割居の思ひを轉して、里見殿へ歸順せしより、今に至て後安く、城邑無異の歡びあり。それより以來好を累ねて、年來疎濶ならざるに、一臂の力を竭さゞらんや。我身に稱ふ事ならば、何事まれ承らん、快々示し給ひね。といはれて素藤うち含笑て、そは憑しきことにこそ候へ。然らば意衷をうち出さん。某久しく娶らざりしは、良緣

と急迫しく問へば、又うち笑て、俗に云、燈臺下闇かり。いまだ知召れぬ歟、件の美人は安房の國司、里見義成主の息女にて、濱路姫と喚做したり。義成主に女の子多かり。件の姫は第五女なれば、五の君となん稱られたる。仯き折、暴鷲に、捉られて生死存亡を、知るよしもなかりしに、遠く甲斐が峯にもて行れしを、那里の民に救れて、鄙に生育給ふものから、命運愛たく去歳の冬、甲斐より故鄕へ送られて、還らせ給ひぬ、と聞えたり。恁れば去歳より稻村の、城内にこそ在すめれ。那暴鷲の殃厄にて、痛ましや、民間に、成長り給へども、その進止鄙ならず。且容止の美しきも、胞姊妹達に優り給ふを、千里眼もて、洒家は認りぬ。因ておん身に薦んとて、聊術を施しにき。好氷人もあるべきに、娶り給へ。と唆誘せば、素藤憶はず雀躍して、噫歡し、嘻愛たし。件の美人は外ならぬ、里見氏の女兒ならば、我は國主へ孝順也。昔年野心の城主們を、歸服させせしを忘れはせじ。恁れば婣談成就せん、とは思へども等雯時、我身の齡良傾きて、既に四十の數に入りぬ。年庚相應しからずとて、嫌るゝことなからずや。といふを妙椿推禁めて、貴き賤き妹伕の緣しは、産靈の神の所行としいへば、年の多少に依らぬも多かり。況や相公は倘若くて、三十ばかりに見え給ふに、阽み給ふことかは。と慰められていとゞしく、空悅びの餘念なく、閑談に天の明るを覺えず。この事成就せん日まで、商量敵にせ

からんのみ。譬ば畫る美女を觀て、漫に胸を焦すより果敢なし。惑ひを轉して又更に、もの思へとての所行なる歟、事情を所まほし。教給へ。といそがすを、妙椿鈍や、とうち笑て、いまだ悟り給はずや。昔唐山漢の武帝の、鍾愛特に深かりける、李夫人早世したりしかば、武帝は哀慕に勝給はで、今一たび李夫人を、見るよしもがな、と歎き給ひしを、方士李少翁が慰めまうして、返魂香を燒しかば、煙の裏に李夫人の、姿權且顯れしを、帝親しく觀して、いよ〳〵悲み、ます〳〵歎きて、作り給ひし詩に、是邪非邪、立て望ば偏に何ぞ、姍々として其來ぬるや、遲かりけり、と誦し給ひぬ。乃これを樂府に命て、絲竹に合し歌せて、思ひを慰め給ひしとぞ、前漢書には見えたりける。又唐の玄宗は、馬塊原にて軍兵們に、絞られて亡にし楊貴妃を、其魂也とも見まくほし、と思召たるおん歎きを、いかで慰めまつらんとて、羅公遠が幻術もて、又楊貴妃を煙の裏に、見せまつりしといふ小說あり。虛實は安定ならねども、非除然る事ありとても、死したる美人を幻に、見なば想ひを增んのみ。寔に益なき所爲なれば、今宵は故意那兩個の、側室達を見せまゐらせず、世に在る美人を見せまつりしは、娶るに便りあらん與也。恁ても疑ひ給ふ歟。と解諭されて、素藤は、肇て夢の覺たるごとく、幾番となく點頭て、適微妙き善巧方便、しからば今宵見せられしは、那里の人の女兒ぞや、願ふは示し給ひね。

の新月の、赤石の浦に出るに似たり。小町態なる細腰は、風に靡く楊柳も及かず。衣徹像なる素肌は、龍腮の珠玉をや延けん。輝れる哉、玳瑁の櫛子、花あり蝶あり、白銀の釵兒。解かば身長にも餘るべき、翠の雲鬢、藹闌たる、綾羅の袂は目に赫奕て、陸奥山に黄金花開き、錦繡の裳は、地上に曳て、龍田の川に丹楓葉流る、秋波眄にして、愛敬溢れ、蓮步輕くして、羅綺にも勝ざるべし。千金擲つに厭ずといへども、玉音いまだ聽くことを得ず。神邪人邪、妖幻邪、正に是、沈魚落雁、閉月羞花の、妙年二八の一佳人。今これを看て、初て知る、盛短き朝貌も、果敢なく凋む夕顏も、夜光の前なる燕石ならずば、鸞鳳の傍なる、鳥雀なりき、と羞思ふ、素藤は魂浮れ、心蕩けて狂ふが像く、美人の側に衝と寄せて、抱き住めんとせし程に、手には拿られぬ煙と共に、形は滅てなかりけり。姑且して素藤は、やうやく我に復りたる、貌を急に改めても、尚疑ひの解ざれば、更に妙椿にうち對ひて、喃女菩薩、思ふに優たるおん身の妙術、久しく減りたる我胸豁けて、一霎時は慰められたれども、こゝろ得がたきは、その人ならず。我亡側室朝貌と、夕顏を見せずして、他們兩個に彌增たる、美人を見せしは、其麽なる故ぞ。今の世に像の如き、少女あらば、何をか歎かん。非除朝貌夕顏が、存命て左右に果るとも、他們には身の暇を取らして、見たる少女を妻にせん。恨らくは然る美婦人を、索る處な


妙ちん


妙椿夜返魂香を焼く

洞穴の事は、下回に見えたり。寓言といへども、本づく所なきにあらず。看官作者の用心を知るべし。

却説。この日も暮しかば、素藤は、先近習們に吩咐て、奥まりたる小室を、掻掃はし戸張を垂て、燭臺机案香爐なンどの、准備はやくも整ひければ、八百比丘尼を喚覺して、夕饌を羞めよとて、婀嬛們を遣せしに、件の比丘尼は熟睡して、叫べども喚べども覺ずといふ。左右する程に更闌て、はや子の半になりしかば、素藤焦燥、且疑ひて、みづから其首に赴きて、喚覺さんとせし程に、妙椿やうやく睡り覺て、水を乞ひ嗽ぎて、引れて出て來にければ、素藤ヤヤと喚近著て、女菩薩、既に那期になりぬ。那時まで等することやらん、久しかりき。と呟けども、妙椿騒がず微笑て、慌り給ふな、脱落は侍らず。准備の一室へ倶し給ひね。といふに素藤怒を復して、卒とばかりに遽しく、身を起しつゝ先に立て、一室に赴き、戸張を掲て、程よき處に坐を占れば、妙椿も後に跟きて來つ、机案に對ひて、懐より、香一裹拿出して、香爐なる火を掻起し、口に咒文を唱へつゝ、徐に香を薫らすれば、怪しむべし、左右に植たる、銀燭光を失ひて、朦朧となる隨に、馥郁として立升る、烟の裏に忽然と、顯れ出る美人あり。但見る、長短那身に稱ひて、材昂からず低からず。顔は三月の櫻花の、吉野の山に馨る如く、眉は仲秋

也。これを食へば、年を延て不老といふ。又携て家に歸れば、其女子迎歡びて、其衣帶を取りつ、因て人魚を袖裏に得たり。乃これを食へり。（蓋肉芝之類歟。）女子の壽四百歲、世に所謂白比丘尼是也。（原本漢文今假名をまじえてこれを錄す。）又諸國里人談（卷第三山野部）に云、若狹國小濱の空印寺は、八百比丘尼の住し處也。則御影あり、側に洞穴あり、其奧限りを知らず。土人云、當寺五六世已前の住持、この穴に入りて奧を揣るに、三日を經て、丹波の山中に出たりといへり。相傳ふ、むかし女僧あり。この處に住り。齡八百歲にして、其容貌十五六歲の壯美也。よりて八百比丘尼と稱す。里語に云、此女僧は、人魚を食ひし故に、長壽なりしとぞ。又鹽尻（或問帝王謚篇）に云、若狹國八百姫明神は（俗に八百比丘尼と云）何の神の子ぞ。答、其社記の詳なるを見ざれば、とかくいひがたし。但し古事記に、大年の神の子、羽戸山の神、大氣都比賣神を娶て、若沙那賣神を生給へるよしあり。蓋此神歟、といへり、見るべし。聞老志には、白比丘尼として、壽四百歲といへり。然を信景翁は、八百姫明神の事とす。いまだ孰か果否を知らねど、原是齊東野人の語に等く、虛實の詳ならざることかくの如し。顧ふに件の八百比丘尼は、唐山の小說に所云、李八百の亞流ならん。今この編には、但其綽號と、洞穴の事を借用するのみ。

るゝが、穏當にこそ侍るめれ。そは左まれ右もあれ、世になき人を幻に、見するは方士の術にして、佛の教にあらねども、我身深山に在りし時、料ず異人に傳授せられて、稀には人に施し侍り。相公の見まく欲りし給ふは、いぬる比時疫にて、共侶に世を去りたる、那朝貌と夕顔の、刀自達に侍るべし。今宵準備を做し給へ。見せまつらんこと易しといふ、意衷を透徹す、奇瑰の猜語に、素藤驚き、且歡びて、そは憑しき事にこそ。準備は何まれ整へん、誨給へ。と請問へば、妙椿答て、否、修法には、然したる事も侍らずかし。奥まりたる一室の内に、戸帳を深く垂籠て、机案に一箇の香爐を措くべし。恁て更闌る時候、相公は左右を遠ざけて、獨その一室に御坐しね。今宵丑三時候にこそ、那美女達を見せまゐらせん。只深信こそ肝要なれ。といふに素藤怡悦に勝ず、然らばその期になほ程あり。姑く緩坐給へとて、更に別室に席を設て、饗饌叮嚀なりけれども、妙椿推辭て多くたうべず、法衣を脱ぎ枕を乞ひて、傍に人のなきごとく、久く熟睡したりける。

作者曰、俗にいふ若狹の八百比丘尼は、その虚實詳ならず。按ずるに、奥羽觀迹聞老志(巻第十磐井郡十九)に云、若狹國に、白比丘尼と號する者あり。其父一旦山に入りて、異人に遇ひぬ。與倶に一處に到れば、殆一天地而、別世界也。其人一物を與て曰、是は人魚

衣を著て、黒き蟬羽像きたる、紋紗の法衣に、錦の袈裟を被たりける。此是一箇の尼法師、年來深山に在りし身の、恁晴がましき打扮は、偏歴の折、施主ありて、寄晋しけん、と猜すれば、亦怪むに足らねども、こも今更の事に覺て、うち目衛たるそが程に、比丘尼は軈て儲の席に、著んとしつゝ素藤に、揖をしつゝ、手に紈ねたる、數珠を徐に爪繰るのみ、又いふこともなかりけり。登時蟇田素藤は、八百比丘尼にうち對ひて、喃女菩薩、某は、當城の主素藤也。弓箭拿る身は、武勇の外なし、佛の道に疎けれども、法驗耳に轟きて、渴望の思ひ已がたかるを、幸ひにして我城下に、寶駕を枉らるゝと聞えしかば、猛可に請待したる也。おん身は女仙歟、觀自在歟。齢は既に八百歳の、久しきを保ち給ふにより、世の人稱て、若狹なる、八百比丘尼といふならずや。そも羨しき事ながら、不老不死の仙術は、學ぶといふとも速に、得がたくこそあらんずらん。しからば壽命を欲りするは、迂遠くて卽效見えず。時は今出來秋にて、采邑豐年の聞えあれば、雨を禱晴を祈る、奇特も亦今茲は要なし。只願しきは、世を去りたる、我側室們を見まくほりす、其麼その術あるべしや。と問へば比丘尼は點頭て、原來事皆人傳に、はやくも聞知り給ひしよな。我法名は妙椿なれども、世の人通て八百の、名を負せしは、玉椿の長生しぬる故なれば、九百になる折、名を更めて、九百比丘尼といふなるべし。然ば妙椿と喚

人は、八百比丘尼の、迎に出るに候はめ。といふを素藤うち听て、そは最奇しき事にこそ。我も欲するよしあれば、今宵はその八百比丘尼を、城内へ招きよせて、對面して虚實を試さん。よしを有司に傳示して、町人們に下知すべし。快々せよ。といそがして、軈て城樓を下りけり。爾程に、這舘山の城下なる町人們は、那活佛を迎んとて、迭に競ふて立出たるに、猛可に城主の嚴命あり、比丘尼をはやく城内へ、倶しまゐらせよ、と下知せられしかば、衆人齊一呆果て、こは什麼いかに、とばかりに、ほいなさ限りなけれども、鄙語にいふ啼く穉兒と地頭に克んよしのなければ、そが儘比丘尼の轎子を、城内へ舁入れて、然而役人に遞與しけり。現奇を好む人心、耳を貴み目を賤める、這城内なる老黨若黨、淺木碗九郎、奥利本膳們を首として、雜兵奴隷に至るまで、昨今聞知る比丘尼の法驗、誰か疎鹵に思ふべき、皆恭しく相迎て、軈て客房にて茶を薦め、果子もすゝめつ、非時料理の管待いまだ央ならぬに、近習們がはやく主の素藤に、件のよしを報しかば、奥にて對面すべけれとて、獨閑室にて等つ程に、姑且して八百比丘尼は、兩個の婀嬛に案内をせられて、素藤の身邊に來ぬるを、と見れば人の噂に違はず、齡千歳に近しとは、鄙語にいふ虚詐八百歟、面白く形痩て、雪を載たる呉竹の、嫋やかにして危からず、眼涼しく眉秀て、開後れたる秋の蓮の、馨やかなれども艶ならず。身には白綸子の夾

這と、城下の街衢を看亘す程に、衆人齊一奔走して、物を迎る似くなるを、素藤見つゝ訝りて、那は何ぞ。と尋れば、近習の毎答ていふやう、いまだ聞食れずや、他は日者世に名高る、八百比丘尼を迎るならん。といふに素藤倘こゝろ得ず、そは亦甚なる女僧やらん。とふたゝび問へば、然候、若狹に一個の老尼あり。うち見は四十あまりなれども、人その年齢を問へば、八百餘歳也といふなる、因て世の人、形貌若狹の、八百比丘尼と喚做たり。さばれ年來山蟄して、里へは毎に疎かりしに、衆生濟度の與にとて、近會猛可に立出て、諸國を徧歷し給ふ、と聞えしかば、貴賤渴仰せざるもなく、迎る地方に福あり。雨を禱晴を祈るに、感應灼然なるのみならず、病痾久しく身に迫りて、向死とせしものも、比丘尼の十念を受るときは、立地に本復す。定業にして瘥りがたきも、値偶するものは、病苦を忘れて、必成佛すといへり。そが中に一層奇しきは、人の妻まれ良人まれ、死して年を歷たりとも、哀慕の念ひ切にして、一番見まくほりするもの、よしを比丘尼に乞ひ稟せば、その亡魂を煙の中に、顯して見せ給ふとなん。ここをもて、過らせ給ふ里毎に、轎子をもてこれを迎へて、宿する家を面目とす。恁而件の八百比丘尼は、いぬる日當國に來ませしと云、風聲果して搗鬼ならで、昨夜は布善村に止宿あり、今日は這おん城の下の、本町へ迎るとて、今朝よりその事聞えたり。然ば目今欝する、那衆

所行ならねば、敢その非をいふものなく、居多の年を歴たりしに、文明十四年といふ夏、時候、素藤が愛おもふ、兩個の側室と聞えたる、朝貌と夕顔は、倶に時疫に犯されて、長沙の術もその効なければ、素藤太く駭憂ひて、恁る折には那神祠なる、水を拿り黄金を浸して、用ひば必卽效あらん、例の樹の水を汲拿せよとて、醫師に奴隷を從はして、諏訪の神社へ遣せしに、手を空しくしてかへり來つ、那樟の上なる虚は、那の程に歟朽拔けて、下なる虚とひとつになりぬ。恁る故に神水は、一滴も候はず。と報るを素藤なほ疑ひて、其頭の事にこゝろ得たる、近習をふたゝび走らせしに、あらずなりたる水なれば、その甲斐とてもなきものから、外の水には優すべき歟とて、件の社の頭なる、神手洗井の水を汲拿て、そを一提桶もて來にければ、素藤望を失ひて、心もとなく思へども、却已べきにあらざれば、黄金を多くその水に、一宿浸して、次の日に、兩個の側室に薦めしに、水異なればや、效はなくて、朝貌は朝開をまたず、夕顔も亦勝がたき、夏の日影に立枯れて、花なき宿となりしかば、素藤は左右の手に、持る眞玉を碎きし似く、心悶胸焦れて、哀慕の念ひやるかたなさに、盃にうち向ひても、憂ひを帚ふよすがにならず、歌舞艶曲も倒に、慰めかねつ、三伏の、溽暑は既に退きて、秋風涼しくなる隨に、垂籠てのみありけるが、一日悶を醫さんとて、兩三個の近習を將て、城樓に登りて那

黄金水の奇力もて、救れたるは、誰が恩ぞ。又那病疫のみならず、我はその折、金さへ貸て、他們が貪病をすら醫せしに、鄙語にいふ、雨霽て、笠を忘るゝ愚民の身勝手。爾る烏滸の白徒は、搦捕て首を刎よ。然らずは嗷訴已べからず、忽になせそ。と下知せしかば、有司們件の村長を、捕て獄舍に繋ぎけり。是にぞ駭きうち歎く、村長の宅眷、莊客們は、城主の家宰礪時願八、平田張盆作に内縁を求め、折に觸つゝ黄白を贈りて、只管恩赦を乞ひけるに、黄白の光はこの折も、黄金水とその效おなじく、村長は辛くして、死ざることを得たれども、そが莊役を拿放されて、所持の田園と家庫まで、都て沒官せられしかば、是より水も飲あへぬ、無下の窮民になりたるを、憐まぬものなかりけり。然ば城主の非理の徵の、素よりして多かるに、老黨願八盆作が、貪ることも尠からねば、約莫夷灊に在りとある、莊客も經紀兒も、慿ては故の小鞠谷殿が、優よしありき、と呟くのみ、那某甲の村長に、懲りて愁訴を做すものもなく、罪せられぬを幸にして、世は春ながら人心、憂は秋にもいやましたる、歎きの霧と共にたつ、月日を彌る釆邑の、民には慘き素藤の、心術素より表裏にて、稻村なる里見家へは、年始の參勤、寒暑の音問、年毎に怠ることなく、且鄰郡の城主へも、好を通じ、人情を虧ずして、最正首に交參ければ、この年來素藤の、驕奢の風聲ありといへども、そは内々の事にして、逆謀野心の

の知るよしもなく、結果けしは沒怪の幸ひ、恁ては後安かるべし。今は手下もあらずなりしに、近會は造化好くて、飽まで酒も喫がたかり。仕へて頭は支るとも、嚮馬にはなほ優すよしあらん。快々那里へゆくべけれ。と商議しつゝ宿所にかへりて、行裝を整るに、贈られたる金あれば、思ひの隨に打扮て、うち連立て上總なる、館山を投ていそぐ程に、約莫四宿あまりにして、件の城に來にければ、城主の故鄕に在せし折、舊好のもの毎也とて、見參を請ふにより、素藤こゝろ得對面して、仕を允し祿を與へ、幾程もなく登用して、老黨の上に在らしけり。又那麻蟇愚助は、單身にて、親弟兄もなきものなるが、嚮に密使に立られて、出てゆきしを知れるものなく、逐電したりと思ひしかば、その同僚們が商議しつゝ、事恁々と訴しを、素藤は知ず貌して、させる沙汰なく寢にけり。恁而件の顚八盆作が、蟇田の家の冢宰になりしより、主の慾を知ざることなく、なほも奢侈を薦めしかば、素藤いよ〳〵忌憚らで、春は花、秋は月觀の與にとて、猛可に土木の工を興して、課役に民の艱苦を思はず、又或時は、歌舞田樂の、舞臺なンどを造らするに、良材を擇み、奇石を集めて、費用を屑ともせず。恁る故に采邑の、租稅をます〳〵重くすれども、なほ足らざれば、借りて返さず。そを云云と訴て、宥免を請ふ村長あれば、素藤呵々と冷笑ひて、都て夷灊の民毎は、曩に熱病にて皆悉死ぬべかりしを、

て又、兩三稔を過す程に、手下の小嘍囉五名の內中、兩個は熊谷の曠野にて、武藝に長たる旅客を、剝んとしつゝ命を殞し、三個は亦時疫に犯されて、おなじ枕に死にけり。是より後は、願八と、盆作とのみ野に出て、なほも剪綹を旨としたるに、有一日又熊谷の曠野にて、武家の脚力にやあらん、獨ゆく旅客を、引挾み斫仆して、そが懷なる盤纏を略るに、金は三十餘兩あり、又竹筩に收めたる、書翰ありしを引出して、共侶に閱するに、思ひがけなき素藤が、願八盆作に與る密書にて、素藤は往歲、上總なる館山の、城主になりたる事の顚末を、詳に寫著て、曩に約束したるごとく、和主們我を棄ずもあらば、快來て我に仕へよかし。よりて路費として一裹、三十金を贈るもの也。今番この密使に命ぜしは、麻墓愚助と喚做たる、その性愚直の若黨なれども、這が口より和主們の、舊巢を人に知られなば、我與にしも宜しからず、結果て來ることそよけれ。努な洩しそ。とありければ、願八と盆作は、憶ず倶に頭を撫て、世話にいふ水の去向と、現人の久後ばかり、測りがたかるものはなし。然とは思ひがけざりしに、那人果して成す事あり、寔に得がたき造化なるかな。曩に苛九郞と旋風二郞が、云云といひし折、我們はそを否して、從ざりしを德として、這路費さへ贈られしを、なほ疑ふて、ゆかずもあらば、後に悔とも及んや。然るにても這旅客は、素藤主の我們を、招んとての使也とは、神ならぬ身




浮雲の富素藤酒色に耽る
願八盆作剪徑して舊好の書を得たり

塞ん與に、安房上總なる舊族名家の、子孫の民間に零落たるを、尋て城內へ喚とりて、叮寧に扶持したれども、そも眞實の所行ならねば、一霎時の程にて見かへらず。更に又思ふやう、當城の士卒們は、都て小鞠谷の舊臣にて、只勢ひに從ふのみ、商量敵になるものならず、要緊の時にはいかにして、一人也とも憑むに足るべき。曩に熊谷の頭にて、憶はずも再會したる、礪時願八平田張盆作は、倶に武勇に長たるもの也。且その心操も、我に孝順のよし見えて、旋風二郎苛九郎們と同じからず。約束したる事しもあれば、悄々地に他們を招きよせて、帮助にすべし、と尋思をしつゝ、痲墓愚助と喚做て、心ざま愚直なる、一個の若黨に、件の使を吩咐て、密書と一裹の金を齎し、よくその地方を諭などして、那熊谷の頭なる、二賊の隱宅へぞ遣しける。然ば又、礪時願八、平田張盆作は、曩に素藤を留めたる明の朝、伙家の頭領、非栗苛九郎と、桁渡旋風二郎が、殺されたるを見出して、うち駭きつゝ那這と、素藤を索るに、他が往方は知るよしもなく、剩一個の小嘍囉も、斫殺されて外面に在り。原來事皆素藤が、所爲なりけり、と猜するのみ、逃亡てより既にはや、時も移りしことならんに、趕ふとも及ぶべきにあらず。意ふに昨夜旋風二郎と、苛九郎が遺恨を演て、快那人を殺さん、といひしをはやく聞知られて、這禍に逢る也。と呟きつ小嘍囉們に、三個の亡骸を瘞させて、意に素藤の往方を索ねず。慤

幾日もあらで、館山に歸城しつ、里見の武威に憚りて、その機を攪んと思ひしかば、廳南の城主武田信隆、長柄の榎本の城主、千代丸豐俊、椎津の城主眞里谷信昭なゝど、陽には里見に従へども、陰には獨立の志ありて、稻村へ出仕せざりしを、素藤便直を旋らして、利害を說き和順を薦るにより、豐俊信隆信昭們も、倶に稻村の城へ參勤して、怠慢の罪を陪話まつりしかば、義成件の義を譽て、蟇田は當家に忠ありとて、東西を賜ること多かりければ、素藤是よりこゝろ驕りて、その行狀始に似ず、獨つら〳〵思ふやう、我計較皆當りて、如意ならざる事なけれども、恁无限賢良貌して、色にも酒にも親ずは、這郡縣を管領して、一城の主になりたる、百計千慮も、无益に似たり。料るに里見義實は、曩に隱遁の始より、政事に關らずと聞えたり。又當主義成も、素より愚將にあらねども、柔弱守文の後生也。然のみ憚ることかは。とみづから饒して早晩に、酒色の樂みに耽る程に、前代小鞠谷如滿が愛妾に、朝貌夕顏と喚做たる、兩個の美婦人ありけるを、そが儘側室になしょより、洞房花燭の酒宴快樂に、玉を炊せ桂を薪にして、敢財用の費を敷はず。恁ても尙厭ことなければ、艷曲歌儛に妙なる少女を、京鎌倉に徵め、左右に侍らして、歌はしもしつ、儛しもして、酒席の興をぞ添にける。素藤旣に奢侈を極めて、民の望を失ひければ、この事安房へ聞えやせん、と思ふて後安からず。人の口を

の石は、玉に似たり、犂牛の子は羊に似たり、賢奸いまだ知るべからず。他們が願ひに依るべき歟、意見什麼。と問給へば、四家老們倶に答て、御詮議に遠慮あり。然りけれども素藤が、大功は世に著れて、心の邪正は知るに由なし。且那士卒土民們が、望に儘せらるべきもの歟。異日野心の色見えて、行ふ所眞實ならずは、その折斧鉞を加るとも、才に一郡一城のみ、二總を併せし御武略もて、御征伐は輙かりてん。今功あるを賞せずは、人の議論を爭何はせん。臣們は迭に意衷を盡して、議したる處かくの如し。なほ又賢慮を旋らされ、しかるべうもや。と稟しゝを、義成聞つゝ頷きて、その議定に至極せり。水清ければ魚住まず、人察なれば友なしといふ、古語あるを忘れたる、我猜査は遠慮に過ぎたり。快々免許すべけれとて、その議に儘し給ひけり。恁而この次の日に、碗九郎本膳は、義成朝臣に見參して、素藤館山の城主たるべきよしの、下知狀を賜りければ、恩を拜し退り出て、館山を投てかへり來にける、歡びいふべうもあらざるべし。爾後蟇田素藤は、逆旅の裝ひ華やかなる、伴當多く從へて、稻村瀧田の兩城へ、初參の式禮、首尾整ひて、義成幷に義實主に、見參の折贄をまゐらせ、牽出物を賜りて、諭し示さるゝ箇條あり。國司の威風四下を拂て、頭を擡ぐべうもあらざれば、素藤憶ず背に汗して、禮に熟ざる暴夷の、言承の外所做知らぬ、進退殆困じたり。恁而素藤は、安房に逗留

て、虛實を探り、邪正を覗ひ、諭すべくは、諷諫て、悖逆の惑ひなからしめ、諭すといふとも從はずは、その折御征伐を乞まつりて、いかで先鋒たらまく欲す、是素藤們が情願也。是により兩個の陪臣、淺木碗九郎嘉倶、奧利本膳盛衡們、瑣小の土宜を獻呈して、おん旨を伺ふもの也。今よりして年毎に、二季の貢獻を缺くべからず。事一毫も食言なき、照據は慿こそ候へとて、家臣們が連署の起證文、一本をまゐらせて、只管免許を請にけり。是より先に義成主は、那小鞠谷如滿の、殘暴その聞えあるにより、事いよゝ寔ならば、自恣暴慢の罪を糾して、民の塗炭を拯んとて、先隱祕使をもて、虛實を探らせ給ひしに、既にして如滿は、家臣遠親に弑せられ、遠親は又諏訪の神主、蟇田素藤に誅滅せられて、一郡の民安堵せしといふ、事の注進ありし折、那素藤は、いぬる比、夷灊の民の病疫を、黄金水もて救ひしかば、土民の爲に愛敬せられて、諏訪の祝にせられたる、その事の顚末まで、はやく聞知り給ひしに、今又小鞠谷の家臣們が、素藤の功績を訴稟して、他をもて館山の、城主に做まくほしと請ふ、使者の口狀、誓書の趣、東六郎相辰が披露にて、更にその意を得給ひしかば、卽便新故の三家老、杉倉木曾介氏元、堀內藏人貞行、荒川兵庫助清澄をも、倶に閑室に召聚て、件のよしを評議あり。今番、小鞠谷の家臣們が請稟す、館山の城主の事、那素藤が事の趣、寔に賞すべしといへども、碔砆

包を、討て長挾を獲たりしと、我が遠親を誅戮して、夷灊の郡司になりたると、這那事は似たれども、時と勢ひと同じからず。今當城の士卒們は、我身の羽翼になるものから、又那金碗孝吉の、智勇に似たるものもなく、譜第恩顧の老黨に、杉倉堀内の如きものあらず。然るを里見に盾を築て、獨立割居の肱を張らば、そは大敵を招く也。姑く他に從ふて、徐に謀るにしくことあらじ、とはやく尋思をしたりしかば、隨使淺木碗九郎、竝に奧利本膳に、よしを示し、使として、准備の贄を齎しつ、安房の稻村の城へ遣して、里見の四家老、杉倉堀内、東荒川們に就て、今番館山の城の内亂を訌て、事恁々といはするやう、扨も當城の主、小鞠谷主馬介如滿は、年來暴惡の冥罰にやありけん、往日、家臣兎苍幸彌太遠親に擊れ訖ぬ。しかるに、蟇田權頭素藤と喚做すものあり、殿臺なる諏訪明神の、神職で候へども、文學あり、武藝に長たり、且心操慈善にして、人の憂ひを分つこと多かり。こゝをもて、義の爲に、那弑逆を見るに得堪ず、矢庭に降魔の利劍を振ふて、逆賊遠親を誅したる、其功寔に莫大也。この故に、小鞠谷の家臣、夷灊の士民們、推て素藤を主將として、倶に孤城を戍りて在り。是素藤が恣に、一郡の主になりしにあらず、いかで大方のおん隊に屬て、勉て忠義を盡さん與のみ。當國は遺もなく、曩におん手に入りたれども、倘野心の者なきにあらず。素藤奉公の手捌に、折々心を其頭に潛め

第九輯　卷之五

第百回

舊黨招に應じて士民益憂ふ　返魂術を異にして美人彌奇なり

却說蟇田權頭素藤は、奸計既に行れて、館山の城を獲てしより、先兎若遠親が、三族を誅戮して、その弑逆の罪惡を、他一人に負したる、陽にはいよ〳〵賢良貌して、先代の惡政を、改めずといふことなく、民を撫士を愛して、廣く施を好むに似たれば、誰かその內心を、褰時政、小王莽の、綽號負せんよしあり、と知るべき。年來小鞠谷如滿が、暴虐に凋敝たる、民はさら也、士卒們さへ、牛に馬を乘替たる、賢君なりき、と稱贊しつゝ、皆歡びて仕へけり。當下素藤思ふやう、我は他鄕の浮浪人にて、猛可に夷灊一郡の、主になりしを、當國の、武士們が娼くおもふとも、他們は才に一城の、小敵なれば、怕るゝに足らず。只左に就ても、右に就ても、侮りがたきは里見のみ。義實義成相續きて、既に上總を併呑したれば、當城も那麾下に在り。當初里見義實が、結城の城を沒落して安房へ流寓たりし折、神餘が與に義兵を起して、那逆臣定

君と仰ぎて、犬馬の力を盡すべし。おん見を給はり候へとて、軈て降參したりしかば、後方に從ふ城の士卒們、齊一千載をぞ唱へける。抑這一卷兩囘は、水滸傳なる王慶の、小傳の筆に擬したる歟。都て八犬士の事に干らぬ、肬贅の話に似たれども、是後囘の襯染にて、這事なくはあるべからず。畢竟素藤が奸計をもて、館山の城を横領したる、後の話説甚麼ぞや、そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

黨若黨幾名歟、兎苍遠親們を撃捕んとて、雑兵多く驅集めて、短鎗を引提、錑叉などを携えて、皆廣庭より稠入りしを、素藤譟がず、遠親の、首級を刃尖に串き持て、はや縁頬に立迎へ、既に近づく城の士卒を、差招きつゝ聲高やかに、當城の諸士、これを見よ。兎苍遠親謀叛によりて、その君如滿主を弑したる、天誅一霎時も借すべからず。不佞料ず諸士に代りて、既に遠親を撃捕たり。こゝをもて、當郡の民們我を推して、倶に城を守らんと欲す。是天命の歸する處、勢ひ推辭ことを得ず、權且當城を預りて、各々と共に事を謀らん。この義を許容せらるゝや。と詞巧に解示す。そが前後左右には、究竟の村人百名許、利鎌短刀を手に／＼持て、多勢を怕れぬ面魂の、侮りがたく見えたるに、當城の士卒們は、曩にその親族の、如滿の怒に觸れて、手討にせられしものもあり、然らでも嬖妾の與には費を厭はで、諸士の俸祿を優にせざりしを、いと恨しく思ふも多く、且素藤に惑されて、他を仁義の君子と稱て、尊信したるも尠からぬに、素藤が立地に、逆臣兎苍遠親を、撃捕たるを德として、都て歸順の思ひあり。登時當城の老黨、奥利本膳、淺木碗九郎と喚做すもの、事の勢ひを見て、阿容々々と、鉾を倒し刃を鞘にして、跪きつゝ答るやう、如滿暴戻年を累ねて、逆臣の與に弑せられ、嗣べき男女の子達もあらず。爾るに先生立地に、逆臣遠親を誅し給ひて、當家の與に大功あり。願ふは今より主




素藤巧みに館山の城を奪ふ

れに村人們も、局の內へ稠入りたり。登時兎苍遠親は、事の趣を聞えあげんとて、緣頰よりうち登りて、主の身邊へ赴くを、如滿は勞ひて、その義を听んと見かへる處を、遠親透さず腰刀を、拔く手も見せず如滿の、首を托地と擊落せば、吐嗟と駭く有司の每、やをれ幸彌太、亂心したる歟。主君を弑せし大逆無道、其處な退きそ。と罵りて、搦捕んと鬩きたり。當下遠親聲高やかに、人々いまだ悟ずや。如滿年來暴惡なる、苛政に堪ず、民皆叛けり。この故に我里見家の、密意に從ひ、この天誅を行ふもの也。濁を去りて淸きに就かば、俱に榮を子孫に傳ん倘なほ惑ふて狐疑なさば、皆如滿のごとくなるべし。快面縛して、降參せずや。と喚りつ、左右に當りて、躬方を憑みに戰ふたり。恁りし程に素藤は、假に掛たる綁縛の、索を手ばやく振解捐て、村人に持したる、刀を拿て、緣頰より、走り登るを、遣らじとて、拄る夥兵を物ともせず、右と左へ斫伏せたり。今この事の勢ひに、村人も亦起り立て、利鎌短刀を打振々々、俱に戰ひを幇助しかば、夥兵はさら也、有司們も、皆一齊に斫立られて、書院のかたへ逃走るを、遠親は趕捨て、引返し來つ、主の首級を、素藤に見せんとて、頭髻を抓み引提て、そが身邊へ近づき來ぬるを、素藤はやく見かへりて、乙と嚾て拔閃かす、刃の冴に遠親は、頸を擊れて、脚空ざまに、軀も撑と觔斗りて、濆る血は側なる、杉戸の蔦を染做せり。浩處に城內なる、老黨

理りめかして唆誘せば、遠親忽地心動きて、沈吟ずること半晌許、やうやくに頭を擡げて、先生の教諭、寔に理あり。卑職その德なしといへども。幸ひにして帮助を得ば、大事必成りもやせん。遮莫世に弑逆の、罪人となるを爭何はせん。といふを素藤推禁めて、昔唐山、周の武王とやらんは、その君たる、暴惡の、紂王を討滅して、民の塗炭を救ひしかば、聖人也、と稱らる。こは三尺の童子も知れり、誰か貴公を弑逆といはん。みづから決斷し給ひね。と説れて遠親再議に及ばず、竟にその議に儘せしかば、素藤は、又村人們にも、籌策を示し、暗號を定るに、大家都てそのこゝろを得て、假に素藤を枷結りて、その兩刀を持ものあり、又索を拿るものあり、この餘は都て、素藤が與に、領主に恩赦を乞ふと唱へて、鎌を腰にし、短刀を懷にして、倶に城内に赴きけり。恁而遠親は、外面に等し置たる、夥兵們を絡きて、素藤をば、村人們が、はや先だちて搦捕りぬ。よりて他們をも相倶して、是等のよしを聞えあげん。大家路次に心を屬よ。と實事しやかに言示して、舘山の城にかへり來る程に、はや黄昏になりにけり。爾程に、小鞠谷主馬助如滿は、兎荅幸彌太遠親が、素藤を搦捕て、牽もて來ぬるを、村人們が、歎きて恩赦を乞んとて、後に跟きつゝ推參せしといふ、事の趣をうち聞て、怒に堪ず、有司們に、燭を秉して、問注所の、上坐に出て來つ、先素藤を牽居さして、みづから罪を責んとす。事の紛

る折を等て、進退を定むべし。姑且洒家にうち任しね。といふを大家爭ひ難て、心もとなく思ふのみ、默止して時を移しけり。爾程に、兎巻幸彌太遠親は、はやく村長に內通したれば、速に素藤を落し遣りつらん、今はよき時候なるべし、と思ふ心を色にも出さず、夥兵四五十名を從へて、諏訪の社頭に赴きつ、先素藤の宿所の四方を、犇々と捕巻せしに、家の內には人居多盾籠りたるにやあらん、咳の聲聞えしかば、訝りて夥兵を禁め、獨背門より找み入りしを、素藤みづから出迎て、客房へ伴ひけり。その事の爲體、村長を首として、究竟の壯佼百名許、坐席の左右に羅列たれば、遠親は思ふにも似ず、呆れて找難たるを、素藤は懇勤に、上坐に席を譲りて、聲を愵めて談ずるやう、在下させる罪なけれども、小鞠谷殿に憎れて、緝捕使を給ふよし、尊公愵々地に告給はして、他鄕へ避よと誨らる、交遊の情義多く得がたし。なれどもこの身は惜むに足らず、憐むべし、這村人們が、非道の領主に撩役せられて、慿惡政に堪ざれば、必倶に他鄕へ走んとす。民人都て離散せば、明日より誰か畊さん。安房の里見に攻擊れずは、隣郡の城主に畧られん。在下尊公を相するに、極て一郡一城の、主になるべき、福艾の貴相あり。この折をもて箇樣々々、慿々に計り給はゞ、在下一臂の力を勠して、大事立地に成就すべし。是民の赴く處、天の與るを取らざれば、反て咎を受ることあり、深念を決め給へかし。と

を占て、那里に居宅し、はやくも不義の富に誇りて、我を刺る、と告たるものあり。今速に搦捕て、民の惑ひを醒さずは、後漢の米賊張角が、妖孼にひとしき事あらん。汝那里へうち向ひて、搦捕て牽もて來よ。立地に梟首して、那妖言の根を鋤くべし。愚民們倘悲み請ふて、妨になることもあらば、幵も悉搦捕りね、一人も漏すべからず。夥兵を居多倶していね。倘手に餘ることもあらば、斬棄にしても、けしうはあらず、快々せよ。と性急なる、君命推辭に由もなき、遠親は遽しく、言承しつゝ退きて、先隊兵を聚合けり。しかるに件の遠親も、嚮に愛子の難痘にて、命危かりし折、素藤に祈禱を請ふて、死ざることを得たりしより、只顧他を尊信して、交り遂に淺からず。その後又素藤に、金五十兩借ることを得て、他借の急債を贖ひしことあり。恁る恩誼の得意人を、緝捕使に命ぜられたる、心竊に困じ果て、いとうれはしく思へども、諫て听るべくもあらねば、よしを悄々地に村長に告知して、素藤を走らするに、しくことあらじ、と尋思をしつゝ、一封の密書を寫め、密使をもて、背善の村長許遣しければ、村長は、そのこゝろを得て、驚憂ひて、恁々と、村人に傳示し、皆共侶に素藤の、宿所に聚合ひ、衆議を凝らして、送りて堺を出さんとす。恁りけれども素藤は、毫も譟ぐ氣色なく、惴る村人們を推鎭めて、各々然のみ氣を悶給ふな。緝捕の頭人遠親は、我と斷金の交りあり、他が寄來

業因が子なれども、料ずも鬼語を听て、六百兩の金を惜まず、そを樹の虚の水に浸して、夷濡一郡の人の病疫の、死を起し生に回せし、陰德により陽報あり、其頭の土民に尊信せられて、恁る福を得たるなるべし。そはその胸に計較ありて、眞實陰德ならねども、人を活すの功あれば、善報なしとすべからず、况眞實慈善にして、施を好むもの、勉て人畜の救厄と、放生を旨として、久しく德を積むことあらば、善報子孫に及んこと、亦何の疑ひあらんや。惜むべし、素藤も、足ることを知り分を守りて、その技玆に止らば、他が親の積惡を、償ふよすがなるべきに、奸計その圖に當りしより、止る處を知ずして、後竟に身を殺す、天誅を免れがたかり。然ば世の人、一善を行ふときは、必一善の果報あり、又一惡を行ふときは、必一惡の果報なきことを得ず。善惡の應報は、宛環の輪るがごとし。小人の僥幸は、氷の山雪の佛、久しからぬを知るべきのみ。閒話休題。爾程に、館山の城主、小鞠谷主馬助如滿は、蟇田素藤が事の趣を、恁々と傳聞て、怒ること大かたならず。一個の老黨、兎苍幸彌太遠親と喚做たるを、身邊近く喚よせて、敦圉き猛く吩咐るやう、若們は、いまだ知ずや、近き比より我采地に、蟇田權頭素藤と僭稱したる、一個の尷尬兒あり、をさ〱愚民を惑して、怪談妖語、いはざることなく、神を藉り鬼に托して、邪術を行ふと聞えたり。加旃恣に、諏訪の神社の祝になりて、社地

ずとて、全村速に商議して、轎子をもて素藤を、村長の宿所へ請容れて、日毎の饗饌大かたならず。願ふは杖をこの地に住めて、徳を一郡に施し給ひねとて、全村請で已ざりければ、素藤は、計策、成りぬと思へど、故意澁りて、屢請して承引けり。是により、村人們は、又商議して、那諏訪の神社には、目今祠官絶果たり、大人を那里の神主にせば、神慮にも稱ふべしとて、よしを素藤に告げ、錢を集めて、件の社地に家を造作り、其里に素藤を請移して、命を听くこと、皆謹て、歸依のものいよ／＼多かり。是よりして素藤は、母黨の氏を冐して、蟇田權頭素藤と名告りつゝ、心にもあらぬ神に仕へて、加持祈禱を宗としたるに、その法術を知ざれども、信ずるものの心もて、極めて効驗ありければ、いよゝ神仙と稱へ、尊敬して、敢その誨によらざるはなし。こゝをもて素藤は、奴婢七八名を仕ふことを得て、萬事に毫も不自由あらず。既に五六百金を、村人們に貸たれども、なほ數百金の貯祿あれば、利子の多少に拘らで、乞ふものあれば又貸けり。是等の趣早晩に、舘山の城内にも聞えしかば、小鞠谷の家臣們も、素藤に加持を請ふて、難病速に瘥るもあり、或はその金を借りて、貧病立地に安きもありけり。素藤貨殖の人ならねども、士農工商尊信して、東西を餽るも多く、借財も期を違へず、返さゞるものなかりしかば、才に一稔許の程に、村に一二の富家となりぬ。意ふに這素藤は、山賊但鳥

九郎を先に立つゝ、諏訪の神社へ皆聚來て、素藤によしを告、歡びを演徳を稱へて、黄金水を汲んと乞ひけり。當下素藤は、衆人にうち對ひて、病著既に痊たる者は、樹に登り神水を汲拿て、全村に配分せよ。そが中に貧くて、飢渇に及ぶ者あらば、我豫、樹の虛に措く處の、圓金一枚を貸すべきぞ。或は貪りて、多く拿んと欲し、或は貯祿ありながら、倶に貧窮のおもゝちして、一枚なりとも私せば、神水の効なきのみにあらず、神罰立地にその身に及ん。この義を怕れ愼むべし。といふに大家跪きて、仰うけばり奉りぬ。いかでかは然る不義をせん。快々水を賜りね。と連りに乞ふて已ざりけり。爾程に、病著痊たる者幾名歟、准備の索階子を手繰出しつ、樟の大枝へ投掛て、手繰に水を汲拿て、衆人に遞與すにぞ、老幼男女受歡びて、飲めば立地に病著痊けり。或は病勢劇くて、起出ること得ならぬものには、その家族隣人が、准備の小罇、箭壜へ、汲入れし水を遣して、飲するときは病惱退き、一霎時の程に、痊可に及べり。只この歡びあるのみならず、貧しき者には、乞ふに儘して、圓金一枚を貸れしかば、漸々によしを傳聞て、陸續して聚ひ來るもの、兩三日は、晝夜をわかず。その汲拿ること多かれども、虛なる水の竭ざりければ、この折夷灊一郡の、民皆生ることを得て、貧しき者は、朝夕の、薪水の價さへ添られたれば、貧病も亦養ふよすがあり。這再生の大恩徳を、報はずばあるべから

措きたる徽なれば、水と倶に和郎に拿せん。貧き者は這里へ來て、水はさら也、金をも拿るべし。しかれども人別に、一枚の外を許さず。この義を限なく傳へよ。と叮寧に教諭して、件の水を飮しにけり。現熱病の劇しきものの、邪熱腸胃を焦す折、黃金一味を水に煎じて、冷るを等て飮すれば、よくその熱を治することあり、然ば素藤が鬼語を聞て、儀の如くに做す處、自然と其方に稱ひたりけん。褚九郎は、件の水を、受戴きて飮たるに、時を移さず快然と、心地淸やかになりしかば、雀躍したる不勝の歡び、素藤を神とし拜みて、感涙坐に拭むを覺ず。且して頭を擡げ、小可們幸ひに、慈悲廣大なる大人に救れて、藥水卽効あるのみならず、海士が鹽燒く辛き世に、圓金一枚惜氣もなく、貸給はせる德義大仁、おん身ならで誰かあるべき。年々小鞠谷殿に責拿られて、全村困窮せざるもなきに、剩流行病にて、飢渇に及ぶもの多かり。小可們も朝夕の、煙絕なんとせし折なれば、辭はで御恩を受まつらん。噫歡しや、慙愧し。はやく退りて黃金水を、親胞兄弟に戴せん。然しても餘らば、四鄰の人に、分與て、その毎と、倶に復こそまゐらめ。と歡びを演べ、勇立て、かへさは杖を忘れにけん、只壜をのみ携て、家路を投ていそぎけり。恁て又一晌許經る程に、那黃金水を受飮て、その病ひ瘥たるは、小罇柄杓を准備し携え、いまだ飮得ざる者は、手に〳〵携る杖頭に、小壜竹の箭なゝどを。掛て褚

旨とし給ふやらん。と問返されて、素藤は、找みよりつゝ頷きて、我は原是京家の浪人、卜部某乙と喚做すもの也。陰陽の術、醫療の神方、先祖相傳の祕錄あり。こゝをもて、世に萬人の災厄を、救ん爲に諸國を、遊歷して這地に來つゝ、いぬる日、這舘山の城下にて、歇店を求んと欲せしに、戸每は皆時疫に、病臥したりとて、承引ものなし。已ことを得ず這神社に、通夜してその夜を曉す程に、憶はず神の示現を蒙り、この社頭なる大樟樹の、虛に神水あるを知れり。その神水に黃金を、浸すこと一晝夜にして、件の水を汲拿て、はやく病人に飮すれば、病疫立地に痊ること、箒の芥を拂ふより易かり。我幸ひに那這にて、受たる謝物多くあり、その金を咸那木の虛へ、投入れ水に沈しつ、却村人の來ぬるを等つこと、既にして三日に及べり。和郎は、身に病ひあれば、那大枝に登りがたからん。先我水を汲て得させん。その身は這里にて、試喫むべし。その餘は家にもて還りて、親胞兄弟に薦めなば、死を起して生に回へし、壽を增し老に至ることとなし。そは和郎一家のみならず、全村の病疫を、驅除んこと疑ふべからず。いで〳〵。といひつゝも、用意をしたりけん、神酒壜の口缺たるを、社壇の下より拿出し、そを携て、樟樹の、大枝に攀登りて、壜を虛に推入〳〵、虛なる水を十分盈しつ、又底深く手を入れて、圓金一枚拿出し、徐に樹下へ下り立て、然而褚九郎に示すやう、這金は那神水に、浸

はなほ輒くて、准備はやくも整ひければ、又那這と見つゝ巡るに、這本社の後には、老て大きなる栗樹あり、折から冬の肇なれば、落たる栗子、朽もせで多かり。こは究竟、と拾掇りて、燧を拿出、落葉を裒て、炙りてこれをうち喫ふに、三飡の飢を凌ぐに足れり。恁而這神社に詣來ぬる、村兒も欲得と等たるに、全村都て病臥たればや、詣る者もなかりしを、なほ等と等程に、第三日といふ朝、辰牌時候に、病皾ひたる一個の後生、竹杖に携りつゝ、辛うじて詣來ぬるあり。その人拜殿にうち朝ひ、掌を鳴らし額をつきて、默禱約半晌許、やうやくに身を起して、かへり去らんとせし程に、素藤、ヤヤと喚禁めて、和郞は、什麽、何里の人ぞ。重病いまだ瘥らでや、行歩難義の爲體を、我外ながら見るに忍びず。我に仙傳の良藥あり、人の病疫を救ん與に、諸國を遊歷すること久し。その病著を救ふべし。といはれて件の後生は、訝りながら素藤を、つくぐ\とうち目戍りて、そは歡しき事にこそ候へ。小可は、程遠からぬ、上輩善村の莊客、礫谷沙八が孩兒にて、褚九郞と喚做すもの也。今茲は時ならぬ病疫にて、全村枕を擡るものなし。我家は、上に二親あり、下に弟あり妹あり、皆大病に犯されて、鍼灸藥餌も驗なく、露命旦夕に逼りたり。そが中に小可は、病痾聊間あれば、辛くして這御社に、詣て親胞兄弟の、病鬼退治を祈るもの也。抑おん身は、何國の大人にて、然る神藥を傳受して、作善を

嗚呼なる事を。と歎息きしが、是よりの後、怪物の、問答寂と音絶て、簀子の下に鳴く蟋蟀の、聲のみ幽に聞えけり。素藤は憶はずも、怪物のうち相譚ひし、その事の趣を、現ともなく聞果て、且驚き且怪みたる、肚裏に思ふやう、今宵外面より來ぬる物の、玉面嬢と喚かけて、問答に及びしは、世にいふ疫鬼ならん。又玉面嬢と喚れしは、則是木精にて、那樟樹の精靈にやあらん。聞くが如きは這地の民の、今時ならぬ病疫は、城主小鞠谷如滿の、悪政非道の所以とかいへば、我那民の病疫を、救ふて恩を施さば、必我を德として、竟に羽翼となることあらん。人望我に傾く時は、那如滿を推仆して、我舘山の城主とならんも、亦その折の運によるべし。小錢倘よく捨ずもあらば、いかにして大利を得んや。噫、よき事を聞ぬるかな、と胸に計較む祕密の魂胆、曉るを遲し、と等程に、約莫二晌許にして、鴉の茂林を離るゝ聲、那這に聞えけり。登時素藤は、行裹に收めたる、五六百兩の金を皆出して、百兩毎の封皮を折き、そを小袱に包み携て、大樟樹の下に赴き、左右して攀登るに、爾る技に熟たれば、一丈許上にて分れし、六岐の枝に乗ることを得て、先その枝の間なる、虚の中に手をさし入れて、底の深淺を試るに、その水の冷やかなる、骨に徹りて堪がたく、辛くして指さきの、底まで屆きたりければ、慿ては心安しとて、小袱なる居多の金を、遺もなく木の虚なる、水中に沈ましつ。枝より下る

樹下の好歹を、大檗は知れるならん、その義を問ふて、進退を、定めんと思ふのみ。といへば樹下の物答て、我も亦安房の國主には、最堪がたき怨あり。いかで遺恨を復さん、と思ふものから爭何せん、那國主里見父子は、智勇兼備の名將にて、賢を愛し民を憐み、内に酒色の驕奢るなく、外に苞苴の貪婪なし。君正くして臣忠なり。我この故に便りを得ず。和老那里へ赴くとも、痰毒決して行はるべからず。且這地の民毎病臥たれども、いまだ一人も死したるものなし。是その時にあらざる故に、病の勢ひ緩からずや。といふを外面の物聞あへず、いかでかは爾るよしあらん。見よ、今より旬日を等ずして、死する者半に過ん。城主如蒲の非道なる、神は怒り、人は恨みて、這禍を致すといへども、民はなほ神佛を、深信の者尠からず、譬ばこの神社の如き、祭奠の禮既に廢れて、酷く頽破に及ぶものから、尙神威あるに似たり。こゝをもて、我その注連を越がたかり。那病勢の急ならぬも、又只是等の故なりき。といふを樹下の物冷笑ひて、神の靈威はとまれかくまれ、這樹の虚には神水あり、黄金を浸す事、一晝夜にして、這水を、病人に飮しなば、病著立地に瘥り果ん。倘この理を知る名醫に遇はゞ、その折和老誰何するや。といふを外面の物推禁めて、否然る事はいはずもあれ、縱そを知る醫師ありとも、這頭の民は、領主の爲に、年々に譴拿られて、圓金一枚持るはなし。あらばその折當處を去らん。

俗通に本文あり、城門火を失すれば、禍池魚に及ぶが如し、もて誡となすべきのみ。間話除繁。爾程に素藤は、この折夷灊郡に來て、晋善村を過る程に、冬の日の暮るゝにはやくて、黄昏時候になりしかば、歇店を求んと欲するに、村人都て病著あり。但聞病惱呻吟の聲、戸々に絶ざるのみ、宿借すべくもあらざれば、素藤殆困じ果て、せん術のなき隨に、露宿をせん、と思ふにぞ、殿の臺の頭に來つゝ、諏訪の神社あるを見て、只得く社頭に拚み入るに、鷄栖の側に、大樟樹あり、稀なる老樹也ければ、胆を潰しつ、鵠立て、觀ること約莫半晌許。既にして暮果ければ、軈て社壇にうち登りて、一夜を這里に曉さんとす。四壁酷く荒たれども、必由緒ある大社とおぼしく、本社拜殿の作りざま、凡庸ならぬも人詣ねばや、檐傾きて、甍を墜し、柱斜に、簀子は朽ても、有繋に雨露を避るに足れり。既にして小夜深ては、森々たる茂林、月を洩さず、寂寞たる廟宇、露最寒かり。睡られぬ隨にいとゞしく、長く覺る冬の夜の、丑三時候にやあらんずらん、忽地外面に物ありて、玉面孃々々々、と喚ぶ聲す。登時大樟樹の下歟とおぼしく、來ぬる者は誰と問ふ。外面の物答て、我は是疫鬼也。秋より後は我黨の、生旺の折にあらざれども、今茲は殊に溫暖なれば、這頭を聊徘徊して、土民を多く病したり。今より安房へゆかまく欲す。和孃は近き比までも、久しく那里に棲たれば、國主の賢不肖、政事

みあり。抑件の背善村は、上背善下背善の二村あり。薛々利も亦背善村の屬村にて、當時は民屋一千餘戸あり。この時舘山の城主は、小鞠谷主馬助如滿と喚做て、夷灊一郡の領主也。這舘山と號する城は、當時上總にある處の、二十六箇城の外なれども、數代の舊家なりけるに、如滿は、父祖に肖ず、常に酒を嗜み色を好むが爲に、課役租稅を重くして、民の困苦を見かへらず、その愛妾の首飾と、衣裳に千金を費せども、釆地なる神社佛閣の、酷く頽破に及びしを、只管に訴て、敢修復を乞ふものあれば、嗷訴也、淫祠也とて、その訴たるものを罪して、神田寺料を奪ふこと多かり。この故に、那背善村の邊なる、八幡諏訪の神主も、他鄕へ走り、跡斷絶して、狐兎の棲になりにたる、非道を神の祟にやありけん、是年の冬十月の肇より、小鞠谷如滿の釆地にのみ、時疫暴に流行して、病臥ざるものなかりけり。都て疫癘は、春夏の、間にこそ流行すなれ、冬に至りて爾る病著の、多く行はるべくもあらず、と看官思ふもあるべけれども、安房上總の兩國は、東海陸地の盡處なるに、且山を背にして、海に向ひし國なれば、冬暖にて春寒かり。土人その春寒きを、倒寒と喚做したり。然でも何國も初冬は、最暖なるをもて、世に十月を小春と唱ふ。況上總は暖國也、十月小春溫暖の折、時疫なしとすべからず。又只この理のみならで、かくの如き病疫は、領主のみづから招く所、罪なき民に及びしは、風

この年の冬、十月の初旬に、夷灊郡、舘山の城下なる、普善(今の布施村は是歟)と喚做す村に來にけり。這地は壽永元暦の年間、鎌倉將軍(賴朝)の功臣なりける、上總介平廣常が、舘ありし處也。然ばにや、今も舘山の名は遺りて、殿の臺と喚做たる處もあり。又蘇々利といふ村あり。(今は硯村に作る)昔賴朝卿の、梶原景時に賜りし、名馬磨墨は、這蘇々利より出たりといふ。然ば廣常が、幕下へまゐらせたる馬なりしを、梶原に拿らせ給ひしならん。又殿の臺より東に、宇佐八幡の神社あり、こは上總介廣常が、宇佐の宮を移せし也。又西のかたに、正八幡の神社あり。こは廣常が讒死の後、鎌倉より建立せられしなるべし。又南のかたに、諏訪の神社あり、この社頭に、最大きなる樟樹一株あり。又同國長柄郡、上鄕村なる、諏訪の神社の側に、在る處の大樟樹と、這那都て一對にて、その巨大十八圍ありと云、根抵半は石に化したる、幹は中心腐朽て、その虛になりたる處、宛洞𡉏に相似たる、内中に數人を坐しむべし。且その枝葉婆娑として、毫も日の光を洩すことなし。慿て地を距ること、約一丈許にして、大枝六岐に分れたる、その間にも穴ありて、毎に雨水を湛たり、旱天の折も涸ずとぞ。ここをもて上總人は、上鄕村なるを雄樹として、普善村なるを、雌樹也といひしに、惜むべし、普善村なるは、何の年間に歟枯果て、件の社頭に松杉の、年老ていと大きなる、合抱のものの

る〻趣こゝろ得たり。鎌倉也とて由縁はなし、名高る都會の福地なれば、世渡の所由あるべし、と思ひしは空憑にて、鈍や望を喪ふたり。しからば楫を拿直して、上總へこそゆくべけれ。明日その船を憑むのみ。といふに小二は再議に及ばず、こゝろ得果て退りけり。恁而素藤は、その詰朝、件の出船にうち乘りしに、折から順風也ければ、十七八里の海上を、只一日に走らして、その夜象良津に來にければ、歇店を定めて歷覽するに、網引漁獵る浦の光景、いと珍らしく興あれば、一日二日と過る程に、肚裏に思ふやう、我身這地に由縁もなし、坐して食へば箱も空しといふ、世の常言もあるものを、盤纏に匱しからずとて、使ふて減らぬ金錢あらんや。そを虛々と旅宿して、明し暮すは愚魯也。安房の國主、里見氏は、賢を愛し士を招く、と人の噂に聞しかど、那里にも亦由縁はなし。我身をいへば、近江なる、山賊の獨子にて、只是刑餘の簀下草也。些の力量武藝あれども、一番も戰場に、莅て物に遇ひし事あらず。恁れば何を得意にして、那里に仕を求むべき。是も亦要なき所行也。所詮本州の貧民に、錢を貸し利を廉くして、恩を施し交を、結ばゝ做す事ありもやせん。そも亦紹介する友なくては、輙く人に談じがたかり。且身の落著く處を定めば、帮助る友のいで來もせん。先や便宜の地方を擇て、膝を容るゝにしくことあらじ、と主意既は決りければ、亦復上總十一郡を、隈もなく徧歷る程に、

かば、其頭の飯店に宿を投て、その夜鎌倉の光景を問ふに、店小二が答ていふやう、近會は、山内の管領様も、相摸の北條家と戰絶ねば、那里の神社佛閣も、年々に衰微して、今は昔の鎌倉にあらず。且藤澤にも腰越にも、新關を建られて、他鄕より來ぬる遊歴人を、容られず、と聞えたり。恁れば客人、鎌倉へ、赴き給ふとも自由を得がたし。況世渡りの便著なンどに、なるべくも候はず。倘世渡りの便著の與に、遊歴せまく欲りし給はゞ、安房上總に優す地方なかるべし。近屬安房の里見殿は、神餘の與に義兵を起して、山下定包を、討滅し給ひしより以來、安西麻呂の兩敵も、朝日に霜の消る似く、幾程もなく亡びたり。然ば上總の城主達も、威風に靡き好を通じて、那手に屬ずといふものなし。只その武略のみならず、民を憐て、租稅を重くせず、賢を愛して、世傑を、徵め給ふと聞えたり。義實主はいぬる比、瀧田に隱居ましくて、今は嫡子安房守、義成朝臣の世なれども、亦是稀なる賢君にて、廣く仁政を布き給ふにより、上總はさら也、下總まで、半分はおん手に入りぬと聞にき。客人然でも鎌倉へ、ゆかんとならば薦めまうさず。倘安房上總へ赴き給はゞ、這浦より上總なる、象良津へ出船日毎にあり。翌の旦開に附船して、乘走らし給ひなば、一日にして、坐してゆくべし。この義は誰何。と眞實達て、いふよしその理あるに似たれば、素藤は沈吟じたる、頭を擡げ小二に對ひて、いは

く程に、尿水に獨起出たる、手下の賊が背門に立て、黎明近き晃星を、うち仰ぎつゝ身戰ひしつゝ、淨手し果て、再寢の床に、はやく入らんと、眼包磨る、撞見頭に素藤と、鼻突合し、驚として、兩三步跎逞々と、令丁ながら、阿と叫ぶ、聲も引せず素藤が、引拔く刃に胴斫の、大腸出る血潮時、天にも聽てあから引く、東向の背門の戸も、鎖はせざる強人の、宿を脫るゝ強人は、往方も知らずなりにけり。

第九十九回

素藤鬼語を聽て黃金水を施す
遠親邪說に惑て舘山城を鬧す

再說。源金太素藤は、那願八盆作が、睡眠覺なば、手下を倶して、我を趕蒐來ぬらん、と思へば路の好歹と、凸凹を擇むことなく、東を投て走ること、約一里有餘にして、天は耿々と明にけり。這里は里人の居宅間なき、鸛巢の驛なれば、仇を禦ぐに便あり。妖怪と強人は、夜こそ己が自由を得たれ、照日隈なき市中にて、那奴們我を何とかせんや、と心おちゐて、經紀兒の、廛に立より、飯を求め、酒さへ喫て憩ふ程に、日はいと高く昇りしかども、願八們は趕ても來ず。是より亦復路次をいそぎて、次の日は武藏なる、柴濱まで來にける折、はや黃昏になりし

て、身裝して行裹を、斜に背へ投掛て、胸にて楚と引結び、怕と一刀を腰に帶て、偸歩しつゝ近著て、坐席の動靜を覘ふに、願八と盆件は、臥房に入りて睡りにけん、只苛九郎と旋風二郎のみ、衣も被がず醉臥して、甲夜の儘なる盃盤狼藉、燈燭の光幽なり。素藤は這光景に、折こそよけれ、と思へども、なほも睡息を覘ふに、樽より出せし熟柿に似たり。恁ては心安かり、と獨含笑む大胆賊情、先苛九郎が枕方なる、酒壜を拿抗て、振試るになほ酒あり。傍の茶碗も引よして、兩三椀に喫竭したる、茶碗を措て、四下を見るに、苛九郎と旋風二郎が、山刀二口あり、一刀々々に引抜見れば、孰も燒刃微妙にて、鋭刀なるべく思ふにぞ、其が中の、特に愛たきを、鞘に收めて腰に挿副え、餘る一刀を引提て、弗と吹滅す燈燭の、烏夜に迷はぬ左右の手配り、先苛九郎が枕方に、探寄つゝ胸前を、左手に押へて愚然と刺す。勢ひ宿鳥を射るごとく、一刀にて息絶たる、頭顱を軈て搔落して、又旋風二郎を愚然と刺す。殺伐都て右の如く、又搔落す、旋風二郎が、頭顱を抓て苛九郎の、軀の邊に捐措きつ、又苛九郎が首を拿抗て、そを旋風二郎が枕方へ、遣違したる無慙の遊戲、血刀簀子に突立棄て、兩箇の首を置土産、這世那世へ行客の、入船あれば出船あり、尻に帆掛て走らんとて、搔探りながら外面へ、出て雨戸を開く折、甲夜に緣頬に置れたる、菅笠あるを見出して、こも我東西ぞ、と引提て、背門より出ん、とゆ

三日這里に留めて、胸を撈らば、漆下板見れん。然而那折の虚と實を、知るよしありて、和主們が、目今論ずる如くならば、倶に手段を旋らして、結果るも、遲きにあらず。且我們に儘しね。と只管禁めて已ざりければ、苛九郎も、旋風二郎も、そを爭んはさすがにて、腹立しさの茶碗酒、手酌に壜を傾けて、喫むこと數碗に及びしかば、睡滾つゝ醉臥して、喚べど應ぬ苛九郎、重き天窓の旋風二さへ、又起べくもあらざれば、顚八と盆作は、術生醉と、奈末餘民の、腕に換よ。と木枕を、這那兩個の頭の下へ、刺入れて、卒と次の房へ、退りて睡りに就きにけり。然ば這坐席より、素藤が臥房なる、小室へ遠からぬに、素藤は始より、毫も睡らざりければ、件の苛九と旋風二郎が、議論の趣、その餘の事まで、大かたならず听拿りて、且驚き且怕れたる、肚裏に思ふやう、我身膽吹を脱れ去たる、那折の計較を、那苛九郎と旋風二奴が、猜し得たれば、怨讐の、思ひを做すは然もあらん。幸ひにして顚八と、盆作が諫禁めて、既に逼りし菑害を、免れ得たるも一霎時の程にて、明日倘一致せられなば、主客の勢ひ同じからず、四個の敵手を單身にて、防ん事は難かるべし。所詮天の明るを等たで、悄々地に這里を立去りて、遠く他鄕に走るにしかじ、とは思へども做す事もなく、我身この儘逐電せば、那密譚に听怕して、はやくも影を躱せしとて、亦那奴們に笑れん。要こそあれ、と歹人根性、潛やかに起出




紙戸と隔て
偷聞を
妙作

きしも前後不都合、必是搗鬼にて、那卒八がかへり來ぬる折、那奴は京師の凶變を、いまだ伙家へ知せずして、はやく源金太に報たるならん。こゝをもて那後生は、親の有財を利せん與に、件の變を伙家に祕して、有ん涯りの金錢を、攫ひて術よくいひ誘へて、卒八をのみ從へて、山寨を沒落せしならん。然ずは今さら、那後生が、蟠纒多かる該はなし。といへば又旋風二郎も、割膝を拊、聲を低めて、非栗哥々の意見は妙也。那後生の奸智に長しを、おもへば那折有財を、伙家へ配分せざらん與に、知りつゝ支黨一百人を、棄殺しにしたる也。よりて思ふに、那折に、緝捕使の大將に、己が生死存亡を、知せじとての伎倆もありけん。然ば凶を避て吉に趨る、進退を知りながら、伙家の安危を見かへらず、獨命を免れん與に、支黨一百餘人を賣たる、那奴が計較憎むべし。慂る恨みのある奴を、生拘て饒せしのみならず、俺まで酒を喫はして、然ばかり管欵す事かは。と敦圉暴く怨ずれば、背九郎も齒を切りて、今さら論議は無益也。武藝に長て、膂力ありとも、醉臥したれば、殺し易かり。蟠纒を奪ふて、腹を醫さん。皆立ずや。といそがせば、顚八と畚作は、傍痛けに左右より、推禁めつゝ咳きに、うち紛らして小室へ、指さし示して共侶に、頭を掉りつゝ諫るやう、和主們がおもふ處も、その理なきにあらねども、そは推量にて、證據なし。一旦事の錯誤にて、舊き好の人を殺さば、後悔すとも及んや。且兩

ず、顚八盆作們が伙家の强人、那井栗苛九郎と、桁渡旋風二郎が、兩個の小嘍囉を從へて、夜挊了し果て還れる也。登時内なる手下の賊は、一名遽しく緣頰に、立出迎へ、紙燭を抗て、はやく還らせ給ひしな。おん造化は甚麼ぞや。と問へば苛九も旋風二郎も、共侶に舌打鳴らして、今宵は甚不獵にて、立たる腹も、宿所へ來ては、横になりけん、東西欲しかり。酒はある歟。と問つゝも、手ばやく俱に草鞋を、解棄てうち登る、緣頰の片隅に、菅笠あるを見かへりて、那は什麼誰が笠ぞ。這隱宅に相應しからぬ、逗留客でもある事歟。と問れて件の手下の賊は、奥へ指さし聲を低めて、然也、客もあり酒もあり。その故は箇樣々々。と那素藤の事の趣、盤纏多かる事までも、空骨折たる本意なさに、その崖略を聶き報れば、苛九郎と旋風二郎は、眉を顰めて頷くのみ、そが儘奥へ赴けば、顚八と盆作は、席を讓り勞ひて、賓客殘の酒を盪め、然而盃を薦めつゝ、今宵料ず素藤と、再會の事の趣、箇樣々々。と聶き示せば、苛九郎沈吟じて、和主們は源金太の、口車に乘せられて、そを皆實事と思ふか知らねど、洒家は一切こゝろ得がたかり。故を甚と推ても見給へ。這夏膽吹の頭領が、祇園會を觀に京へゆかん、といはれし折に那人は、賢達て諫めしを、頭領は听ずして、軈て京師へ赴きたるに、祇園神會がおもしろきとて、諫禁めし子を喚に、おこされしといひしも算帳合ず。招るゝとて慌しく、出てゆ

智計も武藝もありながら、山豪にして朽果んは、最惜かるべき事なりき、と我稍思ひ起せしかば、今番鎌倉へ赴くも、然る計較のあれば也。時運に稱ふ福ひありて、我一城の主とならば、必和主們を喚迎ん。その折我身に隨ふて、眞の武士になり給へ。這荒廢院には優すべきに。と與に乘して說誇れば、顚八も盆作も、听つゝ倶に苦笑ひして、そは憑しき事ながら、剪徑を做すは極めて易く、國を奪ひ城を奪るは、企及びがたきに似たり。和君が口の半分でも、然る造化の日もあらば、我們必隨身せん。空約束をなし給ひそ。といひつゝ咄とうち笑ふ、折から手下の強人們が、酒を溫め餚を添て、もて來て素藤に薦めしかば、是より主客盃を、遣り替し又巡らして、醉を盡して唔譚ふ程に、夜長き秋の時候ながら、はや子の中刻になりしかば、素藤は路の疲勞を、告て盃を辭しにけり。因て顚八盆作は、手下の強人に吩咐て、小室に、素藤の臥簟を儲け、案內に立して、明日を契りて、そが儘に、坐席に在りていまだ睡らず。件の四個の手下にも、酒を喫しつ勞ひて、旋風二郎と苛九郎們が、還るを徐に等なるべし。爾程に、素藤は、醉て臥房に入りたれども、毫も心に由斷せず、行裹をも刀をも、右と左に引著て、陽には熟睡せし如く、折々鼾の聲を聞して、內外の動靜を覘ひけり。恁りし程に、夜は既に、丑三ならんと思ふ時候、外面に人の足响して、折戸をひらきて入るものあり。是則別人なら

ず、什麼いかにして昨夕まで、隱宅もなく、旅より旅に、這頭を徘徊し給ふやらん。と問へば素藤然氣も見せず、故意しば〳〵嗟嘆して、我も亦親の事、又膽吹の住處へも、緝捕の向ふといふ風聲を、はやく大津にて聞しかば、駭怕れて、京師へいなず、そが儘踵を旋らして、美濃に赴き、信濃に伶仃ひ、筑摩の溫泉店に逗留して、憶はずも日を累る程に、卒八は我行裏を、掻擾ひて逐電したり。なれども盤纏は些ばかり、懷にせしもあれば、いでや鎌倉へ赴きて、世渡るよすがを求ん、と思ひにければ、這地まで、來つゝ和主們に環會ひしは、舊緣盡ず、禍の、反て福ひになれる也。歡ぶべし〳〵。と諄反しつゝ自祝して、實說虛談、機に臨み、口に信して誘れば、顚八も盆作も、寔に然也。と答けり。姑且して素藤は、又顚八們にうち對ひて、和主們はいまだ思はずや、都て山豪は、別世界にて、上に仕る君もなく、又機を包る同僚もあらず、人の東西を我東西にして、富、王侯に等しくとも、一旦露顯に及びては、細首を刎られて、惡名を世に遺すのみ。唐山にては、山賊の、天子になりしもありと賍聞けど、我邦にては伊豫の純友、京師の保輔、豐後の金山、誰か一國を擊從へて、子孫に傳へしものあらん。是によりて觀るときは、盜むにも亦方あり、國を盜みて、國主といはれ、城を竊みて城主になるもの、その方をもてするときは、盜賊の名を負ずして、榮を子孫に傳ふるあり。今戰國の世に生れて、

に、願八們が先いふやう、和君も豫承知なるべし、往る六月某の日に、和君は獨卒八を將て、京都へ赴き給ひたる、その次の日の事なりき。室町將軍家の御諚として、觀音寺の城より向られたる、絹捕の士卒、千五六百名、何の程にか寄たりけん、山寨を緊しく捕圍して、猛可に稠入りたりしかば、伙家の人々駭慌て、一拄も防ぎ得ず、峯上を踰て、美濃路のかたへ、脫れ去らんとせし程に、多くは谷へ趕落されて、樹の根嵒稜に身を碎し、或は撃れ搦捕られて、落亡たるは稀なりき。登時我們兩名は、桁渡旋風二郎、井栗苛九郎們と共侶に、稍一方を殺拔きて、死ざることを得たりしかば、這那に立濳びて、七月の中浣に這地に來つ、這荒廢院を見出して、隱宅にせまく思ひしに、はや先だちて這寺に、住る小賊五六名あり、初は拒みて容れざりしを、武藝は二の町なるをもて、竟に我們に戰ひ負て、住處を讓り、手下に屬て、倶に挊んとて陪話しかば、その意に儘して儀のごとく、夜挊ぎに出すにより、今宵和君を將て來ぬる、四人も則先住の、伙家にて候ひき。他們が外に二人あり、そは旋風二郎と苛九郎が、倶して夜挊きに出たれば、曉天ならでは還るべからず。大頭領は、京師にて、腹のものいふ奇病により、年來の奸歹發覺れて、市正高梨氏に、搦捕られ給ひし事も、三個の伴當共侶に、首級を河原へ梟られたる、那里の沙汰は、世の風聲に、正しく傳へ聞たるが、和君の上はいまだ得知ら

かゝなん。骨逞しく肉多かり、よく見給へ。と皆誇良に、報れば兩個の頭領は、うち含笑つゝ點頭て、そは然ぞ骨の折れたらん。現好肥たる大漢にて、鉎刀には究竟也。いで〳〵。といひつゝも、共侶に近く立よりて、手燭を抗てつく〴〵と、うち見つゝ倶に驚きて、和君は、膽吹の小頭領、源金太主ならずや。と問れて訝る素藤は、遽しく仰ぎ見て、爾いふ主們は、(句)礪時顯八、(句)平田張盆作にて候ぞ。(句)思ひがけなき、(句)今宵の再會。(句)我を救へ。と叫ぶにぞ、顯八と盆作は、素藤に掛たる索を、遽しく解棄て、且緣頬に請登すれば、驚き呆る手下の强人、頭を搔きつゝ跪坐たるを、然こそと見かへる顯八盆作、呵々とうち笑ひて、若們は近き比、這地で我手に屬たれば、認らざりしも理り也。這方さまは豫より、噂をしたる、近江なる、小頭領でをはするぞ。と諭せば四個の强人は、倶に地上に額をつきて、小可們、眼ありながら、比叡も膽吹も知らずして、酷く無禮を仕りぬ。允させ給へ。とうち陪話るを、素藤禁め慰めて、命めでたき身の造化を、心竊に歡ぶのみ、遺恨あるべくもあらざれば、强人毎は奪略りたる、行裏と菅笠を、主に返して去まくせしを、顯八、ヤヤと喚禁めて、若們は柴折焼て、快酒盃の准備をせよ。卒小頭領、這方へ。と先に立つゝ、盆作と、倶に奧にぞ伴ひける。恁而顯八盆作は、素藤を奧有りたる、坐席の上坐に請ひ、茶を看めて、迭に別後の苦樂を告る

ものいはず、死活を他們に儘したる、肚裏に思ふやう、我は是世に知られたる、山賊の獨子にて、今這奴們が暴掙は、我も亦生れながらに、慣覺し業なるに、鼯の掙了を廢てより、いまだ半年ならずして、這剪徑們が手にこそ死ぬらめ。得失自他の差別あれども、現川幸は川、山幸は、山で終るといふ鄙語も、今は我上也けり、と覺期の述懷いへばえに、嵓に集る鷲、野に棲む虎も、勢ひ竭ては倒に、死を等の外なかりけり。却說件の強人們は、素藤を將てゆくこと、約莫半里餘りにして、樹粒間なき番山の中に、最荒たる廢寺の、門內へ扛入れて、纔に殘る所化寮、とおぼしき緣頰の下に卸し居て、奥へ知せの暗號なるべし、一個の賊が紐附て、衣領に掛たる叫子を、瀌々と吹鳴らせば、奥より出來る兩個の頭領、燭を秉り刀を引提げ、半朽たる緣頰に、雙立ち左見右見て、若們今宵は早かりしな。獲はある歟、甚麼ぞや。と問へば大家跪きて、頭領達听給へ。けふも亦例の曠野に、我們四名網を張て、よき鳥もがな、と等し黄昏時候、這旅客が只一個、裹を肩にして來にければ、我們前後に立わかれて、先二人して素引見たるに、思ふに倍たる本事あり、克を取ること易からねば、引外し逃走りて、趕して例の鉤索に、掛滾して生拘たり。行裹の最重きに、肚に纏ひし路費もあらん。四人が愆まで骨を折て、生拘たれば、野煞にせず、網掛の儘に將て來れり。いぬる日獲させ給ひたる、新刀を鉎すによ

侮りて、虎の髯捋く鼠の輩、頭顱を棄に出たる歟。といはせも果ず兩個の强人、眼を瞪らし、聲苛立て、命知らずの假猛者、息絶る折、後悔すな。本事を見せん。と左右より、撃つを閃りと引外して、拔合したる刃の電光、二人を敵手に、撓まず去らず、踏入々々術を盡す。然しも修煉の刃尖に、當難たる兩個の强人、束を投て逃走るを、素藤透さず赶蒐て、ゆくことといまだ幾ならず、花さく路の秋草の、中に掛たる鉤索に、忽地脚を摎れて、憶はず撲地と滾びしかば、その左右なる芒花の蔭より、兩個の强人走り出て、起んと蠢く素藤が、手を枉げ足を推縮めて、十重廿文字に結栶りけり。當下逃たる兩個の賊も、走りかへりつ、うち笑ひて、這奴聊本事あり、買賣に骨を折せしかども、生拘りたれば、殺すに易かり。いで〳〵。といひつゝも、刀を抗て砍らんとせしを、伙家の兩賊推禁めて、やよ等、這里にて屠りては、骨を折たる功見えず。這行裹の重げなる、獲は必多かるべし。這儘宿所へ將て還りて、頭領達に、箇樣々々と報なば摔榮あらん。爾るを野煞にすることかは。といふに逃たる强人們は、共侶に點頭て、然らば活して扛もてゆかん。足を擡げよ。由斷して、喫ひ著れな。こは貫目あり、四人持でも好荷ぞ。とこゝろ得良に、散動めきて、宙に吊して野を西へ、幾町ともなく將てゆきけり。爾程に素藤は、賊の圏套に乘せられて、既に擒になりしかば、爭ふとても益なし、と思ひ絶つゝ

あらずして、多かる路費を旅より旅に、皆喪はゞ、又舊の、山豪にならんのみ。何の里か日の照らざる、急ぐは要なき事なるをや、と獨占たる無敵の料簡、岐岨の旅宿に日數歷て、筑摩の溫泉に來にければ、某甲と喚做す客店の、坐席を借りて逗留しつゝ、日毎に浴湯したりける。然ば這地も山里にて、攝津の有馬、伊豆の熱海に、似るべうもあらざめれど、那這より旅客聚合ふて、夏は湯治を旨としぬれば、思ひしよりも徒然ならず、詞敵も稍出來て、慰るよすがあり。是により素藤は、五六十日筑摩に在り。三伏の暑氣早晩冷て、稍肌膚寒くなる隨に、同宿の旅客們は、漸々に立去て、四下寂しくなりしかば、素藤も然らばとて、筑摩の歇店を立出つゝ、上毛より武藏を歷て、薪樵る鎌倉を、觀ばやと思へば步も趲みて、ゆくこと又只一日ならず、既にして武藏なる、熊谷と鸛巢の、間と豫傳聞く、曠野を獨過る折、はや曛昏になりにけり。浩處に兩個の暴雄、麁栲の夾衣を、裳短に被下して、苛物作りの山刀を、鐺下りに腰に跨へ、身長より高き茅萱の中より、突然と顯れ出て、去向の路に立塞り、素藤を屹と疾視て、やをれ行人、命惜くは、盤纏も衣も遞與していね。倘又惑ふて不字をいはゞ、眞草行の差別なく、刃のきれ筆、手は見せず。覺期をせよ。と權しの詭聲、順刀晃りと引拔たり。登時素藤、毫も譟がず、紐解く笠を投捐て、立對ひつゝ冷笑ひ、噫唶きたり、似而非剪徑們が、獨行ぞと

左の腕まで、ばらりずんと兩段に、斫はなされて仆れけり。既にして素藤は、四下を見かへり、喘を定めて、先血刀を拭ひ收め、然而卒八が屍骸を探るに、那六百兩の金は、そが儘紺の布の勒肚に、收めて腹に纏著てあり。この餘些の日用錢も、他が懷にありければ、皆悉とり復して、更に又思ふやう、這奴は、我伴當にて、金も亦是我東西なれども、只逃さじと思ひ惴りて、生拘るべきを忘れたり。結果て我憤恨を、洩すものから、又故の、客店へかへりなば、反て人に疑れて、いひ解くとも甲斐なかるべし。幸ひにして金は皆、這奴が身に附たりけるに、迹に遺せし行裹は、棄たりとても、惜むに足らず。我も世間廣からぬ、身を見かへらで、毛を吹て、疵を求ることをせんや。夜は深るともこの川を、渡して別宿を求るに、しくことあらじ、と肚に問ひ、肚に答る身の往方、思ひ決めつ、卒八が、屍骸を川へ蹴落して、然而船を喚び、渡を求めて、御影寺の驛に赴きしに、夏の夜なれば短くて、はや子の時刻になりしかば、客店の門を敲けども、宿借すべくもあらざりしを、やうやくにいひ誘へ、房錢を多く拿らして、その夜を才に明しけり。是よりして素藤は、千五六百兩ある金を、潛やかに二箇に分ちて、半分は腰に附け、半分は肩にうち掛て、岐岨路を東へ赴くに、素より急ぬ旅なれば、筑摩の溫泉に立よりて、夏を過して、八月の時候、鎌倉に杖を曳て、世渡る便宜を求むべけれ。倘然る所寓

案内をせられて、奥まりたる編室に入りぬ。この時隣房にも、はやく歇りし客ありて、一個の土妓を傍に果らし、兩三個の艶曲妓に、歌せもしつ彈せもして、高やかに笑ひ興ずる、その聲卒八に似たりしかば、素藤は隔亮の、建縫の透間より、その人を偸看るに、果して紛ふべくもあらぬ、那馬面でありければ、譟がず悄々地に一刀を、拿抗て腰に帶る間も、怒に堪ねば、隔なる、紙門を托地と蹴ひらきて、好竊偸奴、見出せしぞ、覺期をせよ。と罵り哮る、聲も尖く、身を跳らして、走蒐らんとせし程に、卒八は吐嗟とばかりに、駭怕れ、盃盤を、踏碎き蹴散らして、慌て庭より、逃走りて、塀を乘りつゝ外面へ、撲と下りて又走るを、素藤は逃さじとて、續きて塀に手を掛て、閃りとうち踰す、修煉の剽捷、何里までもと趕蒐る、迹には土妓と艶曲妓們が、駭譟ぎて人を喚ぶ、聲のみ遠く聞えけり。爾程に卒八は、命涯りに逃れども、折から二十日の月刺昇りて、躱るゝ便りを得ざりしかば、是非なく御影寺のかたへ走るに、前面に一條の川ありけり、是則株川也、渉さんとするに淺瀬を知らず、後背よりは素藤が、趕ふこと甚急にして、間近くなりしかば、引返して挑戰んと欲するに、手に一條の棒も得持たず、腰に護身の刃もなければ、進退こゝに谷りて、已ことを得ず件の川へ、跳入らんとせし程に、素藤快く走來て、大喝一聲撃閃かす、刀の光は今世の別路、卒八は右の肩尖より、斜に

に思ふやう、我けふ那奴に駝したる、行裹には六百兩の、金あるにより絎きて、那奴は逐電せしならん。日屬那奴が我に仕へて、忠心ありげに見えたるに、今番京師の凶變も、伙家の人々を閣きて、逸早く我に報たる、功さへあれば心饒して、毫も疑ざりけるは、我ながら鈍ましかりき。今より往方を渉獵るとも、這頭は岐道多かるに、既にして日は暮たり、什麼いかにして便宜を得べき。幸ひにして我腰に、なほ千金の盤纏あり、今宵は且這地方に、曉して明日快索んず、と思ひかへしつ村稍盡處なる、村翁の家に投宿を求めて、才に一膳二三碗の、疎飯に飢を醫せしのみ、軈て枕に就きたれども、腹立しさに宿も睡られず。その曉天より早飯を、促したうべ、身裝して、笠深くして立出しが、這頭は通て品降る、鄙にはあれど、膽吹山へ、なほ遠からねば、後安からず。卒八奴は官道の、かたへこそ走りつらめ、と尋思をしつゝ間道より、垂井のかたに赴くに、路の長短損益に拘づらはず、竪にゆき横に復りて、暑き日銷し渉獵難つゝ、稍垂井まで來にける折、暮るゝに程なくなりしかど、亦復一里十町あまり、索ねて赤阪の驛に來つ、やうやく歇店を投めし折、夜ははや初更になりにけり。然りけれども、這地方は、昨夜の侶奈之村に似ず、簷を比べし客店に、土妓曲娼などありて、夜は特さらに熱鬧ひたり。恁而素藤が今宵の宿は、木偶舞屋と喚做したる、最大きなる客店なるが、軈て婀㜷に

に、諾ひて軈て日送りけり。爾程に素藤は、凶を避て吉に趨る、籌策を得たり、と思へば、投て往方を定めねども、先美濃路へとて赴く程に、卒八は後に跟き、先にも立て慰めつ、いと憑しく倶したりける。抑近江の膽吹山は、坂田郡に在り、山より東は美濃州也、山の東北、州界より、千疋まで十八町ありといふ、しかれども、官道にあらず。素藤が膽吹の山寨を、遽しく立出しは、未牌の時候なりけるに、山路は日影の没易くて、ゆくこと才に三里計、下晡になりにけり。登時卒八は後方より、素藤を喚掛て、やよ喃小頭領、這頭は無下の寒村なれば、好飯店を得がたからん。小可先へ走抜けて、好宿徵りて、又其首より、出迎へ奉らん。是より路は髮直にて、迷ふべくも候はず、迹より徐に來給ひね。といふに素藤頷きて、そはよく心づきたりき。快々ゆきね。といそがせば、卒八は、阿唯々々。と應しつゝもはや先だちて、東を投て走りけり。既にして素藤は、今宵の歇宿を卒八に、儘しにければ、路を急がず、既にして黄昏時候に、侶奈之といふ村に來にけり。しかれども卒八は、何里へゆきけん、出も迎へず、店の簷下に笠などを、掛て日標にしたるも見えねば、素藤いよ／＼疑ひ惑ひて、這地方の家毎に、憑る旅客に宿借さずやとて、那這となく尋問ふ、その甲斐もなく日は暮て、卒八は竟に見え來ず。當下素藤は、後悔臍を噬むまでに、跰跜しつゝ恨めども、せん術なければ、つく／＼と、肚裏

箇樣にいひ誘え、我身は獨和郎を將て、はやく他鄕へ走るべし。讒ぎて人にな疑れそ。よくせよかし。と期を推せば、卒八听つゝ含笑て、そは妙策也、こゝろ得たり。然らば左いはん、右し給へ。と心を屬けつ、屬らるゝ、逆旅の准備遽しき、素藤は、親の有財を、悄やかに拿出して見るに、一千五六百金あり、そが內中、十裹千兩を、勒肚に藏め、腰に纏ひて、餘る五六百兩は、行擔に造りて、卒八が、肩に掛させんとす。准備はやくも整ひければ、素藤は然氣なく、伙家の老賊、礪時願八、平田張盆作なンど、喚倣たる兩三名を、招きよせて告るやう、和主們はいまだ知らずや、京より大人の消息を齎して、卒八がかへり來たれり。子の親に思はるゝは、今にはじめぬことながら、大人の所要は別義にあらず、我にも京師へ來よと也。その事の趣は、祇園神會は、二三度觀たれど、今玆は特に興多かり、河原の納凉はなほ愛たきに、非除神會の日に後るゝとも、卒八を將て、我歇店へ來よ。狐疑して親に等するな、といひおこし給ひたり。慂れば今より立出て、路次をいそぎて、京師に到らん。姑且留守を憑むのみ。といはれて大家異議におよばず、そは羨しき事なりき。亭午は酷暑に堪がたからんに、今より出ても、夜行を縮なば、幾日もあらで、京に到らん。留守は我們こゝろ得たり。いそがせ給へ。と共侶

一個の男兒あり、性惡力量、武藝まで、親に劣らぬ暴雄にて、今茲二十一歳也。且奸智にも長たれば、いぬる日、業因が京師へ赴くを、しかるべからずとて諫めしかども、听れざれば、いふ甲斐なかりき。這餘は業因が手下の小嘍囉、百五六十名これあるのみ。そは折々分散して、鄰國他鄉を徘徊しつゝ、暴掠を旨とすなれば、目今山寨に在る處、一百名に過ざりけり。然ば又いぬる日に、頭領業因に從ひて、倶に京師に赴きたる、那小嘍囉四名の內中、獨緝捕を免れしは、卒八と喚做すものにて、渾名を馬面郎といはる、その面框最長く、板齒斜に反たれば、名さへ卒八といふなるべし。卒八と反齒と、音訓似たり。却這馬面卒八は、業因が獨子なる、源金太素藤の得意にて、折々陪堂にせられしかば、逃て膽吹山に還りし折、先素藤が便室にゆきて、悉き告る逆旅の凶變、業因は、京師にて、祇園神會を觀たる折、腹內に聲ありて、恁々と喈りしを、室町家の市正、高梨職德に聞知られて、矢場に搦捕られしよしを、詞急迫しく解示せば、素藤色を失ひて、しからんには、遠からず、這里へも緝捕の大勢を、向られん事疑ひなし。その折齊一力を勠して、一旦防戰ふとも、一百許の小勢にて、克を取ることかたかるべし、三十六計、走るをよしとす。快這山を立去りて、又せん術もあらんかし、とは思へども皆悉、山寨を棄て出てゆかば、必追隊に趕逼られて、免れ得ざることもあるべし。縱追隊に遇ずとも、

ず懲りず、公然として俗を做す、間引國こそ悲しけれ。又那間引國に隣て、墮胎國と喚做すあり、そは男女密會して、有身たる腹のせんかたなさに、藥をもて胎を墮せり。又密夫ならぬ夫婦でも、或は年々に有身るを、厭ふて墮胎國に走るもあり。かくのごとき愚夫愚婦は、みづからその腹を裂て、その子を啖ふに異ならず。夫闕隙を鑽り、法度を犯して、男女密會したるすら、免れがたき罪過なるに、その腹に在る子を害さば、不仁是より甚しきはなし。さばれ那夫婦の如きは、墮胎の祟あらずといふとも、神も佛も然る不仁者を、いかにして守り給はん。慈悲ある人の他を見ば、惡鬼羅刹と思ふべけれ。既にして神も守らず、又佛も憐まずは、身後の惡報、子孫の零落、免るゝ路あるべからず。世に身後の業果を怕れ、子孫の榮を願ふものは、焦冥の虫なりとも、故なくしてこれを殺さず。その身の與には壽命を欲りし、子孫の榮枯を念ふものは、勉て陰德を行ふべし。子孫十世に及ぶまで、血肉をもて相續ぐ家は、先祖陰德あるによれり。又何ぞ疑ん。然ば善惡の應報に、遲きあり早きあり、今番業因が奇病の惡報を、傳へて那間引國、墮胎國に知らせなば、幸ひにして迷津の、一筏にもなりぬべし。是奬善の捷徑に、あらずや。と解示せば、件の人々感服して、心裡恥しく思ひけり。閒話休題。この時近江の膽吹山なる、但鳥跖六業因が山寨には、妻は嚮に身故りて、但鳥源金太素藤と喚做たる、

ずるよし、後漢書外國傳に見えたり。こゝをもて、我邦にても、その性愚なる者を、烏滸の白物と喚做したり。又烏滸がましなどいふことも、則那より出たる也。又老學庵筆記(巻八)に、蜀人は、人物の、誇るべき者を見ては、嗚呼といふ、鄙むべき者は、則噫嘻といふといへり。こは烏滸の義と同じからず、只その似て非なるをいふのみ。そは左まれ右もあれ、烏滸の如きは己が子を、啖ふを毎となすとしいへば、又人の子を啖へばとて、世になき事にはあらずかし。我大皇國は、神代より、武をもて宗とし給へども、素より魚米に富たれば、獸の肉だも啖ふ者稀也。況人を啖ひしは、繪巻に載たる、酒顚童子と、今番の但馬業因のみ。この宅は好て人の小兒を、啖ふことを聞ざれども、好て己が小兒を殺す、愚夫愚婦ある村落邊鄙を、間引國と喚做したり。約その國の愚民們は、生るゝ子の多かれば、養ひがたきを患ひとして、子は一人の外とり擧ず、産婦みづから生れし小兒を、膝の下に布殺すを、命けて間引、といふと欺聞にき。烏滸國の俗の解て啖ふは、只その初子のみなるに、その子の多きを厭ふ愚俗の、兩三番間引もあらば、又只是を何とかいはん。那業因が人の小兒を、多く啖ひしすら冥罰にて、腹に聲ある惡報を免れず。這理りをもて推すときは、人の子ならぬ己が子でも、多く間引し夫婦の膝には、必人面瘡を生じて、聲高やかに不慈慘毒を、罵らるべき該なるに、然ることなければ、怕れ

付られて、觀音寺の城より遣されん。職徳今番、爾る山賊の、頭領を搦捕りしは、多く得がたき手柄也。世に强人は尠からねど、胎を奪ひて、其小兒を、啖ひしは前未聞の事也。かくの如き大惡人は、常刑をもてすべからず、はやく八創の、極刑に行ふて、その支黨三名も倶に、梟首すべし。と下知せらる。是により職徳は、衙所に退り旨を傳へて、先業因を生ながら、八創に斬割して、しかして後に馘りて、小嘍囉三名をも、倶に賀茂河原に梟首したりしかば、是を觀るもの堵の如く、那怪談を話傳へて、或は、年來業因に、腹を裂れ胎を奪れたる、幾の婦人の怨靈の、所爲なるべし、といふもあり。或は、そを非として、那强人の腹内にて、ものいふごとく聞えしは、應聲虫といふ病痾の、所爲なるべしとて諍ひしを、そが中に博士ありて、詞徐に諭すやう、應聲虫といふ奇病は、その病人がものいへば、腹内にも聲ありて、又その如くものいふのみ、則是响の音に、應ずるに異ならず。その病人は默然たるに、腹中に聲あるにはあらず。恁れば但鳥業因が、腹内に聲ありしは、應聲虫にあらざる也。是を怨靈の所爲といへるは、據あるに似たれども、そも推量の外を出ず。只毒惡の冥罰にて、然る奇病を得て、罪惡を、自訴して誅戮せられし也。又他が小兒を啖ひしも、然ばかり奇談と做すに足らず、烏滸と做す國の俗は、各々初て子を生ときは、かならず解てこれを啖ふ。その味ひ美ければ、その王に獻

て、檻の獸になりたるよしを、遺なく招してければ、業因が腹内にて、呵々とうち笑ひしが、是よりその聲絶にけり。職德これを听果て、いよ〳〵その奇に驚きながら、然氣も見せず、業因に、うち對ひ、仡と疾視て、やをれ兇賊、思ひ知るや。那袴垂保輔、金山左衛門、藤澤入道、淺生松孺、昔よりして世に聞えたる、强人は多かれども、いまだ人の胎を奪ふて、その子を啖ひしものを聞かず。慘毒鬼畜に彌增たる、惡報竟に免れず、腹内より聲を發して、みづからその毒惡を、訴たるは冥罰覿面、汝が爲に殺されたる、幾の人の怨の魂魄、汝が五臟にわけ入て、ものいはせしにぞあらんずらん。地獄天堂遠きにあらず、輪回應報甚近かり。自業自得にあらずや。といはれて業因怯たる色なく、うち仰ぎ見つ、冷笑ひて、腹にてものをいはれしとても、我一刀を腰にせば、殺脱んこと易かりしを、慭に形貌を變て、身に寸鐵を帶ざりければ、和主の手柄にせられたり。といはせも果ず夥兵們は、罷立ね。と暴やかに、索拿縮て、牽立て、支黨三名も共侶に、緊しく獄舍に繫ぎけり。恁而高梨職德は、業因が罪惡と、件の奇異の趣を、三管領(斯波細河畠山)に聞えあげて、這賊、膽吹の巢穴には、支黨居多候はん、討手多勢をもてせずは、全功得がたかるべき歟、什麼仕るべうもや。と旨を伺ひ稟しゝかば、三管領隨便詮議あり、件の但鳥業因は、都下へもその名聞えたるもの也、膽吹山へ討手には、六角家へ仰

第九輯　卷之四

第九十八回

盗人の從者偷走りて盗に戮さる
賊巢に宿て強人賊難を免る

却說高梨職德は、強人但鳥業因們を、既に搦捕しかば、そが手下の小嘍囉、三名も一緒に繫して、夥兵に牽し、衙所に還りて、則便他們が出處來歷、做しゝ惡事を責問ふに、業因們は賴陳じて、罪を免れんと欲すれども、這時までも腹内に、聲あることなほ已まず。他が答を等ずして、出處來歷、年來の、惡事を聞えあげしかば、業因並に小嘍囉們も諍ひ難て陳ずるやう、身は是年來近江なる、膽吹山に躱住て、相從ふ小嘍囉多くあり。每に良民を殘害して、財貨を奪略りし事、又口腹を貪る與に、孕婦の腹を裂て、そが胎内の赤子を蒸して、折々酒菜にしたる事、且いぬる日より、祇園會の、山鉾を觀まく思ひて、三四個の支黨を從へ、悄々地に京師に來つれども、本日倘群集の内に、面善れる者もあらん歟、と聊遠慮を旋らしつ、小經紀兒に打扮て、市廛の簷下に立在たる折、腹内にてものをいふ、奇病暴に發りしかば、積惡忽地發覺れ

なれば、物ともせず。前後左右に折累りて、矢場に組住め揉伏せて、押へて索を掛にけり。然ば業因に從ひ來たる、三四個の小嘍囉們も、この折三人は搦捕られ、辛くして逃亡せしは、只一人と聞えけり。是等の事の騷鬧にて、群集の男女逃迷ひ、滾びて人に踏るゝあり。婦幼は泣叫びて、只蟢の子を散すが如く、走る迹へは又聚合ふ。鄙語にいふ怖しき、物欲觀なる人心、老弱男女、賢不肖、是よりの後、日を歷るまで、這强人の噂をのみ、いひも繼ぎ、聞も傳へて、奇談ならずといはぬはなし。唐山には戰國の時、好て人肉を啖ひしものあり。我神州には、往古より、殘忍慘毒の猛者たりとも、牛馬の肉すら啖ふは稀なり。爾るに但鳥業因は、孕婦の胎を奪ふて、多くその小兒を啖ひしは、所云人面獸腹也。その惡、虎狼に勝りたる、天罰人怨、共に報ひて、忽地腹内に聲あり、その積惡を訴て、緝捕の繩に繫れたり。怕るべし誡むべし、と賢しき人はいふもありけり。畢竟業因が搦捕られて、後の話說甚麼ぞや。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

て、禁んと欲すれども、いよ〳〵高く罵りて、毫も寢ときなかりしかば、小嘍囉們も驚呆れて、傍痛く思ふのみ、今さらにせん術を知ず。况その間近く、聚合たる衆人は、迭に袖を掖き目を注して、怪み怕れざるものなし。浩處に、室町家の市正、高梨六郎左衞門尉職德、と喚做す武士あり。緝捕使の大將なれば、這日、祇園會に、衆人聚合ふ、市中の非常を警んとて、夥兵五六十名を從へて、騎馬苛めしく巡歷す。叱咤の聲も暴やかに、巷路々々を、町人に、箭杖を引鳴さし、先を拂して來にければ、業因並に小嘍囉們は、齊一慌忙きて、快躱んと欲すれども、稠然として錐も得立ず、人の山做す人に堰れて、進退便りを得ざりしに、業因が腹內にて、その積惡を罵ること、這時殊に甚しく、隱すべくもあらざりしを、職德はやくこれを听著、且怪てその人を相るに、形貌は經紀兒に似たれども、その面魂尷尬兒めきて、腹內に聲あるごとく、或はその姓名を告り、或はその積惡を、罵ることの分明なれは、原來那奴は、豫聞えし、强盜但鳥跖六ならん。兵每逃すな、捕捕りね。と馬上に劇しき下知に從ふ、揣雄の夥兵數十名、承りぬ。と應も果ず、はや犇々と捕稠て、御諚ざふ。と喚掛々々、三七二十一に競ひ蒐れる勢ひ、免るべうもあらざれば、業因は、吐嗟とばかりに、殺脫んと欲すれども、身に寸鐵を帶ざれば、經紀人の店前なる、木葹の小杉木を引拔持て、當るに儘して搏仆せしを、多勢

膽吹山に躲住て、折々畿内を横行すれども、その出没を人に知せず、或ときは寺院を脅し、又ある時は、豪民を殘害して、其財を奪ふこと、幾千百なるを知らず。こゝをもて、浮る雲の富に至れる、業因が傲慢いふべくもあらず。一碗の美酒の與に、海錯野味を列ねても、尙飽ずとのみ思ひたり。因て其惡黨の、狡きもの薦ていふやう、人の胎内の赤子を烹て、酒の肴に做すときは、その味ひ無量也。嘗し給へ。と哄誘せしに、業因これをうち聽て、素殘忍の癖なれば、然ることあらん、と思ふにぞ、小嘍囉に吩咐て、孕る婦を奪拿らし、生ながらその腹を裂して、胎内の子を、蒸て啖ひ、炙らしもして酒菜にせしに、味ひ口に稱ひにければ、是よりして民間なる、懷胎の婦を索ねて、掠奪ふて殺す事、那唐山の盜跖が、兇暴にも過たれば、這事竟に世に聞えて、膽吹山の鬼跖六とて、人々他を怕るゝこと、疫鬼に異ならず。恁る積惡の報ひなりけん、有年の六月中浣に、業因は、京都なる、祇園會を觀ばやとて、事熟たる小嘍囉、三四名を從へて、各々形體を變え、深草團扇なンどを賣る、小經紀兒に打扮て、神會の本日京に赴き、人家の簷下に立在みて、種々の山鉾の、渡るを觀つゝありけるに、怪むべし、業因が、肚裏に聲ありて、忽然として叫ぶこと、應聲虫に異ならず。年來他が做しゝ惡事を、云云と喈る聲、高やかにして、人の耳を、串く可りに聞えしかば、業因は驚き慌て、腹を壓し胸を拊

へ方を竟に索知りて、その玉に因て生出たる、犬士の數も、亦八人、いまだ二人を得ずといへども、その人あるを知ることは、獨、大が功德によれり。譬ば、千體の佛を偽りて、七堂伽藍を建立の、開山の祖師にならんより、いと做しがたき所行ならずや。但心もとなきは、明年四月の中旬までに、犬江親兵衞、犬阪毛野が、往方を聞知るよしあるべきや。毛野は出て來もせんか、那親兵衞は、四歲の時、神隱に遇ひぬと聞けば、旣に五稔の光陰を經たり。倘存命ば、明年は、九才にこそなりぬべけれ。是等のよしを妙眞に、傳知らして慰めよ。明年の四月には、結城へ我代香に、照文を遣さん。そはなほ程ある事なるに、稻村へは照文まゐりて、ゝ大が書翰を披露しね。義成もさぞ本意ならめ。この宅の事は箇樣々々。と叮嚀に命じ給ひつ。更に又有司に命じて、今番甲斐よりかへり來ぬる、照文が夥兵們に、東西を賜ふこと初のごとく、君恩微賤も漏されず。そを傳へ聞くものだにも、いと辱く思ひけり。話分兩頭。這年間、上總州夷灊郡、館山の城主に、蟇田權頭素藤と喚做すものあり。そが素生を原るに、親は近江の膽吹山なる、强人の頭領にて、但鳥跖六業因と喚れたる、殘忍鴟梟の暴雄也。武藝剽姚、穿窬の術まで、素より得たる所なるに、往る正長永享より、嘉吉の年に至るまで、京鎌倉に兵亂絕えず、足利の武威衰へて、諸侯割居の折なれば、業因は類をもて、聚合し小嘍囉多くあり、

異ならず、但その有る處同じからざるのみ。憖れば玉の數に稱ひし、犬士八人具足せり。そが中に、親兵衛の存亡、いまだ知るに由なく、毛野が往方も詳ならず。その人ありて、その人足ねど、天機やうやく團圓せば、全聚らんこと遠かるべからず。拙僧本院に住持の事は、實に已ことを得ざる所行にて、素より久戀の地にあらず。這故に、來ん春は、本院を辭し去て、下野州結城に赴き、姑且那地に庵を締びて、先君（義實の父里見季基）竝に嘉吉に陣歿の、諸靈魂の菩提の爲に、大念佛を修行すべし。結願は、おなじ年の、四月十五六日に候はめ。幸ひにしてその時候までに、犬士們一緒に聚りて、八人具足することあらば、倶して故鄕にかへらまく欲す。是等のよしを、兩殿に、稟し給へ。とありければ、照文斜ならず歡びて、次の日先その狀を、義實朝臣に披露して、よしを聞えあげしかば、義實感悅いふべうもあらず、件の書翰を拿抗て、繰返々々、閱し給ふこと半晌許、讀果て宣ふやう、嘉吉に結城落城して、先君戰歿ませしより、今に至りて四十二年、我一日も忘れしことなし。いかで那里へおん墓碑を、建まくほしう思ひしかども、その間に敵地ありて、人馬の通達自由を得がたく、且京都將軍へ、憚るよしもなきにあらねば、思ひながらに年居多、親の神靈を慰る、こともあらで過せしに、今番、大が發願は、我に代れる孝順の、誠心こそいと有がたけれ。且那八箇の靈玉の、往

得ず。この故に、初には略せしを、こゝに具にしたるもあり、初に具に寫せしは、茲に略せる事も多かり。看官知れる事なればとて、那犬士們の顛末を、里見殿父子知り給はずば、是より後に不便也。作者の用意を思惟るべし。閒話除繁。恁而その次の年（文明十四年）冬十二月の某の日に、嚮に蜑崎照文が、甲斐の石禾の指月院に留め置たる、夥兵們がかへり來て、ヽ大法師の消息を、照文に遞與し、且武藏の穗北なる、氷垣夏行許寓居せる、犬塚信乃、犬山道節が、口狀を演傳へしかば、照文はそのこゝろを得て、ヽ大の書翰を閱するに、犬川莊介は、犬田小文吾を伴ふて、いぬる日指月院にかへり來にけるが、同因果の一犬士、犬阪毛野胤智の、往方をなほも索んとて、倶に信濃路へ赴きし事、竝に犬飼現八は、又是同因果の一犬士、犬村大角禮儀と、いぬる日武藏の穗北より、指月院に來て止宿の事、又信乃道節は、穗北の鄕士氷垣夏行に留められて、權且那里に寓居の事、又毛野が石濱の復讐、大角が返璧の妖怪對治、又小文吾が越後にて、暴牛を推駐めし事、竝に賊婦船虫の事、おなじ折に莊介が、强盜酒顚二們を誅戮の事、竝に長尾景春の奶々箙の大刀自、その臣稻戸由充の事、小千谷の俠者石龜屋次團太の事までも、その崖略を寫裒て、件の毛野は、素生恁々、感得したる智字の玉あり。又大角は、出處恁々、こは禮字の玉を持り。那身の內に痣ありて、形狀牡丹に似たること、八人都て

かば、義實主も、義成主も、只顧その奇に驚き給ひて、いよ〳〵感悅淺からず。况姬上のおん母、胞兄弟達の、歡び讃るに物なかるべし。軈て對面し給ひしに、濱路姬は民間に、人と成り給ふものから、その進止鄙ならず、容止も亦美しくて、姉君妹君達に優るとも、劣り給はじと見え給ひしかば、おん二親の鍾愛特さらにて、こよなく欵待し給ひけり。こゝをもて照文の、功を褒め祿を增し、且件の夥們兵にも、賞祿多かり。恁れば信乃們六犬士の、外に二人具足せば、招ずとても、必來つべし。他們はいまだ仕ずして、當家の與に、忠あり功あり。寔に稀有の奇士每なりとて、いとなつかしく思ひ給ふ。義成かくの如くなれば、義實はいとゞしく、一日もはやく見まくほし、と思召すこと切なるべし。因て昔年濱路姬の、鷲に捉られ給ひし折、給事の男女幾名歟、その愆により、身の暇を給はり、或は姬上の菩提の與に、祝髮して僧と做り、尼になりぬるを召かへして、月俸を賜ること尠からず。又那四六城木工作が與に、富山の麓なる大山寺にて、追薦の佛事あり、件の寺內に墓碑を建て、祠堂料を寄附せらる。善に必善報あり、惡に必惡報あり。今にはじめぬことながら、明君の善政、漏らす隈なく、應報枯骨に及ぶといはまし。約莫這回に解く處は、第五輯四十回より、第七輯七十二回に到るまで、寫著たるおもむけなれば、看官承知の事ながら、今又安房の事に及びて、再せざることを

にて、那泡雪奈四郎を、犬塚信乃が撃捕て、姫上のおん與に、木工作の怨を雪め、倶して墨田河の頭まで來にけるが、他們はなほ同因果の、犬士犬川額藏の莊介、犬田小文吾、犬飼現八們に環り會ば、その折共侶にまゐらんとて、今番も推辭まうすにより、恩賜の金子を信乃道節に、遞與して後會を契りつゝ、その意に儘したりし事、又那犬山道節も、忠字の明玉を、感得したるものにして、煉馬の老黨、犬山道策が冢子にてありし事、恁れば犬士六名は、既に相識ることを得たり。よりて隷させ給ひたる、夥兵兩三名を、石禾に留めて、後便の與に倶せず。その餘は都て姫上の、おん轎子を舁せし事、又原るに、姫上の、養父四六城木工作は、犬塚信乃に舊緣あり。那身は奈四郎に撃れしかども、武田殿より迹を立られ、そが親族の子を木工作が、死後の養嗣にせらるゝよし、既にその風聲あり。姫上不思議に恙なく、年來を歷給ひしは、値遇の緣ある木工作が、實に慈善の致す所、今番歸國のおん歡びは、道節信乃們に、大法師の、帮助ありしによりて也。這餘の事は箇樣々々と、道節信乃莊介、小文吾現八們の五犬士が、荒芽山にて窮阨の事、姥雪與四郎音音の事、その子十條力二郎尺八の事、その妻曳手單節の事、忠死義歿の顚末を、听にし隨に聞えあげて、證据の與に、齎したる、姫の當初被させ給ひし、篠龍胆の御花號あるおん衣と、犬塚信乃が撃捕たる、寃家泡雪奈四郎の、首級を實検に入れし

諸臣女房に至るまで、世になき人の冥土より、かへり來ませし心地やしけん、哀歡交判くよしもなき、祝壽の聲耳に盈たり。爾程に、兩侯（義實義成）は、照文が訴の趣を听給ふに、照文は近き比、甲斐の石禾に旅宿せし折、丶大法師に再會の事の趣、又犬山道節が、犬塚信乃の再厄を拯ふに及びて、憶りなく濱路姫の、素生を聞知ることを得て、丶大法師の住持せる、指月院へ倶しまゐらせたる、その事の始なる、姫の養父四六城木工作が、當年恁々の地方にて、濱路姫を拯拿て、年來養育したる事、及木工作が枉死の事、竝にその妻夏引が事、甲斐の國司武田信昌の家臣、泡雪奈四郎が、夏引と姦通の事により、濱路姫と犬塚信乃を、害せんと謀りたる、その事の終りまで、照文が稟す處、具ならずといふことなし。有恁に奈四郎夏引們が、奸惡竟に發覺てれ、夏引、竝に奈四郎が惡僕嚩内は、首を刎られ、奈四郎は、又一個の惡僕、媼内を倶して、逐電したる比、信昌の主、放鷹のかへるさに、指月院に立よりて、丶大法師に對面あり。この折信乃と道節も、見參に入りしかば、その智勇を賞美のあまり、留めて高祿を拿せんとて、懇命大かたならざりしを、信乃道節は推辭まうして、當坐の徵めを免れたれども、那里に在らば、城内へ、招ることあるべしとて、丶大法師に、別を告て、猛可に指月院を立去る折、照文も他們と共に、濱路姫を守奉りて、悄々地に歸國に及ぶ程に、武藏なる四谷の原

恐れながら兒が、思ふ所も、御意の如し。然ば又照文に、その義を命じ候はんとて、兩侯の身邊近く、照文を召よせて、義成みづから箇樣々々。と件の事の趣を、叮嚀にこゝろ得さして、歸國の後、程もなく、投て去向も安定ならぬ、犬士們を索ねに遣すは、心なきに似たれども、照文ならで別人の、よくすべきにあらざれば、已ことを得ずこの義に及べり。准備をせよ。といそがし給へば、義實も亦云云と、示させ給ふ懇命あり。照文これを承りて、毫も擬議の氣色なく、最正首に慰め稟しつ、日ならず起行候はんとて、遽しく退り出しかば、義成は有司に命じて、照文に從はする、夥兵七名を擇出させ、路費、竝に犬士們に、賜ふべき金子まで、照文に遞與させ給ひけり。爾程に、文五兵衛と妙眞は、よしを傳承りて、飽までに賢を愛し、士を徵め給ふ兩侯の、恩を感じ相歡びて、倶にゆかまく願しかども、義實固く禁めさせて、恩命いよいよ懇切也。恁而蜑崎照文は、件の夥兵們を從へて、又八州を偏歷の、首途をしたりける。その次の年（文明十一年）春二月十五日に、文五兵衛は身故りけり。是よりの後照文が、信久しく聞えざりしに、既にして四稔になりぬる、文明十三年、辛丑の冬、十一月下旬に、蜑崎十一郎照文は、甲斐の石和よりかへり來つ。那犬士們を伴ねども、十稔あまり前つ比、鷲に捉られ給ひたる、義成の息女、濱路姫を、伴ひまゐらせたり、と聞えしかば、稻村瀧田の兩侯より、

ども、他們は友に先だちて、祿を欲するものならず。同因果のもの具足せば、相伴ふてまゐらめとて、推辭まうせしよしなれば、招ずとても、時至らば、必當家の股肱とならん。天緣なくばあるべからず、とは思へども犬塚信乃は、行德にて窮阨あり。幸ひにして、山林房八が身を殺して、救ひ得たり、と聞えしかども、又那犬江親兵衛は、神隱の憂ひあり。それのみならず文五兵衛が、傳聞の說ながら、那犬川額藏とか喚做すものは、無實の罪に寃げられて、大塚なる、大石憲重の獄舍に在り。そを刑罰の場にして、信乃現八小文吾們が、謀りて救ひ拿しかど、追隊の士卒に趕逼られて、皆撃捕られたりとも聞え、免れたり、といふもありて、存亡安定ならずとぞ。事の虛實は、知らねども、この後又他們が上に、急難あらば、爭何はせん。胸安からぬ事のみなれば、復十一郎照文は、究竟の夥兵五七名を從はして、重て他們が往方を索ねて、再會せば、將て來つべく、倘又固辭て從はずば、他們と倶に、餘の犬士を、索巡りて、非常に備へば、路費の資助になるのみならず、縱路次にて殃厄ありとも、防ぐ便宜になりぬべし。我身隱遁せし日より、政事はさら也、世の好歹を、見かへらじとのみ思ひしかども、伏姬が終に臨みて、いへりしよしと吻合して、瑰奇に出世の犬士們は、我外孫の心地すなれば、いはざることを得ずてなん。和殿の意見、甚麼ぞや。と問れて義成異議し給はず、仰寔にその理あり。

の父文五兵衛、犬江親兵衛が祖母、妙眞們の事も、照文が具書によりて、既にそのこゝろを得たり。倶に當城に留置て、扶持して老を頤せん。兩三日は疲勞もあるべし。權且照文に預け置ん。宿所に伴ひ勦りて、異日見參に入れよかし。といと懇切に宣ひて、休息の暇を給はり、稻村よりまゐらせられたる、使者にも件のよしを示して、文五兵衛妙眞們を、宜く扶持し給はるべし、と義成に稟べしとて、隨便還し給ひけり。この後、文五兵衛妙眞は、義實朝臣に見參して、懇切なる仰を蒙り、又稻村の當主、義成朝臣よりも、當城の有司に命じて、他們が宿所を修理はせ、奴婢さへ隷て不自由なく、恩貺那身に餘りたる、その事の趣は、載て第四十回、四十一回に具なれば、こゝには都て略きたり。看官前後を照して知るべし。恁而この年（文明十年）の秋、有一日稻村より、義成の、瀧田の城へ來ませし折、照文竝に文五兵衛と、妙眞を召出して、慰め給ふこと大かたならず、東西など多く賜りければ、義實老侯歡び給ひて、義成主と商量あり。聞くに那犬塚信乃、犬飼現八、犬田小文吾們が外に、犬川額藏と喚做すものあり。そは那明玉八顆の內中なる、義字あるを所持したれば、犬江親兵衛と共に五名、必宿因あるべきよしを、思ふによりて、なほ又おもふに、實にその毎は、玉の數に相稱ひて、必八人あらんずらん。各仁義八行の、德を天地に稟得たる、ものにしあらば速に、招きよせまくほしかれ

に得たる、念珠にあなれば、他が生涯、身に放さで、深信怠りなかりしに、その看數の大玉に、初は如是畜生、發菩提心といふ八字あり。後は變じて、仁義禮智忠信孝悌といふ、八箇の文字に做見れしは、素より靈物たるに似たり。然ば那、八房の犬の最期に及びて、菩提心を發せしと、又那犬塚、犬飼、犬田、犬江の儕幾名歟、各犬を氏として、各那身にある痣の、その形牡丹に似たるも、その明玉を感得して、出生時を同くしたるも、又是奇中の大奇にして、その犬士は信乃們と共に、かならず是八人あるべき、玉の因緣、その人を得て、舊に返れる所以ある歟。遮莫伏姫が、終焉の折忽然と、光明を發ち散亡たる、玉の往方を求んことは、最做しがたき所行ならんを、宿望虛しからずして、玉と人とを得たりしは、孝德入道、大坊が、道心年來堅固なる、一念竟に幽冥に、通じたるにぞあらずらん。是併照文が、勤功も亦尠からず。惜しいかな、相見る所の、三犬士を伴ふて、かへりまゐらざりし事、尤遺憾の至りなり。然るにても、那大八の、犬江親兵衛仁とやらん、尚四歲の小兒にて、神隱に遇ひしと歟、存亡心もとなき事也。なれども他們は凡人ならず、各感ずる所あり。その宿因の故をもて、生出たるものならんには、縱窮阨ありとても、又神佛の冥助によりて、必恙あるべからず。天緣熟する時至らば、件の八士具足して、當家股肱の臣とならん歟。就て照文が倶して來ぬる、犬田小文吾

あり。その疑しきを尋ね、足らざるを听果て、只顧感心の外あらず。姑且して宣ふやう、是等の密議は、大殿（義實をいふ）の、御世に仰付られて、賢慮に出たるよしあるを、我のみ听措くべきにあらず。照文はその妙眞と、文五兵衛を相具して、瀧田殿（義實をいふ）へまうし上よ。我先騎馬の使を馳て、先だちて注進させん。長途の疲勞さぞあらんを、無心なれども、快ゆきね。と仰に照文欣然と、言承を稟し、退り出て、然而文五兵衛と妙眞に、稻村殿の仰のよしを、箇様々々。と傳示して、倶して瀧田へ赴きけり。爾程に義實朝臣は、稻村殿の使者の注進を听給ふに、蟇崎照文が歸國の趣、丶大法師は恙もあらで、抖藪行脚に他事なき事、竝に信乃現八小文吾、親兵衛額藏、五犬士の事の顚末、この餘、文五兵衛妙眞、房八沼藺們が事までも、今番照文がまゐらせたる、書册に載て候とて、そをしも晋呈してければ、義實感悅淺からず、近習に讀し、听果て、照文を等給ふ程に、蟇崎十一郎照文は、文五兵衛妙眞們を相具して、瀧田の城に來著の日、義實朝臣に見參す。登時義實は、先照文を召よせて、その勤功を勞ひて、那明玉の事、犬士們の事、既に聞召れたり。幽冥の不可思議、鬼神の出沒、有とすれば、則有り、無とすれば、則無し。こゝをもて聖人は、怪力亂神を語り給はず。況凡夫の臆斷もて、辨ふべきにあらねども、那八顆の明玉は、伏姫が幼かりし時、役行者の冥助を蒙り、不思議


よしさね
杉倉氏元


この処第二輯にみえたる伏姫自殺の明年長禄三年の話也
功臣を集めて義實意見をとふも
堀内貞行

臣、山下定包を狙撃んとて、謬て、長挾介光弘を犯したる、杣木朴平が孫なる事、又古那屋文五兵衛は、那折無垢三朴平と血戰して、竟に朴平に撃れたる、那古七郎の弟なるよしも、又房八は、義俠勇敢、祖父朴平に彌倍て、犬塚信乃が窮阨の、必死に代り身を殺して、仁を做したる善報也けん、その子大八（實名眞平）は、四才になりぬる、今茲是月その日まで、開ざりける掌に、那仁字の靈玉を、握持しを、件の折に、開手の奇特ありし事も、又房八が妻沼藺は、小文吾の妹にて、そが横死の事さへ聞え、又惡棍舵九郎が、妙眞に懸想して、その情慾を果さん與に、大八の親兵衛を、搔攫ひ、石をもて、搏殺さんとせし折に、神靈、忽地雲中より、件の惡棍舵九郎を援發し、二段に、裂て地上に軀を投棄、且大八の親兵衛をば、神隱に躱し給ひけん、そが儘見えずなりし事、又信乃現八小文吾は、武藏なる、大塚の郷に赴きて、犬川額藏によしを告ぐべく、なほ仁義八行の、文字自然に顯れたる、靈玉感得の壯士、この外に、必三名あるべければ、八士具足の折を等て、共侶に徵に應ぜんとて、辭して大塚へ赴きし事の顚末、又照文は、後難の、心もとなきよしもあれば、妙眞文五兵衛們を相伴ふて、慌しく歸國したる事、又那滸我の御所（成氏）の家臣と聞えし、新織帆太夫が、信乃を穿鑿の事までも、照文詳に登錄して、稻村殿（義成をいふ）へ聞えあげしかば、義成の主、駭嘆じて、軈て照文に對面

る毎に做すことあり、忠信も亦大かたならねば、嫡子義成に隷られたるが、今番氏元貞行と共侶に、專政事に與りしより、世々當家の家宰たり。こゝをもて、杉倉堀内東荒川を、世に里見の四家老と稱へけり。然ば山下（定包）麻呂（信時）安西（景連）が亡びてより、上總の武士們皆悉、義實の威風に靡きて、征せざれども、贄を齎し、好を通じ臣附して、その掌握によらざるはなし。しかれども邊境には、折々野心のものありしを、義成箕裘を嗣ぐに及びて、いよゝます〳〵徳を修め、他が羞るを等給ひしかば、上總はさら也、下總まで、既に半國服從して、地を廣ること甚多かり。こゝをもて當主安房守義成朝臣は、安房郡稻村に在城して、房總の賞罰を掌り、又前治部大輔義實老公は、平郡の瀧田に閑居して、浮世の事を見かへり給はず。恁りし程に年を歴て、文明十年、秋七月初旬に、蜑崎十一郎照文が、犬江親兵衛の祖母妙眞と、犬田小文吾の父文五兵衞を伴ふて、下總の市河より、慌しくかへり來にけるよし、稻村の城へ聞えしかば、孝徳入道、大坊が、行脚以來の信も知られ、又那仁義八行の、玉の往方も知るよしあり。そを感得して生出たる、犬塚信乃戍孝、犬飼現八信道、犬田小文吾悌順、並に犬江親兵衞仁、犬川額藏（莊介と改名せしはこの後の事なり）義任們の身に、恁々の痣ある事、且犬江親兵衞が父なりける、山林房八は、曩に洲崎無垢三と相謀て、神餘長挾介の家の賊

明にするの義にて、犬士八人、その明徳を、同くするの意にも稱へり。當時この義を知るものなし。作者又按ずるに、義實朝臣の卒去の事、その歳月を、誌せしものに異同あり。里見記、及中村國香が房總志料には、舊記を援て、長享三年（是年延徳と改元あり）とす。（或はいふ四月七日。）又一説に、長祿三年八月二十三日、といへるは非なり。しかれども、こゝには件の二説を竝て、借用するよしありて、斟酌既に右の如し。閒話除煩。爾程に、安房の里見第二世の主、安房守義成朝臣は、この時尙弱冠なれども、文學武略、父祖に劣らず、よく民を撫、國を治めて、南總の藩屛たり。是に加ろに、杉倉堀內の二老臣あり。又荒川兵庫助淸澄、東六郎辰相と喚做すものは、素是里見の譜第にて、義實の父、季基の家臣也。嘉吉元年、夏四月、結城落城の折、件の淸澄辰相は、義實の迹を慕ひて、敵の圍を殺啓き、辛く命を免れたれども、當時義實主從の、去向を知るよしなかりしかば、權且邊鄙に迹を埋めて、本意ならぬ世を不娛る程に、義實更に安房に興りて、武德八州に隱れなければ、淸澄辰相、怡悅に勝ず、倶に瀧田に推參して、宿志を訴稟しゝかば、義實も亦歡びて、留めて虛實を試給ふに、素より武功の猛者毎なれば、命ず

おなじ物思ひ、眉を顰めて退出けり。是よりの後幾日もあらで、家督讓りの規式あり、安房の御曹司義成は、堀内藏人貞行を使者として、隨便京都將軍家（足利義政）へ、よしを告發許を得て、安房守に任ぜられ、房總二州の國司たり。時に長祿三年己卯の秋八月、伏姫の一周忌に、義實は、遁世の、宿志を果し給ひしかば、その歡び大かたならず、この義を士民に徇示さして、瀧田の城内なる西のかたに、閑寂の別館を造らして、其首に閑居の折からは、突然居士と自稱して、敢政事を見かへり給はず、心菩提に入るといへども、なほ思召よしやありけん、祝髮得度はし給はず、是より烏髮の優婆塞にて、伏姫竝に孝吉們が、菩提をさ〳〵弔ひ給ふ、看經唱名の暇には、松風蘿月を友として、或ときは花に嘯き、又或ときは雪に眺めて、情景兩ながら得ることあれば、詩を賦し、又歌を詠じて、欝を醫し、悶を禳ふ、くさばひとなし給ひにけり。夫突然は、出る貌也。既に菩提に入りながら、突然としも號するは、出塵出離の出にして、世に超然たる所以なるべし。且突は、穴に從ひ犬に從ふ。その犬を穴にせしは、八房の犬、富山に在りし日、伏姫の德に化せられて、菩提心を發しつゝ、姫の死に相從ふて、倶に穸穴を得たる義也。又突字を分つときは、是則宀の下に八の犬あり。宀は家也覆屋也。是より二十餘年の後、八犬士當家に聚合て、八行をもて、その君を、堯舜に致すの祥あり。又然

後世議論定りて、軍記野乘に寫すもあらば、識者に爪を彈れて、恥を知ず、といはれざらんや。汝達よりも、義成が、幾回となく悲しみ請ふて、隱遁の義を禁めしかども、用ひざりしは愆る故也。願ふは汝達、明日よりして、義成に仕ること、我に仕へし日の如く、その足ざるを補ひて、臣たる道を盡されなば、四境いよ〳〵無異にして、我身も後安かるべし。この義をこゝろ得よかし。といと叮嚀に示し給へば、氏元貞行、以下の老黨、言の道理に逼られて、皆感涙の挫むを覺ず、應難たるそが中に、氏元やうやく頭を擡て、謹て稟すやう、御諚うけばり奉りぬ。然までに思召るゝを、誰か違背仕らん。只おそらく、某們は、結城沒落より、先君の、顧命に從ひ奉り、本州へ御渡海の、始よりして辱く、家宰の列に在りといへども、素より補佐の才學なし。君御隱遁ましますとも、なほ御曹司（義成をいふ）のおん後見を、なされん事こそ願はしけれ。といふを義實推禁めて、否とよ、その議は無益也。既に浮世を厭ひては、何でふ浮世に掛念せん。家督を我兒に讓りなば、義實をばその日より、世になき人、と思ひねかし。我こゝろ既に決せり。なほ具には、異日に沙汰せん。各々退り候へとて、軈て奥にぞ入り給ふ。嚴命返すによしもなき、氏元並に貞行們は、いとゞ本意なく思へども、然而あるべきにあらざれば、卒とばかりに衆人と、齊一席を龍の間に、土圭聞ゆる巳の時の、頭達たる老毎が、心は

ひ給はで、有一日、杉倉木曾介氏元、堀内藏人貞行を首として、有功の老毎を、遺もなく召聚合て、みづから諭し給ふやう、汝達、日者我隱遁を、しかるべからずとて諫めたる、その言理りありといへども、爭何せん、嚮には我一言の、失により、伏姫を、八房の犬兒に伴せて、心に羞ること多かり。哀しきかな、伏姫は、羞月閉花の閨秀なれども、賢才義勇は、親恥かしき、男子魂あればこそ、親の與に一言の、信を切に失はじとて、那畜生を伴侶として、深山に光陰を彌りしに、幸ひにして身を汚されず、思ひがけなく孝德が、飛丸の與に、八房と、倶に命を隕したる、その折念珠の靈驗あり、且伏姫が今般に遺せし、言の葉虚しからずもあらば、那塞翁が馬に似て、禍鬼反て我兒孫們の、福草になりぬべき、よしある祥歟、知らねども、椿樗の八千歲とも、祝し一個の愛女を、非命に死せしのみならず、妻五十子も、子をおもふ、夜の鶴の膓斷離れて、同月日に黃泉に赴き、又照文が父、蜑崎照武は、愍に姫を趕んとして、身を谷川の水屑となしぬ。是さへ不便の事なるに、又金碗大輔孝德は、不測の辜を醸せしより、我すら救ふことを得ず、撃つべかりける頭顱に換て、頭髻を剪も拂ひつゝ、不二法門に入らせしかば、遂に後なき人となりて、他が親、八郎孝吉が、我を幇助て甚高かりし、功に報ふに由なくなりにき。縡と云恰といひ、皆義實が疎忽の失、かくの如くに至れるを、なほ阿容々々と世に立ば、

しを、世智介と小才二は、喘々趕て來て、路二三十町送りつゝ、告別して還る折、東しらみて、在曉の、月は遠山の峽に入りにけり。畢竟七個の犬士們が、結城の法會に赴きて、後の話說甚麼ぞや、分數あり、

狗兒佛性趙州會識。相接犬牙先獨突然。

まかなくに露のめぐみに生立てひとはまづいづるいぬたでの花

這詞歌の意を知まく欲せば、下の回より後々まで、解分るを聽ねかし。

第九十七回

身將征せずして地を二總に廣くす
兇賊心なくして自積惡を訴ふ

話表、安房上總二州の守、里見治部大輔源義實朝臣は、往る長祿二年の秋、伏姫富山に自殺の折、大かたならぬ奇瑞あり、且金碗大輔孝德入道、大坊は、當時八方へ飛去たる、那八箇の明玉の、往方をいかで索んとて、忽地行脚の錫を鳴らして、飄然として辭し去りしより、他が安危も心もとなく、然らでも亦、賢を招き、士を徵ん與にとて、蜑崎十一郎照文を、その投す方へ遣せしに、稍久しく信もなき、この比よりして義實主は、隱遁の情願あり、諸臣の諫めを用

給へ。といふを犬士們なほ听かず。好意に悖るは、無禮ながら、主の翁の病厄にて、いとうれはしき折なるに、縱盃を賜るとも、何樂しくて受らるべき。恁れば盃酒も、亦益なし。且、大法師は、石禾にて、姑且劵緣の折からも、一錢の外受給はず。今番の法會は、他の施主を、仰がずとこそ聞えしに、東西齎らするも、亦益なし。願ふ所は、主の翁の、醫藥看病由斷なく、よく孝養を盡し給はゞ、それに優たる功德はあらじ。と迭代りに語を續ぎて、心も對の理義潔白、又いふべうもあらざれば、有種は、感涙の、拭むを覺ず沈吟じつゝ、やうやくその意に從ひけり。しかれども夕饌は、每よりも心を用ひて、聊中酒の欵待あり。重戸も奥より出て來て、父夏行が大病にて、法會詣の情願を、得果ざる便なさを、只云云と繰返す、倭文の苧環、續一續、曲なく浮る盃も、折歹ければ犬士們は、程なく辭して、歡びを、演て別を告るのみ。肚裏には夏行を、倶したる路にて像のごとく、中風暴に發りなば、倶に難義の旅宿を累ねて、法會に後るゝこともあらんを、その折ならぬは切てもの、幸ひなり、と思ひたり。既にして夕饌果ても、有種はなほ侍りて、只管別を惜みけり。恁而その詰朝、有種は、七犬士を、郷盡處まで送らん、と豫は思ひたりけるに、曉天よりして夏行の、病著危窮に及びしかば、身邊を離るゝことを得ず。七犬士も亦その機を猜して、重て別を告るに及ばず、いと遽しく出てゆき

り給ふべうもあらず。そを今さらにふり捨て、別を告るは本意ならねども、我們醫師にあらざれば、這里に在りても、亦益なし。明日未明より啓行して、連りに路次を急がずは、必那期に遇がたからん。この義を許容あれかし。といはれて有種困じたる、頭を傾け沈吟じて、示教の趣、至極せり。親が願ひし今番の同伴、その期に及びて、憶りなく、病著により果さずなりぬ。さぞな本意なく候はん。在下親の名代に、立まくほしく思へども、こよなき大病なるをもて、それさへこゝろに儘せがたかり。明日首途をし給はゞ、おん伴當をまゐらせん。馬まれ轎まれ乘らせ給へ。その義に障りは候はず。といへば現八大角も、小文吾荘介毛野と倶に、月來止宿の歡びを、叮寧に演、別を告て、目今貴意に掛られたる、伴當などは願しからず。犬塚犬山も、恁なるべし。我們は、身を浮萍の、旅より旅にはふらして、東西南北せざることなく、皆不自由に熟たるもの也。そを憖に伴當あらば、反て路次の煩ひならん。この儘放ち遣られんこそ、そは倒に幸ひなれ。と推辭ば信乃と道節は、又有種にうち對ひて、諸兄弟のいふ所、是我們が眞面目、那外物を飾るは要なし。扇谷の寄隊、その沙汰絕て、後安きに似たれども、今番は殊更微行也。這七人にて事足れり。只うち措し給ひね。と推辭を有種強かねて、然らば今宵、送別の、盃をまゐらすべく、、大大德へ布施物の、一裹を寄せ奉らん。この義ばかりは許させ

春は過ぎて、夏の肇になる隨に、苗頃いそぐ門田の畔に、開く楊櫨花に携りつゝ、早晩延る自然諸の、蔓より長き日の涯り、朝の事を忘れても、俟るゝものは杜鵑、青山遠く鳴亘る、肆月初の九日に、七犬士們は明日未明に、齊一當處を起去りて、はやく結城へ赴んとて、夏行にも恁々、と告て准備をいそがせしに、この日、下晡の左側より、夏行暴に病發りて、ものも得いはず、手脚も動かず、その燈またたく中風にて、才に氣息の暢ふのみ、うち臥たる儘、人事も知らで、漿水も吮に下らねば、重戸は驚き、うち歎きて、枕方に凭り、後方に侍りて、介抱に暇もあらず。有種も是が與に、醫師を招き、驗者を請ふて、周公が哺を吐くに似たれば、一家兒なる奴婢までも、甲乙となく奔走して、この夜は睡るものもなし。七犬士們はよしを聞て、倶に驚き憂るのみ。恁る折からふり捨て、出てゆかんはさすがにて、迭代に病牀に、赴きて問慰め、心ともなく又日を過して、肆月十三日になりしかば、信乃道節們は焦燥て、自餘の犬士と商量するやう、時は得がたくして、失ひ易かり。主人の病著に拘づらひて、今番の法會に赴かずは、後悔其首に逹べからず。與之七に別を告て、明日は必出去らんとて、却有種を招きよせて、信乃道節がいひけるやう、丶大法師の法會の事、主の翁の望に儘して、同作の約束ありといへども、爭何せん、天に不測の風雨あり、人に不豫の病患あり、翁の病痾、一朝に、瘥

朝ひて、勉て看經しぬる折に、竈門の薪の燃退去り、鑊に飯の焦んとせしを、或は鰒著け見かへりて、いと喋々しく炊妾を、罵るも間これあり。或は猫兒の鮮介を偸み、或は慈烏の柿蕾を破るを、耳いと聰く听著て、慌しく人を喚ぶ、念佛者流は、皆是なり。我一念を擲ちて、心の彌陀を求めずは、何によりて成佛せん。心を眞俗二道に掛ても、口に佛名を唱れば、必利益ありと思ふは、皆是愚痴の迷ひのみ。そを比興るにあらねども、丶大大德は、先亡の、菩提の與に石木を去て、既に結城に到りては、その投す所、菩提の外なし。縱庵に訪ふ人ありて、終日喚て驚すとも、心視聽の間にあらず、絕て應のなかりしは、所謂維摩の默ならん。いとも尊したふとし。と只管稱賛したりしかば、大家有理。と疑ひ解けて、毛野も笑局に入りにけり。姑且して信乃がいふやう、大德の逆示させ給ひし、法會は往る嘉吉元年、辛酉の夏肆月十六日、結城落城の忌辰なるべし。三月も既に盡んとすなれば、法會の本日、前三四日に、我們那地に赴きて、件の菴主を相定めずは、事不便にして、後悔あらん。といへば大家點頭て、その議、孰も同意也。來月十一、二三の時候には、皆共侶に首途せんとて、その日を遲しと等つ程に、主人殘三夏行も、一路たらまくほしといふ、情願辭がたければ、信乃們は既にその義を許して、一路八名と定めしかば、夏行斜ならず歡びて、逆旅の准備をしたりけり。左右する程に、

那菴主が、尋ねまつる、ヽ大法師でましまさば、外がましくも刀禰們の、使のよしを知らせばや、と尋思をしつゝ又喚掛て、使に來たり、犬七隻より。犬よ犬よ、といひしかど、そもいひ甲斐は候はず。菴主は終日、飲ず啖ず、念佛にのみ日を消し給ふを、共侶に斷食して、凡夫の堪んよしのなければ、やうやくに思ひ絕て、昨夜の歇店にかへりつゝ、臥しつゝ更に尋思をせしに、左ても右ても甲斐なからんを、這里に旅宿を累んより、快立かへりて、この趣を、刀禰們に報まゐらせて、後の指圖に儘せんず、と思ひにければ、きのふの朝、歇店を立出、路次をいそぎて、剛才歸著仕りぬ。と一五一十の長談を、うち聞く夏行有種は、應するのみ沈吟じたる、登下信乃は、那這と、自餘の犬士にうち對ひて、各々何と思ひ給ふぞ。世智介男が、菴主の面を、相ることを得ざりしとても、浮世の外に締びたる、草の菴の故からぬにて、ヽ大大德ならんこと、思ひ半に過ずや。と問ば莊介、及小文吾道節も倶に點頭て、然也。應をせられぬにて、いよゝ疑ひなきものの歟。そを犬七隻の使ぞ、といひ知らせしは、名にしおふ、世智介、適出來したり。と譽れば現八うち含笑て、件の菴主を喚掛ても、絕て應をせられざりしは、返璧にて、犬村主を、我訪ひしに相似たり。是に就ても雛衣の、刀自こそ最惜しかりけれ。といひつゝ後方を見かへれば、大角憶ず嘆息して、世に在俗の老翁老婆が、朝々暮々に家廟に

赴きて、樹間立潛き那這と、相れば果して、老樹の下に、最も寂たる草菴あり。竹の柱萱の簷、巳時なれども、造らず飾らず、筵才に六枚を布きたる、正面の高座には、阿彌陀如來の畫幅を掛て、内に一個の法師あり。香染の麻の法衣に、皂き紗綾の袈裟を掛て、本尊に朝ひ奉り、連りに木魚をうち鳴らして、念佛して在せしかば、是なるべし、と猜しつゝ、ものまうさん〱、と喚ぶこと數回に及びしかども、見かへりもせず、應もせられず。登時小可思ふやう、こは勤行の最中にて、應對便なき故なるべし。事果るまで等んず、と尋思をしつゝ日の暮るゝまで、獨鵠立たりけれども、念佛の聲間斷るゝことなく、何時を涯りと知るよしなければ、怺難て又幾回歟、ものまうさん、と喚かけたるに、菴主は聾兒なりける歟、聞くとはなしに、知ざるに、似たれば術なく、城下にかへりて、歇店を求め天を明して、次の日夙めて立出て、又那菴に赴きしに、菴主の勤行きのふの如く、喚べどもよべども、見もかへらず。那里は茂林深くして、耳に聞く衆鳥の聲、眼に見る狐兎の足跡、霏々として零る花稀にて、寂寞として詣る人なし。この日も獨立消せしに、菴主の背を見たるのみ、相貌年齢いかなりけん、うち登りて面貌を、差閾んはさすがにて、屨を隔て痒を掻く、心地せられていふ甲斐なけれど、遙々脚力に立られながら、その人としも知るよしなくて、いたづらに還らんこと、本意なさ限りも候はねば、倘

主們を穿鑿も、やうやくに怠たりて、噂も聞えずなりにたり。恁れば後安かるべし。と小才二が報しかば、七犬士商議すらく、丶大　徳の石禾を去て、結城へとて赴きしより、僂れば既にはや、越に六十餘日を歷たり。來ぬる月の法會には、我們那地に赴きて、對面せんこと勿論なれども、那大敵を等たる故に、一番も音耗せず、實に結城に在するや、推量のみにて心もとなし。悄々地に人を遣して、安否を問こそよかめれとて、意衷を夏行に告て相譚ひしを、夏行聞て、異議に及ばず、忍岡へは間諜兒を、遣すも要なくなりぬ。その脚力には世智介こそ、しかるべけれ。と眞實だちて、世智介に恁々と、事のこゝろを得さしてぞ、次の日結城へ起し遣るに、七犬士們はなほ一霎時、世をし潛べば、一封の、書翰は故意齎せず、只口狀を世智介に、言示せしのみ、他事もなし。恁而六七日を歷る程に、世智介結城よりかへり來つ。因て夏行有種と共侶に、犬士の身邊に赴きて、那地の動靜を報るやう、小可結城へ到著せし日に、寺院はさら也、客店每に、甲斐の石禾より來ましたる、丶大法師の在する歟とて、隈もなく尋問ひしに、知れるもの一人もなし。そが中に、一個の老人の誨るやう、這里より十町あまり西に、嘉吉の古戰場なる林原あり。近會何處より來給ひけん、一個の行僧の、其頭に草の菴を締びて、獨念佛して在する也。他なるべき歟、快ゆきて、尋ね給へ、といはれしかば、軈て件の林原に

るべき勢ひにあらず。なれども倘我們が、旅亭を人に知られなば、後の變爻料りがたかり。只小心にしくことなしとて、遠く謀り深く潛みて、徐に光陰の過るを等けり。爾程に、嚮に道節信乃に從ひて、倶に舊怨を雪めたる、這穗北なる莊客們は、今番道節が拿らしたる、一百金を配分せられて、義の與に財を惜まぬ、豪傑の心操を、又今さらに感激したるに、傷痍たる兵毎には、別に又有種が、心屬るよしありて、費用に匱しからざりければ、且歡び、且勇みて、天晴大敵よせも來よ。又花々しき戰ひして、洪恩高義に報はめとて、各鏃を磨ぎ、盾を枕にして、齊一敵を等つ程に、件の八個の刀瘡兒們は、刀瘡なごりなく瘥にけり。初他們が療養も、郷に一個の醫師あれば、他郷に徵ることをせず。こゝをもて道節が、復讐の從卒の、這地方より出たるを、知るもの絕てなかりけり。恁りし程に春もはや、花開馨ふ三月になりぬ。折から五十子の風聲亦復聞えて、定正主はいぬる日に、忍岡より歸城あり。北條氏と和議破れ、山內管領家、顯定主と合體せられて、長尾景春も和順せり。さばれ佞人なほ多かれば、持資親子を拒み稟して、その計略を用ることとなし。この故に持資は、病著ありと聞えしのみ、今もなほ相摸なる、糟谷の館に屛居して、稍久しく出仕せず。又那河鯉孝嗣も、讒者の舌の劍を怕れて、こも亦病痾に假托けてや、忍岡の城に在り。人の心の一致せで、城內日每に事多ければ、犬山

現八小文吾も、大角が議を是とし稱へて、又云云と論ずるを、毛野は聞つゝ含笑て、諸兄弟の討論は、皆その趣ありといへども、敵の推寄來ぬるや、否や、いまだその機を知ずして、我進退を論ずるは、抑亦早からずや。今愚意をもて料らんには、忍岡と五十子へ、間諜兒を遣して、敵の動靜を聞知らば、便宜を得ること多からん。この餘は目今要なし。といふに、大家有理と應て、然らば明日より間諜兒を、日毎に那里へ遣すべけれ。といふを夏行うち聞て、そは在下と有種に、うち任し給へかし。件の二箇所へ遣すは、世智介小才二しかるべし。他們は事に熟たるもの也、その義を命ずべうもや。と問へば現八大角は、憶ずもうち笑て、現那一人は、世才あり。必愆あるべからず。といふに大家再議に及ばず、商議既に決りけり。こゝをもて夏行は、世智介と小才二に、件の機密を聶き示して、鯽魚鰻鱧、野菜なンどを、擔賣る小經紀兒に、件の二僕を打扮して、是より日毎に五十子と、忍岡へ遣しつ、城の動靜を揆らせけり。是により、那根角谷中二と、美田駁蘭二が計ひて、躬方の首級の梟替に、嫗内船虫を梟首したる事、又管領定正は、忍岡の城に在り、道節に射られたる、箭啣の故なる歟、折々頭痛に堪ずとて、醫療に日屬を過す事、又道節信乃、毛野們が在處を索ねよとて、那這へ下知せられし事、又五十子の城、修復の事、漸々に聞えしかば、七犬士們は冷笑ひて、しからんには速に、攻撃

貽すに庶からずや。義を見てせざるは勇なき也、權且這里に日を彌り、敵の動靜を覘ふて、推寄來ずは、その折に、結城へゆくとも遲かるべからず。那議に任し給はずや。と詞徐に解諭せば、現八大角毛野小文吾も、寔に然也。と頷きけり。是により信乃道節は、やうやく衆議に從ひて、敵を等て防戰ふ、事の計議に及びしかば、主人夏行有種は、歡びて、諸犬士の、籌策を听まくす。當下信乃がいふやう、這莊院は坦地にて、敵を防ぐに妙ならねども、前に一條の小川あり、後は都て水田也。且左右の路陜ければ、多勢といふとも推並て、稠入ることは克ふべからず。箭種を多く准備して、思ひの隨に射て仆す、進退は又時宜によるべし。豫躬方の莊客們に、謀じ合して、事あらん折、皆自燒して這莊院に、盾籠るこそよかめれ。といふに莊介うち頷きて、その議寔に緊要ならん。異日寄隊の大將は、持資親子を除くの外、本事は昨日よく知りぬ。中一中て投す方へ、退くことも易かるべし。といへば道節眼を瞪りて、なでふ退くことあらん。持資親子が出て來ば、願ふ所の敵手也。百騎か一騎になるまでも、擊果さずして何處へいぬべき。這奴にも舊き怨はあるを。と敦圉猛く論ずるを、大角徐に見かへりて、然な宣ひそ、犬山主。我們は末生より、里見殿に宿因ありて、徵に應ずる身ならずや。そを忘れて歟、又さらに、那大敵を擊んとて、身の危きを思はずば、匹夫の勇といはまくのみ。と諭せば

二十餘年の經營を、空になさんは惜からずや。恁れば我們七名は、はやく結城に赴きて、四月の好事を等んと欲す。その故は箇樣々々、恁々の事ありとて、丶大法師は甲斐を立去り、獨結城に赴きて、里見殿のおん與に、先亡嘉吉の諸靈魂を、弔んといはれしよしを、いと詳に解示して、恁る約束ある事なれば、我們は那地にゆきて、丶大法師の旅院を尋ね、結城の城下に歇店を求めて、法會の折を等つときは、翁を連係することなく、我們も後安かるべし。因て別を告まうす。兩三日の旅ながら、今より首途すべけれ。といふを夏行うち聞て、そも亦餘義なき事ながら、結城氏(成朝)こそ成氏方なれ、宇都宮は、山内管領(顯定)の方人也。然ば結城に在するとも、後難あらず、と決めがたかり。且我鄕は他人を雜えず、開發の始より、皆腹心のもののみなれば、這里に潛びてをはするとも、決して敵に聞ゆることなし。縱外より洩聞えて、大軍推寄來ぬる折、諸君子這里に在さずとても、我們必免るべからず。願ふは四月の時候までも、長閑に杖を駐め給ひね。數ならねども在下は、結城籠城の殘黨也。諸君子と共侶に、いかで那地に赴きて、件の好事に會まく欲す。いかで／＼。と諄かへせば、有種も亦詞を盡して、倶に禁めて已ざりしを、荘介も倶にうち听て、信乃と道節にうち對ひて、喃犬山主、犬塚主、主の翁の意見も理あり。我們這里を退きて、後に大敵推寄來ば、そは身を脱れて禍を、人に


小文吾
現八


百金の餽遺
道節土兵に欺く

今番の役を相憐びて、皆舊怨を雪ん、と庶幾たる兵卒なれば、賜るとてもいかにして、這重賞を受べきや。恩賞の趣は、在下異日傳へ示さん。この義を許させ給へかし。と推辭めば又有種も、道節にうち對ひて、目今家翁の稟せしごとく、最憚なる言ながら、諸君子は一所不住の、客遊にてをはすれば、路費に餘財ありとても、人に施す折にあらず。といふを道節聞果ず、道理は寔に然ることながら、人各志あり、贈りてこれを受られずは、川へも棄ん、淵へも沈めん。功あるものを賞せずは、何をもて復人を使んや。古の義士勇夫は、刎頸斷金の交りあり。今客遊の折也とて、路費の多少をいふことかは。と論ずる聲の憶ずも、高うなるまで焦燥つを、信乃大角們は傍より、推禁めつゝ、夏行と、有種にうち對ひて、我們も亦犬山と、同意たること勿論也。願ふは枉て受たまへ。推辭は要なきことなるべし。と諭せば現八小文吾も、毛野莊助も共侶に、詞を加て果しなき、義俠に服する夏行有種、且感じ且謝して、しからんには力及ず。他們に傳へ候はん。と應て金を受にけり。登時信乃と道節は、又夏行にうち對ひて、我們這里に逗留せば、告訴するものあらずといふとも、五十子へ程遠からず。それよりもなほ近かる、忍岡も敵城也、竟に那里へ聞えやせん。先度の耻を雪んとて、大軍推寄來ることあらば、何をもてよく防ぐべき。そも我們は覺期の事也、怕れていふにあらねども、翁一家を連係して

ぎたり。約莫這回の復讐は、落鮎生の帮助によりて、多く隊兵を得たればこそ、諸兄弟と共侶に、粉骨を盡したれ。恨る所は定正を、撃漏したりけれども、敵を斫ること數百名、身方は一個も戰歿なし。こも亦翁の洪福にて、我們が幸ひ也。那刀禰兒八名は、窮所にあらずと聞えしかども、醫療藥養しかるべく、心を屬て給ひねかし。只那八人のみならず、今番の大義を資られたる、軍功の人々に、牽出物せまほしけれども、久しく浮浪の身にしあれば、それすらこゝろに儘しがたかり。因て犬塚們と商量したり。といひつゝ准備の金一裹を、拿出て扇にうち載て、これは是軍用の、與に年來腰にしたるを、多く路費に做したりき。この餘は鄕に里見殿より、賜りたる金あるのみ。そは今番義兒弟、六名に配分せん。憖れば我貯祿は、只這微小の外あらず。薄義を嫌ひ給はずは、那人々に贈らせ給へ。といひつゝ遞與すを、夏行は、聞も得果ず、推戻して、そは又思ひがけなき事也。豫知られまつりし如く、扇谷の管領は、有種が與にも亦、先君の寃家也。又那嘉吉の兵亂より、在下も亦舊怨あり。なれども我身は老饒ひぬ、女壻有種が單身にて、車を碎く東海公の、帮助を求る才なければ、復讐の大望は、企及しがたしとのみ、思ひ絕て候ひしに、料ずも諸英雄の、驥尾に附たる今番の大義は、素より人の與ならず。且我下なる莊客們は、皆是豐島の舊卒にて、那田横が五百個の、從類にこそ及ざらめ、

囁きて出てゆきしを、心もとなく思ふのみ、推禁んはさすがにて、重戸と倶に其頭の事を、いふとはなしに等不娛て、一日を工夫に消せしに、その宵一個の雜兵が、躬方の刀瘡兒七八名を、快船にうち乘て、漕してかへり來にければ、越に初て道節が、勝軍の事の顚末、犬阪毛野が復讐の、事さへ具に聞知りて、その歡びいふべくもあらず、刀瘡兒には藥を與へ、更に獲にうち乘して、各宿所に送遣し、却勝軍を賀びの、酒肉を悄々地に准備して、道節們を等程に、七犬士も有種們も、四更の左側にかへり來にければ、夏行は重戸と倶に、客房へ迎入れて、勝利の歡びを演るのみ、更闌たれば、意衷を盡さず、昆布搗栗打鮑を肴にて、盃を薦めなどす。この折毛野莊介小文吾は、夏行と重戸にも、初對面の口狀あり、諄々しければ、略ぎて寫さず。幾十個の隊兵們は、船にて飽まで東西賜りぬ、明日見參に入るべけれとて、門より辭して退りにけり。左右する程に、五更の鐘迥に聞えて、家鷄も數鳴比になりぬ。各々疲勞なきにあらねば、信乃道節は、現八、大角們と共侶に、盃を辭し、席を去りて、毛野莊介小文吾に、案內をしつゝ儲の臥房に、入りて枕に就にけり。却說その次の朝、每よりも遲かりける、旦飯も果し比、主の翁夏行は、有種と共侶に、七犬士の安否を尋て、昨日の戰ひ、その圖に當りて、武略勇戰の光景を、有種に听たりとて、連りに稱贊したりしを、道節は推禁めて、否その賞美は分に過

たりといふ、那密計を聞知りて、いよよ快らず思ひしかば、諜じ合し言を設けて、折に觸ては孝嗣を、讒言するもの多かりしを、定正は聞流して、一霎時は掛念せざりしも、讒謗旣に度累りては、那衆口は金を鑠し、市に三虎を致すといふ、唐山人の譬喩に漏れず、定正竟に疑ひて、孝嗣を忌むこゝろあり。程なく外樣へ退けて、寵辱はやく地を易たる、孝嗣も亦その意を猜して、怕れて病痾に假托けて、久しく出仕せざりしを、奸黨は得たりとして、只管主を唆誘す、讒奸已ときなかりけり。この故に定正は、孝嗣が罪の虛實を、有司に命じて召問せばや、と思ふものから、いぬる比、危窮を救ひし軍功あるに、今證据もなき罪を糺して、情なき沙汰すべくもあらず、と思へどもなほ思ひ難しに、嚮に犬山道節が箭啣にて、腫たる天窻は愈しかど、是より頭痛屢發りて、堪がたき日の多かりければ、その療養に拘づらひて、孝嗣が事の虛實を、糺すに遑なかりけり。休題再說。道節信乃、荘介小文吾、現八大角は、犬阪毛野を伴ひて、有種幷に數十個の、隊兵と共侶に、流に從ひ船を漕して、二十二日の曉天に、千住河にかへり來にければ、咸馬頭上より陸に上りて、穗北を投て急ぎけり。然ば又落鮎有種が岳父なりける、氷垣殘三夏行は、嚮に猛可に有種が、土兵を驅催して、道節が大義の帮助に、船を柴浦へ出せし折、その事の趣を、告げて做すべきよしのなければ、只崖略を恁々と、

相錯へて、援兵を出さゞりしを、後悔の折、五十子より、戰粟の徵ありしかば、異議に及ばず齎して、その備に充てけり。是により谷中二們は、土木の工匠を多く聚合て、城の修復を急がするに、城隷の民毎が、敵より米錢を受たるを、なほ酢く思ひしかば、飽までに課役を被て、責使ふこと苛刻く、更に臨時の租税を命じて、拿債ることも亦多かり。この故に莊客們は、いよ〳〵信乃が仁心を、追慕はずといふものなく、谷中二が刻薄なるを、最恨しく思へども、却あるべきにあらざれば、夜となく日となく驅使れて、修復の役を果しけり。爾程に定正は、二月下旬に、忍岡より、五十子へ歸城して、谷中二馭蘭二、その次々まで、有司の功を賞め祿を增て、逃たるものを、貶しなどす。又犬山道節們が、隱宅を知るものあらば、悄々地に訴出よとて、百貫文の賞錢を掛て、那這へ徇示せしかども、信乃が德を慕ひぬる、民はさら也、官府を、假りて己が利を欲する、殘忍無賴の破落戶も、道節們が在る地方を、實に知るよしなかりけん、久しくなるまで云云、と告訴するものなかりけり。恁て又定正は、河鯉佐太郎孝嗣が、功を思ひ才に愛て、親の喪に居ることを許さず、幾日もあらで召出して、近習に做して使れたる、孝嗣も亦恩を感じて、日夜の勤勞勸ふことなく、最正首に仕へしを、初縁連と同意也ける、奸黨は歡ばず、縁連の擊れしは、他が親守如が、蟹目前を誘棄して、犬阪毛野の手を借り

趣、及五十子の城は、敵の大將、犬塚信乃戍孝、と喚做す猛者に攻陷されて、過半灰燼になりしかど、信乃は、一霎時も留らず、倉廩なる戰粟を、飽まで民に分拿らして、道節毛野們の隊兵と、一隊になりて、往方を知らず。退く折に、高畷にて、仁田山晋五を誅戮せられ、その餘城方の首二十餘級を、皆濱表へ梟られしといふ、事詳に聞えしに、その後又來ぬるものが、蟹目前の自殺の事、河鯉守如親子の事まで、這那となく報しかば、憲重色を失ひて、嚮には那里の遠烟を、民の失火と思ひ做して、加勢遲滯に及びしこそ、かへす〴〵も不覺なれ。五十子の敵退くとも、那里を戍る士卒なくば、後の孽料りがたかり。はやく城番の隊兵を、遣すべし。と下知する程に、又五十子より來ぬるものあり。五十子の城内には、殘兵既に立かへり來て、倶に四門を戍るもの、二三百名ありといふ。恁ればその義も亦事後れて、いとゞ面目なかりけり。この故に憲重は、病著あり、と僞唱へて、日を經ぬるまで出仕せず。次の日忍岡へ使者をもて、定正の恙なきを祝し、且蟹目前の悼を演て、悄々地に定正の左右侍臣們に、東西を餽り、幇助を求めて、やうやく無異を得たりしかば、今戰粟の催促を、倒に歡びて、往日の愆を、補ふよすがなればとて、求められたる數よりも、多く戰粟を運送して、五十子の城へ入れにけり。然ば這回の怠慢は、獨憲重のみならず、石濱赤塚の城にても、藻鹽火ならめと

て、よしを忍岡なる主君に聞えあげ、近き係ぎの城主に報て、をさ〳〵戰粟を求めけり。是より先に、大石兵衞尉憲重が、大塚なる城の士卒們は、五十子の城の火を、兵燹也とは思ひもかけず、その折迥に煙を瞻て、城下の民の失火ならん、と猜しにければ、由斷して、姑且時を移せしに、火勢熾になりしかば、例のごとく、消防の、士卒五六十名を遣しけるに、そが途にて、仁田山晋五の、伴當の逃て來ぬるに、憶りなく遭ひしかば、越に初て、五十子の、火災は敵の火攻にて、孽三處に起りし事、竝に龍山緣連は、犬阪毛野胤智とかいふ勇士に撃れ、定正主は、煉馬の殘黨、犬山道節們に攻撃れて、戰ひ難義に及びし事、獨仁田山晋五のみ、逃たる歟、撃れし歟、その義は具ならねども、那里の凶變聞えしかば、大石の士卒們は、駭くこと大かたならず。しからんには這小勢にて、今さら那處へ赴くは、石を抱きて淵に莅み、薪を駄ふて火に近づくより、なほ危き所爲なるべし。皆共侶に立かへり、緣由を訴て、又右も右もすべけれとて、大家蹤を旋らして、大塚にかへり來つ、件のよしを報しかば、憲重憲儀、いへばさら也、城内の士卒驚噪ぎて、はやく加勢を五十子へ、まゐらすべし。と相罵りて、出陣の准備を做す程に、仁田山晋五の伴當の、痍を負ふて後れしものと、五十子の城兵の、當處に由緣あるものの、漸々に脫れ來て、定正主は恙なく、忍岡の城を投て、走り給ひし、といふ事の

よすがなるべきに、上よりは然る御沙汰もなく、佞人們が、我意に儘して、首級を海へ放下せしは、その行ひ敵より慘かり。恪ては後の戰ひに、誰か亦命を棄て、君の先途に達ものあらんや。顧ふに往日、戰歿の毎は、その心術正しくて、年來那佞人們と、相尅したるものなれば、佞人們はその忠死を、毫も憐む心なく、日屬の恨を復せしならん。只那強人夫婦の者の、罪惡不思議に露れて、這擾亂の折にしも、忽地梟首せられしは、佞人們の手を借りて、那天罰を示されけん。神の威靈歟、佛の利益歟、世は是澆季に及ぶといふとも、その事なしとすべからず。それかあらぬか、最奇也。嗚呼那不良の毎は、事を鬼神に借るものから、その做す所の隱慝に、冥罰あらんよしを思はず。君の憂を患るものは、是等のよしを聞えあげて、惶うも政の、正しからんを願へども、又那群小に中られん、ことしを怕れて默止すもあるべし。況や我は年青く、且その職にあらざれば、思ふのみにて術もなし。薄情かりける人ごころ、現戰世の習俗歟。と喞語がましくうち不娛て、獨胸をぞ苦しめける。こは是後の話也。爾程に、五十子の城内には、士卒漸聚來て、數百名に及びしに、戰粟は、敵の與に、都て施行に引れしかば、有司們これに困じ果て、民の敵より受たるを、咎めて拿復さんと思へども、然しては那犬塚信乃が、庫の白壁に寫したる、諭書の旨に違へば、亦復城を屠らるゝ、事もやあらん、と鬼胎を抱き

然とて其頭に棄措きては、鄙語にいふ耳を塞ぎて、鈴を竊むに似ためれば、已ことを得ず石を附て、遺なく海へ沈めにき。恁る首尾にて候へば、必御こゝろ休かるべし。と報るに歡ぶ谷中二は、含笑ながら頷きて、そは十二分の造化なりき。明日より又閻魔の奇特を、いふものいよいよ多からん。約莫這祕事は、美田生の方寸より、輒くうちも出されたる、奇々妙計なる、いへばさら也、縱作者は才子でも、戲子互ければ、甲斐なからんを、穴栗、和主も出來したり、大義にこそ。と勞へは、漫に歡ぶ事作より、馭蘭二はなほ笑しげに、我ならでは、と思ひけり。然ばこの事祕すとすれど、衆人はやく聞知りて、呆るゝもあり、譏るも多かり。そが中に、河鯉佐太郎孝嗣も、これらの事を傳聞て、嗟嘆に堪ず、思ふやう、現小人の用心は、巧なれども、反て拙く、智あるに似たるも、倒に愚也。然ば他們が計る所、主君の恥辱を塗隱さんとて、神靈に託し、鬼責に假りて、世の人を欺くは、只是小兒の戲れのみ。知ずや列禦寇が言にも、志士は、溝壑に縊るゝことを憂ひず、勇士は元を喪ふことを忘れず。忠臣勇士の、戰ひ利あらで、敵に首を捕らるゝは、素より是恥ならず。嚮に躬方の敗北に、踏住り寇を防ぎて、君のおん命に代りしは、皆是忠義の毎也。既にして寇は去りぬ。梟られたる躬方の首級を、妻子に賜り、忠死を譽て、厚く葬らし給ひなば、撃れしものは、死榮あり。そが妻子も御恩を感じて、慰る

第九輯　卷之三

第九十六回

管領讒を容て亰臣を疑ふ
鄕士義に仗て大敵を倏つ

却說穴栗專作は、當晚夥兵を從へて、五十子の城にかへり來つ、城の頭人、根角谷中二麗廉の宿所に赴きて、强人媼内船虫們が首をもて、躬方の首級と梟替たる、事の趣を報る折、又那美田馭蘭二も、專作が反命を、心もとなく思ひしかば、谷中二が宿所に來つゝ、更闌るまで等て在り。當下專作は、件の兩個の上職們に悄語くやう、嚮に仰示されたる、柴濱の奇談の事、卑職鑒定して候ひしに、その事甚分明にて、閻魔の靈驗、疑ふべからず。因て那媼内と、船虫が枯首を、斫らして高畷へもてゆきて、躬方の斬首二十餘級を、拿卸し梟替て、却那强人夫婦の背に、記されたる罪惡を、更に又牌に謄錄して、舊の牌と建替るまで、甲夜闇なれば、人跡絕て、誰にも知られ候はず。然りけれども躬方の首級は、その數二十に餘りたるを、扛擔する人はなし、非除夥兵們に搭駝するとも、そを城内へ返し入れんは、面正しくもなき所爲也。

閻魔の靈驗灼然なりけん、疑ふべくもあらざれば、専作只顧駭嘆じて、随便媼内と船虫が、枯首を斬せけり。この時既に日の暮ければ、専作們は件の首級を、高畷の濱邊へもてゆきて、然而斬梟られたる躬方の首級を、咸拿卸して、その頭髻毎に、一隻の小石を結著て、悄々地に海へ投沈め、更に又媼内と、船虫の兩箇の首級を、梟首臺に雙梟け、他們が背に記されたる、罪悪の趣を、牌に寫著け建置て、大家五十子の城へ還りけり。次の朝より是を見るもの、或は訝り、或は冷笑て、悪評いよ〳〵囂々たり。何人か又したりけん、建たる牌に、一枚の、短冊を糊添て、又落頌を寫したり、其謌に、

生る日にこの術あらば醜郎も美男にならん首の入れ替

とありけり、例の人の癖なるべし。事は扇谷の墨吏們が、兒戯の拙策に成るといへども、憖る折に媼内船虫が、罪悪の世に顯れしは、亦是造化の默契歟。畢竟二兇梟首せられて、後の話説甚麼ぞや、そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

找入て、殘留りし士卒們に、敵の退口を問ひしかば、初て高嶼の濱面に、躬方の首級を斬梟られて、多くあるよしを聞知りつ、はやく人を遣して、拿隱させんと欲すれども、既に二日に及びしを、如右せば世の人に笑れん。然ばとて棄措きては、いよゝ館のおん恥辱也。いかにすべき。と相譚ふに、始より、這五十子の城に在る、訟獄の掌職に、猯田馭蘭二と喚做すもの、賢だちて悄語くやう、そは究竟の事こそ候へ。きのふの朝未明に、柴浦なる里正們が、訴稟せし奇談あり。その義を什麼と鞫ねしに、媼内船虫と歟、喚做たる強盗夫婦が、那首の閻魔王の冥罰にやありけん、倶に牛に突殺されたる、屍骸にその做しゝ惡事を、寫著てありといひにき。こは未曾有の珍事なれば、展檢使を遣して、虛實を糾さんと思ひたりしに、那犬阪が狼藉の事聞えて、館の出馬ませしより、城さへ敵に火攻せられて、恁る光景になりたれば、那訴の虛と實を、知るよしもなく今に及べり。よりて計るに、柴浦へ、展檢使を遣して、事は虛まれ實まれ、件の強盗夫婦の首を、斬らして今宵悄やかに、躬方の首級と梟替なば、看るもの必疑惑ふて、こも亦閻魔の靈驗也、とおもはん。この議は什麼と詳き示せば、大家ひとしく感佩して、そは極て妙計也。速に行ふべしとて、卽便穴栗專作と喚做たる、訟獄隷の卑職役に、夥兵三四名を從はして、柴浦へ遣しつ、那媼内船虫が、枉死の虛實を糾せしに、その事都て奇異にして、

感涙を、禁離つゝ言承して、遠侍へ退りけり。爾程に定正は、這忍岡の城を守らせたる一個の老黨、根角谷中二麗廉、と喚做すものと、有司の毎幾名歟、猛可に遺なく召集めて、河鯉佐太郎孝嗣が、忠告の趣を、箇様々々と言示して、恁れは今、五十子の城内に、留れる敵はなし。只粥方の殘兵們が、四門を戍るよしなれば、はやく加勢の軍兵を遣して、後の非常に備ふべく、且燒亡れたる處々を、速に修復の事、三十日に限るべし。我快那里へ歸城せずば、西を防ぐに力足らで、隣國の敵に侮られん。土木の工に怠慢あらば、佗と若們を罪せんず。その才に堪たるものを、擇て工匠の司を課せよ。又蟹目前の亡骸は、留めて香華院に在りと聞ゆ。宜棺槨を造り、大衆を聚合て、葬式を執行ふべし。又河鯉守如が、忠死も亦憐むべし。且その子孝嗣は、我を水火の中に拯ひし、その功只是一人也。親の本領を賜ふべきものぞ。そが上に、守如の葬式料、青蚨五十貫文を取らせよ。蟹目前の廟墓の頭に、守如をも葬らして、主從賢良精忠の、餘烈を後に貽さんと欲す。この餘の事は左にも右にも、若們宜く商量して、職事をな愆りそ。とく／＼せよ。と命ぜらる。大家これを承りて、一議に及ばず退出つゝ、先五十子の城へ遣す、加勢の士卒を猛可に汰へて、根角谷中二頭人たり。この餘城内、修造の有司們十餘名、雜兵五百餘名を從へて、各々馬をはやめつゝ、五十子を投て來にければ、軈て城内に

後方に置きたる袱包を、解ひらきつゝ恭しく、出す盔を定正は、傍に措せ、赧然と、且羞てよくも見ず、又孝嗣にうち對ひて、這盔は當家の祖先、國清寺佳山道昌老侯（上杉安房守憲顯の法號也）の、等持院殿（尊氏の院號也）より賜りたる、希代の名器なりければ、命けて箭返と喚れたり。然ばにや、昨日の戰ひに、我身は寇に射られし折、盔子は聊破れたれども、裏缺ざりしは以あるかな。只面なきは家傳の盔を、寇に拿られて、剰、濱邊に掛も措れしを、拿隱せしは、佐太郎、人の及ばぬ忠義の搟き、感ずるになほ餘りあり。又緣連が奸惡は、這城内なる甲乙も、その死を聞て、いふものあり。北條氏と和睦の一議は、我愆を初て知れり。心の向ふ處を更て、今より必杜絶せん。然るにても蟹目前は、我愆を諫難て、人手を借て緣連を、誅せんと謀りたる、我妻ながら、才あり智あり、我及ばざる處なりしに、那傳聞の錯誤より、忽地刃に伏たるは、他が薄命のみならず、亦我一大不幸也。况守如が精忠苦節、その死に臨み子に誨て、我窮阨を拯ひたる、その功も亦鮮小ならず。又那毛野と密談を、道節に聞れしも、必疎忽といふべからず。我星運の惡煞にて、賢妻と忠臣の、一時に命を殞せし歟、禍鬼の祟ならんかし。そを今さらに悔るとも、往る事は追ふべからず。只哀しくも歡しきは、孝嗣、汝が忠孝也。異日必勸賞あらん。退りて疲勞を頤ひねとて、姑且暇を取らせしかば、孝嗣は、

そを携て、五十子の、城の光景をゆきて見たるに、敵の頭人犬塚信乃は、一日も在城せず、倉廩をうち開きて、飽までに民に施し、その義を白壁に寫著て、姓名を留めたる、次に道節が追書もあり。その文は箇樣々々、恁々に候ひきとて、一字も忘れず、誦すること一遍、誦果て又稟すやう、恁れば既に五十子の、大城には敵一人もあらず、離散せし躬方の士卒の、かへり來たるもの二三百名、四門を戍りて候ひき。はやくおん加勢の士卒を遣されて、後の非常を警給はゞ、いよ／＼無異に候はん。臣然しも命を惜みて、當城に免れ來つるにあらず、上樣刄に伏給ひしは、犬阪毛野も、道節の、支黨ならん、と思召たる、只一筋の赤心なれども、毛野と道節が做す處、その志異なれば、上樣に一毫も、おん愆は候はず。この義を聞えあげずもあらば、賢夫人の御貞實を、悟らせ給ふよしもなく、義烈反て狂亂の、類に似たるおん疑ひの、なからずやは、と思ひまつりて、存命たる甲斐あればこそ、今日見參に入るのみならず、薄情や敵に掛られたる、おん盔さへ拿も隱して、返し奉ることを得たれ。非除父が疎忽の罪にて、この身を刑戮し給ふとも、そは免るゝ處なし。只上樣の御婦德を、思ひ當らせ給ひなば、父が自殺も臣たる道に、聊稱ふよしもあらん。この義を願ひまつるのみ。と演る言葉の本の露、末の雫も委みなく、落る淚の河鯉は、淸き流に育ちたる、二代男の忠孝義信、こゝろ氣色に顯れて、

野小文吾、莊介とやらンも聚合ひたり。しかるに毛野は、道節が、君を狙撃の計較を知らず、迭にその名を聞たるのみ、この折初て對面の、口誼具に聞えたり。恁れば那風聞は、實事にあらず、昨日湯島の密談を、道節が偸聞して、君を犯しまつりし事、問ずして分明なりき。よりて思ひ候へば、縁連を誅せんとて、毛野を討手になされしは、上樣のおん愆ならず、只計策密ならで、仇に偸聞せられたる、守如が疎忽の罪のみ、稟し解べきよしのなければ、臣も只戰歿の、覺期の外はなかりしに、毛野と同士の勇士們と、惴る道節を共に諫めて、守如が忠誠を、相憐むこと大かたならず。道節も亦思ひかへしけん、川を隔て對陣したり。登時臣怺え難、屢敵を喚かけて、戰ひを討めしに、他們は鋒を交えんと欲せず、只問答に及びしのみにて、且道節が仁田山晋五を、虜にせし折に獲たりといふ、馬を放ちて還しにき。勢ひかくの如くなれば、是非に及ばず立別れて、件の馬にうち跨つゝ、君のおん後を慕ひまつりて、當城へ來ぬる折、則親の亡骸を、路の傍なる道場に預置て、御安否を伺ひ奉りしに、御病臥のよし聞えしかば、御痊可を等まつらん與に、遠侍に候ひて、昨宵を曉し候ひしが、敵の進退、心に掛れば、未明に馬にうち跨て、五十子へ赴く程に、先高畷へ馬を捗めて、濱邊を看亘し候ひしに、斬梟られたる躬方の首、二十餘級あり。そが中に我君の、おん盔も見えたれば、最惶さに拿卸して、

戰歿せしも尠からず、その餘は大家落亡て、敵に大城を略られたり。是より先に件の毛野は、道節と一味のものにて、昨日守如と密談の趣を、内通せしにより、這薄ありといふ、風聲はやく聞えしかば、上樣驚き悔させ給ひて、慭に君の側なる、奸佞人們を誅せんとて、出處不定の坐擊師に、事を委ねたりしより、はやくも仇に報られけん、竟に館のおん大事に、なりにしを作麼いかゞはせむ。切て館に先だちて、刃に伏して、君叓かれ、と思はざりける赤心を、後にぞ知らせまつらんとて、非命に終り給ひにき。又守如は、御出馬の折、御意に違ひて、おん鐙を、中させ給ひし撲傷にて、その朝より臥て在り、那愆を悔ひ、毛野を恨みて、遺言右に稟せし如く、腹搔斫て死せる折、汝は當城を快立退て、館の危窮を救ひまつれ。倘その期に得遭はずは、敵に向ふて戰歿せよ、といはれしよしの理りなれば、軈て上樣のおん亡骸を、轎子に乘せ奉り、志ある士卒をもて、御菩提所へ送り奉り、爾後父の亡骸をも、亦轎子に扛乘せて、同士の每三十許名と、猛火を犯して後門より、走出つゝ我君の、御先途に遭ひ奉り、親共侶に御馬前にて、いかで屍を曝さん、と思ひしよしの空ならで、危窮を拯ひまつりしかば、追蒐る敵を拄ん與に、高畷の東盡處なる、細小川を前にして、止まる士卒十餘名、と倶に必死を極めしに、敵は左右なく擊も蒐らず、相睨て在る程に、敵の士卒は多勢になりて、道節竝に毛

て、あらずもがな、と思へども、昨日高畷の窮阨を、他們親子に拯れたるに、一大事とあれば
うちも置れず、軈て左右を遠ざけて、みづから對面せられけり。登時孝嗣は、おそる〳〵膝を
拑めて、撲傷の平愈を賀し稟し、却蟹目前の事、竝に父守如が、自殺の折にいひ遺したる、事
の趣はさら也、那縁連們が國を賣て、竊かに北條氏へ佞媚したる、伎倆の顚末を聞えあげ、上
様（蟹目前をいふ）には始より、この義を猜し給ひしかば、いかで縁連們を除んとて、豫竊に
守如に、仰合されたりけるに、いぬる日湯島へ御社參の折、坐摯師物四郎といふものあり。他
は石濱なる、千葉家の忠臣と聞えたる、粟飯原首が遺腹の子にて、姓名、實は犬阪毛野胤智と
喚做すもの也。然ば又縁連は、毛野が父の仇なれば、年來在處を索るよしを、守如不思議に聞
知りて、上様の御意を伺ひ、件の毛野を相譚て、縁連を撃せしに、その密談を煉馬の殘黨、犬
山道節が偸聞して、猛可に舊好の精兵を招き鳩め、昨日縁連が、撃れし折、事の紛れに五十子
の、城を襲んと謀りしに、君は守如が諫言を聽召れず、みづから毛野を追捕へんとて、漫に御出
馬ませしかば、道節いよ〳〵便宜を得て、同盟の勇士と共に、君を挾て攻奉り、又道節と
一味の勇士、犬塚信乃戍孝と喚做すものは、隊兵才に二十名を將て、詭の計を行ひ、忽地五
十子の城に入ることを得て、火を放て攻たりければ、城内の士卒烟に噎びて、防戰の術を亡ひ、

とありけるを、孝嗣はよくも見ず、連りに嘆息せし程に、那浦人們が出て來て、昨日道節に吩附られたる、事の趣箇樣〻〻。と告るを听くも不娛しさに、はやく盔を拿却さして、袱に裹み、伴當に馱せつゝ、件の牌を擲棄て、軈て五十子に赴きて、城内に入りて見るに、昨日敵に降參して、恙なきことを得たる、士卒們はさら也、はやく落亡たる兵每も、敵の退きたるを聞知りて、大家かへり來にければ、この時城内に聚合たるもの、這那二三百名あり。孝嗣はそが中なる、老兵們を招きよせて、敵の動靜を尋問ふに、逃たるも降參せしも、口を合し、その非を飾りて、然ゝ候、小可們は、きのふ敵の火攻に、不意を撃れ、烟に卷れて、力及ばず、一旦は、退きて候ひしに、敵は幾程なく起去て、重て寄する寇もなければ、入替り火をうち滅て、四門を戍り候。といふを孝嗣は疑ひながら、燒亡れたる處々を、那這と檢するに、戰粟庫と寶藏の、金錢米穀は一箇もあらず。と見れば庫の白壁に寫したる、信乃道節が諭示の文あり、越に初て賑給の、事情の知られしかば、孝嗣憶はず感嘆して、寇ながらも那每は、世に稀なるべき英雄なりき、と思ふ心を言には出さず、ふたゝび馬にうち跨て、馳て、忍岡の城に還りて問に、館には、髮中のおん疼痛、聊瘥りぬとて、起出給ひしと聞えしかば、即便近習們に就て、孝嗣一大事を稟上んと欲す。いかで見參を許させ給ひね。と請まうしゝかば、定正これをうち聞

敵ながらも情ある、毛野道節が至極の意見を、听くとはなしに立別れて、主君の迹を慕ひつゝ、父の亡骸を扛乗せたる、轎子を先に立して、馬の足掻を早めてぞ、忍岡に來にければ、榫且路傍なる道場へ、父の亡骸を扛入させて、寺僧に告て預け措き、又隊兵を從へて、忍岡の城に入りて、主君の安否を伺ふに、館は剛才恙もなく、當城に入らせ給ひしに、猛可に矢傷のおん惱にて、うち臥て在す、と聞えしかば、速に見參すべくもあらず、遠侍に伺候して、起出給ふを等つものから、當城より軍馬を出し遣りて、五十子なる寇を征せん、と欲する准備も見えざれば、いと淺ましと思ふのみ、身は倘弱冠にて、且遊倅なるをもて、その非をいはんよしもなく、この日を消し、夜を曉す程に、竊におもふよしもあれば、次の日の曉天に、獨退り出て馬にうち跨り、其身の伴當のみを將て、五十子を投ていそぎけり。既にして孝嗣は、柴浦まで來ぬる折、先高畷に赴きて、濱邊のかたを看亘せば、果して敵に梟られたる、躬方の首級多くあり。然ばこそとて遽しく、馬を找て、よく見るに、主君定正の盔を首として、仁田山晋五、地上織平なゞどの首、二十餘級ありけり。そが中に、何人かしたりけん、定正の盔の邊へ、一箇の牌を建添て、菖蒲葺く宿ならなくに盔首のき場にかけて敵はいにけり

願ひなる、次團太の命乞を、いかにして聽ざるべき。倒哀憐の心起りて、速に赦を行はれん。と應つゝ、共に憑しく思ひけり。是等を言の始にて、各々會話の、限りもあらず春の日の、長きもはやく暮果て、折よく甲夜闇なりければ、かへさも便り可からず。大家卒や退らんとて、孰の方にも事成るべし。然るを疑ふことかは。と慰められて、小文吾莊介、寔に理あり。

潮候近き順風に、筵帆揚る三隻船、檝に儘して共侶に、北を投てぞ走らせける。話分兩頭。爾程に、扇谷定正は、高畷の東盡處にて、犬飼現八、犬村大角が、一隊の精兵に趕逼られて、いよ〳〵危窮に及びし折、料らずも河鯉守如、親子の爲に拯れて、辛く虎口を免れしより、その隊の士卒、十五六名に守護せられて、忍岡を投て走りつゝ、才に一時許の程に、那里の城に入りしかば、後安しと思ふものから、鞨に犬山道節に射られし折、著たる盔をこそ失ひたれ、幸ひにして裏を缺ず、と思ひしは虛憑にて、箭响の緊しかりし故にや、その處大く腫たれば、猛可に痛楚に堪がたしとて、そが儘書院に倒臥て、ものいふべくもあらざれば、當城の諸士、驚騷ぎて、醫師を聚合、療養に術を盡すのみ。更に軍馬を調出して、攻陷されたる五十子の、城をとり復さん、と議するものもあらず。亦只這里をも勁敵に、責らるゝこともあらん歟とて、四門を鎖し、銃窓を配りて、小心の外なかりけり。然ば又河鯉佐太郎孝嗣は、高畷の板橋にて、

共侶にうち笑て、何まれかまれ脱落なき、機轉にこそ。と感じたる、折から落鮎有種は、別船にて炊したる、戰飯と酒餚を、處陝まで安排べて、七犬士に薦れば、別船なる隊兵們も、漏るものなく飲食して、迭にけふの勝軍の、祝壽を做す程に、船は羽田の澳に來にけり。是よりして、七犬士は、有種をも團坐に加つゝ、なほ漏したる事ありとて、毛野のみいまだ知らざりける、ゝ大法師の甲斐を去りて、結城に赴く、と聞えたる緣由、又蜑崎十一郎照文が、安房へ還りし事までも、解示したるそが中に、小文吾と莊介は、那石龜屋次團太が事、又鯽三が事さへに、云云といひ出て、犬阪主の妙方便にて、次團太が寃枉の縲絏を、釋れんよすがを得たりと聞しに、蟹目前も河鯉生も、世になき人となりしかば、那事成就しがたかるべし。是のみ遺憾しかりき。とうちも不娛つゝ相譚ふを、毛野は側にうち聞て、犬田主、犬川主、その義も心安かるべし。昨日湯島の社頭より、越後へ使に立られたる、妻有復六とか聞えし伴士は、鯽三を相倶して、只管路を急ぐなるべし。然らば蟹目前の逝去のよしを、片貝殿(簸大刀自)へ告らるるとも、其より前に、那使者は、越後へ到著すべければ、次團太は赦に遇ひてん。又那妻有復六は、我實の姓名を、聞知りたるものにあらざれば、這方の事の聞ゆるとも、決して障りあるべからず。非除蟹目前の逝去の事の、はやく那里へ聞ゆるとも、簸刀自も亦女儀也、那生前の

濱の窮阨是也。又犬村は謹愼老實、言寡くして、行ひに最篤かり、實に是君子の人なり。人心同じからざること、猶人面のごとしといへども、眼横はり鼻の直きは、孰か亦異なるべき。これを統るに八行の德、各々一個を得たるに庶きは、我義兄弟に在りといはん歟。憖れば今さら、孰を長とし、孰をか短とすべき。慿論ずれば、釋迦に說經、孔子に語道に似たれども、あまりに太く譽らるゝが、苦しき隨に候は。といへば大家感服して、その義寔に私論にあらず。這兩才子徹りせば、妙批妙評、听易からず。身の程々の玉に恥ざる、行狀いよ〳〵相愼むに、優すことあらじ。と笑興じて、亦復餘談に及びけり。姑くして荘介は、道節に悄語くやう、犬阪主の遠慮に就て、胸安からぬ事こそ候へ。落鮎生が陸に登りて、品革にて敵を擊し折、名告掛て戰ひたらば、那人は是鄕士の女壻也、我們と同じからず。荘園居宅を敵方に、知るものなしとすべからず。しからんには慭に、後の禍を遺すに似たり。この義を尋ね給はずや。といふに道節眉を顰めて、そは心つかざりき。快與之七を喚ぶべけれ。と答て後方を見かへるを、毛野は聽くも側聞して、道節を推禁め、犬山主、その事ならば、落鮎生に問ふにしも及ぶべからず。その義も洒家心づきて、那人に尋ねしに、敵に向ひて、名告りしことなし。只舊君豐島殿の。爲に怨を雪る、と喚りたるのみ也、といひにき。必よ心安かるべし。と報るに荘介道節は、

縮るといふ、世の常言にも稱ひたり。然までには我們が、心屬なき所也。心術智玉と虛しからず、誠に感心々々。と齊一稱贊したりける。爾程に船中の、著席も既に定まりければ、信乃毛野の二犬士は、迭に初面會の口誼を舒るに、是宿因の致す所、心同く、意相愜へば、一面にして故舊の如し、親愛宛骨肉に異ならず。登時道節は、莊介小文吾、現八大角們と共侶に、毛野に對ひて恁々と、信乃が五十子の城を火攻して、些も躬方を損はず、瞬息間に城を拔きて、降卒を誅することなく、且倉廩をうち開き、窮しき民を賑して、仁あり義ある事の趣、及戰粟庫の白壁に、姓名を留めたる、諭示の文の愉快なる、竝に道節が追書さへ、或は誦し、或は談じて、迭代に解知すれば、毛野は只管感激して、約莫我義兄弟は、自然に稟たる玉と倶に、其性小しく異なれども、孰か疎鹵なるべくもあらず、就中犬塚主は、金中の紫磨、玉裡の夜光、といふとも過論なるべからず。洒家は決して及びがたし。と譽るを信乃は推禁めて、いかにして然るよしあらんや。犬阪主は、文あり武あり、その學術の廣博なる、陰陽卜筮說相まで、よくせずといふことなし、眞實に軍師の才也。則是禽中の鸞鳳、毛裡の麒麟といはまくのみ。且犬山の剛毅にして、決斷に速なる、犬川の行婦塚、犬飼の芳流閣、その才その武、多く得がたし。又犬田は能を顯はさず、已ことを得ずして做すときは、必是妙處あり。行德の角觝、石

にと約束をしたりしに、那里にはあらずして、這里へ寄せしは、甚麼ぞや。と問へば有種、然ン候、そは又以ある事也き。といふ間に船は皆、洋中に漕浮めしに、北へは走らで、假名川の、かたを投て急せしを、道節いよ〳〵訝りて、又その故を詰り問ふ程に、毛野は有種の答を等ず、道節にうち對ひて、犬山主、這船を、約束の地方に歇けず、故意柴浦にて等たるも、今又北へ返さゞるも、皆是洒家が指揮にこそ。といふに道節眉を顰めて、その故什麼、聞まほし。と急迫く問へば、含笑て、いまだ思ひ給はずや。洒家はさら也、和殿も亦、既に大敵を撃たれども、仇の種類の竭たるにあらず。倘我往方を知るものありて、扇谷家へ告訴せば、大軍重て推寄せ來つべし。その折敵を防戰ふ、一城墎のあるにあらず、一百ばかりの小勢をもて、只是穗北の荘院に、盾籠るともいかにして、半日なりとも拄得んや。縱戰歿をしぬるとも、我們は覺期のうへ也、悔るに足らぬ事ながら、氷垣の老翁、落鮎夫婦を、共に狩場の雉子と做さば、面正しくもなき所行ならずや。この故に、我出沒を後々まで、人に知せじと思ふをもて、船を約束の濱邊に繋せず、苫を深く葺掛て、遠く柴浦の澳にありし也。然ば又、羽田の澳に漕登さして、那里にて日を銷し、夜を深て穗北に還らば、人に知られず、後安かり。いかでこの議に儘し給へ。とその遠謀を解示せば、道節幷に餘の五犬士們も、毛野が遠慮を感嘆して、克て盔の緒を

よせて示すやう、我は先亡煉馬殿の殘黨にて、犬山道節と喚做すもの也。けふ復讐の戰ひ、大利を得て、擊捕たる首二十餘級、方僅梟て這里に在り。只恨むらくは定正を、擊漏したりけれども、射てその盔を獲たるにより、權且首級に代たるぞ。若們浦人、迭代りにうち守りて、偸兒にな奪れそ。明日夙めて人ありて、來て這盔を拿ることあらば、よしを告て遞與ねかし。その折までぞ、懈るな。と叮寧に分付れば、浦人們は駭怕れて、沙に額を穿埋めつゝ、異議なく言承したりしかば、然らば凱陣すべけれとて、澳のかたを看亘すに、船は這頭にあらずして、柴浦の澳に見えけり。これにより道節は、餘の五犬士と共侶に、兵隊們をいそがし立て、浦曲傳ひに走ること、七八町に及ぶ程に、澳よりもはやく見て、颿て船を漕寄せけり。登時陸なる隊兵們は、始のごとく相別れて、二三艘の船にうち乘り、道節幷に餘の五犬士は、毛野有種們と同船す、迭の歡びいふべくもあらず。道節は先有種に、躬方の戰歿、金瘡兒の、多寡を誰何と尋問ふに、有種答て、然ン候、嚮に命ぜられたる雜兵們が、索ねて浦邊に扛もて來ぬる、躬方の金瘡兒は八名也、深痍なれども、窮所にあらず。戰歿は一人もなし。隨便金瘡兒們には、准備の藥を飲せ、瘡を裹み勦りて、昨宵在下がうち乘來ぬる、快船に扶乘せ、看病奴一名を傳て、穗北へ還し候ひき。と報るに道節點頭て、そはよく計ひ給ひたり。是等の船は高畷の、浦


晋五を誅して
七犬士倶に
帰帆を
道節
扇谷定正
志ん五


大角
現八
信乃
荘介
小文吾

石の家の家宰に、做登りしは、小人の、天を怕れぬ奸計にて、罪を免るゝ所あらんや。那額藏は、我義兄弟、這なる犬川莊介也、犬塚信乃もこゝに在り。汝が緝捕、その人ならず、行ふ所奸曲なれば、這犬川に趕撃れて、遂に我箭に傷られしは、則造化の配劑にて、自業自得といふべきのみ。先我手自頸撃落して、十條力二尺八が與に怨を雪んず、觀念せよ。と責罵れば、晋五は魂身に負はず、連りに戰慄きて、在下實に罪を知れり、命を饒させ給ひねかし。といはせも果ず道節が、拔閃かす刃の冴に、撃れて滾ぶ仁田山晋五が、首は托地と落にけり。そを倶に看る信乃莊介、小文吾も現八も、六稔歷にける戸田河原の、危窮をこゝに思ひ出て、荒茅山邊の夢の迹、猾平が事、音音が事、曳手單節の往方さへ、心にかゝる潮曇り、濱邊に立る松に吹く、風の便りも絶果て、霽ぬ懷ひをいへばえに、咽踰す濤に友衛、當時に遇ぬ大角も、善惡應報怎こそ、と人を思へば身も形きなく、慰難て愀然たる、そが中に道節は、徐に刃を拭ひ斂めて、嚮に那隊兵が樹を伐りて、造り立てる梟首臺に、敵の大將扇谷定正の、盔を第一番に梟さしつ、次に仁田山晋五が首級、幷に撃捕たる仇の從類、地上織平、末廣仁本太、二階堂高四郎、三浦三佐吉郎們はさら也、侍品の頭顱二十餘級、定正を首として、その姓名の知れたるは、牌に寫し推立て、征伐の事終りしかば、即便這頭の浦人の、長めきたるを兩三名、招き

節、莊介小文吾、現八大角は、倶に數十個の隊兵を從へて、高暾を投て退く程に、五十子の城下より、那濱邊に至るまで、その通路の坊賈莊客們は、信乃が賑給の德を稱へて、倶に路傍に出迎へ、各々簞食壺漿して、薦めて歡びを演るものから、信乃はさら也、道節も、そを慰めて、東西を受ず。是より先に道節は、五十子の城に來ぬる折、隊兵十名許に分付て、鎌方の戰死したるを尋ね、及那谷山の頭に生拘揹きたる、仁田山晉五が事、又敵の首級を梟くべき、准備をせよとて遣しければ、這時件の隊兵們は、共に所役を做し果て、高暾の濱に等て在り。既にして道節們は、件の濱邊に退き來て、先晉五を誅せんとて、面前に牽出さするに、晉五は嚮に道節に、射られて虜になりし折、谷山の麓なる、樹幹に紲結著られて、才に一個の雜兵に、うち守られて久しく在り、方纔この濱に牽寄せられて、白刃の下に莅むといへども、矢傷の疼楚に勝ざりけん、頭を低てものいはず。登時道節は、發兒を放ちて、仁田山晉五に、立向ひ佐と疾視て、汝は嚮に戶田河原にて、丁田町進の加勢として、寃屈の罪人額藏們を、追捕へんとしたる折、我譜第の舊僕なる、姥雪與四郎が兩個の兒子、十條力二郎尺八が、戰疲れしを擊捕りしは、素よりその身の職分にて、主の與にせし事なれども、虛名を求め、榮利を揣り、力二尺八が首級をもて、額藏信乃也、と僞唱へて、梟首して主を紿き、その勸賞に重用せられて、大

復レ讐雪レ怨。非二忠與レ孝耶。以レ寡克レ衆。非レ智耶。拔レ城不レ略レ地。非レ禮耶。不レ誅二降卒一而賑レ民。非レ仁耶。爲レ憐二賢良自刃一不レ毀レ郭。非レ義耶。進退以二一口一非レ信耶。捐レ功不レ利レ己。非レ悌耶。吾有二這八行兄弟一可三以敵二百萬騎一也。誰蔑二如八行一者。弑レ君奪レ職兩管領。先世後嗣。其辜可レ知。

犬山忠與追書。

とぞ寫たりける。大家これに興を得て、犬塚といひ、犬山といひ、是風流の虚文にあらず、簡約にして、言分明、勇士の本意に稱へりとて、倶に嘆唱したりしかば、幾十個の隊兵さへに、歡び勇みて、燒刀の、稜打拍して共侶に、咄と發たる勝鬨の、一霎時は鳴も已ざりけり。既にして道節們は、隊兵を將て、隊伍を整へ、引退んとせし程に、信乃は那外道二が、躬方の與に忠あれば、そを賞せんとて尋るに、他は手近き錢財を、奪略んとや思ひけん、漫に深入したりしかば、煙に包れて死たりける、その亡骸を、降卒們が、稍見出して恁々。と報るを信乃はうち听て、憶ずも嗟嘆に堪ず、那外道二は奴隷にて、忠誠義烈の徒ならねど、只その命を惜むが與に、怱地敵の間者となりて、城を陷せし冥罰覿面、いまだ賞祿を受ずして、身ははや兵火に燔れしよな。難に臨て心術反覆、敵の幇助になるものの、終は恁こそありけれとて、件の事の趣を、道節們に解示せば、餘の四犬士も那應報の、速なるを嘆じけり。恁而信乃道

は、その身令名を失はずといふ、聖教は今我うへにて、こも亦得がたき幸ひなるかな。譬ば犬阪毛野の如き、未生の時より、兩個の寃家あり、幷にその面を認らず。しかれども單身にて、その仇を擊果したり。又我仇は、大諸侯にて、尤近づき易からざりしを、曩には白井の郊外にて、そを刺すことを得たりしに、仇にはあらで贋物也。今は三四の義兄弟、及落鮎們の幇助あり、且隊兵さへ多く得て、籌策行れ、既に十二分の利運に至て、逃る寃家を射たれども、只その頭鎧を獲て、首級を獲ず。こも亦命歟、天なるかも。昨日犬阪が我を相して、意忡に夙怨ありといへども、謀計遂がたし。遂ずして遂るが如く、擊果さずしてその仇死なん、といひしは眞に妙訣にて、成敗前より定るに似たり。昔唐山晉の豫讓は、その仇趙無恤を得擊果さず、才に仇の衣を刺て、竟に刃に伏たれども、豫讓の義士たる事に害なし。我は豫讓に優べしや、仇を射てその盔を獲たり。則これを首級に代え、高畷の濱に梟けて、君父の神靈を慰ん。今さら天を怨んや。と卿言がましくうち不娛て、心ともなく後方なる、戰粟庫を見かへりて、剛才信乃が寫したる、諭示の文を兩三番、讀復しつゝ信乃に對ひて、和殿這城を拔きて、越に姓名を留めたる、その意その文、極めて妙也。我その才に及ばねども、左方に筆を加んとて、軈て甲の合領より、蠟墨を拿出つゝ、亦白壁に寫著るを、大家倶に閱するに、

り、又守如親子あり、那主從の死を、今初て聞くに、瓦礫の中に碎けたる、玉とやいはん、悼むべし。恁れば那賢室と、忠臣の爲にしも、屛を毀たず、塹を埋めず、這降卒們に戍らして、人の拿るに儘してこそ、義ともいはめ、勇ともいはめ、と思ふは僻言なるべき歟。といひつゝ傍を見かへれば、大角只管嘆唱して、犬塚主の宏論は、千金にこそ候なれ。昔保元の猛將爲朝主は、武勇強弓、儔稀也。しかれども、只當面の敵を射て、相逆へざる敵を射ず。常に神佛を尊信して、皇威を惶み給ひしかば、世に良將と稱らる。爲朝倘この行ひなくば、一暴雄に過ざるのみ。然ば世の常言に、窮鳥懷に入るときは、獵夫もこれを捉らずといへり、何ぞ降參の城兵を誅すべき。縱塀を毀ち塹を埋るとも、我們けふ這里を立去らば、明日より又修復せられて、管領必かへり住ん。然らば勞して功なきなり。といへば又莊介小文吾現八も、道節を倶に諫めて、犬塚犬村兩兄弟の、旣にその理を盡されたれば、從んこと、勿論なるべし。嚮に犬阪が遠慮あり、近き係の諸城より、加勢あるべきよしをいはれて、凱陣を急したりき。今は速に退くを、全勝とすべきのみ。長詮議は無益に似たり、快々凱陣し給はずや。と異口同音く寬釋しかば、道節やうやく思ひ返して、うち微笑つゝ點頭て、有理々々衆議に從ふべし。嚮には仇を撃漏せしより、焦燥し心のなほ休からで、要なき言を費したり。士に爭友あるとき

ものなし。今よりして一級を、降らざることを得ざる也。然は思ばずや。と只管に、感激して已ざりければ、莊介們の四犬士も、且感じ且歡びて、共に稱贊したりける。且して道節は、又信乃にうち對ひて、定正敗北の爲體、及河鯉佐太郎孝嗣が忠孝、蟹目前と權佐守如が自殺の事、又毛野は、河鯉守如が、知己の義を思ふの故に、辭して當城へ來ざりし事、他が遠慮の議論まで、箇樣々々と解示して、我定正を趕ひし折、才に盔を射落して、裏缺ざりしは遺恨なれども、和殿、この巣穴を攻破りて、民の困乏を賑せしは、實に得がたき愉快の事也。然らばなどてや塀を毀ち、塹を埋めて火を滅させず、その降卒們を馘りて、武を赫し給はざる。手緩かりき。と怨ずるを、信乃は聞つゝ諫ていふやう、古昔の仁人志士は、殘に勝殺を祛けて、化育を天地と等しくせまくす。然るをけふの戰ひに、多く人を殺せしは、一個の仇を撃ん與のみ。兵は寔に凶器なるかな。爾るに仇を撃漏せしとて、怒を移して城を毀ち、降れる兵を馘らば、只是暴を行ふのみ。その孝その義、何處にあるや。悍きをのみ武とすべからず。暴を勇といふべからず。近世楠正儀主は、足利義詮卿を撃走らして、舊都に屯したる折、佐々木道譽の第を燔かず。唐山秦の蒙恬は、趙の降卒四十萬を穴にして、竟に讒死の祟あり。當城千百の士卒の如きは、忠もなく勇もなく、倶に命を惜むが與に、命を喪ふもの多かり。そが中に蟹目前あ

這里に聚會ひしもの〻みならず、總て這城に隷られたる、村落も莊園も、坊賈となく、農戸となく、田圃戸口の多寡に合して、漏すことなく配分せよ。若們倘一毫も、私の行ひあらば、異日我決して饒さじ、こゝろ得たる歟。と言示せば、大家地上に拜伏して、仰うけばり候ひぬ。愆る仁慈の賜を、誰が私仕らん。明日より君が生祠を、村毎に建、戸々に祭りて、御恩を子孫に傳へまつらん。噫たふと、嘻めでた。はや身の暇を給はるべし。と別を告て、皆共侶に、うち連立て退りけり。

第九十五回

頭鎧を梟て忠與凱旋す
鼓盆の悼み定正過を知る

浩處に、道節は、莊介小文吾、現八大角們と共侶に、隊兵六七十名を從へて、五十子の城に來にければ、信乃は隨便隊兵に、城門を開かし迎入れて、却城攻の事の顚末、計策その圖に當りて、一戰全勝を得たる事、又倉廩を開して、窮民們を、賑したる事の趣、幷に降參の城兵を、饒したる事までも、その崖略を報しかば、道節は、莊介們の、四犬士を見かへりて、各々も听給ひし歟、約莫舊君の復讐は、洒家本人也といへども、その軍功を論ずれば、犬塚に及ぶ

レ所レ犯。蓋以民者國基也。雖レ有二金城石槨一然無レ民。其與レ誰共守焉。卽開二倉廩一而賑二窮民一。錄二數行一以留二姓名一。一日主人公。亦是民之父母也。累世國司。盍レ憐二汝之民一。儻有乙咎三民之受二于吾一者甲。吾復來而居レ城。勿悔。

文明十五年癸卯春正月二十一日　諭示

とぞ寫たりける。里正、坊買、莊客們さへ、其仁言を听、這諭書を看て、孰か雀躍せざるべき。齊一顙づき恩を謝して、倶に戰粟庫をうち開くに、一座十五間なるもの五庫ありて、各米粟三千苞ありといふ、都ては一萬五千苞なるべし。又寶藏には、金錢あり、雜貨庫には、酒あり餅あり、乾魚あり、枚擧るに遑あらず。當下信乃は、又下知して、酒は尊蓋を打除せ、餅は殘燼に炙して、衆人幷にその身の隊兵、降參の城兵にも、酒まれ餅まれ、好みに儘して、飮しもしつ啖しもして、その身は僅に纒腰戰飯を、拔きて飢餓を繕ひけり。爾程に衆人は、部して走りかへり、近鄕隣村に告知して、馬を牽せ、車を推させ來て、件の米錢を運するもあり、或は燬を免れたる、城の乘馬を借用して、米を駝して牽出すもあり。然しも山做す米と錢を、纔に半晌ばかりの程に、遺なく運び盡しけり。登時信乃は、里正と、故老們を誡めて、約莫我賑給は、

ち對ひて、我若們には、庫中なる、金錢戰粟を取すべし。速にもて退きて、宜く配分致せかし。といはれて歡ぶ衆人は、迭に面を注しつゝ、速には答難たりしを、信乃ははやくもその意を猜して、微笑ながら諭すやう、若們今慭に、我賜を受るといふとも、舊の城主のかへり來ば、苛咎に遇んことを怕れて、首鼠兩端の思ひを做す歟。這米錢は、若們が、妻を鬻ぎ子を賣りて、刻の重斂に調ぎしにあらずや。我當城を攻陷して、一霎時も當城に在るときは、金錢米穀いへばさら也、若們も亦我民なり。我一日の父母として、なでふ這民を憐ざらんや。今我獲たる東西をもて、毫も犯す所なく、散して民を賑すを、誰か否するものあらん。且這庫中なる米錢は、兵火に燒るべかりしを、若們が聚來て、消防に勉たるをもて、遂に恙なき事を得たり。その功も亦賞すべし。道理は慿地なれども、倘阽まば、せんすべあり。いで〳〵といひながら、腰なる墨斗を拔出して、戰粟庫の白壁へ、寫著る數行の文を、大家ひとしく仰瞻るに、

故鎌倉管領。足利持氏朝臣兩公子。春王安王小傅。大塚匠作三戌之嫡子。犬塚番作一戌之獨男。犬塚信乃戌孝。以二精兵才二十名一。來攻二本城一。須臾拔レ之。以與二父祖一雪二先君舊怨一者也。是併同盟義士犬山道節。亦欲レ復二君父之讎一。是擧在レ資二助其大義一矣。吾既已拔レ城毫無

を賣り、妻を鬻ぎて、降參年の軍役に、畊作の時を失ひて、酷吏の慘きに堪ざるはなし。この故に、或は子を售り、妻を鬻ぎて、國主の慾に充るといひけり。信乃は、これをうち聞て、愀然として嗟嘆に堪ず、降參の城兵們を、つく〴〵と見かへりて、若們も亦これを知るや、苛政は、虎より猛かり。定正累世の名族として、國を治る所以を知らず、同宗顯定と確執して、且良臣持資を用ること克はず、家に賢妻忠臣あれども、行路人の思ひを做して、佞人緣連の毎を重任し、民の塗炭を救ずして、これを聚歛の臣に儘して、譴債るを以忠とす。恁る故に、良藥は、身を養ふ效あれども、苦きをもつて得嘗ず、諫言は、過を改る益あれども、違をもて敢所かず。心を師とし、みづから賢として、貪れども、飽ざる故に、失ふ所いよ〳〵多かり。前には顯定に逐れて、鎌倉に雙立つことを得ず、後には景春に叛かれて、毛越數箇城を奪れたり。宜也、犬山忠與が、一將百卒の小敵に遇ふて、一箭をも射出さず、一人をも擊得ずして、二三百の士卒を亡ひ、今は我二十個の隊兵に、當城を陷されて、士卒の死亡中に過ぎたり。定正の敗績は、自業自得といひながら、百姓に何の罪あらん。我當城を得たれども、城に據り地を略して、武威を近國に張んと欲せず、今日當城にうち入りて、今日當城を退くもの也。若們四門をよく戍りて、その主のかへり來ぬる折、この義を報て城を獻ぜよ。努々怠るべからず。と嚴に告示し、又里正們にう

て累々たり。そが中に、辛く命を免れしは、皆後門より落亡て、不覺の羞を見かへらず、或は又逃後れ、死後れてせんかたなきは、倶に盔を脱ぎ、鋒を倒し、敵の目前に平伏して、命を乞ふも多かりけり。恁る刧火の中にして、蟹目前と守如のみ、火にも慌ず、敵にも怕れず、主從自殺の爲體、且河鯉佐太郎孝嗣が、城を退去の顚末は、前回に具也、看官前後を照して見るべし。閒話 除繁。却說信乃は、降參の城兵を數るに、都て五十餘名あり。卽便その兵每に吩咐て、水を汲せ火を滅さするに、素より案内なるをもて、立揮きに便利也。又隊兵をも部して、前後の城門を戍らせつゝ、火の鎭るを等程に、近邊の坊賈莊客們は、五十子の城を敵の爲に、攻落されしを知るものなく、失火ならんと思ひしかば、大家手にゝ棒を挾み、糊頷柄長團扇を携て、那這より走聚ひしかども、兵火のよしを聞知りて、且驚き且怕れて、逃去らんとしてけるを、信乃ははやくも城兵を、外に出し喚禁め、よしを示し招き入れて、城兵們を相資て、餘焰を鎭むべし。と命ぜしかば、件の坊賈莊客們は、戰粟庫を受とりて、幾千苞の戰粟を、煙となさず滅留めけり。既にして那這の、猛火なごりなく鎭りければ、信乃は、故老の莊客と、里正們を喚近著て、年來扇谷定正の、政事の好歹を問ふに、大家實を吐ざることを得ず、近屬龍山緣連が出頭して、權柄を執りしより、貢調を重くして、民の艱苦を憐まず、然らでも年

に、潛びて御座すならん、とはやくも猜して些も擬議せず、遽しく走下りて、却雜兵們に下知しつゝ、軈て門戸を開せけり。登時信乃は、二十個の、隊兵を從へて、先に立つゝ進入りしを、那頭人はなほ曉得らず、雜兵を後方に退け、跪居て迎んとしたりしを、信乃は刀を拔く手も見せず、只一撃に砍仆せば、駭慌る雜兵を、又兩三名砍伏せて、名告知する聲も尖く、煉馬の殘黨、犬山道節忠與が義兄弟、犬塚信乃戍孝こゝに在り。我も亦、大父匠作三戍の主君なりける、故鎌倉の管領、持氏朝臣の兩公子、春王安王の奉爲に、嘉吉の怨を復さんず。命惜くば城兵們、降參せよ。と罵懲して、向ふに前なき大刀風に、城の雜兵辟易して、忽地戍りを喪ひけり。然ば計略その圖に當りし、犬塚の隊兵們は、はや那這に火を放ちて、當るに儘して殺伏々々、縱横無礙に戰ふ程に、扇谷の君臣千百人の、凶煞這日に丁りけん、西南の颶風猛に起りて、その火城中に充滿ければ、城の士卒はいよ／＼慌て、繫ぎし馬にうち乘て、走らざるを怒るもあり、弦なき弓に箭を拿添て、彎んとしつゝ呆るゝもあり、周章舉ていふべからず。そが中に、偶志氣ある老兵は、噪ぐ躬方を罵奬して、敵は才に數人に過ぎず、推揃稠て撃ずや。と喚りつ鎗を引提て、防戰んと欲するに、城兵は咸風下に在り、猛火にも亦攻られて、面を向べきよしのなければ、勇あるも怯れたるも、共侶に身を焦す、最期は哀れ夏虫の、火虫にも似

ん、士卒忽地亂噪ぎて、五十子のかたへ走るものの、棄たる標幟槍眉尖刀、革鎧さへ多かりけるを、信乃ははやくも見出して、是究竟、と雜兵を、出して遺なく拾拿して、その武具を著せ、標幟を挿せなどして、兀紊したる城兵の、逃かへり來る似くに扮へ、準備の火藥を竊に持して、然而外道二に恁々と、計策を囁き示し、一町許先に立て、大家ひとしく五十子の、城を投てぞ走りける。爾程に外道二は、信乃が籌策に從ひて、五十子の城に走りかへるに、是より先に定正に、從ふたる士卒幾名歟、逃走はやくかへり來て、犬山道節が勇戰の事の趣、躬方既に戰負て、撃るゝもの多かるよしを、注進分明なりければ、城内の士卒駭譟ぎ、前後の城門を鎖固めて、叨に人の出入を許さず、はやく加勢の軍兵を、まゐらせんとて議する程に、外道二忽地かへり來て、城門を敲きて喚るやう、小司は是、當城の雜兵外道二也。鈴の茂林の戰ひ難義に及びて、上（定正をいふ）にも危かりければ、おん武具を脱棄給ひて、葉武者に紛れ辛くして、目今おん歸城に及せ給へり。快々城門をうち開きて、入れ奉らずや。と叫ぶにぞ、正門を戍る頭人某甲、よしを聞、城櫓に登りて、つら〳〵と看亘すに、城内なる雜兵が、件の外道二といふ奴隷を、認れるもありといへば、現疑ふべくもあらず。そが後に跟て近著來ぬる、士卒二十名許あり、標幟武具の色までも、躬力に紛れなかりしかば、原來館（定正をいふ）は那内中

節が射て虜にしたる、仁田山晋五の伴當を、軈て身邊へ牽坐させて、詞徐に鞫るやう、汝は素より晋五が伴にて、大塚より來にける歟、亦五十子の城兵なる歟、名は何と喚做たる。汝も命は惜かるべし。我計略に從ふて、その義を旨く做すことあらば、命を饒すのみならず、重く賞祿を拿すべし、愿さず招せ、其麼ぞや。と問れて件の伴當は、慵氣なる面色にて、稍跪き額をつきて、刀禰們上に在するに、何でふ搗鬼を稟すべき。嚮に小可は、仁田山刀禰と、共侶に逃たれども、那人の伴にはあらず、越杉駱三主の雜奴にて、外道二と喚るゝ者也。原は白銀の土民なりしを、軍役の與に驅入られて、年來五十子の城内に在り。今番館(定正をいふ)より、龍山主們、三個のおん使を、相摸の北條家へ遣さるゝにより、小可も起行の、伴人足に充られて、越杉主に隷られたり。命を饒し給はらば、何事まれ仕らん、仰付らるべうもや。と恐々陳ずるを、信乃は聞つゝ頷きて、然らば索を解ねとて、雜兵に外道二が、綁縛を釋饒さして、倶して高畷のかたへ赴くに、外道二は幸ひに、脚の矢傷は斜痍なれば、手拭を引裂きて、瘡を包み杖に携りて、そが儘信乃に從ひけり。恁而信乃は二十個の、隊兵を倶して、間路より、悄々地に高畷に赴きつ、程よき樹陰に潛伏て、權且時分を等つ程に、既にして定正は、士卒三百餘名を將て、走りて鈴の茂林のかたへ赴きしを、見ること分明なりけるに、戰ひはやくも敗れけ

來て、事恁々と訴へけん、城内騒動大かたならず。管領（定正をいふ）みづから多勢を將て、犬阪生們を搦捕せんとて、出馬の准備をいそがしたり。恁れば今より程もなく、管領這頭を過らるべし、御小心あれかし。といふに道節歡びの、手を憶ずも額に加えて、料るに倍たる幸ひなるかな。定正みづから出て來ば、挾みて撃捕るべし。鈴の茂林の頭は在る、犬飼犬村一隊の士卒は、犬阪の與にしも、手を動すに及ずして、潛り居ると聞えしかば、先や犬飼犬村に、諜じ合して定正を、前後より攻撃んずとて、悄々地に一個の雜兵を、鈴の茂林へ遣はして、件の事の趣を、現八大角に告にけり。登時信乃は肚裏に、一計を思ひ起せしかば、道節に悄語くやう、定正みづから緝捕の與に、多勢を將て出て來ぬるとも、五十子の城内には、なほ二三千の士卒あるべし。然ば和殿の計るがごとく、定正前後に敵を受て、敗北に及ん折、その事はやく城内へ聞えなば、多く加勢の兵を、出さゞることあるべからず。その折寡方は小勢也、神煞忽地方位を易て、勝利反て大敗とならん。洒家一個の籌策あり、箇樣々々に行はゞ、五十子の城を拿んこと、樹を拔き枝を拂ふより、易かるべし。と解示せば道節斜ならず歡びて、そは寔に妙計也。事成る時は我も亦、後安く仇を撃ん。快々准備をし給ひね。といそがしつ隊兵を、二十許名引分て、悄々地に信乃に從はして、五十子のかたへ遣しけり。爾程に犬塚信乃は、道

柴浦へ寄せずもあらば、那人義秀親衛の、勇ありとてもいかにして、三百有餘の敵兵と、獨戰ふて勝よしあらんや。恁れば功を我に讓りて、上席にこそ居かるべけれ、と思ひたりしに然はなくて、我軍令に違ひしを、咎めて些も借ざりしは、是英雄の眞面目、その賞罰に親疎なきは、名將の遺風ありといはまし。我那人に叱られて、一旦腹の立たるを、今さら思へば、愚痴なりき。我軍兵を驅催して、犬山氏を資けしは、素是亡君豊島殿の、怨を雪ん與なれば、その神速を恩にして、何等の功に誇んや。我愆り謬ちぬ。と只管慚愧後悔して、七犬士を敬ふこと、事の始に彌增けり。況件の光景を、見も聞もせし隊兵們は、道節が賞罰の、正しかりしに舌を掉ふて、寔に稀有の豪傑なるかな。恁る勇士に從はずは、我先亡の怨を雪る、よすがあらじ。と嘆賞して、怠るものはなかりけり。爾程に道節は先隊兵に、纏腰戰飯を披して、躬方の戰歿をも索ぬべく、快五十子へゆくべしとて、莊介小文吾現八大角、這四犬士と共侶に、阜の結縷草に坐を占て、裹飯をとう出つゝ、大家飢を繕ひけり。不題更話表、犬塚信乃戌孝は、犢に犬山道節と共侶に、五六十個の隊兵を從へて、伏て谷山の樹蔭に在り。既にして道節が、仁田山晋五主僕を射て、人馬共に生拘りし折、五十子の城の動靜を、見て來よとて遣したる、間諜の雜兵が走りかへりて、報るやう、緣連が撃れし事、その伴當們幾名賊、五十子の城へ逃て

頗ふに扇谷の管領(定正)は、必是忍岡の、城を投て走りしならん。這里よりして那里へは、路の程二里に過ぎず。はやく那里の城兵をもて、更に推寄來ることあらば、初の戰ひと同じからず。疲勞たる我小勢をもて、新隊の大敵に當らんこと、危しとも最危かるべし。然らでも西北に大塚の城あり、北に赤塚石濱の援あり。又鷲鶩畠槻、河肥の諸城あり。適に五十子の兵火を觀ば、近きは二三時刻の程、遠きも必通宵走りて、援の軍兵いで來つべし。この義を思ひ給へかし。と意を属れば、道節は、听つゝ屢頷きて、寔に微妙もいはれたり。よしを犬塚に告知して、共侶に快凱陣せん。和殿は素より那義を守りて、船にて等んといはるゝこと、こも亦人の及ぬ所、宜くその意に儘し給へ。と應てその智に服しけり。爾ば荘介小文吾現八、大角も共に、毛野を稱て、親疎恩仇、方殊なるも、一旦人と約束して、その信を失はず、且敵を知り己を知る、兵法も亦軍師の才あり。然ばこそ、仁義八行の玉の内中にて、智字を得たるは以あるかな。と只顧感じて已ざりけり。恁而落鮎有種は、五犬士に辭し別れて、毛野と倶に、その身の隊兵、五七名をいそがし立て、高畷の濱へ退く程に、肚裏におもふやう、約莫けふの戰ひに、犬山が武威を赫やかせしは、我帮助に憑らざることなし。我倘はやく舊好の、軍兵を驅催して、船を

亡君の、與に寃家を走らせじ、と思ふ意の駒さへ狂ひて、那軍令を忘れたり。いかで許させ給へかし。と陪話れば莊介小文吾現八、大角も共侶に、道節を相寛解めて、這人、仇を漏さじとて、漫に軍令を犯したる、その罪輕きにあらねども、昨夕一百の隊兵を、速に倶して來て、けふの戰ひを資けたる、その功も亦莫大也。這功をもて那愆に、換なば許すもけしうはあらじ。この義を承引給ひね。と異口同話勸釋しかば、道節僅に點頭て、洒家兵權を旨として、みづから驕昂ぶるにあらず、軍令 忽なるときは、士卒是より怠るべし。敵倘敗北の恥を雪めんとて、猛に多勢を驅催して、引返し來て撃つことあらば、躬方の英氣ふたゝび振はで、手を束ねて擒にならん。今軍令を正しくしぬるは、專是等の與なれども、衆兄弟の請るゝ所、その理あれば默止がたかり。異日の衆議に依るべきのみ。と應て有種にうち對ひて、和殿の罪過、輕きにあらねど、權且諸犬の意見に就て、我今その罪を糺さず。速に船に還りて、衆人を等ねかし。洒家は諸犬と共侶に、五十子に赴きて、犬塚を將て凱陣せん。この義をな愆ち給ひそ。といはれて有種怡悅に勝ず、言承しつゝ退きけり。當下毛野は遽しく、道節們と談ずるやう、犬塚生の奇計により、五十子既に落城して、那里に敵のあらずといへども、那河鯉の義をおもへば、我身ばかりは各位と、倶に那里に到らんこと、忍びがたき處あり。今より餘之七主と倶に、船に

誠あるを、看れども悟らず、听けども用ひず、只縁連們の奸佞人を、專信用したるにより、武威年々に衰へて、慼地敗績あり、もて鑑となすべきのみ。曩に犬塚犬山を、留んと欲したる、甲斐の國守武田信昌、その家臣、甘利堯元の事を聞しに、賢を愛する心あれども、いまだ拔萃とするに足らず。只捨がたきは孝嗣のみ。倘我們と同因果の、天縁約束あるものならば、犬士の隊に入るべきに、その事なきは遺憾し。といふを道節聞肯ず、間話休煩褋、倘要緊の事しもあるに。と禁めて貌を改めて、誰が許を得て陸に登り、敗走れる敵を撃たる。我が一百の隊兵を將て、仇を討ち城を拔きしは、和殿の帮助に憑るといへども、和殿漫に軍令を破りては、罪を糾さずはあるべからず。豫覺期の事なる歟。と敦圉き猛く譴らるゝ、有種驚跪きて、宣ふ趣理り也。在下教諭を蔑にして、衛戍を等閑にしたるにあらず。身方の利運とおぼしくて、敵の雜兵敗走るを、見ること分明なりければ、倘定正を撃漏す、こともやあらんと思ふばかりに、遺されたる薪木兒、船公をさへ相具して、品革の原に敵を竢しに、果して寃家定正を、遮留たりけれども、小勢なれば朽惜しくも、纔に從類兩三名を、撃捕ることを得たるのみ。こは併

ありながら、そを退けて、敢用ひず、又内室に、蟹目前の賢才あり、又老黨に、河鯉守如の忠

ずる毛野道節、憶ず俱に見かへりて、適射たり、微妙の弓勢。この樹は即忠與們が、廟字に象る、是狗椿、節は則是道節、當意卽妙、歌人の、風流に優る進止、こゝろを得たり。快邁ね。といへば孝嗣鞍局に、揖をしたる告別、さらば〳〵。とばかりに、馬乘旋す片菂、二町許先だちて、舁ゆく親の亡骸の、轎子に走著んとて、一鞭中たる武者態を、逈に目送る莊介小文吾、現八も亦大角も、其頭に聚合し雜兵們まで、齊一噎、と嘆賞の、聲を合して、憎からぬ、適敵や。と稱へけり。却說毛野道節は、舊の屯に退きしを、自餘の犬士們相勞ひて、這那の問答を、最愛たしとて感じたる、そが中に莊介小文吾は、毛野道節にうち對ひて、曩に荒芽山の急難より、我們四方へ離散して、諸國を徧歷せし折に、遇ふ所の者、知音にあらず、多くは皆是歹人のみ。獨越後の長尾の家臣、稻戸津衞由充のごときは得がたし。且長尾景春の奶々、箙大刀自は、傳聞の訛外にて、我們を憎むこと、執念深に過ぎたれども、邪智奸惡の婦人にあらず、北越數郡を威服して、その子の與に扞城となりしは、こも女丈夫といふに庶かり。這主從を除くの外に、稱すべきもののなかりしに、今亦玆に蟹目前と、守如親子の良善あり。那箙大刀自と、由充の上に出づ。縦寃家の眷屬也とも、一旦事の錯ひしより、主從刃に伏したるは、最惜かるべきものにこそ。といへば現八大角は、共侶に點頭て、然也、扇谷定正は、軍師に内管領巨田持資

馬也。繆に晋五を射て落して、雜兵們に捕せしかば、我軍用の資になりて、進退に自由を得たり。今はしも、仇は走り軍散じて、又用る所なし。和郎這馬にうち跨て、逃たる主に趕著ば、敵に捕られし躬方の馬を、とりも復せる微功とならん。と諭して、後方を見かへりて、雜兵に持したる、盔をやをら拿抗て、これは是首級に換たる、和郎が主の頭鎧なり。和郎が忠孝の愛たさに、獲させまほしき東西ながら、目今は遞與がたかり、明日高暾へ來て拿りね。然らば做すことなきにあらず、主の恥辱を隱す功あり、這里にて死するに勝らずや。いで〱。といひつゝも、件の馬を板橋の、頭へはやく牽向さして、尻を礮と撻しかば、馬は忽地驚きて、橋を渡して前面へ走るを、孝嗣、楚と拿駐めつゝ、道節毛野們にうち對ひて、教諭殆感謝に堪ず、仁義の敵には胸の劍も、鈍りてうちも向ふに由なし。然らばこの儘立別れん。と答て軈て眉尖刀を、雜兵に持しつゝ、角弓左手に搔拿て、馬に閃りとうち跨れば、隊兵們がはやくこゝろ得て、轎子の戸を閉籠て、擡起して徐やかに、舁て先にぞ立にける。孝嗣これを見かへりて、馬に拍れ、再三番、輪馳をしつゝ遽しく、弓に箭刺ひ彎固めて、やをれ犬山道節忠與、君夫人の仇、父の怨、且我君の會稽の、恥は異日の戰ひに、雪んと欲する孝嗣が、誓の征箭は恁こそ。と名告かけつゝ摽と射る、目的狂はず道節が、背後に粒たる椿樗の、節に發矢と射入たる、本事に感

たからん。こは未曾有の好意なれども、從ひがたき所あり。這里に留りし隊兵は、皆腹心の輩にて、我親の忠義に死せしを、いと惜ずといふものなし。恁れば今この問答も、憚るよしはなきものから、既に和殿にいはれたる、那楊震が四知を思へば、小子敵と對陣しながら、征箭一條も射出さず、反て長談緩語して、この儘立も別るゝを、知る者ありて、主君に稟さば、忽地に疑れて、罪得がましき所行なるべし。倘爾る寃屈の罪に沈みて、獄卒の手に死ん折、這里にて戰歿せざりしを、後悔すとも及んや。と推辭むを毛野は云云と、なほ諭さんと欲せしを、道節慄へず、聲ふり立て、其頭の遠慮は、然ることながら、定正の惑ひ、竟に醒ずは、這里にて戰歿したりとも、いかにしてその義烈をおもはん。我けふの戰ひに、多く敵を殺せしは、獨管領定正を、擊果すべき爲なるに、そを漏しては、幾千人、鏖にしたりとも、我心に嗛んや。遮莫定正走るといへども、我そが盔首をば捕りぬ、豫讓が刺たる衣に優すべし。和郎死たくば、みづから死ね。我大刀は讐を擊ち、又世の邪魔を征するのみ。縱寃家の家臣也とも、孝烈忠義の後生を、擊ん刃は持ざりき。和郎よく這意を會得して、犬阪が意見に就ば、目今拿らする東西こそあれ。といひつゝ後方を見かへりて、その馬こゝへ。と指招けば、雜兵がこゝろ得て、遽しく牽寄する、馬を傍に駐めさせ、又孝嗣にうち對ひて、河鯉生、此は是、仁田山晉五が乗たる

ことを得ず做す事すら、行ふ所機變なれば、衆魔の祟を爭何はせん。然るを況狡兒、世才を負み、智術を旨とし、密策隱慝せざることなく、一旦その利ありといへども、機變の所以に、事の破れに、至らざるもの孰かあらん。那楊震が四知の誡、守らば後悔なかるべき。その理は恁如なれども、蟹目前と老叟の如きは、機變の破れありながら、事一毫も私慾なく、苦節孤忠の所行なれば、香しき名は身後に遺らん。然ばにや、死するものは福あり、生りといへども恥多き、その禍鬼の來路を推せば、定正主の招く所、只利を好みて飽ことなければ、その身の慾に相愜ふ、佞人をのみ親愛して、賢妻忠臣の諫を聽かず、武毛信越の、四箇國を有ちながら、纔に一百許人なる、敵に追れ城を陷され、士卒咸離散して、賢妻忠臣刃に伏しぬ。みづから菲薄を省て、持資親子を用ひずば、管領は只名のみにて、その家是より衰ん。和殿この理をよく悟らば、這里にて戰歿すべからず、存命て主君に仕へ、諫めて主君の惑ひを覺さば、忠孝兩ながら全かるべし。こは助言に似たれども、我苟にも守如叟と、一面の交りあり。その子の與に理を推て、いはざることを得ざる也。みづから念ひ給はずや。と最懇切に諭したる、理りなれば、孝嗣は、答難つゝ沈吟じたる、頭を擡げうち頷きて、現こゝろ得たり、犬阪主。和も漢も今も昔も、敵の爲に紿れて、命を殞は珍しからず。仇の爲に諭されて、死ざることは得が

第九輯　卷之二

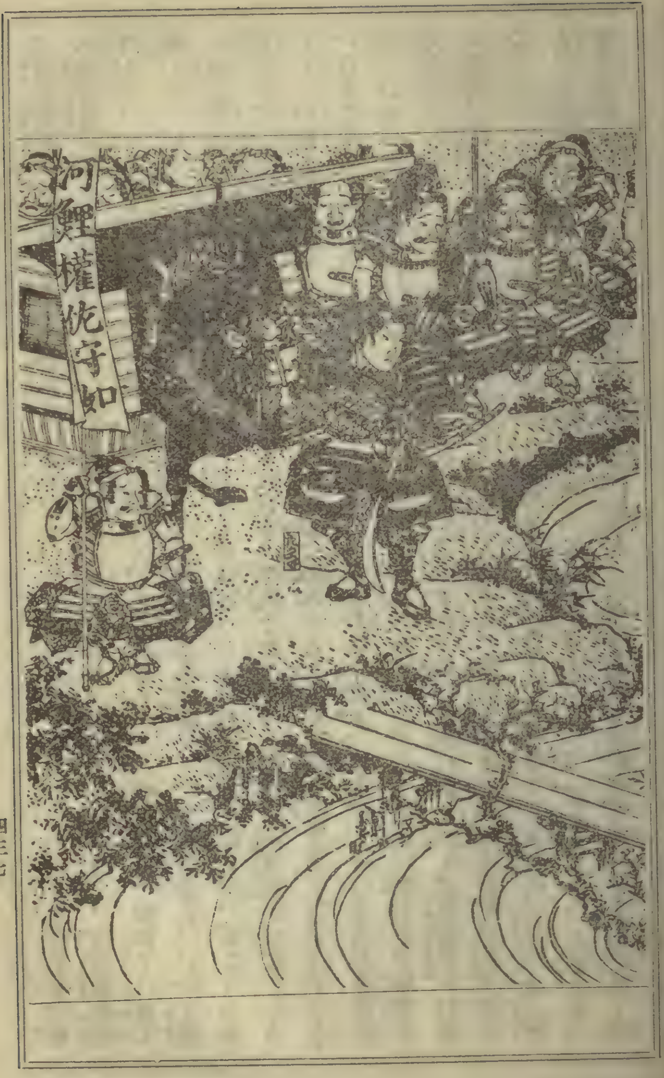
第九十四囘

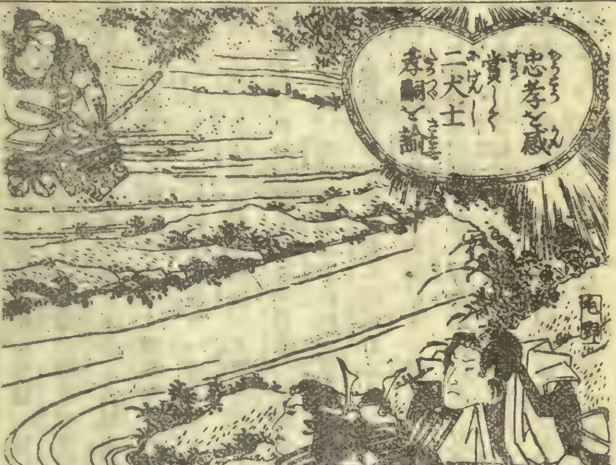
高嗾の板橋に道節戰馬を放つ
五十子の城に信乃姓名を留む

當下毛野は、愀然と、孝嗣にうち對ひて、適候、河鯉生、恩の爲に命を擲ち、讐の爲に干を枕とす、是戰國の慣にて、死してその名を後に貽すは、武士の欲する所なれども、そも亦時宜に依るべきのみ。和殿血氣の勇を負みて、その退くを羞るが爲に、戰歿せまく欲するとも、犬山いかでか大人氣なく、和殿と刄を交んや。嗚呼痛しいかな守如叟。忠勇智計、儔稀にて、主君の與に奸黨を、芟除んと欲したる、その籌策可といへども、原是機變に出たれば、仇に知らるゝ魔障あり。夫君を愛して亂を怕れ、その孽を未然に査して、よく奸佞を除くものは、則是忠臣也。しかれども、謀る所正理にあらず、機變を旨とせし故に、その籌策成るに及びて、反て君を危くして、その身を殺す禍害あり。蟹目前の賢なるも、倶に死然を得ざりしは、是隱慝の祟ならずや。蓋天道は善に福して、必淫に禍す、淫は密策隱慝也。君の惑ひを醒し難て、已

感嘆の外なかりけり。この段いまだ盡さねども、梢數こゝに定限あれば、卷を更て這次に、解分るを聽ねかし。

親に伏て果給ひき。父と夫人の終焉を、我身ひとつにかこたれて、倶に死まく思ひしかども、煙に紛れ後の遺言重ければ、蟹目前のおん亡骸を、先轎子に乗まゐらせ、志ある士卒を隷て、門より、辛くも出し奉り、却其後に親の亡骸をも、火中に棄んことの惜しさに、亦轎子に移し乘して、舁して這里に來にけるは、亡骸也とも我君の、おん馬前にて、父子共侶に、いかで屍を曝しなば、是切てもの事なるべし、と思ひし事は違へども、約束違ぬ犬阪主の、貳なき心を聞知りて、初の恨み悔しくも、歡しくも我君の、危窮を救ひまつりしは、是孝嗣が功ならず、死しての後も敵の英氣を、折くよしある親の忠、那死せる孔明が、生る仲達をなん走らせし、といひもて傳へし唐山の、諺には及ばずとも、その子としては慰る、よすがなきにもあらざりけり。いふべきよしは既に盡しぬ、聞くべき事も、聞果たり。敵ながらも理義に賢しき、諸犬と刃を交えん事は、素より願ふ所にて、思の隨に戰歿せば、親の遺訓に稱ふべく、君辱られ給ふ時は、臣死すといふ聖賢の、敎に恥ざるよしもあらん。卒這方よりうち渡さん歟、其方より蒐らるゝや、とく〳〵雌雄を決しね。と詞雄々しく死を急ぐ、忠と孝とに敷島の、日本魂潔き、那親にしてこの子あり、寔に可惜後生を、今撃果して何にせん、健氣なりき、と愛思ふ、毛野道節は倒に、怯れたるにはあらねども、望しからぬ戰ひを、推辭て去らんはさすがにて、


河鯉權佐守如


忠孝を蔵
賞しく
二犬士
孝嗣を諭

は、餘談無益に似たれども、守如主に憑れずは、我いかにして面を認らぬ、讐を輒く撃つよしあらんや。なほその德をおもふものから、今よりして犬山の、方人たらざることを得ず。和殿の大人に對面して、是等の意味を報ずもあらば、再會得がたく、遺恨なるべし。病臥の對面、不便也とも、この義を許し給はずや。と他事なくいはれて孝嗣は、異議に及ばず應をしつゝ、急に後方を見かへりて、その轎子を這方へ。と招くに雜兵こゝろ得て、はや轎子を擡げつゝ、川畔近く舁居たり。登時佐太郎孝嗣は、犬阪毛野にうち對ひて、請るゝよしの推辭がたさに、親を這方へ招きよせたり。實に病臥の爲體、無禮を許し給へかし。といひつゝ軈て轎子の、引戸をやをら推開くを、毛野道節は共侶に、見れば無慚や守如は、腹搔砍たる亡體の、衣裳は鮮血に染做たり。思ひがけなき光景に、毛野はさら也、道節も、こは〳〵什麽。とばかりに、共に呆れて、事問ん、詞も小霎時なかりけり。登時河鯉孝嗣は、落る涙を振絞りて喃犬阪主、親の自殺は計りし事の、岩齟ひたる恨みによれり。又只我父のみならず、蟹目前も、憖に、奸佞人們を誅せんとて、守如にそのこゝろを得さして、出處不定の坐擊師を、討手に憑みたりしより、還て敵の便宜となりて、君は危窮に及ばせ給ひ、剰城を攻破られては、孰の路にも我君に、向奉る面はなし。切ては君に先だちて、死して我這赤き心を、後にぞ知せまつらんとて、刃

くは、我馬疲れて、定正を漏したり。なれども透さずなほ趕はゞ、撃果すこともあるべきに、敵に加勢の頭人は、扇谷の大忠臣、河鯉權佐守如と、寫せし小幡に※兄弟、犬阪們が云云、と議論に時の移りしは、けふこそと思ひし仇の命運、まだ盡ざるにあらんずらん。定正走りてあらずなりしに、和郎們親子を撃んは要なし。とく〳〵主の迹を慕ふて、その投すかたへゆきねかし。といふを孝嗣うち聞て、言遺もなき義士の明辯、那疑ひは釋たれども、然までに義理を達ながら、曩に豐島と煉馬の人々、野心によりて討果されしは、獨我君のみならず、山内の管領家（上杉顯定）も、同意によりて合戰ありしに、和殿は只管我君をのみ、仇として執念深も、恨るは是甚麼ぞや。と詰れば道節冷笑ひて、そはいはるゝことながら、豐島煉馬の滅亡は、當時定正の軍略より出て、巨田持資大將たり。山内顯定も、千葉宇都宮を將として、加勢の軍兵ありといへども、主客の勢ひ同じからず。恁れば是、扇谷は正敵にて、山内は傍仇也。昔唐山晋の趙無恤は、魏氏韓氏と謀じ合して、撃て智伯を滅したり。しかるに豫讓は智伯の爲に、獨趙氏を仇とし寃ふて、韓魏をもて怨とせず。是趙氏は正敵にて、韓魏は傍仇なれば也。我定正を仇として、山内を怨とせざるも、事情は相似たり。和郎們が知ることならんや。といふを毛野は推禁め、孝嗣にうち對ひて、不佞素より犬山に、内應せざりし趣を、既に會得せられし上

もて、大敵を擒るべからず、間て益なきことながら、親の疑惑を霽さん與に、先この一義に及ぶのみ。といはれて感ずる毛野よりも、道節は胤智の、答を等たずうち頷きて、如右思るゝは、寔に以あり。我はきのふ憶ずも、湯島の社頭を徘徊して、那密談を偸听したり。この折までは犬阪と、いまだ面を認らねども、是宿因の係る所、異姓の弟兄なるよしを、思ひ合せし證もあれば、その復讐の趣を、義兄弟們に告知せ、豫毛野と相識れる、犬田犬川二人をもて、悄々地に縁連に助劍の奴們を防せたり。この便宜により、我おもへらく、犬阪が事、五十子の、城内へ聞えなば、加勢の士卒を出さるべし。その虚を覘ひ、短兵急に、城を拔き仇を屠りて、亡君亡父に手向んず、と胸に軍議を定めしかば、犬塚犬飼犬村們と、倶に舊好の兵を從へて、便宜の地方に隊配しつゝ、城の虚實を覘ひしに、思ふに倍て造化精妙、定正みづから犬阪們を、追捕へんとて士卒を將て、漫に城より出られたり。因て猛可に部を易て、犬塚信乃に城を攻させ、洒家は、犬飼犬村と、東西に立わかれ、不意に起りて管領を、挾みて攻撃しかば、思ひの儘なる勝軍して、我定正を射たれども、その箭に兜を摧きしのみ、裏缺ざりけん盔を棄て、仇は命を免れたり。憾れば犬阪いかにして、我軍略を知るよしあらんや。他は、他が讐を撃て、河鯉氏と約束を違へず。我は、我怨を雪めて、忠と孝とを盡すのみ。欲する所各異也。只恨ら

我初は胤智を、義俠の豪傑とのみ思ひしに、誰か知るべき他も亦、我君を仇とし寃ふ、豐島煉馬の殘黨なる、犬山忠與とやらんが支黨にて、我機密を忠與們に、報知せて倶に謀りけん。然ば館(定正をいふ)の大事に及て、遂に城さへ拔れたり。恁れば我忠心は、還てよなき不忠になりぬ。縱緣連們を除くといふとも、主君を敵に擊しては、枝を矯て花を散し、角を矯て牛を殺すといふ、鄙語にだも劣りたり。然とて汝は死をな急ぎそ。身單なりとも戰場へ、走りゆきて、我君の、危窮を救ひ奉れ。倘又その期に得遇ずは、便捷を旋らし胤智と、刺錯へて其首にて死ね。しからば親の過を、聊補ふよすがとならん。この餘の事は箇樣々々、と敎訓叮寧なりければ、小子その意を得たれども、然とて親を棄置て、燔死さんはさすがにて、はやく轎子に扶乘せ、忠義の士卒三十餘名、と諜し合しつ、轎子を、舁して這里に走り來て、思ふがごとく我君の、必死を救ひまゐらせたり。然ば我們親子二名は、些の雜兵を從へて、敵を防ぎて、我君を、後安く落しまゐらせん、と思ひ決めつ、今までも、只死を極めて在りけるに、和殿們も亦左右なく蒐らず。後れて來ぬる犬阪氏は、犬山氏の軍議を知らで、初て對面の言の顚末、洩て這里へも聞えしかば、聊恨みを釋くに似たれど、なほ訝しき事多かり。犬山氏はいかにして、我親と犬阪氏の、密談を聞知りて、はやく隊配りをしたりけん。知らずは纔の隊兵を

義俠、劇孟荆軻に勝れる、豪傑なるを知覺して、悄々地に胸臆をうち諦し、那縁連們を撃果されん、けふの便宜を相譚ひしに、豈思んや縁連は、犬阪氏の與にしも、親の仇たるものなればとて、異議もなく承引れたる、その事の顚末は、小子も親の密語により、聞知ることを得たれども、今諄々しく演んは要なし。然るにより我親の、忠謀果してその圖に中りし、犬阪氏の手を借りて、君の與に蠹毒を除きし、そは歡ばしき事なれども、我君は只縁連を、寵任の惑ひ醒給はず、その事の報ありしより、怒に堪ず、犬阪氏們を、みづから搦捕んとて、士卒三百餘名を率て、猛可に出馬の准備あり。親は竊に驚憂ひて、それとはなしに利害を演つゝ、連りに諫稟せしに、君侯震怒酷しく、騎馬の鐙の折檻にて、親守如はその痍重く、今なほ臥て轎子に在り。恁而我君出馬の後、敗軍の雜兵脱れかへりて、事恁々と報しかば、城内の士卒駭譟ぎて、快加勢の兵を、まゐらせんず、と相罵りて、准備にとりも紊せし折、犬山氏們の義兄弟、犬塚信乃戍孝とか聞えたる、勇士の爲に謀られて、五十子の城を火攻せられ、烈しき魔風になごりなく、城廓灰燼になりにけり。敵は纔の隊勢なれども、躬方は猛火に辟易して、撃れたるもの尠からず。その餘は士卒後門より、咸落亡て、往方を知らず。恁る折から我父は、胸痛により臥て在り。忽地に身を起して、小子を喚近著け、犬阪氏と密議の趣、箇樣々々と解示して、

然ばこの折敵躬方の、相距ること遠くもあらず、間に一條の溝川ありて、纔に板橋を架したり。敵は殊さら小勢なれども、他より橋を引きもせず、睨へあふて在る程に、六犬士の問答議論の、那里へも聞えけん、忽地敵の隊伍中より、年尚青き一個の武者、小櫻威の鎧を著て、眉尖刀を挾み、川の上に走み出て、聲高やかに喚るやう、其方の陣にものいはん。犬阪毛野胤智のいますれ歟、犬山氏もいまするならば、いはまくほしき事こそあれ。倶に這方へ走み給ひね。恁いふは、不肖なれども、河鯉權佐守如が獨子にて、河鯉佐太郎孝嗣、と喚るゝもの也。願ふは、とく〳〵出給へ。と兩三番叫びけり。登時毛野道節は、敵に聲をかけられて、何かは些も猶豫すべき。道節は遽しく、馬より閃りと下立て、一個の雜兵を將て、毛野と倶に、這方の岸に雙立て、名告をしつゝ、佐太郎孝嗣と對面す。當下孝嗣阿容たる色なく、毛野道節們にうち對ひて、小子尙弱冠の身を省ず、親に代りて豪傑們と、今問答に及ぶこと、敢譽を求るにあらず。爭何せん權佐は、今朝より猛に胸痛の病著あり、行步辯舌不如意なれば、則轎子に扶乘して、舁して倶して來ぬる也。言空らしく候へども、今さら隱すに由もなき、親は忠信他に異なれば、嚮に君夫人蟹目前の、內命を稟奉り、當家の與には大毒蟲にて、君を惑し國を賣る、那緣連們の奸佞人を、いかで除ん、と思ふ折から、昨日湯島の社頭にて、料らずも犬阪氏の、

と、誰かいふべき。這議をもつて進退を、定め給はゞ後悔あらじ。惴るは要なき事ならずや。と詞を盡して諫れば、只管勇みし道節も、言の道理に逼られて、又いふよしもなかりしを、然こそと感ずる菲介小文吾、就中現八大角は、毛野が議論をうち听て、倶に感嘆の聲を得たゞず、憶はずも名告かけて、犬阪主、我們は、犬飼現八信道也。犬村大角禮儀にて候ぞ。嚮には犬山犬塚の、密議によりて、和殿の與に、敵の助劍を禦んとて、隊兵三十許名を從へ、程よき樹蔭に伏躱れて、姑且勝負を覘ひしに、犬田犬川二勇士が、那助劍們を殺散らして、後やすくなりしかば、我們は手を下すに及ばず。折から管領定正主が、みづから城よりうち出て、鈴の茂林邊に來にければ、更に亦犬山の、與に寄敵と戰ふて、北るを趕ふて捷徑より、剛才這里に來つる也。といへば毛野は恭しく、現八大角にうち對ひて、こは犬飼主、犬村主にてをはせしな。我復讐の本意を遂しは、皆是諸彥の賜ものなりしを、稍聞知りて感謝に勝ず。こも宿因の致す所歟、凡慮の前知すべきにあらず。誠に得がたき幸ひなりき。と其歡びを演るにぞ、有種も亦我み出、毛野に對ひて、名告をしつゝ、料らずも諸犬士の、愛顧を得たる身の歡びを、詞短く告にけり。間近く敵を措きながら、屑ともせざりける、這六犬士の問答を、側聞せし雜兵們さへ、且感じ且歡びて、現英雄の胆魂は、格別なりき。と潛語きて、いよゝ憑しく思ひけり。

胤智也。昨日湯島の社頭にて、料らず對面したれども、迭に認らぬ折にして、傍に人のありしかば、和殿ならんと猜しながら、名告も遂ず別れにき。爾るに那折河鯉氏と、我が密談を偸聞せられて、和殿のみかは、餘も諸犬士の、帮助によりて、父の仇を、撃得たる身の歡びは、萬謝も又何ぞ足ん。我のみならで、和殿は亦、君父の仇定正主を、撃んとせられし、軍略精妙、思ひの隨に敵を屠りて、勢ひこゝに及びたる、事皆意表に出ざることなく、感ずるにあまりあり。しかはあれどもつら〳〵と、事情を思以るに、我復讐の便宜はさら也、和殿の折を得給ひしも、河鯉氏が主の側なる、奸佞籠山緣連們を、除んとのみ相計ひたる、その孤忠より出たれば、我們に德なしとせず。小弟は始より、和殿の軍議を知らずといへども、倘和殿と共侶に、定正主を撃走らしなば、河鯉氏を紿きて、不忠の人となすに似たり。然るを小弟幸ひに、和殿の戰ひの期に後れて、方僅面會することを得たり。憖れば和殿はとまれかくまれ、小弟はけふの戰ひに、定正主を趕ふべからず。然るを況河鯉氏をや。是義の赴く所にして、和殿を疎略に思ふにあらず。倘愚意をもて揣らんには、定正主は、既に走りぬ。趕とも今さら及ぶべからず。然ばとて今こゝにて、河鯉氏を撃べからず。三舍を避て、那孤忠を、空しうせざるも武士の情也。なれども他より撃て蒐らば、是非に及ばぬ所也。その折雌雄を決するとも、怯したり、

らず。且五十子の城より討手の大將は、管領の家臣にあらず、定正みづから多勢を將て、出陣の爲體、其戰ひの光景を、地方の浦人にたづね、聞知りて、倶に歡ぶこと大かたならず。逃たる敵と逐ふ躬方の、迹を慕て來ぬる折、躬方の雜兵もなごりなく、咸この地方に聚合けり。爾程に道節有種們は、定正援の兵を得て、走りていまだ久しからず、那里に留る敵あるよしを、現八大角が報るを聞て、遺恨に堪ず。そが中に、道節怒れる聲高やかに、這奴們何ばかりの事あらん。快蹴散らして、定正を、捕な逃しそ、趕蒐よ。と罵りつ泥障を蹴立て、馬を找んとしたりしを、現八大角倶に禁めて、惴り給ふな犬山主、擊も漏すも、天也命なり。那里に扣えし敵の頭人は、豫その名を傳聞たる、河鯉守如なるよしは、小幡の文字にて分明也。且戰の場に臨みて、轎子にうち乘たる、その籌策知るべからず。找むも時宜によるべきのみ。と言葉ひとしく諫るを、道節聽かず、頭を掉て、そはいはるゝことながら、非除守如なればとて、なでふ怕ることあらんや。那轎子を舁せしは、昔蜀漢の趙雲が、躬方の小勢に、慌てず噪がず、廣く城門を推開きて、魏の大軍を退けたる、計策に似たらんのみ。時は必失ふべからず。其首放さずや。と敦圉けども、現八大角いへばさら也、荘介と小文吾も、倶に道節を推禁めて、なほ云云と諫る程に、毛野も亦道節が、馬の邊に找みよりて、喃犬山主、小弟は、是犬阪毛野

柴浦のかたに走り去り、その餘は件の轎子を、小川の前面にうち卸して、整々として扣えたり。然ば現八大角們は、敵に援の兵の、來ぬるを怕るゝにあらねども、件の新隊の頭人は、豫聞知る守如也。且轎子にうち乘りしは、是必詭の計なるべし、と尋思をしつゝ我方を禁めて、撃も蒐らず、蒐られもせず、こゝろともなく猶豫したり。恁りし程に道節は、定正の近習四名を、一個も漏さず撃果して、且射落したる、定正の、盔を雜兵に持しつゝ、なほ漏さじとて直趕に、品革の原まで來にける折、落鮎餘之七有種が、敵の敗北をはやく猜して、船より出て、定正の、去向を遮り攻戰ふて、その從類を撃捕りて、なほ定正を趕んとするに、料らずも邁遭けり。又犬阪毛野胤智は、嚮に莊介小文吾們と共侶に、西なる林樹原に退きて、料らず助劍せられたる、緣由を初て听くに、昨日湯島の社頭にて、守如と密談を、道節に偸聞せられて、不思議に帮助を得たる事、及道節は、この折をもて、君父の仇たる定正を、撃んと欲するけふの隊配り、又犬村大角禮儀も、同因果の犬士たる事、都て遺なく知る事を得て、感嘆の外なかりしに、鈴の茂林の東方に當りて、逈に鬨の聲聞えしかば、原來犬山の計りしごとく、五十子の城内より、加勢の士卒を出されて、我方と雌雄を爭ふならん。卒然らば共侶に、ゆきて力を勠せんとて、三人連立て來にける程に、我方の戰ひ勝利を得て、道節現八大角們は、北るを趕て其首には在



現八大角雙で大敵を破る

品革の原に道節定正と赶ふ


大角

全身鮮血に染しかば、定正憶はず嗟嘆して、嚮には我一旦の、怒に得堪ず、事を好みて、河鯉權佐守如の、諫を聴かでこの期に曁べり。今は百遍悔とも甲斐なし。快五十子の城に還りて、寄來る敵を防んずとて、又八九町走りつゝ、と見れば五十子の城のかたに、黒烟空を焦して、兵火既に熾り也。主從是に又驚きて、那は什麽。とばかりに、呆れて馬を駐めたり。浩處に、現八大角は、敵の大將を撃捕んとて、猛卒十餘人を相倶して、捷徑を經て出て來つ、目今定正主從三名が、停立たるをはやく見て、推捕稠て撃んとす。定正必死の窮阨に、免るべくもあらざれば、二階堂高四郎、三浦三佐吉郎共侶に、定正の馬前に、立塞り、敵を拄えて、現八大角に撃れけり。爾程に定正は、近著く敵の雜兵を、殺拂々々、路傍の阜に馳陟りて、腹を砍らん、と覺期の折から、忽然として一隊の軍兵、阜の後より走出たり。と見ればその勢三十餘人、多からねども新隊に似たり。殊に亦訝しきは、只一挺の轎子を、雜兵四名に舁したる、そが先に小幡を持して、河鯉權佐守如といふ、六文字を寫しけり。定正これを見かへりて、原來敵にはあらざりき。我生たり、と不勝の歡び、阜より馬を乘下しつゝ、定正一騎こゝにあり。守如救へ。と喚りて、多勢の中へ馳入りけり。登時現八大角は、三浦二階堂を撃捕て、又定正を趕んとせしに、敵に援の兵いで來て、はやく主君を守護したる、そが中に十四五人は、定正に從ひて、

るあり。有種適にこれを見て、肚裏に思ふやう、料るに優たるけふの戰ひ、定正みづから城より出て、躬方の勝利とおぼしきに、犬山主の誡ありとも、我安然と這船を、戍りて這奴們を擊ずもあらば、武士たる甲斐もなきに似たり。しかるべき敵一人なりとも、擇討に擊捕て、我も亦亡君に、志を致すべけれ、と尋思をしつゝ悠々と、雜兵並に戰ひを好む艄主們に、意衷を示し、武具著せて、悄々地に陸にうち登る、その隊の兵卒七八名、程よき樹蔭に立躱れて、落來る敵を俟つゝ在り。悠るべしとは知るよしもなき、扇谷定正は、僅に殘る近習を倶して、品革の原を走る程に、去向も亦復安からで、顯れ出る一隊の敵あり。先に找みし一個の頭人、はや鎗節間を拿組して、耳を串く聲高やかに、來たれるは是定正歟。著たる鎧の威毛と、乘たる馬にて我よく知りぬ。先君豐島勘解由左衞門尉信盛朝臣の奉爲に、怨を雪ん覺期をせよ。と喚りつ逼近づきて、面もふらず突て蒐れば、定正主從驚慌て、敢亦勝負を好まず、且戰ひ且走るを、有種は隊兵を、烈しく找めて息をも養れず、痛痍を負て走難たる、敵兩三名擊捕りけり。悠りけれども定正は、僅に九死を免れて、高畷まで落て來つ、初て吻と息をつきて、後方適に見かへれば、相從ふたる近習們は、大かたならず路に擊れて、二階堂高四郎、三浦三佐吉郎と喚做たる、只這兩個の近臣のみ、死ざることを得たれども、他們も數箇所痛痍を負て、

蓬くも、敵に背を見するよな。けふこそ復す忠與が、怨の征箭を受ても見よや。と辱しめ喚掛て、箭路近くなる隨に、弓を滿月の似く彎固めて、矢聲尖く嘌と射る。修煉差ず、定正の、盔の盔子を射摧きたる、箭响きと共侶に、偸緒さへ弗と斷離れて、盔は地上に墜たりける。定正吐嗟、と胸を潰して、鞍局に俯し、頭を抱て、其首ともわかず逃走るを、道節はなほ遣らじとて、馬に拍れ趕たりける、勢ひ免るべくもあらざれば、定正の近臣三四名、是非なく路に踏留りて、齊一防戰ひしを、道節は物ともせず、左に弓を挾み、右手に刀を拔閃めかして、近づく敵を砍仆し、遠きは馬の蹄に掛て、或は蹴返し蹂躙らする、縱横無㝵に、勇士の突戰、獅子奮迅の勢ひに、虎彪も用る處なく、然しも四個の近習の毎、悍からざるにあらねども、思ふにも似ず度を失ひて、或は頭顱を擊落され、或は深痍に堪ずして、仆るゝもあり俯すもあり、鮮血に馬蹄を浸したる、そが程に定正は、辛く虎口を落延て、稍品革の原まで來にけり。休題

更說、落鮎與之七有種は、曩に道節に諭されて、那隊に加ることを得ず、戰飯を炊ぐ與にとて、留置れし四五名の、雜兵們と共侶に、高畷の浦の船に在り。既にして定正の、みづから隊兵許多將て、品革鈴の茂林の方へ、馬を走らせたる軍裝を、看ること分明なりけるに、那里の戰ひはやくも敗れて、敵亂走すとおほしくて、雜兵の逃たるならん、慌しく五十子のかたへ走

正、先亡煉馬の一老臣、犬山道策が嫡男なる、犬山道節忠與こゝにあり。襲に白井の狙撃は、巨田助友に裏を畫れて、我計略行れず、多年の蟄懐けふに至れり。刃を受よ。と罵りて、隊勢を拔めて攻立れば、定正酷く驚きて、原來敵に伏勢あり。快一方を撃破りて、退かずや。と喚禁る、聲より先に扇谷の、士卒齊一驚慌て、退かんと欲すれば、後に道節の勁敵あり。又進んと欲すれば、前に犬飼犬村の兩雄あり。且左は是、渺々たる大洋にて、右には樹木隈もなければ、路陝くして進退便なく、前後の敵に揉立られて、撃るゝものぞ多かりける。是より先に、地上織平は、犬飼現八と鎗を合して、小霎時は挑戰ひしに、腕はやく衰て、既に淺痍を負ひしかば、逃んとするに透間もあらず。折から敵の伏兵の、後方に起りぬ。といふ程こそあれ、後陣も共に亂れしかば、織平いよ〳〵胆落て、引外さんとせし程に、現八に咽喉を刺れて、仰反仆れて死でけり。又大角と鎗を交えし、末廣仁本太は、躬方猛可に敗走りて、地上織平も撃れしかば、驚怕れて逃んとせしを、大角透さず鍸伏せて、首を雜兵に捕せけり。爾程に定正は、前後の敵に攻敗られて、既に危ふかりけるを、有係に主の命に代りて、死する兵なきにあらねば、僅に一方を殺拔きて、相從ふ近習八九名、馬の左右を戍りつゝ、品革のかたへ走る程に、道節は只一騎、衆に先だち馬を飛して、驀地に趕蒐來つ、迥に聲をふり立て、管領定正、

臣なる、犬山道節忠與が、けふ復讐の第一陣は、這個異姓の義兄弟、犬飼現八信道、犬村大角禮儀が、這里に伏しを知ざるや。拨みて勝負を決せよ。と指招き冷笑ひて、大路も陝しと立たりける。定正これをうち聞て、原來這地の狼藉兒は、嚮に緣連們を撃果したる、那犬阪毛野とやらん、只其三名のみならず、豐島煉馬の殘黨も、亦那隊に在りけるぞや。遮莫看るがごときは、長の知れたる烏合の小敵、躬方の多勢に比れば、看算にだも足らざるべし。推捕稠て撃ずや。と連りに采幣うち揮て、躬方を奬す大將の、下知に從ふ先鋒の頭人、地上織平、末廣仁本太、一百餘個の雜兵を、魚鱗に備へ咄と嘖きて、三七二十一に撃んとす。登時現八大角は、躬方を佶と見かへりて、兵每中を割られな。と聲をかけつゝ共侶に、鎗を拈て近づく敵を、瞬息間に錑伏せたる、勇將の下に弱卒なければ、その隊の雜兵三十許名、各敵を引受て、一人をもて兩三人に、當らずといふものなく、入亂れつゝ戰ひけり。爾程に現八は、地上織平と鎗を交え、又大角は、末廣仁本太と雌雄を爭ふ、戰ひいまだ幾ならず、定正の後陣のかたに、敵の伏勢猛に起りて、先に拨みし一個の大將、是甚なる打扮ぞ、紺の糸の甲に、火形打たる冑の緖を締、四尺三寸ありける大刀を跨へ、廿四揷たる中黑の征箭を背に駝做し、本繁籐の弓の、眞中を握持て、桃花馬の太逞きに、雲珠鞍措て乘たるが、天地に响く聲も尖く、やをれ管領上杉定

第九十三回

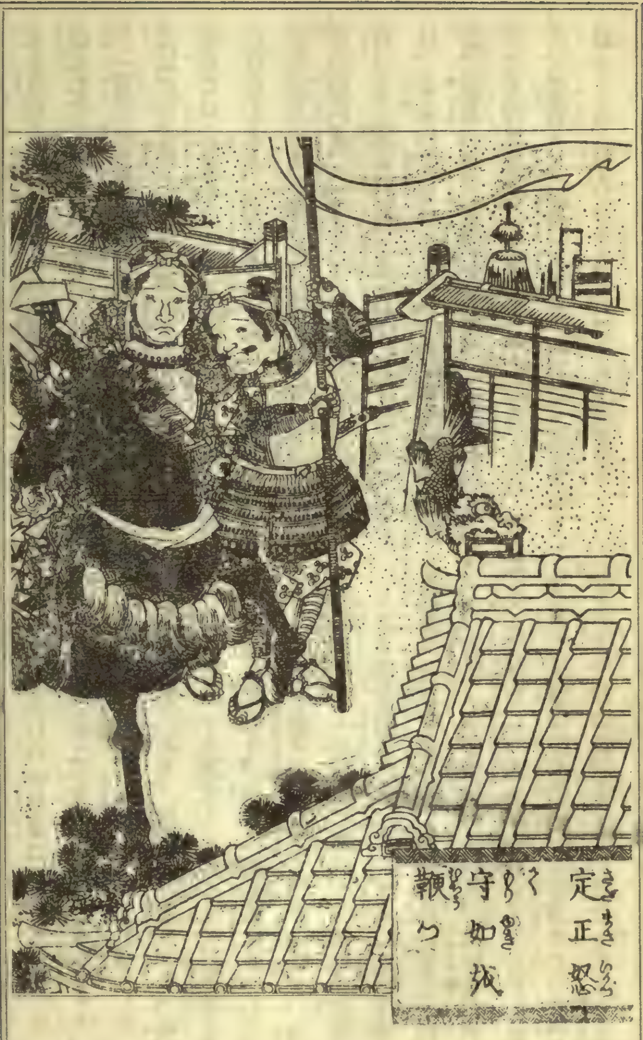
轎に座して守如主を救ふ
川を隔て孝嗣志を演ぶ

再說。扇谷定正は、河鯉守如の諫を用ひず、怒に乘し鐙を揚て、守如を蹴仆して、西の城門より走らする、馬の前後に相從ふ、その隊の士卒三百餘名、旗を捲め器械を晃めかして、揉に揉でぞいそぎたる。素より多勢の癖なれば、敵は勇士の聞えあれども、纔に三個に過ぎずと思へば、聊も小心せず、先を爭ひ隊伍を亂して、はや高畷にうち出つ、浦曲逈に幾町歟、地方易れば品革も、後は驛路となりぬべき、鈴の茂林邊に近づく程に、前面に繁き樹立の内に、伏たる一隊の敵ありて、忽地揚る鬨の聲、谺に响きて夥しく、顯れ出るその隊の軍勢。但見る士卒三四十名、去向の路を横斷たる、小敵なれども、噪がず亂れず、深山を出し隼鶻の、燕雀を搏つ勢ひあり。そが中に兩個の頭領、黑革威の身甲に、細鎖の掩膊、十王頭の脛衣して、長き兩刀を跨へたる、對の武具勇ましく、九尺柄の雙枝槍を、兩手に拿たる面魂、凜々として四下を拂ふ、威風も對の兩聲高く、來れるその隊の大將は、扇谷の管領定正歟。往る丁酉の、夏（文明九年なり）四月十三日、池袋の戰ひに、汝が爲に滅亡せられし、煉馬平左衞門尉倍盛主の舊

怒りに任し給ひて、速りに抜み給ふ折、事の難義に及ん歟、是も亦知るべからず。微臣その職ならざれども、君の御名代として、士卒を將て、はやく那里に赴きて、犬阪毛野們が猶在らば、詮意を舒て、倶して來つべし。若又那里を立去りて、その往方知れずとも、速に士卒を分ちて、隅もなく驅渉獵りなば、遇ずといふことあるべからず。這義を許させ給ひねかし。と涙を流し詞を盡して、肝胆を吐く、孤忠の諫言、定正いよ〳〵耳に逆ひて、堪ぬ怒りに聲を惜まず、やをれ守如、無益の諄言、この折に听く暇はなし。汝がごとき小胆兒は、那犬阪們に助劍あれば、定正三軍に將として、うち向ふとも捷がたからん、と侮り思ふ歟、奇怪也。然までに事を陷まば、本事を見せん。覺期をせよ。と罵りながら忽地に、鐙を抗て礙と蹴る。憐むべし守如は、胸を蹴られて、阿とばかりに、死活は知らず乒乓きて、臀居に撐と俯たりける。定正これを見もかへらず、兵毎續け。と駛馬に、鞭を鳴らして突然、と西の城門より走らすれば、從ふ士卒二三百名、皆後れじと身を起す、粤に脱兎の勢ひを、張番はるの朝日の高畷、うち出て見れば寄る濤に、狂ふ衞の友ならで、竹に雀の家の花號、軍旗號幟に色見えて、競ふ人馬の塵埃烟、空を霞めていそぎけり。

は、怒れる聲を苛立て、やをれ守如推參也。縱龍山緣連は、那犬阪奴が仇にもせよ、復讐の折もあるべきに、我正使として、小田原なる、北條氏へ遣す折、這五十子より程遠からぬ、鈴の茂林に埋伏して、獨緣連のみならず、副使幷に伴當們さへ、大かたならず擊果せしを、阿容阿容として搦捕らずは、當家の威風衰へたりとて、是より隣國に侮られん。憶ふに汝は緣連が、功を娟むにあらんずらん。然までに思はゞ始より、何どて一言も諫ざる。目今那死を聞くに及びて、その舊惡をいふのみならず、叨に他人の武勇を稱へて、君を否する、不義失敬、其首退ずや。と敦圉き暴く、持たる鞭を振抗て、兩三番撻しかば、守如は額破れて、鮮血に面を浸せども、拿たる鑣を些も放さず、ふたゝび聲を勵して、こは情なき君の御短慮。微臣日屬緣連の、奸佞邪智を知るといへども、その非を聞えあげ難しは、御信用深きにより、還て他に中られて、甲斐なからんと思へば也。爾るに今朝しも幸ひに、緣連は人に擊れて、忠臣これを歡べども、君はおん惑ひ醒させ給はず、他が爲に、犬阪毛野們を、みづから搦捕せんとて、遂に千金のおん身を忘れて、今危きに臨み給へば、禁めまつらざることを得ず。那犬阪們は、和漢に稀なる、是蓋世の英雄にて、異姓の兄弟數人あり、影の形に從ふ如く、相資る、と豫より、听たることの候ひき。然らば多勢にあらずとも、侮りがたき強敵なり。その義を知し召れねば、一時のおん


定正


定正怒
守如城鞭り

太と喚れし折、馬加常武に哄誘され、千葉家の忠臣粟飯原首を、杉戸の松原にて詐欺り害して、逐電して下野に世を濳び、那首の妖人、假赤岩一角が徒弟となりて、その大刀筋を受しより、假一角の吹擧により、長尾景春主に仕へしに、亦復犯せる罪ありて、亡命して當家に來れり。然ば件の犬阪毛野は、粟飯原首が遺腹の子にて、同盟の義士數人あり。親の怨を雪んとて、悄地に緣連を索るよし、その顚末を知れるものあり。風聲這里へも聞えしものから、緣連當家に仕へしより、御信用淺からねば、言路塞りて、その舊惡を云云と、稟すに由も候はず。心あるも心なきも、深き淵に臨むが如く、薄き冰を踏に似て、戰々兢々の思ひ已がたかりしに、當家の御武運、なほ憑しく、緣連は那身の仇なる、犬阪毛野胤智とやらに撃れ、又緣連の惡を資けし、猛虎既濟、一峯們さへ、倶に命を殞したり。是より那和議整はで、人の下風に立給はずは、當家の幸ひならんのみ。頤ふに鼻祖の大神、多武峯の神助なりし歟、蟹目の前の祈らせ給ふ、湯島の神の加護もありて、那奸佞を勸れしならん。はやくおん使を遣されて、犬阪毛野們が、その地方を、遠くも去らで在るならば、孝義を饗て、城內に召迎へ、高祿をもて留め給はば、他們も君の寬仁大度を、感じて忠義を盡すべし。然らば緣連猛虎們の、士卒幾十名を喪ひ給ふとも、損あらずして、こよなき益あり。この議を容させ給ひねかし。といはせも果ず定正

の匕首を挿副て、三尺五寸の小眉尖刀を脇挾み、精好の奴袴の、あるけばさや〳〵と音するを、裾短に穿做たる、勢ひ猛く出て來つ、緣頰近く牽居たる、馬に閃りとうち乘りて、はやうち出んとせられし程に、緣連們が横死の事、やうやく後堂へも聞えしかば、蟹目の前の仰により、虛實を尋まうさんとて、河鯉權佐守如が來にけるに、定正は、犬阪毛野們を、みづから征伐あらんとて、はや出陣の折なりければ、守如吐嗟とうち驚きて、跡に跟きつゝ廣庭に、走下りつつ、定正の、馬の鑣面を推駐めて、詞急迫しく諫るやう、こは物體なし、我君は、物にや狂ひ給ふらん。願ふはおん怒りを鎭め給ひて、稟すよしを聞召れよ。那緣連は國を賣て、身の利を揣る、佞人なれども、然とは知召れざりしを、譬ば月の明なるも、掛る浮雲に掩れて、遂に光りを失ふ如く、漫に他が便佞利口に、說惑され給ひしかば、專那議に任されて、今番北條氏とおん和議は、只是千慮の一失歟、素より良善のおん計策に候はず。この故に、その議を否し稟すものは、忠臣も遠ざけられ、又緣連に媚るものは、功なきも時を得たり。蟹目の前も是等の事を、心苦しく思召せども、女謁の誚を憚りて、諫難させ給ふなるべし。况數ならぬ守如なンどが、稟すべき折を得ざりしを、うち歎きてのみ候ひしが、今この折に及ても、犯して諫めまつらずは、忠義の本意に差ふに似たり。いまだ知召れずや、那緣連は、千葉家の舊臣、籠山逸東

と呟くものも多かりけり。左右する程に、那伴當の、撃漏されたるもの、又幾名歟、各痛痍を負ながら、皆五十子の城へ逃て來つ。有司們よしを鞫るに、縁連幷に猛虎は、那犬阪毛野に撃れ、又竈門既濟越杉一峯は、犬川莊介、犬田小文吾に撃れし事、獨大石の家臣、仁田山晋五は、酷く莊介に趕れしかども、乘たる馬の駛かりしかば、命を限りに逃たるが、恥て這里へは立よらで、軈て大塚へ還りし歟、その義は知らず候。と再度の注進事分明に、敗北のよし聞えしを、定正はやく傳聞て、勃然として怒に堪ず、忽地聲をふり立て、そは安からぬ事なるかな。縦龍山免太夫は、その犬阪奴が仇也とも、我使を奉りて、小田原へ赴く首途に、他のみならず、副使們までを、その黨に皆撃して、そが儘他郷へ走らせなば、武門の恥辱、隣國に聞えて必笑れん。料るに那奴們勇悍といふとも、數刻の苦戰に身さへ疲れて、いまだ遠くは立去るべからず。我みづから趕蒐て、搦捕して誅戮せん。兵毎はやく馬を牽きね、とく〳〵せずや。と敦圉きたる、最も劇しき君命に、誰か一個も擬議すべき、承りぬ。と應つゝ、甲擐る間もあら隊の軍兵、その勢約二三百名、略武具に器械拿て、咸廣庭に羅列たり。當下大將定正は、純絳錦の戰袍に、紫絲の好葉子鎧の、尙可巳時なるを、透間もなく著下して、龍頭の兜の緒を締め、藤卷と名けたる、當家重代の太刀に、虎皮の尻鞘掛たるを、腰に跨へ、九寸五分なる刻鞓

り還り候。と喘々注進したる、その人遲速ありといへども、都て些も差池なければ、大家倶に胸を潰して、よしを主君に言上す。登時扇谷修理太夫定正主は、件のよしを打听て、譟ぎたる氣色もなく、そは亦不慮の事ながら、非除その尶尬兒們は、暴たる野猪の勇ありとも、躬方の多勢に敵せんや。况鍔崎惡四郎猛虎は、器械拿て、向ふに前なく、三十人の膂力あり。且既濟一峯們も、皆軍陣に熟たるもの也。これに加るに、大石の陪臣仁田山晋五あり。然ば一百餘個の士卒が、三個の敵に咸怕れて、不覺を取るべくもあらず。程もなく殺鎮めて、再度の注進あるならん。遮莫用心の與なれば、加勢の士卒を調へて、後の便宜に儘せよかし。と事輒氣に命ぜらる。有司們これを承りて、忠心あるものは、各肚裏に思ふやう、その犬阪とやらんが與に、緣連は親の仇ならば、寡をもて衆に敵するとも、神明佛陀の冥助もあらん。縱眞の復讐ならで、隣國敵地の間者にもせよ、緣連其首に命を殞さば、他が只顧稟し薦めて、既におん使を奉りたる、北條家と和議是より破れん。然るときは物怪の幸ひ、是に優たることやある。寧緣連撃れよとて、躬方の輸を祈るもあり。又緣連と同意のものは、大かたならず驚譟ぎて、その尶尬兒們は、三名なる歟、なほ伏兵の多かる歟、事詳ならざるに、最緩やかなる御軍配、加勢の士卒、那期に遇ずは、後悔臍を噬むとも甲斐なし。はやくおん下知あれかし。

子の城内には、縁連、幷に既濟一峯猛虎們が作當の、逃走快かりしもの幾名歟、漸々にかへり來て、中途の異變を訴るを、有司們、驚きながらうち听くに、嚮に鈴の茂林の頭にて、犬阪毛野胤智と欺喚做たる、一個の尷尬兒、埋伏して樹蔭に在り、正使龍山免太夫の、僞名を喚かけて、父の仇なり、免さじとて、携たりける鳥嘴銃もて、龍山生の乘たる馬を、撃殪し反落させて、刀を拔て走り寄る折、龍山の若黨三四名、推隔捕稠て、連りに防ぎ戰ひしを、那犬阪は物ともせず、矢庭に四名を殺伏たり。愕りけれども龍山生は、幸ひにして恙なければ、稍身を起し、鎗を引提て、水田の畔に退きて、趕來る毛野と戰ふ程に、迥後方に緩歩せたる、副使の甲乙闘知りて、倶に力を勠せんとて、馬を飛して來にけれども、路陝ければ、捗むに便なし。故に猛可に隊配して、三方に立わかれ、鰐崎生は中路より、又竈門越杉、仁田山の人々は、左右の畔より馬を拺めて、撃果さんとて急ぎしに、思ひがけなき左右の畔には、又那毛野が、助劍の猛者二名あり。その一個は犬田小文吾、一個は犬川莊介とか名告りにき。這那左右齊一起りて、鎗もて越杉竈門の馬を、刺殪し立塞りて、多勢に撓まず戰ふたり。敵は三名に過ざれども、倶に手煅錬の猛者なるに、一騎打なる田の畔にて、且三方に別れたる、御方の隊配り合期せず。愕れば捷を攬んこと、輙かるべうも候はず。先快く事の趣を、報まつらんと思ふばかりに、走

り、逐者は遑しのみ。都て小霎時の事なれども、是を文に綴るときは、形容あり、語勢あり、三方四方を一緒に合して、寫し得べきにあらざれば、思ふにも似ず長くなれるを、恁はあらじといふもあらん歟。今に捌ぬことながら、只瞬息の事なるを、數萬言に綴れるも、則是文字に在り、又數百年の長々しきを、數行の筆に約舒るも、亦是文字のうへにあり。そを思はずに、目前の、理を推す者は、古語に云、琴柱に膠するなるべし。話 除 繁。爾程に仁田山晋五は、犬川莊介に緊しく遑れて、既に危ふかりけるを、幸ひにして乘たる馬の、脚强ければ逃延て、間、適になりしかば、快五十子へ走りかへりて、よしを注進すべけれ、と尋思をしつゝなほ走らする、馬に劣らぬ一個の伴當、喘々從ふて、主僕谷山の頭まで來にける程に、一叢繁き樹間より、誰とは知ず發つ箭に、晋五は左の肩を射られて、馬より撻と落しかば、伴當は吐嗟とばかりに、駭慌て逃んとしつゝ、四下を見かへる程しもあらず、又突然と發つ二の箭に、足を射られて仆れけり。登時件の樹蔭より、雜兵四五名走り來つ、仁田山主僕を起しも立ず、はや犇々と索を掛て、宙に吊して、將てゆきたる、そが中に一個の雜兵、晋五が馬の駭き走るを、驀地に趕近著て、鉤索閃りと投掛て、馬足に縢まへ牽駐め、人馬ひとしく生拘の、開場佳妙。と悄語きて、一霎時もあらず皆共侶に、故の樹蔭へ退きけり。話 分 兩 頭。是より先に、五十

逃亡しかば、軈て其首より引返して、急ぐとすれど、是等の故に、方僅かへり來ることを得たり。和殿の與に那助劍們を、撃拂んとて昨夜より、偸やかに隊配せしは、我們二名のみならず、犬飼犬村兩勇士は、隊兵三十名を從へて、便宜の處に伏て在り。こは萬一の與なれば、その義に及ばざる故に、いまだ和殿に對面せず。約莫けふの進退は、犬山犬塚の謀りし處、はやくその義を猜せしは、獨犬山道節の、智計より出たれども、這里は四方より見亘されて、長談に宜しからず。卒給へ、那里の茂林蔭に退きて、迭に意衷を盡すべし。やよ、とく／＼。といそがせし、迭代の物語らひは、委まぬ水の犬川と、舌もて咄す犬田の辯論、事皆意表に出ざることなく、鬼神不測の隊配りを、毛野は半信半疑して、今犬村と勅聞えたる、亦その人の事をしも、問まくほしく思へども、現這里は田中にて、敵の推寄來ることあらば、防戰の與便宜にあらず。いはるゝよしの理りなれば、敢異議せず點頭て、原來和君們のみならず、自餘の犬士も我與に、倶に力を勠せんとて、隊配ありしは、いよ／＼奇也。然らば那首へ退きて、迭に餘談を盡すべし。と應をしつゝうち連立て、鈴の茂林邊に赴く程に、朝日やうやく影刺昇りて、辰の初になりにけり。看官熟思ひねかし。この日毛野莊介小文吾們が、敵と三處の挑戰は、皆是同時の事にして、長譚綴語の上にもあらず、各々其首に刃を交へて、勝者は捷、負者は輸、奔者は走

奴們は亦某が、投石に撃れ、駭怕れて、一個も遺なく逃亡たり。爾後近づく敵もなければ、寃家の首級を亡父に、手向て祭り果たる折、和君們這里にかへり來まして、疑ひを釋くよすがを得たり。宿因錯はで料ずも、資けられたるけふの便宜は、神の示現に候ひし歟、佛の利益なりける歟、今更謝する所を知らず。かへす〴〵も意外の再會、こは歡びに喜びを、うち累ねたる一期の幸ひ、何事か亦これに優すべき。感嘆の外候はず。誠に珍重々々。と諄復しつゝ歡びを、演れば小文吾莊介は、含笑ながら點頭て、如右思はるゝは理り也。疑るゝも亦所以あり。既に和殿に見られしごとく、我們は那縁連に、助劍せんとて競ひ來ぬる、敵を東西に遮留めて、那五十子の副使なるべし、竈門既濟、越杉一峯と歟喚做たる、這那二名を撃捕りて、逃る仁田山晋五們を、透さず連りに趕蒐たるに、晋五は騎馬也、伴當們も、皆逃走の快ければ、往方も知ずなりにたり。然ずとも兵法に、窮寇は追ふべからずといふ、警もあるなれば、遠く渉獵らず趕棄て、和殿の安危を知まく欲しさに、うち連立てかへり來ぬる折、又七八個の敵にあひにき。目今和殿の恁々と、報給ひしによりて思ひ合しぬ。他們は、縁連猛虎們が伴當にて、和殿の投石に立足もなく、遠くも逃て來ぬるならん。那折然りとは知らねども、うちも閣べき奴們ならねば、我們二名推並びて、路を塞ぎて突立々々、そが三四人を刺果たり。その餘ははやくも

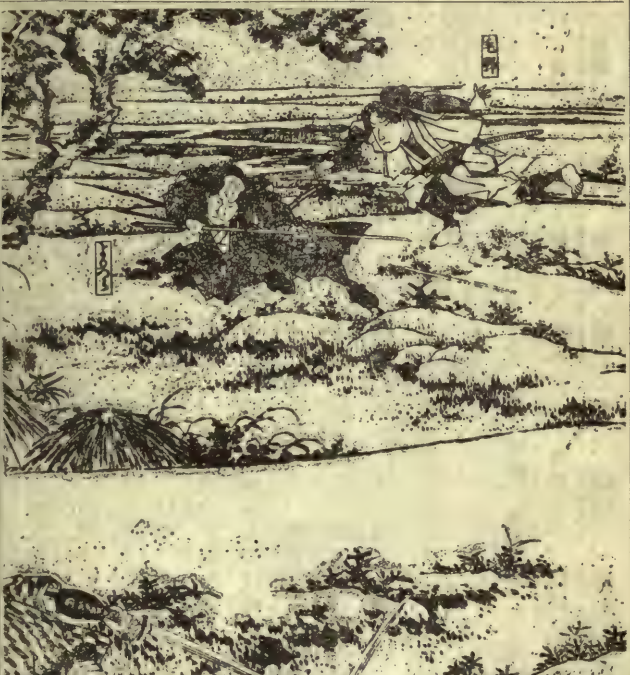
を埋めしより、今に至て十七年、天運やうやく循環して、怨を復すことを得たり。願ふは義母(胤度の嫡室稻城をいふ。)並に弟兄、(粟飯原夢之助、その女弟玉枕等なり)皆共侶に影向して、這血食を觀て生前の、恨を霽して、先大人と、齊一天堂に生じ給ひね。彌陀佛彌陀佛。と唱へつゝ、更に亦實母(名は調布)の、法號を念じて、復讐の、事恁々と訴る、孝子の誠心、遺れる隈なく、哀歡交咤む涙を、拂ひもあへず綾羅錦綉、たつを忘れて姑且は、合掌の手を釋ざりけり。浩處に跫然と、近づく人の足响しぬるを、毛野は急に見かへれば、是則別人ならず、二犬士莊介小文吾也。登時毛野は遽しく、小卷幅を卷收めて、身を起しつゝ笑しげに、寄るを遲しと廝迎へて、こは思ひかけざりき。犬田主、犬川主も、倶に怪我はなかりし歟。什麼いかにして豫より、けふの復讐を知られにけん。嚮には寃家の方人們が、東西二條の畔路より、緣連を援け來ぬる折、和君們中途に埋伏して、遮り留めて擊果し、なほ殘黨を趕れたる、その事の爲體を、遙に目擊したれども、某も亦緣連們と、鬪戰の最中なりければ、訝りながら云云と、事問ふ遑なしといへども、既に和君們の割助によりて、三方より敵を受ず、寃家緣連が爲に助劍したる、鰐崎惡四郎猛虎と賦喚做す武士のみ、槍法力量泛々の、敵手にはあらざりしを、そをしも漏さず擊果して、終に緣連の首級を獲たり。その折仇の伴當們は、後走に來ぬれども、开

つ腰を探りて、短刀晃りと引抜けば、反復さんとなほ悶掻く、猛虎が髻を、又引抓み頸掻斫て、刃を拭ひ腰に帶て、首級を引提て身を起す、後方に仆れし緣連は、この折やうやく我に復りて、驚きながら腰刀を、晃りと拔きつゝ立あがりて、聲をもかけず背後より、兩段になれ、と丁と撃つ、刃の光りに身を反す、毛野は持たる猛虎の、頸もて楚と受住れば、なほも撃んと又振抗る、刃に先だつ首級の撃眼、緣連は亦眼を打れて、叫苦とばかりに乒乓きたる、程もあらせず拔き撃つ毛野が、拳尖鋭き短刀に、撃れて二たび叫びもあへず、觔斗れる緣連が、頭顱は撲地と滾落て、軀も共に仆れけり。この時猛虎が伴當は、皆なごりなく逃亡せしより、更に近づく敵もなければ、毛野は徐に短刀の、鮮血を拭ひ鞘に收め、又猛虎と組だる折、捐たる刀を拿抗て、こも推拭ひ腰に帶て、欣然として四下を見るに、這田の畔に大きなる、榛樹の伐株に、嫋枝の脩く出たるあり。是究竟と獨言て、先懷より拿出すは、亡父の法號を、寫著たる小卷幅也。そをうち戴き推開きて、件の榛の嫋枝に掛て、然而寃家緣連の、首級を軈て引提來つ、手ばやく水田の氷を摧きて、塗れし鮮血を洗流して、那伐株にうち載て、親に手向て念ずるやう、徃る寛正六年、冬十一月、馬加常武が奸計にて、這緣連に撃れ給ひし、先考不滅の靈あらば、今這血食を饗給へ。常武一家はいぬる比、鏖にしたれども、なほこの籠山緣連あり。名を變迹

ね、年來數度の戰場にて、一番も後れを拿らず。然ばこそ、膂力は三十許人に敵して、船を駝ひたる泉の親衡、鐵門を破りし義秀に、伯仲すといふ本事は違はず、器械拿ては義經にも、劣らざるべき犬阪毛野を、そが刃さへ拂墜して、搔抓みたる爲體は、肉に饑たる鵰の、雛猿を捉るに異ならず、投殺さん、と思ひけん、掀たる儘に那這と、兩三回持遶りて、矢聲を掛て投墜すを、毛野は宙にて身を閃めかして、投られながら托地と蹴る、修煉の白打に猛虎は、右の脇骨撲折かれて、窮所の痛痍に小霎時も得堪ず、吽とばかりに仰反たる、身を轉して仆れけり。登時毛野は乘し掛りて、頸を搔ん、と猛虎の、頭髻を左手に縢へたる、程しもあらず、鰐崎の、伴當約莫八九名、後走に跟きて來つ、這光景に驚譟て、大家主を撃せじ、と思ふものから路陜ければ、推並びては找むに由なく、先に立たる一個の若黨、刀を晃りと拔持て、走蒐らんとせし程に、毛野は怯ます左手には、猛虎をなほ壓へて放さず、右手に小石を搔抓て、耶と聲掛て、托地と擲つ、寃ひ錯はず那若黨は、眉間を酷く撃摧れて、叫びも果ず死ゝでけり。大家これに舌を掉ふて、找み難たるそが程に、毛野は透さず臂近なる、小石を拿て復撃つ投術に、驚き立たる二の目の若黨、こは亦咽喉を撃傷られて、鮮血を吐て仆れけり。本事に怕るゝ伴當們は、悚へず、潑と逃亡て、影だに見えずなりしかば、毛野は然もこそあるべかりき、と冷笑ひつ

事は、既に前集に見えたり）心強かれ。五十子殿（扇谷定正をいふ）の御内にて、數戰の功名揭焉く、萬夫無當と喚れたる、鰐崎猛虎が來つるぞや。仇にもせよ、寃家ともいへ、身の程知らぬ一個の尷尬兒、虎の餌になる犬阪とやらん、屠るに手の隙入るべき歟。と嘈きにほざく、自負廣言、且走り且罵りて、勢ひ猛く近づきたり。緣連これにちからを得て、連りに嗤きて閃めかす、鎗に透間はなけれども、毛野は些も怯たる色なく、既に近づく猛虎を、後目に掛つゝ、緣連が踏入て刺す鎗の尖兒を、閃りと外して丁と擊つ、刃の冴に緣連は、鎗の纏兒斫落されて、驚きながら腰刀を、拔んと柄に手を掛る、那時速し、這時遲し、毛野は一聲ヲッと激音りて、礑と擊たる刃の電光、緣連は左の肩尖、斫られて苦と叫びも果ず、臀坐に撐と倒れけり。程もあらせず猛虎は、朋輩の仇、逃さじ。と敦圉猛く丁と突く、鎗を發矢と受流して、十合あまりぞ戰ふたる。大刀筋至妙の犬阪に、殺立られじ、と術を盡す、猛虎焦燥て閃めかしたる、槍尖に毛野は身を反せば、猛虎意はず力あまりて、空突しつゝ田の畔なる、榛の伐株を刺串きて、驚き慌て拔まくせしを、毛野は透さず衝と寄せて、刀を抗て丁と擊つ。然しも拳は狂はねども、猛虎も亦眼快く、そが儘鎗をうち棄て、身を沈して犬阪の、脚を窠ふて跌走しつ、刀を戞哩ととり墜すを、得たりと兩手に引抓みて、肩上昂く掀抗たり。現這鰐崎猛虎は、心術こそ直から


縁連を斬て毛野又猛虎と戦ふ



て、韓盧の狐狸を驅る似く、息も吻せず趕たりけり。然ば又東の頭人、越杉駱三一峯は、初莊介に馬を刺れて、落たる折に臂を傷りて、殆痛楚に堪ざりしを、辛して身を起して、仁田山晋五と共侶に、推捕稠て撃んとせしに、思ふにも似ず突立られて、更に深手を負しかば、逃る躬方に推倒され、剰晋五が馬に踏れて、胸骨折けて死〻でけり。そが中に仁田山晋五は、始よりして馬にはなれず、その身は後隊に在るをもて、よく莊介が鎗を避て、連りに躬方を找めしかども、群る羊の角をもて、猛虎を突んとするに似て、向ふものは命を殞し、逃るも都て血に塗れて、皆四零八散になりしかば、晋五も倶に度を失ひて、素手鞭拍て逃走るを、莊介はなほ遣らじとて、勇る聲をふり立て、恥を知らずや、鈋刀武士。汝は曩に戸田河原にて、我假首を斬梟たる、仁田山晋五なるよしは、その鎗號に庿字あれば、問でも知りぬ。那折に、戸田河原にて、戰歿したる、十條力二尺八が、與に怨を雪めんず。返せ〳〵。と罵辱しめて、飛が似くに趕蒐れば、晋五はいよ〳〵胆を冷して、馬駛らぬにあらねども、一所に在る心地して、連りに鞭をうち鳴らしつゝ、命を限りに逃たりける。案下休題、再說。是より先に緣連は、毛野が大刀風の烈しさに、身は只危く覺し折から、陜き田中の畔路より、鰐崎惡四郎猛虎が、自餘の副使に先だちて、驀地に援け來つ、逈に喚る聲高やかに、龍山主、(龍山則籠山也。緣連が改名の

戍る異姓の弟兄、犬田小文吾悌順、と喚做す猛者を知ざる歟。汝は竈門鍋介ならずや。陣外套の袖號に、烓の字あれば猜したり。とく身を起して、刃を受よ。と名告かけ罵れば、東に立たる一個の勇士も、劣らず鎗を横たへて、汝は越杉歟、跂松歟。輾轉びしを殺すは要なし。後なる武士も馬を拵めよ。犬阪毛野が義兄弟、犬川荘介義任こゝにあり。迯とも逃さず。拵んと、欲するとても彌勒の世まで、足を入るべき處はなし。快く勝負を決せよ。と多勢に怯まぬ武勇の廣言、侮りがたく思へども、身を傷られねば東西齊一、稍立向ふ既濟一峯、東に馬を扣えたる、仁田山晋五も只一人の、敵と思へば懲艾不得に、若黨奴隷を罵勵して、短兵急に撃んとす。左右の畔に左右の戰ひ、五十子方は、多勢といへども、倘義勁勇、和漢に稀なる、這二犬士の鎗頭に、誰か一個も當るべき、東西倶に足を亂して、持たる弓箭も射る遑なく、或は鎗を反飛され、胸を刺れて伏すもあり、或は刀を打落されて、水田へ滾び入るもあり、瞬間に俯累りて、死する者十名有餘、この宅も刀瘡兒多かりければ、西も東も辟易して、逃るに快き足曳の、山の木葉の散るごとく、海邊を投て走りけり。恁りし程に西の頭人、竈門鍋介既濟は、小文吾と刃を交へて、小霎時は挑みたりけれども、犬士の敵手に足るものならねば、水田の中へ突倒されて、起も揚らず命を殞し、隊兵毎は驚怕れて、皆一嶄に敗走るを、小文吾はなほ逃さじと

の異變を聞知りて、馬を飛して來にければ、既濟も亦馬を寄せて、那三方より癖者を、搦捕るべき隊配を、示すも急迫しき、火速の進退、駱三晋五は異議もなく、はや隊兵にこゝろ得さして、引わかれたる左右の畔路、西の方より竈門既濟、東の方へは越杉仁田山、隊兵各々二三十名、先に我むは、弓に箭を、つがひなるべし起つ鳧と、共に駭く白鷺も、求食難つゝ朝開の風に、翥きしてぞ翔りける。這三方より寄る大敵に、犬阪萬夫の勇ありとも、脱はあらじ、と思へばぞ、勢ひによりその機を得たる、既濟一峯晋五們は、多勢を負む東西より、咄と噇きて直走りに、ゆくこといまだ幾ならず、西も東も去向の畔に、掛亘したる藁塚の、陰より思ひがけなくも、晃りと一度に突出す、鎗に既濟一峯が馬は、太腹愕然と串れて、這那共に必死の一聲、嘶きあへず倒るゝを、禁むべうもあらざれば、兩個の武士も共侶に、反落されて田の畔に、身を横たはして仰反たり。登時東西左右の畔なる、掛藁托地と推倒して、顯れ出る、兩個の勇士、二條路に一對なる、萠葱威の身甲に、細鎖の臂縛、筋鐵打たる脛衣して、苛物造の兩刀を、瑠昻にぞ跨へたる。手には大刃の鎗を引提て、去向の畔を立塞ぐ、面魂さへ、無敵の胆勇、西と東に聲を合して、噫物々しき奸黨が、多勢を負む、助劍三昧、何處へとてか、ゆく路あらんや。恁あるべしと豫より、思ふによりて這西なる、藁塚陰に埋伏して、犬阪毛野が復讐を、外ながら

連が若黨四名は、身首處を異にして、馬共侶に仆れたり。登時後れて從ひ來ぬる、這副使們の伴當の、後に跟つゝ立かへりたる、緣連が奴僕們は、遙に田の畔を指さして、二位老爺、那樹せ、犬阪毛野とか名告りたる、狼藉兒は那里に在り。と報るをうち聽く猛虎既濟、韁を扣え、佶と見かへりて、原來件の尶尬兒は、尙立去らず、程近かり。緣連擊すな兵每。と兩聲劇しく罵奬して、馬を找めて緣連を、相資まく欲すれども、去向は陝き水田の畔にて、一騎打なる進退不便の、安危を玆に料り難て、左右なくうちも找み得ず。然とて田中を踏渡らば、まだ鋤もせぬ薄氷に、底見ゆれども泥深ければ、人馬の脚は立べからず。誰何すべき、と躊躇て、見れば無慚や緣連は、はや下鎗になるまでに、屢毛野に擊惱されて、旣に危き光景なれば、大家氣を悶むそが中に、猛虎怒に堪ざりけん、意はず聲をふり立て、竈門主見給はずや。左右の路は近からねども、いと廣ければ多勢を遣るべし。和殿は越杉仁田山們と、諜じ合して、左右の路より、多勢を倶して、うち寄せ給へ。咱們は、獨中路より、那里の危窮を拯ふべし。先々。といひつゝも、馬を閃りと乘放ちて、鎗奴に持したる、鎗を搔拿り挾みて、その幅三尺に足らざりける、水田の畔を箭の似く、足に信して走りゆく、後方に從ふ若黨奴隸、皆後れじ、と樫の實の、一粒並びに細道を、喘ばかりに續きけり。爾程に三隊なる、越杉駱三、仁田山晋五も、緈

の、冥助を仰ぐ多年の夙望、我未生より兩個の讐あり。そが一個なる千葉家の奸臣、馬加大記常武をば、往る己亥（文明十一年）の夏、五月望の夜に、堅きを碎く石濱なる、對牛樓にて從類まで、思ひの隨に撃捕たり。殘る寃家は、汝のみ。今は遁れぬ天の冥罰、狐疑ひせで、刃を受よ。と言語急迫しく窘めて、撃んと挑む勇士の大刀風、緣連、聽得。とばかりに、復問答の遑もなく、鎗を捻て亘あふ、一上一下、修煉の突戰、胸前錣ん、と晃めかす、鎗の尖頭は雲峯の、腰より出る電光の、地上を走るに異ならず。爾るを毛野は物ともせず、受流し又うち拂ひて、連りに挑む刃光は、湖水に流るゝ月影の、波の漣々狂に似たり。方是、二龍九霄に鬪ふ時、霏霏として金鱗降り、兩虎幽谷に挑む時、颯々として劼風起る。與に疎鹵なきに似たるも、小雲時こそあれ、武術の昂低、孝義勇敢兩ながら、億萬人に儁れたる、毛野が敵手に足るよしもなき、緣連はやく腕亂れて、淺痍四五箇處負ながら、玆を先途と戰ふたり。恁りし程に緣連が、後方に馬を歩せたる、竈門既濟、鰐崎猛虎、這那兩個の副使們は、緣連と相距ること、二町許なりければ、初よりして那隊に遇ず。緣連が伴當們の、慌しくも逃走り來て、綷恁々と報しかば、既濟猛虎うち驚きて、現剛才小鳥銃の、响き逈に聞えしを、こゝろ得がたく思ひしに、原來尶尬兒ごさんなれ。兵毎續け。と喚りて、馬に拍れ前後齊一、驀地に馳著て、と見れば緣

れより後を具にす。看官徐に聽ねかし。爾程に緣連は、毛野が勍勇、武藝の精妙、既に本事を知るものから、折よく躬方に貭しからねば、鰐崎竈門の二の隊あり、越杉仁田山の後陣あり、助劍せられんよしを負みて、姑且時を移さん與に、逃るともなく退きしを、毛野は只是若鷹の、野邊に雉子を趕ふ似く、薉し、返せ。と喚掛々々、間近くなりしかば、緣連佇と見かへりて、水田の畔なる榛樹を、盾に拿りつゝ立停りて、眼を瞪らし聲高やかに、やをれ癖惡兒、狼藉也。既に汝に知られし如く、我青かりし時、石濱なる、故主の密諚黙止がたさに、粟飯原首胤度を、撃果したる事はあれども、胤度が獨子なる、少年粟飯原夢之助は、そが母親と共侶に、當年死刑に處せられしを、世の風聲に傳聞たり。恁れば乂那胤度に、孩兒のあらん該はなし。爾るをその子と僞稱へ、我を寃家と罵りて、恁る狼藉に及ぶ事、這那共に胡論也。意ふに汝は瘋病人歟、然ずば敵の間諜兒にて、我を撃まく欲するに、術拙くて、時宜を得知らず、螳螂の斧をもて、隆車に向ふに似たり。最烏滸也。と罵れども、毛野は譟がず身を構へて、噫愚なり緣連。我胤度の子ならずは、多勢の敵を憚らで、汝と雌雄を決せんや。近く找みてよく听ね。過にし光陰なつかしき、我母は父の側室にて、我身を懷胎三稔の後、相摸州足柄なる、犬阪村にて生れしかば、軈て地方の名を取て、犬阪毛野胤智、と名告るを知る人罕也とも、天の照覽、神佛

第九輯　巻之一

第九十二回

二犬路を分ちて一犬を資く
孤忠鑣に携りて衆惡を訟ふ

文明十五年、癸卯の春、正月二十一日の黎明に、犬阪毛野胤智は、多年の宿望時至りて、父胤度の讐なりける、籠山逸東太緣連が、主君扇谷定正に說薦めて、那小田原なる北條家へ、密議の使を奉り、そが副使と聞えたる、竈門鍋介既濟、越杉駱三一峯、鰐崎惡四郎猛虎們はさら也、大石憲重の家臣也ける、仁田山晋五共侶に、伴當許多從へて、五十子の城内より、今朝首途の行列正しく、既に朝日の昇る時候、武藏州品革と、大森村の間なる、鈴茂林まで來にけるを、波打際に等著て、路の傍の樹陰より、立顯れつゝ名告かけて、携たりける鳥銃もて、先に找みし緣連が、馬の胸頭打斃して、走蒐りつ、籠山の、若黨四名を殺伏たる、その隙に緣連は、短鎗を引提、進退場を揣りて、田路の方へ退くを、毛野は血刀打揮々々、一町有餘趕たりける。却是までは第八輯の編末に見えたるを、重て這里に繰返して、文を續ぎ詞を連ね、こ

事ニ云 與ニ本傳第七輯。目錄欄内所レ圖。蠶繭紙糊狗ー卽同意。

蓑笠陳人又識

佐渡相川人。石井夏海氏者。予故人也。山海隔絶。不相見二十有餘年于此。客歳偶有鴻翅。其書曰。貴著八犬傳一書。新奇絶妙。世人所知。我孤島亦年年流布。雖老圃艄公樵夫鑛匠。而未閲爲羞。如僕秉燭不知飽。愛玩與米石一般。因而爲庶幾附驥之僥幸。呈閲賤咏二三。長歌一反歌三伏乞賜筆削。見許載諸後輯。則生平望足矣。於戯舊故情願不可辭。然若其長歌。無餘楮可錄。即取二三短歌以附載焉。歌曰。

家くにの盾にやたりのすぐれ人夜をもるのみの門のいぬかは

いにしへの犬のはなひし糸ならむ筆もて綾につゞる君かな

こがねなす君がことの葉なほみまくあなめでたしとほりす佐渡人

右夏海氏所咏。其第二歌、則取今昔物語載。白犬呑繭。而鼻中吐絲故

天保五年長月之吉。題于著作堂東園。菊花深處。

蓑笠漁隱

其花。惡得其實耶。故孔子曰。有文備者。必有武備。若夫其勇有餘。而一文不通。則其行侏離。譬如沐猴之戴冕。與彼楚人兇暴。又何異焉。由此思之。三綱無道亂離世。行似獍梟者。雖有記傳實錄。而不足見矣。是吾所以作八犬傳也。然而今之所傳。非古之八犬士事也。非古之八犬士事。猶且曰里見八犬士。其故何也。野史用心。假彼名而新其事。於是乎。善可以勸。惡亦足懲。果乎。君子尋文外隱微。而解悟獎導深意。婦幼代一日觀場。而不覺春日秋夜之長云。因玆刊行書賈。利市三倍。不思作者之閑與不閑。年徵月責。所彫鏤五十有餘卷于此。既而至第九輯。意匠漸疲。腹稿有限。結局團圓且近。抑童蒙等身之書。於稗史所罕。閲者僂指。可復俟輯末之出焉。

八犬傳第九輯自叙

在昔自室町氏走鹿。諸侯割据。不稟武斷於幕下。大以驕呑小。强以威服弱。是以。蝸角力戰。無所不勉。狼貪蠶食。各不知厭。當是之時。田夫植矛而耕耘。山婦掛弓而紡織。人情都賢勇悍。不厚於忠孝。好名忘死。居城薪骨。以爲愉快。且也每莅軍陳。爲勇名以知于敵。改姓異名。欲不與衆同者間有之。所謂若鵜北六花氏。吉見八谷黨。里見八犬士。尼子七馬九牛十勇介。大内十杉黨。上杉十五山黨。朝倉十八村黨。及山中狼之介野中牛助。不遑枚擧也。其名所載軍記。事實多不詳。素是史闕文歟。以類想像此。則暴虎憑河之勇已矣。蓋戰國澆漓士風。武勇有餘而文學不足。徒倡異好奇。爲俗如此。嗚虖野哉野哉。文武猶花實也。未見

沼蘭、妙眞、音音、曳手、單節、雛衣。伏姫と共に八犬女とす）の皆薄命なりし縁由、又八犬士の身の痣の、形牡丹花に似たるよしも、第九輯に到て分解せん。全書の團圓近きにあり。看官結局の日を俟ねかし。

たりける。這回はなほ長やかなれど、毎卷紙數に定限あれば、緣連が末期の光景、并に犬山道節が、復讐までは寫しがたかり。是より下の話說は、又編を接ぎ卷を更め、第九輯の開手に、解分るを聽ねかし。

因に云、犬村大角の名は禮儀也。こは第六輯に、見えたれば論なし。然るを第七輯に、禮度に作りたり。古人字訓のおなじきをもて、則淸を、憲淸儀淸に作り、時致を、時宗に作り、成氏を、重氏に作りたる例もあれば、深く咎るに足らずといへども、實は暗記の失也。よりて本輯には改正して、又禮儀に作りたり。抑第七輯上下二帙は、刊行の書肆、先例に背て、作者の校訂を受ず。製本發行せしものなれば、就中誤寫多かり。又只七輯のみにもあらず、每輯書肆に發販を急がれて、校訂夜をもて日に接ぎぬれば、なほ見遺したる誤寫衍脫、なきことを得ざる也。冀ふ具眼の君子正しね。

又云、信乃荘介、道節現八、小文吾、大角、毛野、這七犬士の列傳は、旣にその趣を盡したり。獨犬江親兵衛のみ、いまだその義勇を創するに由なかりき。こは第四輯に出世の時、四歲の童なれば也。第九輯は犬江の爲に、立る脚色尠からず。又七烈女（濱路、


大敵を


毛野

白布の四天の下に、細鎖の綱衣を被て、重革の立擧の臑盾に、白布の顱紈して、髪を後に振紊し、二尺八寸の白大刀に、七首を帶副て、小銃を引提つゝ、去向の方に立塞りて、天地に響く聲高やかに、やをれ龍山免太夫、本姓は籠山氏、逸東太縁連、且く駐れ。往る寛正六年の冬十一月、杉門の里の這方にて、汝が爲に撃れたる、粟飯原首胤度が、遺腹の第二の男子、犬阪毛野胤智こゝにあり。倶に天を戴ざる、怨の銃丸受ても見よや。と名告も果ず鐵砲を、拿直し推向て、火蓋を反て撲と放せば、覘錯ず縁連の、馬の胸骨撃摧れて、馬は屏風を倒すが如く、矢庭に撲地と轉輾べば、主も怺えず鐙を外して、倶に地上に倒れしを、毛野は得たり、と鐵砲投棄、大刀を眞額に拔翳して、飛が似くに走掛れば、縁連が四個の若黨、迭に主を撃せじとて、推隔抜連て、防戰ふ刃の電光、朝日に映じて眼を射れども、勇る毛野は物ともせず、人なき境に入る如く、當るに儘して砍倒せば、二人は首を撃落され、殘るも深痍に堪ざりけん、跌輾びて息絶けり。有恁し程に縁連は、稍身を起して四下を見るに、鎗奴が棄て逃たる、その身の短鎗ありけるを、搔拿りつ挾みて、足場を揆りて田圃のかたへ、一町ばかり退くを、毛野ははやくも見かへりて、やをれ縁連、逃るとて、何首まで脫さんや。蓬し返せ。と喚掛々々、驀地にぞ趕

集したりしに、爾後數度の戰ひに、堂宇頽破に及びしかば、地藏も閻魔の木像も、某甲寺に遷されて、這里にはあらずなりしとぞ。又鬼四郎が赤牛は、强盜夫婦を突殺したる、大功あるものなればとて、鬼四郎が妻と兒子は、いよ〳〵ます〳〵鍾愛せしを、亡者の一周忌に、いかで菩提の與にとて、香華院へまゐらせけり。是よりして那牛は、耕作車力の艱苦もあらず、幾歳か寺に養れて、選佛場にて終りしとぞ。是等は後の事なるを、約めて共に寫すのみ。休題再說。明れば正月廿一日、這朝五十子の城内には、龍山免太夫緣連（初の姓名は、籠山逸東太）が、相摸なる北條家へ、密議の使節を奉りて、未明より首途す。緣連この日の打扮は、萠葱威の身甲に、磨著の腕甲臑楯して、上衣には、黑蛇皮絹の小袖に、膃肭の衣二ばかり襲被て、黃羅紗の陣羽織に、純子の野袴を穿領し、黃金表裝の兩刀を、瓏脩に跨へて、桃花馬の太逞きに、雲珠鞍置てうち乘たる、左右に從ふ四個の若黨、雜兵奴隷三十餘名、前に立後に跟ぬる、鎗柳筥、長柄の傘、鎧櫃杖雨衣なゝど、次第を亂さず隨從す。次には副使竈門既濟、越杉一峰、鰐崎猛虎、仁田山晋五に至るまで、倶に劣らぬ打扮にて、各々馬を拍せたる、這伴當も許多にて、小荷駝を牽き、長櫃を舁ものは、遙後方に從ふて、一町有餘陸續たり。既にして緣連們は、稍品革をうち過て、朝日初て昇る比、鈴森の波打際を、邐迤として徐行く程に、前面の茂林

て、竊に那里に遣しけり。話分兩頭。是より先に麻生なる、鬼四郎の鄰人們は、鬼四郎が只ひとり、牛盗兒を趕蒐て、司馬のかたへ赴きたるを、聞知りつ相資んとて、棒を携蕉火を振照し、鹽濱なる閻魔堂の、頭まで來にけるに、堂前の杉に繫れて、太く突殺されたる男女あり。鬼四郎が牛鬼も、その樹下にありければ、こは〱什生、と駭譟ぎて、僉立よりて熟視れば、死たる男女の背には、寫著たる數行の文あり。これによりて這男女は、媼内船虫と喚做たる、強盗夫婦なるよしも、その年來の積惡も、今宵放免善惡平と、鬼四郎を殺したる、その事の趣まで、問はで分明なりければ、いよ〱驚き、ます〱奇として、先鬼四郎と善惡平の、亡骸を索出して、見れば皆是鐵砲瘡にて、灸所の深瘡なりければ、又生べうもあらざりけり。大家且く評議を凝すに、牛の角の血に染たれば、強盗夫婦は這牛に、突殺されしに疑ひなし。什麼何人が搦捕て、恁は計ひたりけん、といふもののみにて知るよしなけれど、却あるべきにあらざれば、近き村長によしを報て、地方の民と共侶に、その詰旦五十子の城内へ訴けり。しかるにこの日城外に、事ありければ沙汰に及ばず、第三日に至り、有司詮議して、船虫と媼内が首級を濱邊に斬梟けり。縡遠近に聞えにければ、人咸駭嘆せざるはなく、強盗夫婦を絪めて、その積惡を恁々と、背へ寫し給ひしは、那御堂なる閻魔王の、靈驗にこそあらめとて、參詣群

んとて、皆憑しく思ひけり。有恁し程に、有種が、催促により船出をしたる、躬方の雜兵九十餘名、大平駝五六艘にうち乘りて、千住河より來にければ、道節これを勞ふて、引て又高畷の、浦曲に赴き船を歇て、這里にて隊配を定るに、船には身甲、腕甲臑盾、弓箭、鎗眉尖刀を、多く執入てありければ、六犬士は、おのもく、擇拿り身を擐めて、准備はやくも整ふ程に、夜は丑三にぞなりにける。登時道節は、有種にうち對ひて、和殿は船に留りて、俺黨の本意を遂て、かへり來ぬるを俟給へ。といふを有種聞あへず、逆の約束也ければ、推辭奉るによしなけれども、倶に這隊に在りながら、某一人這船に、遺りて戰ひを外に見んや。願ふは伴ひ給へかし。と口說くを道節推禁めて、そは亦要なき擬勢也。和殿は親あり妻子あり、死をもて他人に許すべからず。那定正は大敵也、俺們勝とも負るとも、退くときに船あらずは、更に難義に及ぶこと、是あるべき歟、料がたかり。有恁ば拱みて敵を撃も、留りて這船を、戍るもその功おなじかるべし。この義を思ひ給はずや。と諫めて承引ざりければ、有種はちから及ばで、竟にその意に從ひけり。爾程に道節信乃莊介、小文吾、現八大角は、躬方の雜兵を從へて、密々に陸に登りて、高畷なる茂林の中に、聚合て曉るを俟程に、又隊配を相定め、心利たる雜兵を、亦五六名間諜として、那緣連がうへはさら也、五十子の城の動靜を、漸々に報よと

ていそぎけり。且して有種は、准備の割籠をうち拔きて、六犬士に夜飯を羞め、盃を薦めなどして、船を司馬浦へ漕する程に、現八と大角は、荘介小文吾と迭代に、石禾に在りし程の事を、信乃道節に報知して、指月の道場の後住の入院は、下旬なるべしと聞えしかば、某們はその間に、蓑生山へ赴きたるに、件の時日齟齬ひ、才に中一日ありて、後住の老僧入院したれば、丶大法師は某們の、かへり來ぬるを俟に及ばず、且穗北まで退んとて、石禾を立去給ひしとぞ。某們はそを知らねども、只何となく心いそぎの、せられしにより路草も、喫はで那寺に立かへりしに、綷縩々、と聞えしかば、軈て石禾を辭し去りて、道徳の迹を慕ひつゝ、夜を日に繼て來つる也。道徳は今も穗北の宿に、留りてをはする歟。と問れて訝る信乃道節は、倶に眉根をうち顰めて、そはこゝろ得ぬこと也かし。昨日はさら也、けふまでも、丶大法師は來給はず、音耗だにもあらざりき。といふに荘介現八們の、四犬士は沈吟じて、しからば道徳は去向を急ぎて、結城へ赴き給ひけん。その故は箇様々々。と里見殿の奉爲に、今番結城の古戰場に、廬を結びて、一百日の、大念佛を修行して、大炊殿（季基をいふ）を初として、大塚三戍非直秀、這他も當日陣歿の、士卒の菩提を弔ん、といはれしよしを報知すれば、信乃道節有種們まで、感ずること大かたならず。いかで肆月の祥月忌には、必那里に赴きて、その法筵に會

那縁連は、忽地羽翼を失ふて、首を犬阪に授くべし。這義は什生。と聶くを、荘介聞つゝ沈吟じて、犬山生の軍略は、寔にその圖に當るといへども、胤智も亦覺ある、是蓋世の勇士なるに、親の讐敵を撃に及びて、許多の助大刀あらせては、那人の手柄にならず。翌縁連を撃捕るとても、還て俺們を恨むべし。今よりその議を定んには、犬飼犬村二勇士は、躬方の精兵を從へて、縡れて勝負を覘ひ給へ。某は犬田と共に、那副使們を殺崩して、毛野の進退をやすくせん。恁ても敵は退かで、縡の難義に及びなば、その折にこそ犬飼も、犬村生も隊兵を、扨めて戰を援け給へ。然るときは毛野も恨まず、縡十分にして十ながら、危きことなかるべし。と議するを信乃は感嘆して、その計議は極めて妙也。胤智に面識られしは、犬田犬川の二君子のみ。就中犬田生は、石濱よりして好も深かり。進退は左も右も、犬川生と商量し給へ。又犬山が五十子攻は、翌の時宜に憑るべければ、今這里にては定めがたかり。軍議は是までなるべし。といふに道節小文吾現八、大角有種們まで倶に應て、亦復餘談に及びけり。爾程に道節は、有種が伴當二名に、霎時機密を聶き示して、汝達は五十子の、城の頭に潛ゆきて、縁連們が城より出るを、よく見定めて恁々の、處まで快走りかへりて、犬川犬田に報知しね。這他の事は箇樣箇樣。といふに、伴當們はこゝろ得て、船を浦曲に寄さしつ、高畷にうち登りて、五十子を投

る夜撃にて、寃家の主僕醉臥たれば、皆辟易して撃れしならん。又翌の進退は、那折とおなじからず。緣連は相伴ふ、勇士ありて、伴當も、一百餘名に及ぶといふ、曠野の戰ひならんには、胤智非如緣連を、撃捕るとても全勝を、得んことは最難かるべし。然るを單身うち朝んは、暴虎憑河に似たれども、撃で克ぬ父の仇、辭するに由のなければ也。有恁ば和殿と某は、毛野を援けて、拄る敵を、殺拂ずは犬阪は、必死地に入るべきのみ、生地に出るに路なからん歟。這義を思ひ給へかし。と諭せば小文吾有理と應て、思はず傍を見かへれば、現八大角感嘆して、犬川生の高論は、是兵法の貴ぶ所、敵を知り己を知りて、後に勝負を定むべし。といふを道節諾なひて、犬川犬田のみにては、なほ犬阪の援助に足らず。犬飼犬村兩勇士も、那隊に向ひ給へかし。今番緣連と共侶に、相撲へ赴く副使には、竈門鍋介既濟、越杉駱三一峰、鰐崎惡四郎猛虎、並に大石憲重の家臣、仁田山晋五、正使緣連と倶に五名、皆是武藝あるもの也。就中猛虎は、三十人の膂力あり、武藝尋常ならねども、心術奸佞にて、緣連が腹心と、憑れたるものなるよし、嚮に河鯉權佐守如が、犬阪毛野に說示せしを、竊聞して具に知れり。有恁ば犬田、犬川犬飼、犬村の四君子は、三十名の精兵を從へて、便宜の處に伏躲れ、翌犬阪が緣連に、撃て掛ると見るならば、隊兵を魚鱗に備へて、後を斷前を遮り、鰐崎竈門越杉們を、撃捕らば

に、料らずも賊婦船虫、悪僕媼内を誅戮して、犬田犬川、犬飼犬村、四個の同盟石禾より、來つるに遭ひしは錦の上に、花を添たる幸ひ也。と一五一十を説示せば、齊一勇む小文吾荘介、現八も大角も、倶に賛嘆の聲を得斷ず、その隊配の速なるを、稱へて有種を勞ひけり。當下信乃は莊介們の、四犬士にうち對ひて、今犬山がいひつる如く、某は初より、復讐の議を諾はず、縱犬山その舊君に、忠ありとても大敵に、當りて戰歿做すことあらば、里見殿に對しまつりて、不義なるべし、と思へば也。そを犬山は听ずして、綷はやこゝに及びしかば、某今さら義の與に、性命を惜んや。只犬山に力を勠して、扇谷定正主を、撃て大父三戍が、嘉吉の怨を復さんず、と思ふものから然ばかりにては、那犬阪に助大刀なし、胤智萬夫の勇ありとても、そが寃家緣連は、同行の勇士三四名、伴當通て百餘名に、及ぶべし、と聞えしを、一臂の力に殺殫さんや。有恁ば先某は、毛野をや援けん、五十子攻を、先にやすべき、と思ひ難て、胸中區々なりけるに、幸にして石禾より、四君子來會し給ひければ、綷十二分になりにたり。寔に賀すべし賀すべし。と祝せば小文吾含笑て、その義は心安かるべし。犬阪は石濱にて、讐敵馬加常武一家を、鏖にしたる本事あり。緣連多人數なりとても、撃果さんこと疑ひなし。といふを莊介推禁めて、然ないひそ犬田生、那犬阪が石濱にて、許多の仇を殺殫せしは、一家兒な

君に知られし如く、扇谷定正は、俺舊君の仇なれば、曩に白井の郊外にて、撃果さんと欲せしに、還て敵に謀られて、その緈成らず、今に至れり。しかるに去歳の玖月より、穂北に旅宿しつるによりて、五十子の城内を、覘ふに便けからず、越に洊て復讐の、密議を犬塚落鮎們に、示して是と非を問試しに、犬塚はこの義を否して、竊に諫られたりき。然とて已べき事ならねば、密々に那城の、頭に近づき幾番か、虚實を知まく欲せしかども、いまだ便を得ざりしに、けふ料ずも守如の、密議を聞つゝ竊に思ふに、翌犬阪が復讐の、緈の趣、五十子の、城内へ聞えなば、定正必多勢を出して、毛野を撃んとせらるべし。その虚に乘りて短兵急に、那城を攻破らば、手に唾して定正の、首を捕ること易かりてん。曩に豊島の殘兵の、落鮎生に從ふて、穂北の民になりしもの、無慮九十餘名あり。這精兵三十名を、分ちて犬阪の援に做すべく、その餘は俺隊に從へて、便宜の處に伏縈れ、一擧に城を攻破らん、と尋思をしつゝ穂北の宿へ、いそぐ前路の折もよく、上野の原の頭にて、犬塚生が有種子と、倶に來ぬるに遭ひしかば、緈恁々と耳語き告て、准備の爲に有種を、穂北の宿所へかへし遣し、某は犬塚と、共に司馬濱に赴きて、落鮎生に約束したる、佛堂の頭にをり。冬より寒き初春の、浦寂亙る黄昏に、疾潮風の堪がたければ、笠だに脱かで某は、閻魔堂に閉籠り、犬塚は地藏堂に、籠りて身方の船を俟し

芦かりければ、果敢なく其首を立別れて、かへると見せて濳やかに、取て反してそが頭なる、茂林の中に伏躱れて、なほも容子を覘ひしに、便宜の密議を聞得たり。その故は箇樣々々と、百堀鮒三が愁訴の與に、越後より來て湯島にて、毛野に掌相を問ひし事、これにより次團太が、淫婦奸夫に誣られて、片貝の獄舍に繫れしといふ縡の趣、木天蓼丸の短刀の事、嗚呼善士丈二が伎倆まで、詳に知られし折、蟹目前の社參の事、そが寵愛の猴のはなれしを、毛野が拿へてまゐらせたる、功をもて次團太を、救んと請けるに、縡立地に允されて、鮒三は蟹目前の、使者次通に相倶して、越後へかへり去し事、恁て河鯉守如が、竊に毛野の武藝を試して、翌の朝開に緣連を、撃せんと謀りし事、那緣連は三稔以來、定正に仕へ、重用せられて、今番相摸の北條家へ、使者として赴く事、その奸險の行狀まで、この折具に聞えしかば、毛野は歡ひ意外に出て、那緣連は年來索る、父の仇なるよしはさら也、その身の素生實名まで、守如に告知せて、翌を契りて遽しく、立別れたる事までも、聞見し隨に說示せば、小文吾莊介自餘の黨、いまだ遇見ぬ現八大角、有種さへに推竝て、毛野が孝感、天助を得て、面を認らぬ寃家の所在を、詳に知るのみならず、撃捕る便宜に値ひけるを、齊一感ずるそが中に、小文吾と莊介は、那次團太の横難を、毛野が微妙く救ひしも、復得がたしとて歡びけり。登時道節又いふやう、既に諸

り這里にをり、専來船を俟程に、料ずも小文吾莊介、現八大角の四犬士が、甲斐の石禾より來つるに遭にき。有恁ばいよ〳〵便よし、那人々に對面し給へ。なほ進退を議すべけれ。といへば信乃も有種主僕と、篙師們を勞ひけり。爾程に、莊介現八、小文吾大角は、牛を樹下に繫留て、うち連立て來にければ、信乃道節は這四犬士に、有種が來にけるよしを、恁々と報知して、齊一船にうち乘りつゝ、高畷のかたへ漕せけり。登時莊介小文吾は、現八大角と共侶に、有種に初對面して、ゝ大法師の迹を慕ふて、甲斐より這里まで來ぬる折、道節信乃の資を得て、強盜船虫媼内を、誅戮したる趣を、箇樣々々と報知すれば、有種耳を傾けて、手拊よしとぞ壽きける。且して道節は、小文吾と自餘の三犬士に、うち對ひ聲を潛めて、某が犬塚と、共に鹽濱なる堂内に、うち籠りて在りけるを、こゝろ得がたく思はれけん、言脩くとも初より、詳に物がたらん。某けふ料ずも、湯島の天神の社頭にて、犬阪毛野に邂逅したり。他は豫て聞しに似ず、額髮を剃落し、坐擧師物四郎といふ假名して、疣黑子を除く藥と、歯磨砂を賣るをもて、多く人を聚合てをり、傍に人のあるをもて、名告るに暇なかりしかども、犬阪ならんと猜せしかば、人相手相を論じ破りて、その才學を試しに、思ふに倍たる辯論奇才、某們が及ぶ所にあらず。既にして某を、相して大望あるよしを、亮査せしも亦奇也。なれども便り

第九十一回

鈴森に毛野縁連を撃つ
谷山に道節定正を射る

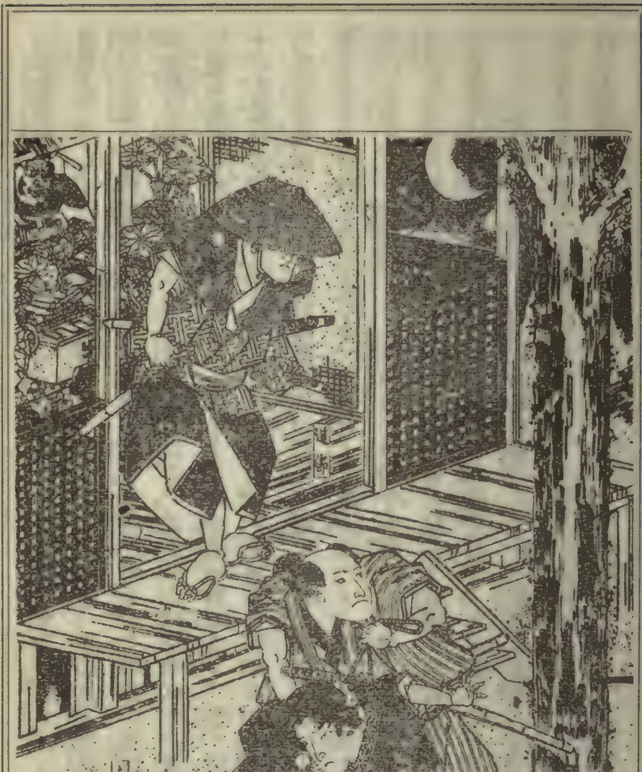
登時小文吾は、信乃道節們にうち對ひて、某小千谷に旅宿をしたる、去歳の四月は二十村なる、闘牛の折、暴牛あり。その夜小角力磯九郎は、船虫酒顚二に殺されしに、今宵は亦這赤牛が、船虫媼内を劈きて、主の怨を復せしは、那磯九郎の與にしも、恥を雪るものに似たり。天網疎にして漏さゞる、惡報かくこそあるべけれ。といへば道節點頭て、其頭の餘談も多からんを、なほ緊要なる密議あり。約束したる快船の、今は來つべき比なれば、牛を樹下に繫留めて、一圓這里を退くべし。と答る詞も訖らぬ折から、波濤を推斷る快船一艘、這鹽濱に漕著て、暗號の哨子を吹鳴せば、道節信乃はこゝろ得て、走りて水際に赴く程に、舳前に找む壯佼あり、是則別人ならず、落鮎餘之七有種也。道節信乃にうち對ひて、嚮に示させ給ひし如く、某穗北に走りかへりて、豫一味の衆人に、よしを告相促して、速に准備を整へ、這義を知しまゐらせん、と思ふによりて某は、快船に乘走して、目今著到したり。又衆人は五六艘の、大平舵に執乘て、推續きて來つ該也。といふに道節歡びて、そは速なる隊配也。某は犬塚と、倶に黄昏よ

左見右見て、五犬の弟兄思はずや。這船虫媼内は、尋常の罪人ならず、その悪古今に稀なれば、身は生ながら地獄に堕て、今這閻王殿前にて、牛の角に劈る。面前に地藏のありといふとも、救ふによしなき大辟の、讞断愆こそあるべけれ。といへば信乃は牛の身邊に、找み寄つゝつらつら見て、嚮に這牛の主と聞えし、鬼四郎が云々と、いひ誇りしにて初て知りぬ。こは多からぬ逸物なれば、村人們が主の名を、搭してこれを牛鬼と、喚做けんも名詮自性、牛頭馬頭冥府の獄卒に、擬すべかりける自然の妙契、畜生也ともこゝろあらば、這義を思ふて主の仇なる、賊夫賊婦を劈けかし。心を得よや。と叮寧に、諭せば小文吾現八は、牛の後に立よりて、手をもて尻を磤と拍つ、拍れて勇む牛鬼は、ものこそいはね媼内と、船虫を佗と睨へたる、程しもあらず那をも這をも、長尖れる角をもて、腋下より肩尖まで、串き劈く怒牛の勢ひ、地獄の呵責を目前に、受て苦む船虫媼内、眼血走る面の色、赤くなり又蒼くなりて、腹に波うつ大叫喚、串るゝこと數番にて、やうやくに息絶しかば、有繫に勇む六犬士も、這光景に蕭然と、思はずも目を合しけり。

を、怕れおもふの所以なるに、憐むとしも猜せし歟、無慙の癖者也けり。と責るを信乃は推禁めて、這期に及びて、議論は要なし。媼内は四谷の原にて、主の泡雪奈四郎に、痍を負し盤纏を奪ふて、逃亡たる舊惡あり。恁ればその罪船虫と、勝劣のなきもの也。推並べて八劊に、斬切みて惡を懲さん。今さら猶豫する事かは。といへば道節頷きて、そは勿論のことながら、畜生にだも劣りたる、這奴們を士君子の、手に掛て、可惜しき、刃を汚さは牛刀をもて、鷄を割く如くならん。牛としいへば媼内が、竊みし牛は那首にあり。他が與にも這奴們は、亦是主の仇なれば、牛に突して思ひの隨に、苦めて誅戮せん。箇樣々々にし給へかし。と諭せば小文吾、現八莊介、しかるべし。と應つゝ、刀に附たる小刀子をもて、船虫と媼内が、衣の背條を破れば、信乃も亦手傳ふて、小文吾と共侶に、墨斗の筆もて、這賊夫婦の、背へ罪の箇條を立て、約やかに寫著て、閻魔堂の檐前なる、二株の杉へ推並て、旋手纏にしたりける。登時道節は、大角を誘引て、藁屋に隱し置れたる、牛を這方へ牽よせけり。爾程に船虫は、允されがたき罪過を、思はで小文吾大角們を、怨みて罵り狂ひしかども、既に死刑に莅みては、やうやくに衰果て、只媼内を見かへるのみ。又媼内は道節に、太く投られし時、胸を撲せ、骨を折きて聲立ねば、一言半句ものいはず、面色土のごとくになりて、才に息を吻てをり。道節これを

害せん、としつるも二度に及びたり。類稀なる賊婦にこそ。と敦圉猛く罵れば、現八も亦拳を擦りて、這奴は三たび盗賊の、妻になりたるのみならず、赤岩にては妖怪の、後妻になりて、犬村生、夫婦を虐げ剩、逼りて貞女を害したり。といへば荘介も眼を睜りて、去年は咱們を欺きて、庚申堂より隱宅へ、送らしたりける報ひには、酒顚二その餘の小賊まで、鏖にしたれども、這奴ははやく逃亡しを、いとも本意なく思ひしに、天罰時節到來して、搦獲られしは愉快の事也。寔に珍重々々。と齊一勇むそが中に、大角はうち見つるのみ、獨嘆息したりける、氣色に猜する船虫は、大角にうち對ひて、犬村主、この年來、奴家がなしゝ罪過の、後悔及びがたけれども、母といはれ子と唱へたる、好を忘れ給はずは、命乞して給ひねかし。といはせもあへず大角は、眼を瞪らし聲ふり立て、噫、毒婦奴が何をかいふや。俺舊里に在りし時、親の仇なる妖怪に、魅されずはいかにして、汝を繼母のごとくにすべき。妖怪竟に露れて、親の怨を復せし折、汝も許すべきものならねど、その比は緣連を、犬阪主の仇とは知ず、又汝が阿佐谷にて、犬田生を害せん、と謀りし事も知ざりければ、那緣連が請ふに儘して、その身を預け遣したり。それすら悔しく思ふのみ、這身に干ることあらんや。今俺嘆息したりしは、汝も亦媼内も、飯を喫ひ衣を被る、皆おなじ世の人なれども、心は虎狼に彌倍て、毒惡類多からぬ

の弟兄所給へ。各々は這賊婦に、欺れし事あるならずや。然らばその毒惡の趣は、詳なるべき事ながら、いまだ知ざる所あり。船虫は去歳の夏、その良人酒顚二們が、犬川生に撃れし折、支黨の兇賊媼内と共侶に、越後の隱宅を逃亡たる、その綷の趣は、曩に犬飼犬村生の、大法師に聞たりとて、いぬる比の消息にて、某們もこれを知れり。恁而船虫媼内は、遠く這地に脱れ來て、夫婦に做りて惡事を旨とす。その趣は箇樣々々、恁々の事ありけりとて、船虫は十字街妓に、なりつゝ客を誘ふて、殺して金を奪ふ事、今宵は放免善惡平とかいふものに、その手段を見顯されて、綷の難義に及びし折、媼内は竊たる牛を牽つゝかへり來て、鐵砲をもて善惡平を、撃殺したるよしを、詞せわしく說示しつゝ、又媼内を指さして、這強盜は廐生なる、冠松の頭にて、鬼四郎といふ農戶の、騂犢牛を竊略て、牽もて這里に來つる折、那鬼四郎が趕蒐來ぬるを、船虫が欺きて、いなさんとせし程に、藁屋の内に隱したる、牛がその主の聲をや知りけん、忽地に鳴きしかば、その綷も亦發見れて、とり復さんとしたりしを、媼内は這閻魔堂の、頭に躱て又鐵砲にて、鬼四郎を撃仆したり。某們は堂内にて、その爲體を覵窺たれば、怒に堪ず走り出て、搦捕んと思ひし折、犬田生の來ぬるにより、事のこゝに及べる也。と報ればば小文吾齒を切りて、這船虫は三たびまで、强盜の妻に做りて、惡を資けしのみならず、某を




目前地獄
二兇就戮
寅房の
鬼四郎ヵ牛鬼
信乃

より、殊さらに路次をいそぎて、昨夜は八王寺に宿を投め、今朝も未明に立出て、石原驛まで來つる折、後に人の相譚ふ聲して、四谷のかたへゆくは益なし、矢口より高畷を、投て司馬濱に赴かば、宜しからん。といひけるを、俺們四名皆うち聞て、倶に後方を見かへりしに、迹より來ぬる人はなかりき。若是神の示させ給ふ、十字占なる歟、と思ひしかば、路の遠きを厭ふことなく、矢口まで來て日は暮れたり。非如夜中に及ぶとも、いかで穗北に到んとて、剛才這浦まで來る程に、犬田は素より速行にて、連に先だち走りしかひに、怨を累し這賊婦を、生拘りたるのみならず、料ずも兩賢兄の、資助によりて媼内の、銃向を脱れしは、石原驛にて聞得たる、前兆虛しからずといはまし。寔に愛たしめでたし。と倶に祝して已ざりければ、小文吾、然也。とうち含笑て、俺們が這濱邊に、來ぬるは右にいはるゝ如し。犬塚犬山賢兄達の、這里に在りしはいよ〳〵奇也。向にもこの義を問ひしかど、こゝろを得るに暇なかりき。何等の故に候ぞや。と問へば道節聲を低めて、その疑ひはあるべき該也。某は犬塚と、倶に約束あるによりて、這里にて人を俟こと久し。こはいと祕密の事なれば、後にこそ報まつらめ。それよりも端的て、忽諸にしがたきは、這個牝牡の二賊也。這奴們が人を殺せしを、犬塚も闕窺けん、その崖略を諸君子に、報知し給ひね。といへば信乃は頷きて、犬田犬川犬飼犬村、四位

間あまり前面なる、地藏堂まで投著られて、下壇に撲と倒れたる、響きに外るゝ篇子戸の、内にも亦是一個の武士あり。本尊の御前に立たりける、形貌自然と顯れて、此彼倶に一對なる、笠深くせし微行の打扮、起んとしたる媼内に、走り掛りつ蹴返して、背を踏へて動せず、噓くを呵々とうち笑ひて、絕て久しき惡僕媼内、俺は相識る犬塚信乃也、睛を定てよく見ずや。と告つゝ笠を脫捨れば、閻魔堂なる一個の武士も、編笠の紐解捨て、徐に下壇を降りて來つ、小文吾にうち對ひて、危かりける犬田生、俺們は黃昏時より、這堂内に在りけるぞや。と報るは亦是別人ならず、犬山道節忠與也。登時犬田小文吾は、はや船虫を綑めて、左右を見かへる不勝の歡び、思はず莞爾とうち笑て、よき折からに犬山主、犬塚主も何等の故に、通夜籠りしてをはせしぞ。と綷問ふ間に信乃も亦、准備の索もて媼内を、はや犇々と綑めて、地上に礮と蹴落して、その身も其首に下立て、小文吾に對面す。浩處に莊介、現八、大角の三犬士は、小文吾が步のはやさに、思はずも、遙に後れて、稍這處へ來にければ、小文吾、ヤヤと喚聚合て、却船虫媼内を、生拘りたる綷の顚末、幷に信乃と道節の、資助を得たる事までも、箇樣々々と說示せば、莊介現八大角は、听つゝ齊一駭嘆じて、信乃道節に對面しつ、倶に歡びを演て、又いふやう、某們は犬田と倶に、箇樣々々の事により、丶大法師の迹を慕ふて、指月院を出し

貌威風今さらに、紛るべうもあらざれば、船虫は吐嗟。とばかりに、驚怕れて逃んとせしを、小文吾透さず張燈を、搔遣捨つゝ猿臂を伸して、項上抓み引寄せて、小脇に締て動せず、怒に堪ねば聲高やかに、船虫、汝は越路にて、俺を刺んとしたりしに、その事竟に成らずして、庚申堂に囚れしを、更に犬川荘介を、欺きつ資を得て、宿所に送られ還りたる、その夜艾酒顚二們が、荘介に撃れし折、汝ははやく聞知りて、媼内と歟いふ支黨と、倶に逃亡たりけるよしも、生拘の小嘍囉、溷六穴八が招道にて、その明旦知るといへども、往方分明ならざれば、遺憾く思ひしに、這里で遭ひしは天の冥罰、掙扎ばとても、今番は脱さず、觀念せよ。と罵譴て、大刀の絡はやく解出しつゝ、兩手を背へ揉枉げて、はや緝んとせし程に、閻魔堂の檐下に躱れし、媼内は這爲體に、うち駭けども些も騒がず、件の武士が名告るによりて、小文吾なるを聞知りて、狙撃ん、と濳歩しつゝ、下壇に登り尻うち掛て、持たる鐵砲拿直て、手ばやく入る兩彈丸、程こそよけれ、と矯たりける。恁る折から堂内に、閉籠りたる一個の武士あり、朱鞘の兩刀带めしく、目深に戴く編笠をも、脱がで前より闚窺たりけん、今媼内が鐵砲の、火蓋を反んとせし所を、裏面より格子戸蹴開きて、顯れ出つゝ媼内を、搔抓み仰反して、鐵砲奪ふて投棄れば、駭叫ぶ媼内は、鷲に捉られし猿より脆く、掙扎くを宙に吊揚て、礫に弄て投たりければ、十

ずもあらば、甘く哄していなさん、と思ひしものを聲立て、己が所在を知せし故に、鬼四とやらゝは撃れたり。鳴ずは雉子も撃れはせじ。求獵るはおなじ春の野も、此の濱邊も妻戀に、浮れて係る好鳥の、今もあらん歟、料りがたかり。まだ夜深ではなきものを、先その尸骸を棄給ひね。と迭に潛き相譚ふ折から、遙に見ゆる小張燈、高畷のかたよりして、浦邊を這方へ來るものあり。晝のごとく明かりける、月を便りになほよく見るに、腰に兩刀を佩たれば、旅ゆく武士にあらんずらん。頭巾目宥に、細小なる、行李を駝搭たり。當時、船虫は遽しく、媼内が袂を引て、見給へ、他は好鳥ならん歟。快立迎へて素引て見ん。尸骸を隱し給はずや。といふに媼内こゝろ得て、四下にありける破笘を、手ばやく拿て鬼四郎と、善惡平の亡骸に、二三枚うち被て、又鐵砲を引提つゝ、その身は再閻魔堂の、檐下に退き伏躲れて、綷の容をぞ覘ひける。爾程に件の武士は、連りにいそぐ夜の濱邊に、立つ人あるを知るよしもなく、走り過んとせし程に、船虫はやく立迎へて、やよ喃需時寄らせ給へ。といひつゝ袖を援留れば、武士は驚き見かへりて、怪しや儞は甚麽なるものぞ。と問へは船虫うち微笑て、恥しながら親の爲に、情を商ふ娼妓に侍り。といふ聲耳に覺やありけん、武士は引提し小張燈を、推抗つ佶と看て、しかいふ汝は船虫歟。小文吾なるを知ずや。と名告も果ず左手をもて、搔拿る頭巾に堂々たる、相

ば、倶に鶩く船虫は、折𢌞かり、と氣を悶て、轟く胸を鎭めても、なほ鎭らぬ牛鬼は、兩三度鳴く聲の、疑ふべくもあらざれば、歡び勇む鬼四郎、他は正しく俺牛也。那首に隱して措ながら、悍々しくも欺きたる、這衒妻奴も耦賊ならん。先牛鬼を出し來て、虚實を糺さん、覺期をせよ。と敦圉猛く藁屋の戸口へ、寄るを船虫推禁て、漫なることとし給ふな。他は這頭の浦人が、鹽木を駝する牛なれば、夜は那菰屋に繫ぎてあり。司馬には牛の多かるに、おん身の牛のみ鳴くものかは。といはせもあへず鬼四郎は、怒れる聲をふり立て、這賊婦奴が大胆なる、這期に及びてなほ云々と、僞るとても誰かは听ん。妨げすな。と暴やかに、携るを振斷突倒して、再び找む藁屋の板戸を、推開んとせし程に、後に响く鐵砲に、撃れて仰反る鬼四郎、血烟立てぞ死でける。旣にして媼内は、閻魔堂の頭より、綷の破れを覘知りて、脱れがたしと思ひしかば、又鬼四郎を撃仆したる、鐵砲引提て出て來つ、稍身を起せし船虫が、臀の沙をうち拂ひて、却も今宵は折の𢌞さよ。おん身は那放免に、謀られたるを悟らずして、行損ふて趕稠られ、咱們はものせし赤牛の、鳴たる故に綷發覺れて、とり復さるべき勢ひなりしに、這鐵砲の徼りせば、何をもて二度の祟を、慿立地に禳んや。今宵の挊ぎは是までならんに、兩個の尸骸を海へ流して、牛を千住へ牽もてゆかん。おん身は宿所へ還りねかし。といへば船虫頷きて、那畜生が鳴

なること大かたならざれば、憑しき事限りもあらず。けふは二十日正月にて、人も俺もなべて皆、遊ぶを旨としつるにより、牛にも骨を休して、咱們夫婦は日の暮るゝまで、酒うち喫たる樂盡て、不圖せし口説のもつれより、毆ば罵る迭の醉狂、思はず四隣を騒したる、綷の紛れに盗兒が、背門より牛を牽出しけん、綷鎖りて俺牛鬼の、あらずなりしを稍知りて、さてこそ趕蒐來つるなれ。勿論這里まで路すがら、人々に問試しに、なほ甲夜闇なりし頃より、手炬も點さで牛を牽く、一個の男の慌しげに、司馬濱のかたへゆきぬるを、見きといふもの多かりけるに、甲夜より這里にをる和女郎の、見ずといへるは胡論也。と詰るを船虫冷笑ひて、そは宣することながら、猫鼬鼠であるならば、目に掛ざることもありなん。最大きなる牛の、牽れて這頭へ來たらんに、誰か目外し侍るべき。司馬としいへば廣かるに、這里のみ濱ではべらんや。上中下と幾町か、長き浦曲を彼此と、よくも渉獵らでおん身の牛の、必這里へ來るといふ、夢でも見させ給ひしか。奴家は牛の張番人に、央れし事はなきものを、鈍ましさよ。と口叵く、窘られて鬼四郎は、腹も立れず、舌うち鳴らして、恁いはるれば術もなし、なほ又外を渉獵るべし。益なかりき。と呟きて、歸去んとせし程に、那牛鬼は這年來、听も熟たる主人の聲を、知りけん藁屋の内よりして、忽地高く吽と鳴く、聲に駭く鬼四郎、其方を佶と見かへれ

牛の主が、趕蒐來つるにあらんずらん。俺は權且躱ひて、遣過して那尸骸を流さん。おん身は其頭にをるとても、氣色に悟られ給ふな。とこゝろ得さしつ閻魔堂の、背へはやく躱れけり。程もあらせず、一個の農戸、年歲は四十許なるべし、面の色は赤黑くて、熟せる棗を重ねし如く、身材は最高くて、港に建る檣に似たり。昔當麻の强力士、蹶速としもいひつべき、面魂の逞しげなるに、怒りに堪ずや、圓なる、眼光いとゞ凄じく、右を省り、左を顧り、來つゝ船虫に聲を被けて、喃事問ん濱立人、和女郎は世上の噂に聞えし、十字街妓にこそありつらめ。方僅赤牛を逐走らして、這里を過りしものあるべし。何地へゆきしぞ、認ずや。と問へば船虫頭を掉て、否、然る人は見えざりき。去向の路の違ひしならん。快々外を索ね給へ。といへども去ず、持たる棒を、杖に衝き立沈吟じて、そはこゝろ得ぬ事也かし。咱們は麻生に隱れなき、冠松の頭なる、農戸鬼四郎といふもの也。俺が面のいと赤ければ、村人們が渾名を搭して、赤鬼四郎と喚做したり。家には年來豢狎したる、騂犢牛一頭あり、地方に稀なる逸物なれば、村人們が亦件の牛に、俺名を搭して、赤鬼四郎、と喚做すことも久しくなりぬ。然ば地方で人鬼、といふは則俺事にて、又牛鬼といふときは、俺牛也と知らぬものなし。恁る名物なるをもて、耕耘のうへ、いへばさら也、車を掛ても荷を駝しても、尋常なる牛二三頭の、挊ぎに倍て俺與に、

も知ずやありけん、甲夜闇なれば路程さへ、憚りもなく、逐走らして、這里までかへり來にける折、亥中の月の影を便りに、遙に見ればおん身の窮難、情由こそ知らね人ありて、趕逼りぬる事急也。原來手術を行損ねて、恁は難義に及びにけん、とはやく猜して些も猶豫せず、牛の追隊の用心に、火索を附たる鐵砲もて、篦錯はず撃留たり。這火砲は去歳の夏、なほ北越に在りし折、夜撃の留守の准備にとて、童子篇子の遞與せしを、久しく藏措たるが、今宵のみ侶と役に立にき。又那善惡平とかいふ奴は、五十子頭の放免ならば、素より好人にはあらず、撃殺すとも戸骸を躱さば、後安きに似たれども、他のみならで這方の機密を、覰著たる人ありもやせん。然ば翌より生活を、更て這里へは出ぬもよし。そは左まれ右もあれ、俺は通宵這牛を、遠く千住へ牽もてゆきて、售て翌快かへり來つべし。其も那戸骸を海に流して、後にこそ、とかゝめれ。四下にこゝろを屬ずや。と詞せわしく聶き示すを、船虫听て笑しげに、寔にこれは思へども、倘牛主が趕蒐來なば、亦復綷の難義に及ん。霎時なりともこの牛を、推隱すこそよき好牛也。什麽何處へか隱すべき。と問つゝ倶に彼此と、省り顧る磯邊に、鹽燒ものゝ藁屋あり、夜は鎖して戍る人なければ、是究竟、と媼内が、立よりて鎖を採開けば、船虫も手傳ふて、牛を藁屋に牽入れけり。浩處に六尺棒を、引提て這方へ來る者あり。媼内遙に見出して、他は必

喞語がましく窘るを、媼内听つゝ微笑て、叱り給ふな今宵俺が、遲く來ぬるも亦所以あり。這月は好鳥も係らず、才に五百六百の、仂錢のみ拶れては、酒も思ひの隨には喫れず、いかで野鷄でも擊捉て、酒菜にせばや、と尋思をしつゝ、けふは午より這鐵砲を、引提て廣緒を求獵しかども、折が歹くて獵ものはあらず、空日消して腹立しさに、かへさに酒肆に立寄りて、腰に著たる錢を限りに、飮も啖ひもせし程に、夜ははや初更になりたりき。恁て酒肆を立出て、冠の松の頭まで、來にける路の傍なる、農夫の家に事ありて、男女迭に罵る聲の、いと囂しく聞えしかば、心ともなく立寄て、背門のかたより闚窺れば、夫婦鬪諍の最中にて、打つ打れつ、泣つ叫びて、四鄰を動す閭宅の捫擇。其頭の爹々妳々聚ひ來て、打を拄えつ和解れども、妻も夫も醉たりけん、禁るものさへ敵手にしつゝ、なほ云々と罵り狂へる、爭ひ果しなかりけり。爾程に俺おもふやう、今這譟劇の折に紛れて、何まれかまれものせずは、けふの不獵を補ひがたかり。好東西も欲得、と看廻らすに、背門の内なる牛欄に、這赤牛一頭あり。全身肥脂澤て、逞しきことといふべうもあらず、いと珍しき大牛なれば、問でもしるき逸物也。潛と牽出して賣轉さば、圓金十枚は得易かりてん。然はとて軈て這牛を、竊みて背門より出てゆきしを、一家兒なる奴們は、罵る聲にかどはれて、足响だにも聞つけず、皆執逆上せし折なれば、後々まで

ん身の疑ひ、漫なる事し給ふな。奴家いかでかさる惡事を、醸するもので侍らんや。思はず佳境に入りしより、おん身の舌の糸斷齒に、障たりけん、そは怪我也。宵毎に奴家が全盛を、土妓に娟れて、濡衣をこそ被せられけめ。惴りて後悔し給ふな。といひ瞞め反復して、携るを突退搔潛る、女人に稀なる拳の捋き、播一播て逃走るを、善惡平はなほ脫さじとて、驀地に趕ふ程に、後に响く鐵砲の、筩音と共侶に、憐むべし善惡平は、背を胸まで擊融されて、苦と一聲叫びもあへず、身を轉して仆れけり。思ひがけなき事なれば、船虫は殊さらに、胆を潰しつ見かへりて、忙然として立在みたる、程しもあらず種子島の、小鳥銃を引提て、はやくも這里へ來るものあり。是則別人ならず、又那惡僕媼内也。最大きなる牸犢牛を、逐つゝ既に近づくを、船虫は月光に、ムぞと認めし不勝の歡び、再生たる心地して、立戻りうち迎へて、好折からに媼内主、危き事で侍りにき。その故は箇樣々々。と那善惡平が牸の趣、一五一十を報知して、他は五十子にをる放免の、善惡平といふものぞとよ。這方の機密を覰著て、旅客に倣りて來にけるを、然るもの也とは知るよしもなく、慦に手を出して、鈍や本直にしかねしを、結果られしは沒怪の幸ひ、後產惱ぬに似たれども、翌より這里には立がたかり。おん身は又何等の故に、甲夜より這頭へ寄も來ず、世渡種を外にして、俺身に空骨折したる。心長閑き薄情さよ。と

の輿、憐愍給へ、やよ喃。と口說くをうち听く旅客は、隈なかりける月光に、見れば寔に越ある、色さへ香さへ憎からぬ、こは未曾有の夜の花、然しも些少の價にて、身を儘せんといはるゝを、賞翫せずは寶の山に、入つゝ空に還るに似たり、と尋思をしけん、莞爾と笑て、原來稀なる孝行實義、剛才その情由を聞ながら、買ていなずは情も慈悲も、知らぬ夷狄といはれやせん。假寐の臥簟は何處ぞや。と問へば船虫笑しげに、恥しながら鹽竈の、蔭に筵を布寐の手枕、這方へ來ませ。と手を拿て、物の蔭へぞ伴ひける。且して旅客は、慌たる聲ふり立て、這衒妻奴が大胆なる、俺もし舌をはやく退かずは、嚙斷るゝにぞあらんずらん。見よ舌尖を傷られて、血さへ流れて、疼痛に堪ず。近會這濱に出る賤妓に、さる所行をして客を害する、ものありとも聞えしかば、竊に虛實を試さん、と思ふによりて今宵俺、旅客に打扮て、引れて倶に臥たれば、世の風聞に果して錯はず、纔に結ぶ手枕の、價廉かる娼妓に似げなく、管待態の大かたならで、舌を吸せつ、吸よせて、嚙殺さんとせしにて知りぬ。世に多からぬ賊婦也。俺は是五十子の、放免善悪平なるを知らずや。敵手がちがふぞ、覺期をせよ。五十子殿へ(扇谷定正をいふ)牽もてゆきて、許多の賞錢を賜らん。動揚るな、腕を遶せ。と罵りつ推伏せて、隱持たる捕索を、手繰出して既にはや、緬んとしてけるを、船虫怯ず聲ふり絞りて、思ひがけなきお

から來ぬるが、實に成る客、且燒著て侯んず。と獨言つゝ彼此と、鹽木拾ひて、燃殘る、火を吹起す浦風の、寒さを凌ぐ程しもあれ、野寺の鐘の音响て、夜ははや二更になりにける。登時船虫思ふやう、今宵も既に深初たるに、阿定りなる錢のみ拿て、挣ぎ榮なき薄情さよ。然にても野良夫が、今まで何首にをるやらん。夜を旨とする世渡りを、知りつゝ這里へ寄著ぬは、外に増花ありての事歟。然らずは路に障りいで來て、留められし歟、いかにぞや。心もとなし、侯不樂しや、といはで苦しき胸にさへ、燒くや鹽木の薄煙、立歟と見れば滅てゆく、空吹く風に雲霽て、二十日の月は出にけり。浩處に高畷の、かたより來ぬる一個の旅客、宿投後れていそぎやすらん、肩に二箇の行裹を、前と後へうち掛て、走り過んとせし程に、船虫はやく立迎へて、やよ喃霎時寄り給ひね。と喚つゝ裹包を掖留れば、旅客駭き見かへりて、こは理不盡也何ものぞ。夜女の濱邊に憚りもなく、殊に女子の單身にて、旅客を見て留るは、宿引なる歟、然はあらじ。といふを船虫うち笑ひて、疎鹵なることを宣ふかな。いと恥しく侍れども、奴家が良人は武家の退糧人、這近郷に僑居して、纔に立る朝夕の、烟も細る身の病著に、臥こと一稔あまりにして、竟に世を去り侍りにき。迹に殘るは老たる姑、三稔以來躄疾にて、目も亦見えずなりしかば、藥の價に術をなみ、親に隱して宵々毎に、這鹽濱に立出て、情慾を賣るは親

いと〳〵惜かる事也とて、語繼ぎ傳へも聞て、話柄に做せしとぞ。遮莫世に愆る奇談は、好事家流の作設けて、人を哄すも多かれば、寓言ならんと思ひしに、方僅這妖御を見て知りぬ。那浪速津なる美婦人の、二十四孔に一孔を、換て情慾を賣りたるも、這儔にこそありつらめ。孰にしても掘出東西、嗚呼廉なるかな、廉也けり。といふを船虫推禁めて、やよ喃刀禰達、空口利て、廓前をな塞げ給ひそ。蜑戸が鹽焼く辛き世は、方金の東西も時價を外して、短緡錢にて手に入れねば、恁まで客は馮侍らず。然しもうち見るのみにては、いかでか風味を知るよしあらん。徒空賞に褒ずとも、安ものぞと思ひ給はば、迭代に誘給へ。倘口開で侍るかし。といひつゝ軈て帳八の、袖を抓て引寄すれば、倶に駭く錫右衛門、網籠に係りし友鳥を、資けて霎時捫擇しつゝ、饒せ〳〵。と兩聲に、身を脱れんと前へ引く、錣頭巾も片鬢して、やうやく袖を挑放つ、郤舍に引燈揮滅して、黠さで還る素見客、卒罷るべし、子泣くらん。その子の母も俟らんぞ。急ぎ給へ。と先に立つ、地藏の玉に錫右衛門、閻魔の笏と帳八も、墜ぬ地獄に怖氣づく、煩惱醒て菩提心、南無阿彌陀佛。と念じつゝ、御堂遙に拜みても、眞如の月はまだ出ぬ、甲夜闇ながら來熟たる、路を索めていそぎけり。船虫は本意なげに、霎時其方を見送りて、噫、術の歹き翁們が、年にも羞ず空口唔きし、爵は覿面、灯を喪ひて、闇路を辿る鈍ましさよ。是

ゆく。這全盛も甲夜過て、人迹稀になりし比、連立來ぬる近村の、耆長農圃、保甲、齢は四十といぞ傳ひ、籠張燈を引提て、うち譚ひつゝ近づくを、船虫、やよと喚かけて、喃々刀禰達よらせ給へ、寄せ給へ。と招けども、些も阿容ず立寄て、是が那評判高き、妖御なる歟。と共侶に、張燈抗て船虫の、眞容半面つら〳〵と、觀ること約莫半晌許、感に勝ざる面色して、錫右衛門主妙ならずや。乃者世間の評判を、耳に聆けども見るは初て、往還の人に情慾を商ふ、十字街妓には現罕なるべき、花の顔月の眉、可惜縹致をもちながら、恁非類なる世渡りは、什生なる人の果やらん。といへば頷く錫右衛門、見かへりながら嗟嘆して、帳八翁の宣ふごとく、浮世の果は小町にて、大雨の溷に金魚あり、塵塚にも生出る、美人草なきにあらず。近屬或の噂に聞にき。浪速津の片頭に、夜々出る十字街妓の、中に一個の美婦人あり。そは何處より來るやらん、火計のものすら知らねども、苛栗の中なる眞玉ぞとて、嫖客達聚ひ來て、その美人をのみ挑みしに、約十夜許にして、竟にいで來ずなりにたる。そが迹に遺せし歌あり、物の端に寫著たるを、知るも知らぬも立寄見れば、

あだし世に露のうき身のながらへて草のむしろに濡れぬ夜ぞなき

とありければ、人皆坐に憐みて、甚麼なる人の身をはふらして、恁形きなき所行をしにけん。

小也とても、善事をな怠りそ。小善も良積れば、大善となりて果報あり。然ば地獄も天堂も、閻魔も地藏もおのも〳〵、皆その心の致す所、これを他に求ずして、よくその心に求れば、佛ともなり、餓鬼ともならん。世に釣漁を做すものも、宮戸河なる濱成兄弟、近くは淀に彌陀二郞あり。こゝろ佛意に愜ふものは、日毎に江河に網を卸して、殺生の罪消滅す。手足に暇なきものも、口に佛名は唱易かり。這義を忘れざる與にとて、那上人の說薦めて、建させ給ひし佛堂なれば、誰か疎鹵に思ふべき。然るを船虫と媼内のみ、一毫も忌憚らず、地方もあらんを兩佛堂の、間に立在み客を引て、邪淫に汚穢すのみならず、人を害して財を奪ふ、罪惡越に極れり。其も戰世の癖なれば、法度邊鄙に屆かずとても、神は怒り佛も憂ふ、惡報那身に及ばずは、天道も亦賞罰に、私ありといはまくのみ。閒話休題。折から彼此の壯佼の、廿日正月なればとて、漁戸農家いへばさら也、坊賈に使るゝ、年期未滿の小厮まで、遊ぶを旨とする日なるに、然でも調戯き嫖蕩子の、那十字街妓を挑んとて、來つゝ狎つゝ木兎囮の、木兎に引るゝ物狂しく、前顱紈頰罩して、前後を爭ふ鎗頭尖く、突て入る客、出る客、連放蒐たる鐵砲の、たましひ飛で天外に、登稠ては復の夜を、果敢なく契る草の床、草の枕に草筵、片布く袖に移香は、牛の糞ぞと人はいへど、心からにて憎からぬ、馥ひは麝香の臍樞錢を、二百卻舍て別れ

く人の掩留られて、初は駭き、果は亦、他が圏套に乘せられて、見れば夜發に似げもなき、その色に愛、香に惑ひて、腰に纏ひし盤費と共に、命を喪ふものもありしを、廻國雜記にしるされたる、淺草野路の孤屋の、石の枕の虚情、いくその人を殺しけん、昔も傚や、と世の人の、後にやうやく情由さへ知りて、人中の大蟲、女中の毒蛇、世に多かるべき事ならずとて、怕れざるものなかりけり。こは是後の事なるを、語次に寫すのみ。時に文明十五年、正月二十日の事かとよ。船虫はけふも亦、點燈時候より、宿所を出て、濱邊に立て客を俟つ。左右には方九尺なる、茅葺の佛堂の、二座並びて建りける。そが左には地藏𦬇、右には閻魔の木像あり。いぬる至德の年間（後小松院御宇）にやありけん、貝塚なる光明寺の、聖聰上人、這地を過り給ひし折、網引釣漁る浦人們に、輪囘應報の理りを、叮嚀に說諭して、をさ〳〵冥福を薦め給ひしかば、浦人們月毎に、錢を集め年を歷て、竟に二座の佛堂を、濱邊に建立したる也。地藏と閻魔は一佛二體、慈愛蕭殺異なれども、倶に能化の敎主なり。世に罪障多かるものは、死して墮獄の苦みあり、閻魔の廳に呵責を受て、永劫浮む瀬あることなし。又舊惡あるものも、先非を怕れ懺悔して、心を慈善に轉せば、一旦地獄に墜るといふとも、地藏𦬇に救れて、竟に天堂の快樂あり。些小也とても、惡事をすな。小惡の稍蘊れば、大惡となりて、免るゝ路なし。些

漕ゆく蜑の船ならで、今宵も這里に張る網の、獲もがな、と夕間暮、脚高蟢子の蘆垣に、夜風を防ぐ浦寒み、鹽木鬻みて燒明す、火光を花の夕化粧、曇らぬ月の假眉も、なほ甲夜闇の黒木綿、三十振袖、四十島田、五十の錢もまだ取らで、立て見居て見、掛て見る、尻の癤は潰ても、口開遲き底疼み、毎もうみ地に出て來る、浮れ烏の宵遊びの、往還も欲得、と俟なるべし。然ば這司馬濱は、いと鄙久たる漁村也けり。道興准后の廻國雜記に、(この書を宗祇の紀行とするものは非也。)

やかぬより藻鹽の煙り名にぞたつ船にこり積むしばの浦人

と、詠れしにて、當時の光景想像るべし。寔に無下の村落なれども、這浦人の生活に、只鹽を燒くのみにもあらず、釣漁る便り乏からねば、世に芝鰕芝雜魚とて、今もなほ名物とす。這浦續きと聞えたる、品革馬驪、澁谷の莊は、當日鎌倉の路次なるに、麻布五十子、大澤の莊(赤坂の舊名)までも、皆這津に遠からねば、諸國の海船折々歇りて、交易を做すもあるべし。有恁けれども日暮れては、友喚ぶ衢の聲するのみ、波濤より外に寄るものはなかりしに、船虫が賤妓になりつゝ、這濱に出しより、好色なる彼此の、壯佼們がはや聞知りて、世に珍しき事なれば、覰んとて來つゝ援入れられて、果敢なく錢を拿らるゝもの多かり。或は又夕越て、旅ゆ

第八輯 卷之八 下套

第九十回

司馬濱に船虫淫を鬻ぐ
閻羅殿に牛鬼賊を劈く

話表賊婦船虫は、去歳の夏越後にて、犬川莊介義任に、酒顚二們が撃れし折、獨媼内を伴ふて、遠く武藏へ逃れ來つ、豐島郡、司馬濱に程近き、谷山の頭なる、人の白屋を購求めて、才に膝を容れしより、軈て媼内と夫婦になりて、生活もせず虛々と、半年許ありける程に、不義の貯祿はやくも竭て、せん術もなく苦しき隨に、夫婦竊に商量して、又大惡事を計較けり。是よりして船虫は、十字街妓に打扮て、夜毎に濱邊に立ものから、客を挽べき與のみならず、その懷に東西あるをば、媾合の折　唇をまじへて、舌を嚙斷て、殺して尸骸を海に棄るに、媼内は妓有になりて、初よりその邊に在り。倘手に及ばざるものあれば、力を勠し拉ぎて、走することなかりしかば、恁ても人の知ざりけり。以あるかな這四下は、鹽竈のみにて家もなきに、做すこといまだ久しからざる、這同惡の虎夫狼妻が、天羅の中にありながら、罪も報ひもしら波に、

頷く編笠の、深き思念も荒磯海の、遥に見ゆる湯島坂、飛が似くに下立て、往方も知ずなりにけり。畢竟毛野が復讎の、綷の光景甚麼ぞや。其は次の巻の下に、解分るを聴ねかし。

連りに感悦して、壯なるかな鋭志胆勇。必是世を潛ぶ、俊傑ならんとは、逆思ひしことながら、聞傳にし石濱の、粟飯原氏の子ならんとは、知らで密議にその人を、得たるは鬼神不測の良縁、愚臣が孤忠、孝子の復讐、此彼一事兩用なる、志願成就疑ひなし。非如縁連ならずとも、竈門鰐崎、越杉駱三、仁田山晋五に至るまで、皆是阿黨の小人にて、國を賣り榮利を樂ふ、機萌見ゆれば惜むに足らず。根を鋤きて葉さへ枝さへ、斷ばいよ〳〵妙なるべし。しかはあれども深入して、猶全勝を求ん、と欲せば愆ありもやせん。七分にして三分を、遺さば後悔なかるべし。脱落あるべき事ならぬを、傍觀八目助言は不敬、只進退こそ緊要ならめ、と思へば今さら恥かしき、這薄物を爭何はせん。こはこの儘に預り置て、功ある後に必よ、君夫人より重賞あらん。春の日ながらまだ長からで、下晡になるまでに、いふべきことは盡したり。快々宿所に退きて、翌の准備をし給へ。と心を屬て件の金を、亦懐に斂しかば、毛野は屢點頭て、貴諭の趣こゝろ得たり。縱幾人擊捕るとても、人の與とは思はぬに、異日の賞祿を望んや。卒立給へ。と共侶に、小社を出て別れゆく。守如は彼此に、立疲倦れし雜兵を、召聚合後に立して、五十子を投ていそぐにぞ、毛野は去歲より僑居せる、借屋へとて歟還りける。且して戸隱の、小社の背の樹間より、顯れ出る已前の武士、何の程にかかへり來て、言皆竊聞したりけん、獨

死の後、相摸州足柄郡、犬阪村にて生れしかば、その村の名を家號として、犬阪毛野胤智、と喚做すもので候ぞや。然ば襁褓の内よりして、俺身に兩個の讎敵あり。そが一人なる千葉家の逆臣、馬加大記常武をば、その父子夫婦從類まで、いぬる己亥の年の（文明十一年）夏、五月十五日の眞夜中比、某則單身にて、咸擊果したりけれども、那緣連は這年來、何首に在りと知るよしもなく、面貌だにも認らねば、心を苦しめ身を窶して、あふを限りと思ひしに、天運こゝに循環して、求ずして仇の面貌、來歷改名住所まで、今詳に告られしは、年來祈りし神明佛陀の、冥助なりし歟。然るにても、妙の又妙、一大奇事、造化の加減愆たず、天定りて人に勝つ、時到れりといひつべし。恁れば大夫の計略は、是その君の與なれども、某が行ふ所は、迺親の與なるに、一金なりとも受べきや。勇士の仇を擊に及びて、名告被て厮戰ひ、其首に雌雄を決せずして、矢砲をもて擊捕らば、捷といふともなほ恥べし。然れば這鳥眼銃の、なくても事は缺ねども、是をしも受まつらずは、長者の贈ものを空にして、血氣の勇に誇るとやいはれん。因てこれをば留め措て、敵騎馬ならば馬を斃して、反落させて後に擊つべし。看的は則緣連のみ。その餘は怨なしといへども、鬪戰の沿習にて、なほ已がたき時宜に至らば、咸擊果す事もあらん歟。這義を許し給ひね。と詞せわしく潛めき答て、件の金を返すにぞ、守如

りといへども、その心術奸佞にて、縁連が腹心也。これに亞もの竈門既濟、越杉一岑、仁田山晋五に至るまで、武藝尋常ならねども、縁連既に撃れなば、勢ひ頭なき蛇のごとく、駭譟ぎて度を失ん。その折和殿は引外して、はやく立退き給へかし。恁做すときは大敵なりとも、危ことなかるべし。さばれ矢砲にあらざれば、擇撃に做すことかたかり。又縁連が相貌は、恁々箇樣箇樣也。他は正使の事なれば、騎馬にて第一番にあらん。和殿この義をこゝろ得て、撃果し給ひなば、千金をもて報ひとせん。殊に猛可の密談にて、途中の齎し輕微なれども、こは且翌の費用とも、做し給ひね。と叮嚀に、機密を漏さず聶き示して、遽しく懐より、紙に糊たる金十兩と、種子島の小銃を出して、卒とてこれを贈りけり。爾程に物四郎は、膝を找め耳を側て、听こと約半晌あまり、胸豁け心勇みて、滿面連りにうち笑れたる、歡びいふべうもあらざりしを、推鎮めつゝ遺もなく、听果形を正しうして、守如に對ひていふやう、おん憑の一條は、異議なく承知仕りぬ。縦憑れ奉らずとも、那縁連は年許多、索たりける親の仇也。方僅料らずも他が所在を、具に聞知るのみならで、撃果すべき便宜を得たるは、武運に稱ひし一期の幸ひ、何事歟是に優べき。今こそ明せ俺素生、坐撃師放下屋物四郎、と告しは這地に僑居して、寃家を索る霎時の假名、寔は千葉家庶流の家臣、粟飯原首胤度が、遺腹の二男也。父胤度が枉

ふ這里へ、まゐらせ給ひたりけるに、那おん獼猴の放れしより、料らず和殿の智慧藝術を、鬩しつゝおん胸に、思召よしありければ、望に儘して這所より、越後へ密使を立させて、那次團太を助命の一議を、仰遣されしなり。その意味なくはいかにして、和殿が幾遍請ひまうすとも、然速なる御沙汰あらんや。恁て又御下向の、折から竊に某に、宣せしよしあるをもて、和殿の武藝を試しに、その器に勝たる膂力剽姚、萬夫無當の勇士なりしを、鑒定めたれば憑しさに、竟に機密をうち諦て、相譚んといひし祕事は、那縁連の事なりかし。他が相摸へ首途は、翌の朝開と聞えたり。既に這議を聞知りたる、老黨多くは眉を顰めて、しかるべしとは思はざるに、獨大塚なる大石父子（憲重憲儀）は、長尾景春の嬶者なれども、北條がたに心あるにや、件の密議に預りて、家臣仁田山晋五をもて、縁連に從して、遣すべしとて准備あり。這宅縁連と共侶に、那地に赴く副使には、曩に犬山道節に撃れたる、竈門三寶平が弟、竈門鍋介既濟、越杉駝一郎が冢男、越杉駱三一岑、鰐崎悪四郎猛虎們、縁連を正使として、此彼共に武士五員、雜兵一百名と聞えたり。密議といひしは卽是也。和殿いかで今宵より、便宜の處に伏躱れて、那縁連を擇煞に、撃果し給はらば、相摸へ使節は空となりて、皆徒に引返さん。そが中に、鰐崎悪四郎猛虎は、器械拿て無雙の獍勇、三十人の膂力あり。こゝをもてこの年來、數度の軍功あ

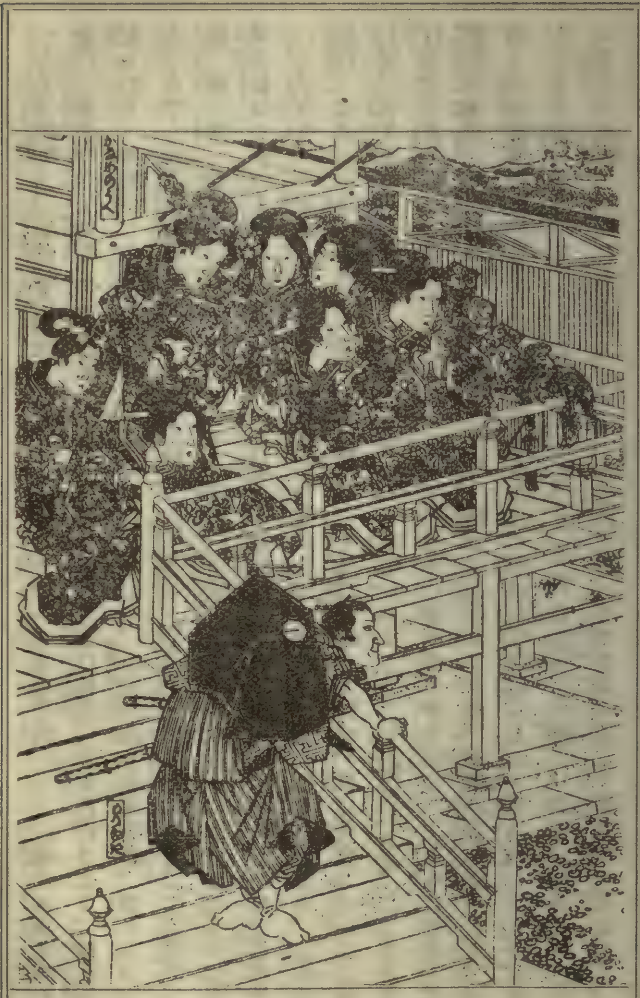
き。懲りし程に去歳の秋より、白井の長尾氏先非を悔て、當家へ歸順の一議あり。忠臣なべて祝しまうして、萬歲を唱るに、獨縁連は歡ばず。景春和睦を做すならば、舊惡遂に發覺て、身の與歹し、と思ひけん、這義を拒み利害を述て、君を迷しまうせしかば、館は是より疑ひ起りて、久しくなるまで決し給はず。縁連いよ〳〵便りを得て、又哄誘し奉り、景春歸參を願ふといへども、虎狼野心の癖なれば、幾程もなく又叛ん。他をおん手に屬られんより、北條氏と和睦して、景春を討平げ給はゞ、上野越後をとり復して、おん勢ひ十倍せん。然るときは山内(顯定)も、怕れて和順に及ぶべし。則是一事兩全、道を借て虢を亡す、計策に優よしあり。這義を御許容あれかし、と連りに薦めまうすにより、館は遂に諾ひ給ひて、諸老臣には御沙汰もなく、縁連にのみうち任し給ひて、汝使節として相摸に赴き、よく誘へて見よかし、と昨日仰付られたり。折から持資入道は、所勞によりて相摸なる、糟谷の館に將息しぬれば、這議を知るべきよしもなし。この宅の老臣忠義の輩、縁由を知れるもあり、こは何事ぞ、と駭憂ひて、諫め奉らんと欲すれども、皆縁連に拄られて、意衷を演る所なし。蟹目上もこの事を、いとうれはしく思召せども、左ても右ても諫めては、婦言を听じと思召す、おん怒りに觸れんのみ。せん術もなきことながら、年來信じ奉る、北野の神に思ふ事、祈りて憂苦を遣るべしと、思立てぞけ

て、白井の城を攻拿し比、縁連は主の使して、木天蓼の刀を携へ、下野赤岩の郷士と聞えし、赤岩一角許赴きしに、その中途より又逐電して、當家に歸降し、忠告と倡へ、白井の城の虚實を辯じて、只管仕官を求めしかども、内管領持資親子、并に老黨俺們まで、こゝろ得がたく思ひしかば、主君を諫めまうせしかども、衆議徒に退けられて、そが儘縁連を留措せ、折々近く召出して、他が議論を聞召せしに、辯佞利口の癖者なれば、よく機を攬りて主君の慾に、愜ずといふことなし。故にいよ〳〵寵用せられて、出頭肩を比るものなく、既にして諸家老の、次席に處らし給ひしを、蟹目上さへ驚きおぼして、館（定正をいふ）を諫め給ふものから、言聽れざるのみならで、おん中よからずと聞えしかば、某們駭憂ひて、連りに誘へまゐらせしに、蟹目上は世に多からぬ、賢女にてましませば、目を仄るに至らせ給はず、館も程なく御心解けて、初にかはらせ給はねども、縁連が事はしも、是よりいよ〳〵いふものなく、をさ〳〵他が下風に立て、竈に媚るも尠からず。然ば志ある輩に、縁連が素生慿々と、よく知れるものありて、他が名を更姓を改めて、龍山免太夫と名告れるは、籠山の竹を除き、逸東太の逸字の辵と、東字を削去りし也。こは石濱と白井の城へ、聞えを憚る日陰者を、腹心とし給ふは、いかにぞや、と呟きて、齒を切れど術もなく、倒他に中られて、罪なきも黜けられ、他郷へ去るも多かり

仕りぬ。と陪話れば大家頭を搔て、否、幸ひに怪我はなし。世に珍しき大勇士の、手にあふたれば、輸たりとても、雜兵冥加あるに似たり。御挨拶にて骨節と共に、痛入て候は。といひつゝ咄と笑ひけり。恁而河鯉守如は、物四郎を伴ふて、退くこと一反あまり、乾淨たる樹杜の間に、戸隱の小社ありけり。こは地主の神にして、密議に名詮妙也とて、門扉を開き社壇に登りて、俱に坐を占め對ひてをり。登時守如聲を潛めて、憑んといひし那密事は、言長くとも初より、詳に說示すべし。恁いへば何とやら、躬方を貶すに似たれども、近曾小田原の北條氏、武威八州に跋扈して、その鋒當りがたかり。この故に俺管領家は、曩に鎌倉に退き給ひて、戰ひ今に已ことなし。剩定正(扇谷)顯定(山內)、兩管領のおん中睦しからず。越後の長尾景春は、原是當家の家臣なりしに、その侄修理介の事より起りて、主君を怨み奉り、山內家(顯定)と諜じ合せて、をさ〳〵獨立の勢ひ猛かり。恁躬方には損あるを、俺君の賢慮こゝに及ばず、又只三四年以來は、龍山兇太夫緣連といふ、佞人を用ひ給ひて、絳皆他が稟す旨に、任せられずといふことなし。件の龍山緣連の、素生を什生と原るに、原是千葉の家臣にて、籠山逸東太と喚れしもの也。そが石濱の城にありし折、自胤の家臣なりける、粟飯原首胤度を、哄煞に擊果して、逐電して下野に赴き、爾後長尾景春に、仕て昵近したりしに、景春が當家に叛き

まだ宿志を果さねば、身を愛し骨を惜みて、推辭るゝにあらざるや。縦それらの事ありとても、和殿の智略武勇をもて、愆あるべきことにはあらず。今俺密議を承引れなば、俺も亦和殿の與に、憂を分ち力を勠せん。然でも听じといはるゝ歟。と潛き問へは物四郎は、沈吟じつゝ嘆息して、大夫は是俺與に、說客にやなり給ふ。在下宿望あらずとも、叨に荆軻劇孟の、義侠に倣ひて名を好んや。曩に在下義を結びたる、異姓の弟兄候ひしを、亦ム們にすら辭し別れて、孤鴈の旅宿に春秋を、恁端なく彌れども、然まで宣ふことならば、御用の筋を示させ給へ。這身に愜ふことならば、御意に從ひ奉らん。倘成しがたき事ならば、初よりして稟すが如し。承引ずとも云々と、いはで許させ給はんや。と問復されて守如は、うち含笑つゝ點頭て、そは勿論の事也かし。然らば機密を示すべし。なれども這里は不便也。といひつゝ後方を見かへれば、嚮に物四郎に投られたる、雜兵等は身を起し來て、背後に聚合て在りけるを、こや〳〵と喚かけて、俺は權且退きて、這物四郎にいふべきよしあり。汝達はなほ這頭に處りて、俺かたへ人をな立せそ。當社へ詣來つるもの、かへりゆくにも眼を屬けて、やゝ等閑にすべからず。といふに大家心得て、仰うけばり候ひぬ。しからんには三方へ、別れて張番を仕らん。と回答するとき物四郎も、找對ひ小腰を折て、各々怪我はなかりし歟。御計略とは知ずして、太く無禮を

づから氷解して、是清白の義士なることを、知るといへどもなほ飽かで、武藝の本事を試して後に、密義を告て相譚ん、と思ふこゝろのあるをもて、竊に夥兵にこゝろ得さして、聊虎威を犯したり。年に倍たる俊傑の、恁民間に降るといへども、必是由緒ある武士の、世を潛ぶにぞあらんずらん。本心實名隱ずに、知し給はゞ俺も亦、一大事をうち明て、憑みたき密議あり。是併某が、心ひとつの所爲ならず、俺賢夫人盤目上の、内命あるによりてなり。這義を承引給はんや。と憑む詞の慇懃に、初に異なる尊信禮讓、亦他事もなく見えしかば、物四郎は、つら〳〵と、所果貌を改めて、思ひがけなき賢大夫の、賞美はほと〳〵分に過たり。古の人の詞に、女は己を喜ぶものの、爲にして貌り、士は己を知るものの、爲に死するといふことあれば、在下不肖也といへども、既に大夫に知られしからは、死をだも辭すべき事にはあらぬを、什生せん在下も、大望ありていまだ得遂ず、子たるの道を盡さずして、人の大事に與しなば、則是不孝也。御用の所以は知らねども、輒く御意に從ひがたかり。這義を査し給へかし。と推辭を守如推復して、いはるゝ趣然もありなん。孝は百行の基にして、行ひ是より先なるはなし。よく親に仕へて後に、忠君に移すべし。よく君に仕へて後に、信朋友に移すべし。親の爲とて推辭るゝを、强ていふべきよしなけれども、事情を案ずるに、若是親の仇ありて、い





縄捕索の、甲斐こそなけれ、手も紊れ、足も亂れて幾番となく、投伏せられつ又起て、寄るとはすれど片糸の、組むに組れず打悩されて、平張るもあり臥すもあり、泥に吻く鮒ならで、骨も膾にならん歟、と氣さへ撲傷の乾熱痛、生る心地はせざりけり。思ひがけなきことながら、物四郎は初より、縄捕の十手に些も撻れず、飽までに拉ぎても、怒氣理らねば聲高やかに、噫理不盡なる縄捕三昧、俺身に取て一毫も、罪ありとしも覺えぬに、その義も演ず毛を吹て、求めし疵に懲たる歟。地を跂ふ虫にも魂あり。身は賤しくとも阿容々々と、非法の索に掛られんや。什麼誰殿の下知なるぞ。頭人あらば出られよ。と敦圉悍く喚れば、背に立在む一個の武士あり、石燈籠の蔭より出て、その頭人は這里にあり。適愛たき勇士の本事、今こそ慥に看屆けたれ。と答て找近づくを、と視れば是別人ならず、河鯉權佐守如也。當下守如は、物四郎にうち對ひて、勇士姑く怒りを鎭めて、俺いふよしを听ねかし。嚮に和殿の進止、辯舌應對、智慧藝術、皆是人の及ぬ所、才に坐撃大刀をもて、藥を賣て足れりとすべき、小器量の人ならじとは、某はやく猜せしかども、なほ訝しきは老樹に登るに、索階子の准備あり。倘牆を踰塀を乗る、強人にあらずや、と疑ひ其首に起りしかば、言を設て試たりしに、その身の功を功とせず、人の與に力を盡して、名利に掛念することなかりし、その行ひを見るに及びて、疑心おの

みづから棄て學ばずは、愚なるものはいよ〳〵愚にして、心あれども理義を辨ぜず、眼あれども一書も得讀めず、讀ざる故に理に疎く、理に疎ければ愆を、知るよしなけれど羞もせず。幸にして免れて、錢あり勢ひありとても、醉るがごとく生れ來て、夢のごとくに死んのみ。是を思へばその性の、美ならぬものもよく學べば、氣質を更め行ひを、新にしつゝ後竟に、稍良善の域に至らん。性の美なるは得がたくとも、その行ひの美しきは、學びて得べきものなれば、性相遠し、習へば近し、と孔子のいへるは是なるべし。俺は一個の師表もなく、纔に自得したりける、文學武藝の人なみなるも、いまだ行ふ所を得ず、寃家を索る與にのみ、人を集る坐擊大刀の、長き日消し百囀て、果敢なき技に辛き世を、渡鳥なる秋よりぞ、三冬も這里に草枕、旅宿に春を迎へても、這身ひとつは春ならぬ、心の憂苦を爭何はせん。形きなき世の去住ひ、誠を照す月も日も、ありとは見えて景足らぬ、胸の有想無想、千早振、神は知るや、といへばえに、畾に立つ箭の一條に、思ひを凝す壯士が、惆然として鵠立たる、後方に覘ふ雜兵四五名、左右齊一聲をかけて、振閃かす十手の光を、物ともせざる物四郎、物々しや。と身を沈して、足を拂へば此彼倶に、觔斗りて倒れけり。程もあらせず又左右より、組むを閃りと引外す、修煉の剽捷鷙鳥のごとく、寄るを蹴倒し、打倒す、拳の冴は稻妻の、甍を走るに異ならず。蠄手加久

五十子に還り給ひけり。恁りし程に物四郎は、守如に留められて、又只舊所にをり、做こともなく〳〵と、肚裏に思ふやう、那石龜屋次團太は、越後に名高る俠者にて、小文吾莊介に好あり、義に仗り德を慕ひけん。別れし日より音耗絕て、世になき人とおもはるゝ、犬川犬田は恙もあらぬに、無慙や他は木天蓼の、刀の事より罪を得て、久しく獄舍に繫れしを、けふ料らずも聞知りて、その大厄を救ふべき、據を得たるは奇なるかな。曩に他が二犬士の、那窮阨を拯んとて、をさ〳〵心を盡しけん、その事終に成らずといふとも、大かたならぬ志の、報ひを茲に致せしは、只是犬川犬田に代りて、竊に草を結びし也。然にても那鮒三は、心眞實なる今番の擧動、世に萬卷の書を讀むものゝ、尊大にして世事に疎く、徒廣博に誇れども、異朝の事のみ細くして、皇國の故實は夢にも知らず、口に經傳の語句を解けども、心術は一文不通の、俗を去ること遠くもあらずや。その行狀を傳聞ば、慕しからぬも世にあらんを、那鮒三に比れば、實に雲壤の差別あり。是を思へば性の美は、自然の美にして、造らず飾らず、學びて後に才に知る、文字の間になきものにて、至善の人といひつべし。和も漢も、昔も今も、忠臣孝子、義士節婦の、文字なきも多かるは、學ぶに優る世の人の、人の上なる人也けり。然ばとて稟たる氣質の、其首に至らぬ尋常人は、よく學ずばあるべからず。俺性は是美ならずとて、

物四郎と共侶に、言承しつゝ恩を拜して、罷出んとせし程に、妻有六郎之通の弟なりける、復六郎次通は、本貫越後なるをもて、今這使价に擇れし、行裝も火速の內命、伴當四五名從へて、はや外面へ立出たり。守如遙にこれを見て、妻有生等給へ。越路の案內に倶せらるゝ、舺三は這里にあり。といふに次通遽しく、走近づき守如に、別を告て舺三に、密使のよしを言示せば、物四郎も恭しく、找み對ひて舺三が、去向を憑む值遇の緣、ゆくも還るも別の一言、次通はそが儘に、舺三を將て手束弓、春なほ寒し歸雁に、四十日先だつ越の旅、高峰の深雪さぞかし、と想像りつゝ出てゆくを、物四郎も後に跟て、鷄栖の下まで送りけり。且して蟹目上の、下向の轎子陸續と、初にかはらね伴當們が、非常を守護る劍刀、路は一里歟二里あまり、三里隱の隅把紙も、けふは要なき山の手に、裃袴裁被流しの、雌雄の老松飛梅を、寫す畫額と繪馬堂に、掛てぞ憑む村胆の、心筑紫は遠けれど、這里に北野も外ならで、幣執る神子が手に鈴を、ふる事多き庭竈、湯立の釜の湯島にも、磨く砥餅の碎けては、砂とならん小石川、君が乘りけん牛込に、ひくや霞の關越て、春は來にけり竹芝の、浦和亘る皺紋波瀾、荏土見の坂に眺れば、直き麻生の鄉近み、注連結ふ民の背門に生る、藪鶯もけふより歟、初音愛たく野に求食る、雉子の廣尾春も稍、雪解の若菜萠るやと、摘て知まく思へども、暮て甲斐なき陽炎の、

に、別當所へ赴きて、權佐守如に、伺候のよしを聞えあげて、下知を俟こと一晌ばかり。日影斜になりし比、やうやくにして守如は、端近う出て來つ、物四郎と鮒三を、召よせて却いふやう、獮にもこゝろ得させせし如く、小千谷の鄕民次團太を、助命の願ひは物四郎が、獮猴を拿へし功に愛て、聞食容られたり。因て且今這所にて、おん作當妻有復六次通に仰付られ、おん消息を齎して、片貝へ遣さる。鮒三は次通に、倶して那地に罷歸りて、片貝殿の沙汰を俟べし。又白井なる景春主は、越後より路近ければ、御歸城の後管領家の、おん聆に達し、おん下知を得て、更に亦別人を、遣すべしと仰らる。片貝並に白井の城へ、御消息のおん旨は、小千谷の民次團太は、當館御舊領のものなれども、那者不慮に罪ありて、久く禁獄せられし事は、知召よしなかりしに、年來御信仰淺からざりける、湯島の神いぬる夜の、おん夢に見え給ひて、箇樣箇樣の示現あり。これにより次團太が、寃屈の罪を知召れて、特に不便に思召る。はやく次團太を赦免して、罪なき民を罪なはれずは、神と人との望に稱ふて、その家いよ〳〵繁昌せん。忠告の旨、是實也。愆給ふべからず、と竊に仰遣さる。若們この義をこゝろ得て、等閑になし思ひ奉りそ。物四郎にはなほ竊に、こゝろ得さする別議あり。舊所に退きて、御下向の折を等ね、外になゆきそ。と嚴に、示す詞は雨露の恩、受る轍の鮒三が、江に還りゆく不勝の歡び、

て、倶に亦復這地に來て、歡びをこそ演べけれ。願ふは宿所も坊名も、具に知し給ひね。といふを物四郎は聞あへず、いかでかは然ることをせられん。俺は和主と相識ならねど、次團太翁の事はしも、名さへ俠氣あるよしを、預より聞知りたり。然らでも翁に知られたる、犬田犬川二勇士は、俺莫逆の友なるに、那木天蓼の名刀は、犬田を竊に刺んとしたる、賊婦船虫の手より出て、菑害竟に次團太の、身に係りぬる緣由を、知ざりし日は是非もなし。けふ料らずも傳聞て、一臂の力を盡せしは、犬田に代りて那翁を、救んとての所爲なるに、宿所を告て訪るゝとも、後日の謝義を何にせん。是等のよしを次團太翁に、傳へ給へ。と聶きて、こよなき恩とせぬ、義俠に驚く鯽三は、感涙坐に進むを覺ず、三尺帶に夾みたる、手拭を拔拿りて、額を拭ひ四下を見かへり、原來おん身は那二犬士の、友達でをはせし歟。一家兒にも仇なきにあらず、他鄉にも這由緣ありて、憶はず資助を得たりしは、祈るに感應速也ける、當社の神の冥助もあらん。是に就てもおん身のうへを、なほ詳に聞まほし。といふを物四郎は推禁めて、そは亦益なき穿鑿也。那小文吾們の二犬士と、俺友垣を結びしよしを、知らでも絆は濟むべきに、這里にて時を移すことかは。善は急げ、と世話にもいへば、怏別當所へ赴きて、上の御沙汰を等こそよけれ。やよ立給へ。と諭したる、人の信に鯽三は、件のよしを問に及ばず、物四郎と共侶

り。折しもあれ幸ひに、上の御社參ありけるに、御寵愛の雛獼猴放れて、綷恁々と聞えしかば、在下即便望まうして、獼猴を拿へてまゐらせしは、這舸三の與にして、俺身にとりては一毫も、名利を索る所以ならず。這意を查し給へかし。といへば亦舸三も、頭を擡げ膝を找めて、目今恩人の稟せしに、聊も錯ひ候はず。次團太は人も知りたる、俠者にて候ひしを、淫婦奸夫に誣られて、木天蓼丸の事さへに、分說立ず片貝の、獄舍に久しく繫れたり。然るを上のおん慈悲にて、救せ給はゞ枯樹に花の、春にあはなん那身の洪福、只是御恩に依るもの也。いかで宜くおん執成を、只顧願ひまつれるのみ。といふをうち聞く守如は、驚くまでに感嘆して、しからんには物四郎は、得がたき良智の義士なりき。是等のよしは別當所にて、詳に稟上べきぞ。御神拜の果る比、此彼倶に別當所へ、伺候して御沙汰を等ね。こゝろ得たる歟。と告示す、程しもあらず轎隷の、老黨が聲高やかに、おん轎子を擡げよ。と下知に大家色めきて、前駈後從の步列も、亂さぬ春の遊糸に、花の袂をかすませて、本社を投て徐々と、外視もふらず倶したりける。既にして蟹目上の、轎子は行過て、倍伴さへにあらずなりたる、迹に遺りし舸三は、物四郎にうち對ひて、思ひがけなきおん身の洪恩、縱兄弟親類也とも、這親切に及んや。今より越後へかへりゆき、哥々次團太が赦にあふて、再娑婆にいで來ぬる折、おん身の恩義を報知し

他家の事ならば、歸城の後に管領家へ、聞えあげておん下知の、遅速に依るべき該なれども、こは内々の事にして、景春は俺侄なり、箙の刀自は兄嫁也、いづれに疎ある事なければ、這里より密使を遣して、爲に冤屈の罪人を救ふべし。這宅の事は恁々と、仰付られたりければ、別當所にておん消息を、なされて汝と共侶に、那おん使を遣されん。世に有がたきおん慈悲を、空にな思ひ奉りそ。抑汝は次團太が、由縁のもの歟、親族歟。と問へば物四郎は感謝に勝ず、そは慚愧きおん計ひ、その罪ならぬ人の命を、救せ給ふおん功徳は、獼猴の必死を救ひしより、逈に優ていと愛たし。原這愁訴は在下が、身に拘ずらひし事にはあらで、訴訟人は另に在り。といひつゝ遙に見かへりて、こや〳〵出よ。と喚かけて、連りに手を抗げ差招けば、始よりして社木の蔭に、躱れて竊聞したりける、鮒三はこゝろ得て、おそる〳〵出て來つ、物四郎が後方に土居て、いふよしもなく額づきしを、物四郎は又見かへりて、却守如に報るやう、他は則次團太に、いと孝順なる乾兒にて、鮒三と喚做すものなり。去歳よりして次團太を、拯ひとらまく欲するのみ、便りなき身のせん術竭て、いかで上のおん慈悲を、乞奉るよすがもがな、と思ふばかりに越後より、山做す深雪を踏わきて、這東路に來つれども、管領さまの御内には、由縁もあらず、相識なければ、神の冥助を祈んとて、當社へ詣し事情を、在下料らず聞知りた

て、那次團太を救せ給はゞ、こよなき御恩に候べし。と口說くを守如うち聞て、そは易からぬ願ひ也。御歸城の後聞えあげて、異日の御沙汰に及れん、急ぐは要なき事なるべし。と答て諭し負なるを、物四郎は嗟嘆して、噫、薄情くも外々しくも、心長閑き御教訓、そはおん詞が錯はずや。縱願ひの稱ふとも、空にこの日を過しなば、次團太は獄舍の呵責に、得堪ず命終るべし。譬ば他が今の危窮は、銀杏の杪に絆を縢めて、せん方なかりしおん獼猴と、亦何ぞ異なるべき。在下這義を思ふをもて、前より固く請まうしつゝ、おん誓言さへ承りしに、獼猴を拿には猶豫なく、這身の願ひは等閑にして、急ぐば要なき事なるべし、と宣することこゝろ得ね。然でも虛言に候はずや。みづから思ひ給ひね。と詞せわしく窘めて、權を犯せし明辯理論に、守如は困じ果て、沈吟ずること半晌ばかり、憶ずも嘆息して、喃物四郎、いはるゝ趣その理あり。今恁々と答しは、和郎の底意を探ん爲のみ。然までに思はゞ披露せん。怨ずること勿。と慰めて、發兒を放ちて遽しく、蟹目上の轎子の、頭にまゐり跪きて、却物四郎が愁訴の趣、箇樣箇樣と聞えあげしを、蟹目上は諾ひて、又仰る旨ありしかば、守如これを奉り、舊所に退きて、物四郎を招き近づけ、日今汝が愁訴の趣、上にも餘儀なく思食たる、御感も特に淺からず。中途の訴不便なれども、獼猴を拿へてまゐらせたる、ものにしあればうち置きがたかり。遮莫

て、しからば等ね、そのよしをも、稟上ん。と推禁め、獼猴を抱きて鬘目上の、轎子の頭にまゐりて、物四郎が云々と、いひつるよしさへ聞えあぐるを、鬘目上は歡びの、折からなれば諾ひて、先轎子の窻よりぞ、獼猴をそが儘容さして、膝に措き背を拊つゝ、竊に仰る旨ありければ、守如はこゝろ得果て、舊處にかへり來つ、却物四郎にうち對ひて、やよ厶の男、汝は冥加に稱ひしもの也。最性急なる願ひなれども、その功あればなほ姑く、おん轎子を駐られん。具に听け、と仰らる。愁訴といひしは什生なる事ぞ。と問へば物四郎は笑しげに、額づきたる頭を擡げて、さン候。在下が、愁訴は人の寃屈の罪を、救んと思ふにあり。その故は箇樣〻〻と、次團太の事、木天蓼の刀の事、嗚呼善の邪淫、土丈二の奸惡、總て越後の片貝にて、ありつる事の趣を、些も漏さず箇樣〻〻と、訴果て又いふやう、いとも惶きことながら、上は正しく長尾殿の、先考（昌賢）とは箸折屈む、同胞にて御座せば、箙殿にも疎からぬ、おん中にこそあるべけれ。扇谷家と長尾殿は、いはでもしるき君臣なれども、下剋上のよしありて、近年不和になり給ひしを、去歳よりおん和睦の風聲あり、春は必御對面、あるべしとこそ聞えたれ。上は素より賢夫人にて、義理に聰しくおん慈悲深し、とまうすものあるにより、いと憑しく思ひまつりて、隔山渉河なる訴は、欲寄の岸のなければ也。あはれ白井と片貝へ、這義を仰遣され

を潰して、あれよ〳〵といふ程に、坐擊師は既にはや、枝に立ち杪に登りて、縢著きたる絆の紐を、彼此と解回して、獮猴を掖寄せ左見右見て、腰に提たる藥籠より、手ばやく藥を撮出して、一粒獮猴に銜して、霎時頭を撫る程に、疲勞れし獮猴は勢ひ出て、逃んとせしを牽寄せて、懷に推容れつ、枝を踏み徐に下りて、叉索階子に携りてぞ、はやく地上に到るとき、復索階子を反揚れば、鈎は外れて落來ぬるを、やをら手に受け卷稛て、袂に斂めて、守如の、身邊に赴き跪きて、大人御覽なされし歟、おん獮猴は這里に在り。聊氣力の衰へしを、那里で藥を飲せしかば、最健になりにたり。いざ〳〵。といひながら、懷より獮猴を出して、遞與すを受拿る守如は、恙なかりし獮猴を見て、滿面笑つゝ、坐擊師の、功を賞め技を感じて、適微妙き汝が掙き、那儘にして這おん獮猴の、息絕ることありもせば、愆て走らしたる、おん轎隷の甲乙は、罪を免るゝ路なきを、救れたりけるのみならで、上にも然ぞな滿足に、思召すべき事也かし。嚮には猝の慌しさに、紛れて汝が名を聽ざりき、姓名宿所を具に稟せ。後日に御沙汰あらんず。といふを坐擊師は歡ばず、そは宣ふことながら、後日の御沙汰は願しからず。前より約束まうせしごとく、愁訴のよしを今這里にて、聞えあげんと欲するのみ。烏滸がましうは候へども、在下が名は物四郞、家號を放下屋と喚做て、門前町の借屋に處り。といふを守如聞かけ

まだ立ずや。と焦燥て、些も猶豫せざりしを、程遠からぬ轎子の、内にも具に聞えしかば、蠻目上は憑しくて、竊に歡び給ひけり。爾程に坐擊師は、思ひの隨に期を推て、守如が誓ひの詞を、うち听しより再擬議せず、衣領搔斂めて恭しく、又守如にうち對ひて、寔に仰の重ければ、命限りの技ながら、先樹登りを仕らん。無禮を許し給ひね。といひつゝやうやく身を起せば、守如歡び且訝りて、脫落あるべきことならねども、假梯などの准備はなきや。と問へば坐擊師頭を掉て、否然る准備は候はず。兵は只拙速を、貴ぶとこそいふなるに、巧なりとも時を移さば、六日の菖蒲になりぬべし。憚りながら在下が、拙き手段を御覽ぜよ。と答て件の樹下へ、獨徐に立寄りけり。今這縡の光景に、男女の伴當、社僧們まで、瞬きもせずうち目戍る。大家竝て思ふやう、那坐擊師の大胆なる、二丈ばかり枝もなき、巨樹の下に寄るとても、得登らずは胡慮にて、罪得がましき所行なるを、什生するや。と唾を飲て、阽ぬものなかりしを、坐擊師は然氣もあらず、袂の間を搔撈りて、拿出す鉤索を、引伸し又推綰ねて、遙に高き第一の、枝を臨て投掛れば、修煉差ず鉤索の、鉤は件の大枝に、掛りて滕著きたりしを、大家齊一歎唱しつゝ、見ればその索一條ならず、是索階子なりければ、坐擊師は横索に、足を踏掛け身を浮して、手繰るが如く登ること、速にして檐下の蟢子の、巢を營むに異ならず。大家これにぞ胆

第八輯 卷之八 上套

第八十九回　奇功を呈して義俠寃囚を寧す　祕策を詳にして忠款奸佞を勦く

再說坐擊師は、銀杏の樹杪に放れたる、獼猴を拿へんといふものから、その身も願事あればとて、左右なく立もあがらざりしを、守如連りに催促して、そを今こゝでいふことかは。那おん獼猴を速に、拿へて上にまゐらせなば、汝が願ひは何まれ彼まれ、聽せ給はぬことあらんや。恁いふ咱們は上のおん守護、おん伴當の一﨟なる、河鯉權佐守如也。武士たるものに虛言はあらず。所願は必その功の、有無に依るべき事なるに、狐疑せではやく准備をせよ、快々立ね。と用捨なき、火急の下知に坐擊師は、なほも譟ず含笑て、然までに急せ給ふとも、稟さぬ事は聞えがたかり。そを稟さん歟、稟すとて、諄著隨に時移り、倘おん獼猴に怪我あらば、轍鮒を枯魚の市に訪ふ、勞して功なくならぬ間に、先卽効を奏して後に、愁訴のよしを聞えあげてん。這義をな忘れ給ひそ。といふを守如聞あへず、その義はこゝろ安かるべし。刀に掛て保ふたり。

らず、憶ずも額を拊て、そは一段の事也かし。快おん獼猴を拿へよかし。賞禄は乞に依るべきぞ。と遽されても坐擊師は、應するのみ左右なく立ず、遙に杪をうち向上て、那覽せ根柢より、二丈あまりは枝もなし。然るを手段を旋して、縦杪に到るとも、踏外しなば這世の別れ、活業ならぬ功名の、樹登りをして愆あらば、後悔其首に立がたし。君を思ふも身の爲なれば、在下も亦願あり。這義を許させ給はんや。と問復しつゝ權勢に、憚る氣色なかりけり。畢竟又坐擊師が、甚麽なる事をいひ出せる。そは次の卷に、解分るを聽ねかし。

甚く、はや精竭けん衰へて、絶も果べき形勢なりしを、蟹目上は轎の、内より遙に瞰して、那いかにせん不便也。今那獮猴を速に、助拿るものあらば、賞祿は乞に依るべきぞ、尋て見よ。と仰すれども、魯般が雲の梯を、借得るものにあらざれば、企及ぶべくもあらず、主從齊一氣を悶て、社僧に商議しつれども、行童に愛護孺なければ、獮猴の事には皆疎鹵にて、辭敵になるよしもなく、俱に樹杪を向上てをり。この折までも舗棚の、迹に土居て痿痺をきらせし、坐擊師は人々の、智もなく技もなかりしを、見るに傍痛ければ、憶ずも冷笑ふを、這件立の頭人なりける、扇谷奥隷の老黨に、河鯉權佐守如と喚做すもの、心ともなく見かへりて、不敬を咎る聲仂なく、やをれ汝は怎生なるものぞ。上の御寵愛の雛獮猴放て、俺們までも周章しつるを、汝は獨烏滸しき歟。不敬の擧動、言語同斷。その情由稟せ、いはずや。と敦圍暴く艾せども、坐擊師は、些も譟ず、守如にうち對ひて、否在下は這處にて、坐擊鎥鎌の技をもて、生活の資にすなる、藥買人で候が、上のわたらせ給ふにより、權且舗棚を拿斂めて、地所を戍りてをる程に、方僮憶ずも笑ひしは、是刀禰們を挾せしならず、畜生なりとも那獮猴が、獮猴智慧もなく技もなく、氣をのみ悶て死を俟が、いとをかしくて堪ざりし。野夫にも功者なきにあらず。倘在下に命ぜられなば、獮猴を助けて下すべし。といふに守如怒を轉して、歡ぶこと大かたな

島の茶辨當、被衣は女孺、伴轎子の、先に翳の爪折傘の、折目正しき武家風俗も、光和ぐ春の日に、八重と一重をこきまぜし、梅にも優る初花と、目を驚す青人草の、處處についゐてぞ、齊一かしこみ目送りける。恁而蟹目上の轎子の、湯島の社頭に來にければ、社僧幾名歟出迎へて、案内に立んとしつる折、蟹目上の日屬より、寵愛深き雛獮猴あり、這日も轎子に容させて、膝の上に措れたる、這獮猴猛可に悶搔騷ぎて、走り出まく欲せしかば、こは尿などのせまくほしさに、出んとはするなるべし、出して淨手を致させよ。と仰するを承りぬる、轎隷の老侍、某甲がこゝろ得て、却轎子の簾を掲て、件の雛獮猴を受拿つ、更に又青侍某乙に、遞與さんとせし程に、絆の紐や緩みけん、獮猴は忽地閃りと放れて、社頭に老たる銀杏の梢に、走り登りて喚べども降らず。主はさら也、伴當の、老弱男女慌迷ひて、趕捕へんと欲すれども、樹は百稔を歷たりけん、杪は雲を凌ぐばかりに、枝繁く皮さへ黑みて、十圍にも餘れる幹に、足を掛べき處なし。天飛ぶ鳥にあらざりせば、那里に到り易からず。這故に蟹目上は、轎子を駐させて、便直やある。と問ひ給へども、大家頭を病するのみ、忙然として計の、出る所を知ざりけり。左右する程に、獮猴は杪を彼此と、木傳ふ枝に絆の紐の、幾重ともなく縢れて、果は短うなりしかば、是にぞ獮猴は駭慌て、引拔んとせし程に、倒その身を引締られて、苦むこと

ば、快天幕を掻拿下し、その巨刀も鏁鎌も、快々外へもてゆきて、這頭に土居ておん下向の、後に亦復賣買をしね。その程までは忘れても、人を聚合て立すべからず。那々遙におん轎子の、見えさせ給ふに快せずや。と遽し立る村長は、非容們を従へて、餘の賈人を制めんとて、社のかたへ走りけり。思ひがけなき貴人の社參に、坐擊師はうちも措れず、はや引下す天幕に、鎌さへ大刀を巻斂て、例のごとく門番屋へ、霎時憑みて措んず。と肩に載せてもなほ餘る、賣藥箱子に高足駝、踏繼臺も木枕も、廻り難たる手揚竹、目面を抓む遽しさを、倶に慌る艜三も、見過しがたく手傳ふて、運び果せど謑く胸に、まだ決得ぬけふの時宜、おん轎子に憑まつりて、愁訴を聞え上べき歟。否等霎時不覺也。然して不敬の咎めに遭ば、命は其首に終るべし。左してやよけん、右せん歟、と思ひ不樂つゝ怖きもの、見たしといひけん世の諺語に、漏れぬ樹蔭に身を寄すれば、坐擊師は店棚の、迹に土居て轎子の、行過る間を等にけり。爾程に、管領扇谷定正の内室蟹目上は、近属持資入道の造營したる、湯島の神社へ詣んとて、昨日よりその准備あり。時に文明十五年の春、正月廿日の巳牌に、五十子の城より、路次の行粧、許多の士卒、侍女醫師　後に從ひ先に立つ、外珍らしき春の野の、草も萠葱の薙刀袋に、掛てぞ憑む神社の、朱の玉垣緋の油篳、色さへ對の夾箱子に、大路陜しと徐したる。麻生より來て白金に、沸す湯

へて試よかしと、いはれにければ力づきて、拿る東西もとりあへず、軈て小千谷を啓行して、夜を日に續て來にけれど、五十子の城内には、相識もなく由緣もあらず。然るを那里へ推參して、愁訴をせんはさすがにて、左さま右さま思惟るに、這菅原の天滿神は、人の寃屈を救せ給ふ、御誓願ありと傳聞けば、先神社へ七日ばかり、參りて祈禀さん、とおもひ起しつけふ初て、拜みまつりし下向路、霎時和主の坐擊を觀つゝ、稍衆人の立去たる、折を等得て、掌相の、吉凶を問けるに、看るゝ判斷吻合して、人の資助を得ることあらば、念願成就しつべし、といはれしよしの歡しさに、長物語になりにたり。什生なる人に便りを求めば、資助になることあるべしや、教給へ。と他事もなく、問ずがたりに身の憂苦を、霽せど晴れぬ鬱陶ひ、心眞實なる田舍兒の、仁に庶かる木訥に、一剛毅も見えて哀れなり。坐擊師はつく〴〵と、听つゝ憶ず嗟嘆して、そは胸苦しき事なりき。猶にも示しまうせし如く、面部手掌の吉凶も、心術の好歹きにしかず。おん身の老實、おもふに優て、その乾父に孝順なる、誠を神も憐み給ひて、願ひを遂させ給ふべし。然ばとて某も、五十子の城には由緣もあらねど、なほ又攷まるらすべし。と答る詞の訖らぬ折から、村長莊客五六名、割竹を引摺鳴らして、遽しげに走り來つ、忽地に聲を被けて、やよや賈人、然してはをられず。扇谷のおん上さまの、目今當社へ參らせ給へ


土文二


次團太
をこぜ
鮒三が越路の物かたり次團太夜奸盜を捉ふ

承伏しつるまで、久しく獄舍に置るべき、おん計ひと聞えたり。爾程に淫婦鳴呼善は、思ひの隨に謀課せて、良人を陷れしより、世をも人をも憚らで、幾程もなく土丈二を、後見の與にとて、宿所に召とり家事を任して、夫婦のごとく腐合るを、誰とて憎ぬものはなけれど、土丈二は片貝殿より、賞錢さへ賜りて、御沙汰宜しきものなれば、有繫に守を憚りて、前面にいふものあらず。日屬は兒品子儀とて、虎の威を借るもの多かれども、愨る折には皆阿容て、哥々の與に力を盡して、義に走らんとするものなきを、最朽惜く思へども、錢さへ、商議敵に匱き、俺身ひとつで爭何はせん。現片糸は線にならず、孤掌は鳴らしがたかり。氣をのみ悶みつ、公事に、こゝろ得たる人に問試しに、その人の誨るやう、去歳の夏より白井殿(長尾)は、兩管領(山内扇谷)とおん和睦の風聲あり、縡やうやくに整ひて、今春は御對面あるべしと沙汰せらる。扇谷のお上さま、蠏目御前と唱まつるは、白井殿の叔母君也。女儀には稀なる思慮淺からず、慈悲さへ深くましますよしを、傳聞たる事しもあり。よりて思ふに、和殿武藏の五十子に赴きて、城内に由縁を求め、蠏目御前に願ひ稟して、次團太翁の寃屈のよしを、歎きておん憐愍を乞奉らば、萬にひとつ那方ざまより、おん詞をかけられて、白井殿へ御沙汰ある歟、然らずは片貝殿へまうさせて、救はせ給ふこともやあらん。是より外に手段はあらず。誘

長尾家の重寶なりしを、村雨の名刀なるや、鑑定の與にとて、曩に御家臣、籠山逸東太が稟すに儘して、そが武藝の師と聞えたる。下野赤岩の郷士なりける、一角武遠許遣されしに、那縁連は故もやありけん、木天蓼丸を携て、逐電して往方を知らず。この故に白井殿（景春をいふ）より、又別人を遣し給ひて、赤岩を穿鑿ありしに、那一角は妖怪にて、眞の赤岩一角の子なりける、犬村角太郎禮儀といふものに殺され、角太郎は大角と、字を改め故郷を去て、是も往方は知れずなりにき。恁てぞ件の木天蓼丸の、穿鑿照驗なくなりたれば、白井殿の惜ませ給ひて、おん憤り大かたならねど、せん術竭て二三稔、空に過させ給ひしとぞ。恁いふ縁由のありければ、片貝殿の最太う、哥々を疑ひ憎せ給ひて、搦捕せ獄舍に繋ぎて、却土丈二を譽させて、過分の賞錢を賜りけり。嗚呼憐むべし俺哥々は、奸夫淫婦に誣られて、寃屈の與に獄舍に在り、幾番となく責られて、木天蓼丸を竊拿たる、出處と那縁連の、所在を尋問れしかども、其頭の事はいかにして、夢にだも知るよしあらんや。只船虫が懐にして、犬田を刺んとしつるより、外にいふべき事なければ、有つる儘に箇樣々々、と稟して承伏せざりしを、片貝殿こそ女儀なれば、いよ〳〵憎せ給へども、別館の執事なる、稲戸津衞由充主は、邪正を照す智慧ありて、寃屈ならんと思はれけん、去歳の暮より呵責を制めて、活しもやらず、殺しもせず、みづから

泥海土丈二と、何の程にか情由ありしを、哥々は夢にも知ざりしに、犬川犬田の太厄を、救んとせし絆の紛れに、嗚呼善は那密夫と、會ことしば〳〵なりければ、遂に哥々に覰著られて、いと發憤しくなりけるを、嗚呼善は怯まずいひ瞞めて、術よく誘たりければ、哥々は老鈍氣て追も出さず。人僉齒䶩く思ひしかども、現生啞でも膵墨でも、老ては駑馬に及ばずなりけん、日屬の氣質に似げもなく、土丈二をのみ鞭撻懲して、出入ることを禁めたり。奸夫淫婦は幸ひに、免れたるを歡ばで、そを恨しく思へばぞ、此彼密談したりけん、土丈二は一日竊に、片貝へ赴きて、守へ訴稟すやう、石龜屋次團太は、嚮に犬川莊介に撃れたる、童子簖子酒顚二們と、密々に交りて贓物を買ひもしつ、賣もせし事いと多かり。這舊惡を人知りたれば、竟におん聆に入りぬべし。小可は次團太が、乾兒にて候へども、その連係を免れん與に、竊に忠訴し奉る。證据は是で候とて、携たりける短刀を、そが儘守へまるらせけり。その短刀は去歲の夏、那賊婦船虫が、小文吾刀禰を刺んとしたる、東西なりければ那折に、訴稟すべかりしを、絆に紛れてその義に及ばず、犬田刀禰の俺哥々に、遞與せしをさらに又、嗚呼善に遞與て藏措きにき。然るを嗚呼善が土丈二に、竊して良人を罪なはせんと、右の如くに計較たり。恁而片貝の別館なる、有司奉りて詮議ありしに、誰か知るべき、その短刀は、木天蓼丸と名けられたる、

の紋生じて、掌に向ひ來れり。是官災を惹くことあり。しかれども、なほ幸ひに又紋あり。料らず人の資助を得て、災初て息べし。といふに旅客胆を潰して、看らるゝ如く些も錯ず。今は何をか隱すべき、咱們は越後の魚沼郡、小千谷の鄕に名も高き、石龜屋次團太といふ、逆旅主人の乾兒にて、百堀鯽三と喚做すもの也。哥々は原是角觝の最手にて、人には負ぬ俠氣あり。爾るに去年夏の比、犬田小文吾といふ武士の浪人に、宿せしことのありけるに、船虫とかいふ盜竊婦が、犬田に舊怨ありとて、假瞽女に成り近著て、小文吾刀禰を刺んとせしを、組伏せつ生拘りて、庚申堂に繫れたり。然るを件の船虫は、小文吾刀禰の義兄弟、犬川莊介といふ猛者を、欺きつ索を解して、その夜宿所へ送らして、剰殺さんとしたりしを、那犬川がその機を查して、賊の頭領酒顚二と、小囉囉們を撃捕りしに、又船虫は逃亡たり。犬川犬田は恁までに、地方に大功ありけれども、守の母君片貝殿の、憎せ給ふよしありて、哄引寄せ搦捕して、竟に首を刎られたり。その折に俺哥々は、いかで件の犬川犬田を、救拿らんと氣を悶て、兒品子儀を喚聚め、商議せられし折もあり。又片貝へも幾番となく、赴きつ便りを求めて、誘んとせし程に、宿所に在る日は稀なりき。然ば又哥々の女房、その名を嗚呼善と喚るゝは、後妻にして年もわかゝり、酒こそ好め心ざまの、歹からんとは思はざりしに、俺身に同じき乾兒の壯佼、

庭に朝すれども、その色黄明なる故に、謀遂がたし。遂ずして遂るが如く、撃果さずして、その仇死すべし。土星の黄なるは吉昌也。といふを武士は推禁めて、噫、聲高し。四下に人あり、漫に大事をいふべからず。和殿の素生も聞まくほしく、俺うへも詳に、告ばやと思へども、目今は折歹かり、翌の朝開に又來つべし。その折藥を買んず。と詞を遺し別を告て、編笠拿てうち戴き、束を投て還りゆくを、霎時目送る坐撃師も、倘や厶歟、といへばえに、いはで名殘を惜みけり。這折までも立去らで、此彼の問答を、うち聞たる一個の旅客あり。傍に人のなきを見て、いそしく找近著つゝ、坐撃師にうち對ひて、咱們も亦宿望あり、掌の紋理を看て給ひね。といふに坐撃師はこゝろ得て、賣藥箱子の下匣より、水晶鏡を出し來て、先旅客の相貌を、瞬もせず得と觀て、誘とて左右の掌に、鏡を翳し彼此と、觀つゝ旅客に示すやう、人の面は根本也、手足は枝也、又幹なり。手に吉凶ありといへども、面部を合して觀るときは、その根本を失はず。よりて先面部を觀て、合して掌相を攷るに、坤離の間に、×かくの如き交紋あり。おん身は人の假子となりて、倶に家を興すことある歟、然らずは異姓と同居すべし。古人掌相の妙訣に、八卦十二宮を排列して、五行を以分別す。人指の下は巽、中指と無名指の下は離、小指の下を坤とす。御身は離紋沖亂せり。多くは是勞碌して、進退定らざるの象あり。且朱雀

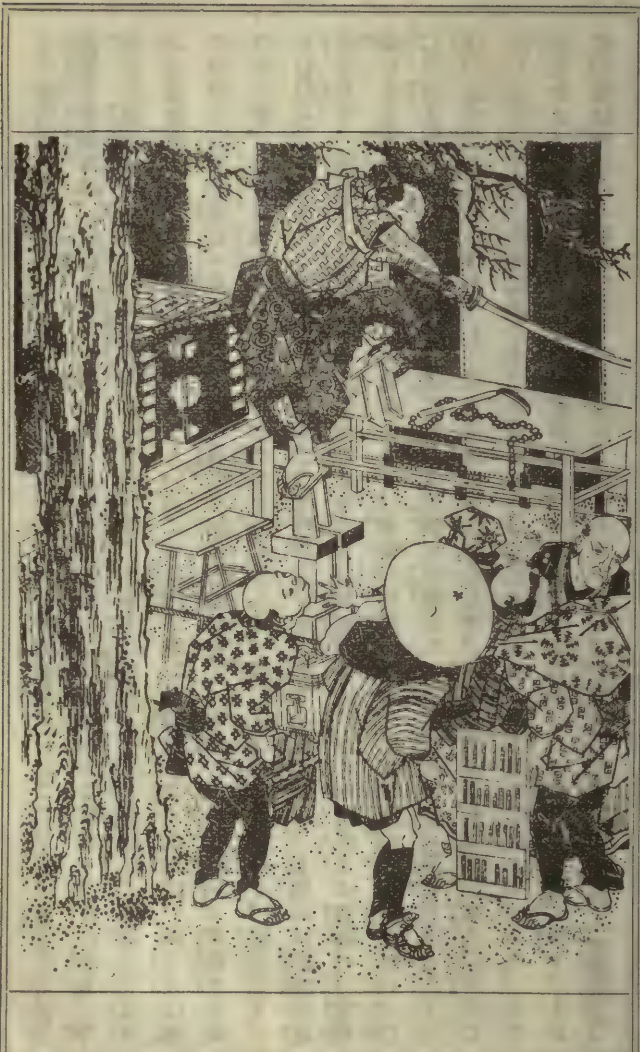
生ずることあれば也。然ば佛說の三十二相も、十觀十二宮の外を出ず。その獸形禽形に、似たるを以斷るものは、譬喩してその義を示すのみ。人の形局を獸の如く、禽の形に似まくするとも、同じからざることを得ず。小をもて大に譬へ、卑をもて尊に、喩ることは、萬事にあり。說相にのみ限らんや。天子に龍顏逆鱗といひ、兒孫に麒麟兒、千里駒といひ、暴虐に虎狼野心、人面獸心といふが如き、彼をもて此に譬ふ。鳩胸、猫舌、猴眼、俗語といへども皆恁也。これらも古人の杜撰とせん歟。天朝には三善淸行、伴廉平、安倍晴明、少納言維長の、諸賢を相學の達人とす。上世には聖德太子の、崇峻天皇を相し給ひ、鈴鹿の老翁が、天武天皇を、相しまつりし事しもあるを、說相者流は引出て、明證也といふもあれど、その術、後に傳らねば、いかにかありけん今さらに、考る所なし。只宋明の諸說によりて、聊愚按を演るのみ。用捨は君が隨意ならん。と答る辯論委みなく、才幹言句に見れしを、件の武士は感嘆して、適愛たき宏論俊才、尙春秋に富ながら、文武に長しは奇なるかな。然ば今某を、一相して給はるべしといひつゝ近く找み朝ふを、坐擊師は熟視て、十二宮通てよし。勇にして義を守り、明君を得て、名を成すべし。百日を出ずして、虛驚の後に歡びあらん。此は是後讖也。先當要を看るときは、天停に殺氣あり、是宿怨ある故に、仇を覘ふ人に似たり。田宅地閣豐滿して、勢ひ天

在る所の、黒子は隠るゝを好として、見るゝをもて劣しとせり。漢の高祖は身の内に、七十二の黒子あり、こゝをもて異相とす、黒子の吉凶推て知るべし。又應神天皇は、おん腕に鞆の形あり、こゝをもて異相とす、和漢の明證、類して推すべし。抑風鑒の一術は、孔子の教になきをもて、一方に偏る學者は、荀子の非相を甘じて、信ざるがいと多かれども、素問内經に色脈あり、色脈は觀相也。唐山には上古より、その人に匱しからず。只人の形局を、よく相するのみならず、牛を相し、馬を相し、劍を相し、笏を相せし、甯戚、伯樂、虔煥、東方朔が如きに至て、是を小技といふといへども、多く得がたき神術也。是等は形を相するのみ。よく人を相するものは、色脉を觀て、生死を辨じ、聲音を聞て邪正を知る。慿る故に、宋の陳希夷の相書に云、夫相貌の好らんより、心田の好に如ことなし。若相貌の堂々たるも、その心田奸險なれば、富貴も日ならず貧窮す。いまだその相貌を、觀ずして先よく心田を看よ。相ありて心なければ、相は心に從て滅す。心ありて相なければ、相は心に從て、生ずとなんいへりける。是神相の大關目、よく思はずばあるべからず。こゝをもて、よく人を相するものは、形によりて心を相す。面部は氣の鍾る所、喜怒憂樂、愛哀苦の、七情胸に發るものは、俄然としてその面に、見れずといふことなし。三尺の童子といへども、その氣色を看て知る所以、相は心に從て

說相家の取捨する所、龍形、虎鶴形、獅形、孔雀形、鵲形、牛形、猴形、豹形、象形、鳳形、鴛鴦、鷺鷥、駱駝、黄顙、練雀等の形に似たるを、富貴の相とし、猪形、狗形、羊形、馬形、鹿形、鴉形、鼠形、狐形、狸形の如きを、凶暴貧薄、夭折の相とす。夫人は萬物の靈にして、これより貴きはなし。龍虎、鳳凰、獅子、孔雀は、皆是禽獸にして、人に及ばず、人の身これに似たりといふとも、焉ぞ吉兆あらん。加旃、味耜高彦根神は、天稚彦と相肖たり。亦壹岐直眞根子は、武内宿禰と相肖たり。共に是一身二體あるが如し。こゝをもて、妻子兄弟といへども、よくこれを識別するものなし。しかるもその心術と、命の長短同じからず。又平將門の家臣に、主と相肖たるもの六名あり。しかれども、その勇將門に及ばず。又源賴朝は、身材矮くして、頭一斗の瓢に似たり。しかれども名將たるに害なし。又梶原景季は、面白くして狐に似たり。しかれども勇士たるに害なし。是史傳に載せし所也。然るを矧五尺の身に、粟粒ばかりの黒子ありとも、憂を做すことあらんや。と詞せわしく說破るを、坐擊師聞つゝ頭を掉て、御論は寔に然ることあり。然けれども、五尺の身に、一分の鋭芽の入るときは、苛々として堪がたし。倘拔ずして日を經るときは、遂に患を做すことあり。面部の黒子もこれに同じ。淚堂移遷にあるものを、はやく除き去ざれば、憂を做すことなからずやは。人の身に

更に阿容たる氣色なく、憶ずも微笑て、仰うけばり候ひぬ。世渡り種なる拙技を、日毎に觀る人多かれども、君が如きはいと稀也。風鑑の技はしも、學得たるにあらねども、その書あれば古人を師とせし、獨學孤陋、杜撰もあるべし。憖れば坐擊の事とても、然までに譽させ給ひては、なか〳〵に當りがたかり。いと恥しき事ながら、問せ給へば稟すなり。風鑒家に十觀あり。眼下を男女とす、又名けて涙堂といふ。陳氏の相書に、涙堂に黒痣斜紋あれば、老に到て兒孫を剋すといふ是也。又眉後を移遷とす、左は移宮、右は遷宮なり。相論に云、遷移宮若昏暗缺陷て、及黒子あれば、出入るに宜しからず、虎狼に驚さるゝといへり。かくの如き肬黒子も、抜去るときは患ひなし。といふを武士は冷笑ひて、俺聞く、荀子に非相の篇あり、荀卿の論に云、形を相するは、心を論ずるに如かず、心を論ずるは、術を擇むにしかず。形は心に勝ず、心は術に勝ず。術正うして、心これに順ふ。則形相は惡といへども、而心術善なれば、君子たるに害なし。形相は善なりといふとも、而心術惡なれば、小人たるに害なし。君子の吉をいひ、小人の凶をいふ、故より長短小大善惡形相は、吉凶にあらずといへり。且これを徴すに、古の聖人大賢、衛の公孫呂、楚の孫叔敖、葉公子高、孔子、周公旦、皐陶、閎夭、傅說、伊尹、堯舜、禹湯は、皆善相にあらざるよしを以す。その言听くべく、その論味ふべし。然るを

り。世に珍しき剽捷を、只顧感嘆せざるはなく、或は磨齒除黑子の、藥を買ふもの多かりけり。賣果て坐撃師は、又衆人にうち對ひて、是より又鏁鎌の、一術をおん目に被くべけれども、今朝より數遍の事なれば、聊疲勞ざるにもあらず、且中休に仕らん。遽せ給はぬ刀禰達は、なほおん足を駐め給ひて、觀し給へかし。といふに衆人俟不樂て、還るは多く止るは、兩三人に過ざりけり。そが中に一個の武士あり、皂蛇皮絹の小袖を被て、朱鞘の兩刀を跨へ、深編笠を戴きたるが、向より後方に立在て、件の坐撃を觀たりしに、傍に人の稀になりしを、折よしとや思ひけん、找寄りつゝ坐撃師を、こや〳〵と喚びながら、編笠を脱捨るを、と見れば月額の迹長く伸て、色薄黑く眉秀、眼瑩淨に鼻梁直卬りて、身材高き壯佼也。却這武士は鷹揚に、坐撃師にうち對ひて、俺も向より這里にありて、和郎の技藝を熟覽せしに、江湖上の坐撃師の、浮たる技と同じからず、一進一退法に稱ひて、聊も空隙なし。是を軍陣鬪戰の間に施すことあらば、よく當るものなかるべし。又只武藝のみにもあらず、和漢の故實を並擧て、衆人に示したる、こも亦架空の談義にあらず。文備あるもの武備ありとは、慿る人をやいふべからん。只管感じおもふをもて、今亦問まく欲き事あり。和郎は藥を賣る與に、面相手相も需に應ず、といひつるは實語なる歟。肬黑子の面相に、宜しからざるその所奈何。と問ふをうち听く坐撃師は、




湯嶋の社頭
に蒜賈人坐
敷に大刀を援
く處

又曲刀也、又熊手の類とす。這餘なほ種々の口傳あれども、長口上はおん退屈の、方ざまもをはするならん。然ば先坐撃刀の、拔ざまを御覽に入れん。といひつゝ扇を推疊みて、腰に挿し、見かへりて、後方に掛たる巨大刀を、左右に拿りつゝ徐やかに、又看官にうち對ひて、本邦近來軍陣に、巨大刀を用るは、武威を示せる與のみにて、多くは箔打の木刀也。唐山には恁る器械なし。水滸傳に、關勝の綽號を、大刀といへり。大刀は薙刀の類也、大かたなにあらず。是觀せ這巨大刀は、木刀に候はず。長短は柄頭より鐺まで、通て四尺八寸あり。刀は脩し、臂は短し。拔んとするに拔くこと克はず。是を拔くこと腰にあり。といひつゝ刀を拿直して、箱子枕頭二三十を、臺の上に積登して、高足駄を穿ながら、件の枕兒の頂上に、片足を踏掛け立あがれども、なほ自若として瞬がず。軈て片膝を折り、片足を、後ざまに遣伸して、腰に挿たる巨大刀を、拔んとしつゝいまだ拔かず。忽地に耶と聲をかけて、丁と引拔く刃の電光、殺人活人祕訣の刀法、瞬間もなきまでに、使ふこと半晌許、精神連りに佳境に入りて、月落る時星流れ、雨霽るゝ時虹横り、朔風雪を散すが如く、沙水に布を曝すに似て、閃々晃々徼妙の絶藝、又いふべうもあらざれば、看官齊一喝采る聲、霎時は鳴も已ざりけり。既にして坐撃師は、徐に刃を鞘に斂めて、枕兒を拂ふ片足と倶に、礙と頽るゝ數層の臺子を、はやく閃りと下立た

る所、槍棒の題目極て多かり。近屬明の英宗の正統の季年に、山西の李通といふもの、武勇にして人のよく敵すべきなし。その技藝を試るに、十八般あり。これをもて京人に敎しかば、遂に首選に應じて、武職を授けらる。しかれども勳業をもて、顯れずなりしとぞ。水滸傳に、宋の徽宗の時、八十萬禁軍敎頭といふ武職あり、皆十八般の武藝をよくすといふ、此は是寓言也。本邦にも中葉より、武藝の題目多くなりて、今に二十八般あり。粤にその崖略を稟さば、一に弓、二に撃劍、三に騎馬、四に眉尖刀、五に鎗、六に水戲、七に隱形、八に拳法、九に鐵砲、十に蟇目、十一に火矢、十二に棒、十三に錑、十四に鐵抓、十五に鐵叉、十六に十手、十七に烽火、十八に大銃、是也。これに加るに、流鏑馬、笠掛、犬追物、牛追物、水馬、坐撃、鏁鎌、騎射、騎馬砲、銑鋧、共に二十八般、是後世、用る所の武藝也。上古は矛ありて鎗なし、弓ありて鐵砲なし。拳法は近曾、明人の傳る所、又是白打の一法歟。又斥候にも巧拙あり。又甲冑の擐ざまにも、師傳ありて武士の一術とす。新田左中將家の相傳し給ひたる、義家朝臣擐甲の圖說あり。擐甲とは、甲を被ること也。就中鏁鎌は、本邦古より、最上の武器とせらる。然ばにや、大織冠鎌足公、藤卷の鎌をもて、逆臣入鹿を誅し給ひき。又唐山の鉤は鎌に似て、最上の武器たるよし、呉越春秋に見えたり。呉王の鉤は、干將莫邪と伯仲す。鉤は劍の名也、

き舌焦れて、息すること能ざるに即効あり。又乳を下し、齒を揩ひ齒を益し、胃熱肺熱を除き、氣を益し陰邪を散し、留飲を下し、太く渇きて飲を引くと、中暑の潮熱、牙痛を治す。這餘の効能最多かり、枚擧るに遑あらず。縦その汁液を飮て、腹内に到るといふとも、大益ありて小損なし。那房州砂の齒を損じ、脾胃に害ある類にあらず。藥劑御用のおん愛敬には、坐撃刀の拔ざまと、鎌鎌の使ざまを、おん笑ひに欵へまつらん。此は是面部の黒子も、人相の吉凶に、拘るよしのあるを人相手相好に儘して、吉凶を判斷せん。倘又吉凶悔吝の刀禰達もましまさば、もて、小可這技に疎鹵ならず、相術の義は坐撃の後に、おん好に儘すべし。然る刀禰達は居遺りて、徐に問せ給へかし。却是よりは坐撃の辯論、その崖略を稟し演ん。坐撃は原是巷路軍、又組撃より起る所、坐して脩刀を拔んとするに、その術を知らざれば、腰に刀劍ありといへども、奈何ともせんすべなし。此は是唐山にて、所云十八般の武藝にもなきもの也。那十八般の武藝と云ば、一に弓、二に弩、三に鎗、四に刀、五に劍、六に矛、七に盾、八に斧、九に鉞、十に戟、十一に鞭、十二に簡、十三に檛、十四に殳、十五に叉、十六に杷頭、十七に綿繩套孛十八に白打是也。明朝の武藝は白打を第一とす、白打は拳法の類也。河西の少林寺の拳法は、世間になき所、と一書に見えたり。這餘、捍棒、打擂、火砲、撃丸等の武藝あり。兵錄に載す

舍でありけれども、這神社のみ月に日に、詣る道俗多かりければ、餳餅果子なンどを、鬻ぐ坊賈尠からず。呪師放下師刀玉の、猿樂を做すもあり。そが中に、坐擊鎖鎌の技をもて、肬黑子を除く藥と、磨齒砂を賣るものあり。地方の花と華やぎし、白面優美の壯佼にて、打扮さへに精悍しく、身には太織紬の染衣を被て、裁著の括袴を、肐膝に跨做たる、肩には緋の縺帶の襷を掛て、高足駝をなん穿たりける。這里には看官多かりければ、巨竹をもて、手搨の埒を締繞らして、戲擊場の界とす。後方には八九尺なる、花田と薄柹の天幕を、仰反形に張亘して、坐擊大刀と鎖鎌を、竪ざま横ざまに飾光らしたる、左手に黃銅の皆具ある、賣藥箱子を臺に措て、その身は牀兒に尻を掛たり。姑して坐擊師は、牀兒をはなれて恭しく、群集の衆人にうち對ひて、今日も相替らず、各位諸君御機嫌よく、本社へ御參詣の序次を以、小可店舖へ處陜まで、立寄らせ給ふこと、歡びこれに捷ものなし。日每に御披露仕りぬる、小可家方の妙藥は、唐山玄宗皇帝のおん時に、羅公遠といふ仙人が、揚貴妃に傳授したる、神仙丹鼎の靈劑にて、面部手足に生じたる、肬黑子を拔去ること、箒の塵を拂ふより易かり。又這磨齒藥は、世に多ある所の、房州砂をもつてせず、寒水石を打碎き、水に浸し細末にして、加るに、丁子龍腦、肉桂、乳香、沒藥を以す。寒水石は石膏也。石膏は味辛微寒て毒なし。心下の逆氣、驚喘、口乾

す。よく看る人は余が言を俟ずして、分明なるべし。

按ずるに、麻生に龜前坊と喚做す所あり、那里は二百年已前、荼毘所なれば、と物に見えたり。しからば龜前坊は、人の名にあらざるに似たり。此には稱呼を借用すれども、字の同じからざるが、則作者の用心也。這餘貒穴の考證は、本輯五の卷の附錄に載たり。

第八十八回

湯島の社頭に才子藥を賣る
聖廟の老樹に從者猴を走らす

話表、武藏州豐島郡、湯島の郷に祭られ給ふ、天滿天神の神社は、いぬる文明十年に、扇谷の内管領、持資入道建立したり。這地は夫木集に見れたる、登蓮法師が、

見し人の忍の岡の花すゝき靡くは招く心地こそすれ

(又廻國雜記にも、忍の岡の歌見えたり)と詠りける、岡の邊の南にあり。(北國紀行に油島のやしろにて、「わすれずは東風吹むかへ都まで、遠くしめのゝ袖の梅が香」とよめりしは、文明十九年の春なれば、この回の歳月より、五箇年後也。)又東北は上野の原、(上野の地名も亦ふるかり。北條分限帳に見えたり)淺草寺に至るまで、都の手態知るよしもなき、無下の田

に嘉吉の亂の總大將、結城氏朝主の季子なる、結城四郎成朝主は、成氏朝臣の御方にて、今は結城の舊城に在り。是も亦洒家大念佛の、事情を聞れなば、施主にならんといはれやせん。此に就き彼に就きても、今番嘉吉の亡魂を、弔ふよしは深祕して、その期に及びて執行せん。吁爾なり。と肚に問ひ、腹に答つゝゆく程に、分別既に決りければ、穗北の莊を過りしかども、氷垣が宿所へ立寄らず、其頭は笠を傾けて、連りに路次をぞいそぎける。

附ていふ。金碗ゝ大は、長祿二年に、伏姬自刃の折、祝髮入道して、安房を去りにき、是年伏姬は十七歲、ゝ大は二十二歲也。是より以降、今茲文明十五年に至て、星霜既に二十六年。履歷かくの如く年闌て、その志移らず、竟に八靈玉の止る所と、犬士の由來を知ることを得たり。しかれども、這僧の世は見れしは、第四輯なる、行德の一二段と、第七輯なる、石禾の段のみ。いまだその趣を、盡すに遑なかりしかば、世の人只等閑に、看過したるも多かるべし。因て今這一二回あり。ゝ大の與に演る所、眞面目を顯したる、その智慧と勇敢と、越に初て暸然たり。かくの如くにあらざれば、伏姬の義俠と對するに足らず。又犬士們を鄉導の、大先達と做すに足らず。這書をいふもの尠からねば、婦幼の與に贅言

聞えねば、代りて民の迷ひを醒して、苦を救ひしは、浮屠家の慈悲也。報ひを受る義あらんや。願ふは村長故老輩、要なき錢と衣を散して、鰥寡孤獨を賑さば、布施して浮屠家に媚んより、遙に捷たる功德ならん。暇まうす。といひ捨て、人禁れども留らず、袖うち拂ひ、外面へ、出て手ばやく草鞋の、紐を結びつ、錫杖を、突鳴らし又回向して、北を投てぞ立去りける。功に誇らず、利に疎なる、這勇僧の擧動に、村人いよく尊信して、總て餘馨を惜みけり。恁而、大は旅舍を出て、ゆくこと又只一日ならず。肚裏に思ふやう、いぬる日洒家石禾なる、指月を退院しつる折、那四犬士に言を遺して、穗北の宿所で俟んず、と約束をしたれども、つらく思へば穗北の長なる、氷垣殘三夏行は、原是結城の落人にて、嘉吉に籠城せしもの也、と傳聞ぬることしもあるを、立寄て逗留せば、夏行必大念佛の、施主にならんと請ふなるべし。約莫今番の念願は、里見殿の奉爲なるに、他姓の施主を參へては、本意に錯へるのみならず、俺君侯の瑕瑾也。曩に君侯より賜りたる、盤費も今なほ殘れるあり。加るに這年來、募緣の一錢、微塵蘊りぬ、今番の費用を辨ずべし。恁れば氷垣が宿所へは、立寄ざるを上策とす。非如四犬士（莊介、現八、小文吾、大角）、信乃道節們に、約束の差ふとも、犬塚の大父大塚三戍は、結城で戰沒せしものなれば、四月十六日の忌辰には、招ずとても信乃們は來つべし。因て去向を復思ふ

二、故老、種平島平、いへばさら也、昨宵祭祀に管りしも、管ざりしも推並て、老弱男女二三百名、咸這宿所に聚合來つゝ、ゝ大を拜み、功德を謝して、願ふは大德俺村に、菴を造りてまゐらせん、いかで留り給ひね。と請求るもの多かりしを、ゝ大は聽ず、頭を掉て、いかでかは然ることをせん。洒家は年來、行脚を旨とす。且志す義ありて、去向を急ぐものなれども、這村人們が妖賊に、魅されしを聞くに忍びず、竊に智計を旋らして、地方の患を除きしのみ。一日も留る暇はあらず。と强面く答へ別を告て、はや立去んとしたりしかば、右衛門二故老們も、留難つゝ商議して、供物の與に集めたる、那五十貫の錢をもて、金に兌、布施と唱へて贈んと欲せしを、ゝ大は些も受ずして、詞正しく諭すやう、捨は是有漏の緣にして、法師を肥す毒藥也。出家は菩提を寶とす。恁る故に大集經に、妻子珍寶及王位、臨命終時不隨者、と說れしをいまだ聞ずや。洒家は乞食行脚して、菩提を求るものなるに、千金なりとも何にせん。利に緣り心を動して、この布施物を受納せば、亦那鷲綁が奸計と、相距ること遠からず。五十步百步の間なるべし。近來は山內、扇谷兩管領の、武威既に衰へて、東國一日も靜ならねば、奸民盜賊折を得て、山に憑り海に浮み、奪へどもなほ飽ざるは、是良民の不幸也。定正主は程遠からぬ、五十子の城にありながら、軍旅に遑なき故歟、長阪山なる一賊だも、緝捕の沙汰の

つ、却衆人をいそがして、立かへらんとせし程に、山峡既に明にけり。浩處に人許多、這方を投て來ぬるとおぼしく、聲喋しく聞えけり。此は是別人ならず、嚮に大沼より返されたる、故老一二名は、村人們の門を敲きて、有つるよしを報知せ、更に亦促して、藻刈船なる錢と衣嚢を、右衛門二許拿斂さしたる、その事既に果しかば、丶大幷に右衛門二們を、迎の爲に來つる也。然ば又右衛門二們は、目今來つる村人に、洞の光景女子の事、又小嘍囉三名は、皆老貒が啖殺せし、絆の趣箇様〳〵と、一五一十を報知して、三個の女子を指示せば、その親なるもの叔父なるものも、迎に來つる隊にあり。往方も知らず存亡も、知らで五稔過したる、親子の再會、迭の歡び、孰に疎鹵あることなければ、手を拿るもあり、携るもありて、外視も羞ずうち泣きしを、やうやく〳〵に心づきけん、こは全く大徳の洪恩、世に有がたき活佛に、引接せられし利益にこそ。と稱へて倶に身を轉して、丶大法師を伏拜みて、齊一歡びを演にけり。是よりして殊さらに、人多くなりければ、幾十貫の錢を分ちて、藤蔓に縢て擔荷ふもあり、又米苞を駝搭ふもあり、或は、大の先に立て、連りに路を開くもありけり。爾程に、大法師は、朝日高く登りし比、衆人に懇請せられて、又村長右衛門二の、宿所にかへり來にければ、一家兒の男女出迎へたる、尊敬尤淺からず。軈て客房に請待して、齋を羞めなどせし程に、主人右衛門

衛門二們と共侶に、その次の房を檢するに、這里には果して賽保輔、魔夫太們の尸骸あり。倶に咽喉を破られて、全身鮮血に塗れたり。必是牝牡の老貍に、啖殺されたりけん、と人僉猜して嘆息す。這餘は錢あり、米さへ多きを、丶大は一切見かへらず、只女子們を勦らして、軈て洞より出にけり。當下村長右衛門二は、壯佼們に指揮して、東西皆運び出さしたる、そが中に酒もあり、菓子もあり、飯もありしを、丶大に羞めて、餘れるを、皆共侶に飲食ひして、饑たる腹を頤ひけり。爾程に、大法師は、洞内より出したる、贓物を熟視て、米錢は是國土の至寶、聊なりとも棄べからず。這餘は汚穢れし不義の材、燔捨るこそよかめれ。といふに大家推辭難て、椀碟盃盤家伙席薦まで、出せし隨に積累ねて、はや蕉火を差寄れば、折から曉ゆく山風に、吹れて燃る程こそあれ、皆灰燼になりにけり。事やうやくに果しかば、種平と島平は、洞に入る折樹下に、繫措きたる風丸郎を、牽立んとしてけるに、こも亦咽喉を破られて、何の程にか死してあり。原來又那老貍が、漏さじとて啖殺せしならん。といふを、丶大は見かへりて、這風丸郎は鵞鱓們と同惡の草賊なれども、這者獨死ざりければ、鵞鱓坊が積惡も、その賊巣さへ知られたり。他膝節を擊破られて、癈人になりたれば、命を助け得させん、と思ひにけるを未いはぬ間に、那老貍が殺せし歟。正に是天罰を、脫れ得がたき業報ならん。南無阿彌陀佛。と念じつ

徒眞貒穴の名をのみ遺して、この趾もなくなりぬべし。且く等せ給ひね。といふ歟とおもへば老翁老婆の、狀形は見えずなりにけり。今又這等の奇異ありけるを、見も聞もせし衆人は、胆を潰し舌を掉ひて、いよゝ、大の德高かるを、曉得て信心彌增しけり。登時、大は此彼と、衆人を見かへりて、剛才老貒の云々と、いへりしは實事にて、洞には餘賊なかるべし。洒家先入て檢せんに、四下の竹を伐採りて、快手炬を造らずや。といふに大家こゝろ得て、作り出せし竹手炬に、種平們が鐵砲の、火索を借つ、火を吹移して、振照したる壯佼們は、ゝ大法師に從ふて、種平島平共侶に、找みて洞に入る程に、右衞門二さへにおそるく、後に跟てぞ入りにける。恁而、大は壯佼們と、俱に洞內に找入て、火を抗さして四下を見るに、奧はいと廣やかにて、席薦六枚を布たるは、鵞蟬坊の臥房なるべし。夜物あり、家伙も多かり。只這東西のあるのみならで、年尙弱き三個の女子の、累り俯てよゝと泣を、ゝ大はうち見て、右衞門二們に、扶起さしてよしを問ふに、則是五箇年已前、鵞蟬坊に搔攫れて、他が愛妾にせられしといふ。故鄕を問へば葵岡にて、這人々の相識れる、某甲某乙の女兒なりければ、迭に名告りつ驚くまでに、歡ぶこと大かたならず。然ば件の女子們は、ゝ大法師の方便にて、妖賊誅滅せられたる、譯を聞得て再生の、洪恩德義をうち仰ぐ、感淚の外なかりしを、ゝ大は然こそと慰めて、又右

是若們は、狐狸歟しからずは、山魅木精の屬ならん。はやく素生を報ずや。といはれて怕るゝ老翁老婆は、杖をうち捨跪きて、大德許させ給へかし。既に明査せられし如く、俺們は人倫ならず、三百年來這洞に、栖たる眞貓で候也。和名は素よりみの一字にて、貓てふ獸で候へども、面は狸に似たるをもて、みたぬきと喚ぶものもあり。這頭の俗はまみとぞいふなる。性鈍ければ狐狸と遊ばず、こゝをもて髑髏を被ぎて、人を魅す靈もなし。形肥たれば、ゆくこと遲かり、この故に人を啖ふ、豺狼の悍きに似ず。毎に穴居して他を求ねば、園圃を暴さず、稻穀を竊ず、可もなく不可もなきもの也。といふを、大はうち听て、原來老たる貓でありける歟。徒穴居して人の與に、害を做すことなしといふとも、その身には相應しからぬ、最廣大なる洞を造りて、栖たる故に妖賊の、奪て這里に憑ることあり、是若們が罪ならずや。今より他所に移るべし。洒家這洞を伐崩さして、後の患を除んず、と責懲されて老貓は、詞ひとしく陳ずるやう、緣故を知召ねば、その譴責は然ることながら、這洞は俺們が、穿鑿りしものにあらず。此は是大古の、古墳崩て洞になりしを、咱們が所栖にしたる也。目今埋させ給はずとも、是よりの後百二三十年、星霜を歷るに及ば、人畜總て泰平の、聖化に遇る歡びあらん。その折にこそ這頭まで、繁華古昔に類なく、士民各處を得て、屋上に屋を加る、魚米の鄕と熱鬧しく、


二賊を趕ふて丶大老翁老婆に遇ふ


風九郎

婆忽然と、出て手を抗げ推禁めて、人々卒爾し給ふな。俺們は賊徒にあらず。年來妖賊鷲鱓坊に、這所栖を奪れて、怨腸を斷といへども、他は素より術長て、よく鳥獸を厭勝せること、那唐山なる黄公の、神符に捷る手段あり。この故に阿容々々、とその毒氣を避け躱ひて、空に光陰を過したり。爾るに今宵善知識の、那賊情を明査ありて、輒く仇を誅滅せられし、歡び何事か是に捷すべき。初はこの義を知らでありしに、羇に脫れてかへり來にける、賽保輔金山魔夫太が、その進退を決難て、云々とうち相譚ひしを、心ともなく竊聞て、怨敵既に亡びたる、緈の趣を詳に知られ、且件の兩賊は、那厭勝の術もあらず、只是寃家の殘黨なれば、俺們これを殺したり。賊徒は才に五名にて、他們が外に支黨なし。洞內にはいぬる比より、拿はれたりし女子們と、金錢衣裳家伙あるのみ。快々入て見給へかし。といふに大家亦驚きて、近著くもののなかりしを、獨、大は些も騷がず。樹柆の間を漏る月を、燭にしつゝつら〳〵と、件の翁と媼を見るに、腰に梓の弓を張る、八十路の齡なるべき歟。頭に霜を戴けども、色黑くして形肐膊み、訥辯にして引聲なし。身には海松の如く搔垂れたる、布の薄黑衣を被て、手に鹿杖を携へたり。必是妖怪ならん、と思へば仡と立對ひて、やよ老牝牡何とかいふ。剛才若們が說ところ、その據あるに似たれども、いまだ素生を詳にせざれば、衆人怪ざるはなし。憶ふに

嚮に還りし衆人に、是等の義を報知して、船なる錢と衣裳皮籠を、運び返さし給へかし。その餘は這里に居遺りて、船を戍るもよかめれ。といふに此彼異議に及ばず、現年老たる俺們は、件の洞に赴くとも、賊を捕捉る資助には、なるべうもあらずかし。然ば這里より罷り還りて、熟睡をしけん人々の、門を敲きて將て來つべし。こはいふまでにあらねども、洞にはなほも支黨の、多く在ん歟料りがたかり。其頭の用心し給ひね。とこゝろを屬て恭しく、丶大に辭してゆくもあり、這里に留るものもありけり。當下種平島平は、風九郎にうち對ひて、やをれ兇賊听たる歟。汝を肩に引掛て、洞の案内に立まく欲す。命惜くば去向を報よ。然ば立ね。と左右より、手を拿り攙て掖立るを、壯佼二名受捕て、肩に掛け足を持つ、金瘡人に熟たる戰國の、民とて疎鹵ならざりけり。爾程に、大法師は、右衞門二并に莊客們と獵戸を從へて、件の洞に赴く程に、天よく晴て望月の、光限なく明かりけるに、風九郎を案内にしたれば、更に岐道の迷ひもあらず。ゆくこと半里餘りにして、長阪山の頭なる、一條の岨路に、老たる弱き枝を參へて、樹木間なき處あり。大家其里に來ぬる時、風九郎は聲をかけて、那首の小山の半腹に、見ゆる洞こそ鵞鱓坊の、所躱で候なれ。といふに大家左右なく找ず。登時種平島平は、倶に持たる鐵砲を、拿直し、洞に向ひて、火蓋を反んとせし程に、洞内より夫婦とおぼしき、老翁老

五戒を破る怕れあり。この故に猟戸を、央ふてこれを撃したり。夫外道を祛けて、正法を盛にし、兇賊を退治して良民を濟度しつるが、則如來の本願なれば、洒家一身に關らぬ、事を好み功を求て、屠殺を旨としつるにあらず。この義をも亦思ふべし。那地獄天堂の、空談をのみ宗として、衆生の與に力を用ひず、佛を賣て錢を求る、凡僧と日をおなじくし、年を同くして語るべからず。恁てぞ迷ひは醒ぬらん。こゝろを得よや。と說諭せば、驚きおもふ村長右衛門二、以下の莊客獵戶們まで、初て夢の覺たるごとく、齊一地上に跪きて、俺們凡眼明ならねば、慈悲廣大なる活佛に、をはしませしを知るよしもなく、恁るべしとは思ひもかけず、既に這期に及びても、胸中なほも穩ならで、疑ひ奉りしこそ悔しけれ。粵に昨非を省れば、大德の善巧方便にて、出沒不測の妖賊を、瞬間に誅滅せられて、今より俺村に利益多かり。永代不易の大功德を、何の時にか忘るべき。許させ給へ南無阿彌陀佛、彌陀佛彌陀佛。とうち陪話て、渇仰隨喜數行の感淚、坐に衣領を濡すまでに、伏拜み又額づくを、大は急に喚立して、既に賊首を獲たれども、なほ逃亡たる二賊あり。莠草その根を遺すときは、再稻田の害とならん。這風九郎を鄉導にして、又那洞に赴かば、二賊を其首に獲ざらんや。やよ快々。と遽がせば、大家有理。と諾ひたる、そが中に右衛門二は、故老們にうち對ひて、各々は一二名、快村かたに赴きて、

幷に法師覡巫を留ずといふ事まで、一家主の話說にて、初て詳に聞知りたり。因て思ふに五箇年前、大沼祭を村人に、誨えしといふ行脚の僧は、幻術を得たる奸賊にて、形のごとくに村人を、哄して供物を竊むならん。今宵は正月の祭禮日なれば、例の如く錢と衣裳を、藻刈船にうち乘して、備へまつるといふよしを、うち聞だにも傍痛かり。然らば件の賊僧が、衆人去て小夜深し比、沼頭へ潛來て、竊拿ることなからずやは、とはやく亮查したれども、田舍兒は愚直也。那奸賊に魅されて、年來を歷しうへなれば、縱洒家這意衷を盡して、明々地に諭すとも、只先入を旨として、還て洒家を疑はゞ、信用るものなかるべし。要こそあれ、と深念をしつゝ、却村長許赴きて、思の隨に謨りしかば、長はさらなり、這衆人も、皆承引て些も拒ず、通て指揮に從ふのみ。汝達這們の賊僧を、亡すことを知らずして、賊僧幷に小嘍囉、此彼三名を滅したり。洒家俗姓は金碗氏にて、法名を、大といへり。弱冠の比安房の國守、里見殿に仕へたりしに、愆る事ありければ、軈て祝髮入道して、關八州を履歷の星霜、二十餘年になりにたり。神を僞り愚俗を誑して、民の財帛を掠奪る、這賊僧の徒弟なりき、と今も思ふ歟、甚麼ぞや。譬ば今宵洒家單身にて、這沼の邊に埋伏して、是等の賊を擊捕るとも、かたくはあらぬ事ながら、慿しては汝達の、迷ひを醒すになほ足らず。非如兇賊也とても、出家の手づから命を斷ば、

一所不住の博徒也。又撃れたる這火家は、獏七といふ山客にて、諢名を四疊半と喚れしもの、又逃亡たる兩個の火家は、養保輔、金山魔夫太と喚做すもので候也。皆是烏滸の閒民にて、身を措所なかりしかば、這頭領の手に屬て、兩三稔を歴たれども、只這祭祀の獻供物を、竊に洞に運寄るゝを、身の務にしたるのみ。這餘の悪事は候はず。願ふは上人法衣の袖もて、掩ふて救はせ給へかし。けふより疲塞乞丐になりて、鉦を敲き念佛を唱へ、徐に餘命を送るべし。いかでいかで。と哀しげに、諄返しつゝ陪話にけり。思ひがけなき這招道に、村長右衞門二、その餘の莊客、獵戸種平島平們まで、呆れて目と目を合するのみ。惑ひはいまだ解ざりしを、大はさこそ。と見かへりて、各那を听たる歟。這風九郎とやらんが招道にて、賊僧の伎倆發覺れたれども、倘わがうへを說諭さねば、こゝろ得がたく思はれん。嚮に酒家村長許赴きて、知雨老師の徒弟也、と名告て恁々といひつるは、這賊あらんと思ふをもて、今宵必退治して、人の迷ひを醒さまく欲せし間の方便なり。酒家はいぬる日、甲斐州、石禾の道場を退院して、下野を投て赴く程に、けふ這村まで來つる折、黃昏近くなりしかば、宿を借らんと思ひつゝ、村人の門に立よりて、一夕の宿を請ひしかど、皆強顔て承引ず。事情を原れば、大沼祭祀の供物の事、

らざる村あるときは、又術をもて村の女の子の、醜からぬを奪略りて、犯して後に售りしもあり、或は左右に侍らして、愛妾にしたるもあり。村人これを知らざれば、忽地に駭怕れて、こは神縈なめりとて、遂に供物を准備して、祭祀を興行せざるはなし。咱們初は鵞鷤坊の、術あるよしを知らざりしに、祭祀の夜毎に錢米なンどを、運拿る人足に、央れしより聞知りて、他が居ながら衣食に富たる、然しも快樂の羨しさに、願ふて洞に留りて、却手下にはなりたれども、火家四名は雨を降し、形を隱す術を知らず。只頭領の隨意なりしに、法術至妙の老僧も、命運越に竭たる歟。那里に人の在りしを悟らで、不意を撃れし兩銃に、胸前さへ眉間さへ、腦を破り骨を摧かれ、見らるゝごとく仆れたり。又活くべうもあらずかし。といひつゝ嘆息したりしを、丶大は聞つゝ冷笑ひて、洒家推査に錯ふことなく、這惡僧の幻術賊情、世に未曾有の奸惡は、若們がいふ如くなるべし。鵞鷤坊は始より、件の洞に住みたる歟。若們は原何處のものぞ。何の比より手下になりて、這が惡を資けたる。汝と共に四個の火家の、名は何と喚做したる。具に報よ甚麼ぞや。と問へば種平島平も、一人聲を苛立て、快々稟せ、いはずや。と引提し鐵砲振抗て、背を礟と毆悩せば、賊は得堪ず苦と叫ぶ、聲戰してやよ等給へ。今さら何をか隱すべき。鵞鷤坊は當初、今の洞より程遠からぬ、谷蔭に菴を結びて、權且其處に在りけれ

て、件の汀渚に赴くにぞ、獵戸種平島平も、鐵砲を引提て、齊一走近著て、擊仆したる癖者們を、此彼と檢するに、頭領とおぼしきと、船の内なる一人は、胸骨眉間を擊れたる、窮所なれば息絕て、銃瘡よりも口よりも、吐きし鮮血に身を浸されて、絳に染たるそが中に、後に擊れし一人は、膝節をのみ碎かれたれば、痛傷なれどもまだ死なず、身を起さんとて掙扎きしを、種平はやく走り蒐りて、楚と押へて動せず。島平も亦手傳ふて、腰に附たる列卒索もて、兩手を緊しく綑めて、背を酷く毆懲し、敲き惱して來歷を、問へば癖者苦痛に堪ず、遂に招道しつるやう、咱們は今宵擊れたる、頭領と俱に五名、長坂山の頭なる、洞中に年來住る、山賓にて候也。頭領は原修驗者にて、鷲鱓坊と喚做したり。初舊里に在りし時、好らぬ技を旨として、地方に毒を流せしかば、國守に聞え搦捕られて、緊しく獄舍に繫れしを、幻術をもて脫出て、迹を那里に瘞めたり。然ば這鷲鱓坊は、每に蜥蜴を養狎して、そをもて竊に禱るときは、雲起り雨降そゝぎて、日を累れども歇ことなし。又隱形の術をよくして、形を隱すに自由也。因てこの二術をもて、彼此に雨を降して、その村人を欺くに、神の祟のあるよしを、告示し酷く誂して、許多の米錢衣なンどを、供物と倡へ備措して、夜深てこれを奪ふこと、只是今宵のみならず、這村の獻供物も、五箇年以來受納して、朝夕の資用にしたり。さばれ教誨を疑ひて、祭

第八輯　巻之七

第八十七回

天機を談じて老獸舊洞を惜む
燋火を照して勇僧猫穴に入る

再說。那癖者們は、種平島平が撃出す、鐵砲の响きと倶に、頭領とおぼしきと、船に乘たる一人の、矢庭に撃れて仆れしかば、這余三個の癖者は、吐嗟とばかり駭慌て、頭領を挨起すもあり、然らぬは船に倒れしを、扶けて引抗んとせし程に、連放被けたる鐵砲に、又一人は撃仆され、一個の丸は那頭領の、眉間を再撃碎く、勢ひ猶豫すべくもあらねば、殘る兩個の癖者は、尸骸をそが儘うち捨て、往方も知ず逃亡けり。爾程に村長右衛門二は、方纔種平們が二度まで、筒音高き鐵砲の、暗號を錯へず樹間より、故老佼壯們と、共侶に出て來て、おそるおそる、丶大法師の、身邊に找近著て、綷の容子を諮ねけり。登時丶大は那癖者們の、綷の趣箇樣々々と、有つる隨に報知して、那五個の癖者を、過半汀渚に撃留たり。二賊は迯て往方を知ねど、息絕ざるもありぬべし。快々那首へ赴きて、死活を看屆け給はずや。と遽しつ先に立

迭に指さし聒きて、手下と見えし癖者が、腰に附たる鉤索を、船に戛喱と投掛て、引よせつ、うち乘て、蒲簀の錢を引抗て、肩に乘せんとせし處を、鑑澄せし種平島平、倶に槩たる鐵砲の、火蓋を撑と切て發せば、鑑差はず那頭領と、船なる一個の癖者の、乳の下腕下此彼ひとしく、撃傷られたる兩銃丸に、霎時も得堪ず苦と叫びて、手足を張て仆れけり。畢竟、大が智計にて、這癖者們を撃仆したる、後の話說甚麽ぞや。そは又這次の卷に、解分るを聽ねかし。

平島平を、竊に招き近づけて、件の機密を說示すに、種平們は異議もなく、軈て宿所に走り還りて、身裝しつ鐵砲を、引提て再出て來て、磐井の宿所に躱れてをり。旣にして村人們が、祭祀の供物を沼の畔に、もて出すを遣り過して、ゝ大も徐に立出て、草鞋を穿き錫杖を挾み、種平島平を從へて、間道より找み近づき、村人們が祭果て、齊一かへり去りし時、ゝ大は竊に立替りて、且這沼の光景を觀るに、思ふに倍たる大沼にて、周匝は五六町あまり、八九町もやあるべからん。水際には菰草菖蒲の枯たるあり。夏は水葵も多しといへば、村の字を葵岡、と喚べるはこれに緣る歟とおもはる。時氣は正月の望の宵なれば、月明に星稀にて、風いと寒く霜深かり。氷を摧く水鳥の、立かた遠く向上れば、西は赤阪青山に、降置く霜の眞白なる、目黑に落る鴈が音も、黃ばみ朽たる藁塚を、欝悒くや思ふ夜視ながら、五色もよしや四方天、南は麻生高㟁、芝浦近く寄る波も、東へ續く入江潟、北は芝崎神田の岱、漁村樵徑相雜ひて、目に見ゆるあり見えぬあり。征客常に膓を、斷べかりける眺望也。當下ゝ大は沼の地理と、進退さへに鑒定めて、兩個の獦戶共侶に、小篠の蔭に身を潛めて、那癖者が來ぬるや、と息を凝して覘ふ程に、夜は丑三とおぼしき比、麻生の方より忽然と、癖者五名連立來て、沼の畔に立在たる、そが中に一個の癖者、罩頭巾を目窅に戴き、長き刀を橫へたるは、頭領の賊なるべし。

右衛門二は麻の袿衫に、五箇服章ある黒綿布の衣を被て、藤柄の中刀を、瑠短に横佩て、一分反の菅笠を戴き、斑竹の杖を衝ながら、伴當一名を從へて、陸續として徐行けり。約莫這祭祀に闘るものは、皆新衣を被て、剪綵を揷頭とす。しかれども鉦鼓を用ひず。人の觀ることを許さねば、路次の煩ひなかりけり。恁而件の衆人は、大沼の畔に馬を駐めて、蒲簀と皮籠をうち卸し、准備の藻刈船に積乘しければ、禰宜代なる一個の故老、布の白袴を穿き、蔓草を襷襷に採掛て、手に鈴を振鳴し、沼に向ひ跪きて、中臣の祝詞を、聲烏滸しげに誦すること一遍、白幣を彼此と、振動しうち戴きて、軈て水際に建るとき、大家齊一身を起して、素發、時分は今なるぞ、快おん船を推出せ。と罵りつ散動めきて、篙を把るもの一兩名、船を沼の中央へ、撐もて流し咄と噬きて、蕉火はそが儘に、沼に投棄五疋の馬を、牽走らしつ、異口同音に、後を見るな。と相警めて、喘々て逃るが似く、別れて宿所へ還りけり。そが中に右衛門二は、故老兩三名と、心利て小膂力ある、村の莊客六七名に、ゝ大の機密を箇樣々々と、甲夜に聶き示せしかば、逆より僉こゝろを得て、宿所まではかへりも去らず、途より竊に引外し、右衛門二に從ひて、沼を距ること一町あまり、樹粒の間に伏躱れて、那種乎們が鐵砲を、放ことあらば聞漏さじ、と思へば倶に耳を澄して、今かくと竚たりけり。爾程に、大法師は、獵戸種

ども、大沼に鎭りますは、人の與に禍福を降して、賞罰殊に灼然なる、暴神とこそ思ひ候ひしに、何どてその妖賊を、怕れて師父を勞するまでに、是等の託宣ありつらん。といふを、大は冷笑ひて、聞ずや唐山戰國の時、楚の大夫屈原は、汨羅に投て神になりけり。後にこれを祭るものあり、五月五日に供物を備て、その水中にまるらせしに、屈原の神靈夢に見えて、祭らること甚よし。然けれども祭祀の供物は、蛟龍の爲に奪れて、奈何ともせん術なし。願ふは五彩の糸をもて、結びて水に沈めよかし。然るときは件の蛟龍が、怕れてこれを奪ふこと得ならず。この義を憑む、といはれしかば、則五彩の粽を製りて、形のごとくに祭りしとぞ。端午の粽即是也。恁る例もあるなれば、沼の暴神也とても、妖賊を憚りて、託宣ありしを疑ふべからず。快々准備をし給はずや。と急されたる右衛門二は、只顧かしこみ感激して、遂に些も疑はず。先、大に茶を看め、夕饌を羞めなどす。管待極めて叮嚀也。その間に右衛門二は、獵戶種平島平を召來して、密議を示しこゝろ得さして、竊に准備をしたりける。春の夜既に深初て、はや亥の初刻になりしかば、祭祀に關る故老、村の壯佼幾名歟、村長右衛門二の宿所に聚來て、五蒲簀の錢、二皮籠の衣裳を、五疋の馬にうち駝して、大沼の畔にもてゆく程に、蕉火二行に導くもの、宰領のものありて、亂雜を制め、淸淨を旨として、犯し穢すことを許さず。

神ながらも立地に、罪なはん事最かたかり。願ふは老師俺與に、退治せよ、と宣へり。因て拙僧師命を稟て、這里に到來しつる事、今宵那沼の頭に赴き、終宵四下に心を屬て、癖者ありと見るならば、討滅さん爲ぞかし。這義をこゝろ得給ひね。といふに右衛門二駭呆れて、そは思ひがけもなき珍事にて候也。然らば大徳はその癖者を、法術もて退け給ふ歟、或は亦劍戟をもて撃平げ給ふ歟。と問ふを、丶大は聞あへず、拙僧法術ありといへども、かくのごとき癖者は、鐵砲をもて撃捕るべし。本邨に獵戸の、銃術に修煉して、心剛なるものあるや。と問復されてさゝ候。本邨の獵戸に、種平島平と喚做たる、兩個の獵夫あり。その心ざま勇悍くして、百發百中の手煆煉なり。他們を用ひ給はんや。といふに、丶大は頷きて、現その二人よかんめれ。今宵時刻に及びなば、各々は例のごとく、供物を大沼にもてゆきて、船に乘して退くこと、約二三町にして、路の樹間に伏躲れ、其首にて暗號を等給へ。もし鐵砲の音聞えて、丸响のしたらんには、大家はやく走り來て、縡の容子を觀給へかし。勿論心ざま虛弱にて、鬼胎を抱く嗚呼の者、或はその性躁しくて、事に忍ばぬ白徒は、今宵件の隊を省きて、但壯健なる莊客四五名、和主と俱に留りて、その宅のものは返すべし。事成るまでは推祕して、叨に人に知すべからず。この義を愼み給へかし。といへば右衛門二額をつきて、仰うけばり候ひぬ。慿稟さんは恐けれ

素より愚直の田舍兒の、還て洒家を欝悒く思ひて、惑ひはいよ〳〵醒ざるべし。要こそあれ、と肚裏に、尋思をしつゝ忽地に、その計決りければ、聞たる隨に村長の、宿所に赴き喚門て、執接の老僕にいふやう、愚僧は曩に村人に、大沼祭祀を敎給ひし、知雨老師の從弟にて、知風道人と喚るゝもの也。則師父の幹人として、一大事を告ん爲に、今宵猛可に來つるかし。主人に通達し給ひね。といふに老僕は胆を潰して、敬ふこと大かたならず。且く等せ給へとて、走りて奥へ退りけり。折から點燭時候也ければ、村長磐井右衛門二は、よしを聞て遽しく、奴婢們を召て客房へ、燭奴一脚ばかり出さして、布袴の紐結びもあへず、みづから門邊に出迎へ、ゝ大法師にうち對ひて、在下主人右衛門二也。誘這方へと先に立て、客房へ案内をす。登時ゝ大は草鞋を脫て、引れて上座に著しかば、右衛門二は額づき拜みて、老師の塵俗を忘れ給はで、御弟子を差されしこと、有がたきまで忝し。法體恙ましますや。願ふは慈敎の趣を、傳示させ給へかし。といふに、ゝ大は爪繰る數珠を、止めて法衣の袖搔合し、老師の法敎餘の義にあらず。曩に敎諭せしごとく、大沼の供物等閑なく、今宵は亦正月の、祭祀を執行せらるゝこと、感心尤淺からず。しかるに昨日沼の神の、俺師父に託宣あり。近會不思議の妖賊ありて、村人們の獻供物を、竊略ることしば〳〵なれば、いとうれはしく思へども、那獬者の術長たれば、

剩十五六なる少女子の、往方もしらずなりし事、兩三番に及びしかば、村人總て駭憂ひて、然らば那知雨老師の、教諭の如くせよやとて、錢を集め東西を整へ、大沼祭祀を剏しかば、爾後は女の子も亡せず。天もやうやく晴亘りて、秋に至りて半減の實入りあり。是よりして後年毎に、三度の供物を闕ことなく、けふは正月の祭禮日にて、今宵錢五十貫と、新衣十襲を、大沼にもてゆきて、船に乘して備る也。是等の東西は村長の、宿所へ集てものせらるれば、咱們は錢を出せしのみ、四鼓より戸鎖して就寢るかし。恁いふ情由で候へば、出家は決して留めがたし。外に宿を投め給ひね。這村にては益なし。と心長閑き田舍兒の、暮るゝも厭ぬ長物語に、ヽ大は呆れて烏滸しさを、然らぬさまにてうち頷き、所謂を听けば推辭るゝを、今さら無理とは思はぬ也。抑這里の村長刀禰の、姓名は何といふらん。宿所は何處に候ぞや。と問ば主人は眞實だちて、然也。這里の村長は、磐井右衞門二と喚れたる、宿所は畷を東へゆくこと、約は三町許にして、南に見ゆる衡門は、長刀禰の屋舖也。又只投宿の所望ならば、ゆき給ふとも益なきに、芝崎村まで急せ給へ。といふに、ヽ大は應をしつゝ、別を告て遽しく、走去りつゝおもふやう、那村人が云々と、説知したる大沼祭の、供物の事こそ信られね。そは必幻術に、長たるものが村人們を、哄して東西を奪ふならん。しかりとも是等の事を、明々地に諭しなば、

こそ候へ。神は只靈ありて、形なしと聞たるに、然しも凡夫のまゐらする、錢米衣を受收めて、什麽何にかし給ふらん、といへば老師は冷笑ひて、淺き凡夫の了簡には、恁思ふべき該ながら、件の神は貧民を、救せたまふ大慈悲あり。よりて凡夫のまゐらする、錢まれ米まれ受給ひて、自村他鄉の差別なく、貧者に授け給へど、人よくこれを知ることなし。こゝをもて汝達が、夏作秋作野菜の類を、おもふに倍て價貴く、賣て贏の多かること折々あるは、那神の授させ給ふ也。這義を査して疑ふことなく、村人心一致して、錢を出し米を裒め、三番の供物に懈怠なくば、五穀熟して病厄なく、繁昌他鄉に優るべし。但那神は外より來ぬる、法師と巫覡を忌給へば、一夕も留むべからず。又那供物はその月の、十五日と相定めて、夜亥の時に船に乘して、沼の中央に推遣らば、些も後を見かへらで、僉快走りて宿所に歸りて、ふたゝび門へも出べからず。當夜は家每に灯を點さで、門を鎖して謹慎るべし。祭祀は正五九月なれども、今玆は月に拘らで、這六月より興行して、正月五月二度の供物を、今番一度にまゐらせよ。等閑になな思ひそ、と神託がましく告諭えて、形は消てなかりけり。こは未曾有の奇事なれば、村人駭嘆せざるはなく、信ずるもあり信ぬもありて、狐狸の所爲にやあらん。不覺に怕れて妖されな、と罵るものも多かりければ、評議商量區々にて、三十餘日を過せしに、天一日も霽るゝことなく、

民を憐み給ふ、大誓願をはしませるを、汝達夢にも知らずして、靈なき鎭守の神をのみ、崇るゆゑに、故に懲る祟あり。今より愆を改めて、咱教に從はゞ、憂を轉して歡びとなさんこと、踵を旋すより速なるべし。懲ても惑ひ醒ずして、件の神を祭らずは、村人總て餓死に及ん。いと怕るべき事ならずや、と鼻蓋めかして示されければ、人僉听つゝ駭き怕れて、しからばいかなる祭祀をして、祟を鎭め候はん、と只管請問稟せしかば、老師の誨給ふやう、件の神の祭祀には、吹鼓舞踏る事などをすべからず。約莫年の正月には、永樂錢五十貫文を、分ちて五箇の蒲簀に斂め、新衣十襲を、分ちて二箇の皮籠に斂め、これを藻刈船にうち乘して、沼の中央に流すべし。夏は又畑物の、瓜茄子何くれとなく、初生を十箇の籠に斂めて、流すこと前のごとくせよ。秋は又新穀の精白米三十苞に、味噌醬油二十樽を相添て、流すこと前のごとくせよ。這祭禮は年に三番、供物に増減あることなく、正五九月に興行せば、縱鄰鄕の凶年なるも、本村は年每に、五穀登りて豐饒ならん。努々怠慢すべからず、と叮嚀に教給ふを、大家疑訝りて、仰うけばり候へども、然では村の東西沒多かり。勿論神の事なれば、供物の錢米衣などは、後に誰にか取すべき、と問ふを老師は聞あへず、愚なることをいふものかな。那神感納あるときは、供物は通てその夜の中に、何處ともなく喪る也、といふを大家又訝りて、そは不思議なる事に

身也。枉て一宿を曉させ給へ。と憑めば主人は澁々に、身を起して端近う、出て、大にうち對ひて、長老知ざる所あり。俺村は年毎に、東西の沒ること多かれば、村長より徇られて、法施宿をせざる也。といふを、大はうち听て、そは然る所以もありぬべし。然らば木賃で留給へ。素より頭陀の身にしあれば、路費多くはもたらねども、房錢は製度目の如く、人並にまゐらせん。恁ても承引給はずや。と問せも果ず家主は、頭を左右にうち掉て、否、房錢を賜るとも、出家を宿所に留るな。と掟られたる村長の、法度を今さら背きがたかり。快々出てゆき給へ。と固辭むを、大は又訝りて、そは亦甚麽なる所以なるぞ。と問へば主人は舌うち鳴らして、噫情剛し然ばかりに、疑れなば說示さん。框に尻をうち掛て、疑ひ霽しに聽ねかし。今より五六年前つ夏、當所に水損の患ひあり。本郷の大沼より、間なく時なく雲霧起りて、屢大雨を降せしかば、五穀登らず。竈より、蛙を生ずるまでになりたり。爾ば村人うち歎き、鎭守の神社に祈禱稟して、七日の神樂を獻り、鉦を鳴らし鼓を鳴らして、連りに請晴を催すものから、些も應驗なかりしに、一日行脚の法師あり。みづから知雨老師と名告て、村の家毎に誨るやう、今玆は鄰鄕豐年なるに、本村にのみ水損あるは、みづから招く孽にて、神の祟のあるを知らずや。抑本村なる大沼には、昔より暴神あり。なれども慈悲廣大にて、自村他鄕の差別なく、貧

をしたりけり。登時、大は思ふやう。豫の約束岩齟ひて、後住に寺を遞與せしに、那四犬士の還るを俟て、なほ本院に在んこと、今さら愛惜しつるに似て、影護き所あり。はやく當所を退きて、穂北に到りて四犬士を、俟こそよけれ。と尋思をしつゝ、却念戌と無我六に、那四犬士が歸來なば、猛可に入院を急れて、後住に寺を遞與せしかば、洒家は當所を退きて、穂北に到りて俟つゝ在らん、といひにき、と傳へよかし。這義を忘るべからず。と叮嚀にこゝろを得させ、後住の法師に別を告て、准備の頭陀袋を項に掛け、戒刀を懐にして、脚絆を穿、檜笠を戴き、錫杖を突鳴して、飄然として立去りけり。恁而、大は石禾を去りて、夜に宿り日に歩み、ゆくこと則一日ならず、武藏州豐島郡、麻生の郷に程遠からぬ、葵岡といふ一村落を過る折、春の日既に傾きて、下晡になりしかば、宿を請んと思ひつゝ、村人の門に立よりて、云々と呼内に、當所は村の法度にて、出家に宿を借さずといふ。こゝろ得がたく思へども、強て乞んはさすがにて、又その先なる家に到りて、云々と呼門に、這家にても承引ず。約莫かくの如くなること、五六軒に及びしとき、ゝ大はいよ〳〵訝りて、強顔く答て見かへりもせぬ、家主を喚かけて、老禿這村の家毎に、宿を投ること既にして、五六軒に及びしかど、推辭るゝこと皆異ならず。單身逆旅の故なる歟。凡俗ならば然もあらめ、洒家は出家の事にして、且抖藪行脚の

て、罪犯赦免の君恩に、答まつらんとこそ思ふなれ。去向の便り悪からねば、穗北の旅舍に立寄て、犬塚犬山二賢者に、面會して結城に到らん。各位もその折まで、逗留して拙僧と、倶に當所を立去り給へ。といふを莊介うち听て、しからんには一句あまり、暇ある身になりにたり。嚮に某道節と、本院にありし日は、幾程もなく他鄕へ走りて、簑生その宅の靈山靈地を、一箇所も登陟せず、犬江の小兒は神隱しにて、往方もしらずなりしといへば、某諸州を巡りし折、山に遇へば必登りて、那親兵衞を索ねたり。他恙もなく在るならば、今玆は九歲になりぬべし。爾るを殊に山多かる、這地の靈場名山を、漏さば遺憾しからん。後住の入院ある日まで、某們は當國の、高峰に登りて親兵衞を、索ねてはやくかへり來てん。犬飼犬田犬村生は、這義に從ひ給はんや。といへば現八小文吾大角、一議に及ばず皆點頭て、そは俺們も同意也。翌の旦開に立出て、二十日前後にかへり來つべし。さばれ大德は是等の事を、允させ給ふ歟、いかにぞや。と問へば、大は微笑て、そは左も右も隨意なるべし。快ゆきて快還り給へ。といふに大家歡びて、その詰旦、莊介現八、小文吾大角們の四犬士は、身裝して出る時、非如他山は漏すとも、先簑生へと去向を定めて、うち連立ていそぎけり。爾程に後住の入院の、下旬は障ること有とて、四犬士の出てゆきたる、次の日に議定せられて、才に中一日隔て、はやく入院

在りける程に、正月の十日可に、莊介と小文吾は、又信濃路よりかへり來にければ、迭の歡び驚くまでに、その宵は、大も團居に入りて、四犬士は各々來路を報げ、意衷を演て、孤燈の竭んとするをおぼえず。登時、大法師のいふやう、曩に拙僧本院に、權且寄宿しつる折、住持の老僧遷化して、寺を預るものもなく、且その遺囑の默止がたさに、憶ず這里に錫を住めて、似而非住持になりたるは、是已ことを得ざる所爲也。然るをやうやく讓るべき、後住の法師あるをもて、そが入院の日の近づきたり。いまだその日を卜めねども、下旬ならんと思ふ也。恁ればはやく寺を遞與して、拙僧は當所を辭し去り、結城の故戰場に赴きて、權且那首に住んと欲す。その故は、拙僧出家の初より、那八顆の靈玉の、往方を索極ん與に、抖擻行脚に二十餘年の、星霜を歷たれども、菩提の勤如意ならで、なほ塵中に在るに似たり。方儻しも八顆の玉の、往方を安定に知るよしありて、そを感得せし八犬士の、出世姓名遺もなく、聞知ることを得たりしかば、稍宿念を果すに足れり。そが內中なる犬江犬阪の、往方詳ならねども、時至らば索めずして、竟に來會することあらん。こゝをもて拙僧は、結城の故戰場に庵を締びて、義實朝臣のおん先考、里見大炊介季基朝臣、并に大塚匠作三戌、(信乃が祖父)、井丹三直秀、(信乃が外祖父)、這宅嘉吉に戰死したる、名將勇士勁卒の、菩提の爲に一百日の、大念佛を修行し

指月院の後住の事も、望むもののいで來にければ、ゝ大大德の歡び給ひて、來春は寺を遞與て、洒家は俺投かたへゆくべし。汝達は穗北より、路の便りの歹からねば、安房へ還りて照文に、七犬士の事を告よ。這宅の事は書中にありとて、蜑崎主へ與らせ給ふ、法輸を遞與されたり。是等の一議も候へば、おん囘輸を賜ふに及ばず。安房へ御要も候はゞ、承らん。といひけるを、信乃道節はうち听て、然ば亦俺們も、言傳を憑む也。時いまだ至らずして、守に拜見せざるをもて、蜑崎生へ書狀をおくらず。這義もこゝろ得給はるべし。と叮嚀に意衷を示して、二封の銀子を取せけり。恁りし程に夏行有種は、莊介毛野小文吾們の、事恁々と傳聞て、駭歎じ且歡びて、指月院より來つる雜兵に、飯を喫せ酒を飮して、牽出物さへ與へにければ、雜兵們は受歡びて、その夜を這里に曉しつゝ、辭して安房へぞ還りける。是により信乃道節は、現八と大角か、莊介小文吾を相伴て、かへり來る日を俟不樂て、噂をしつゝ彌る日の、今玆は爰に果敢なく暮て、明れば文明十五年の、春なほ寒き正月の、十日あまりになりにけり。話分兩頭。這時石禾の指月院には、現八大角寓居して、莊介小文吾を俟たるに、年は暮れ春立かへれど、那二犬士はかへり來ず。折から後住の老僧の、入院も既に近きにありとて、ゝ大法師に事多かれば、現八大角は身を措難て、且穗北へ還らん歟、恁ても這里にあるべき歟とて、思ひ難つゝ

の、佞臣們を撃し事、なほ又寃家縁連を、撃果さんと思ふにより、青柳の歇店にて、詩歌を遺して立去たる、事しも漏さず悉々と、丶大法師の説示せしを、聞たる隨に書つらねて、これにより犬川犬田は、毛野がうへも心もとなし。なほ又自餘の犬士を索ねて、遇ずとも這度は、快本院にかへり來てん。春まで過すべからず、といひつゝ出てゆきしかば、是年の暮には音信あらん。權且逗留し給へ、と、丶大法師の宣すれば、先このよしを消息して、報まゐらするもの也。と最も細しく寫たりければ、信乃道節は迭代に、讀つゝ倶に歡びて、悉れば非如遲くとも、明年の春までには、犬川犬田もかへり來て、四犬士這里に來會せん。然るときは毛野親兵衛の、二犬士も亦會よしありて、八犬終に具足せん。日を僂へて俟べきのみ。しかはあれどもいかなれば、俺黨は往ところとして、窮阨難義に遇さるものなく、就中小文吾は、相摸灘の破船、石濱の危難、越後片貝の大阨は、莊介と倶に萬死を出て、實に一生を得たる也。さるにても曳手單節は、いかになりけん不便なり。又那犬阪毛野とやらんは、智勇愉快の壯士也。單身にして大敵を、鏖にせしといふ、兵法武略泛々の、勇士の及ぶ所にあらず。なほ又殘る一個の仇を、索ん與に小文吾們に、從ざりしも思慮深き、胆勇獨歩といひつべき、得がたき俊傑なるかな。と嘆唱しつゝ件の雜兵を、召のぼし對面して、猶且縡の仔細を問ふに、那雜兵們が答ていふやう、

折、還て敵に駈惱されて、和殿們さへに難義に及べり。そを那儘に見かへらで、里見殿に仕へなば、始ありて終なく、做ことあるをせざる也。是大丈夫の所行ならんや。とは思へども今速に、寃家を撃んといふにはあらず、虛實を覘ひ時を俟て、折もあらば一箭射ん。時至らずは天なり命也。その期に思ひ絕んのみ。然まで劬勞にしたまふな。と答て再這義をいはず。信乃には隱して密々に、五十子に赴きて、城の虛實を覘ひけり。左右する程に、十一月の中氣になりつ。有一日甲斐の石禾なる指月院より、現八大角が脚力として、去歲の冬照文が那寺に遺し措たる、安房の雜兵、兩名、氷垣夏行の宿所に來て、現八大角が連署の狀を、取出て慥々と報しかば、信乃道節は遽しく、件の書翰を受拿て、使役を勞ひ留措て、退きてその書を見るに、現八と大角は、指月院に到著せし日、丶大法師に面謁して、信乃道節に再會したる、其身那身の來路を、遺もなく報知して、莊介の事を問稟せしに、犬川生は往る夏、六月の下浣、犬田小文吾と連立て、越路よりかへり來つれども、目今は寺内に在らず。その故は箇樣々々と、小文吾が事の顚末、犬阪毛野胤智の事、莊介小文吾が越後にて、萬死を出て一生を、得たりきといふ事の趣、毛野も亦同因果の、犬士たること分明にて、智字の玉と痣もある事、又毛野が石濱にて、親胞兄弟の仇なりける、馬加常武一家のものを、鏖にしたる事、又信濃にて千葉大石家




道節敵
城の

ならば、何をもて防ぐべき。是災害を遺すに庶し。和殿もしその意あらば、俺與に五十子の、城を折々覘ふて、虚實を知せ給はるべし。某も亦折々、那里へゆきて覘ん。這義に儘したまはずば、大義の念慮を轉して、猶又時を俟んのみ。といふに有種困じ果て、然までに思召すならば、今さらに力及ばず。俺身は思ひ止りて、那推客們に機密を傳ん。御心安くおぼされよ。と相譚果て退きけり。爾後又道節は、信乃に件の宿望を、箇様々々と告しかば、信乃は听つゝ頭を掉て、その義甚しかるべからず。曩に和殿は白井にて、君と父とを害したる、越杉竃門兩個の仇を、漏さず其首に撃捕て、復讐の義を果せしにあらずや。そを今ふたゝび思ひ起して、定正主を狙撃ん、と揣るは危き事なるべし。約軍陣の常態にて、討ことあれば撃るゝことあり。豐島煉馬の滅亡は、小をもて大に仕へず、寡をもて衆に敵したる、愆なるを爭何はせん。且和君は俺身と共に、里見殿に宿因ありて、安房へまゐりて仕ふべき、約束あるを忘れて歟。徒舊君の與にのみ、その身を殺すことあらば、忠なりとても義に錯へり。誰か感心するものあらん。なほ又三省し給へかし。と密やかに諫めしかば、道節心に歡ばず、沈吟ずること半晌許、頭を擡げ歎息して、和殿の意見もその理あり。俺いかにして里見殿の、恩遇を忘れんや。しかれども人として、始ありて終なくは、大丈夫とすべからず。曩に某白井にて、寃家定正を撃漏せし

五里に足らぬ程なれば、虚實を覘ふ事も易く、窺ふに便り亏からず。士兵百名借し給へ。他が外出を覘ふて、短兵急に責撃ば、宿望立地に成就せん。那大敵を討捕て、そを家裏に安房に赴き、里見殿に仕まつらば、世に恥ることなかるべし。這義を承引給はんや。と思ひ入つゝ相譚ひしを、有種所て異議に及ばず、且歡びて答るやう、盛なるかな忠義の魂。某なンどが今さらに、企及ぶ所にあらねど、幸ひにして用ひらるゝ、事しもあらば驥尾に附く、一臂の力を盡すべし。那定正は、俺亡君、豐島殿の與にも仇也。曩に白井にてありし事、君が武勇の風聲を、知ざるにあらねども、當時俺身は年もなほ、二十に足らぬ程にして、志も定らず、資るものもなかりしかば、復讐の事などは、及びがたしと思ひしのみ。今は進退一定して、事を行ふに便りあり。且豐島の殘兵の、某が迹を慕ふて、當日這里に聚合しもの、無慮八九十名あり。皆莊客になりたれども、軍陣に熟たるもの也。他們に機密を囁示して、復讐の日に從せん。他們も亦亡君の、怨を復すよしを聞かば、咸歡びて從ふべし。某も亦親に告て、倶に定正を一箭射ん。這義を允させ給へかし。といふを道節推禁めて、そは決して無用也。和殿は人の後となりて、妻子あり養父は老たり。倘本意を得遂ずして、敵の爲に戰歿せば、歎きを遺すのみならで、養家の與には不義とならん。縱本意を遂るとも、その事後に敵に知られて、大軍這里へ寄來る

笠と、雨衣をのみ携て、急ぐを送る夏行有種、信乃道節も河原まで、出て袂を分ちけり。是より先に夏行は、幹浄たる小室を、四犬士の出居と定めて、東西不自由なく是を賄ひ、三たびの饌も等閑なく、その間には果子を薦め、酒を薦る折々には、有種を侍らしつ、その身も倶に武を講じ、兵を論じて慰めたる、その用意親切にて、貳ごころなく見えしかば、道節竊に歡びて、一日側に人なき折、有種に聶くやう、傳聞れし事しもある歟。曩に某上毛なる、白井の城の郊外にて、寃家扇谷定正に、欺詐寓りつ組伏て、刺殺して首級を捕りしに、敵にも逆用心ありて、そは眞の定正ならず、池袋の戰ひに、俺君煉馬殿に鎗を鐫たる、扇谷の家臣にて、越杉駄一郎遠安、と喚做もので有ける也。這折に父の仇なる、竈門三寶平を撃しかど、いまだ宿志を果すに足らず。剩敵の謀臣、巨田助友に謀られて、荒芽山の危難あり。俺のみならで犬塚犬川、犬飼犬田も敵に當りて、四零八落になりしより、今なほ全く聚らず。且猪平の世四郎と、その妻音音は戰歿しけん、曳手單節もいかにかなりし、生死存亡詳ならず。實に君父の讐敵なる、那定正を討漏して、怨に年を累れども、大敵なれば又さらに、狙ひ撃つ便りもなく、過世ありける義兄弟に、環りあふて後にこそ、と思ひ、おもはず立ことはやき、光陰五稔を過したり。しかるに今番料らずも、貴宅に寓居するのみならで、扇谷定正は、五十子の城に在と聞にき。四

う、去歳の冬某們が、石禾の指月院を立去りし折、蜑崎十一郎照文に從ひ來たる、雜兵一兩名を留め措れて、事ある折は相告げよ、と約束をせられしかども、一たび那處を去りしより、いまだ莊介に環りも會ず。且某們は國の守、武田殿の招きに應ぜず。然るを今さら立かへりて、那道場に到らんことは、影護き所あり。這里より脚力を遣して、莊介が那寺に、還りて處るや否を訪ふべく、幷に今番和君們と、環會ひたる趣を、ゝ大法師に報まく欲す。這義をこゝろ得給へかし。といふを現八大角は、つら〳〵とうち听て、その義尤宜からん。然とても人を央ふて、甲斐へ遣すまでもあらず。某們うち連立て、指月院に赴くべし。然すれば文署の煩ひなく、ゝ大法師に對面して、委曲を演るに便よし。且犬川がかへり來て、那處に在らば伴ふて、速にかへり來てん。いまだ那處にあらずといはゞ、時宜により逗留して、歸來ぬるを俟べきなり。這義に儘し給はずや。といふに信乃道節は歡ぶこと大かたならず、和君們那處に赴き給はば、百書翰にも彌倍て、意を盡んこと自由なるべし。進退隨意し給へ。と相譚果て却恁々と、夏行有種に告しかば、夏行們はよしを聞て、しからば伴當をまゐらせん。倶して首途し給へ。といひしを現八大角は、共に推辭て從はず、伴當ありては煩し、程なくかへり來つべしとて、その詰且別を告て、甲斐路を投て出てゆく。旅に熟たる壯士の、行裝も繕はず、舊の儘なる菅

給ひねかし。と報る詞の不樂しげなるを、信乃は听つゝ慰めて、その事も亦理義に稱へり。誰か歹しとおもふべき。異邦なる聖と聞えし、禹が洪水を理めし折、六七稔歷る隨に、己が家の頭を過れど、立寄らざりきといふ事あるは、臣たる道を盡せばなり。犬村生はいまだ仕へず。只同因果の友あり、と聞得て索巡れるのみ。進退不定の旅なれば、非如然る意味あらずとも、幾番故鄉へ立寄ればとて、忌むこと一切なかるべし。且犬山を初として、犬飼犬川俺身まで、皆故ありて舊里へ、立寄ることを得ざるもの也。然ば年來二親の、墓に詣ること克はず。只うち歎くのみなるに、犬村生は異にして、所親に置酒して別を告げ、公然として舊里を、愛たく立去り給ひしは、最羨しき事也き。といふに道節現八も、寔に然也と應つゝ、信乃が評語に身を不樂て、且大角の人と爲り、溫順にして孝義に厚きを、亦得がたしとぞ思ひける。

第八十六回

道節再復讐を謀る
大巧に妖賊を滅す

復說。信乃道節現八大角は、主人夏行有種が、留ることの懇切なれば、憶ず這里に日を彌りて、秋は過ぎ冬もはや、十月の中澣になりけり。恁而有一日信乃道節は、現八大角に對ひていふや

問んとて、又現八と共侶に、良這地まで來つる事、頭より尾まで、現八これを談ずれば、大角も亦語を續ぎて、閑談に日の暮るゝを覺ず。說果て大角は、護身嚢に藏めたる、那禮字の玉を取出て、信乃道節にこれを見せ、又衣領を推開きて、左のかたなる乳の下より、腋の邊に及びたる、痣さへ這折見せしかば、信乃道節は聞見る每に、共に感嘆の聲を斷ず。那折の勢を、粤に倩想像れば、現八の義勇、大角の純孝、雛衣の苦節はさら也、那山猫の事までも、皆未曾有の珍說にて、憐むべく哀むべく、驚くべく歡ぶべき、事情の然ぞありけんを、又今さらに見る心地して、節を拍つゝ稱へけり。當下大角又いふやう、某が犬飼と倶に舊里に立寄りしは、世になき妻をおもひ續けて、女々しく故鄕を慕ひけん、勇士の本意にあらずとて、笑ひ給ふ歟知ねども、那雛衣は某が、養家の獨女にて、養父は小父也、師匠なり。然るを亡妻雛衣は、俺身の與に刃に伏して、仇を仆せし大功あり。且某は其比まで、父の非命に終りしを、知らで變化に仕へてありしに、犬飼主の好意にて、父の仇たる妖怪を、擊捕ることを得たれども、是すら孝とするに足らず。况養父の洪恩德義に、報ひもせず義もあらで、そが莊園すら護らねば、心に恥ること多かり。切ては妻の三回忌に、故鄕に還りて菩提を弔はゞ、養家の與に萬一の、恩義に答るよすがにならん、と思ひとりつゝ犬飼主と、計りて形のごとくにしたり。這意を查し

を潰して、左にも右にも俺黨は、里見殿に宿因あること、いよ〳〵符節を合する如く、犬山生の女弟と聞えし、犬塚生と合巹の、約束を得遂ざりける、濱路亡女と五の君と、同名なるも亦奇なり。就て某們がうへはしも、箇樣々々の事ありきとて、迭代に說示す。現八は五稔已前、荒芽山にて危難の折、敵の重圍を殺脫て、獨四犬士を索ねし事、この比行德に赴きて、小文吾を訪けるに、他は故鄉にかへり來ず。曳手單節の往方すら、竟に知るよしなかりし事、京師に赴き旅宿して、一稔あまり在りし事、爾後又岐岨路より、下野に赴く折、荒芽山に立寄りし事、網緒の茶店鵙平の事、庚申山の奇異恠談、赤岩一角武遠の、寃魂の誨によりて、返璧なる柴門を、敲きて犬村角太郎にあひし事、假一角、牙二郎們の事、毒婦船虫、籠山逸東太緣連の事、又現八が赤岩の試撃、角太郎夫婦の窮阨、烈女雛衣が自殺により、禮字の神玉仇を倒して、よくその良人の危窮を拯ひ、且現八が豫て謀りて、角太郎の淺傷の鮮血を、親の髑髏に沃ぎしかば、親子の證据揭焉、角太郎の惑ひ醒め、妖怪越に發覺て、角太郎に擊れし事、是よりして角太郎は、字を大角と改めて、家を售り故鄉を離れ、自餘の犬士に遇んとて、現八と共侶に、偏歷二稔に及びしに、一犬士にだも遇ざりければ、權且故鄉に立かへりて、二親の墓に詣、幷に亡妻雛衣の、三回忌辰に、佛事を執行し、更に行德に赴きて、小文吾は今もなほ、在や不や

の窮難より、犬川荘介と共侶に、四國九州の盡處までも、徧歴既に四稔に及びし、去歳は甲斐の石禾なる、丶大法師の寺院に宿して、丶大幷に照文に、名告あひし事の趣、爾後犬川荘介は、自餘の犬士を復索んとて、石禾を首途したる事、この冬信乃が窮阨を、道節謀りて拯ひし事、四六城木工作、并に里見の五の君濱路姫の事、淫婦夏引、泡雪奈四郎、その僕媼内嫐内們の事、甲斐の國守武田氏の、信乃道節に對面の事、これにより信乃道節は、武田氏招待の、催あるを聞知りて、十一月の下浣、蜑崎照文們と共侶に、濱路姫に俱しまゐらせて、はやく石禾を立去て、武藏下總の封彊なる、墨田河に來ぬる道中、四谷の原にて那奈四郎は、惡僕媼内に傷つけられ、信乃は料らず奈四郎を、撃果して姫のおん輿に、四六城木工作の怨を復せし事、この日蜑崎照文は、濱路姫に從ひまつりて、河を渡して安房へ赴き、信乃道節は荘介を、索ねて甲斐に在らずなりにし、縡の由を告んとて、豫て約束の國郡を、那這とうち巡りしに、何處にゆきけんいまだ得あはず、今玆は奥の會津より、白河を經て下野なる、奈須二荒山、いへばさら也、投かた空になりしより、甲斐が峯近く立かへり、丶大法師に消息して、荘介が歸來ぬるや、否を問んと思ひつゝ、遂に這里まで來ぬるといふ、憂苦艱難瑰奇も多かる、過にし事の物かたらひに、現八と大角は、耳を側て嘆唱しつゝ、听くこと約莫一晌許、就中濱路姫の、一大奇事に胸

ありし事、萬死を出て一生を得たりしも、又現八大角が、赤岩返璧の大厄難も、皆是那姬上の、影に立形に添ふて、護らせ給ひし冥助ならんを、神ならぬ身のけふまでも、悟らで空に過したり。許させたまへ。と各々、念じて霎時合掌の、手を解きて却夏行們に、那物語に及びしかば、夏行有種、いへばさら也、重戸も膝の找むを覺ず、いよ〳〵驚きます〳〵感じて、里見殿の姬上の、神靈應驗灼然なるすら、世に有がたき奇事なるに、各位の幾番か、危窮の厄にあひながら、その志移らずして、年を歷るまで友同士の、所在を索給ふこと、亦是得がたき義士也けり。凡眼珠玉と魚目を辨ぜず。越に昨の非をおもへば、霎時也とも賊をもて、論ぜしことの悔しさよ。願ふは一年三箇月、杖を駐めてなほ寬やかに、誨給へ。と叮嚀に、勸解て終日相譚けり。恁而饗饌果しかば、四犬士はその次の日に、別を告て去んとせしを、夏行有種推禁めて、などて強顏く速に、出てゆかんと宣ふぞ。亦復自餘の犬士の所在を、索巡らんとおもほすとも、限り知られぬ旅なるに、權且這里にをはせかし。緣だに竭ずは居ながらに、再會の時なからずやは。やうやく冬に赴けば、雪を犯し霜を踏て、遙けき路をゆかんより、春まで逗留し給はずや。急ぐは要なきことなるべし。と詞を盡して放さねば、四犬士は已ことを得ず、遂にその意に儘しけり。是より後犬士們は、人の側にをらぬ折、過去方を迭に報るに、道節は五箇年前、荒芽山

なほ聴れずば便直をもて、他們を放遣りねかし。恁計らはゞ憂を轉して、歡びと做す福ひあらん。然るを惑ふて共に狐疑せば、福還て禍と、なること瞬く間にして、親も良人も非命に死ん。努謹めよ、忘るな。と妙音高く示し給ふ、とおもへば夢は覺侍り。覺ての後も胸轟き、宍動きて平ならねば、いと怪しくも惶さに、心に祕てありけるに、果してきのふ盗兒を、穿鑿の事猛に起りて、旅ゆく兩個の刀禰達の、這里に囚れ給ひしかば、原來正夢也けり、と心に悟りて霎時もあらず、性起らせ給ひしおん身を諌て、詞を盡し侍りしかども、泡沫夢幻と世にもいふ、果敢なき事を告稟さば、只叱らるゝのみにして、いよゝ聴れずなりぬべし。いはぬはいふに優ることあらん、と思へばいはで見し夢に、神の敎に儘してぞ、示現に違はぬ昨宵の事、けふの圓坐も皆是神の、神謨にてありけるものを、知らでをはせば倒に、奴を賢女よ才女よ、と宣はするこそ恥しけれ。といふに驚く夏行有種、原來然るよしありける歟。奇也々々。と感歎の、聲より先に四犬士は、思はず目と目をあはしつゝ、倶に悟りてその意を隱さず。正に是伏姫上の、神靈擁護に疑ひなしとて、則夏行有種重戸に、那姫上の事の顚末、箇樣々々と說示して、伏姫上は俺們が、過世の母にてましませば、恁る靈驗ありつらめ。今さら思へば犬塚が、滸我と行德、猿石の窮阨、又犬川が大塚にて、軍木簸上に誣られたる、又道節們五犬士の、荒芽山にて

といへば重戸は額をつきて、淺き女子の計ひも、棄させ給はぬ刀禰達の、海成す御心廣ければ、怨を解きて風波の、立ずなりにしけふの圓坐は、千金にこそ侍るめれ。素より田舍の事なれば、款待態の疎にて、まゐらする東西も侍らねど、父も丈夫も日を經るまでに、只おん宿をせまくほし、と稟すより外は侍らずかし。といふをうち聞く信乃道節も、共に名を告り對面して、きのふの計ひを譽めしかば、夏行は笑しげに、女兒を身邊に侍らして、重戸听ね、賓客達が、儞は人を知る才ありとて、太く譽させ給ひしかども、親ながら年來日屬、儞が然までに眼力の、あるべうは思はぬ也。そを那褊衫の片袖の、明證あるすら退けて、犬村犬飼二君子を、那賊ならずと鑒定めしは、故ある事歟、いかにぞや。と問れて重戸は羞白みたる、頭を擡げ衣領搔撫て、おん疑ひは理り也。奴なりとて初より、那人さまの賊ならぬを、知るべうは侍らねど、隔昨日の曉に、いと美しき神女の、枕方に立せ給ひて、奴を喚て宣ふやう、翌未申の比及に、箇樣箇樣の旅客二名、儞の親に疑れて、脫得がたき大厄あらん。他們は決して歹人ならず、俺與に過世ある、志氣潔白の義士にして、そが義を結びて弟兄たるもの、他們と共に八名あり。這們が厄難ある折每に、俺影に立形に添ふて、救ざることなかりしかども、おもふに翌の厄難は、疑似の一種あるをもて、そを解んことといとかたかり。儞先よく這意を得て、面を犯し親を諫めて、

らじと思はれしは、勉て仁を做せしにあらず、是その苦計は他人の與にて、意は親と良人の與也。恁れば他人に厚くして、親には薄しといふべからず。その做す所公ならねば、親に叛くに似たれども、よくその親の愆を、補ふ旨は是孝也。孝あり義ある、慈悲廣大の、誠を以て二犬士を、放遣り給ひしかば、犬村犬飼某們まで、恩を感じ德を喜して、主人を害する心なく、恥を雪めしのみなりしは、則賢女の致す所、天鑒虛しからざるにあらずや。善には善の報ひあり。惡には惡の報ひあり。宋襄の仁、微生の信と、日を同くして語るべからず。然は思はずや。と徐やかに、理義を演たる討論に、道節耳を傾けて、現いはるればその理あり。愚論は思ひの足らざりき。氷垣主人、某が、醉語を意に掛給ふな。と陪語つゝ呵々とうち笑へば、現八も大角も、信乃が議論を喜したる、そが中に夏行は、听果て貌を改め、信乃道節にうち對ひて、犬山主の宏論は、うち聞く所分明にて、このうへあらじ、と思ひしに、犬塚主はうち超て、道理を罄し給ひぬる、妙論は耳新にて、佗と老學になりぬべし。實に感服つかまつりぬ。と稱て亦復四犬士に、盃を薦めけり。浩處に主人の女兒、重戸は衣裳を更めて、良人に引れてやうやくに、客房に出て來にければ、現八大角は遽しく、席を避け相迎へて、こは落鮎生の御內室、良善の御志念屆きて、某們幸ひに老大人御親子と、友垣を結ぶこと、皆是賢婦人の貺なり。最歡しく候。

の、是及ばざる所也。知りたる故に親に隱して、放遣り給ひしは、寃屈の與に人を殺して、後の祟のあらせじ、と思ひ給ひし誠心にて、是も亦世の人の、及ざる所也。然ども昨宵和殿親子の、犬飼犬村を趕蒐て、千住河原に來給ひし折、犬飼犬村某們まで、只邪怨を復さんとて、和殿親子を許ことなく、從類までも屠りなば、是令愛の慈悲善行は、還てその身の仇にして、親を損ひ良人を害する、愆となるを爭何はせん。かゝる故に知命者は、仁も亦做すこと勿れ。好事もなきに如ずといへり。現仁を做さんと欲して、危殃にあふものあり。宋襄の敗軍、微生の橋梁、仁を行ひ信を守れど、その機變を知ざる故に、遂に身を殺す禍あり。好事は吉事善事也。よき事なければ、歹事なし。仁を做さんと欲するより、不仁を做さじと愼むに如ず。好事あれと願んより、歹事なきには如ず。仁もなく不仁もなく、好事もなく歹事も、なきを名づけて無爲といふ。這義によりて蘇東坡も、無事は靜坐といへる也。愆りけれども犬飼犬村、及某們に至るまで、和殿を害する心なく、怨讐還て知己となりて、歡びを盡すこと、主も客も幸ひに、免れたるにあらずや。と膝拍鳴して論ずるを、信乃は急に推禁めて、犬山和殿の辯論は、是刑名家の旨にして、今戰國の人意には、さしもあふべきことながら、俺おもふよしは然らず。昨主人の令愛の、科なき者を愆て、殺さば遂に祟を稟て、親はさらなり子孫の與にも、宜しか

然ば現八大角は、這折をもて夏行に、重戸が人を知る才ありて、囹圄の内に拯出せし、德を稱へ恩を感じて、いかで一たび面前に、這歡びを演まく欲す。餘之七主も共侶に、宜く傳へ給はるべし。と憑めば夏行含笑て、犬飼犬村二君子の、拙女を褒美は分に過たり。勿論他は貞實にて、親に不孝の行ひなく、良人に不遜の事もあらず。母親の世を去りしより、只よく內を理るのみ。這地の字を操野と、喚做す甲斐のあるに似たれど、何でふよく虛實を辨じて、人を知るの才あらんや。然るを昨日は他一人、犬飼犬村二君子を、那賊ならずと鑒定て、某を諫めしに、聽るべうもあらざりければ、謀りて落しまゐらせし、その智慧も亦廣大にて、日屬に十倍したりけり。故ある事歟、こゝろ得がたし。といへば有種眞實立て、そは左まれ右もあれ、重戸を這里へ參らせん。姑く等せ給ひね。といひつゝ奥へ退りけり。そを俟程に道節は、夏行にうち對ひて、令愛の慈善賢明、犬飼犬村の拯れたる、那件の趣は、その崖略を聞知りたり。多く得がたき善巧方便、人僉感佩せざるはなし。しかれども今試に、その可否を論ぜんには、聊破隙なきにあらず。坐輿に這義をいふべき歟。といへば夏行うち笑て、そは何事歟知らねども、願ふは敎給へかし。と應て膝を找るにぞ、道節扇を笏に把て、憖いはゞ善を喜せで、猶且人に備らん、ことを求るに似たれども、令愛の初より、犬村犬飼の賊ならぬを、知り給ひしは世の人


夏行有種
四犬士を
款待を
信乃
現八
大角


道節

四犬士は夏行の、決斷に凝滯なく、且神速の計ひを、老功ありとぞ思ひたる。事果て夏行有種は、四犬士に相倶して、穗北へ歸ゆく程に、三十餘名の從類は、夏行有種の鎗を携へ、或は船篙を拿抗て、鋑叉ともろ共に、一膝にして荷擔ふもあり、又續松を秉もありて、先に立後に跟き、陸續として從ひけり。恁而這宵の更闌て、信乃道節現八大角は、氷垣親子に伴れて、穗北の宿所に來にければ、家僕們玄關に出迎て。客房に案内をす。欵待態大かたならず。且して夏行有種は、衣裳を更め出て來て、准備の夜飯を四犬士に、羞めなどせし程に、はや曉になりしかば、客も主も翌と契りて、辭して枕に就にけり。却詰朝夏行は、莊客們に吩咐て、那賊船を破却させ、這日宿所に酒宴を儲て、四犬士を管待たる、野蔬海錯數を盡して、田舍に稀なる調理なりしを、四犬士は相稱へて、盃を受巡らしけり。この時世智介小才二は、手足の撲傷まだ瘥らねど、四犬士の綷の趣を、傳聞つゝ駭怕れて、有種に就きて、現八大角に、昨日の無禮を陪話しかば、現八と大角は、今さらに烏滸しく思ひて、いかでかは爾ることあらん。這方へ召せ給へとて、世智介と小才二を、席末に招きよせて、その痛所を問慰め、介意なからん爲にとて、共に盃を取せにければ、世智介小才二歡び稟て、初て安心せしといふ。信乃道節も是等の情由を、こゝに初て聞知りて、那計略を譽めしかば、大家哄と笑ひ興じて、隔もあらずなりにけり。

せざれど、是も亦犬飼に、伯仲すべき武藝也。且俺們七犬士は、感得の靈玉あるを、各々懐に藏めたり。是等の故歟。と説諭せば、夏行と有種は、亦復驚き感服して、原來諸君は尋常なる、勇士にはあらざりけり。既にはや夜は深たり。宿所へ伴ひまゐらせん。といひつゝ衆僕を見かへりて、若們は三四名、はやく宿所へかへりゆきて、听つるよしを重戸に報て、賓客儲をせよといひね。快々ゆきね。と急せば、承りぬ。と壯佼們、はや三四名身を起して、穂北を投て走りけり。登時現八大角は、又夏行にうち對ひて、義兄弟の資助によりて、生拘られたる這二賊は、地方の法度もあるべきに、和殿の隨意計ひ給へ。といへば夏行異議もなく、貴教の趣承りぬ。地方に稀なる兇賊を、輒く搦捕られしは、是四君子の武徳に憑る。俺三郷の幸のみならず、患を鋤き害を除く、隣郡までの慶祥ならん。此の如き草賊は、速に首を刎て彼此人に示すべし。權且等せ給ひね。と應て軈て有種にも、こゝろ得さしつ、共侶に、河太郎野良平にうち對ひ罪を責て、倶に刀を抜閃めかす。有種は河太郎が、首を礮と撃落せば、夏行は野良平が、首を刎て刃を斂め、却得手吉に分付て、船の板子を拿寄せて、腰なる墨斗の筆をもて、板子の背へ恁々と、二賊の罪過を記著て、又壯佼們を召よせて、箇樣々々と分付れば、壯佼們はこゝろ得て、二箇の首級を水際なる、樹枝に梟並べて、板子の札はその樹の幹へ、索もて括著にけり。

したりしに、姉夫大塚蟇六の、奸曲不義を忌よしありて、大塚の大の字に、一點を加えたり。他姓を冒したるにあらず。是より俺身に及ぶまで、犬塚をもて家號とす。緈偶然に出るといへども、是宿因の致す所、いひ易からぬ縁故あり。某甲斐に旅宿せし折、外戚に舊縁ありける、四六城木工作と喚做すものに、名告あふことを得たりしに、今又こゝに大父の舊友、氷垣の翁に値偶せしは、思ひがけなき幸ひにて、見ぬ世の事も聞まほし。感悦この義に候。といふに歡ぶ夏行有種、某們は衣食足て、這地に年を歷たるのみ。させる親類なきものなるに、犬塚犬山二君子に、舊故を辱うせるうへは、犬飼犬村自餘の諸君も、介意なからんことをこそ、願しく候なれ。懲いはゞ身の程を、思はざるに似たれども、某們も武藝を嗜みて、強敵にあふといへども、後れを取ることなかりしに、今宵犬村犬飼の、二君子を刺んとせし折、その胸前より忽然と、光を放ち眼を射て、衝出す鎗の狂ひしかば、些も捷を攬ること得ならず、大刀すら拔ぬ二君の爲に、組伏られ候ひしは、武藝力量その差ありて、勝負分明なるものから、故ある事歟。然るにても、こゝろ得がたく候。と疑惑ひとしく問けるを、信乃道節は慰めて、某們がうち見し所、今宵和殿們親子の武藝の、疎なりしにあらねども、犬飼は二階松の高弟にして、緝捕には、敵なしと稱せらる。犬村生の修煉の程は、今宵初て見つるのみ。いまだその師を詳に

獨遺されて這地に在りしを、娶りて女兒を產せしのみ、不幸にして男兒あらず。妻は近屬身まかりにき。爾程に豐島の落人、落鮎餘之七有種は、亡妻の侄にして、武勇の壯佼なるをもて、舍藏措くこと兩三年。その行狀を試たるに、心ざま勇悍くして、人の尻馬に乘るものならず、よく耕農を奬して、資助になること尠からねば、女壻養嗣にしたりしに、又那豐島の落人們が、有種のうへを傳聞て、身を寓せ庇に立まくせしもの、八九十名に及びしかば、又厶們にも田地を取せて、繁昌都會に劣らずなりにき。恁れば某が結城を落て、穗北氏に寓居せしより、今に至りて四十二年。恁而三鄕の長に做りしより、十四年を歷たる也。と報れば現八道節は、倶に掌をうち鳴らして、これも亦一奇偶也。氷垣老人いまだ知らずや。俺這兄弟犬塚生は、和殿が共に結城にて、城の一方を戍りにき、といはれたる、大塚匠作三戍の爲には嫡孫、その嗣犬塚番作一戍の、獨子で候ぞや。といふに夏行胆を潰して、原來亦是舊緣あり。嘉吉に結城籠城の比、某年尙弱かりければ、匠作主に指南せられて、師弟のおもひを做したりけるに、那人は戰歿して、忠誠武名を世に知られ、某は存命て、田舍翁と做りし事、識者の爲には羞ること多かり。犬塚主は何等の故に、爹々公の時より家系を捐て、他姓を冒し給ひたる。と問れて信乃は愀然と、目をしばたゝき嗟嘆して、その疑ひはあるべき事也。父番作は多病によりて、故鄕に退隱

る。いと憑しく候。とその歡びを舒るにぞ、信乃現八大角も、共侶に稱賛して、怨讐還て知己となる、世は塞翁が馬也けり。寔に愛たし、めでたし。と齊一奇偶を祝しけり。且して現八は、又夏行にうち對ひて、嚮に衆人のいへれば知りぬ。和殿は這頭三郷を、開發の功あるにあらずや。この義も聞まくほしけれ。と問れて夏行、さゝ候。某原は丹治黨にて、弱冠の比、鎌倉の管領持氏朝臣に仕へたり。爾れば持氏御滅亡の後、春王安王兩公達のおん與に、結城の城に盾籠りて、武藏の人氏大塚匠作三戍と共侶に、城の一方を戍りしに、公達御武運開かせ給はず、諸將の防禦畫餅となりて、落城に及びし日、某は憖に、寄隊の圍を殺脱て、遠く這地に落留り、地頭穗北氏に身を寓せて、做す事もなくありけるに、結城にて某が、隊に隷たる士卒百名許、某が迹を慕ふて、倶に這地に聚合たり。當時穗北梅田柳原の三郷は、年來の兵火に荒れて、一歩を耕すものもなく、農商離散したりしかば、地頭も棄て見かへらず。妻子眷屬を携て、愁訴の爲京師に赴き、室町殿に仕たりしに、應仁の亂により、戰死しつ、と聞えしのみ、その妻子だもかへり來ざれば、這地はいよ〳〵草野になりたり。當日某落人們に、力田を薦め地を闢して、倶に心力を盡せしに、年に水旱の患なく、利を得ることの大かたならねば、人咸某を德として、推て三郷の長とせり。是より先に某は、舊地頭穗北氏の從弟女の、

す一箇の俊傑なり。なほ這外に犬田犬江の、二犬士と倶に七名、忠信孝義も伯仲す。優劣のなきもの也。と報ればいよ〳〵驚き感ずる夏行は恭しく、道節にうち對ひて、犬山賢君某が、女壻有種は煉馬の舍兄、豐島刑部左衞門尉信盛主に仕へたる、ものにこそ候なれ。といへば亦有種も道節にうち對ひて、烏滸がましく候へども、某が父落鮎岩水員種と喚れしもの、則豐島の家臣也。二親はやく世を去ければ、某も亦總角より、信盛主に使れて、童扈從で候ひしに、豐島の一族滅亡の折、愁に撃漏されて、身を措く所なかりしに、養父氷垣殘三の妻は、某が爲に伯母なりければ、竊に這地に落留りて、そが女兒を妻せられ、義父と稱へ、義子と喚れて、今日に及べる也。爾るに和君は豐島の一族、煉馬の舊臣にてをはせしを、こゝに初て教諭せられて、懷舊の情大かたならず。先考犬山道策大人は、江五田池袋の戰ひに、比類なき挊きして、陣死をし給ひたる、その絆の趣も、傳聞久しくなりぬれども、故にし事を相譚ん、詞敵もなかりしに、君家の與に舊緣をはせし、賢者に因を結ぶこと、這身の光を增すに似たり。今より諸君に事あらば、一臂の力を盡しまつらん。おん目を給はり候へかし。と肝胆を吐、素生を演て、世に隔なく聞えしかば、道節も亦怡悦に勝ず。這年來義兄弟を、索て諸國を偏歷りしに、豐島煉馬の殘黨には、名告あふことあらざりしに、憶ず和殿の素生を聞て、故人に遇ぬる心地ぞす

も有種も、いよ〳〵羞て左右なく取らず。共侶に跪きて、某們幸に、寛仁大度の意を示されて、首を續し給はること、是再生の洪恩也。さるにても四君子は、素是何州の豪傑ぞ。願ふは本貫高姓を、具に知らし給へかし。子孫に傳へて後の世まで、永く武徳を仰ぐべし。いかで名告らせ給ひね。と請求ること兩三度、眞實歸伏の心操、亦他事もなく聞えしかば、歡びおもふ現八大角、倶に莞爾とうち笑て、適愛たき懺悔の誠心、愆を知るものは、誰もかくこそあるべけれ。身不肖なれども犬士の一人、某は下野なる赤岩の人氏にて、義に仗て故郷を去たる、犬村大角禮儀也。と名告れば亦現八も、俺は下總許我の退糧人、犬飼現八信道也。と告りつゝ傍を見かへれば、信乃道節も共侶に、武藏豐島の大塚人、犬塚信乃戌孝、同國煉馬平左衛門倍盛主の殘黨に、然るものありと知られたる、犬山道節忠與也。過世に結びし義兄弟、なほこの外に三名あり。相別れしより往方を知らねば、年來諸國を巡りし甲斐に、今宵料らず犬飼犬村、二兄弟に環あふことをしこゝに得たる也。と名告るをうち聞く夏行有種、驚きながら目を合して、原來五六年前つ比、這頭に風聲隱れなかりし、那大塚より程近かる、庚申塚の法場を、思の隨に閙して、同盟寃枉の罪人を、拯拿にきと聞えたる、犬士とやらんにをはする歟。と問へば信乃現八は、共に含笑頷きて、問るゝ如く俺們が、拯拿たる義兄弟は、犬川荘介義任と、喚做

行ならずや。恁ても先非を悔ずして、いふよしある歟甚麽ぞや。と詞徐に責問れたる夏行と有種は、いよ〳〵羞て今さらに、後悔の外なかりける、そが中に夏行は、嗟嘆に堪ず蕭然と、四犬士を見かへりて、某暗愚の思慮足らで、女兒重戸の意見を用ひず、漫に二君子を寃げたる、その罪實に萬死に當れり。非如目今この儘に、縛頸を撃るゝとも、自業自得に候へば怨はあらず。しかはあれど、重戸が忠恕惻隱の、心に顧て壻有種を、許し給はゞ身後の幸ひ、冥府も後安かるべし。這義を海容あれかし。と憑むを有種推禁めて、そは亦思ひがけなきこと也。諸君願ふは听給へ。某は初より、二君の囚れ給ひしを知ず。那盗兒們を趕離て、日暮て宿所にかへりし折、養父が二君逐電の、縡の顚末箇樣々々と、報るによりて共侶に、這里へ趕蒐來つる也。虛實を糾すに暇もなかりし、縡倉卒に起るといへども、倶に惴りし這身の不覺、罪を免るゝ所なし。只某が首を刎て、親を許させ給ひね。と喞語がましき孝烈慈愛に、死を爭ふて已ざりしを、四犬士齊一感じたる、中に大角現八は、歎賞しつゝ左見右見て、氷垣老人落鮎生、嚮にいひしを聞ざる歟。俺們素より害心なし。過て改るに憚ることなかれとある、聖教を思はずや。先非を悟りし怠狀の趣を聞からは、俺們も亦怨なし。今さら死活を論ぜんや。と詞等く慰めて、夏行と有種に、被たる索を解捨て、分捕したる兩刀を、誘とて返し與るにぞ、夏行

角の、身邊に找み近著て、縲められたる兩個の賊を、左さま右さま得と見て、刀禰さま嚮に小可が、斷より出る折、正可に見たる盜兒は、是這奴にて候。といひつゝ野良平に指させば、大角さこそと頷きて、爾らば汝になほ用事あり。兩個の賊を戍るべし、といはれて得手吉固辭に由なく、信乃に代りて野良平們の、索を拿つゝ戍りたり。恁而亦大角は、夏行にうち對ひて、氷垣老人今這小廝が、いひつるよしを听たる歟。河太郎と野良平が、招道分明也といへども、這盜兒を認得たる小廝ありと聞えしに、見せて吻合せざりせば、なほ疑るゝ事もやあらん、と思ふによりて面前に、這小廝をも糾したり。恁ても惑ひの解ずや。といへば又道節も、舊の水際に退き來つ、夏行有種にうち對ひて、頑愚の老人無智の壯佼、さこそは胆の潰れけめ。俺義兄弟犬飼は、勇士なれども怒に乘して、人を害することを欲せず。况這犬村は、料ずも二賊を獲て、和主們が疑ひを、解よしあるを歡ぶのみ。折から和主們主從が、這所に來ぬるに及びて、綷恁々と說示して、二賊を見せんといひしかど、然ばかりにては和主們が、飽まで君子を虐げたる、愆を知るのみにして、犬飼犬村二兄弟の、恥を雪るになほ足らず。懲して思ひ知せんず、と思ひにければその議を否して、かくの如くに計りたり。疑心暗鬼を生ずといひけん、世の常言に違ふことなく、疑似の迷ひを解けども悟らで、その身の破滅に及ぶこと、いと愚なる所

第八輯　卷之六

第八十五回

志を傾けて夏行四賢を留む
夢を占して重戸讖兆を説く

再說、夏行有種們は、四犬士既に證據を取て、寃を伸恥を雪る、智辯勇敢飽までに、譴懲されて共侶に、羞て頭を低てをり。登時犬村大角は、道節に威伏せられて、堤の下に退聚ひし、夏行の從僕們に、うち對ひさし招きて、若們衆人這盜兒の、招道の趣は、皆推並て听つらん。獨に這野良平が、籬笆を破りて迯し折、認得し小廝ありと聞にき。件の小廝も這里に來て、その一隊にあるならば、找み近著て這奴を見よ。那賊なる歟、ならざるか、いよ〳〵分明なるべきぞ。快々來よ。と急がせば、衆人は二個の主を、保質に拿られたる、勢ひ推辭べうもあらざれば、大家齊一應と回て、一個の小廝を見かへりつゝ、得手吉那折盜兒を、見出せしは和郎なるに、はやく出よ。と目星に指るゝ、得手吉は困じ果て、頭を搔きつゝ逡巡りして、速には立も出難しを、衆人聽ず、推出されて、却已べきにあらざれば、持たる棒をうち捨て、おそる〳〵大

那衣箱の事さへに、聞知ることを得たれども、なほ外事ぞと思ひしに、俺二個の義兄弟、和主の息女の資助により、脱れて這里に來にければ、絕て久しき面會に、素懷を遂たるのみならず、嚮に這犬村が、竊れたりし行裹を、拿復したる歡びの、折から和主們主従が、疑似の惑のまだ醒ず、偏見愚痴の心を師として、俺兄弟を趕蒐來つれば、爲に恥辱を雪んとて、故意と怒を起させたり。先や再盗兒們に、いはして聞せんよく聽ね。と言爽に說諭して、腰より出す鐵骨の、扇を抗て二賊の背を、割るゝ可に鞭惱し、又撻惱して、やをれ强盗、前の如くに今一番、做しゝ惡事をいはずや。と責懲されて苦と叫ぶ、河太郎も野良平も、疼痛に堪ず恁々と、彼衣箱の事、袖の事、又大角の行裹を、竊し折の事までも、招道分明なりければ、驚思ふ夏行有種、初て夢の覺たる如く、今さら慚愧後悔の、頭を擡得ざりけり。這段はなほ長やかなれば、言に姑く筆を輟めて、編を奮き卷を更め、第八十五回の肇に、說果すを聽ねかし。

勇士の弓折れ勢窮る、例は世々にこれ多かり。寃魂雷神夜叉とも做りて、怨を復さで休むべきやとて、蹉跎しつゝ罵るを、現八と大角は、うち對ひ左見右見て、氷垣の翁壻刀禰も、怒を鎭めてよく聽ね。俺們素より害心なし。先度の恥を雪ん、と思ふによりて仔細を示さず。こは戯るゝに似たれども、疑似の惑ひの覺ずして、人に寃屈を搭すれば、人亦報ふに寃屈をもてす。善には善の報ひあり、惡には惡の報ひあり。天網疎にして漏さねばこそ、今宵料らず義兄弟の資助によりて、那衣箱の盗兒を捕へたれ。耳を洗ひ目を拭ひ、見も聞もして善人を、寃げたりし愆を、みづから思ひ知りねかし。といひつゝ後方を見かへれば、信乃は野良平河太郎が、索拿縮つゝ牽立て、船より出て夏行們の、面前へ推居て、やをれ夏行これを見よ。這一人は尻肛玉河太郎と喚做たる、出沒不測の强盗にて、竊に和主の衣箱を、竊出して這頭の堤に、うち棄て迯たるは、則是這奴也。又一人は無宿猫野良平と喚做したる、こも河太郎が支黨にて、竊に和主の宿所の籬笆を、潜りて出んとしつる折、被たる襦袗の片袖の、樹枝に縢みて斷離れしを、そが儘にして逃亡たる、盗兒は這奴也。これ見よ襦袗の片袖なし。初咱們はこれを知らず。這里に津を求めし折、這奴們が竊に謀りて、殺して盤纏を略んとしたる、その機を猜し生拘て、敺きて積惡を責問ひしに、苦痛に堪ず恁々と、招道により野良平が、襦袗の片袖なき情由も、




のら平

聟も舅も窮所を捉られて、然しも餓たる暴鷹の、羽節の下なる野鶏より、脆かりけり、と羞おもふ、なほ憤りに堪ざりけり。恁りし程に夏行に、從ひ來つる衆人は、二犬士の刀も拔かで、氷垣落鮎聟舅の、烈しき鎗を物ともせざりし、海內無雙の胆勇武藝に、驚き呆れて醉るが如く、うち目戍りてありけるに、脆くも夏行有種は、持たる鎗を打落されて、はや組伏られたりければ、吐嗟と再駭き譟て、各々鋑叉を、兩手に拿群立て、多勢を憑む無謀の力戰、大家齊一咄と嘖て、競蒐らんとする程に、道節はやく推隔て、若們牛糞馬涎の小人、玉歟、石歟も別ことなく、身の程をしも見かへらで、敵對做さば先若們が、兩個の主の頸を搔して、しかして後に推並て、屠りて這里の河を埋ん。然でも拯む歟援る歟。漫に譟ぎて後悔せんより、且俺們が做よしを、其首にて見ずや。と禁めたる、聲百千の霹靂の、頭の上に墮るが如く、耳を貫き胆に响し、勇士の奮激當るものなく、進難たる衆人は、今爭はゞ兩個の主の、斬られやすらん刺れやすらん、と思ふ心のいよ〳〵後れて、一言半句も返し得ず、咸阿容々々と逡巡して、一縮になりにける。その間に大角現八は、大刀の緒左手に解出して、夏行と有種を、最も緊しく細めて、水際に立る二株の、楊柳に繫留しかば、夏行も有種も、堪ぬ怨に聲狂しく、若們殺さば快殺せ。俺們命運爰に竭て、强人の手に死ん事、生前の耻、身後の怨、譬るに物なけれども、

つゝ、倶に堤をうち蹈て、既に水際に赴く程に、從ひ來つる衆人は、堤の下に聚合たり。登時大角現八は、夏行にうち對ひて、こは氷垣老人歟。某們は不幸にして、疑似の惑に虐られて、辱を受たれども、料らず令愛に扶出され、いかで眞の盜兒を、捕捉ん爲に脫れ來て、不思議に本意を遂たる折、うちも揃ふて光臨ありしは、いと歡しく候。といはせも果ず夏行は、怒れる聲をふり立て、這盜兒們は胆太くも、趕稠られてせんかたなさに、火家の賊と諜合して、はふらかさんと欲する歟。芋鏥にして猨んず。と罵りつ鎗を拈て、面も掉らず大角が、胸前望て刺んとす。方纔這絆の爲體に、有種も亦三犬士を、強人也、と思ひしかば、些も擬議せず共侶に、持たる鎗を振閃めかして、はや現八にうち對ふ。勢ひ兩虎の暴たる如く、當るべうもあらざりしを、現八も大角も、騷ず敵を引受て、電光石火と衝き出す、鎗の刃頭を彼此と、遣錯し反蹈て、一上一下と術を盡す、修煉の剽挑瞬く間なく、且く敵を疲勞したる、大角は既にはや、腕亂るゝ夏行の、鎗の蛭卷丁と抓て、閃りと憑入る至妙の掙き、現八も亦有種の、鎗を戞哩と踏落して、透さず共に引組て、叉姑くは挑みしかども、二階松山城と犬村蟹守の奥義を極めて、就中緝捕には、世に敵なしと稱られたる、犬飼犬村兩雄に、捷を取るべきよしのなければ、既にして夏行は、大角に組伏られ、有種は現八が、膝に布れて呻吟のみ、反復さんと掙扎ども、

們苦痛に堪ずして、倣しゝ悪事を招道したり。これにより那奴們が、貴老の宿所に潜入て、衣箱を竊みし事、その折襦衫の片袖を、喪ひしといふ事までも、初て具に聞えしかば、軈て貴宅へ牽もてゆきて、よしを告んと思ふ折、囂塵として衆人の、這方を投て走來ぬれば、是必盗兒を、追隊の人々なるべし、と猜して這里に立迎て、緣由を示すのみ。是等の事に覺あり耶。と問れて歡ぶ夏行有種、共に莞爾とうち笑て、そは忝き事なりき。某則穗北の鄉士、氷垣殘三夏行也。實に示談に違ふことなく、けふ未の左側に、衣箱を竊て迯去たる、兩個の盗兒を生拘りて、緊しく禁獄したりしに、黃昏時のことにやありけん、索を脱け室を踰て、又逃亡て往方を知らず。程經て慿と聞えしかば、聊時の後れしかども、他們が去向は這頭ならん、と思ふによりて女壻共侶に、多勢を倶して趕蒐來つるに、料らず和殿にはやく知られて、這吉左右を聞ぬるは、意外に出たる歡び也。といふに落鮎有種も、道節にうち對ひて、某は氷垣が女壻落鮎餘之七有種也。その盗賊は何處に在るや。願ふははやく遞與し給へ。といへば道節含笑て、そは勿論の事ながら、那盗兒を生拘りしは、某一個の力にあらず。同行の武士三名あり。皆是異姓の兄弟にて、某と共に四名也。その內中二名は那里にをり。且他們にも對面して、なほ又詳に听給へ。誘這方へ。と先に立て、そが儘水際に倡導ふにぞ、夏行も有種も、然るべし。と應

事、片袖の事、重戸は胸を擂られて、死べかりしを剛才やうやくに、喚活たれども盗兒は、逃去にきといふことまで、敦圉暴く説示して、俺思ふに那奴們は、西南へは去るべからず。千住川をうち渡して、遠く東へ赴ん、と欲せし事もありつらん。河より東は他領にて、俺手の屆ぬよしもあれば、其頭の用意なからずやは。遮莫夜河を渡さねば、輙く前岸へ赴きがたかり。時は聊後れたりとも、今速に趕蒐なば、手に入る事もありぬべし。饑ては進退不便也。僉快腹を拵へて、推續きて河原へ來よ。先に還りし壯佼們は、俺に續け。と吩咐る、怒氣盛なる火急の隊配、そが儘納戸に走入て、身裝して出んとすれば、壻有種も立ながら、湯飯をたうべ身を固めて、器械拿て共侶に、はや門外に立出たる、後方に從ふ血氣の壯佼、方僅還りしも相加えて、其隊約莫三十餘名、鋑叉捍棒なゝど、手にくく利器を挾み、先に找むは蕉火を、掉照しつゝ河原を投て、飛が如くに趕ふ程に、千住堤に近著けり。爾程に道節は、はやく船より立出て、水際を距ること三反許、追隊の主僕に聲をかけて、其首に來給ふ人々は、穂北の鄕士と聞えたる、氷垣殿にあらずや。と問ふを訝る夏行有種、持たる鎗を横たへて、歩を駐めつ佗と見て、爾いふ和殿は何處の人ぞ。と問へば道節阿容たる色なく、某は近國より荏土へ赴く逆旅の武士也。甲夜に料らず這津にて、兩個の盗兒を拿へしかば、佶と細めて責たりけるに、那奴

給ひぬる。俺們水際に立迎へて、よしを報て盗兒を、牽遞與遣さば、那奴們は趕甲斐ありて、更に歡ぶべけれども、然では獨に和殿們の、いひ解よしも聽ずして、武勇に誇る偏見もて、むごくしたりし返報を、舒るにいまだ足るべからず。恁れば俺先立出て、那夏行がみづから來たらば、箇樣々々に相計ん。犬村と犬飼は、推續き水際に立て、徐に他們に對面の折、夏行怒て無禮に及ばゞ、拉ぎて懲し給へ。犬塚は霎時の程、船に遺りて好潮合に、その盗兒們を牽出して、夏行主僕に見せ給へ。這宅の事は恁々、とその進退を説示せば、現八聞つゝ笑坪に入て、その議定におもしろし。快々立出給ひね。と應をしつゝ身を起せば、信乃は笑つゝ點頭のみ。大角は然ばかりに、あらずもがな、と思へども、否といはんはさすがにて、現八と共侶に、進む道節に推續きて、はや水際にぞ下立ける。不題更說。氷垣夏行が宿所には、重戸が虛仆したりしを、半晌ばかり知らで在りしに、小斷夢助壁藏が、見出しつ駭譟ぎて、連りに人を喚びしかば、夏行幷に奴婢們まで、沸がごとくに周章したる、大家重戸を抱起して、共に喚活け湯液を沃ぎて、療術等閑ならざりければ、重戸は逆謀りし如く、稍甦生りしおもゝちして、縡恁々と報る折から、女壻なりける、落鮎有種、幷に獨に部をせられて、那盗兒を趕蒐て、彼此へ赴きたる、衆人も共侶に、這時かへり來にければ、夏行は有種に、獨に捕へし盗兒の事、衣箱の

つゝも遽しく、袱包を披きて見れば、東西皆あり。總て水に濡たるのみ、そもはや半分は乾きたり。當下大角は、實父母養父母兩家の木主を、恭しく取出して、小高き處に閣きつ、うち對ひ合掌して、涙を流し額をつき、某疎忽の失にて、姑くも四尊の靈位を、賊人の手に汚されて、膾河水に濡されしを、朽をしく思召されけん。時の不祥といひながら、勸解奉るも面俯なる、罪を償ふ由なかりしを、うち歎きて候ひしに、料らず未見の義兄弟の、資助によりて尊靈位を、迎取ることを得たる也。先非を許させ給ひねかし。彌陀佛々々々と唱へたる、孝義殊更老實にて、禮あり儀ある誠心を、信乃道節現八は、齊一感じ倶に稱へて、謹愼德行多く得がたき、君子也とぞ思ひける。既にして大角は、親の木主を拜し訖りて、又袱に包みしかば、道節は照る月を、つく〳〵と瞻仰て、喃犬飼犬村生、千萬言にも盡しがたかる、過去來の話說は、迭に聞まく欲しかれども、そは目今の急務にあらず。夜ははや二更になりぬらん。其盜兒們を穗北の莊へ、牽もてゆきて和殿們の、與に寃屈の怨を雪ん。快々准備し給はずや。といそがし立る程しもあらず、穗北のかたより人許多、這方を投て來るにやあらん、蕉火の光晃めきたるを、四犬士遙に佶と見て、那は穗北の夏行們が、しうねく趕蒐來つるにこそ。とばかりいふて些も騷がず、そが中に道節は、呵々とうち笑ひて、やよ犬村生、犬飼も那奴們を、何とか思ひ

ければ、立向ひ睨へて、やをれ盗兒認忘れはせじ。俺は若們が遺措きたる、衣箱と襦衫の袖の、愁に分明ならねば、皮箱の主なる夏行に、疑れ囚れて、不慮の難義に及びしかども、神明佛陀の冥助によりけん、一夜も過さで若們を、はや這所に獲たりしは、是俺異姓の弟兄の、賜ものなるを知らざるや。と辭せわしく罵れば、野良平と河太郎は、うち駭きつゝ仰視て、哀請んと思ひけん、立たる膝を折布て、跪んとせし程に、現八も亦找寄て、二賊を撲地と蹴倒して、怒に堪ず聲高やかに、這盗兒們が今さらに、何事をかいはんとするや。若們が故をもて、俺さへ氷垣に囚れて、羑里の思ひを做たれども、寃を伸恥を雪る、因果は環の旋れる如く、善惡必應報あり、天罰愆こそあるべけれ。思ひ知るや。と罵責て、蹂躙らんとしたりしを、大角急に推禁めて、やよ犬飼生等給へ。今はしも俺們が、濡衣を乾す時は來つるに、那憤を洩さんとて、撻は要なき所行なるべし。犬塚犬山兩個の理會に、うち儘し給はずや。といへば現八有理と應て、舊の處へ退きけり。當時信乃道節は、大角にうち對ひて、犬村和殿の竊れたる、行裹は這里に在り。快展検て受取給へ。といひつゝ遞與す袱包を、大角は受戴きて、是將二兒の賜也。包の内には當用の、爲にとて出し置たる、八九兩の金もあり。被替の衣もなきにあらねど、そは喪ふとも惜むに足らず。緊要なるは一袱に、藏めし親の木主也。いで〳〵。といひ

再會の本意を遂て、這話說に及べる也。然ば信乃道節は、件の緈の趣を、大角と現八に、遺もなく說示して、㦬れば疑ふべくもあらぬ、野良平が贜物は、犬村生の行裹にて、穗北の鄉士の衣箱を、竊拿て千住堤へ、卸措きしは河太郎也。又只這義のみならで、嚮に件の兩賊を、細折初て見たり、那野良平が被たる繻衫は、左の片袖なかりし也。よりておもふに穗北の鄉士の、宿所に遺りし繻衫の袖は、是野良平が迯るとき、物に破られて遺りしを、犬村生の片袖と、此彼暗合しつるをもて、鄉士の疑ひ解ずして、緈の難義に及びけん、その所以なきにあらずかし。今宵野良平河太郎を、鄉士の宿所へ牽もてゆきて、よしを示して寃屈を諦さば、尤愉快といひつべし。那行裹は船に在り。且兩賊を一見して、行裹を取收め給へ。俱に穗北に赴くべし。といふに大角現八は、雀躍したる不勝の歡び、共に滿面笑片向て、額を摲貌を改め、信乃道節にうち對ひて、宿世の契憑しく、今宵料らず和君們に、環會ぬるのみならで、二賊を擒捕り給ひしは、實に得がたき幸ひ也。誘然らば船に到りて、俱に二賊を牽立て、氷垣が宿所に赴てん。さてもく。とばかりに、只管感じて已ざりしを、信乃道節はさもこそとて、先に立つゝ共侶に、船にうち乘り笘反落して、船桁に繫ぎたる野良平と河太郎を、大角現八に見するにぞ、大角は先月を燭に、見れば果して這二賊は、嚮に千住堤にて、水を潛ぎて逃亡たる、歹人們であり

金を刀禰に船當にあり。包は隱して船當にあり。

し胸算用の、玉が狂ふて緥められ、絆皆畫餅になりにたる、包は隱して船當にあり。金を刀禰達にまゐらせん、命を助け給ひね、といはせも肯ず道節は、眼を瞪らし聲苛立て、這奴們は苦しき隨に、我們を盜兒の、皮肉蠹と思へる歟。かくの如き畜生に、理義を說んは無益也。八劍にして積惡の、報ひを思ひ知せんず、と敦圉悍く身を起すを、信乃は霎時と推禁めて、今這奴們を推並て、斬るは輒き所爲なれども、素より急ぬ旅なれば、程遠からぬ村長に、よしを報牽渡して、地方の法度に儘しなば、這奴が竊みし行裹を、亦その主に返し遣す、絆の便宜もあらんかし。性急るは要なき事ならずや。といふを道節諾なひて、爾らば船を岸に寄せて、舊來し里へ赴ん。同是その行裹の、內を檢めてもてゆくべし。然とて軈て野良平が、板子の下に隱し措たる、袱包を索出して、うち披んとしつる折、岸を離れし船なるに、忽地閃りと乘るものありしを、信乃道節は驚きながら、亦是野良平河太郎が、火家の歹人なるべし、と思ひにければ些も擬議せず、道節はやく立出て、推捕へんとせし程に、信乃も亦苫屋形の、內より出て共侶に、搦捕んと挑みたる、この時明月雲に入りて、霎時朧影なりけるに、迭に爭ふ折なれば、信乃道節はその人の、現八なりしを思ひもかけず、現八も這兩敵の、信乃道節ならんとは、知らで同士繫をしたりしに、雲忽地に月を吐て、光隈なくなりしかば、迭に面を認得しより、方僅

けふ河太郎と共侶に、穗北の郷士の宿所を覘ひ、背門より竊入りし折、河太郎は逸速く、其頭にありける衣箱を、ものして出てゆきけるに、小可はまだ東西も得取らず、鈍や小厮に見出されて、籬笆を潛りて逃去にき。却その路にて小可は、旅ゆく武士の遺したる、袱包を掻攫ひて、走るを武士は遣らじとて、趕蒐來ぬる堤の頭に、河太郎は衣箱を、卸して憩ひをりしかば、援を得つゝ那武士を、撃仆さんとて挑みしかども、思ふに倍たる猛者也ければ、矢庭に左右へ投伏られて、命も倶に危かりしを、河太郎も小可も、そが儘河に滾入て、辛く必死を脱れたり。恁る折にも小可は、又那武士の袱包を、掻攫ふて迯たれども、河太郎は卸措きたる、衣箱をうち捨て、再拿るよしあらずなりたり。是により河太郎は、小可がものしたる、袱包の内なる金を、二分にせよといひしを、小可その議に從はず、那衣箱を捨ずもあらば、いはるゝ如く此彼共に、二分にすべかれども、俺がものしたる金をのみ、半分分ちて取せんや、と推辭を他亦諾なはず、噫身勝手なることをないひそ。那折に堤にて、倘俺力を勠せずば、和郎は包を拿復されて、命果敢なくなるべきを、恙もあらずその包さへ、拿留めしは俺功也。然るを吝みて今さらに、云々と論ずるは、吮下過て熱を忘るゝ、只是烏滸の誣言也。四も五も入らず二ッに分よ、と論じて果しなかりし折、刀禰達に喚かけられて、口を鉗みつ又掙一掙、せばやと思ひ

纜透さず、身を起し篙を手繰て、此彼共に引つけて、組んとしたる横面を、撻惱し蹴倒して、却件の賊篙師們を、をもて施回卷に、推雙べ緪めて、流るゝ船を撐止め、篙を建繋索を掛て、遂に招道しつるや息も吻せず鞭撻懲して、緊しく拷問したりしかば、二賊は苦痛に堪ずして、喚做すもう、小可們は宿もなくて、這船にのみ起臥すなる、尻肚玉河太郎、無宿猫野良平と、慾に底なき性なので候也。無筆無算の癖なれば、世度る業には疎にて、賭銭を好み酒を嗜む、船を繫ぎて旅ゆれば、倶に惡事を宗として、夜毎に這里の河にをり、又ある時は墨田川にも、突殺し盤纏をく人の、渡りを求ることあれば、絆慿々と欺詐りて、船に臥さして這篙をもて、近郷なる人の東西奪ふて、屍骸を河へ投棄しは、幾番に歟候ひき。慿ても夜川に幸なき折は、知らで虎髯を曳損ね、を、竊みし事も屢なりける、冥罰終に免れず。武藝に長たる刀禰們とは、法師にならんと思ふのみ。緪められて、後悔の、こゝに立よしなけれども、今より野心を改めて、信乃は願ふは慈眼視衆生の、佛心を垂給ひて、許させ給へ、と同音に、哀請ふて已ざりしを、云々といふ聞つゝ冷笑て、俺が這河邊に來たりし折、若們は這船にて、只管に東西を論じて、這義は甚聲の、洩聞えしを今おもへば、竊みし東西を分たんとて、その損益を論ぜしならん。御推量に違ふことなく、麽、と又責問れて、それすら隱す事を得ざりし、野良平がいひけるやう、

と目を合して、奇なるかな妙也けり。犬村犬飼兩兄弟の、話說に就て又、一條の話說あり。且聞給へ。と慰めて、迭代に說示す。その顚末を原るに、這朝信乃道節は、栗橋なる旅舍を出て、千住堤に來にけるに、既にして日は暮たり。河を前面へうち渡して、千住に宿を投んとて、航船を索ねしに、航場には船なくて、這里に繋ぎし苫船あり。船には兩個の篙師が、何にかあらん東西を論じて、云々といふ程に、信乃道節に喚かけられて、うち驚きたる聲ざまにて、應をしつゝ來由を聞て、夜川は渡さぬ製度目なれども、船賃多く賜らば、竊に渡しまゐらせん。誘誘乘せ給へとて、船を撐つゝ寄せしかば、信乃道節は遽しく、件の船にうち乘りしに、篙師們が又いふやう、竊に渡す船なれば、客人達を乘せまゐらせしを、人に見られんことを厭へり。前面の岸へ漕寄するまで、權且苫の下に臥て、音なし給ひそ。と誨しを、信乃は心に訝りて、密と道節の袂を引きしを、道節も亦意中に悟りて、疑ひながら然氣なく、いはれしごとく共侶に、苫を被ぎて橫臥たり。登時兩個の篙師は、持たる篙を引抗て、信乃道節が咽吭を、刺串んと閃かすを、信乃はさら也道節も、臥つゝはやく身を反せば、覘外れて篙師們は、板子を愚煞と串きけり。以あるかなその船篙の、石突には矠を製作みて、銳こと鎗に異ならねば、かくの如き利害あり。既にして篙師們は、突外せしに心慌て、引拔んとせし程に、信乃道節は些も

聞ぬるのみにて後の安危を、具にせざれば胸安からず。その義を知らし給ひね。と問へば大角歎息して、絆の起本は俺身に在り。犬飼生は連累也。その故は箇樣々々。とけふ驟雨のふりし折、行裹を盗兒に、奪去られし絆の趣、又這河の堤にて、二個の賊を拿へんとて、且く挑戰ふ程に、那盗兒們は逃亡て、行裹さへあらずなりたる、迹には件の盗兒們が、近鄉より竊拿て、もて來し衣箱の遺りし事、これにより盗兒を、追隊の衆人疑ひて、大角と現八を、欺きて穂北なる、宿所に伴ひ穽に陷て、搦捕りたる事の光景、幷に襦衫の片袖の、恁々の事あるをもて、此彼暗合したるにより、那衣箱の主と聞えし、穂北の鄉士、氷垣殘三夏行が、その辯論を聽ずして、現八と大角を撃果さんとて敎圍きしを、女兒重戸が賢才良智の、詞を盡して諫めしかば、その壻落鮎餘之七の、還り來るまで俟んとて、現八と大角を盆樹室に禁獄したる、黃昏時に件の重戸が、資助によりて脱れ出たる、絆の顚末恁々と、その崖略を說示せば、現八も亦共侶に、重戸が婦德を賞賛して、俺們憶ず寃枉に、身を危くしたれども、一婦人の資助により、免れたるを幸にして、不覺に命を惜みしにあらず。いかで又那盗兒を、捉へて恥を雪ん、と思ふによりて闇からぬ、身を暗くして阿容々々と、脱れて這里まで來つる也。この義を猜し給ひね。と告る詞の不樂しげに、倶に嗟嘆に堪ざりしを、信乃道節はつく〴〵と、聞つゝ憶はず目

を解き篙を拔きて、撐つゝ船を岸に寄すれば、現八は遽しく、船より出て笑しげに、大角にうち對ひて、犬村生立疲れて、さぞ俟不樂しかりつらん。既に這里より見られし如く、某船にうち乘りて、事ありけるは沒怪の福にて、料ずも犬塚犬山、二兄弟に再會したり。快々對面し給へかし。と告るを大角うち聞て、そは歡しき事なりき。初和殿が船の內にて、敵を左右に引受たる、勝負をこゝに測り難て、最大う氣を悶しかど、遠くもあらぬ程ながら、俺身は山里に生育て、水技自由ならざれば、鄙語にいふ隔水なる、鬪諍に似たる絆の不便は、いふべうもあらざりしを、はやくも解けて和睦の光景、いはれしよしも聞えしからに、憂を轉して歡びに、なりぬることの憑しさよ。といふ間に信乃道節も、岸に登りて共侶に、身邊に來ぬるを大角は、恭しく找迎へて、犬塚犬山二賢兄、某犬村禮儀也。二兄のうへは豫より、犬飼生に承知して、景仰の懷ひ已がたく、俱に諸國を巡りし甲斐に、今宵面會の歡びを罄すこと、幸ひ是に優ものなし。といへば信乃道節も、禮を返して却いふやう、犬村生の來歷素生は、いまだ詳ならねども、俺們に異ならぬ、玉あり痣もありとし聞けば、亦是異姓の弟兄也。生れし時日は同じからで、異鄕に成長したりとも、今よりして後憂を分ち、禍福苦樂を共にして、皆同鄕同日に、死んと願ふ外に他事なし。爾るに犬飼共侶に、危窮の厄を免れて、這河邊まで來給ひにき、と

はこはいかに。と呆るゝ迄に、捉りつ捕られし手を解きて、組を繎せし糾糸の、結びし義とて憑もしき、長き別を今こゝに、環りあひぬる迭の歡び、比んよしも南麻與民の、甲斐ある世とぞ思ひける。登時現八先いふやう、思ひがけなき今宵の再會、二兄は原是何等の故に、孤舟の内にをはしたる。俟人ありて歟、甚麽ぞや。と問へば道節微笑て、否俺們が這船に、乘りつゝありしは後れて來ぬる、人を俟べき與にはあらず。這等の事は姑く置て、和殿は亦何等の故に、岸を離て繫ぎし船に、いと慌しく甦乘りたる。こゝろ得がたき事にこそ。と問復されてさればとよ。けふしも不慮の大阪あり。辛く必死を免れて、這河邊まで來つれども、航船のなかりしに、稍這船を見出して、寄せよと喚びしに應せざれば、みづがら漕て渡さん、と思ふによりて甦乘たり。緈の難義は俺のみならず。といひつゝ岸邊を見かへりて、見給へ那里に立たるは、是同因果の義兄弟、犬村大角禮儀、と喚做す文武の俊傑也。他も亦感得の靈玉あり、痣もあり。嚮に某下野に、旅宿せし折邂逅しつ。犬士の一人たるべきよしを、迭に悟りて義を結びしより、他は則家を棄、所親に別れて只管に、和殿們自餘の犬士にも、環會まく思ふばかりに、それより以來某と、倶に諸國を偏歷の、光陰二稔に及びたり。と報れば歡ぶ信乃道節、しからば船を岸に寄せて、犬村生に對面せん。吁愛たし。と諸聲に、含笑ながら壽祝つゝ、繫索

遽しく、大角を見かへりて、這里にも篙師處らずとて、猶豫せば氷垣が多勢を將て、趕來ぬることありもやせん。爾らば難義に及ぶべし。俺那船に乘移りて、漕寄せて和殿と倶に渡さん。水際に拵みてをはせよ。といふに大角頷きて、しかるべし。と答しかば、現八は腰刀に、兩手を掛つゝ身を跳らして、岸を離れて歇りたる、船に閃りと乘移りて、篙を拔んとせし程に、船篙の内に人ありて、盜兒等と喚禁めて、苫推抗つ猛然と、見れ出る一個の暴男、走蒐りて現八の、利手を丁と扼るを、こゝろ得たり。と身を淪して、振拂んと角ひたる、程もあらせず又一人、左のかたより衝と出て、組んと拵む左右の搴き、這方の岸には大角が、うち見て驚く、再度の窮阨、いかで力を犬飼に、勠して仇を拉ん、と思ふもかひなき陸と水、淺瀬を索て彼此と、走入らまくしつれども、不知案内なる夜川の深淺、測難つゝ村胆の、心ばかりは惴るのみ、よるべの便りなかりけり。爾程に現八は、敵を左右に引受て、熟得の拳法、術を盡せば、搖めく船に水入りて、辷る板子を踏留め、且く挑爭ふ折から、雲時隱れて又叢雲を、拂ふて出る秋の月の、淸光夜水を照しては、金波流れて細鱗跳り、氷輪激瀨に俵りては、玉兎競ふて晚潮落つ。金天變化瞬間に、限なくなりし月光に、三人は面を佶と見て、共に駭く聲も齊一、(句)和殿は犬飼(句)現八ならずや。(句)しかいふ二兒は犬山犬塚。(句)然也道節信乃なるぞ。(句)こ


現八


大角
野渡の歌
舩ニ現八
夜雨敵と
聞よ

べきことながら、亡母刀自の命日に、必死の人を兩個まで、救はゞ追薦冥福の、よすがにならん、と見し夢に、奇しき敎のありけるを、日屬の氣質に憚りて、いはで親さへ良人さへ、欺くまでの不正事、允させ給へ、と胸にのみ、思ひつゞけて彌陀唱名の、持念を凝す夕間暮、庭の千種に鳴く虫の音を、枕に聞つ濕冷に、痞發りてすべをなみ、嚮には夕飯たうべよ、といひ誘て退けたる、夢介壁藏兩個の小廝の、かへり來ぬるを今さらに、いと〱遲しと思ひけり。話分兩頭。爾程に犬飼現八、犬村大角兩個の勇士は、賢女重戸が惻隱忠恕の、資助によりて必死を免れ、氷垣が宿所の背門邊より、竊に走去りたれども、こは已ことを得ざりし所行にて、武士たるものの本意にあらず、と思へば迭に囁きて、いかで又那盗兒の、往方を索ね生拘りて、牽もて這里に歸來て、主僕の惑ひを解ずもあらば、何の日にか恥を雪ん。今宵は千住に宿を投めて、なほ商議をすべけれとて、連りに路次をいそぎてぞ、夜はまだ五鼓にならざりしに、千住の河邊に來にければ、はやく前岸へ渡さんとて、屢船を喚たれども、夜川は渡さゞりけるにや、這方の岸には船もなく、答るものもあらざれば、倶に堤にうち登りて、彼此と見亘すに、一町あまり河上に、苫葺たる船ありければ、走りて其首に赴きて、船を寄せよ。と喚るに、水際近く繋ぎたる、船のみにして人在らねばや、寂寞として答もなきに、心いよ〱焦燥たる、現八は

黄昏時の事にして、奥には酒宴、庖湢には、烹炙に暇なき折なれば、今まで人の知ずやありけん、危き事でありけるよ、といはゞ必實事にせられて、奴家に咎めなかるべし。快々壁を。と急したり。女子に稀なる思慮才幹に、現八も大角も、いよ〳〵感じて推辭に由なく、然らばその意に任せんとて、袱包をうち開きて、手に〳〵とり出す兩刀を、腰に佩たるそが中に、現八は行裹を、駝ひつゝ四下を見かへるに、盆樹を擔ふ枌あり。是究竟と拿抗て、力を極めて室の壁を、突摧くこと三尺ばかり。又大角も手傳ふて、綷よく拵へたりければ、共に重戸にうち對ひて、再生の恩、知己の義を、演る間なき辭別、猶豫して人に知られじ、と思ふ心のいそがれて、詞短き秋の日の、暮て限なき月影は、潛ぶに便り蘆垣の、蔭に添ひつゝ出てゆくを、重戸は霎時目送りて、手ばやく室の戸引よせて、鎖しをしつゝ緣頰の、頭近くかへり來て、鬢搔亂し櫛笄を、捨て地上に臥てをり。當下重戸おもふやう、いかなれば家尊の大人は、勇悍を旨とし給ふのみにて、人の虛實を猜することの、思足らずやをはすらん。縱襦衫の片袖の、此彼似たることとありとても、いかにして那人達が、眞の盜兒なるべきや。倘亦眞の盜兒なりとも、奪去られし衣箱の、舊の儘にて復りしかば、只その罪を罵懲して、追放ち給ひなば、慈悲ある人といはれんに、諫めて用ひ給はねば、已ことを得ず胆太くも、女子に似げなき計ひは、罪怕る

頑に、斬んといひし父よりも、良人は心いよ〳〵悍かり。今にもあれかへり來て、よしを聞かば忽地に、怒りて屠殺をいそがさん。その折奴家が諫るとも、いかにして聽るべき。恁れば霎時暗からぬ、身を暗して近郷に、杖を駐めて密々に、又那眞の盜兒の、所在を索ね生拘て、親と良人に見せ給はゞ、その折にこそ疑ひ解て、倶に先非を悔侍らん。這義を思ひ給はずや。といはれて悟る現八大角、共侶に歎賞して、適徽妙き賢女の敎誨、いはるゝ趣皆理あり。遮莫敎に從ひて、俺們這里を出てゆかば、咎おん身のうへに及ん。身を殺して仁を做す、義俠なりとも俺們が、心にこれを忍んや。といふを重戸は推返して、その義も豫て思念あり。願ふはお身達這室の、壁を内より突毀ちて、背門より出てゆき給へ。奴家は又這室を、鎖して髮をふり亂し、倒れて人の來ぬるを俟ん。これにより親も良人も、皆うち駭き走り聚ひて、喚活てよしを問はゞ、奴家則詭りて、室を戍りたる小厮們に、夕飯をたうべさせん、と思ふによりて霎時の程、奴家が代りて緣頰より、那里を目戍りて侍りしに、那旅人們は術やありけん、室の内にて綁縛の、索を解捨壁を毀て、出て這方へ來にければ、奴家は吐嗟と駭きて、人を喚んと身を起す、程しもあらずはや近づくを、推禁んとせし折に、胸を撲れて緣頰より、落て黑白も知らずなりにき。思ふに件の旅人們は、嚮に奴家が次の間に、措たる刀と行裹を、探拿て逃亡し歟。

もあれ。爺々公の叱らせ給ふとも、俺身が口を鉗みてをらんや。好も歹きも這身のうへに、あるべきものを快ゆきね。やよいなずや。と急せば、いよ〳〵歡ぶ夢介壁藏、然らば仰に從ひまつらん。いかで宜くよろしく。と憑む詞の露の間も、重戸は心いそがれて、出し遣りつゝ戸袋なる、袱包を搔拿抱きて、閃りと下たる緣頰より、はやくも傳ふ巻石に、裳引して潜やかに、盆樹室に近著て、帶の間に隱したる、鍵を取出つ、戸を推開きて、恭しく二犬士に、うち對ひ聲を密めて、事急なれば詳に、告まゐらする暇も侍らず。嚮に奴家が父親に、いひつるよしを聞給ひけん。竊に出てゆき給ひね。おん身達の兩刀と、行裹は這里にあり。快々出させ給ひね。といひつゝ軈て二犬士の、綁縛の索を解捨れば、驚きおもふ現八大角、多く得がたき賢女の慈善に、且感じ且躊躇て、言語齊一答るやう、思ひがけなきおん身の明察、俺們を那賊ならず、と知られて放遣るゝとも、主人はさら也衆人の、無明の醉の醒ずもあるを、この儘にして身を隱さば、何の日にか恥辱を雪ん。かくの如きは武士たるものゝ、最も恥べき事なれば、今さら教に從ひがたかり。這義を猜し給ひてよ。と推辭むを重戸は聞あへず、宣ふよしは然ることながら、慭に道を守りて、死を待給ふは疎鹵なるべし。慽いはゞ奴家さへ、なほ疑ふに似たれども、非如おん身に惡事ありとも、奪去られし衣箱を、とり復したれば這里に損なし。然るを執念深

第八十四回

夜泊の孤舟暗に窮士を資く
逆旅の小集妙に郷豪を懲す

秋の日なれば短くて、はや黄昏になる隨に、奥に吹擂めく衆僕の醼會、主翁と一席でも、恩賞免許の盃なるを、今這折に喫ずもあらば、何の時を期すべきやとて、迭に挑む獻酬に、沙量も浮れて高笑ひして、酒菜を暴す猫脚の、折布空しくなるまでに、啖盡して叉啖ふ、箸さへ暇なかりけり。然ば重戸は折を得て、獨奥より出て來つ、四下を屢見かへりながら、携たりし袱包を、且書院なる緣頰の、戸袋に推隱して、外面見出す聲潛やかに、夢介壁藏其首にやをる。快々來よ。と喚立れば、盆樹室の頭に土居て、張番したる兩個の小厮は、應と答て共侶に、遽しく出て來ぬるを、重戸は招き近づけて、やよ夢介よ、壁藏よ、爾二名は盃を、手にだも拿らぬ沙量なれば、巢衛にせられて徒然に、堪ずや東西の欲しくなりけん。然とて奥では酒宴の、最中なれば誰もかも、代らする人はなし。這里は那里を目融して、遠くもあらぬ程なれば、俺身が這里より見つゝをらん。はやく庖湢に赴きて、夕飯たうべて來よかし。といはれて歡ぶ夢介壁藏、含笑ながら手を揉て、そは忝き御心操、仰に悖るべうはあらねど、倘大老爺に知られなば、等閑也とて叱られん。影護きは這事のみ。といふを重戸は聞あへず、其頭の遠慮はせず

殺すは要なき所行なるべし。恁れば爾の願ひに儘して、翌まで一室に閉籠措ん。涙脆きも折にこそよらめ、そを泣く事歟。と慰めて、外面見かへり、やをれ衆人、いひつるよしを聞たらん。その盗兒們を那里なる、盆樹室に閉籠て、緊しく鎖して、一兩名、迭代にうち戍れ。又那奴們が兩刀と、只一箇なる包裹は、重戸且く預り措て、有種がかへりなば、よしを告て見せよかし。倘毫ばかりも憐愍を、被なば俺女兒にあらず。然ることあらば仇と思ん。衆人も恁こゝろ得て、等閑にすべからず。其頭の事を做し果なば、僉共侶に奥へ來よ。賞祿に酒を飲せんず。太義々々。と勞ひて、引提し刀を若黨に、持して奥へ退るにぞ。若黨も亦身を起して、主の後にぞ從ひける。爾程に衆人は、二犬士の兩刀と、裹を重戸に遞與もあり。又緣頬なる衣箱を、積藏に斂るゝもありて、這餘の壯佼幾名歟、おそる〳〵索拿縮て、二犬士を牽退るに、現八と大角は、既に重戸が心操の、世に捷れしを竊に感じて、胸膈豁け怒氣理り、奮勇初に似ざりしかば、倶に時運を天に儘して、恁ても再 爭はず。牽るゝ隨にうち連立て、盆樹室に赴くを、人僉送るそが中に、世智介と小才二は、撲傷に堪ず捍棒を、杖に衝つゝ足引の、山あり水ある庭ながら、二三十歩の程をしも、人な笑ひそけふばかり、千町を過る心地す。と呟きつ面を醜めて、怨しげにぞ辿りける。

然しも恩愛父女の情、腹も得立ず諾ひもせず、見かへりながら冷笑ひて、憐むまじきものをしも、愍むは是婦人の仁、いはるゝ隨に做すならば、讐に刃を借すに似て、世の胡盧にならんのみ。墻を潛りし盜兒を、認し小斷は得手吉也。他は南へ遣したる、一隊の追捕と倶に、まだかへらねど、還るを俟て、見するは易きことながら、正しき證據の片袖あるを、棄て今さらいかにぞや。二十に足らぬ小猴子の、一言隻句を取るよしあらんや。朝の炊の多き寡き、或は衣の脩き短き、費を厭ふて云々と、いふこそ相應しかるべきに、傍痛き女子の裁判、益なき意見は聆く耳あらず。快々立ね。と窘るを、重戸はなほも推返して、然迄に思召ならば、力及ず侍れども、餘之七刀禰もいまだ還らず。況やけふは母刀自の、忌日なりしをおん憤りに、紛れて忘れ給ひし歟。いかで翌まで呵責を禁めて、那儘繫措き給はゞ、遂に虛實の安定に知られて、御後悔あるべうも侍らず。這義は一入願しきを、允させ給へ。とうち陪話て、浮世の秋を身に占る、脆き涙の夕露や、茨が下の女郎花、くねらで直く怜悧さを、側聞する二犬士は、憶ず目と目を對するまでに、竊に感じて、十室の邑にも、忠信ありと思ひけり。爾ば悍かる夏行も、言の道理に迫られて、沈吟ずること半晌許、やうやくに頷きて、やよ重戸、いはるゝ趣寔に由あり。日屬萬事を任したる、有種もいまだ還らず。且亡者の命日忌辰に、非如罪人なりとても、

餘之七有種に、妻せたりと聞えたる、主人殘三夏行が、獨女兒の重戸なり。當下重戸は緣頬に、跪きつゝ父に對ひて、喃爹々公、恁稟さば、淡き女子の身の程をしも、思はぬまでに舌長しとて、叱らせ給ふ歟知らず侍れど、盗賊詮議の御聲の高さに、胸安からねば端近う、出て已前より那里にをり、一五一十を聞もしつ、闚窺もしつ、しかすがに、思へば疑ひなきにも侍らず。人の心の好歹は、相貌によらぬものながら、搦捕られし旅人達は、もののいひざま人柄さへ、竊盗をすべきものに似ず。勿論斷離れし襦衫の袖の、這里に遺りてあるからは、左ても右ても動きなき、綷の證に似たれども、那人々も堤にて、趕稠たりし盗兒の、爲に引れて片袖を、喪ひにきといはるゝが、實事なりせば那身に賮縁る、是禍鬼の所爲なるを、よくも思はで只管に、慍りておん手にかけ給はゞ、最憐むべき事にして、後悔其首に立がたかり。是等の虚實を糾すべき、證人は外ならず。綷の始に盗兒を、見出せし小厮の還るを俟て、那人々を見せ給はゞ、墻を潜りて逃亡たる、盗賊は那旅人歟、別人なる歟立地に、おん疑ひを解るべき、捷徑にこそ侍るめれ。既に這義をおもふをもて、禁めまうすは名も知らぬ、那人達の爲のみならず、罪疑しかるものを、殺せばその子、孫の世まで、祟を受るといふことの、物の本にも侍らずや。賢慮を旋し給ねかし。と理りを演義を推て、獨惑はぬ賢女の諫言、耳に逆へど夏行は、


現八
どち介
大角


夏引怒て二犬士を斬んとす

迹に遺りし這片袖を、俺見出せしは驟雨の、天霽亘りし比なりき。おもふに必其奴們に、襦袢の片袖なきものあらん。衆人心つかずや。と問へば大家さゝ候。剛才這奴們兩人を、緬る折初て見たり。左に立たる盗児の、襦袢は斷離れて片袖なし。しかも此彼相似たる、淺葱木綿で候。といふを大角見かへりて、人々知ざる所あり。俺這襦袢の片袖を、喪ひつるは堤にて、兩個の賊を捕へんとて、挑みし折に引斷離られしを、風に吹れて川へや落けん、索しかどもあらざりき。といはせも果ず夏行は、呵々とうち笑ひて、恁迄證据分明なるに、尙爭ふは無慙の癖者、骨を拗ぎて招道させん。跪ずば毆倒せ。臆手寛し。と敦圉けども、既に懲りたる衆人は、承りぬ。と答るのみ。又近づきなば蹴られやせん。棒もて足を拂はん歟。左してやよけん右せん歟とて、困じて進み難しかば、夏行いよ〳〵焦燥て、いふかひもなき弱虫們が、多寡の知れたる兩個の賊に、今さら怕るゝことやはある。譬ば保輔張檠に、捷れる勇あり術ありとても、重索掛て緬めたれば、檻の獸に異ならず。俺せんやうを見よやとて、後力に侍る若黨に、持せし刀を搔拿て、勢ひ猛く緣頰より、走下んとせし程に、思ひがけなき屛風の背に、竊聞したる女子あり、忽地に聲をかけて、やよ等給へ家尊の大人、稟すべき事侍るなる、權且等せ給ひね。と喚禁めつゝ遽しく、屛風の端を搔遣りて、見れ出しは別人ならず。いぬる年招婿して、落鮎

舌を掉ひ目を注して、重て近著くものもなく、取たる索を放さじ、と思ふばかりに阿容々々と、四下を圍みて戍りたり。登時現八大角は、佗と夏行にうち對ひて、和殿は當家の主人よな。その姓名は衆人の、告誇るにより聞知りたり。菽麥をだも辨ことなき、蒙昧愚痴の僕從は、謬て俺們を、疑ふことのありとても、綷の虚實を問糾さで、俺們をもて不良の人とせらるゝは、是甚麽なる道理ぞ。知ずば具に説示さん。膝を找めてよく听ね。俺們も亦盗兒に、行裹を奪れたり。その故は箇樣々々。と告るを夏行聞敢ず、怒れる聲をふり立て、噫盗兒們が悍々しくも、筋なき虚談を正しげに、いひ瞞めんと欲するとも、其頭の事は壯佼們が、注進により俺も亦、總て遺なく聞知たり。今さら詞を巧にして、懸河の辯に儘するとも、證人なければ誰かは信ん。今その口を鉗すべき、正しき證據こゝにあり。天罰思ひしらずや。と罵りながら遽しく、懷を搔撈りて、出す襦衫の片袖を、引伸し又拿抗て、やをれ盗兒これを見よ。然こそは胆の潰るゝまでに、駭きもせめ悔しく思はん。是等の事は衆人の、知らざるべければ説示さん。皆共侶に听ねかし。嚮に這盗兒們が、小斷に趕れて迯し折、慌たりけん枸橘の、樹墻を推破りて、潛り出んとせし程に、襦衫の袖を枸橘の、下枝に縫れて引斷離りしを、そが儘にして逃亡たる、

中俺三郷は、人の心一致して、勇敢なるは義を守り、質朴なるは足ることを知れるを以爭ひなく、夜は鎖ねども盜賊入らず、路に遺せし東西を拾はず。併俺武勇の致す所と遠近人に、羨れたりけるに、近曾河より這方にも、盜賊ありて徘徊す、と告るもののありしかど、搗鬼ならんと思ひしに、その言果して違ずして、人多かるに俺宿所を、賊の土足に汚さして、剩武器を竊れては、名實是より衰へて、鄰郷人に侮られん。世に安からぬ事なれば、彼此へとて部して、趕せしものの吉左右を、獨俟不樂たりけるに、西北南三方へ、遣したるはいまだ還らず、然るを東へ出したる、世智介小才二一隊の、才覺により逸早く、手剛かるべき兩賊を、誑引よせて生拘りたる、大功賞するに餘りあり。見るに其奴們兩名の、面魂は惡棍めかず、打扮も亦異樣ならねど、則是外視を欺く、老賊の致す所、出處姓名舊惡まで、招道させて頸撃落さん。程よき處へ牽居よ。快々せよ。と性急なる、武勇に誇る倚老の決斷、承りぬ。と莊客們、又立かゝりて二犬士を、牽分んとしたれども、現八も大角も、立たる儘に動ねば、噫戾かしや。と世智介小才二、身を起し來て二犬士を、推退けん、と左右より、拺むを早く引外す、現八と大角は、いひ合さねど勇士の奮激、足を飛して礮と蹴る。蹴られて世智介小才二は、苦と一聲叫びもあへず、此彼齊一身を轉して、三間あまり左右なる、庭樹の幹に投著られて、腰を折か

出て來ぬるを、現八と大角は、瞬もせず熟視るに、最堅固なる老人にて、皎々たる頭の霜は、枯野の小草を紈ねし如く、骨立たる松の膚は、深山に立る杣木に似たり。赭石なす面の色、二星を欺く眼の光り、齒は瓠仁に似て、一枚もいまだ脱ず。腰は梓の弓ならで、猶反るべくも見えざりし。身には段々筋を染做たる、仁田山紬に、厚綿斂たる衣を被て、綷組の圓帶を、腰高に結びたる、上には煤竹色なる道服を、下短にぞ被領したる、その爲體田舍備て、鳥なき島の蝙蝠歟、羽織はいまだなき世にも、胸毛も紐と組糸に、管を串たる片襷、斜に掛て苛めしき、武弁氣質の起居も暴く、四下を睨て立たるを、大家敬ひ跪く。そが中に世智介小才二、二個の老僕は笑しげに、頭を擡げ膝を找めて、大老爺御覽ぜよ。竊去られし衣箱は、千住堤の頭にて拿復し候ひき。又這兩個の盜兒を、稍宿所まで誑引寄せて、穽に掛て生拘るまでの、計の趣は、嚮に注進の爲まゐらせたる、壯佼們が口狀にて、大抵知らせ給ひけめ。擒捕たる盜兒們は、則これで候。といひつゝ傍を見かへれば、夏行屢點頭て、思ふに優たる若們が、けふの挊きいと愛たし。俺本邑に卜居して、地をひらき農を勸め、穗北梅田柳原の、三鄕を再興せしより、既にして四十餘年、上に仕る領主なく、下に叛る民あらず。今戰國の沿習にて、耕すものも刀を跨へ、耘るものも戟を携へ、畎畝に妻子を養ふものから、皆是武藝に疎からず。就

もふもあらん歟とて、作者の自注を下すのみ。水滸西遊に見えし重復と、異なるを知る人は知るべし。閒話休題。却說當家の主人と聞えし、氷垣殘三夏行は、竊に盜兒を捕捉よとて、從僕農民此彼となく、許多の人を部して、四方へ出して趕せしに、千住のかたに赴きたる、世智介と小才二が、火家の壯佼二名をもて、內通によりこゝろを得たれば、猛可に坎穽を造らして、今かく〳〵と俟程に、世智介們は兩個の賊を、欺詐りつ俱して來て、計りしごとく件の穴へ、陷して搦捕たるよしを、はや若黨が報しかば、掌をうち鳴らし雀躍したる、這夏行はよるとしの、齡も既に長濱の、七瀨過ても生憎に、なほ風波の立騷ぐ、亂れし世とて衰へぬ、武勇の魂人に捷れて、最も逞しかりければ、肚裏に思ふやう、俺知る四下は盜兒も、怕れて徘徊することあらじ、と心寬せし由斷は大敵、しかも靑天白日に、潛入て東西を竊みし、其奴們を今斬て棄ずば、何をもてこの後を懲さん。往る比購得たる、新刃を錐すに究竟なる、東西を獲たり。と歡びて、準備をしつゝ等程に、老僕世智介小才二は、拿復したる衣箱を、一個の壯佼にうち駝して、衆人と共侶に、犬飼犬村二勇士に、麁繩被て牽立來つ、先衣箱を緣頰に、うち卸さして聲高やかに、大老爺まします歟。計りし如く盜兒を、搦捕て候ぞや。出させ給へ。と喚りけり。登時主人夏行は、竊に折戶を開きたる、那若黨某甲に、斬柄掛たる刀を持して、緣頰近く

は薄板を、並べて壞を掩させたれば、綷立地に成就して、重て骨を折るまでもなく、思ひの隨に這個穴に、陷れつゝ生拘りたり。現若們が打扮は、旅ゆく武士に似たれども、出沒不測の盜兒にて、なほ支黨のあるならん。嚮には竊みし衣箱を、傍に措つゝなほ怯まで、いひ瞞めんと欲したる、かの折の擧動、物のいひざま面魂の、外物に似げなき大胆不敵、いと怕るべき癖者也。思ひしるや。と罵るを、大家急に推禁めて、世智刀禰和主の搟にて、捕捕たる盜兒也とて、談義は要なし、東人の、寢刃磨して俟給はめ。快牽立て往ずや。といふに世智介領きて、寔に然也快せよ。といそがし立て皆共侶に、庭の假山うち遶り、はや二犬士を書院なる、緣頰近く牽居けり。然ども現八大角は、いよ〳〵怕るゝ氣色なく、左ても右ても這衆人に、理を演盧實を辨ずるとも、炭氷合ねばなか〳〵に、頑愚の惑ひは解がたかり。主人の對面せん折を、俟んずものを、と思ひたる、心は同じ勇士の窮阨、默然として爭はず。、犬川犬田が去歲の夏、那片貝の別館にて、力士に捕捕れしも、慦ありけん、と後に知る。此彼寃屈の綁縛繩、孔子も陽虎に似ざりせば、陳蔡の阨あるべからず。白龍魚腹をせずもあらば、余且の網に入るべからず。梅蕾春に魁てば、霜雪且これを痛めて、後に微妙の香あり。豪傑未だ時を得ざれば、造物連りに阨に遇して、終に一世の功名あり。看官下まで讀も果さで、こは片貝の一段に、似たりとお

時現八大角は、怒れる聲をふり立て、蓬きかな莊客們、獨には言を巧にして、賺して這首へ誘引しは、這等の計較ある故歟。僞多きは愚人の本性、賊に等しき非義非法、今更に又若們に、道理を述んは無益に似たり。主人を喚びね、對面して、市虎の疑惑を言下に解ん。快喚ずや。と敦圄て、立まくするを牽禁る、壯佼們の後方より、小才二は世智介と、共侶に找寄て、現八と大角を、左見右見つゝ冷笑ひて、這盜兒們がそのざまに、なりながら俺東人に、對面を願へばとて、誰か怕れて執繼ぐべき。縱あはまく欲せずとも、御面前へ牽居なば、軈て手擊にせられんず。要なき頤を啗んより、覺期極めて念佛でも、唱て俟ね。と窘れば、世智介はいとゞしく、意氣揚々と二犬士に、うち對ひ髯搔揹て、やよ盜兒們、本事を知れりや。然らば末期の念霽しに、這鼻さまが名にしあふ、智慧を揮ひて衆人を、鎭めて首尾よく計り課せし、絆の手段を說示さん。獨に俺們多勢なりしも、身に寸鐵を帶たるものなく、捍棒農具のみなれば、若們二名の兩刀に、捷を取る事易からず。毛を吹て疵を求んより、哄すに如じ、と尋思して、いはるよしの搗鬼なるを、知りつゝ陽には承引て、はやく宿所へ人を走らせ、却東人に絆の由と、計略の趣を、報知し稟せしかば、這里にもはやく准備あり。造措れし坎阱は、近属倉廩の修復により、這頭の壞を穿取られたる、迹そが儘にあるをもて、思起せし俺妙計、穴の上に

も、氷上遠く吹風に、丹楓流れて濃薄き、波濤のよるべの綾錦、たゝまくしつゝなほ求食る、鳥は一隻か鶺鴒、倘乃者や渡りけん、雲井逈に落し來て、榎實群食む椋鳥に、鶫鶍うち雜り、噪ぐ下枝に掛藁の、出來秋見えて豐饒なる、三飱毎に餘りあれば、飽て匍匐ふ門の狗、夕辰作る鷄と、共に雌を喚ぶ鴿も、富に集る本邑の、長者なりきと猜したる、現八と大角は、前門より找み入りしを、世智介は這方へとて、玄關よりは請も登せず、母屋の外面をうち遶らして、庭の折戸をうち敲けば、内より一僴の若黨出て、そは世智老僕にあらずや。と問へば答て世智介們也。那盜兒を趕走らして、皮箱を拿止め給ひぬる、旅人達を將て來にけり。快開てよ。といそがせば、應と回てそが儘に、找み近著き鎖を拔きて、誘とばかりに二犬士に、揖讓をしつゝ先に立て、書院のかたへ案内をす。當時世智介小才二僴、なほ幾名の莊客も、咸二犬士の後に跟て、倶に庭にぞ入りにける。爾程に現八大角は、又若黨に案内をせられて、雜貨庫の後なる、樹梢深かる細路を、推續きつゝゆく程に、思ひもかけず共侶に、大地を禹斜と踏破りて、吐嗟と叫ぶ程しもあらず、愕然として仰反ながら、坎穽に陷りしを、後方に立たる衆人は、獲たりや應と走り寄る。そが中にも魁を爭ふ、壯佼のみぞ件の穴に、跳入り折重りて、現八と大角を、はや犇々と綁めて、宙に吊して推抗るを、上なる衆人受拿て、そが儘撐と推居たり。登

は小才二、小可は、名を世智介と喚るゝもの也。却東人は這頭にて、大かたならぬ威徳あり。これにより奴婢們はさら也。穂北梅田に世渡るものの、皆その庇に寄らぬは稀にて、當所中興開發の、大財主にて候也。噫益もなや虚々と、多辯に時の移りぬべし。誘おん案内を仕らん。といひつゝ後方を見かへりて、僉快來ずや、刀禰達の、承引せ給ひしぞよ。と喚べば大家應と答て、堤の下に找み來つ。已前の無禮を陪話るもあり。然らぬも倶に笑しげに、立並びたるそが中に、逞しげなる、一個の壯佼、堤に登りて二犬士に、揖讓をしつゝ衣箱を、楚と駝搭て立程に、大角も現八も、倶に徐に下立けり。登時世智介小才二は、衆人を二犬士の、前後左右に從して、氷垣の宿所へ案内をしつゝ、連りに路をいそぎけり。恁而現八大角は、穂北の荘に來て問へば、這里は字を操野と、喚做たる一邑にて、巷路を左へ一町ばかり、引入れたる有庇坊に、一座の莊院あり。則是氷垣殘三夏行の居宅也。但見れば松柏の老たるが、幾株欝繁粒たる、南向に苛めしく、黒く貫高なる衡門を、扉廣に推建たる。左右には枸橘の樹墻を折遶して、裏面には玄關とおほしき處、書院めきたる茅檐の、樹粒の間に見ゆるのみ。其頭は安定ならねども、門邊よりして十間あまり、這方に流るゝ細小川を、構塹に取做して、席薦二枚許なる、古石碑の長やかなるを、そが儘橋にしたりしかば、渡るに中は絶ざりし、龍田の秋にあらねど

は、年老たれども心ざま、いと勇悍くして武藝あり。且その皮箱に斂られしは、尋常男女の衣裳にあらず。鐵羅短衣肱甲臑盾、皆是祕藏の武器なれば、一皮箱でも重價あり。うち見つるより重ければ、那盜兒が得堪ずして、打卸しつゝ憩ひしならん。慿まで具に告まつれるは、旅ゆく刀禰を推留めて、宿所へ伴ひまゐらする、緈皆自他の與なるを、やよや歹うな聞給ひそ。旣に是等の趣を、注進の與壯佼を、二名宿所へ還したり。いかで〳〵と訛音に、諄かへしたる長談を、稍聞果し現八は、大角を見かへりて、犬村あれを聞給ひし歟。這輩の所望の一條、餘義なき情由にあらずや。といへば大角點頭て、現那程にいはるゝを、推辭ば後暗きに似たり。素より急がぬ旅なるに、非如十町二十町、立戻るとも厭ふに足らず。と應て聽て理會の、壯客們にうち對ひて、いはるゝ趣その意を得たり。那盜兒を認りしは、便是俺のみ也。俺が奪れし行裏は、拿も復さで人の東西を、拿止めたるそがうへに、後走なる各々の、證人に慿るゝは、寔に烏滸の所行なれども、前路を急ぐ旅ならねば、そは左も右もの事ながら、這衣箱を主人の東西と、正可にいへる證据やある。什麼汝達は從類歟、その名も聞まほしけれ。と問れて歡ぶ兩個の莊客、迭に見返り含笑て、宣ふ趣理り也。それ覧せその衣箱に、漆繪したる抗羽の蝶は、迺氷垣の家の花號、紛れあるべうも候はず。又小可們は那家に、年來仕る老僕にて、他

を覘ふ盗兒が、背門よりはやく潛び入りて、出し措たる衣箱を、駝もてゆかんとせし程に、一個の小斷が厠にをり、立出るときこれを見て、盗兒ありと叫びしかば、盗兒は這聲に、驚されて衣箱を、そが儘其首にうち捐て、慌たりけん背門へは走らず、庭を遶りつ枸橘の、藩籬を潜りて逃亡たる、程しもあらず人も咱も、咸庖湢より走り來て、容子を問へば盗兒は、はや迯去て東西も取られず、折から猛可に降る雨に、出せし東西を濡さじとて、手に〳〵擡げて積藏へ、納つゝ見れば衣箱の、五箇なりしに四個ありて、一箇は足らずなりにけり。原來件の盗兒は、一人ならず支黨ありて、他より先に入りたる奴が、はやく一箇の衣箱を、背にしつゝ逃たるならん。然とは知らず由斷して、聊時の後れしとても、遠くはゆかじ趕蒐よ、と罵譟ぐ閭宅の門擇、主も家頼も血眼に、なりつゝ詮議を做す程に、田園に出たる農奴們の、那驟雨に稻刈あへず、濡つゝかへり來にければ、主人は遺なく招聚へて、よしを示し部を定め、そが一隊は竹塚、一隊は梅田柳原、又小可們は千住のかたを、投て這首まで來つる也。恁いふ情由で候へば、那盗兒を捕捉ずして、衣箱をのみもてかへらば、そは東人に疑はれて、外より來つる賊にはあらじ、事の紛れに小可們が、竊てはやく滾す折、小斷に見られて忽地に、穿鑿緊しくなりしかば、緈恁々といひ誘へて、駝もて返しつるならん、と思はれもせば身の與歹かり。小可們が東人

容れて、僉疑ひを釋れし歟。と問かへされてさゝ候。その衣箱をもて來ぬる、盜兒の事の趣、宜ふよしをなほ疑ふて、又云々といふにはあらねど、いかにせんその衣箱は、小可們が衣裳にあらず、是東人の東西なるに、那盜兒們が何の間に歟、駝搭て逃げしを趕ども及ばで、手を空うせば術もなし。那盜兒を捕捉ずして、慭にその皮箱をのみ、拿もて還らば東人が、俺們をこそ疑ふべけれ。願ふは刀禰達小可們と、倶に東人の宿所に到りて、那盜兒の爲體を、面前に說知し給はゞ、初よりして小可們が、竊ざりしを會得せられん。這義を承引給ひねかし。と憑むを現八うち聞て、そはさる意味もありぬべし。什麽汝達の東人の、宿所は這里より遠からずや。原是豪家歟、村長歟。從類多くありながら、白晝に賊の入るをも知で、是等の東西を竊れしは、故あること歟甚麽ぞや。と再問へは、さゝ候。小可們が東人は、穗北梅田柳原這三鄕に名もしるき、氷垣殘三夏行と、喚做す鄕士で候也。內儀は曩に世を去りて、家には重戶と喚做たる、只一箇の女兒あり。三稔ばかりさきつ比、落鮎餘之七有種といふ、壯佼を女壻にして、田園の業を任用して、その身は宿所に在る甲斐に、今朝しも背門なる積藏に、鼠の入りしを見出して、生穿ちし穴を塞げとて、僮僕們に吩咐て、內なる東西を拿出さして、修復に時の移りしかば、生平より後れし晝飯を、皆たうべん、と思ひつゝ、跡には心づきなくて、霎時庖厨に退りたる、折

も、なほ聽れずば是非に及ばず。武士たるものが盜賊の、濡衣を被せられて、阿容々々として田夫野人の、綁縛を受べきや。俺們二名死を見かへらで、大刀折れ勢ひ究るまで、擊ば千軍萬馬なりとも、煞靡けんこと疑ひなし。然るを況や農夫野老の、才に十名十五名、擊倒さんはいと易かり。可惜命を隕さんより、疑念を霽して這衣箱を、拿もて去ば俺們が、素より望む所也。迷ひを取らば必死は覿面、一人なりとも恙なく、還らんと思ふべからず。然でも挑む歟、爭ふ歟。と敦圉懲す勇士の奮激、刀の弛甘げて、寄らば擊ん、と睨へたる、氣色に憚る壯佼們は、それは。とばかり口隱りて、齊一後方を見かへれば、蓬し找め。那口車に、うち乘せられて逃すな。と弱腰推たる二隊の壯佼、なほも執念深罵めくのみ、爭ひ果しなかりける。そが中に一兩名、こころ得貌のものありて、罵り已ぬ壯佼們を、推鎭め聶きて、退かすること一反ばかり、大家其首に立聚ひ、額を集めて商議の、折々這方を見るもあり、頷くもあり笑もあり。既に商議し果たる、夥計の莊客二名ばかり、はや衆人に立別れて、穗北のかたへ走りけり。登時壯佼們を鎭めたる、件の莊客一兩名、堤の下に找み來つ、二犬士にうち對ひて、微笑ながら小腰を屈めて、刀禰達允させ給へかし。理も非も分ぬ壯佼們が、宣ふよしを思はずに、太く無禮を仕りぬ。と勸解れば現八大角は、共侶に點頭て、爾らば汝達俺們が、いひつるよしを信

かし。俺も亦向の程、穗北頭の驟雨に、逐れて連りに走りし折、背にしたる行嚢を、盜兒に掻攫れて、趕つゝ這里に來にければ、そが支黨とおぼしき癖者、這衣箱に尻を掛て、堤の上に憩てをり。登時此彼兩個の賊は、近づく俺身を寄せじとて、推並び力を勠して、且く挑戰ひしを、矢庭に蹴倒し投伏せて、立ば撃ん、と刀の柄に、早手を掛し勢ひに、怕惑ひつ共侶に、そが儘河へ滾落て、泅ぎて前岸へ逃亡たり。爾るにかの折俺が行嚢は、憶はず河へ蹴落せし歟、又盜兒が掻攫ひて、もてゆきたる歟、あらずなりて、迹に殘るは俺東西ならぬ、這衣箱のみなりき。といへば亦現八も、衆人にうち對ひて、各々あれを听れし歟。俺は脚足を傷りて、後れにければ那期にあはず、事果て這里へ來にければ、遺恨やるかたなかりしを、熟思へば這衣箱も、那盜兒們が、遠からぬ、里人の家などより、竊取てもて來にけるを、重くやありけんうち卸して、後れし火家を俟たる歟、是も亦知るべからず。主を索ねて返さばや、と俺も思へば俺友も、心はおなじ惻隱の、誠は然しも淺からず。現俺が東西を竊れしも、人の東西を喪ひしも、その情等しかるべきに、快近郁に赴きて、よしを報て主あらば、將て來つべし、と商量の、折なりけるに果して違はず、各々も亦那盜兒を、趕つゝ來ぬる事情を、既に推量したれども、情由も得听かで俺們を、疑るゝは田舍兒の、思ひ足らざる所以なるべし。恁まで言語を罄して

第八輯卷之五

第八十三回

得失地を易て勇士厄に遇ふ
片袖禍を移して賢女獨知る

復說犬村大角は、犬飼現八共侶に、思ひがけなく莊客們が、推捕稠て擊んとせしを、こは何事ぞ。と許りに、驚きながら些も怯ます、齊一聲をふり立て、人々疎忽の所行をなせそ。俺們は是旅人也。素より怨もなきものを、認錯せば後悔あらん。といふをば听かでなほ囂々と、倶に閱くそが中に、先に找みし兩三名、持たる棒を突立て、佗と疾視へつ冷笑ひて、噫偸兒の悍々しくも、這期に及びて分說听んや。嚮に若們が竊たる、衣箱は其首にあり。遂に免れぬ天罰なりき、とおもふて快く綁縛の、索に被らばなほ幸ひに、呵責の苦痛をゆるされん。然ずば目にもの見せんず。と勢ひ猛く罵れども、然しも騷ぬ二犬士の、面魂の逞しげなるに、腰に挿たる兩刀さへ、本事の程を料り難て、左右なくは僉打も蒐らず、なほ捕稠たるのみなれば、既にして便りを得たる大角は徐やかに、又衆人にうち對ひて、人々太く譟がずに、俺いふよしを聞ね

は鼠類也。穴居する物ならずといふとも、怕るべきの義に憑らば、この名なしとすべからず。とにもかくにも麻布なる、まみ穴を眞名に書ば、䶄鼠に作りて、怕るべきの、義となさば妥當なるべし。江戸の地名を誌せるものに、かばかりの考だもなきは、遺憾の事ならずや。抑〻本輯第七卷に、まみ穴の事あれば、此に愚考を附錄して、下帙の引に代るのみ。

天保三年壬辰夏五月中浣

簑笠漁隱識

ものなれば、昔東國にては、鼯鼠を、をさ〳〵もみといひしならん。その證は、今も日光山の頭にて、鼯鼠の老大なるものを、モモングワアといへり。モモンはモミの訛り也。グワアはそが鳴く聲なるべし。さてこの鼯鼠を、下野にてはもょんぐわあと唱へ、武藏にてはまみといへるにやあらん。(まみはもみ也、マモ音通へり。)然らばむかし麻布長坂のほとりには、人家もあらで、樹立ふかく、晝もいと闇かりける比は、鼯鼠などの棲べき處也。故にまみ穴の名の遺れるにや。今も世人の小兒を權すに、なべてもょんぐわあといふ也。鼯鼠の形はいとも〳〵、恐べき物なれば、まみ穴の名の高かりけるも、(今はこの穴なし。)是等によりて思ふべし。縱その穴に鼯鼠などの、棲たることはあらずとも、いとおそるべき穴なれば、土俗これをもみ穴とも、又訛りてまみ穴とも、呼なしたるにあらんかし。まみ(即もみ也)は則魔魅にも通ひて、是おそるべきの義也。(今もおそるべきものを、ももんぐわあといふが如し。)貒をまみといふよしは、方言なる歟知らねども、考る所なし。(安永七年の夏両國橋の頭にて觀せたる、千年もぐらといふものは、即貒也。予も觀たり。鼴鼠にはあらず。)然るを若水の、貛をまみと和訓せしは貒と貛とは似たるものにて、共に穴居を做すなれば、貒の和名をミといふに、對へて貛をまみといふにや。しからばまみのまはまねにて、貒をまなぶの義なるべし。又愚說の鼯鼠

遲。短足。短尾。尖喙。褐色。常穴居。時出竊二瓜果一而食。本邦處處山野有レ之。人多不レ食。惟言。能治二水病一。予昔略見レ狀。然未レ試レ之。則難レ辨爾といへり。これらの諸說を參考るに、近來世俗のマミといふ獸は、ミを訛れるに似たり。是則貒也。又田舍兒は、これをミタヌキといふ。その面の狸に似たれば也。何まれミとのみは唱よからぬ故に、或はマミといひ、或はミタヌキといふにやあらん。かゝれば麻布なるまみ穴も、むかし貒の棲たる餘波なる歟。遮莫貒は大獸にあらず。よしやその穴ありとても、地方の名に呼べくもおもほえず。且貒をミタヌキと唱るは本づく所あり。是其頭の、狸に似たれば也。又貒をマミと唱るは據ところなし。何となれば、貒に眞僞の二種なければ也。因て再案ずるに、麻布なるまみ穴は、元來貒の事にはあらで、鼯鼠ならん歟、と思ふよしあり。鼯鼠は和名モミ、一名はムサヽビ也。和名鈔鼯鼠の下に、引二本草一云、鼺鼠(上音力水反又力追反)一名鼯鼠(和名毛美俗云無佐佐比)兼名苑注云。狀如レ猨而肉翼。似二蝙蝠一。能從レ高而下。不レ能二從レ下而上一。常食二火烟一。聲如二小兒一者也。かゝれば鼯鼠の和名は毛美なれども、いとふるくより、むさゝびとのみ唱たるにや。歌にはモミとよみたるものなし。萬葉集第三、「むさゝびは木ぬれもとむとあし引の山のさつをにあひにけるかも」と、よめるにて知るべし。しかれども、古言は多く田舍に遺る

八犬傳第八輯卷之五　附錄

江戸麻布長坂のほとりなるまみ穴は、いと名だたる地名なれば、知ざるものなし。沾涼が江戸砂子に、雌狸穴と書たり。雌狸をマミといふ義は、何に據れるにやこゝろ得がたし。貝原益軒の大和本草には、貒をマミとす。篤信云、マミ、ミタヌキトモ云。野猪に似小なり。形肥て脂多く、味ヨクシテ野猪の如し。肉ヤワラカ也。穴居ス。其四足ノ指各五ッ、恰如二人手指一。獵師穴ヲフスベテ捕レ之。行クコト遲シ。貛ハ貒の類ナリ。狗ニ似タリ。並ニ穴居スといへり。又本草綱目（五十一獸之二）貛の下に、稻若水和名を剿入て、マミとす。李時珍云。貒。豬貛也。貛。狗貛也。二種相似、而略殊。狗貛似二小狗一尖喙。矮足。短尾。深尾。褐色。皮可レ爲二裘領。といへり。かゝれども、和名をマミといふ獸はなし。益軒若水の二老翁、一は貒をマミと訓し、一は貛をマミと讀せしは、訛によりて訛を傳ふ、世俗の稱呼に從ふもの歟。今按ずるに、貛は和名鈔に載せず。貒は和名ミなり。和名鈔（毛群部）貒の下に、引二唐韻一云、貒（音端、又音旦、和名美）似レ豕而肥者也。本草云、一名貛猯（歡屯二音）といへり。獨野必大本朝食鑑に、和名鈔を引て、貒をミと讀たり。必大云、貛頭類レ狸。狀似二小猯一。體肥行

ひしも、その情誰か異なるべき。某は近村なる、家毎によしを知らして、主ありといはゞ將て來なん。和殿は足の疼みもあらんに、憩ひて且く等給ひね。と相譚果て遽しく、堤を下んとせし折から、趕蒐來つる地方の莊客、その隊約十名あまり、手に〳〵棒を挾み、勢ひ猛く咄と嘷きて、既に近づく堤の頭に、大角と現八が、立在たるを見出して、いよ〳〵競ふ詉聲高く、彼見よ賊は那首にをり。遣るな迯すな。と罵りて、前後を爭ふ血氣の壯佼、走らば擊ん、と二犬士を、はや犇々と拿卷けり。畢竟件の衆人が、大角と現八を捕稠たるは甚麼なる故ぞ。其は次の卷に、解分るを聽ねかし。

るにあることなし。嚮に二賊と挑みし折に、蹴落して水に沈みし歟、しからずば那偸兒が、逃て水中に入る時に、又搔攫ひてもてゆきたらん。這推量に違はずば、輙びても空は起ずといふ、世の鄙語に似たりける、危窮の折にも竊偸に賢しき、手通魔に熟れしを爭何せん。只這損失のみならで、見給へ、襦衫の片袖を、曳斷離られてなくなりたり。是も亦蹴落したる歟、風に吹れて水中へ、自然と落て流れし歟。袖は惜むに足るものならねど、行裹には金もありしを、那偸兒さへ俺東西さへ、拿も留めず喪ひしは、噫俺ながら遲鈍かりき。跡に遺るは這東西のみ。這衣箱は火家の賊が、先だちて這里にをりし時、そが傍にありしかば、是も亦何處よりか、竊取り駝ひ來て、霎時卸して憩ひしならん。現得失は皆時なり。前面に路なき這堤に、那偸兒を趕稠たる、甲斐なく東西を喪ひて、主も得知らぬ衣箱を、心ともなく拿留めしは、益なかりき。と呟くを、現八然こそ。と慰めて、某は先の程、雨に追れて走る事、幾もあらずして、路の小石に足を蹴かけて、思はずも後れたり。倘初より力を勠して、件の二賊を捕捉なば、行裹をば喪ふまじきに、悔て及ぬことながら、切て這衣箱の、主を索て恁々と、報知しなば陰德の、一端になることもやあらん。といふを大角うち聞て、その議寔にしかるべし。この儘這里に棄てゆかば、那偸兒們がかへり來て、再駝ふて走りやせん。今咱が東西を喪ひしも、人の東西を喪

原に到るとき、支黨なるべし、一個の癖者、最大きなる衣箱を、卸して堤に鵠立たり。當下件の偸兒は、那癖者を遙に見て、哥々拯へ。と喚かけて、堤に走り登りしを、大角は些も擬議せず、噫偸兒奴が其首より前に、脫るゝ路はなからんを、命惜くば裹を返せ。と罵りつ足に信して、透さずはやく趕近著くを、兩個の賊は、よせ立じとて、開き合せし左右より、榮螺に等き拳を固めて、打んと競ふを大角は、右に受左に拄て、烈く當る修煉の拳法に、惱されても懲ずまに、左より組む一個の賊の、項を抓て揉返せば、右より携る已前の偸兒、利手を拿るを振拂ふ、郤舍に弗と犬村の、襦衫の袖を曳斷たる、程もあらせず大角は、左右一度に投伏せて、刀の柄に手を掛れば、吁嗟と怕るゝ兩個の偸兒、立つ足もなく堤より、河へ𣵀と跳入りて、浮きつ潛りつ共侶に、泅ぐもはやき草頭蛇の、水を渉るに異ならず。瞬間に前面の岸なる、千本の蘆葭にわけ入りて、往方も知らずなりにけり。浩處に現八は、稍犬村の跡を慕ふて、後走に來る程に、驟雨ははや歇たりける。登時大角は、現八にうち對て、那偸兒の事の趣、箇樣々々と報知して、件の兩個の歹人は、世に晝寫と歟喚做たる、小賊でありけんかし。此彼共に投伏せて、斫て棄んと刀の柄に、はや手を掛し勢ひに、怕れて河に跳入りて、泅ぎて倶に逃亡たり。爾るに某が行裹は、初搔攫ひて走りたる、偸兒奴が這處へ、もて來にけり、と思ひしに、方纔索


千住堤に大角二賊を拉ぐ


あき人
大角

ければ、現八も大角も、菅笠を傾けて、直奔に走りたる、そが中に現八は、路の小石に足を蹴かけて、霎時疼痛に勝ざりければ、思はずも大角に、二町許後れたり。とは知らざりし大角は、なほ只管に走る程に、背に駝ふたる行裹の、結理解けて後方なる、地上へ礑と落たるを、知らでや走る勢ひに、七八間ゆき過て、心づき歩を止めて、其方を急に見かへれば、跡より來ぬる一個の男子が、早行裹を搔攫ひて、逃んとせしを大角は、偸兒等。と喚かけて、趕拿へんとする程に、賊は舊來しかたへかへらず、忽地路を横ぎりて、河原を投て逃走るを、大角はなほ脱さじとて、驀地にぞ趕ふたりける。看官まづよく思ふべし。當時の千住河は、河の瀬今と同じからず。這河は是、墨田川の枝川なれども、素よりして小流にあらず。千住は河の東にありけり。昔は鎌倉より、陸奥のかたに到るに、田畑在より、川ふたつばかり渡して、千住に到り、石濱に到り、又石濱より、墨田河を渡して、須田村に到り、柳島に到れり。（長祿の江戸地圖には、阿佐谷ありて千住はなし。阿佐谷は今の淺茅原なるべし。長享の江戸圖には、千住ありて阿佐谷なし）これ三四百年前の、鎌倉街道なるよしなれども、いづれの川にも橋はなし。千住以西は、本街道にあらず、無下の村落なりしを知るべし。今をもて古の地理を論ぜば、舩に契して劍を求る如くなるべし。閒話休題。爾程に偸兒は、なほも連に逃走りて、はやく河

の名をのみ知る犬塚犬山、犬田も東國の人なれば、京師よりして西のかた、九州四國に杖を駐めて、光阴を送るべうもあらず。今番も亦上野より、武藏下總を徧歷せん歟、和殿のこゝろいかにぞや。と問へは現八點頭て、某もその念慮あり。下總の行德は、犬田が故鄕なるにより、曩に那里に赴きしに、小文吾は故鄕に還らす。曳手單節の往方すら、知るよし絕てなかりしかども、旣にして光阴を歷たり。那文五兵衛翁は世を去りて、家さへ迹なくなりぬとも、ふたゝびゆかば便りを得ん歟、是も亦知るべからず。這度は且行德を、心當に首途せん。今さら猶豫することかは。といふを大角諾ひて、二稔以來一犬士にだも、得遇ざれば舊里へ、立よりたれど本意にあらず。一日も先へいそぐべし。と應をしつゝこの夕、赤岩犬村なる所親氷六們に、遽しく別を告て、その詰旦現八と、共に這地を立去りけり。時に文明十四年（小文吾莊介が靑柳の歇店にて、毛野に別れしも是年なり）秋九月中旬なれば、日はいと短くなりしかど、なほ寒からず暑からず、只驟雨のしば〳〵なりしを、現八も大角も、旅宿に熟てものとも思はず。且下野なる宇津宮に、五七日杖を駐めて、彼此となく遊歷しつ、是より江戶へ赴きて、更に又行德に、到るべしとて共侶に、ゆくこと又只一日ならず、三日といふ未牌の比に、武藏州足立郡千住の鄕に程遠からぬ、穗北の畷路を過る折、驟雨猛可に降そゝぎて、笠宿せん家もな

ば、空だのめなる朝涼の、霎時こそあれ升る日に、堪ぬ酷暑を菅笠に、凌ぎて倶に久後は、且休題單表、犬村大角禮儀は、曩に（文明十三年）犬飼現八信道と共侶に、自餘の犬士を索んとて、居宅を捨故郷を離れ、且鎌倉に赴きて、旅宿に月を累ねしかども、些も便りを得ざりしかば、箱根山をうち踰て、伊豆駿河いへばさら也、遠三尾勢美濃近江、城下、郊外村落まで、這里に半年、那里に三月、旅より旅に光陰を送りて、はやくも二稔を歴たりけり。當下大角思ふやう、今玆の秋は亡妻の、三回忌に丁りたり。投かたもなき旅なれば、權且故郷にかへりゆきて、親の墓に詣づべく、且雛衣の菩提を弔ふて、ふたゝび諸國を巡るべし、と尋思をしつゝ恁々と、現八に相譚ひしを、現八听て異議に及ばず、しかるべし。と應しかば、此年の夏、六月の下澣に、現八と共侶に、下野眞壁の赤岩なる、舊里にかへり來て、所親の宅に寓居をしつつ、實父母養父母、及雛衣が墳墓の、苔を拂ひ香華を手向て、念誦に時の移るを覺ず。左右する程に秋にもなりぬ。却雛衣の三回忌には、璧返なる新道場に、僧を聚へ經を讀して、這法筵に列りたる、赤岩犬村なる所親氷六們に、饗膳の儲あり。又現八が親糠介夫婦、養家見兵衛夫妻の靈をも、這時共に祔祭りて、犬村犬飼兩施主たり。准備丁寧なりければ、里人總て感嘆して、招ざれども結緣の、道俗幾百名に歟及びけり。綷果て大角は、又現八と商議するやう、そ

智慧勝れたるものならずば、これらの事をよくせんや。恨むは要なきことにこそ。と諭せば小文吾百會を撫て、然听ては他に脫落はなし。和殿の細注徹りせば、兄弟墻に鬩ぐといふ、詩に似たる後悔あらんを、思はざりしは愚痴なりき。那犬阪が思慮深かる、石濱にて夜討の折も、文あり武ある至妙の進退、及び難し、と感ぜしを、忘れて腹を立たりき。さこそ可笑しく思はれけめ。と陪話れば莊介含笑て、人おの〳〵得たる所あり。膂力は犬阪和殿に及ばず、智計は和殿いかにして犬阪に及んや。八行の内中智の字の玉を、得たる應驗のなからずやは。恁れば且く度外に措て、甲斐の石禾へ赴くべし。といふに小文吾然なり。と應へて、遽しく緣頰なる、戸を推開つ漱ぎて、身裝する程しもあらず、旅舍の婢妾がもて來ぬる、烹立の饌の早飯も、友を思へば又這里に、一箇缺たる三椀の、高裝飯に味噌羹汁掛て、見れば是さへ山川の、歌にも似たり三人前、なほあまりある晝餉の料の、割籠も倶に受取て、胸の憂也膿也いへばえに、いはで心に包錢、茶錢も添し房賃を、遞與していそぐ朝びらき、立出るとき莊介は、手拭をもて障子の文字を、拂へば滅て迹もなく、往方も知らぬ犬阪を、思ひ捨ても忘られぬ、昨宵の團坐、夢ならで、覺て悔しき欝悒、胸と峯とに雲の集る、甲斐路を投て出てゆく。莊介と小文吾は、這地に毛野と相別れて、あはまく思ふ道節さへ、既に石禾の指月院に、在らずなりしを知ざれ

移して廣く行ふべし。胤智この義を思ふをもて、今俺們と共侶に、甲斐の石和に赴きて、犬山に對面すればとて、八犬未だ足ざれば、這里の旅舍に異ならで、迭に意中を盡さんのみ。身に大望ある故に、自餘の犬士を一日も、索巡らん暇はあらず。愆れば寃家緣連を、撃得て後に後安く、義をも盡さめ、信をも致さめ。その折までは己がじし、逢遇離別に拘らず、成ことありて團圓の、時を俟んといへるこゝろを、這十四言の句中に籠て、凝成白露云々と、寫遺せしにあらずや。といへば小文吾點頭て、寔に毛野は才子也。某文辭に疎ければ、然までに了解せざりしかども、歌のこゝろはなほよく聞えて、理ならずと思はねども、既にして大かたならぬ、交りを結びながら、贈りし金を返せしは、面に從ひ後に譏る、浮薄の友と思へる歟。この事ばかり毛野に似げなし。恨むべし、うらむべし。と繰返しつゝ呟くを、莊介徐に見かへりて、然ないひそ犬田生、熟思へば這金を、遺されたるも亦所以あり。他と咱とは義を結びて、異姓の兄弟なりといへども、金のみ受て咱が意に悖らば、貪るに似て潔からず。然とて金を返しては、又義を破る憾あり。この故に俺們が、贈りし金を受納めて、沙金三包を遺せしは、是贈答の禮にして、他より咱に餽りし也。昨宵の金を返すにあらねど、沙金は原是煉金より、その價廉ければ、這三包は十金の、答禮によく相當せり。愆てぞ受て貪らず、返したれども義をも破らず。

たる迹に、這東西あるをよく見れば、五兩包の沙金なるべし。しかも是三包あり。といふに莊介眉根を顰めて、原來毛野は復讐の、宿念を遂るまで、なほ單身であらんとて、潛に出てゆきたる歟。然るにても這沙金を、遺されたるは本意なき事也。時移らずば趕留ん。といふに小文吾も今さらに、胸安からねば、推續きて、遽しく臥簟を出て、心ともなく緣頰の、這方に建し引亮障子を、見れば數行の文字あり。要こそあらめ。と共侶に、うち吟じつゝ讀くだせば、

凝成白露玉未レ全　環會流離儘ニ自然一

めぐりあふ甲斐ありとても信濃路になほ別れゆく山川の水

問でもしるき胤智が、件の沙金に相添て、遺せし詩歌と猜するのみ。燒捨たる追婚火盤の、浮炭をもて寫たればや、七言二句も、三十一字も、拂はゞ軈て滅つべき、字々咸鮮ならねども、こゝろは通て明なるを、莊介只顧感吟して、犬田は何と思ひ給ふぞ。現胤智は孝子也。既に過世の因果を悟りて、異性の弟兄八名あるべき、ことをしこゝに知るといへども、なほ復讐の宿望を、果さん爲に見かへらず、飄然として立去りし、こゝろは詩歌に顯然たり。約貴きも賤きも、父母ありて後に兄弟あり、兄弟ありて妻子あり、妻子ありて子孫あり。こゝをもて孝悌、慈愛、幷に輕重前後あり。孝は百行の基にして、必後にすべからず。忠信仁義も孝よりして、

べく、和君も寃家緣連を、索ぬて本意を遂られん日を、安房へ赴く時と知るのみ。遲速の料りがたきこと、かくの如くなるものを、這處より石不まで、二十里に足らぬ路なるに、何にか歎ふことのあるべき。一圓那里へ赴き給へ。と辭を盡して說諭せば、毛野は且く沈吟じて、里見殿の仁政武德、伏姫上の孝烈義俠、この餘も忠臣義士節婦の、那行狀を傳聞ては、心裏恥かしきこの身の不肖、親にはいまだ孝ならず、友にも信を疎にせば、犬士の屑といはれなん。ほとほと當惑首鼠兩端、速には決斷しがたし。なほ又再四尋思して、翌の朝開に誨を受ん。且く等せ給ひね。といふを莊介諾なひて、いはるゝ趣理り也。霎時の程と思ひしに、夏の夜なればはや深たり。誘就枕るべし、ねまり給へ。といふに小文吾も強難て、然らば翌の事にせん。闔宅の男女は何の間に、臥房に入りし歟音もせず。幮さへあれば夜は安かり。いざ。とばかりに三枚の臥薦を、手々に開きつ、吊緖を引て、三人して吊る六布七布、萠葱の幮は色後て、八は過ぎたる曉に、枕ならべて程もなく、はや睡にぞ就きにける。爾程に莊介小文吾は、憶ずも熟睡やしけん、明るもしらで臥たりしを、旅舍の婢妾に喚覺されて、駭きながら共侶に、起出んとして傍を見るに、犬阪毛野はゐざりけり。他厠へや登たりけん、と思ひにければ掛念せず。幮の下を搔揚て、出んとしたる莊介を、小文吾やよ。と喚止て、犬川生これ見給へ。犬阪が臥

も悌順には親の遺財あり。又犬山道節は、軍用の餘財あるをもて、分與へられしも尠からず。里見殿より賜りし、沙金もいまだ用ひ果さず、剰いぬる日由充の、惠れし金もあり。多きを減して寡きに、加るは是理の當然。枉て這議に隨ひ給へ。と連りに諭して果しなければ、毛野はやうやく承引て、件の金を受とりつ、うち戴きて收めけり。當下莊介又いふやう、甲斐の石和なる指月院には、丶大法師住持たり。今那里には犬山道節、蟹崎十一郎も寓居せり。よりて犬田を伴ひて、指月院にゆかまく欲す。和君も共に那里に到りて、丶大犬山蟹崎に、快對面し給へかし。と誘ふを毛野は承引ず、某とても那人々の、なつかしからぬにあらねども、索る仇にいまだあはで、迭に歡ぶ良友に、面會の與甲斐にゆきなば、是孝を後にして、義を先にするものに似たり。その義は折もあるべきに、今番は允し給ひね。と固辭を小文吾側より、恁いはるるも理りながら、今とて寃家縁連の、所在を探り得たるにあらねば、甲斐へ赴き給ふとも、是孝道の虧るにあらず。百足の虫の死しての後も、その倒れざるものは、助け多きによりてなり。恁れば甲斐へ赴きて、料らず仇の所在を知る、よすがあらじといふべからず。且俺黨七犬士は、里見殿の家臣となるべき、二世の因縁あるものから、八犬こゝに具足して、倶に安房へ赴く日を、誰か今より前知せん。某們は犬塚犬飼、犬江這餘の一犬士をも、索ねて竟に環りあふ

たる、登時毛野は愀然と、荘介小文吾にうち對ひて、二兒によりて既に知る。犬山生は君父の仇たる、定正主を撃がたくとも、君と父とを害したる、越杉駄一、竈門三寶平、這兩敵を撃捕て、志は致したり。某は馬加常武、父子從類を撃たれども、父を害せし逸東太緣連をまだ得撃ねば、一日も心安からず。索る仇には遇ずして、思はざりける鄕武們を、撃果せしは偶然也。これを譬はゞ唐山にて、張公が竊盜して、李公が網めらるゝといひけん、鄙語にも似たりけり。何の日にか緣連を、撃ことを得て父を祭らん。やる方もなき心盡しを、察し給へ。とうち歎くを、荘介小文吾慰めて、霎時聶き相譚たる、小文吾は遽しく、行裹を解ひらき、金十兩をとり出して、荘介と共侶に、これを毛野に贈ていふやう、迭に宿望ある旅宿には、盤費こそ肝要なれ。某們は幸ひに、恁ても盤費に匱しからず。勿論今日より後々まで、影の貌に添ふごとく、進退を倶にして、よろづを賄ふべけれども、然りとても腰空しくば、折々不便の事あらん。こはいと薄義に候へども、受納め給へかし。といふを毛野は推禁めて、そは淺からぬ事ながら、某も亦初より、聊盤纏の貯ありしに、顯成院主の遷化の折、俗緣あるの故をもて、又十金の遺財を得たり。嚮にも既にいひけらし。形貌を乞兒に窶せしは、盤費竭たる故にあらず。この義は心安かるべし。と推辭を小文吾荘介は、なほ懇切に推薦めて、そはその該で候はん。なれど

鄕武主僕のみならで、そゝのかしたる豐寶も、其里に命を隕したり。總て俗子の似而非推量には、憖る錯誤多くあり。世の胡慮にならんのみ。といへば莊介頷きて、那們は素より斗筲の小人、士君子の齒に掛るに足らず。初和君が這刀を、爭ひ給ひし擧動に、聊亦似たることあり。曩に犬山道節が、村雨の刀の手に入りし折、女弟濱路が枉死の末期に、そを犬塚に返せといひしを、道節はその名刀もて、君父の仇なる定正主に、近づきて擊んず、と思ひにければ承引ず。その折に某は、料らずも遭際しつ、刀をとりも復さんとて、道節と戰ひしに、もの別れになりて往方を知らず。これは是六月の、十九日の夜の事なりき。憖て七月の初旬、荒芽山にて道節も、犬士の隊たる因果を悟りて、刀を犬塚に返したり。然ば和君が這兩刀を、亡父の故主の重寶也とて、最惜み給ひしを、某は亦亡親の、紀念なれば、と爭ひしも、解けて早くも返されたり。給と云恰といひ、忠孝節義の外を出ず。倘這爭ひ徹りせば、異姓の弟兄なるよしを、知らで路人に等しからんを、爭ひて和し、和して歡ぶ、造化の配劑妙なるかな。此彼似たるにあらずや。といふを小文吾うち笑ひて、似たりといはゞいひもせん。なれども趣同じからず。信乃現八が許我の組擊、又某に山林房八が角觝の遺恨も、初は怨敵、後は親愛、日を同くして談るべし。犬山犬阪犬川の、上にのみ豈限らんや。といへば莊介もうち微笑て、寔に然也。と應

ぜしは、所得の玉に見れたる、文字をも竊に表せし也。犬川犬田二兒の名乘も、玉の文字に由られし歟。と問へば荘介小文吾は、共侶に點頭て、適愛たき玉兒の由來、その趣は異なれども、その奇は自他皆異ならず。亦是不思議といひつべき。玉の文字を名に命ぜしは、俺們も亦爾なれど、和君と三名のみにはあらず、犬塚戍孝、犬山忠與、犬飼信道、犬江仁、這四名も忠孝仁信、各々玉の文字を取たり。いひ合さねど義兄弟の、名號一致は過世の應驗、求ずして成り、知らずして知る。一大奇事にあらずや、と只管稱へて已ざりしを、毛野はいよ〳〵感佩して、犬川生、その兩刀を、小篠落葉と名けしも、亦是緣故あること歟。と問ふを荘介聞敢ず、否這刀に名字はなし。某は只雪篠の、兩刀とこそ喚做たれ。刀の鐔に家の服章なる、雪篠あるにより て也。然るを千葉家にありし時、小篠落葉と名けしならん。小篠は亦是鐔の花號、猶雪篠といふがごとし。落葉の刀の刃尖に、些の疵あるをもて、如右號けしにやあらんずらん。といふに毛野亦感嘆して、その考は差ふべからず。しからば落葉の葉は刃也、刃の聊闕落たれば、落葉とは名けられしを、那鄕武がこゝろ得良に、そをもて人を斫るときは、時ならずして四下の木葉の、零ることありといひ誇りて、罪なき乞丐を砍棄しは、初鄕武に誨しものの、俑を造りし僻事なれども、奇を好みしより這失あり。乞丐也とて罪なきを、殺せば惡事の報ひは覿面、

り出す一箇の玉を、莊介と小文吾は、迭代に手に受て、見れば這には智の字あり。玉品通て異ならねば、奇也奇なり。と歎賞しつゝ、視果て毛野に返しけり。當下毛野は玉を斂めて、某が這玉は、未生以前に母親の、料らずして得たる也。俺母は父の側室にて、俺身は是その遺腹の子なりき。月滿れどもいまだ生れず、懷孕既に三稔にして、粟飯原の家斷絶により、母は相摸の足柄なる、犬阪村に在りし時、點燭時候に外に出しに、忽然として流星に、似たる一隻の光物、南の方より晃めき渡りて、墜ると思へば俺母の、懷にぞ入にける。世に多かるべき事ならねば、咄嗟とばかり駭叫びて、慌て懷を搔撈るに、小大老母草の實に等しき、潔白の玉なりければ、怪みながら宿所に還りて、又よく件の玉を見るに、玉の内に智の字あり。是人作の東西にあらず、おのづからに字體を做して、いと鮮明に讀れしかば、要あるべし、と思ひつゝ、軈て鍼匣に納措きしに、その夜初更の左側に、母は猛可に產の氣つきて、俺身を安らに產にけり。爾後玉の來歷を、母の手して寫著て、玉もろ共に俺が腰著の、護身囊に藏たりしを、稍物情を知る比に、縡恁々と母親の、說示し候ひき。恁る奇特のあるものから、寃家馬加常武が、嫌忌を怕れて某を、女の子に扮て字育れしより、鎌倉に移住みては、梨園の隊に入るといへども、既にして復讐の、志移ることなく、年十三になりし時、父の諱の一字を取て、名を胤智と命

月、神隱しとかいふ事にて、往方も知らずなりにたり。那身に恙あらざりせば、今玆は八才になりぬべし。這存亡を知るまでは、一箇は足らず、一箇は闕たり。何の時に具足せん。果しなき世に果しなき、旅宿は只この與なりき。といへば又莊介も、四下を見かへり聲を低めて、犬田犬塚犬飼が、丶大法師に値偶せし折、某は大石家の獄舍に在りし程なれば、後に噂を聞たるのみ。恁而近曾石禾なる、指月院にて某も、又道節も、丶大法師と、蜑崎十一郎照文に、環會ふことを得たる也。離合に時あり遲速あり。あはで久しくなりぬとも、八犬事に具足して、素懐を遂る日なからんや。嚮には進退火急にして、玉を見するに暇なかりき。俺們が祕藏の玉に、出處各異なれども、皆幼稚き時感得したる、その趣は恁々也。只母の胎内より、握りて生れたりけるは、犬江親兵衞のみ也とぞ。犬江は犬田が侄なれば、小文吾は最細しきを、某は傳聞のみ。獨犬阪生の祕藏の玉は、いまだ出處を詳にせず。そはいかにして得給ひたる、且俺們が祕藏の玉より、見せ進らせん。見給へかし。といひつゝ小文吾と共侶に、護身囊の紐解ひらきて、玉を取出て手に渡せば、毛野は徐に兩箇の玉を、掌に受載せて、燈光に寄りて熟視るに、現此彼一對にて、但その文字同じからず。義の字あり、悌の字ありて、彫れるがごとく鮮明なれば、感ずること大かたならず。先這兩箇の玉を返しつゝ、遽しく衣領を探りて、はやと

、大法師は當初、金碗大輔たりし時、伏姫上を妻せんと、義實思食たりしを、いまだ披露に及ざりし、長祿元年の事かとよ、伏姫富山に入り給ひて、遂に身まかり給ひしかば、金碗生は姫上の、菩提の爲に祝髮して、法名、大と喚做しつ、關の八州を行脚して、失たる玉を索んとて、飛錫に世を歷る程に、今よりは五箇年前、文明十年の比、犬塚信乃、犬飼現八、某と倶に三名、件の法師と蜑崎生に、料らず名告あひし折、、大法師の索る玉は、是俺們が幼稚き時に、感得したる玉なるよし、皆その玉に見れたる、文字によりて知られたり。又只這玉のみにもあらず、各その身に痣ありて、形牡丹に似たりしは、那八房の犬の毛色に、類りたらんといはれたり。然ればこそあれ同因果の、犬士八名あるべきよしも、伏姫上は犬士の與に、過世の母ともまうすべき、緣故を詳に說諦されて、世に大諸侯多しといふとも、犬士は必里見殿に、仕ふべき由緖明證あり。義實御父子は士にくだりて、賢を愛する明君也。誘給へ、安房へ相伴ん、といはれにけれどその折は、犬江親兵衛と倶に四名のみ、今より這餘の四犬士を、索巡りて具足せば、共に安房へ赴きて、里見殿に仕へまつらん。且く寬し給ひね、と辭ひて從ざりければ、里見殿より賜るよしにて、沙金を多く惠れたり。這後犬山道節あり、今又和君を得たれども、七犬士にして一人足らず。又犬江親兵衛は、山林が獨子にて、四才になりける秋七

たき良善の、事の槩略慥々。と次第案さぬ長談佳話に、小文吾も亦語を繼て、その足ざるを補ひし、言の葉果し夏の日ながら、はやくも暮て短夜の、更ゆく鐘は聞えねど、听漏さじとて額を鳩めし、毛野は連りに感激して、或は哀み或は歡び、或は微笑み或は呟く、千態萬狀われにもあらで、慷慨嗟嘆に堪ざりし、身に摘て知る懷舊の、感涙眼包に餘りけり。

第八十二回

青柳の歇店に胤智詩歌を題す
穗北の驟雨に禮儀行裹を喪ふ

登時小文吾又いふやう、俺們が祕藏の玉は、原是里見治部大輔義實朝臣のおん息女、伏姫上の臨終まで、おん衣領に掛させ給ひし、水晶の數珠にして、その數とりの八箇の玉、姫上富山に自刃の折、光を發ち飄颻して、往方はしらずなりしとぞ。件の數珠は姫上の、尚稚かりし比、慥々の事によりて、役行者の示現あり。是感得の神物にて、就中八顆の大玉には、仁義禮智、忠信孝悌の八箇の文字、おのづから見れたるよし、曩に舊里に在りし時、丶大法師に邂逅して、これらの縁故を听知りたり。伏姫の世を去り給ひしは、長祿二年の秋にして、今玆文明十四年、壬寅の夏までは、星霜二十四年を歷たり。慥れば俺們七犬士の、未生以前の事なりき。

の邊に露宿して、日を彌りしも亦以あり。寃家の面を認らねば、環りあふとも名告らずば、いかにして撃ことを得ん。世に人力の及びがたきも、心を盡して神佛の、冥助を祈らば成ことあらん、と思ふによりて處々の、神社佛閣にあふ毎に、祈念を凝さゞることなし。爾るに諏訪の片頭に、籠山と喚做す村あり。寃家の姓氏と相似たれば、こは逸東太緣連が、苗字の地にあらずや、と思ひつゝこの事の、當否を諏訪の神に祈りて、權且那里に在りけるに、思ひし事は空にして、思ひがけなき和君們に、環會ぬるのみならず、此彼共に一對なる、痣といひ又玉といひ、過世の契を知るに足れり。歡び是に優ものなし。這里に聚合し三人の外に、なほ同因果の弟兄あり、といはれしは什麼誰々なるぞ。是等の絆の本末を、具に知らし給ひねかし。といふに莊介膝を找めて、約は八名なるべきを、天緣いまだ熟せざるにや、方纔同因果の弟兄は、和君を加えて七名あり。その人々は恁々也とて、信乃道節が事、現八親兵衛が事、皆その素生本貫出處を、詳に說示して、恁れば這七名は、當に異姓の兄弟たるべく、倶に里見の家臣になるべき、過世あやしき因緣あり。その故は箇樣々々。と伏姫の自殺、八房の犬の事、金碗入道、大の事、幷に蟹崎照文の事、山林房八と、妙眞沼藺、文五兵衛の事、又濱路の事、世四郎音音、力二尺八、曳手單節の事までも、忠信孝烈、節操義俠の、行狀各差あれども、多く得が

て鎌倉に、赴きし事はさら也、爾後も又艱苦を經て、越後の小千谷に旅宿せし折、莊介に環りあひし事、次團太幷に磯九郎が事、暴牛の事、酒顚二船虫が事、且莊介が智勇の搀き、酒顚二幷に手下の衆賊を、鏖にしたる事、又片貝の大厄難、稻戸由充が好意にて、死を免れし事の趣、千葉大石の兩東使、鄕武豐實が事さへに、首より尾まで、一事も漏さず說示して、和君は亦那折に、何處を投て走らしたる。這信濃路に流落ひしは、盤費竭たる故なる歟。と問れて毛野は頭を掉て、俺身に盤纏多からねども、その故にはあらずかし。乞兒に形貎を窶せしは、なほ石濱の追捕を免れて、親の仇なる緣連が、所在を索ん爲なりき。曩に墨田河の頭にて、那柴舟に乘りし折、風波高く潮快ければ、舟を返すにちから及ばず、水際に立し和君のうへの、心にかゝらざるにあらねど、勢ひ既にせん術なければ、流に儘し艣を操りて、走らすること五里あまり、羽田の浦曲に舟を捨て、舊里なれば相摸なる、犬阪村に赴きつ。願成院と喚做たる、山寺なる住持の僧は、俺母の叔父なりければ、竊に其里に身を寓せて、躲處ること三稔ばかり。いかで諸國をうち巡りて、寃家を索ねて擊果さんず、と思ふ心の已がたかりしを、住持の允し給はねば、空に光阴を過せしに、去歳の十一月某の日に、住持の遷化し給ひければ、中陰闋し這春の、はじめに寺を辭し去て、京師に霎時旅宿をしつゝ、又引返して岐岨路より、諏訪

口の刀は、俺がいぬる比莊介と、小文吾に贈りし刀也。什麽何の間に引替て、那二犬士は、其身々々の、刀を取りて走りけん。必是鄕武們が。撃れし折に二犬士の、料らずも遭際して、四下に人のなきにより、竊に刀を拿易たる歟、曩に二犬士が別に臨みて、俺們の兩刀の、再手に入る事あらば、便に就て這刀を、返しまゐらせんといひけるを、要なき言ぞ、と思ひしに、その言と行ひと、違はで這里に返されし、刀は俺亦料らずも、老夫人より賜りて、復俺が東西になりけるは、嗚呼奇なるかな奇也けり。これに就ても二犬士は、神物ありて祐くるもの歟。凡人ならぬを知るべきのみ。さてもさても、とばかりに、人に告ぐべき事ならねば、只肚に問ひ肚に答て、感嘆の外なかりけり。案下某生再說。毛野莊介小文吾は、那日晡時の比及に、靑柳の驛なる、歇店に宿りを投め、浴湯し飯をたうべ果て、圓居をしつゝ過去來の、閑談數刻に及びけり。折から宿りを倶にすなる旅客もなかりしに、晝は晡し夜は糸を繰る、奴婢們に暇なければにや、夕饌果ては寄も來ず、欵待態の疎なりしを、犬士の與には却に、幸ひ也と思ひたる。小文吾先毛野に對ひて、曩に墨田河にて別れし折、毛野が乘たる柴舟に、趕著んと思ひつつ、そが儘水中に跳入りて、波濤を凌ぎて泅ぎしかども、舟快ければ竟に及ばず、河上より漕もて來ぬる、別船に身を寓せて、料らず依介に遭ひし事、又市川の事、行德の事、毛野を索ね


あの段の本文
これより下第
十五張おもてを
なそ


小文吾

ん。石濱にては其頭の詮議の、まだ無りし歟、いかにぞや。と問れて由充さゝ候ふ。石濱にても犬塚にても、郷武豊實が枉死の事、倶に是不覺の罪あり。那折逃たる若黨奴隷も、後日に御沙汰あるべし、と仰られ候ふとぞ。他們は御内の人なれば、左も右もなりぬべし。縱那少年なる、乞兒が犬阪毛野なりとも、戰國割居の今にして、信濃三界北陸南海、隈もなく所在を渉獵て、搦捕せ給はん事は、いと〳〵難き所行なるべし。就て昨今世の風聲を傳聞候に、嚮に誅戮せられたる、犬川犬田兩勇士は、眞の莊介小文吾ならず、武者修行を做すものの那名を竊みて人を欺き、渡世の資助にしたりしに、その名の故に搦捕られて、首を刎られたりといふ、世評もこれあるにや。このこと倘寔ならば、三口の刀の相違したるも、理りにこそ候へ。と實事しやかに誘稟せば、大刀自聞つゝ呆果て、しからば刀のみならで、莊介も小文吾も、贋物にてありける歟。その風聲は外聞よからず。いふものあらば召拿て、向後を佗と箴めよ。返されたる三口の刀は、再覽るも忌しきに、津衛爾に取すべし。又荻野井三郎が、今番の計ひ神妙なり。然けれども勞せしのみ、功なきを爭何せん。この事聞えて白井殿（景春をいふ）より、問れずは告ずもあれ。祕めよ〳〵。と聶き示して、初由充が諫し折、用ひざりしを今さらに、後悔の色見えにけり。恁而由充は宿所に退りて、獨竊に思惟るに、今番石濱大塚殿より、返されたる三

刀を遞與しけり。これにより三郎は、大塚の城を辭し去りて、伴當をいそがしつ、這夜は蕨(地名)まで退きて、這首に宿投り、那首に憩ひて、ゆくこと則一日ならず、桼月の某の日に、越の片貝に歸著て、執事稻戸由充に、鄕武豐實們が枉死の顚末、石濱大塚二箇所の回報を、言詳に告知して、大石憲儀の自筆の手簡と、千葉の老黨が連署の狀と、那返されたる三口の刀を、出して由充に遞與けり。登時津衞由充は、刀を觀て書翰を披かず、怪むべく疑ふべき事、多かるを然らぬさまにて、衣裳を更め書翰を携え、遽しく出仕しつ。却老夫人に見參して、荻野井三郎がかへりし事、石濱幷に大塚より、刀を返されたる縡の趣、自胤憲儀の返答を、箇樣箇樣と聞えあげて、二通の書翰を見せまゐらするを、大刀自は訝りながら、津衞其首にて、讀むべしとて、讀してつら〱うち聽て、首級の炎暑に傷られしは、是非に及ぬことながら、那刀さへ相違して、返されたるは本意なき事也。顧に自胤のいはれしごとく、那折鄕武豐實が、よくも認らぬ生鑑定を、信たる故に、得質さで、はる〲と壻達へ、贈遣したりけるを、疎忽の所行ぞと思はれけん、最悔しくも耻しけれ。現馬加鄕武は、落葉の刀を試すとて、乞兒を斫て、乞兒に撃れし、烏滸の白物也ければ、浮薄の性も知られたり。豐實とても亦爾也。那們が撃れし爲體は、鬮に聞たることながら、後に出たりといふ少年の、乞兒は犬阪毛野にやありけ

兩刀は、昔年這里にて紛失したる、小篠落葉にあらざる也。こは馬加鄕武が、片貝殿に謁せし折、鑒定したるよしなれども、那名刀の亡てより、許多の年を歷し事なれば、鄕武が疎忽にて、認違へたる歟、こゝろ得がたかり。因て贈られし兩刀は、この儘返しまるらする。片貝殿へこれらのよしを、具に聞えあげらるべし。又馬加蠅六郞鄕武は、緊要の使に立ながら、故なく非人を斫棄て、遂に又非人の爲に、撃れしは是不覺の所爲也。那折迯たる件當も、後れてその期にあはずといふ、若黨奴隷も共に罪あり。這義は異日に沙汰すべし。歸北の折件のよしをも、執事へ通達せられよかし。遠路の使太義にこそ。と懇に勞はして、歸國の暇を給はりつ、齎したる二口の、刀をそが儘返されけり。恁て罷出るとき、家臣猿島連們が、片貝の執事由充へ、連署の狀を遞與せしかば、三郞これを受取て、又大塚へ赴きしに、城主大石兵衛尉憲重は、兩管領と長尾景春と、和睦の一議あるにより、乃者五十子の城に在り。子息左衛門尉憲儀は、聊中暑の恙ありとて、則仁田山晉五をもて、返答の趣は、石濱なる自胤の、口狀と異ならず。首級は酷く腐爛して、梟首しがたくなりし事、幷に贈られし那刀を、籤上社平が親族なる、甲乙に見せたるに、社平が刀にあらざるよし、稟すもの尠からず。よりて刀を返晉す。この餘は書中に載せられたり。執事に屆け給ひね。と演て憲儀の自筆にて、由充に與る手簡一封と、件の

主命あれば、おん返辭は那首のかへさに、承るべく候なれ。自由の至りに候へども、石濱の使者馬加生も、丁田生と共侶に、枉死によりて兩所の使を、兼て某奉り、那首へも贈らる、首級あれば遲滯しがたし。この義を允させ給へかし。といふに晉五は留雖て、僅にその意に儘せしかば、三郎は遽しく、伴當を倶して石濱なる、千葉の城に赴きつ、家臣猿島連に就て、君命を演ること通て前條に異ならず。首級を斂めし一箇の小瓶と、那兩刀を拿出して、そが儘連に遞與すにぞ、連はこれを受取て、馬加鄕武們が枉死の折、速に報られたる、歡びを述勞ひて、且休息し給へとて、猛可に旅館を宛行ひて、人を隷け酒飯を薦めて、荻野井主僕を管待しけり。恁而荻野井三郎は、その詰朝正廳に召れて、千葉自胤に見參す。原是通家の使者なれば、信とせし儲はなけれども、近習の家臣幾名歟、主の後方に侍りたり。當下自胤は、先大刀自の安否を諮ねて、猿島連をもていはするやう、今番岳母御前より、遙に贈り給はりし、犬田小文吾悌順の首級は、大かたならず腐爛して、半髑髏になりたるよし、連們が稟すにより、今さら實檢の沙汰に及ばず。件の犬田小文吾は、孤も亦いぬる年、畋獵の折見つるもの也。その頸舊のごとくにあらば、必梟首すべかるを、遠路といひ暑氣の折、逆旅に不慮の拒障いで來て、逗留に日を經たらんには、如右なりけるもその以あり、使の過失ならずかし。又贈られし

られて、辛くしてゆくめり。これらは然までの不便にあらねど、那二犬士の假首級は、纔に莊介小文吾が、瓶なる酒を拿棄て、溫湯を入易たりけるに、さらでも炎暑の時にして、初片貝を出しより、二十日ばかりを歷にければ、漸々に腐爛れて、臭氣に堪ずなりたれども、路に棄んはさすがにて、猶そが儘に舁しゆく。三郎が肚裏には、勞しても功なきものを、と思ふものから那伴當們を、丁寧に誡めて、連りに路次をいそぎしかば、七月の初旬に、武藏州豐嶋郡、大塚の城に來著す。この日千葉の士卒們は、よしを主君に聞えあげて、荻野井を待んとて、鄕武が伴當を、倶して石濱へ還りけり。爾程に荻野井三郎は、大塚の城に著しかば、仁田山晉五出迎へて、對面して長途を勞ふ、疑待態大かたならず。登時三郎は、箙大刀自より贈來させし、犬川莊介が首級の事、犬田小文吾が刀の事、君命を演來意を示して、豐實鄕武が枉死の顚末、鄕武が奴隷似兒介が、口狀は箇樣々々。と具に告て、又いふやう、曩に片貝殿の沙汰として、件の首級は小瓶に斂め、美酒に浸され候へども、路にて不慮の事いで來て、滯逗一旬にあまりしに、炎暑酷しき折なれば、既に腐爛の臭氣あり。憚りなきに候はねど、主命なれば持參せり。これらの趣左にも右にも、宜く聞えあげさせ給へ。と慇懃に演訖て、首級を斂めし一箇の小瓶と、那腰刀を恭しく、晉五に遞與して又いふやう、某は且退りて、石濱殿へも速に、稟上べき

たる、二犬士の首級の事、小篠落葉の名刀と、小文吾が刀の事を、箇様々々と說示して、今這東西を各位に、遞與しまゐらせて宜しからんや、否は愚意に及び難かり。是により片貝へも、いぬる日注進したりしかば、遠からずしてその左右あらん。且くこの義を等給へとて、理りを舒て留めしかば、大石千葉の士卒們は、只得く共に逗留して、諏方の祝の宿所に赴き、那日鄕武們が枉死の折、厄會に預りし、歡びを述てかへるさに、那深澤なる村長許立寄りて、則長を案內にしつゝ、鄕武豐實主從の、柩を寄せたる某院に、到りて住持に來意を演て、件の主僕を埋葬す。死して一旬有餘を歷たる、炎暑に亡骸腐爛して、臭氣に面を向がたければ、主僕の瘢を檢するに及ばず。寺へは些の銀を布施して、諏方の旅亭にかへり來にけり。左右する程に、片貝へ遣したる、荻野井三郎が伴當と共侶に、執事由充の脚力到來して、大刀自御前の下知狀あり。三郎これを受戴きて、謹て閱するに、豐實鄕武枉死のうへは、莊介小文吾兩箇の首級、並に小篠落葉三口の刀を、荻野井三郎に預け遣す。そが儘武藏へもてゆきて、大石千葉へ贈るべし。這他の事は恁々と最詳に載られたれば、三郎既に其意を得て、千葉大石兩家の士卒に、件のよしを演傳へて、祝の宿所に使を遣し、武藏へ赴くよしを報て、兩家の士卒と共侶に、次の日旅亭をたち出けり。この時似兒介が金瘡の、いまだ痊り果ねども、杖に携り朋輩に扶け

兩東使の腰に跨たるよしを、鄕武豐實の伴當們がいふにより、三郞是を預りて臂近に措たりける。さばれ件の三口の刀は、嚮に荘介小文吾が、竊に拿替たりければ、眞の小篠落葉ならねど、三郞は初より、件の刀をよくも見ず、又旅路に赴きても、兩東使に忌嫌れて、推並てゆくこともなく、旅舍を倶にせざりしかば、刀の眞僞を知るよしもなく、片貝へ注進狀に、首級並に兩東使に、齎し給ひし三隻の刀は、別義なしとぞ寫たりける。有恁しかば三郞は、次の日の曉に、その身の倶したる若黨に、奴隷一名を從して、注進の爲越後へ遣し、又豐實と鄕武の伴當の、心利たるもの二三名に、書翰を齎し、武藏へ返して、大塚石濱の兩城へ、這凶變を報にけり。然ば又東使主僕の亡骸は、當夜深澤の村長と、茶店の主人們が柩に斂めて、近き寺院に遣しつ、權且那里に寄せてあり。これにより茶店に遺りし、兩東使の伴當も、次の日下の諏方に聚合來つ、件のよしを三郞に、報て共侶に逗留す。旅宿の徒然爾ぞあるべし。恁而一旬ばかりを歷る程に、大塚石濱の兩城より、士卒此彼十餘名、各々君命に從ひて、嚮に荻野井三郞が遣したる、豐實鄕武の伴當を將て、下の諏方なる荻野井が、旅亭に來つゝ對面して、君命を演、非常の役義を勞ひて、却豐實鄕武主僕の亡骸は、這地の道場に瘞むべく、恙なき伴當と、武器行李を受取て、武藏へ還らんといひしかど、三郞いまだその意に儘せず。曩に箙大刀自より、豐實鄕武に齎し

縡偬々と吩咐て、却三郎に答るやう、目今聞せ給ふ如く、柩の事は村長に、執計はせ候へば、日の暮るゝとも成るものあり。なほ忽諸にしがたきは、刀傷人の療養也。下の諏方の驛長に、この義をも示し候ひき。はやく旅亭に將てゆき給はゞ、那脚力の事なども、遲滯に及ばで便宜ならん。この議に任せ給はずや。といふに三郎異議に及ばず。そは寔に便利也。左にも右にも計せ給へ。と應て深澤なる村長と、驛長們を勞ひけり。これにより祝の家臣は、件の事の趣を、茶店の主人故老の莊客、通て這里に聚合し者に、屍骸を寺へ遣す迄、よくうち戍れ。と告掟て、三郎と共侶に、軈て茶店を立出て、却三郎に別を告て、宿所を投て還りゆくめり。當下鄕武豊實の伴當は、なほ這處に留りて、主の屍骸を戍るもあり、又似兒介を茶店の板戸に、乘せてこれを舁もあり。這他は鄕武豊實の、兩刀を携へ鎧櫃を扛擔ひ、荻野井三郎に從ひて、旅亭を投ていそぎけり。爾程に荻野井三郎は、下の諏方なる驛長に、案内をせられ路次をいそぎて、主僕旅舍に著しかば、夏の日越に暮にけり。金瘡人の、療治には、本驛なる醫生が來て、似兒介の瘡を縫ひなどす。この時にしも三郎は、豊實と鄕武の、鎧櫃をうち披かして、那首級を檢するに、故の隨にてありければ、竊に心を安くしつ。又鄕武と豊實の腰刀は、若黨に持せしと、共に此彼七口ありて、一箇も紛失せざりけり。そが中に、小篠落葉の兩刀と、小文吾の腰刀は、

介を駝て來にければ、三郎則似兒介に、なほ又鄕武們の撃れたる、その折の始末を尋ねて、那癖者は何とかいひし。その名を聞たることはなきや。と問へば似兒介頭を擡げて、さン候。那乞兒奴が、みづから名告しことはなけれど、落葉の刀を佶と見て、父が撃れしその折に、紛失せしと傳聞く、小篠落葉の兩刀を、今初て見るのみならず、馬加としも名告れるは、逆臣大記常武の、親族にこそあらんずらめ。爾らんには是寃家の餘類、逃しはせじ、と啗きしかば、東人鄕武駭怒て、原來這奴はいぬる年、舞子に化て俺先代の、親子從類なごりなく、撃果して逃亡たる、犬阪毛野であらんず。といはれしまでは聞たれども、鄕武撃れて俺們まで、痛痍を負ふたる珍事中庸、論語に絶たる大變に、なりにし後は心も冥闇、その餘は覺候はず。但那乞兒は年齡、十七八にやなるべからん、寠れたれども容止の、優質なれば美しく、女子にして見まほしき、形貌に似げなき力量剽姚、今牛若ともいひつべき、神變不思議の武藝あり。恁れば東人の猜せし如く、豫噂に聞えたる、旦開野と賦いひし假少女の、犬阪にもや候はん。といふに大家又駭きて、思はずも目を合しけり。登時荻野井三郎は、祝の家臣にうち對ひて、那癖者の事の趣、照驗既に分明なれば、穿鑿は是までなるべし。暮るゝに程もなからんに、柩の事をいそがせ給へ。と憑めばはやくこゝろを得たる、祝の家臣は、深澤と下の諏方なる長を招きて、

第八輯　巻之四　下套

第八十一回

荻野井返命して偽刀舊主に還る
三犬士再會して宿因重て話表す

再說、荻野井三郎は、既に茶店に來會したる、祝の家臣們に對面して、姓名を告り來由を示して、某は主君より、兩東使に隷られたる、副使では候へども、今朝しも勞ることありて、遲く旅舍を出たれば、路の程太く後れて、絆の始末を知らざりしに、幸ひにして證人あり。その故は箇樣々々。と今來ぬる路にして、金瘡人似兒介に遭ひし事、他が報たる趣を、遺もなく演知して、某恁て候へば、各々心安かるべし。權且這地に逗留して、越後と武藏へ人を走らせ、主君幷に千葉大石家へ、這凶變を告稟して、進退は下知に由るべし。勿論炎暑の比なれば、東使主從の亡骸は、柩に斂めて、程近き、寺院に預け措まく欲す。這義を相計ひ給はれかし。といふに大家疑心釋て、然るにても少年なる、一個の乞兒に主從四五名、皆擊れしは意外の事也。さても〳〵。とばかりに、呆れざる者なかりけり。浩處に三郎が、途に遺せし伴當の、はや似兒


東使を趨て荻野井
凶変を聴く


小文吾路擊豊實
こぶんごみちにとよさねをうつ
小文吾
とよさね

喘々ぞ走りける。恁而荻野井三郎は、郷武們が撃れたる、茶店の邊に來て見れば、既にして地方の役人、諏訪の祝の家臣某乙、深澤の村長、下諏訪の驛長など、此彼となく來會して、縡の詮議區々也。これにより茶店の主人と、郷武豐實の伴當の、後れて這里に來つるものに、那顚末を質問せしに、茶店の主人は農夫にて、折から山田の畊作に、闔宅の男女暇あらねば、手代のものなきにより、權且店をうち空て、晝飯たうべに退りたる、その間の事なれば、縡の始末を知らずといひけり。又郷武豐實の伴當們は、東人殊更路次を急ぎて、捷徑をのみ走りけん、思はず大く後れしに、その路違ひて遲速あり。この故に縡過ぎて、適纔這里に來にければ、仇を認るよすがもあらず。迷惑この義に候。と言語齊一陳ずるのみ。一箇も證人あることなく、茶店を距ること數十歩にして、乞丐とおぼしき一個の男子の、胴斬にせられしあり。這が所爲歟、と思へども、又豐實も首を撃れて、這里を距る事五六町なる、田畔に屍骸のありしを、地方のものの報たりけり。恁れば一人の所爲にあらず、とばかりにして照驗なければ、豐實の亡骸をも、則這里へ扛もて來たして、只顧衆議を凝す折から、長尾家の副使なる、荻野井三郎が來つるにより、那似兒介の口狀を、告るに及びて衆人の、疑心初て解にけり。畢竟荻野井三郎が、祝の家臣們に對面して、相計ふ趣甚麽ぞや。そは又這下の卷に、解分るを聽ねかし。

主はさら也若黨三十平、及丁田の奴隷さへ、皆撃果され候ひき。その爲體は恁々也。箇樣々々の術者なれば、只這三名のみにあらず、丁田殿も痍を負ふて、迯走り給ふ程に、在下も亦かくの如く、左の膝を砍られたり。かなふべくもあらざれば、後れて來ぬる傍輩に、よしを告んと思ひつゝ、辛くして引外して、逃て這里まで來にけれど、痛痍の苦痛に瞑眩きて、仆れて且く黑白を覺ず。やうやく俺にかへりたる、今より些し先の程、馬加丁田兩個の伴當、若黨奴隷八九名、後れて來ぬるがうち連立て、折よく這里を過りしかば、遽しく喚近著けて、那大變を告知せ、身の介抱を憑みしかども、大家駭譟ぐのみ、主の先途を見し後に、左も右もせん這里に居れ、とばかりいふて勦るものなく、湖水のかたへ直走りに、走りて一人もかへり來ず。晝だに往還稀なるに、暮なばいよ〳〵知る人あらで、命果敢なくなりぬべし。あはれ拯せ給へかし。いかで〳〵。と苦しげに、口說くを三郞うち听て、駭呆るゝ伴當を、遽しく見かへりて、恁る異變を聞ながら、霎時も猶豫すべからず。俺は那里へ快ゆきて、件の容子を檢索せん。若們は一兩名、這似兒介を肩に被て、推續きて跡より來よ。痛痍なりとも灸所にあらねば、死ぬべうは思はねども、這が東人の不覺の枉死の、證据になるべきもの也かし。よく勦りね。と吩咐て、飛が似くに走去れば、一個の若黨鞋奴、空手のものは遺れども、その餘は伴に後れじとて、

からず。問ふべきことも多かるに、今宵の旅舍にて盡すべし。誘共侶に。と倡導ふにぞ、毛野は聞つゝ歡びて、後に跟き先に立して、倶にゆくこと二里あまり、青柳の驛に來にければ、晡時にぞなりにける。猶もゆきなばゆくべかりしを、迭に急がぬ逆旅なれば、這驛路なる客店に、はやく宿りを投めけり。話分兩頭。爾程に荻野井三郎は、這朝豐實鄕武に、欺れたることなれば、未明に件の兩東使の、旅舍を出しを知らずして、十刻あまり後れしかば、心頻りに焦燥のみ、件當們をいそがして、快趕著んと欲せしかども、この日は殊に暑かりければ、主僕疲勞れて思ふにも似ず、日景斜になりし比、洗馬鹽尻をうち過て、諏訪の湖に程遠からぬ、小松原まで來つる折、と見れば路傍なる、夏草の繁きが下に、仆臥したる旅人あり。方纔荻野井們が近づく隨に、忽地に頭を擡げて、やよ片貝の人々よ、資け給へ。と喚りたり。當下荻野井主從は、訝りながら立よりて、熟視れば別人ならず、こは鄕武の奴隷にて、鎧櫃を擔荷たる、似兒介と喚做すもの也。腰より下は血に塗れて、行步不便に見えしかば、三郎酷く驚きて、みづからその故を問ふに、似兒介才に身を起して、主にて候鄕武は、嚮に丁田殿と共侶に、諏訪の湖の頭なる、茶店に霎時憩ひし折、落葉の刀を弄びて、小塘隄の下なる跛蹇乞兒を、鉡斬にしてけるに、その折年十七八なる、一個の乞兒が走り出て、俺東人を扼り、矢庭に刃を挑取て、

まだ見え來ず。その所以ありて後れたりとも、竟に寄來ぬことやはある。那身に菑害あらせては、情深かる由充の、恩を仇もて復すに似たり。よりて思念を旋らすに、件の首級は小瓶に斂め、酒に浸して鎧櫃に、祕措にきと聞たれば、快その酒をとり捨て、箇樣々々に做ならば、是三郎の越度にならず。剡炎暑の比なれば、頭顱は程なく腐爛れて、梟首しがたくならんずらん。この義はいかゞ。と聶けば小文吾聞つゝ含笑て、その議寔に奇妙也。爾らば人の聚合ぬ間に、手ばやくすべし。誘給へ。といそがしつ又共侶に、舊所に赴きて、那伴當が茶店の邊に、卸し措たる、鄉武と豐實の鎧櫃を、葭簀の蔭へ擡入れて、推開きつゝ兩箇の小瓶を、出して酒を傾け捐て、茶店にありし釜の湯を、件の小瓶に汲入れて、故のごとくに斂めけり。這頭は無下の田舍なれば、物観んと思ふ人もあらず。這時までも往還は稀にて、聚ひ來るものなかりしを、二犬士は造化精妙、といはで目と目を合せ緖の、薄き草鞋に足輕く、竊に其首を退きて、犬阪毛野に約束の、甲斐路を投て走ること、旣にして八九町、前面の岡なる樹の下蔭に、毛野は久しく俟つゝをり。恰纔小文吾們が來ぬるを見て、走り出招きよせて、那里の首尾を諮ねけり。登時小文吾莊介は、那處の動靜首級の事、箇樣々々と遺もなく、迭代に聶報て、恁れば今は那頭に、おもひ遺す隈もなし。和君のうへも俺們の、去來さへに此彼と、報べきことも尠

苞引提て、立別れゆく諏訪の湖や、上つ社を伏拜み、遙に禱る久後と、今も恙はあら栲の、狹き袂に風戰ぐ、樹立涼しき青柳の、驛路投ていそぎけり。爾程に莊介小文吾は、鄕武們の擊れたる、邊を霎時徘徊して、緈の動靜を覘ふに、村長なンどおぼしきものは、いまだ一個も聚ひ來ず。程遠からぬ里人と、路ゆくものの走違ひて、罵譟ぐをうち聞くに、茶店の翁が晝飯たうべて、稍かへり來ぬる折、鄕武主從の枉死の骸を、初て見たることなれば、胆を潰しつ引返して、先はや緈の趣を、祝殿に告稟さんとて、そが儘走去りしといふ。這里は諏訪の神領にて、神職の宿所へは、近くもあらぬ程なれば、其首より人のいまだ來ず。茶店の主人も在ることなければ、思ふに倍して便りよかりし。莊介は携たる、那兩刀を潛やかに、鄕武の屍骸の邊へ、遺し措つゝ退きて、又小文吾に聶くやう、俺們が假首級は、溷六穴八と喚做たる、小賊の頭顱なれば、惜むべきものならねども、俺が姓名を冒されて、梟首せらるゝことあらば、一時の權にもせよ、快からぬ所あり。心裏恥しきことならずや。といへば小文吾點頭て、その義は亦某も、豫こゝろに掛りたり。件の首級は鄕武們が、鎧櫃に祕置よしを、傳聞たることしもあれば、引出し湖水に淪めて、走らば遺恨なかるべし。やゝ快々。といそがせしを、莊介霎時と推禁めて、首級を奪ふは易けれども、然では荻野井三郞の、難義に及ぶこともやあらん。那三郞はい

ても家傳の刀を、犬阪生より得たりしかば、津衛の刀は郷武の、屍骸の邊へ遺してゆかん。嚮に那人に別るゝ折、倘俺們の兩刀の、再手に入ることあらば、這換刀は便に就て、返し進らせん、といひつるに、要なき東西を何時まで留ん。是も亦郷武の、屍骸の邊に遺し措ば、那荻野井が拿抗て、越路へもてゆくこともあらん。縱その義に及ばずとも、季札が挂し徐國の君の、墓の劍と見るまでに、情深かる稻戸に、志は致すべし。然はとて軈て件の二刀を、引提て早く身を起せば、毛野も倶に。とゆかまくせしを。小文吾やよと喚禁めて。酷暑に往還の跡絕しとても、時移りしかば茶店の主人が、はや村長に報たりけん。爾らば衆人聚ふべし。且荻野井は後れたりとも、今までも來ざらんや。又逃亡たる伴當は、和君を認りし者ならんに、漫に那里へゆくは危し。和君は這里を立去りて、甲斐のかたに赴き給へ。某は犬川と、倶に笠もて面を隱して、其頭を過る旅客の、似くに見せて那兩刀を、遺し措して趕著ん。這義をこゝろ得給へかし。といへば又莊介も、犬田の意見その理あり。うちも揃ふてゆくは要なし。快立退て俺們を、程よき路に等給へ。衿に染たる血を卷隱して、やゝ目咎られ給ふな。と諭すに毛野は推辭難て、㤼いはるればせん術なし。某は甲斐のかたへ、約は十町の內にして、幹淨處に等ん。那里に赴き給ふとも、便ケくば近づかで、快引返し給ひね。と心を附けつ、屬らるゝ、毛野は藁


荘介
小文吾


左 名刀を賣弄して奸黨命を喪ふ
右 家傳疑ひ残解て舊刀舊主に返る

斂めて、これのみにては強敵を、倘征するに足ざれは、この外に大刀もあり、鏁網襲衣肱甲脚盾も、苞に藏め土中に隱して、南の塘隄の腰にあり。いでく。といひながら、早身を起し走り去て、件の苞を引提て來つ、解開かんとしたりしを、小文吾急に推禁めて、這里は那首へなほ近かるに、時を移さば人に知られて、進退難義に及ぶべし。嚮に某犬川に後れて、走りて這方へ來る程に、行裝ひせし一個の武士の、小鬢に痍を負ふたるが、路傍に憇ひてをり。某を喚留めて、咱們は武藏の大塚なる、大石殿の家臣也。諏訪の湖水の頭にて、癖者に狼藉せられて、かくの如くに痍を負ひにき。藥のあらば賜へかし、と請求るにこゝろ著て、見ればそが跨たる刀は、片貝にて沒官せられし、俺腰刀なりければ、是なん丁田畔五郎豐實ならんと猜したる、心勇みし聲高やかに、原來汝は豐實歟、越路よりして汝們が、後を趕つゝ今來ぬる、犬田小文吾を知らざるや、と名告るに駭く豐實は、訝りながら身を起して、刀を拔んとしてけるを、拔しも果ず頭顱擊落して、件の刀をとり復し、易には由充の養たりし、刀を屍骸の邊に遺して、更に走りて犬川に、趕著得たるのみならず、犬阪生に再會せしより、件の豐實郷武們の、綷の趣具に知ぬ。是見給へ。と拿復したる、刀を二犬に示すにぞ、毛野も听つゝ笑坪に入りたる、そが中に莊介は、感ずること大かたならず。思はずも額を拊て、適徹妙き計ひなるかな。某と

事、今番の厄に片貝にて、又這刀を沒官せられて、那假首級と共侶に、小文吾が刀さへ、石濱大塚兩所の使者に、遞與されにきと聞えし事、稻戸津衞が好意にて、死を免れしその夜、竊に異刀を贈られしを、跨て那里を潛出たる、その崖略を云云と、辭短く聶き示せば、毛野は只管歎賞して、寔に東西には離合あり。刀と主と凶吉禍福に、別れてはあふ意外の奇談、感ずるになほ餘りあり。然までに傳來あらずとも、今退きて按ずるに、逆臣馬加常武の、苗蹟を立し千葉殿に、這兩刀を返すとも、咱們親子の忠信孝義を、おもはるべくもあらずかし。况當日這兩刀を、寃家籠山緣連が、竊取りしにあらざれば、これありとても那所在を、知るよすがにはなるべからず。願ふは今より犬川生、這義に懸念あることなく、刀を收め給ひね。と連りに薦めて已ざりければ、莊介やうやく承引て、かくまで厚く諭さるゝを、受ずもあらば朋友の、信を知らぬものに似たれば、今さらに固辭がたかり。誨に從ひまつらんが、和君は亦何をもて、その身の衞にし給へる。寃家を索る年來の、准備はいかに聞まほし。と問れて毛野は莞爾と笑て、その義も心安かるべし。這兩刀を還すとも、某も亦年來、竊に藏弃の二刀あり。且是よりや見せまつらん。といひつゝ懷を搔撈りて、手早く出す匕首を、拔けば玉散る新月の、四下に輝く天晴名作、銳味さこそ。と莊介小文吾、倶に感嘆したりける。當下毛野は匕首を、拿直し鞘に

去向を商量し給へかし。といふに小文吾荘介は、しかるべし。と應つゝ、草折布て坐を占けり。登時毛野は恭しく、荘介にうち對ひて、某眼はありながら、富士筑波をも知らずして、酷く無禮を仕りぬ。嚮にもいひしことながら、這兩刀は俺亡父の、故主の東西と聞たるのみ。知らざりし日は是非もなし、和君の重寶ならんには、留措くべきものならず。今こそ返しまゐらする、受收め給へかし。といひつゝ軈て兩刀を、拔拿りつ差寄するを、荘介受ず推戻して、苦樂を俱にし患を分つ、分頸の交りは、爾あるべきことながら、おん身の與に要ある刀を、親の紀念なりとても、某も亦惜んや。勿論その刀の甑なる、雪篠は俺家の服章、傳來分明なるよしを、知られて所要に立られなば、今より望む所なり。和君の仇なる緣連の、所在を捞るよすがにも、なるべきもの歟料り叵かり。こは這儘に措き給ひね。と推辭を小文吾推禁めて、返さんといふ犬阪生も、受じとて辭ふ犬川も、義を重しとせる所以なれば、介意あるべきことならねども、某をもて論ずれば、時宜に任して舊主へ、返すを自然といふべきのみ。犬阪生听給へ。這兩刀の來歷の、始をいへば箇様々々、終は恁々なりけりとて、犬川衞士が自殺の折、刀を沒官せられし事、又年を歷て小文吾が、舊里に在りし時、件の二刀を購求めて、後に信乃に贈りし事、却爾後に犬川の、家傳の名刀なるよしの、知られしによりその折に、信乃が荘介に返せし

只その痣のみならで、自然と文字の顯れし、祕藏の玉のあるならば、這俺們が義兄弟、骨肉に優す宿因あり。曩にこの義を問ふべかりしに、綷急にして別れたる、遺憾さを今こそ果せ。そこらの物はなからずや。といはれて毛野は駭きながら、然也、さなり。と頷きて、袖卷抗て右の肘を、示せば果して二の腕へ、かけて牡丹に似たる痣あり。當下毛野は衣領を撈りて、某が祕藏の玉は、年來這里に弆めてもてり。玉には則智の字あり。こは後にこそ見せまつらめ。是らのことを逆より、いかにして識られけん、奇也々々。とばかりに、尙疑ひは解ざりしを、莊介さこそ。と含笑て、犬阪生今さらに、何ぞ疑ふ事のあるべき。犬田が玉には悌の字あり。又俺が玉には義の字あり。痣は此にと衣領寬開て、示すを見れば是も亦、身柱よりして右のかた、胛に相似たる、牡丹花の痣ありければ、毛野はいよ〳〵駭嘆じて、まだその故を曉らねども、恁る奇特を見て知りぬ。思ひしことは非也けり。今よりして俺兄と、憑んとおもふ和君們に、這兩刀を惜んや。といふに歡ぶ小文吾莊介、しからばはやく刄を斂めて、倶にこの地を退くべし。長物語は災害を、招くに似たり快々。と薦め諭しつ小文吾は、石を傍に拿捐れば、毛野莊介は刄に塗れし、壤を拭ふて共侶に、誘とて鞘に斂めけり。恁りしかば犬阪毛野は、先に立つゝ犬川犬田を、一町あまり奧まりたる、塘隄の背へ退かして、這里は人見の稀なるに、

たりなど、いひ誇りたることあれば、豊實さへに迯さじとて、既に痛痍を負せしに、一個の奴隷共侶に、那奴ははやく逃亡たり。頤ふに這個兩刀は、原千葉殿の重寶なりしを、當年恁々の義によりて、滸我の御所（成氏）へまゐらせよとて、俺が父使節を奉りたる、その路次にして枉死の折、紛失したる東西なるを、仇の屍骸ともろ共に、うち棄て措べくもあらず。この義は俺身物情を、稍知る比より實母氏に、說示されし顚末を、思ひ出つゝ方纔その刀を、見れば遺恨のやる方も、涙ぞ進む懷舊の、腸を斷つ心の哀しみ、是苟且のことならんや。這後もなほ武運に稱ひて、那緣連を擊捕らば、その折にこそ便を討めて、這兩刀を千葉殿へ、返してよしを報稟さば、親の汚名を雪むべく、俺が宿念を果すに足れり、と思ひしものをいかにぞや、今さら是を犬川の、家重代の名刀なりき、といはるゝことこそ不審けれ。犬田生は始より、その義をこゝろ得給へる歟。と問ふを小文吾うち聞て、緣故を詳にせざれば、その疑ひは然ることながら、その兩刀は犬川生の、亡親の紀なるよしも、その後亦他手に渡りて、千葉家の東西になりにし事も、循環て亦舊の、主に還りし傳歷を、某具に知りたりき。言長ければ且く閣て、犬阪、和殿に問ふことあり。といひつゝ手ばやく裳を褰げて、左の股を見して、見給へ無禮なる所爲なれども、和君も又俺身に等しく、形牡丹に似たる痣の、その身の內になからずや。又

思ふ心の惴りしのみ。素より和殿に由緣ある、犬阪生でありけるを、神ならぬ身の知る由もなく、一擧に雌雄を決せんとて、迭に挑戰ひしは、危かりき。とうち陪話れども、毛野は疑ひなほ解ず。喃犬田生聞給へ。某はなほ這人の、名さへ面を認ざりければ、又是和殿の義兄弟、深き好のあらんとは、思ひもかけず爭ひし、初を推せば刀の所以のみ。小篠落葉の兩刀は、原是千葉家の重寶なりしを、俺父の擊れし折、偸兒ありて奪去りき、と傳聞しも久しくなりぬ。爾るにけふしも石濱なる、千葉殿の家臣と聞えし、馬加蠅六郎鄕武と名告れるが、這兩刀を帶て來つ。相伴ひしは大塚なる、大石の家臣にて、丁田畔五郎豐實といふものなるよし、從者に持せし鎧櫃に、付たる牌にて知られたり。恁而鄕武豐實は、那首の茶店に憩ひし折、那鄕武が發語しけん、這落葉の刀をもて、人を斫れば四下なる、木葉を落す奇特あるよし、人のいひしを排して見ん。誘とて軈て這頭にて、鎌倉寠兒と喚做たる、乞丐のをりしを伴當們に、引出させて斬棄たり。遊戲も事によるべきに、忌憚ざる那們が擧動、某は初より、樹蔭に立てその光景を、見るに得堪ず走出て、矢庭に鄕武主從を、三名まで擊果したり。こは是不慮に鎌倉寠兒の、仇を報ふに似たれども、豈しからんや鄕武は、則馬加常武の苗迹なり、とみづからいひにき。恁れば俺が親弟兄の、寃家の餘類なるのみならず、虛實は知らねど犬田生の、首級を齎し

けず、鐐を削る勢ひの、止るべうもあらざれば、小文吾はせん術なさに、心ともなく四下を見れば、茶店の傍に長やかなる、石の榜爾の有けるを、是究竟と兩手を掛て、引拔きつさし抗て、目今毛野と莊介が、煞結びたる刃の上へ、件の石をうち掛て、壓に打してやうやくに、その戰ひを制めけり。登時毛野莊介は、刃を石に布れても、握持たる刀の靶を、放さず倶に佶と見て、玆に初て制めし人の、小文吾なりしを知りたりければ、毛野は只頑犬田が膂力を、且感じ且歡びて、絶て久しき小文吾主、俺がこの仇と戰ふて、撃果さんとしつる折、禁められしは甚麼なる故ぞ。と問へば小文吾含笑て、曩に墨田河の頭にて、別れし折は猝急にて、告るに遑なかりしかば、和君はいまだ知らざるべし。是這人は俺が爲に、過世ありける異姓の兄弟、犬川莊介義任と、喚倣す勇士で候ぞや。縱怨のありとても、俺面を頑て怒と共に、刃を斂め給ひねかし。と、諭し禁めつ又莊介に、うち對ひて、喃犬川生、這少年はいぬる比、具に和殿に報知したる、孝烈無雙の犬阪生也。情由は知らねど爭ひを、止めて和睦し給ひね。惴らば後悔あらんず。と諭せば莊介點頭て、原來這少年は、和殿の噂に聞知りたる、犬阪生でありけるよ。させる怨はなけれども、這人東使主從を、はや三人まで撃果して、俺が重代の兩刀を、奪取りつゝ小塘隄のかたへ、走去んとしつる折、某料らず這里に來て、那爲體を闕窺たれば、刀を他手に渡さじ、と

しもせん。然らずば頸を置ていね。彌勒の出世にあふまでも、只やは去せん快返せ。と罵りつ又引よするを、毛野は閃りと振斷て、面を對し佶と疾視て、原來汝も要ある奴也。年齡を推計るに、俺が怨敵にあらずとも、這兩刀をよく知りて、心をかくるは那親族歟。しからずとても身の分際を、思はで漫に爭はゞ、受ても見よ。と敦圉て、晃りと引拔く落葉の名刀、眞額臨で擊つ刃尖を、莊介はやく刀の鍔に、受て彼此身を反す、程もあらせず又擊つ大刀を、復引外し、拔合して、一上一下と手を盡す、勇士と勇士の烈しき大刀响、丁々磤と委みなく、受ては流す瀧の糸、風の柳に三日月の、左右に紊れて狂へども、亂れぬ拳は武術の精妙、二龍雲間に鬪ふ時、雨金鱗を零すが如く、兩虎深谷に爭ふ折、風黃毛を吹に似て、迭に疎鹵はなかりけり。浩處に小文吾は、路次にて草鞋を易るとて、思はずも莊介に、後れて走る諏訪の湖の、頭まで來て遙に見れば、誰か知るべき莊介は、身のざま賤しき少年と、戰ひ旣に闌なり。小文吾は這光景に、駭きながら些も擬議せず、飛が似くに近著て、見れば件の少年は、認遣れもせぬ犬阪毛野也。こは什麼いかに、と許りに、又驚きつ歡しさに、一入聲をふり立て、やよ犬川生止り給へ。犬阪生も且等ね。小文吾なるぞ忘れし歟。いふよしあるを听ずや。と連りに叫びて禁れども、毛野莊介はなほ煞結びて、死活を爭ふ折なれは、犬田を見かへる暇もなく、喚禁るを耳にも掛

夜を日に繼て、信濃路投ていそぎしかば、這折獨逸速く、諏訪の湖水の頭まで、來つゝ前面を見亘せば、乞兒とおぼしき少年が、血刀引提て鵠立たり。癖者ならん、と思ふにぞ、竊に後方に近づきて、樹蔭に倚て覘ひけり。毛野は奴隷を趕捨て、又豐實を趕まくせしに、往方も知らずなりしかば、迯なば迯よ那奴們を、一箇も漏さで擊ばとて、又いかばかりの益やはある。と獨語つゝ單衣の、袷折返して刃の鮮血を、二三遍推拭ひ、遺たる鞘を拿抗て、やをら斂めて鄉武の、屍骸を撈りて小篠の刀を、拔拿りつ左見右見て、落葉の刀もろ共に、腰に跨つゝ愀然と、犬田が事を思へば歟、嘆息の外なかりしを、纔に思ひかへしけん、獨連りに頷きて、小塘隄の方にゆかんとせしを、莊介透さず後方より、走り蒐りつ刀の瑺を、握り留めて引戾せば、毛野は引れて佇行ぐ足を、又踏固めて見かへるのみ、些も騷ぐ氣色なく、冷笑ひ又見かへりて、汝も擊れし馬加們が、伴當ならば迯もせで、冥土の伴の願しさに、命を捐に出たる歟。と問せも果ず莊介は、怒れる聲を振立て、噫意氣過ぎたる癖者かな。俺も馬加丁田們を、趕つゝ這里に來て見れば、心得がたき汝が擧動、今那主從三名を、擊果したるのみならで、俺もをさ〳〵獲まく欲する、小篠落葉の兩刀を、奪取りしは方に是、人を殺して不義の利に、飽まく思ふ山豪ならん。遮莫擊れし者の、與に怨を復すにあらず。時宜に儘してその兩刀を、俺に返さば許

に増ざらんや。其首な退そ。と敦圄つゝ、拿られし腕を振斷て、首を撃んと晃かす、左手の方より豐實も、倶に刀を引拔きて、走らば斫らん、と構へたり。登時毛野は些も騷がず、鄕武が不管三七廿一に、撃閃かす刃の下を、飛鳥の如く翔潛る、縱橫無尋なる修煉の剽姚、瞬く間も薙ぐ刀尖を、左りへ流して推止る、刀を丁と挑拿て、怯むを透さず礮と斫る、拳の冴に鄕武が、首ははやく地に落て、軀も礚と仆れけり。思ふに倍たる少年の、武勇に驚く豐實は、こは朽惜しや。とばかりに、迯走らんもさすがにて、伴當進め。と喚かけて、推拿籠ん、と主從四名が、拔連ねたる刃の電光、競ひ蒐るをものともせざりし、毛野は左右に受流し、前後に當る奮擊突戰、霎時もあらせず一個の奴隷を、ばらりずんと斫伏せて、返す刀に若黨が、肩に深痍の血は瀧通湍、苦と叫びて一反ばかり、走り仆れて息絶たり。伴當二名擊れしかば、豐實いよ〳〵心慌て、拳も狂ふ危窮の受太刀、毛野は得たり、と踏入て、疊かけたる大刀風に、支ゆべうもあらざれば、豐實怺へずしたゝかに、小鬢を斫られて叶嗟とばかり、一聲叫びて逃走るを、脫さじと趕ふ犬阪の、後に殘る一個の奴隷が、擊んとしたる刃の光に、毛野ははやくも身を沈まして、左へ外す至妙の捹き、小鳥を抓む若鷹の、勢ひ當りがたければ、奴隷は刃を打落されて、痛痍を負ひつゝ迯たりける。恁りし程に莊介は、小文吾と共侶に、馬加丁田兩東使の、跡を趕ひ

伴れたる悪友は、まば聞知らぬ丁田某乙、助劍做さば猶おもしろし。小篠落葉の兩刀を、遞與して倶に刃を受よ。と罵誇る少年の、さしも形狀は窶れても、多勢に撓ぬ胆勇廣言、名告らでしるき八士の隨一、犬阪毛野胤智が、浮世を潛ぶ假乞兒、這里に光陰をふる郷の、州名かけて苟且に、相撲小猴子と喚れても、果敢なくその身を錐されて、終の煙と薪樵る、鎌倉塞兒の似而猿樂に、亦似るべうもあらざれば、いよ〳〵駭く郷武豐實、此彼迭に目を注したる、そが中に郷武は、怯れを見せじ、と聲高やかに、原來這奴はいぬる年、舞子に化て俺が先代の、親子從類なごりなく、撃も果して逃亡たる、犬阪毛野でありけるよ。汝が仇は人も知たる、只那籠山逸東太緣連なるを撃もせで、常武大人を怨みしは、その義に違ひし無法の闇撃、天道ゆるし給はねば、今そのざまになりながら、身の悪報とは思はずや。汝が親の東西ならぬ、這名刀に心をかけて、俺們さへに仇とし罵る、似而非廣言は夏虫の、火虫に等しき無慙の白徒、死出しは又一層の、是家裏を獲たる也。曩に汝と共侶に、石濱の城を逃亡たる、犬田小文吾悌順は、近属越路に流落ひしを、片貝殿の知らせ給ひて、同悪犬川莊介と、倶に首を刎られたり。今その首級と這兩刀を、片貝殿より賜りて、武藏へ還る路にして、汝が首を相添なば、俺が先代の怨を復す、是私の幸のみならず、石濱殿の奉與にも、面を起す武門の大功、御感も八入

らず。よき折からに相伴れて、旅宿の憂苦を解したり。刃のみかはおん身の手擊、いとも愛たし、めでたし。と只管感ずる空賞に、鄉武莞爾とうち笑て、しからば刃を洗淨めて、なほ又前路を急ぐべし。と應て左右を見かへれば、一個の奴家がこゝろ得て、茶店の檐下に汲措きたる手桶の水を引提て來ぬるを、快々せよ。と鄉武が、出す刃は夏寒き、氷を洗ふ卷向の、檜柄杓の日南水、奴隷がやをら拿抗て、鍔際より刀尖まで、かけ流し又被ながせば、懷搔探る若黨が、軈て刃を拭んとて、鼻紙出して五六枚、累ねし儘に推揉みしを、伸してふたつに折たりける。爾程に相撲小猴子は、久しく樹蔭に躱ひて、縡の始末を闕窺をり、方纔若黨が主の刃を、拭んとせし後より、閃りと出てそが項髮を、搔抓み引よせて、一丈あまり投退て、衝と鄉武に近著て、刃を引提し右の手を、扼りたる無敵の擧動、思ひがけなき事なれば、倶に呆るゝ鄉武豊實、これはいかに。とばかりに、伴當さへに逡巡りして、主從齊一うち目戍るを、見かへりもせぬ相撲小猴子は、腰に夾みし手拭を、在手に拿て兩三度、拭ふ刃を熟視て、父が撃れしその折に、紛失せしと傳聞く、落葉小篠の兩刀を、身に帶たれば寃家の餘類、その姓名も既に知る、馬加としも名告れるは、又那籠山緣連が、由緣のものにはあらずして、逆臣大記常武の、親族にこそありつらめ。しからんには是寃家の半隻、索る仇にあらずとも、今撞見ひしはその身の不幸、





の、面汚しなる筵小屋、菰を布衾の夢にだに、打ことならぬ金闘技の、さえ捷れても世に遇ねば、人には乞丐よ蹇兒よ、といはれて彌る月も日も、照らし給はぬ形きなさ、憐み給へ、やよ喃。と口說を听かず鄉武は、足踏鳴らし焦燥て、いはして措ばさま〴〵なる、世迷言聞く暇はあらず。呼吸の音留ん。と拔閃かす、刃の光に鎌倉蹇兒は、苦と叫びて息杖を、拿落し又搔取て、立まくすれど羽脫鳥の、網掛に苦む絕體絕命、なほも逃んと突立る、杖は三尺五尺の軀に、浴せかけたる鄉武が、刀の冴はこの世の別路、憐むべし、鎌倉蹇兒は、背の眞中一刀に、斫られて仆るゝ身は二段に、大腸小腸見れて、鮮血も其首にみちのべの、清水に似たる柳蔭、椎の杪をうち仰ぐ、鄉武も豐實も、伴當們さへ共侶に、零ぬ木葉を本意なげに、うち眺め又眺めても、些も奇特なかりしかば、鄉武刃を拿なほして、喃丁田生、思ふに倍たる刀の鋭味、持たる杖さへ腕さへ、掛て六段に胴骸鉎しの、手答もせぬ天晴鋭焠、箇程に微妙かりけるに、いまだ落葉の奇特を見ず。然ることありと正しげに、いひつる人の搗鬼歟、益なかりき。と呟けば、豐實これを慰めて、某とても本意なし、と思はざるにあらねども、鄙語にいふ論より證據。鉎して見ずばいかにして、虛實を正可に知るよしあるべき。況刃の鋭味の、世に捷れしを目前に、見しは寔に名の下に、虛語なしとこそいふべけれ。恁れば乞丐の擊れしも、亦是無益の殺生な

ども鄕武は、阿容々々として已ぬべき、勢ひならねば些も怯まず、いよ〳〵聲をふり立て、却唔きたり、誘へたり。眞の仇討ならんには、鏁網襲衣刀劍、武器の准備のあるべきに、爾る東西なきは當座の慢語、脱るゝ便直であらんず。といひつゝも又近著くを、鎌倉蹇兒はなほ寄せじとて、身邊に遺たる息杖を、搔拿りつ、鄕武の、胸前近く衝著て、高い山阪、長櫃に息杖、息がきれます命の建場、いな〳〵其首にて御覽ぜよ。といはれて佮佇く鄕武は、然しも目鼻の阽なさに、面を皺めつ苦笑ひして、丁田主欄せ。命取るゝ悲しさに、這奴は心亂れけん、乞丐の技には相應しき、似而俳優にあらずや。といへば豐實もうち笑ひて、足は跛ても口ばかり、現朝膀なるものはなし。勿論世には蹇兒の仇撃、非人敵討なンどいふ、故事なきにあらねども、這奴が寃家は甚麽なるものぞ。君父の讐歟、妻敵歟。その情由聞ん、いかにぞや。と問ふを蹇兒は見かへりて、言あたらしき責問の一條、某がこの年來、姿を窶して所在を索る、寃家は親の讐にもあらず、又妻敵にも候はず。只是金が寃家にて、親には家を追出され、親類の門塞りて、竹馬の友も見かへらず。二世と契りし空枕、一夜の夢のなつかしき、柳巷がよひも錢なければ、俺から其首に路絕て、無慙や熟妓にすら、蜂吹れつゝ恁成果しも、皆是金の所爲なれば、いかで那奴に環會て、俺這怨を復さんず、と思ふものから運微くて、才に貰ふ鐚一チもん

足は跛ても手は腫ても、苦みあれば樂みも、あればある世の常情にて、日毎に携る竹杖にも、千載の齢あるを羨み、夜な〳〵宿る松蔭にも、萬代までとおもふなる、心も知らで誇負に、薄情や恩でもなき事を、恩に被けつゝおそろしの、刀の奇特を試さんとて、命を取るゝ過はなし。死して千歳を歷たらんより、生たる一日が優れり、といふことあるを思はずや。這里に往還の人を俟つ、右や左の袖乞でも、望しからぬ刀の手の内、その御法捨は御無用也。宗旨が違ふ通らせ給へ。といはせも敢ず鄕武は、眼を瞪らし聲苛立て、這奴甚大胆也。屠所の羊となりながら、今さら命を惜めばとて、助けらるべき事にはあらず。觀念せよ。と罵れば、豐實も亦冷笑ひて、恁まで因果を哺めても、なほ悟らぬは愚物の本性、常言にいふ驢耳彈琴、益なき問答時もや移らん、快々鈵し給へかし。といふに慌る鎌倉塞兒は、才に覺期を極めけん、なほも近著く鄕武を、推禁め、佗と睨へて、刀禰達恁まで陪話まうしても、聽給はずば是非もなし。今は何をか隱すべき。某も是武士の果、年來寃家を擊んとて、外見塘に世を潛ぶ、假り乞丐と知らずして、侮り給はゞ怪我もやあらん。いまだ本意を遂ずして、素より怨もなき刀禰們と、擊果さんはこゝろにず、好ましからぬ事なれども、そも允されずは脱るゝ路なし。誘御敵手になるべき歟。といはれて驚く鄕武豐實、伴當さへに氣味好からねば、憶ずも手を放ちけり。然けれ

左ても右ても世に棄られて、活る甲斐なき尫弱不具の、乞丐になりしはその身の業報、問でもしるき天罰にて、然ぞ死たうは思はんが、惡業いまだ盡ざれば、得も死れぬを一撃に、殺すは武士の慈善ぞ、と曉らで譟ぐ愚さよ。覺期極めて合掌せよ。苦痛をさすることにはあらず。こころ得たる歟。と身勝手を、並立てぞ誇負に、諭せば丁田豐實も、挨よりつゝ乞丐に對ひて、蹇兒よ汝は果報めでたし。目今主のいはれしごとく、死を樂ふても死がたかるべき、その命根を一刀に、斷るゝは是幸ならずや。兕嵬をも裂くといふ、名高る落葉の名刀にて、苦痛も覺ず往生せば、後の世はさぞ安かりてん。然ればその身を緋されて、木葉を落す奇特あらば、是這主は主君の御感に、預りて祿も增すなるべし。爾らんには汝が與に、法師を聚へ經を讀する、追薦佛事なからずやは。瀨に寓る龜の浮木より、遇がたかるべき大檀那に、遭ひしはこよなき造化なるに、その歡びを稟さずして、命を惜むは白物也。迷を醒せ、曉ずや。と理りめかして打つ合槌に、胸ぞ苦しき鎌倉蹇兒は、戰れたる膝に手を、掛て權且息を吻き、龜めし項を稍鶴して、眼を睜り、左見右見て、刀禰達さのみ慍らせ給ふな。宣ふ趣おん身に取りては、理りなる歟知らねども、己は一切こゝろ得がたかり。約生とし活物、朝に生れて夕に死する。蜉でも命は惜しがるに、乞丐なりとて殺さるゝを、歡ぶもののあるべきや。身は野曝しの家もなく、

第八輯 卷之四 上套

第八十回

殘仇を斬て毛野莊介と戰ふ
傳來を舒て小文吾兩雄を和ぐ

復說、馬加蠅六郎鄕武は、落葉の刀を引提て、發兒をはなち立出て、鎌倉蹇兒にうち對ふ、勢ひ凄じかりければ、蹇兒はいよ〳〵駭怕れて、吐嗟と叫ぶを、左右より、若黨奴隷が手を拿へ、項を抓て動せず。登時鄕武聲高やかに、やをれ乞丐奴、今さらに、叫びたりとて許さんや。然とても故なくて、汝が首を刎るにあらず。先や末期の引導に、說示さんず、听ねかし。抑儂が這兩刀は、小篠落葉と命けたる、世に多からぬ重寶也。就中落葉の刀は、銳きこと莫邪に異ならず。こをもて人を斬るときは、時ならずして四下なる、木葉忽地零ることあり。因て落葉と命けらる。嘗ば故管領家、持氏主の名刀なりける、村雨丸と相似たる、奇特あるよし或のいひしを、いまだ鉡して見しことなければ、主君に聞えあげがたかり。東武へ歸城の路次にして、鉡物になりぬべき、東西あれかしと思ふ折、料らず汝を見出したれば、緈のこゝに及べる也。

揮に從ふ若黨奴隷が、承りぬ。と應も果ず、皆散動々々と小塘隄の頭へ、走りゆきつゝ薦屋推倒して、鎌倉寋兒の項上を、搔抓み、引起して、やをれ非人奴快出よ。己們が老爺の御用なり。快出よ。と諸聲に最も苛鋭く罵りけり。浩處に南の町より、稍かへり來る相摸小猴子は、這箇體を遙に見て、驚きながら迯もせず、竊歩しつゝ近著て、椎の樹陰に闚窺をり。爾程に鎌倉寋兒は、思ひがけなく旅ゆく武士の、伴當們に手稠にせられて、胆を潰しつ戰慄れし、眼を睜り聲訥らして、やよ刀禰達惴り給ふな。甚なる御用歟知らねども、這身に犯せし過はなし。見給ふごとく跛蹇にて、一歩にても運びがたかり。許させ給へ。といはせも果ず、大家いよ〳〵聲ふり立て、坐行にもあれ、无脚蟹でも、出じといふとて出さで已んや。快々來よ。と左右より、手を捉り腰を推立て、宙に吊して茶店の頭へ、そが儘撲地と推居たり。登時馬加鄕武は、大刀の緒解て襷にしたる、野袴の稜結み、落葉の刀を引提て、豐實と共侶に発兒を放ち立出て、佶と睨へたる面魂は、問でもしるき屠殺の准備に、然らでも怕るゝ鎌倉寋兒は、魂已に身に添はず、吐嗟と叫て平張たり。畢竟馬加鄕武が、落葉の刀を鉟すや否。そは亦次の卷の首に、解分るを聽ねかし。

てをり、這時までも後れずして、從ひ來つる作當は、馬加の若黨と、二領の鎧櫃を擔ひたる、奴隷纔に二名のみ。這們が手づから茶を汲とりて、主にも薦めその身も喫て、割籠を拔きて啖ふもありけり。當下馬加鄕武は、跨たる刀の柄を撫て、丁田生は這名刀を、何と思ひ給ふやらん。いぬる日片貝殿の御前にて、某已に稟せし如く、小篠は甑に雪篠あり。落葉の刀は人を斫るとき、四下の樹葉おのづから、零ることありと或人いひにき。這義は寡君千葉殿も、知召ざることなるべし。はやく虛實を試て、然る奇特のあるならば、歸りまゐりて恁々と、稟して御感に預るべきに、鉏物は得易からず。さりとて狗子を斫るも要なし。遺憾きは這事のみ。といへば豐實頷きて、その義は咱們も願しけれ。仄に傳聞たりし、那村雨の刀のごとく、刃に鮮血を染るとき、樹の葉が零らばいよ〳〵名刀。折から四下の夏樹立、這里には老たる椎もあり。鉏して見たきものにこそ。といひつゝ遙に見出して、彼御覽ぜよ馬加刀禰、那首の塘隄の薦屋の內に、ひとり臥たる乞兒あり。他們は素より好人ならず。做しゝ積惡の業報にて、家を逐れ世に棄られて、野ぶせりにこそなりつらめ。しからばはやく這世の暇を、取するも是一功德、然は思さずや。とそゝのかせば、鄕武歡び身を起して、手を翳しつゝ得と見て、適愛たき非人の全身、足跛たりと見ゆれども、骨逞く肉肥たれば、鉏物には究竟也。彼牽出せ。と性急なる、指

らず。日午にだも憩ざりしは、使節の日時の後れんことを、怕れ思ふの爲にこそあれ、和殿の知ることならんや。と箝られて三郎は、且羞てふたゝびいはず。素より旅舍を倶にせざれば、是よりの後朝立に、東使の必誘ふを俟て、共に且寐をしたりける。爾程に豐賓郷武は、三國山より上毛なる、沼田へは出ずして、故意信濃路に赴きたり。これも亦山路の程にて、はふらかさんと思へば也。恁而豐賓郷武は、信濃の岡田に宿投りし夜、伴當們に再示しつ、次の日は毎にもあらぬ、曉かけて、旅舍を出て、頻りに路を急ぎつゝ、捷徑をのみ走りしかば、這日の午過る比、はや六七里の路次を經て、下の諏訪に遶り來にけり。這頭は順路ならざるに、曉かけて出たるを、那三郎はいかでか知るべき。是よりいよ〳〵路を急がば、他は必趕著かで、一宿は後れつべし。諸士以上なる俺們が、執事隷の若黨と、肩を比てゆかれんや。這里まで來つれば後安かり。折から酷暑の日午にて有繫に疲勞ざるにもあらず。且俺們が伴當も、後れたるが多かれば、霎時湖水の頭にて、汗を納るゝもよかめれ。とうち譚ひつゝゆく程に、果して湖水に向ひたる、塘隄の頭に出茶屋ありけり。遮日の葭簀を折繞らしたる、内にも外にも發兒あるのみ。茶博士は晝飯たうべに、宿所へやかへりゆきけん、寂寞として守る人なけれど、豐賓も郷武も、却已べきにあらざれば、共侶に找入りて、發兒に尻をうち掛つゝ、齊一湖水を眺め

に東武へ赴くを、心の内に歡ばず、兩人竊に課合しつ、いかで三郎をはふらかして、他より先に逸速く、歸まゐりて主君々々の、恩賞に預らばや、と思ふ計較ありければ、旅舍を三郎と共にせず。約北陸中山道は、客店の坐席間數なしとて、進むにも止るにも、恣にして他を交へず。日毎に朝立を遲くして、日の升るまで臥てをり。夕も亦これに準じて、必日の暮ざれば、旅舍に就ことなかりしを、菰野井三郎訝りて、有一日豐實鄕武に、這事をいひ出て、目今炎暑の折なるに、朝ははやく旅舍を出て、日午にこそ休息すべきに、遲く出て日午にも、憩はで急ぎ給ふ故に、動すれば伴當の、大く後るゝもの多かり。願ふは翌より朝涼に、旅舍を出、路をいそぎて、亭午の比は伴當に、少且憩し給へかし。といふを豐實聞あへず、和殿はその一を知て、いまだその二を知らざりけり。今番は尋常なる逆旅にあらず。首級といひ、這刀と云、那同類が聞知りて、跡を跟け、隙を覘ひ、奪略んと欲することの、これあるべき歟料りがたかり。然るを未明に旅舍を出なば、是盜賊に糧を齎し、仇に刃を借に似て、最も危きことならずや。烏滸なる人ぞ。と冷笑へば、三郎かさねて、しからんには、などて夕は日をくらして、遲く旅舍に就給ひぬる。這義は危く候はずや。と問ふを鄕武側より、その義も亦謂あり。曉には路ゆく人なし。こゝをもて危しとす。夕には二更の比まで、里人睡らず、路ゆく人あり。この故に危か

む、賣溜錢の置所、挾き袂と共侶に、綻びけらし、日來の横著、倶吟味より傍輩が、猛可に尻を割禪に、結著たる一分金、刺縫綿棉衣の松坂も、伊勢としいへば只得も、這身這儘脱參宮、同氣同病相憐む、友達誘引て乞食の開端、五十三驛六十日、百會押れぬ菅笠は、三蓋無安の同行三名、叱る親なく東人なしの、己が隨なる腰戰飯は、柄杓一本、刺薦一苞、餬ふてありくおもしろさ、還り後れて夥計には、先へいなれて、端なく、赦免に漏れし俊寛に、似たる艱苦も心から、信濃三界流落て、露宿に明す袖乞の、緣起は通て是まで也。噫鈍ましや虚々と、口を噉きていとゞしく、腹は北山、南の町へ、走一走して東西喫ん。錢をおこしね餅買ふて來ん、有歟ある歟。と垂薦の、間より手を差出せば、鎌倉蹇兒は遽しく、白梅楅を傾けて、爾らば憑む。と七八文、遞與すを受取る相撲小猴子は、南を投ていそぎけり。休題再說。大石千葉兩家の使、丁田畔五郎豐實、馬加蠅六郎鄕武は、長尾家より添られたる、荻野井三郎と共侶に、片貝の別館を立出て、歸路に赴きしその日より、那假犬士兩個の首級は、稻戸由充の助言の隨に、深く鎧櫃の内に藏めて、奴隷們に擔しつ、且小篠落葉の兩刀と、鏃上社平が舊刀は、亦是緊要の東西なればとて、各その腰に跨て、其身々々の腰刀は、倶したる若黨に持せけり。さばれ這豐實と鄕武は、妬忌遑しき小人にて、功を貪る癖ありければ、今番荻野井を副使にせられて、倶

そなけれ汗蝨、汗に糾れたる身の垢脂は、草津へ湯治のかへさより、這里に閑居の山住ひ、伴ふものは簀卷薦、小猴子と俺と只二名、經讀むすべもしらざれば、心細げに憐愍を、往還の人の袖に乞ふ、行狀仍て件の如し。却又和郎はいかなる故に、宿なしとまでなりにたる。年は二八か、十七歟、升りて十八十九文、擇取にさせても賣かねぬ、容止も醜からず。掏も磨きて美服被せて、人肉經紀宗太に見せたらば、梅孺丸歟、と思ふべく、箱根で邈姑王、鞍馬で遮那王、僧正坊でも辨慶でも、視棄ふ標致をもちながら、然とては解せぬ奴、龍陽になれ、と口說ても、情しらずで糠に釘。きかしてくれよ、素生は奈何。と問へば小猴子は冷笑ひて、儞も輕き口ほどに、足が達者であるならば、男子一疋なるべきに、可愛や浮世を陜布の、むね合がたき竹柱、狗兒の產室に異ならぬ、寐物語に身の懺悔、いふて益なきことながら、落ればおなじ谷川の、流れを共に飲むことも、暑熱を凌ぐ相宿なしの、一樹の陰も他生の緣、人は見かけによるものかは。無て七癖、八歲兒も癇積、九ッよりして出奉公、とうちん香に名もしるき、俺舊里は小田原にて、年期猴子の初より、小錢竊みて買啖ひ、使の出かけ、湯のかへさ、團子點麩蠟薩摩芋、飯鮓醴酒柿蜜柑、大福もち論健啖にて、何でも四文を摠購盡に、夜撞舖では常花主と、いはれた義理歟、動もすれば、高手に鬼を搗倣ひ、日每に東人主管の、目視を翳めて抓入

個の乞兒は、這里を徂徠の旅客と、諏訪の社に詣る人の、袖に乞んと俟程に、這日も既に往還稀なる、土旺半分の日午に、臥疲倦たる鎌倉蹇兒は、筵壁をうち敲きて、やよ喃鄰の相撲小猴子よ、午になりしに東西欲しからずや。けふは朝より幸なくて、貰ひし錢は七八文、餅でも買ふて啖まく思へど、足が立ねば例の如く、里へいぬ折憑むぞや。といへば小猴子は點頭て、そはこゝろ得てをるけれど、倘五六文挊得ねば、晝飯料には足らぬ也。儞は全身肥滿腨脖て、病氣もなく見えながら、腰の立ぬは甚なる故ぞ。角力の怪我歟、蛭兒の神を、祈り過せし祟歟。と問つゝ呵々とうち笑へば、鎌倉蹇兒は舌うち鳴らして、噫又打諢て嬲るなよ。俺も初は鎌倉にて、泔を流せし米町なる、某甲屋の小官人、阿乳母日傘で育られ、懷手してくらしたる、癖が失ねば商賣は、精進物より嫌ひにて、十六七の春秋より、大磯がよひ化粧阪、鷄蛋の四角と、月の出る、晦知らずの嫖蕩遊樂、五間間口の庫布の、傾くまでに奢りては、使ひも足らず又さらに、賭鈔に耽りて親の東西、他の東西さへ借倒し、身さへ倒して竟には亡命、久離せられて彼此と、一宿寓りの歇舟、ゆく先毎に衝流されて、磯にも著ず、山挊ぎ、箱根で雲介したる折、薄情や便毒を踏出し、骨に縢みて長櫃を、舁れず瘡をかくまでに、歩ぬ二足三文の、錢にも金にも憎れて、坐行乞兒になりたるは、親の罰ぞと思へども、子で子にあらず血をわけし、甲斐こ

るものが兩刀を、仇の爲に奪れて、賊物にせられては、死するに劣りし恥辱也。那兩東使丁田豐實、馬加郷武とかいふ奴は、きのふの朝片貝を、立去りにきと聞たれば、只一宿の遲速也。夜を日に續て趕蒐なば、途にて遭ぬことやはある。伴當共に撃留て、俺們が兩刀を、とり復して後にこそ、甲斐の石禾へ赴くべけれ。他們が去向は信濃路ならん。といはれしこともあるものを、誘いそぐべし、いそがんず。と示合しつ饑たる鷹の、立鳥を見し勢ひにて、齊一走る壯夫が、玉なす汗は六月の、炎暑に撓ぬ血氣の早行、その日は大道(三十六町一里)十五六里を、飛ぶが如くに趕たりける。話分兩頭。信濃路や、岐岨の高峯の雲わきて、ゆくらん人とかへり來る、旅宿は幾夜ふる事の、昔を今に語續ぎ、いひも傳へて夏寒き、諏訪の太湖風渡る、浮寐の鳥と尾を搨らし、羽をも枯して世を不樂つ、世に棄られつ、野ぶせりの、這里に兩個の乞兒あり。路の傍の塘隄の下に、木枝折葺く伏小屋は、穗家の芒歟、門田の藁歟。水草織做菰簾、筵屏風を合壁、現淺ましき簑虫の、父とは鳴ず、はゝき木の、帚も拿らで悟良は、那寒山子拾得に、似て非人とは知られたり。そが中に一個の乞丐の、年齡は四十許、蘷の一足にあらねども、故疾なるべし足跛たるを、鎌倉蹇兒と喚做したり。又一人ゝは少年にて、襤褸ながらの夏衣、麻歟生絹歟蟬の羽に、素肌の衣通りし、身の皮醜からざるを、相撲小猴子と號たり。恁而這兩

すことあらば、便りに就て這刀を、返しまつらんとこそ思ひ候へ。これすらあるにいかにして、金を賜るよしあらんや。といへば小文吾も亦いふやう、小生們はその裹の內に、貯祿の盤費あり。且小生が腰刀は、簸上社平が大刀なれば、惜むに足らぬ東西ながら、犬川の刀と共に、贓物にせられては、遺恨なきにも候はず。武運竭ずば亦那刀の、手に入ることも候はん。金子は推辭奉る。といふを由充聞あへず、頭を左右にうち掉りて、斷金の交りは、受るも授るも時宜に依るべし。介意ありては後々まで、快らず思はんのみ。枉てこの儘受給ひね。と只管薦めて已ざりければ、二犬士竟に推辭かねて、受戴きつゝ共侶に、行裹にぞ收めける。恁而盃を遣替して、既に數獻に及ぶ程に、鷄鳴忽地曉を、報て別を促すにぞ、由充は潛と立て、緣頰に隱措たる、二蓋の菅笠、二雙の草鞋を、荘介小文吾に遞與せしかば、二犬士いよ〳〵感佩して、歡びを述別を告て、兩刀を跨、行裹を駄ひ、齊一緣頰に立出つ、草鞋の紐手ばやく締びて、那木夾を右に拿、左に菅笠を引提て、庭門より共に出てゆくを、由充は唯々憐々と、無異を祝して目送りけり。爾程に荘介小文吾は、那木夾をもて一二の城戶を、障ることなく出てゆく程に、天はほの〴〵と明にけり。こゝに至て野鳥の、籠をはなれし心地して、由充の鴻恩德義を、且感じ且走る程に、兩人竊に相譚ふやう、稻戶執事の慈善にて、兩個の頸を續れしとても、武士た





いがでか當らんや。就て又一議あり。向にも既に示せし如く、各の兩刀は、首級に添て老夫人の、實檢に備へしに、那豐實と鄉武が、傳來を演、證据の爲に、まうし賜りてもてゆきにき。只返されしは犬田生の、中刀のみにて這里に在り。大川生の兩刀は、是先考の記ならば、さぞ最惜く思ひ給はん。世の常言にも所藏の寶は、身の差替といふことあり。得失は皆時也、と思ひ諦め給へかし。千萬金の名刀なりとも、命に易る東西やはある。といひつゝ袱に包たる、四口の刀を取出して、這三刀は新刃なれども、鋭味に皆覺あり。願ふはこれを受收めて、跨て竊に立退給へ。亦薄義には候へども、這一包は黃金十兩、盤纏の爲に贈りまゐらす。いかで笑納し給へかし。這他は某預り置たる。兩個の行裝も這首にあり。こゝろ徐に身裝して、曉かけて出給へ。門戶は夜中不通なれども、曉七鼓より木夾あれば、入るも出るもいと易かり。木夾も亦這首にあり。留別の盃も、甲夜より竊に准備をしたり。酒菜はなくとも復遇がたき、別を惜む寸志にこそ。といひつゝもはや手匣の內より、盃銚子、兩三種の、餚も共に取出して、潛やかにぞ薦めける。登時莊介小文吾は、刀を受て金を取らず。遺る曲なき由充の、心配りの歡びを、丁寧に演訖りて、莊介が又いひけるやう、貴敎のごとく那兩刀は、親の記で候へば、這身と倶に惜けれども、既に人手に渡りては、今さらに詮方なし。倘折を得て那兩刀を、とり復

まだ曉らず、又那刀を見るといへども、許多の年を歴し事なれば、思ひもいでず。しかはあれど、賢良尙義の兩勇士の、寃枉を憐む爲に、心を盡してその死を救ひし、誠は則求ずして、俺が師に返す舊恩舊義、素懷に愜ふ不勝の歡び、察し給へ。と聶きの、橋ならなくに犬川に、深き情の渡津衞、遭て別て八百日ゆく、越の長濱長からぬ、天や明なんと惜みけり。莊介はつくづくと、聞つゝ坐に感淚の、進む眼包をしばたゝきて、原來執事は拙父の、弟子でをはせしよ。二親の世を去りにし比は、才に寒暑を覺しのみ。その弟子をも朋友をも、聞知りたるはなかりしに、家傳の刀の來歷より、不測に執事の素生さへ、說諦されしは亡親に、再會見る心地して、舊故の情に堪ざりき。然る舊緣のあらずとも、執事の德誼の高きこと、唐山漢の高祖の時、季布を久しく舍藏て、竟には漢の良臣に、做しゝ朱家にも優べきに、錦の上に花を添たる、心操こそ有がたけれ。晚生倘幸に、良主に仕へて、一軍の、大將を奉り、料らずも長尾殿と、鋒を交ることあらば、爲に三舍を退くべし。伊豆には三島箱根權現、當國にては彌彥の、神も捨ずば照覽あれ。這義に背くべからず。と誓ふ勇士の心の誠に、小文吾も亦感激して、小生は只次團太を、俠者なりきと思ひしに、執事は眞の豪傑なるかな。折にあふたる俺身さへ、初に倍して憑しく忝くこそ候なれ。といへば由充額を摘て、一兒の賞美は分に過ぎたり。某

ば、犬田が購得たる也。資財雜具に常の主なし。賣るものあり、買ものありて、傳々て又故の、主に還るも往々これあり。又怪むに足らざること歟。と迭代に說示せば、由充は耳を澄して、聞くこと約半晌ばかり、只管に感嘆して、適微妙き刀の傳來、疑惑はこゝに冰解せり。それにも優て一奇事あり。俺が本貫も亦伊豆にて、親は則堀越殿（足利政知）に、仕へたるもの也ければ、犬川生の先君子、とその交り疎からず。某弱冠なりし比より、衞士大人に從ひて、文學を受武藝を倣ひし、師弟の恩義も亦深かり。加以某が、年十七八なりし比、繼母の讒により父に逐れて、親族許寓居せし事あり。その折に衞士大人の、父を諫め母を和諭て、召返させ給ひにき。恁る德義の君子なりしに、惜むべし暴君の、非法にその身を措難て、竟に刃に伏給ひたる。その折に某は、親の喪に籠居りしかば、褻事すら一臂の力を、盡さで空に過したる。爾後も又後室御母子の、他鄕へ赳立給ひし折、亦俺繼母の身まかりて、憂に丁りし比也ければ、然ともしらで人傳に、程經て聞て最大、遺憾くは思ひしかども、往方をしらねばせんすべも、歎彌倍す君家の斷絕、政知亡させ給ひしかば、某們も亦流浪しつ、些の由縁を心當に、這地に來つゝ幸ひに、淺き文學武藝をもて、長尾殿に仕しより、漸々に登揚せられて、老夫人に隷られたり。恁舊緣はありながら、世に同苗字の人多ければ、犬川生を衞士大人の、獨子なりとはい

官物になりにき、と爾後母のいはれしを、小耳に留めて記憶たり。父が枉死は晩生が、五六歳の時なりしを、七歳になりける冬の比、母は旅宿に世を去りしかば、晩生は大塚なる、莊官蟇六の小廝にせられて、年來那家に仕へたり。よりて東人蟇六夫婦の、仇たる鐵上宮六を、撃果せしにより、禁獄せられて、首を刎られんとしたる折、犬田をはじめ異姓の兄弟、甲乙に拯取られて、死なざることを得たりける。その折俺身に寸鐵なければ、犬塚信乃戍孝が、晩生にとて讓られし、兩刀は父の遺愛にて、寸尺表裝、家の紋、刀尖に些の疵ありし迄、豫聞しに違はねば、歡び受て五箇年來、一日も腰に跨ぬことなし。その間なる傳來は、這犬田こそよく知りたれ。といひつゝ傍を見かへれば、小文吾も亦膝を找めて、執事聞給ひねかし。六七箇年已前、小生舊里にありし時、坊賈の手より十五金に、購得たる兩刀ありしを、親の意に稱はねば、そが儘に祕措きしに、犬塚犬飼が流寓て、値偶せし折にその兩刀を、出して信乃に贈りにき。爾後又犬塚が、犬川に贈りたる、綷の趣は方纔莊介の、話說にて分明ならん。といへば莊介沈吟じて、此彼思ひ合するに、晩生が父の遺刀は、昔年沒官せられし後、堀越の御所滅亡の折、何人の手にか傳々て、鎌倉に到りしを、粟飯原首が購求めて、主君へまゐらせたるならん。爾後首が枉死の折、其首に覘ふ賊ありて、竊て人に售けんを、又此彼と傳々て、行德に到りしか

神地祇、倶に怒りてその國に、禍を降すこと、和漢に先蹤最多かり。今さら數るに遑なかるべし。某這義を思ふによりて、竊に御邊們を救ひしを、知らで他人に厚くして、主君には忠ならず、と後世評するものもおらん歟。そは由充を知るものならず。只是賢を寃げず、その辜なきを殺さずして、君の過を補ふを、忠ともいはめ、義ともいふべし。是某が職分なれば、俺が私を行ふて、公道を喪はず。爾るに疑惑の一條あり。犬田生の腰刀は、大石殿の家臣なりし、籏上社平の大刀なるよし、丁田畔五郎豊實が、認りて恁々といへる也。そは那社平を撃れし折、分捕したるにあらんずらん、と猜することは猜せしかども、犬川生の兩刀は、昔年千葉の家臣と聞えし、粟飯原首胤度が、籠山逸東太の爲に枉死の折、盗兒ありて竊去たる、自胤主の祕藏の副佩、小篠落葉と名けられたる、その大小の刀なるよし。又是馬加蠅六郎鄉武がよく認りて、その來歷を正可にいへり。勿論重代の東西にはあらず、今より十八九年已前、胤度が鎌倉にて、購求めて自胤へ、まゐらせしよしその義もいひにき。犬川生はそをいかにして、今まで腰に跨給ひしぞ。什麼傳來を聞まほし。と問れて莊介、さン候。晩生が兩刀は、亡父犬川衞士則任が記也。父は則伊豆人にて、堀越御所の莊官なりしに、諫書を奉りたる、おん咎により自殺しつ、軈て家財を籍られて、當日沒官せられしとぞ。その折件の兩刀も、那籍の内中にありて、

が賢を愛して、竊にその君の非を補ひたる、誠心の致す所、いはでもしるきことながら、由充は初より、家廟に供ずる茶頭飯菜、及裝物の果子までも、日毎に窖内へ餽下して、よく二犬士を養ひければ、莊介も小文吾も、三十餘日に及ぶまで、饑ることなかりけり。只這勳りのみならず、土窖には席を重布て、火盤あり茶器もあり、炭は折々袋に斂しを、密々に餽りしかば、二犬士は稍久しく、土中に在りて地氣を受ず。爾も盛暑の折なれば、土中は倒清凉にて、暑熱を忘るゝ可なれば、些も恙あることなく、安らかに身を有ちたり。こは是作者の自註にて、莊介小文吾が死して復、世に見るゝ禍福凶吉、說くこと都て右の如し。看官善惡應報の、違ざりしをおもふべし。閒話已訖。紹割記、莊介小文吾は、倶に窖内より出て、由充にうち對ひて、舍藏の恩、再生の、歡びを演しかば、由充聲を密まして、假首級の事、豐實鄉武が事、那條の首尾箇樣々々と、遺もなく說示して、今はしも心安かれ。大石千葉家の兩東使は、鎧櫃に首級を藏めて、けふ曉がたに立去りにき。去向は信濃路なるべきに、御邊們も潛出て、快投かたへ赴き給へ。抑今番某が、祕計は御邊們の與のみならず、俺が老夫人のおん僻事を、竊にこゝに補ひて、辜なき勇士を殺さじ、と逆おもふによりて也。昔者唐山、東海の孝女の如きも、寃枉に誅戮せられて、三稔旱魃の祟あり。然ばこそあれ賢を寃げ、辜なきを殺すときに、天

る、豐實と鄕武が、各主君の使として、同口に來にければ、大刀自則由充に、二犬士を斬れと下知せしを、由充は辭はずして、軈て溷六穴八を、獄舍より牽出さして、卽便頸を刎てけり。只この機密を知りたるものは、若黨荻野井三郞と、腹心の老兵們、兩三名に過ざれども、厶にすら誓書を寫して、緊しく口を鉗しかば、後々までも洩ざりけり。然けれども由充は、那豐實と鄕武が、疑ふことのあらん歟、と思ふによりて莊介と、小文吾が兩刀を、添て實檢に備へしに、豈憶んや、莊介が腰刀は、昔年粟飯原胤度が、籠山緣連に撃れし折、並四郞と船虫が、馬加大記の密意を稟て、奪略て逃亡たる、小篠落葉の名刀也。又小文吾が帶たる刀は、庚申塚の法場にて、犬飼現八が分捕したる、簸上社平が大刀なりき。現八これを莊介に與へしに、莊介は親の記なる、雪篠の刀（卽小篠落葉の兩刀なり）を得たりしかば、則これを信乃に讓りぬ。爾後五犬士（信乃、道節、莊介、現八、小文吾）小集して、又荒芽山を立退く折、信乃亦これを小文吾に、贈與たりしより、小文吾これを腰に放さず、その身を搦捕られし夜艾、莊介が兩刀と、共に由充の手に落て、絆のこゝに及べる也。然とは知らぬ豐實も、鄕武も件の刀に、各記憶あるをもて些も狐疑の心なく、那假首級を眞として、その鑑定に誇りしかば、由充は謀る所、十二分に行れて、犬川犬田の兩勇士は、萬死を出て一生を、保ちて這首に躱れてをり。こは由充

るを覘知りて、竊に件の板席を、推抗つ拿除きて、框をほとほとと敲きしかば、暗號なるべし土窖より、階子を登り推續きて、兩個の壯佼出にけり。是則別人ならず、犬川莊介義任と、犬田小文吾悌順也。看官、莊介小文吾は、旣に死刑に行れて、首級を東武へ齎せしに、今又這里にその人あり。そをいかにぞ、と原るに、由充は初より、這二犬士の義氣胆勇、その進止を見て猜するに、非道を做すべきものにあらず。曩に武藏に在りし時、那群小に憎れて、領主の法度を犯せしは、是已ことを得ざるの故にて、その罪にあらざる也。救ばや、と思ひしかば、辭を盡し理を推て、箙大刀自を諫めしに、用ひられねば是非に及ばず、莊介小文吾を誑引よせ、矢庭に搦捕せしを、なほ獄舍へは遣はさず、そが儘一室に閉籠置て、なほ又思慮を旋すに、今朝二犬士の生拘たる、酒顚二が手下と聞えし、溷六穴八と喚做す小嘍囉は、その面影さへ、身丈年庚、總て莊介小文吾に、毫も違はずよく肖たれば、竊に件の兩賊に、藥を飮し聲を嗄して、却二犬士の單衣を、被せてその曉がたに、死囚牢へ遣したり。こゝをもて獄卒們は、溷六と穴八を、二犬士也と思はぬもなく、爾も溷六穴八は、詰旦より聊も、ものいふことを得ざりしかば、只是病痾の所爲ならんとて、藥を乞ふて飮せしかども、その聲いよ〳〵嗄果て、馬脚を露す破隙なければ、眞僞を知るものなかりけり。恁而六月の中浣に至りて、大石千葉の使な

しかば、次團太驚き且うち歎きて、然るにても那二犬士は、武藝勇力心術まで、世に又儔多からぬ、俊傑と覺るに、功ありながら賞を得ず、贋領主の媚者の與に、舊罪科あればとて、雙て首を刎られし、片貝殿のおん計ひは、執念深き女儀の僻事ならん。好遮莫兩所の使者の、迹を跟、趕蒐て、いかで首級を奪取て、死後の恥辱を雪ずば、俺豈俠者といはれんや。要こそあれ、と深念をしつゝ、土丈二鲷三們幾名歟、腹心の壯佼を、猛可に聚合謀し合して、大塚石濱兩所の使者の、去向を尋ね趕撃して、首級を奪んと議する程に、忽地障る事いで來て、本日を空に消せしかば、既にして二日後れたり。且火家にも異同ありて、衆議亦一決せざりしかば、密謀竟に整はで、おもふにも似ずなりにけり。案下某生再說。稻戸津衛由充は、大石千葉兩家の使者の、荻野井三郎と連立て、伴當を將て東路へ、辭し去りしその夜文、志念すよしあればとて、妻子も奴婢をも皆睡らして、獨家廟に籠居つ、更闌るまで看經の、聲蕭然に聞えけり。抑由充が家廟の下壇には、方一間の板席あり。又その下は土窖にて、深六尺計なるべし。重簍をもて造りしかば、些も水氣入ることなし。こは急火災あらんとき、佛器を斂る爲にして、生平に開かぬ所にあなれば、外より出入るものはさら也。妻子の外は奴婢們だも、これを知るもの稀也けり。閒話休題。然ば由充はこの夜文、丑三の頃及に、闔宅のものの咸、熟睡した

地祟あり。性命有ちがたかるべし、といはざる者もなかりしかば、いよ〳〵驚きます〳〵憂ひて、その曛昏にかへり來つ、妻の嗚呼善によしを報て、士丈二鯛三いへばさら也、子品子儀を僉召聚へて、那二犬士を救ひとるべき、衆議を凝らし、便直を旋らし、是よりの後密々に、執事の家に便りを求めて、若黨荻野井三郎們、その方ざまなる屬役にも、人情を多くしつ、小文吾莊介が罪過の讞斷を、輕くせられんことをのみ、只管に憑みしかども、執事稻戸由充は、その心ざま方正くて、萬事に私あることなければ、次團太が人情を、叱り退けて些も受ず、これにより荻野井們の屬役も、各よくその職を守て、賄賂の路を斷ければ、次團太が准備相違して、徒事となるものから、切て獄舍へ食餌を餽りて、二犬士に薦んとて、又その准備をしたれども、莊介と小文吾は、死囚牢とか名けたる、緊しき獄舍に繫れたれば、親子妻妾たりといふとも、食餌を遣すこと稱はず。況親しく對面は、夢にも許されがたければ、次團太竟に術計竭て、獨頻りに焦燥のみ。思ふにも似ず日屬を經たる、六月の某の日に、那二犬士は首を刎られ、折から武藏の大塚と、石濱より來つる兩個のおん使、丁田畔五郎豐實、馬加蠅六郎鄕武と喚做すものに、執事の若黨荻野井三郎を副られて、件の首級を大石千葉の、兩家へ贈遣さる。よりて丁田馬加は、荻野井と共侶に、きのふ片貝を辭し去て、既に歸東に赴きぬ、と報るもののあり

て、問せ給ふことあらん折、おん答に委みなく、具に聞えあぐべきもの、他ならでは候はず。と稟せば大刀自又頷きて、現荻野井三郎は、執事隷の若黨なれども、津衛が妻の弟也、と聞たることもあるぞかし。然るこゝろを得しものならば、副使として遣さん。翌は未明に首途の、准備をさせよ。と急して、却豊實と郷武には、歸東の暇を給ひしかば、僉共侶に言承しつゝ、うち連立て退出けり。

第七十九回

家廟に齋して良臣異刀を返す
茶店に憩ふて奸佞落葉を試す

話表石龜屋次團太は、小文吾莊介の二犬士の、片貝へ招待せられしかば、饗應賞祿然ぞあらん、と思ふによりて掛念せず、一日二日と歷る程に、忽地風聲耳に入りて、那二犬士はその夜又、執事由充の宿所にて、許多の力士に搦捕れて、既に禁獄せられしよしを、報るものさへありしかば、駭きながらなほ疑ひて、實事ならじと思ふにぞ、軈て片貝に走りゆきて、此彼と探問けるに、その事果して搗鬼ならず、件の莊介小文吾は、大塚の大石殿と、石濱なる千葉殿に、舊惡あるものなるよしにて、片貝殿(箙大刀自をいふ)の憎ませ給ひて、壻君達のおん與に、恁

是あるべき歟、料りがたかり。但用心に如ことなし。といひつゝ傍を見かへれば、豐實郷武眼を睜りて、その義は心安かるべし。縱同類の聞知りて、跟覘ふとも俺們兩人、こゝろを合して守護做ときは、いかにして〳〵、指でもさゝすることはなし。といふを由充推返して、そはその該の事ながら、盜兒の間はあれども、成人の隙なしといふ、鄙語も候へば、倘愚意に由るときは、各位の具足櫃なる、鎧の胴に首級の小瓶を、重匣にして從者に持し給はゞ、誰か莊介小文吾の、頸なるよしを知るものあらんや。これ未然の禍を、防ぐ用心なるべけれ。といはれて豐實郷武は、有理と思ふを爾氣なく、俺們も亦恁せん、と思ひしかどもまだいはで、助言を受るに似たれども、そは左も右も仕らん。然のみ苦勞にし給ふな。と輸惜みたる不減口を、由充は爭はず、又大刀自に稟すやう、畔五郎も蠅六郎も、御媾者の使者で候へば、首級も大刀も願ひの隨意、遞與して還し給ふとも、けしうはあらぬ事ながら、一個の副使を立られて、倶に東武へ遣し給はゞ、壻君達のおん返答も、はやく聞えて便宜なるべし。賢慮いかゞ。と問まうせば、大刀自屢頷きて、厥々それもよかゝめれ。什麼誰を遣すべき。甲か乙かと問れたる、由充頭を傾けて、此彼と擇み給はんより、臣に隷させ給ひたる、荻野井三郎宜しからん歟。他は莊介小文吾が、旅宿に赴き詭計りて、將て來つるものなれば、那顚末を具に知れり。然ば大塚石濱に

せなば、さぞな感悦し給ふらめ。いと有がたきことなりき。とその來歷を演說しつゝ、はや上坐にうち對ひて、その歡びを稟すにぞ、豐實も亦小文吾の、兩刀を拿抗て、含笑ながら後方なる、由充を見かへりて、執事これを知り給へる歟。御前這刀を儭せ。こは曩に小文吾們が、額藏の莊介を、奪略て逃亡せし折、他們が爲に撃れたる、鍛上社平が大刀にこそ候へ。表裝總て初にかはらず、鞘は銀の巴蛇にて、鍔に上字の間彫あり。在下當年件の社平と、職分同僚なりしかば、是生平に見る所、紛ふべうも候はず。是も亦小文吾們が、那折に竊取て、年來腰に帶たるならん。袷といひ恰と云、恁まで正しき證据はなし。大刀をも稟賜りて、披露に及ばゞ主君の歡び、このうへや候べき。いかで御許容あれかし。とこゝろ得貌に請稟せば、箙大刀自領きて、此彼共に腰刀さへ、舊の主さへ正可に知られて、出處分明ならんには、贓物たること疑ひなし。そが中にも、莊介が兩刀は、自胤主の祕藏せられし、東西とし聞けば不測の會計、首級と俱に三口の刀を、大塚石濱の兩城內へ、遣さんこと勿論也。津衞も這義をこゝろ得よ。と指敎に由充額をつきて、仰うけ給はり候ひぬ。思ふに倍たる三口の刀の、來歷こゝに見れしは、恐ながら壻君達へ、御深志いよ〳〵屆せられて、最も愛たく候べし。首級は溽暑の比なれば、小瓶に斂め酒に浸して、遞與さば腐爛るべからず。倘道中にて那同類の、奪取んと欲することの、

へ。と拿出しつゝ、遞與すを受取る豐實鄕武、是にも付たる紙小牌を、見つゝ迭に彼此と、取つわたしつ共侶に、觀ること約半晌ばかり、鄕武おもはず膝うち鳴らして、奇なるかな、這犬川莊介と、牌に寫されし兩刀は、寡君自胤の祕藏し給ひし、小篠落葉の大小刀に、表裝寸尺些も違はず。今より十七八年の昔なる、寛正六年の冬十一月、粟飯原首胤度が、籠山逸東太に擊れし折、その中途に盜兒あり、嵐山の尺八と、小篠落葉の兩刀を、奪去にき、と聞えたり。當年は某の、十四五歲の冬にして、童扈從でありければ、這兩刀の名刀を、幾番となく目にも見つ、手にも觸たるよしあれば、今に至て忘るゝことなし。但刀尖に些の疵あり。この義は記憶候はねども、這小篠落葉の兩刀は、千葉家相傳の東西にはあらず。寛正四五年の比にやありけん、件の粟飯原胤度が、鎌倉に使せし折、那地にて購求めて、寡君にまゐらせたり。これをもて人を砍るときは、秋ならずともその四下なる、木の葉おのづから落ることあり。譬ば那村雨の名刀の、拔けばその刀尖より、水氣出るといふに似たれば、小篠落葉と名けらる。小篠は則刀の甑に、是金の雪篠あり。落葉は件の奇特によれり、といふ人も候ひしを、錻してみたる事なければ、奇特の事は安定ならねど、その他は證跡分明也。おもふに額藏の莊介は、這兩刀を竊取たる、那盜賊の子にもやありけん。首級と共に賜りて、石濱殿（自胤をいふ）にまゐら

んず。といはれてはやくこゝろを得たる、畔五郎豐實は、執事由充にうち對ひ、且その所役を勞ひて、目今御前の仰のごとく、某は五箇年已前、兄町進が額藏を、拷問の折遭際して、闕窺しことと候へば、聊認りて候也。といへば蠅六郎鄕武も、亦由充にうち對ひて、某とても小文吾に、ものいひしことはなけれども、先代大記が宿所にて、那假少女旦開野が、歌儛たる當晩、小文吾も席上に、在りしを、閃と見し事あり。遠外にして夜視ながら、今も忘れず候ぞや。といへば由充微笑て、そは最宜き證人也。爾ば各內覽して、眞僞をまうしあげ給ひね。と答て兩箇の首函を、誘とてそが儘差寄すれば、豐實は犬川莊介と、牌付たるを受取りつ。鄕武は小文吾の、首函引よせ共侶に、蓋を掻遣り、左見右見て、寔に是は記憶ある、那莊介に疑ひなし。(句)是は正しく犬田小文吾、(句)眉毛鼻梁年歲まで、(句)曩に見たると些も違はず、(句)畔五郎殿、(句)蠅六殿、(句)御邊も、(句)咱們も、(句)鑒定に、(句)錯誤はなけれども、同是證据になるべき、這們が所持の東西あらば、東武へ還りて披露の折、いよ〳〵便宜に候はん。(句)然樣然樣愚意も同前、(句)やよ稻戶殿、(句)這ふたりの行裹に、見つべき東西は候はずや。と問へば由充傍なる、袱包をうち開きて、然也莊介も小文吾も、單身逆旅にてありしかば、包裹は有やなしや知らねど、爾る御所望のあらん歟、と思ふによりて携しは、則他們が兩刀也。且見給

程もなく、頭顱實檢に入れんずらめ。今霎時這里に侍りて、津衛がまゐるを等ねかし。と留て軈て左右なる、女房に茶を看めさせ、果子さへ齊一賜りたる、恩饗大かたならざりけり。浩處に一個の女房、目今津衛が出仕して、おん次房に侍りと稟すを、大刀自聞つゝ頷きて、そは俟不樂たり。快召ね。と仰に恁と喚續の、濱ならなくに立浪や、衡の襖戸引開て、稲戸津衛由充が、生平に替らぬ出仕の禮服、肩衣袴の飛驒信濃、越後に名高る良智の人品、年の齢は八百日ゆく、いそぢの上を六ッ七ッ、八ッの土圭の間を過ぎて、おん前遙に伺候せしを、大刀自招き近づけて、津衛歟。嚮に吩咐たる、莊介小文吾を誅せし歟。折もよく東武なる、兩個の壻達の使到著は、思ふに倍て便宜なれ。件の首級を齎して、遣さば好家裏ならん。快實檢に入れよかし。といそがされても爾氣なく、さン候。仰に儘して犬川莊介、犬田小文吾兩名は、獄舍より牽出さして、既に誅戮仕りぬ。然ば首級を御覽に入れん。と應て後方を見返れば、次房に侍りたる、兩三個の童扈從が、こゝろ得て倶に携出る、那二犬士の首函に、袱包を拿添て、はや由充の左手のかたに、やをら措てぞ退きける。登時簾大刀自は、件の首函をつら〳〵見て、喃津衛、俺身が今その兩個の首級を、見つればとても豫より、面を認りしものならねば、眞僞は玆に定めがたかり。そは先丁田畔五郎と、馬加蠅六郎に見せよかし。這人々は初より、認りしこともあら




訪問起居東
使謁北母時
歡借公道復
私怨

が連立て、這地に來つるは天の冥罰、みづから網に入りし也。よりて執事稲戸津衞に、密意を示し、奇計を旋らし、搦捕して最緊しく、獄舎に繋せたりけるは、前月二十日の曉がたなりき。豫は他們を活ながら、大塚石濱の兩城内へ、牽遞與さんと思ひしかども、路遠かるに倘中途にて、事いで來なばいかにして、悔るとも及ぶべき。はやく首を刎さして、首級を餽るに優ことあらじ、と尋思を易ても五月の間は、そも做がたき以あれば、昨今まで默止したる、折から汝達が主の使として、恁同口に來にけるは、時日を延せし甲斐ありて、いと歡しう思ふなれ。といはれて勇む豐實鄕武、おもはず倶に雀躍して、そは有がたきおん計ひ、大塚石濱兩主君に、その義を傳へまうしなば、さこそ歡び給ふべけれ。烏滸がましうは候へども、件の額藏小文吾は、主君の法度を犯したる、罪戾のみにも候はず、在下們が先代の、與にも共に逭すまじき、讐敵で候ふに、然とも知らでよき折から、おん使に立られて、その首級を給はらば、面を起す奇妙の家裏、今に初ぬ事ながら、御女儀に稀なる武邊の御差配、千萬金の御恩にも、倍て感戴仕りぬ。寔に珍重々々と、稱へて齊一額をつきて、その歡びを演しかば、大刀自さこそ、と笑しげに、善は急げと世話にもいへば、汝達は太義ながら、翌の朝開に當所を退りて、はやく東武へ還れかし。既にその義を思ひしかば、稲戸津衞にこゝろ得さして、那罪人們を誅せよ、と吩咐たれば

けるよしを、稟すものなきにあらねど、他と一味のもの多かれば、今さらに馬加の、苗迹を立給はずば、孝胤主に笑れ給はん。御沙汰を願ひ奉る。と頻りに傾け稟せしかば、自胤遂に已ことを得す、老臣們と評議の後、千原蠅六郎鄕武を、卽便常武の迹として、その格式を升されたり。那常武は下總なる、千葉孝胤の近習なりしに、主に叛きしことありて、走りて石濱の城に來つ、千葉の城の爲體を、詳に演說して、仕へんことを乞稟せしかば、漸々に寵用せられて、竟に權臣になりたる也。然ば件の奸黨が、その苗迹を絕給はゞ、孝胤主に笑れん、と稟せしは、かゝる故也。現小人は過を、飾るをもて賢とす。自胤是非の間に惑ひて、その佞辯を受容たる、智略もさこそと知るべきのみ。閒話休題、爾程に箙大刀自は、大塚石濱兩所の使者、丁田畔五郎豐實と、馬加蠅六郎鄕武を、身邊近く召寄て、兩個の息女達よりまゐらせ給ひし、消息を𩛰して、那里の安否を諮などしつ、却犬川莊介と、犬田小文吾を搦捕たる、絆の趣箇樣々々と、遺もなく說示して、那莊介は大塚なる、莊官蟇六とやらんが惡僕にて、こよなき罪人なるよしは、畔五郎も知りてぞあらん。小文吾はそが同類にて、件の額藏を奪とりしも、又且開野とかいひし假少女を、竊に資けて、馬加大記、親子從類を撃せしも、他が所爲と聞えたり。この義は當日蠅六郎が、見も聞もせしことならんを、今さら具にいふにしも及ばず。爾るに他們

をさく非常を箴めよ。と遺す曲なき老夫人の、指揮に從ふ由充は、こゝろ得果てぞ退出ける。是よりの後由充は、みづから獄舍をうち巡りて、罪人の病著あるには、藥を與などしたる、その中に二犬士をば、殊更に憐みて、獄卒們を箴ければ、莊介も小文吾も、初よりして呵責を受ず、三たびの食も物足りて、死囚牢にはあなれども、他の罪人と一所に措れず、苦しと思ふ事はなけれど、獄舍に入りしその日より、兩人共に聲嗄れて、ものいふことのならざれば、その身はさら也、獄卒們も、病痾の所爲歟、と思ふにぞ、よしを執事に聞えあげて、醫師を招き、湯劑を與へて、將息等閑なかりしかども、藥餌の效驗あることなく、いよく聲は立ざりけり。左右する程に五月は過ぎて、北國も三伏の、暑熱に勝ずなりにけり。時に關東なる女壻達より、暑中訪問の使者到來して、岳母箙大刀自へ、各々土宜の人情あり。大塚なる大石家より、今番の使者に立られしは、曩に戸田河の水中にて、力二尺八に擊れたる、陣番丁田町進の弟と聞えし、丁田畔五郎豐實と喚做すもの也。又石濱なる千葉家の使者は、馬加大記常武の妻戸牧の姪なる、馬加蠅六郎鄕武にぞありける。鄕武原は千原氏にて、自胤の扈從なりけるを、常武一家擊れし後、才に由緣のものとては、只這壯佼のみなりければ、軈て常武の苗迹に立られて、馬加氏を冐さしめ、那祿半分を給はりて、近習頭になされけり。當時常武の沒後に及て、その逆意あり

に閉籠置て、この曉がたに俺身みづから、獄舍へ送り遣さん。和郎は夥兵們共侶に、緊しく那身を戍るべし。と最嚴に吩咐て、腹心の夥兵兩三名を、留めて二犬士をうち戍らせ、その餘の力士は要なしとて、身の暇を取せしかば、大家退り出にけり。却說その詰朝、稻戸津衞由充は、毎のごとく出仕して、則箙大刀自に、昨夜二犬士を搦捕て、獄舍に繫し置たるよしを、具に聞えあげしかば、大刀自歡び斜ならず。その手配を稱へ、功を譽て、しからば件の罪人們は、生拘たる儘大塚と、石濱の城へ牽し遣して、那首で刑罰致させん、とは思へども路遠ければ、そも又容易に做しがたかり。加以先度のごとく、又同類が聞しりて、途にて奪取ることあらば、外聞實義を喪はん。這里にてはやく誅戮して、首級を兩所へ遣すべし。快々首を刎させよ。と火急の下知に由充は、些も推辭氣色なく、仰うけばり奉りぬ。首級にして餽らせ給ふ、おん計ひはいと愛たし。しかれども正五九月は、異邦唐の武德年より、佛者の說に因循せられて、屠殺を禁ずるよしあれば、罪人を誅戮せず。當家もこの義に從ひ給ひて、約這三箇月は御先代より死刑のものを、誅させ給ひし事候はず。今は五月に候へば、次の月まで俟せ給へ。緊しく禁獄せしものなれば、何時まで置せ給ふとも、迯去ることは克ひがたかり。霎時の障りに候かし。と稟すを大刀自うち聞て、寔にその義を忘れたり。然ば且く俟んのみ。折々獄舍をうち巡りて、

て、その罪にあらざるよしを、いひ解れても聴れざりしは、便是天なり命なり。又何事をか爭ふべき。死を俟の外あらずかし。といへば小文吾點頭て、いはるゝ趣寔に爾也。俺們不幸薄命にて、往ところとして奸人の、爲に這身を危うせられて、一日も安きことを得ず。犬阪毛野を除くの外は、纔に這里に執事あり。今善人の手に死なば、是切てもの事ながら、憾る所は犬塚犬飼、兩個の義兄弟に環りもあはず。且親兵衞と曳手單節が、存亡さへに知るよしもなく、犬山生にも再會せで、刀下の鬼とならんこと、過世甚麼なる業報なりけん、心にかゝらざるにあらねど、然とて歎くは愚痴なるべし。覺期極めて候は。と答て倶に臆する色なく、由充にうち對ひて、言をわけたる教諭の趣、具に承知仕りぬ。十室の邑にも忠信あり。執事は得がたき知己なるかな。豫より俺們が、與に寃枉を釋れても、その甲斐なくば今さらに、又怨むべき由もなし。はやく頭を刎給ひね。不測の値偶にて候ひき。と齊一答てふたゝびいはず、共に眼を閉てをり。由充これをうち聞て、嘵嘆に堪ず左見右見て、遖徽妙き勇士の覺期、世に志氣あるものは、誰も恁こそありたけれ。今示せしは俺が私の、密談なるを洩し給ふな。權且その身を禁獄して、重て上の御沙汰に依らん。逢見ることもけふ初て、けふを限りの別とならん。惜むべし〳〵。と繰返しつゝ、後方に侍し、荻野井三郎を見返りて、罪人莊介小文吾は、霎時一室

宿所に退り手配りして、儀のごとくに謀りたり。大刀自御前は御こゝろ雄々しく、封内の訴訟を、聴つゝ政事給へば、今に初ぬことながら、這義におきては、その理に稱はず。宜き沙汰とは思はねども、某その家臣として、君を蔑する方なければ、非法と知りつゝ詭りの計を行ひにき。景春當所に在しなば、糺愆までにおよばんや。俺が諫言をも容られて、罪もなき勇士を誅する、誹謗を免れ給はんに、合期せざるは各位の、只是幸なきのみならず、當家の與にも不幸也。這里より密使をまゐらせて、よしを主君に告稟すとも、景春はおん母君に、大孝行にましませば、今さらに這議を制めて、各位を助よ、と仰すべうもあらずかし。左ても右ても勇士の微運、救ふに由もなかりける、大厄難を爭何せん。只是までの命運なりき、と思ひ諦め給ひてよ。と理り迫ても良臣の、慰め難し理非明辨、多く得がたき心操を、倶にうち聞く二犬士は、恨みも解て今さらに、嘆息の外なかりけり。姑して莊介は、小文吾を見かへりて、犬田は何と思ひ給ふぞ。箙殿の讞斷は、公道ならず聞ゆれども、婦人に稀なる勇敢智計、この年來長尾殿の、鋒さき強しと世の風聲も、搗鬼にはあらざりけり。それにも優て有がたき、執事の忠信、理義明亮、感ずるになほ餘りあり。武士は己を知るものの、爲にこそ死ぬべけれ。俺們既に執事に知られ

女流の主ぞと侮りて歟、指揮がましき似而非談義、然ばかりの事知ざらんや。縦莊介小文吾們は、素より悪意なきもの也とも、法度を犯し、有司を害して、法場を閙せしを、なほその罪にあらずとて、允さば今より下として、上を犯さぬものもなく、律令立ず法度廢れて、國治る時なかるべし。俺身女流にあなれども、武威東北に掲焉く、兩管領にも憚らるゝ、長尾景春が母ぞかし。今景春は東國に在り。俺兒の留守を預りながら、大石千葉の女壻達の、與に罪人を捕捉ずば、州民是より侮りて、景春の武威衰へん。恩祿その身に不足もなき、主君にだも思ひ易て、那罪人們を最惜まば、由充汝は不忠の臣也、不忠の臣は誅すべし。然でも拒む歟、諫る歟、いかにぞや、と敦圉きて、おん臂近に措れたる、護身刀を拿抗て、勢ひ烈しく見えさせ給へば、諫めて聽れぬ女儀の臆斷、爭ひまうすは益なし、と思ひかへしつ些も騒がず、稍平伏たる頭を擡げて、然までに御召ならば、又何事をか稟すべき。御諚に儘して二犬士を、搦捕てまゐらせん。さばれ莊介小文吾は、萬夫無當の勇士也。大勢をもてうち向ふとも、撃るゝもの多かるべし。この義はいかゞ仕らん、と稟せば大刀自沈吟じて、智者の千慮も哄すに術なし。他們が衆賊を撃捕たる功を賞め招寄せて、帷幕の内に力士を伏置き、不意に起て拉がば、搦捕ること易

兄弟の、爲に怨を復せし也。又那馬加常武は、則千葉家の逆臣なりしを、當時その事發覺れず、死後に至りていふものあれども、石濱殿（自胤をいふ）は後々まで、知召さずやおはすらん。下情多くは上に通ぜず、左右に藪を造るの故歟。譬ば月の明なるも、浮雲これを掩ふが如し。刕犬田小文吾が、石濱の城に留められしは、馬加大記の奸計にて、これも亦石濱殿の御本意には候はず。恁れば犬田小文吾が、犬阪毛野の資によりて、那城内を脱去りしは、その身を安くせん爲にて、惡心ありし故にはあらず。臣嚢に關東へ、おん使を奉りて、大塚石濱の兩城内に、四五日逗留したる折、志ある人々の、夜話に初て傳聞たる、趣は右の如し。この議に縁れば那荘介は、舊名額藏也とても、憎せ給ふべきものならず。よりて思ふに小文吾は、石濱殿に對しまつりて、野心なき事しられたり。臣件の二犬士の、今番衆賊を撃捕たる、武勇の擧きを聞候に、寔に一人當千なる、豪傑の士ならん。願ふは禮を厚くして、はやく高祿を宛行れ、留めて御家臣になし給はゞ、他們も亦恩を感じて、忠義の爲には死をだも辭せず、堅を破り鋭を劈く、軍功なくばあるべからず。然るときは是公私の大幸、當家の重寶このうへなし。最憚あることながら、千慮も一失なきにあらねば、只穩便のおん沙汰こそ、あらまく欲しう候へ。と辭を盡し理を演て、直言數刻に及びしかども、良藥口に苦しといひけん、譬喩はこれ歟。大

は石濱へ、莊助は大塚へ、牽渡し遣して、那首の法度に儘しなば、咱兩箇の愛壻の、家風正しく武威耀きて、隣國までも怕れつべし。忽諸にして走らせなば、後悔其首に立がたし。快々准備をせよかし、と亦他事もなく仰しかば、某諫め稟すやう、御諚では候へども、那額藏とか喚れし小厮は、東人蟇六夫婦の仇なる、簸上軍木を撃し也。爾るに軍木五倍二は、薄痍にして當座に死なず、その身の私曲を見かへらで、簸上宮六の弟社平、并に卒川菴八們と、謀し合しつ額藏を、盜兒也とて誣たるを、陣番丁田町進も、簸上軍木を贔屓により、虛實いよ〳〵分明ならず。この故に額藏は、寃屈の罪に落されて、既に死刑に決りしを、那額藏の義兄弟、犬塚犬飼犬田なンど、喚做す勇士兩三名、竊にこの義を聞知りて、憤れども訴る、所なければ已ことを得ず、法場を閙して、必死の友を拯ひしよし、世の風聲に聞えたり。しからば簸上軍木の黨、丁田さへに撃れしは、奸曲邪智の致す所、自業自得といふべき歟。この年御主君大石殿は、在鎌倉なりければ、この義も亦分明ならず。よく玉石を辨ずるものの、これなきにもや候はん。又旦開野といひし女田樂は、犬阪毛野胤智と、呼做す智勇の少年也。他は則千葉の老黨、粟飯原首胤度が、妾腹の獨子にて、胤度一家讒死の後、相摸州足柄郡、犬阪村にて生れしよし、しる人ありて正可にいへり。然ばこそあれ犬阪毛野が、馬加一家を撃果せしは、その親の爲、胞

て、這犬田小文吾といふ浮浪人は、曩に武藏の大塚にて、同惡のもの兩三名と共侶に、大石家の陣番屬役、幾名か射て殺して、額藏とかいふ罪人を、奪去たる癖者也。爾後又石濱にて、馬加大記が撃れし折も、惡少年を相資て、逐電したるものぞかし。又這犬川莊介といふ旅人は、必件の額藏ならん。嚮に大石殿の使として、仁田山晋五が來つる折、那犬士とか唱たる、惡黨の事を詰聞しに、晋五答て、さン候ふ。那罪人額藏は、當日同類の資助によりて、法度を犯して逃亡たる、その後犬川莊介と、姓名を更めて、諸國を偏歷しつるよし、世の風聲に聞えたり。在下が那折に、撃捕たるも同類なれども、犬塚犬飼犬田なンど、喚做すものでは候はず、力二尺八といふ弟兄の、俠客で候ひしを、其頭の穿鑿手の屆かで、梟首の名字相違せしかば、主君の咎を蒙りて、面目を喪ひにき。是よりの後那奴們が、跡見れなば聞えあげて、搦捕まく思へども、今に至りて便りを得ず。いと朽をしく候、といひしを思へば莊介は、額藏なること疑ひなし。恁れば他們が强盜を、撃しはその功なきにあらねど、そは苟且の小事也。縱他們が手を借らずとも、這里より捕手を遣して、搦捕ること難からんや。おもふに莊介小文吾は、その身の盤纏を奪れじとて、奮撃したる當夜の挊き、領主の與にせし事ならねば、非如舊惡あらずとも、賞るに足らぬものぞかし。況五逆の罪人なるを、その義によりて許さんや。速に召捕て、小文吾

からず、第一のおん女弟は、武藏州豐嶋郡大塚なる、大石左衛門尉憲儀主（兵衛尉憲重の子）に妻せられて、大塚殿と稱へたり。長尾白石大石小幡は、原憲實管領の四家老にて、共に掎角の勢ひあり。又その次のおん女弟は、おなじ州同郡、石濱の城主なる、千葉介自胤主の内室にて、船場殿と稱らる。寡君はいぬる年より、兩管領（山内扇谷）と不和の後、大石千葉の兩雄も、をさ／＼志を運れて、當家無二の御方也。これにより五箇年前、和殿們が大塚にて、法場を閙せし折、大石殿の家臣なる、軍木五倍二、簸上社平、卒川菴八を初として、撃れし雜兵尠からず。剩戸田河の頭にて、陣番丁田町進も、戰歿の聞えあり。その折屬役仁田山晋五が、撃捕にきと風聲ありし、犬士は通て假首級にて、實は力二尺八と喚做したる、俠者兄弟なりけるよしも、當時大石殿よりその報ありて、大刀自御前も知食たり。又只この事のみならず、犬田生はその次の年、石濱の城内にて、旦開野とかいひし假少女に、千葉の家臣馬加大記、その子鞍彌吾、從類まで、悉皆撃れし夜、竊に旦開野を相資て、倶に遂電したりしよし、這義も亦船場殿より、おん母公へ慥々と、おん消息ありしかば、はやく這里にも聞えたり。爾るに今番和殿們が、小千谷の郷なる旅店にて、酒顚二と喚做たる、夜入の强盗支黨まで、一箇も漏さず撃捕たる、その緈の趣を、那郷長が聞えあげたり。慥而件の訴狀を、大刀自御前の覽し

第八輯　卷之三

第七十八回

北母自賞罰を恣にす
東使雙で首級を賜ふ

復說、莊介小文吾の二犬士は、功ありながら賞を得ず、稻戸津衞に謀られて、矢庭に搦捕られしかば、倶に怒れる聲高やかに、蓬きかな執事由充、俺們倘罪あらば、先そのよしを詮議して、禁獄すべき事なるに、一言隻句もその義なく、誣引よせ多勢をもて、手籠にせしは甚麽なる故ぞ。武士に似げなき鄙怯の擧動、その情由聞ん、いかにぞや。と敦圉き罵る勇士の憤激、亂れし鬢髮逆立て、綁縛の索もおのづから、斷ぞしつべき怨の眼光、飛もや蒐る、と力士們は、舌を掉ひ竊に怕れて、いよ〱索を取縮たり。登時津衞由充は、憶ずも嘆息の、貌を改め恭しく、二犬士にうち對ひて、事情をまだ告ざれば、怨みらるゝは理りながら、こは某の本意にあらず、便是寡君景春のおん母公、箙殿の處分によれり。先やその意を說示さん、怒を治めて听ねかし。抑寡君景春公に、二箇のおん女弟あり。皆是箙大刀自御前のおん腹にて、御鍾愛淺

にして日は暮けり。恁而荘介小文吾は、片貝に到りし時、那別館の門前にて轎子を立出て、引れて、老臣稲戸津衛の、宿所にぞ赴きける。津衛は大家の家宰にて、威權あるべきものなれば、宅地はいと廣やかにて、從類も尠からず。老僕若黨三四名、手燭を秉て二犬士を、玄關に出迎へて、そが儘書院へ案内をしけり。看茶の禮訖りし時、稲戸津衛由充は、荻野井三郎を從へて、出て二犬士に對面して、その功を褒め武勇を稱へ、且内命のよしを演て、盃を薦めらる。主客の辭讓言果て、津衛は嘗獻の爲にとて、稍とり抗たる土器を、忽地礑と擲て、寄れや兵們と喚りたる、聲もろ共に廊下なる、幕の陰より顯れ出る、捕手の力士二三十名、走蒐りつ後より、組むを見かへる荘介小文吾、こは何事ぞ。と驚きながら、搔抓ては投退投退、霎時は倶に挑みしかども、大勢なればものともせず、彌がうへに折累りて、押へて索を掛にけり。畢竟津衛が理不盡に、二犬士を網めたる、事情は甚麼ぞや。そは次の巻に、解分るを聽ねかし。

かず推返して、その義は左まれ右もあれ、こは由充が私の、使には候はず。領主長尾殿のおん母君、箙の大刀自御前の内命にて、饗應の義を奉りたる、猛の准備も候へば、姑く時宜に從ひて、那首に赴き給はんこそ、公私の歡びなるべけれ。今さら辭退に及んや。といふに二犬士は推辭難て、しかりとも俺們は、行裝のみにて禮服なし。明日衣裳を整へて、是より推參致すべし。といふを三郎聞あへず、その義も由充豫より、思はざるにあらざれば、おん袴を齎したり。と應て後方を見かへれば、兩個の雜兵こゝろ得て、精好の袴一領を、柳箱の蓋にうち載て、恭しくもて來つゝ、いざとて二犬士に薦るにぞ、莊介も小文吾も、恁までに懇切なる、那老臣の招待を、返すは無禮なるべし、と思へば先その歡びを、述て聊退きて、倶に件の袴を穿て、刀を引提て立出れば、三郎は轎子二挺を、檐下に舁寄さして、快々乘せ給へ。といひしを、二犬士は從はず、俺們は千里獨行、旅より旅に熟たるもの也。然ばかりもなき路の程を、這轎子は要なしとて、歩よりゆかんとしたれども、三郎は又云々と、薦めて小文吾莊介を、轎子にうち乘しつ、轎夫們が前後齊一、擡起し舁出せば、雜兵左右に從ひて、片貝を投ていそぎけり。當下萩野井三郎は、生拘の小賊、溷六穴八兩名は、綑めたる儘犢に乘して、跡より稻戸殿へ將て來よとて、雜兵四五名遺し置て、その身は軈て轎子の、後に跟つゝかへりゆく程に、途


小文吾


完貝の別館
二犬士捕

りゆきて、犬山に歡せ、又出なほして犬塚們の、三犬士を索ぬべし。といふに小文吾頷きて、その議寔にしかるべし。然るにてもいぬる年、墨田川の頭にて、果敢なく別れし犬阪毛野も、亦俺們と同因同果の、過世あらん歟、料りがたかり。那折は忩急にして、俺に等しき痣もやある。又相似たる玉をや持る、と忩問ふ遑なかりしを、思へば今さら遺憾しけれ。倘後々まで緣盡ずば、なほ再會を俟んのみ。と聶聶く閑談に、夏の日ながらけふばかり、短しと思ふ横日影、下晡になりにけり。浩處に次團太は、遽しく走り來つ、二犬士にうち對ひて、目今片貝なる御別館より、執事の老臣、稲戸津衛由充大人の使者として、荻野井三郎と名告れる一個の若黨、雜兵十名あまり從へて、轎子二挺を吊しつゝ、客人達の迎として、光臨のよし鄕長より、告知されて候也。快々准備をし給へかし。といふを二犬士は聞あへず、そは又要なき事にこそ。俺們は初より、異姓の兄弟多くあり。相別れしより往方を知らぬも、なほ兩三名あるなれば、尋あはまく欲する折也。何の求る所ありて、領主の執事に對面せんや。宜く推辭給はるべし。といふ辭いまだ訖らず、件の荻野井三郎は、鄕長に案内をさして、みづからこゝに來にければ、二犬士は已ことを得ず、出て荻野井に對面す。登時荻野井三郎は、執事由充の使として、迎に來つる口狀を、いと慇懃に演るものから、二犬士は初のごとく、辭ひて承も引ざりしを、三郎聽

ねて鎌倉に旅宿をしたる、爾後渡海の船破れて、伊豆の孤島に光陰を送りて、やうやく浪華に便船しつゝ、國地にかへることを得たる、有馬の湯治、這地の遊歷、二十村なる鬪牛の折、暴たる牛を牪めし事、小角力磯九が醉狂枉死、その身の眼病、靈玉の妙應奇特の事までも、次第紊さず說示せば、莊介耳を傾けて、頻りに感嘆の聲を得絕ず、聞果て又その身の去來、荒芽山にて離散の折、犬山道節と共侶に、犬塚犬飼們の行方を索ねて、四國に渡り九州に赴き、京攝五畿內をうち巡りて、甲斐州に到りし折、石禾の指月といふ道場にて、大法師に名のりあひ、蟹崎照文に面會したる、そこらの事を始として、莊介は去歲の春、なほ又四犬士を索んとて、獨指月院を立出て、武藏に赴き、下總を徧歷して、行德の里人に、犬田がかへり來ざりし事、文五兵衞は安房州にて、身まかりにきと聞知りて、常陸下野陸奧出羽まで、長き旅宿に二稔の、光陰を過せし憂苦の顚末、乃者這地に來つれども、なほ四犬士（犬塚、犬飼、犬田、犬江）に得遇ずば、甲斐の石禾に立かへりて、又道節と替らんと、思ひし事の終りまで、晤譚に時を移しつゝ、過にし事を思ひ出、聞くに就ても痛ましき。與四郞音音が忠死義沒、曳手單節が薄命存亡、又親兵衞が恙なく、有やなしやと思ひかね、慰め難て共侶に、嘆息の外なかりけり。姑して莊介は、又小文吾にうち對て、迭に苦行の甲斐ありて、和殿に環會しかば、俱に石禾にかへ

赴きたる幾名にも、酒を飮し飯を喫して、留守の首尾を問などす。然ば士丈二們は曉がたに、四隣の人々と共侶に、よしを鄕長に報知して、時を移さず件の始末を、領主の陣屋に告訴せしかば、有司速に到來して、尸骸の實檢事訖り、賊の頭梁童子𥙊子酒顚二、その支黨に至るまで、梟首すべし。と宣掟て、なほ顚末を糾問せられ、衆賊を撃たる武勇の旅人、犬川莊介犬田小文吾們が歸來なば、宜く御沙汰あるべきに、稟出よ、とおん下知あり。いと安らかにその事果て、方纔還らせ給ひにき。と報るに次團太歡びて、衆人を勞ひつ、又二犬士にも件のよしを、慥々と聞え知らして、みづから鄕長の宿所に赴き、二犬士かへり來たれるよしと、又二犬士が賊の隱宅にて、㵎六穴八といふ二小賊を、生拘たりし趣を、箇樣々々と演述して、這義も訴給るべし。と憑てかへさに比屋なる、市人許立よりて、公事に勞したる、歡びを演などす。煩雜いふべうもあらざりけり。爾間に小文吾は、病後の浴湯剃梳して、莊介と倶に客房にをり、會話の數々なる、曳手單節が事の趣、又並四郞船虫が事、馬加大記常武が、妬忌奸計あるにより、次の年の五月まで、その身を石濱の城内に、禁錮られたる事の顚末、幷に犬阪毛野の事、そが復讐の智略勇敢、その折毛野の資によりて、石濱を逃去りし事、依介が事、父文五兵衞が遺言の事、又親兵衞の事などは、莊介も照文に、聞にきといへば事省て、却小文吾は犬阪毛野を、索

得著かず、まだ早飯もたうべねば、大家餓てかへり來にけり。當下莊介は、又濁六們が招道にて、嚮に酒顚二船虫が、計りて磯九郎を殺せし事、幷に媼内が來歷まで、初て知られし緣由を、小文吾次團太們に報しかば、大家聞つゝ駭嘆じて、いよ〳〵遺恨に堪ざりける。就中次團太は今船虫を獲ずといへども、磯九郎の仇發覺て、その一人なる酒顚二は、莊介に撃れしを、是切ても事也とて、又改めて莊介に、その歡びを演にけり。恁而あるべきにあらざれば、小文吾莊介次團太は、生拘の二賊濁六穴八を、舸三們に牽しつゝ、午の貝吹く比及に、小千谷の宿所へ還りけり。抑件の濁六と穴八は、年尚二十二三なるべし。濁六は身長高く、面色白くして、小文吾に似たる所あり。又穴八は色薄黑くて、身長は高からねども、筋骨の逞しげにて、うち見る所何となく莊介に似たりけり。夫燕石の玉に似たる、犂牛の子の羊に似たる、物よく相似て、その質異也。剡陽虎の孔子に似たるも、又山猿の顏延之と、何尚之に似たりしも、只是外面のみにして、內心何ぞ同からん。かゝる故に但貌をもて人を取れば、聖といへども必謬る。那濁六と穴八の、犬田犬川によく似たるも、亦比へて知るべきのみ。間話休題、再說次團太は、小文吾莊介に相俱して、小千谷の宿所にかへり來つ、先二犬士に饌を羞め、盃を羞めたる、その管待大かたならず。幷に土丈二舸三們の壯佼の、この曉より這里にをり、那首に

て、一歩も退くこと得ならず。前には二犬士立塞りて、脱るべうもあらざれば、此彼齊一跪きて、許させ給へ。とうち陪話るを、二犬士聽て蹴倒して、解たる擒索を搔拿つゝ、はや數珠繫に細めて、且風脇に牽もて退け、船虫と媼内們が、往方を緊しく責問ふに、二賊答て、船虫は、媼内を將て逸早く、東の方へ落亡たり。小可們は又箇樣々々と、跡に遺りし縡の趣、ありつる隨に首伏す。二犬士これをうち聞て、そは朽惜き事なりき。他賊は左まれ右もあれ、那船虫を走らせしは、熊を殺して胆を採ざる、憾に何ぞ異なるべき。遠くはゆかじ趕蒐てん。と倶に敦圉き罵る折から、次團太は艄三と、自餘の壯佼們を從へて、やうやく走著しかば、二犬士は船虫們が、逃たるよしを報知して、部をしつゝ趕蒐けり。そが中に莊介は、留りて這里にをり、一個の壯佼に索を執して、又濶六と穴八を、責て酒顛二船虫們が、來歷素生を問ひしかば、二賊は隱すことを得ず、傳聞たる趣を、遺なく招道したりける。是によりて船虫が、酒顛二と相計りて、磯九郎を殺せし事も、又船虫が信濃路より、流落來つゝ酒顛二と、夫婦になりし事はさら也、媼内は他鄉にて、主に傷け盤纏を奪ふて、亡命したるものなるよしも、總て具に顯れけり。爾程に小文吾次團太艄三は、各々里の壯佼を、一兩名從へて、はや三方に立別れ、船虫們を趕たりけるに、樵路熊徑岐道多かる。山野は草木の隈のみなれば、何地ゆきけん趕も

内は、大きやかなる袱裹を、楚と駝つゝ種子島の鳥銃を携て、趕ものあらば撃留んとて、眼を配る不敵の退際、今より後の胸算用も、あふか合ぬ歟、手拭は、算盤絞を頬罩、二一轉變早急の、一時退散、五二倍死、二引て殘る二人連、樂み去て苦の世界、九死加四苦六濁六と、穴八算に告別、明ゆく天を不樂しげに、樹の下闇の路もなき、路を討めていそぎけり。姑くして彼此の、茂林を離るゝ鳥の聲、山鼻遠くあから引、東は晴れし黴雨闕の、朝日に向ふ莊介は、小文吾と共侶に、賊巣に近づくこと、二町あまりになりし時、小文吾を見かへりて、那媼内とかいふ奴は、酒顚二が預けたる、鳥銃を持る也。うち入るときに心して、筒面にな立給ひそ。といふに小文吾こゝろ得て、いそぐ去向に忽然と、自燒の煙立升りて、瓦刺々々々々と、音するにぞ、二犬士これを佶と見て、原來はや、船虫們が自燒して、逃去るにこそあらめ。逃とて何處へ脱さんやとて、飛が似くに猛火の邊へ、喘々て走著きけり。登時濁六と穴八は、取るべき東西を皆擔造りて、擡出しつ隱宅へ、火を放ち却退きて、庭に措たる件の重荷を、擔ひ抗んとせし程に、朸は折れ擔索も斷て、東西皆滾出たるうへに、火紛忽地燃徙りて、燒失ぬべく見えしかば、二賊は叶嗟と狼狽躁て、引出さんとしつる折、二犬士走り近づきて、那爲體に些も猶豫せず、草賊等。と喚被る、聲に驚く濁六穴八、迯んとするに後のかたは、既に猛火に遮られ

の尸骸をともかくもせよ。俺は這方ざま達と、賊の隱宅へ趕撃して、その根を鋤んと思ふ也。この義をこゝろ得よかし。と諭して裡面に走り入て、逃躱れたる女房嗚呼善、丼に奴婢們を喚出して、又示すこと上の如く、手配遺もなかりけり。爾間に小文吾は、莊介を先に立して、賊巢へいそぐにぞ、次團太は鮒三と、壯佼五六名を將て、僉後れじとて二犬士の、跡に跟てぞ走りける。有恁し程に廢毀院なる、酒顚二が隱宅には、溷六穴八と喚做たる、兩個の小嘍囉逃かへり來て、酒顚二もその他のものも、犬川犬田兩勇士に、撃果されし緈の趣、箇樣々々と報しかば、船虫も媼内も、只眉に火の焦たるごとく、駭噪ぎて立て見つ、居て見ても計の、出る所を知らざれば、走るに不如と尋思して、身裝して臂近なる、金錢衣裳を腰に著、背に駝ふて共侶に、立去んとしつる折、船虫は溷六と、穴八にうち對ひて、俺丈夫の運竭て、火家の人々と共侶に、果敢なく撃れ給ひしを、歎けばとても今は益なし。顧ふに犬田と犬川奴が、里人を駈催して、みづからこゝへ推よせ來つる歟、然らずば石龜屋次團太が、片貝殿（景春の別館）へ訴て、軈て捕手を向らるべし。居つゝ綱を受んより、媼内を將て投すかたへ、落てゆかんと思ふかし。汝達も宜き東西を、駝るべき限り擔造りて、家に火を放、煙に紛れて、何處へ也とも影を躱しね。迹を憑む。といひ捨て、笠ふかくしつ慌しく、東を投て出てゆく。後邊に從ふ媼

に到りて、石龜屋の門頭にて、猛可に起て拉がば、賊首を殺し易かるべし、と尋思をしつゝ箇樣々々に、計りて俱にこゝへ來つ、思ひしごとく酒顚二をも、又支黨をも討捕にき。爾るに賊婦船虫は、媼内とかいふ一個の賊と、俱に留守して那首にあり。方纔酒顚二們が撃れしよしを、聞かば必逃去るべし。那奴は前後兩度まで、草賊と夫婦になりて、毒惡竊盜せざることなく、犬田生を害せんと、しつるも前後兩度にあらずや。恁れば天も人も借ざる、罪人なるを走らしなば、蛇を殺して頭を摧かず、後の患を遺すに似たり。這里より賊巢へは、才に半里計なり。誘給へ天も明なん。ゆきて船虫を屠るべし。やよ快々。といそがして、その崖略を報しかば、次團太は聞つゝも、且驚き且感じて、頻りに耳を傾けけり。就中小文吾は、听事每に感嘆して、適徵妙き犬川生、敵を知り己を知らずば、進退その度に當らんや。是兵法の貴む所、計略感ずるにあまりあり。いはるゝ如く船虫は、俺身の仇たるのみならず、大辟不赦の罪人也。誓て那奴を殺すべし。只鄕導を憑むのみ。といふ辭いまだ訖らず。又那土丈二鯽三は、師匠なりける石龜屋へ、强盜入りぬと傳聞て、同志の壯佼十名ばかりを、敲起し駈催して、六尺棒を突立々々、天の明る比來にければ、次團太は小文吾と、俱に土丈二們を勞ふて、綷の趣を說示し、和郞們は過半こゝに在りて、比屋の人々と共侶に、よしを鄕長に報、指揮に儘して、衆賊

に由断は大敵にて、衆賊の夜入に准備はあらず。加旃おん客人は、(小文吾をいふ)病て皆目見え給はねば、いかにともせんすべなさに、必死の覺期で候ひしに、豈思はんや犬田の大人の、眼病夜中に痊可て、進退自由のそがうへに、おん友達の折もよく、這地に旅宿し給ひて、はやくも賊を滅し給ひし。彼と云此といひ、歡び譬るにものも候はず。といふを莊介聞あへず、そこらの口誼は姑く措て、なほ緊要の一議あり、某は料らずも、甲夜に恁々の山路なる、荒廢堂に憩ひし折、那船虫とかいふ賊婦の、梁に吊られしを、見出しつゝ訝しさに、まづその故を詰ねしに、那奴巧に欺きて、箇様々々といふにより、その綱を解卸して、乞るゝ隨に他が宿所へ、送遣したりけるに、宿所は故たる孤屋にて、廢毀院の跡に似たり。且船虫が兄也、と詭りしは賊の頭梁にて、酒顚二と喚做すもの也。某初はこれを知らず、軈て那里に止宿して、那黨の密談を、具に洩聞たりければ、疑心やうやく氷解して、那船虫は當初、武藏なる阿佐谷の奸賊、並四郎が妻なりし事、幷に件の並四郎は、犬田生に撃れし事、這回又船虫は、假瞽女に打扮て、怨を復さんとせし事まで、漏さず听しはわが懷なる、靈玉の加護ならんかし。恁而賊首酒顚二は、這首へ夜撃に推寄て、妻船虫が新舊兩度の、怨を一時に復さんとて、議すること既に急也。登時某思ふやう、不知案內なる這所にて、多賊を撃んと欲せんより、他們と倶に小千谷

酒顚二と鎗を鬪して、一上一下と術を盡す、犬士の武勇に草賊の、當るべうもあらざれば、酒顚二竟に腕亂れて、怯むを得たり、と莊介は、鎗を縢へ反揚て、オツと嚀て晃かす、刃尖の冴に酒顚二は、吭を丁と刺串れて、仰反仆れて死でけり。殘る賊徒は立足もなく、逃るを小文吾次團太們、又莊介も共侶に、這首に趕詰那首に擊留、最も烈しく攻たりければ、賊の屍は算を紊して、大かたならず擊れたる、そが中に辛くして、脫れて廢毀院なる隱宅へ、走かへりし小嘍囉は、一兩名に過ざりけり。登時犬田小文吾は、莊介に聲をかけて、絕て久しや犬川氏、什麼いかにして俺が厄難を、聞知りて援給ひけん。只是不勝の歡びなりき。といへば又莊介も、いそしく走り近づきて、俺が來歷は一朝に、說盡すべくも候はず。和殿は頃日風眼にて、見ること自由ならざれば、垂籠て在する、と聞しにも似ずいとめでたし。といはれて小文吾、されぱとよ、小生はけふまでも、酷く目を病煩ひて、藥餌の效もなかりしを、やうやく心つくよしありて、甲夜より祕藏の玉を取出て、念じて病眼を拊ること、半晌にして目翳退き、一朞にして明なること、烏夜に燈燭を得たるが如し。この義はいまだ主人にも、報る遑のあらざりしに、夜盜大勢推蒐來つ、と聞とそが儘起出て、主人と倶に草賊們を、聊討捕候ひき。と答る間に次團太も、おなじ處に立聚合て、却莊介に名告をしつゝ、共に歡びを演て、又いふやう、寔

けり。然れば四隣の里人の、共に驚覺るもありしを、賊徒の多勢に害怕れて、恁る折には一人として、援になる者なかりけり。既にして外面には、酒顚二頻りに焦燥て、恁まで喚ぶに應もせぬは、逃亡たる歟、寢惚し歟。戸を打破て稠入らずや。いと手緩し。と罵たる、聲共侶に一個の支黨、准備の塥槌を振抗て、門の戸齏粉に打摧きて、走入らんとする程に、思ひがけなきその隊より、犬川莊介顯れ出て、大喝一聲閃かす、鎗の刃尖は地上の電光、瞬間に件の賊の、腋下ぐさと突伏せて、裡面に知する聲高やかに、犬田も主人も驚くべからず。犬川莊介ここにあり。面亭の賊は俺咸殺さん、背門に用心せよかし。と兩三番喚りて、駭噪ぐ小嘍囉を又兩三名突仆す、勢ひ宛猛虎を駈て、群羊を屠るに似たる、向ふに前なき武勇の剽姚、克ふべくもあらざれば、賊徒は怕れて辟易しつゝ、あれよ〱。とばかりに、撃るゝ者ぞ多かりける。思ひがけなき光景に、酒顚二も亦驚きながら、怒れる聲をふり立て、原來甲夜の逆旅武人奴は、間諜者にてありけるよ。不意を撃れし故にこそ、聊勝に乘らるゝとても、多寡の知れたる孤客の鎗頭、いかばかりのことやはある。快推包みて撃留よ。と罵奬されし支黨は、又莊介を撃んとす。半分は裡面に稠入るを、小文吾は次團太と、俱に刃をうち振りて、先に進て近づく賊を、斫靡け薙伏せて、迯るを透さず趕立々〱、門頭に出て戰ふたり。その間に莊介は、

てゆく事一反あまり、程よき竹藪に躱ひて、衆賊を這里に俟つゝをり。爾程に酒顚二は、鏁短衣手甲脚冑、鋲打たる顱卷に、脩刀を跨へて、右手に短鎗を挾み、器械拿たる十四五名の、支黨を後に從へ、先にも立せし火急の隊配り、大家急げ。と逸足出して、走る跡より莊介も、鎗引提つ、隊に紛れて、共侶に走りしを、折から五月の天なれば、驟雲屢月を隱して、朦朧となる隨に、酒顚二も自餘の賊も、竟に莊介を認ずして、只是火家の一人也、と思へば些も疑はず、見かへるものもなかりけり。恁而童子觿子酒顚二は、石龜屋次團太の、門頭にはやく推寄來つ、門の戸烈しく敲かして、主人次團太快出よ。這里に宿せし他郷の客人、犬田小文吾に怨ありて、復讐の爲來つるもの也、命惜くば小文吾に、索を被て推出せ。異議に及ばゝ闔宅の奴們、一人も漏さず斫盡さん。這里開ずや。と諸聲立て、勢ひ猛く呼つたり。間近く臥たる奴婢輩は、駭覺つ吐嗟とばかり、怕れて答るものもなし。登時主人次團太も、覺て奥より走り來て、且戸節の間よりして、來つるものを覘ふに、面魂皆猛惡なる、癖者遍て十六七名、短鎗竹槍脩刀を、手に〳〵拿りし異形の打扮、是綠林錦帆の、儔ならんと見てければ、原來那假瞽女の同類なるもの聞知りて、襲來つるに疑ひなし。俺はともあれ犬田の大人の、病眼に敵を爭何せん。はやく背門より落さんず、と尋思をしつゝ音もせず。竊に踵を旋して、犬田が臥房に赴き

は、當日故郷に還らずして、這地に旅宿をしたること、必その故なからずやは。五稔以來索ねても、得遇ざりける三犬士の、随一人なる悌順は、這里よりして程遠からぬ、小千谷の郷なる石龜屋次團太といふ客店に、久しく逗留しつる事、及風眼によりて見ることの、克はずといふよしまでも、賊婦の口より洩聞えて、今宵初て知ることを、得たるは奇也妙なるかな。什麽いかにせん衆賊們が、今より那里を襲撃ば、眼疾不便の犬田の窮阨、十にして九分九釐は、免ることかたかるべし。然ばとて俺身ひとり、目今那首へ潛寄て、酒顚二と船虫を、擇撃に做すならば、殘るは烏合の小嘍囉、咸立地に逃亡て、犬田が厄は釋べけれども、不知案内なる賊巣は、主客の勢ひ既に異也。前後許多の敵を受て、利を得んことも亦かたかり。その危きに臨んより、所詮竊に退きて、他們が出てゆく折に、紛れて共に小千谷に到らば、問ずして石龜の、宿所を知ることいと易かり。恁て那里の門頭にて、名告て酒顚二を撃捕らば、主人次團太四隣の市人、志ある壯佼は、走出相援けて、衆賊を倶に撃もやせん。恁做すときは小文吾の、大厄を釋くのみならで、賊の根を斷葉を枯らして、地方の害を除くべし。吁爾也、と肚裏に分別既に決りければ、潛やかに身を起して、柱に掛たる草鞋を、取卸し穿締て、又承塵なる九尺の短鎗の、その宜きを擇取て、小篠の兩口さしも現、騷がで早き劒刀、身裝して縁頰より、出

緊急なれば覿面に、意中を盡すに遑あらず。俺は今より火家と倶に、小千谷へ夜入に赴く也。亦俺がをらぬを覘ふ仇の、あるべき斟料がたかり。和郎は素より才覺あり。心も悍きものなれば、今宵の留守を委る也。事情を知まく思はゞ、後に船虫に聞ねかし。といひつゝ種子島の小鳥銃を、懐よりとり出して、這炮銃は北國に、今なほ稀なる東西なれば、俺年來祕藏して、利を得たること尠からず、今宵はこれを遺し置て、權且和郎に預てん。仇入來ぬと見るならば、火蓋を拔て撃留よ。と辭せはしく說示して、その鳥銃を遞與すにぞ、嫗内はまだこゝろを得ねども、いはるゝ隨に應をしつゝ、宣ふ趣うけ給はりぬ。是だにあれば幾人でも、閾へ足は掛させず。御こゝろ安くおぼされよ。といふに酒顚二頷きて、又船虫に恁々と、留守の用心その義を示して、さらば進め。と同惡を、先に立して出てゆくを、船虫は嫗内と、共に祝して目送りけり。却說犬川莊介は、是より先に臥房にて、奥なる酒顚二們が密談を、听くこと約半晌許、間遙に隔れども、護身嚢に收めたる、那靈玉の奇特によりけん、船虫們がいふことまで、その懐に響くが如く、譬ば五十瀨なる響石の、人語を移すに異ならで、言詳に聞えしかば、或は驚き或は歡び獨竊に思ふやう、俺が推量に違ふことなく、酒顚二は是賊の頭梁、又俺が今宵送届けし、船虫とかいふ妖狐奴は、その女房でありけるを、欺れぬる鈍ましさよ。然るにても小文吾

の旅客なれば、撃漏せしとて惜むに足らねど、碧石龜屋へ尋ゆきて、這方の事を告られなば、殃厄これより起るべし。夜は丑三とおぼしきに、那奴を索ねて徒に、曉さば悔とも及んや。快々夜入の准備をせよ。と辭激しく惴立れば、大家聞て一議に及ばず、はや犇々と身を固めて、器械引提て出んとせしを、船虫は奥の房より、喚禁めながら出て來つ、酒顚二にうち對ひて、おん身をはじめ這人々が、名殘なく出てゆきし後、那犬川が立戻りて、欺れたる腹愈に、奴家を殺すことありとても、身單にては防ぎがたかり。切て留守にも一兩名、遺して戍らし給はずば、危からん。といふ折から、外面よりかへり來るものあり。是則別人ならず、曩に（去年文明十三年十一月）武藏なる四谷の原にて、主の淡雪奈四郎に、痍を負し盤纏の金子を、遺りなく奪とりて、はやくも影を躱したる、亦那惡僕媼内也。媼内は去歳の冬、越後の塚の山に逃れ來て、博徒の夥計に入りしより、竊みし金は淡雪の、消るがごとく使果しつ。却せんすべのなき隨に、遂に酒顚二が手下になりて、春の比より這里にをり。この日は塚の山に所用ありて、今朝未明より出たるが、原盜兒の事にしあれば、倒夜行を便利として、深夜にかへり來つるなり。酒顚二初は單身なりしに、船虫を妻にせしより、支黨やうやく聚嘯て、慝大勢になりしとぞ。閒話休題、酒顚二は折もよく、方纔媼内がかへりしを、見つゝ遽しく喚近づけて、やゝ媼内、

あり。今宵宿せし犬川とやらん、莊介とかいふ逆旅武人に、夜入の事を知られなば、後難免れがたかるべし。といへば大家齊一、それのみならで邪魔になる、那旅客の臥簟の邊に、器械草鞋皆これあり。是も不便にあらずや。といふを酒顚二冷笑ひて、毒を啖はゞ碟を破るべし、人を厭はゞ殺すべし。然ばかり邪魔にならずとも、那逆旅武士莊介は、身の皮も亞からず。友を索て一稔あまり、旅宿をしぬるといひしを思へば、必盤纏多かるべし。軍神の血祭に、殺して後の患を除かば、只是一事兩全也。宿鳥は鍤にいと易かり。熟睡しぬらん、結果けよ。といへば船虫然なりと應て、そは手短なる軍配也。快甲ゆきね乙ゆきね。といへども立ず僉目を注して、那旅客の面魂、倘武者修行のものならば、素より本事もさぞあらん。そこらを思量らずに、一人や二人でゆかれんや。といふを酒顚二又冷笑ひて、役には立ぬ弱虫們が、健啖には豪傑なれども、一箇の敵手に十四五名、倶に蓬き音を出して、逡巡することやはある。俺がせんやうを見よかし。といひつゝ巨刀引提て、立勢ひに勵されて、恥はしくや思ひけん、大家齊一竊歩しつゝ、一房を隔し莊介が、臥簟に潛よりつゝ見れば、幮は垂たる隨にして、何地ゆきけん影もなし。大家猛可に駭噪ぎて、原來那奴は耳聰く、密談をはや聞知りて、逃亡たるか躱れし歟。庭の樹の蔭簀子の下まで、隈なく索ん皆出よ。と罵動くを酒顚二推禁めて、那奴は他鄕

團太が相計て、神慮任に做さんとて、兩個の乾兒に手傳せ、奴家を軈て人煙盡處なる、庚申堂へ牽もて去て、梁に吊しつ三人して、思ひの隨に鞭責て、翌の夜も又明後の夜も、鞭責てなほ死なずば、千隈河へ推淪めん、と罵誇りて出てゆきにき。勿論那小文吾奴も、その身に記憶なきにあらねば、奴家を船虫ならん歟、と疑ふのみにて目の見えねば、そこらは便りよかりしかども、那儘にして三夜まで、呵責に遇はゞ死ぬべかりしを、折もよく那旅客が、其首に憩ひて見出したれども、初は妖怪なるべしとて、輒くうけも引ざりしを、奴家が妙にいひ購めて、遂られてかへり來つる也。これのみ沒怪の幸なれども、那次團太は小千谷の老俠、郷の扞城を做すものなるに、螘の塔より塘崩れて、這隱宅を覰著られなば、後の祟りを爭何せん。そこらの用心し給へかし。といふを酒顚二うち聞て、眼を睜り拳を搼りて、そは安からぬ椿事也。石龜屋奴が事はしも、俺知らざるにあらねども、郷にて口を利けばとて、いかばかりのことをやせん。先にすれば人を征し、後るゝときは征せらる。亦是自然の勢ひ也。媼内は所要ありて、塚の山へ遣したるに、いまだ還り來ざれども、その他の火家は這里に在り。今宵這里へ推蒐て、小文吾次團太いへばさら也、闔宅の奴們鏖にして、渾家の與に怨を復さん。大家夜入の准備をせずや。と敦圉悍く罵りしを、船虫急に推禁めて、そは愉快き事なれども、這里に一箇の脫落

支黨と、圓居をしつゝ船虫に、酒を飲し勸りて、那荒廢堂に綑められたる、緣故を尋るに、船虫聲を潛して、おん身に報るは面伏なれども、奴家が乃者日每々々に、綷に假托て外に出しは、讐を撃んと思へばなりき。その故は箇樣々々と、曩に近鄕二十村なる、闘牛を觀つる折、犬田小文吾を闞窺たる、綷の趣を初として、小文吾はその比より、小千谷なる客店の、石龜屋次團太許、逗留しつゝ風眼を、患て垂籠てをるよしを、其後撈聞し事、これにより船虫は、假瞽女と做り、按摩を執りて、小千谷を徘徊せし程に、けふ小文吾に召入られて、近づく事を得たりしよしを、遺もなく聶示して、奴家が武藏に在りし時、故夫鷗尻の並四主は、那小文吾奴に、殺されたり。その折奴家も搦捕られて、石濱の城へ牽るゝ夜艾、不測に人の資によりて、那地を脱去りたりき。こは此五稔已前の事也。爾るにいぬる日闘牛の折、那奴を闞窺たりしより、舊怨みに堪ざれば、撃果して故夫の、怨をいかで復さん、と思ふものからおん身に報なば、快からぬ所あり。舊きに厚くて新しきに、情義薄しとせられん歟とて、初よりしていはざりき。却爾後を聞給へ。けふ曛昏より小文吾に、近づきて他が肩癖を、撃こと久しかりけれども、那奴は皆目見えざれば、奴家也とは些も知らず。粤にいよ〳〵便を得たれば、懷刀を拔出して、頸を搔んとしてけるに、幸なく那奴に利手を捉られて、投伏せられて事成らず。その折主人次

爲體、那人柄に相應しからず。今亦臥房に入りて見るに、蚊帳は則萠葱の紗にて、裙縁に紅絹を用ひたり。亦是徽賤の東西に似ず。蒲團も四布の絹なるに、臥蓙は極めて麁物にて、枕は古材の斫株也。これらによりて推量るに、那酒顚二は山賊にて、兩個の乾兒は支黨ならん。向に主人が俺を相て、武家の主用に路を急ぐ、脚力なり哉、と問ひし時、未だ心のつかざりしを、今又思へば俺が懐に、要金ある歟、と竊引しならん。此も亦疑ふべし。恁れば女弟と唱るものも、必是賊婦にて、人の爲に生拘られ、那荒廢堂の樓上に、繋れてありけんを、俺が思ひ足らずして、他が巧言を眞事と听たる、慈善は仇となりぬべき、機萠は越に顯れたり。察する所當らずとも、由斷のならぬ今宵の旅舍、只用心に優ことあらじ、と尋思をしつゝ四下を見るに、緣頰の戸は足らざるにや、半分は闔ずありければ、子二刻比の月の光、障子を照らす庭面に、高く歌女の聲す也。緈ある折に進退好。出るに便ヲからず、と思ひつゝ又後方を見るに、短鎗竹槍桿棒なゝどの、多く承塵に掛てあり。又その邊に竿に串きたる、裂織の草鞋の、緖を融せしがいくらもありけり。折から奥にて人許多、うち譚ふ聲してければ、莊介耳を側て、俺なほ恁てあらんには、他們も亦由斷せで、闚窺ることなからずやは。熟睡をしたる如くにして、臥つゝ聞ん、とそが儘に、ふたゝび枕に就にけり。爾程に酒顚二は、席を易奥に到て、嚮に躱れたる

がせ給ふ旅ならずば、權且這里に留りて、古迹を遊覽し給へかし。その折には小可が、鄕導を致すべく、おん管待を仕らん。夜ははや既に深たれば、就寢り給ふもよかるべし。這里は名だたる雪國なれば、蚊さへ蠅さへ稀なれども、黴雨の比は屋棟裡より、夜は只蛭の落ることあり。よりて蚊帳を用る也。壯佼輩よ南向の、八席房に臥簟を儲て、案內をせよ。と吩咐れば、兩個の支黨こゝろ得て、はやその處に蚊帳を垂て、枕よ臥蓙よ蒲團よ、とり出し來つ莊介に、誘とて案內に立つ程に、莊介は酒顚二に、歡びを演、刀を引提て、軈て臥房に入りにけり。

第七十七回

衆賊を盡して酒顚旅舍を脅す
內命を傳へて由充二客を招く

却說莊介義任は、獨枕に就たれども、又身を起して霎時も睡らず、手を叉き頭を低て、肚裏に思ふやう、這里の主人の面魂、一癖あるべく見えたるに、乾兒と唱る一兩名も、又獦戶の模樣にあらず、剏席上にありし盃盤碗碟の、一個として具足せず、碟子は唐山船來の、宣德製の如くなるに、折敷は剝たる會津盆也。東西皆輕重巧拙の、あるだにも疑しきに、家は寺院の庫裡に似て、在俗の住ひにあらず。柱斜に壁壞れて、檐より夜半の月は漏れども、酒肉に奢れる

將息の術直あり。節骨の疼む處へは、膏藥を打べしとて、乾兒們にそのよしを、吩咐て候へば、御こゝろにな掛給ひそ。他は近曾孀婦になりしを、兒子ひとりも候はねば、去歳より這里へ召とりたれども、小可も亦妻子なければ、奉公せんといふに儘して、小千谷の郷なる客店へ、炊妾にとて遣せしに、又有まじき東人の殘忍、情慾の遺恨に濡衣を、被せて殺さんとせられしは、怨むべし嗚呼憎むべし。この義は異日郷長に、告てせんすべ候はん。といひつゝ傍を見かへりて、噫漫也。憤を、洩さんとて長もの語で、おん管待の後れたり。快夕饌をまゐらせん。准備をせずや。と急がせば、惡棍輩のこゝろ得て、立んとせしを荘介は、遽しく推禁めて、その義は決して無用也。晝の割籠の飯の殘りて、舊の儘にてありけるを、この黄昏にたうべしかば、俺們はものゝ欲しからず。一房を借りて睡んのみ。と推辭を酒顚二強難て、小夜深たればまゐらする、東西とてはなけれども、然ではあまりに無造作也。肴手をつけぬ餚もあれば、心ばかりに歡びの、盃を薦めまつらん。甲よ乙よ盃盤碗碟を、洗淨めて裝易よ。といふを荘介又禁めて、否某は生來沙量也。路の疲勞のなきにあらねば、只這儘に睡し給ひね。喫得ぬ酒を浮られて、徒に天を明さんより、遙に優たる管待ならん。この義を憑みまうすにこそ。といはれて酒顚二頭を搔て、然までに固く辭ひ給ふを、なほ御こゝろに任せずば、倒て無禮に候はん。急

入りて、這四下の光景を、巨細にはまだ見ざれども、縡の趣意外に出て、訝しからずといふものなし。非如主人は猲戶也とも、恁る地方に住做せしは、要なからずや、尷尬也。裡面の容子を見て後に、這疑ひを釋よしあらん、と思へば阿容たる氣色もなく、主人の案内を俟たりしを、裡面より一個の支黨が、遽しく立出て、莊介にうち對ひて、誘とて軈て案内をすれば、莊介は引るゝ隨に、草鞋の紐解捨て、儲の席に著程に、酒顛二も亦身を起して、找み對ひつ叮嚀に、且その長途を勞ひて、小可則當家の主人、酒顛二と喚るゝもの也。女弟の必死を拯はせ給ひし、御洪恩の趣は、目今他が報たれば具に承知仕りぬ。おん身は何州の方ざまにて、獨行をし給ふやらん。願ふは名告らせ給へかし。倘武家方の主用にて、只管路を急せ給ふ、おん脚力にはあらずや。と問へば莊介頭を掉て、否、某は東國の浪人、姓名犬川莊介と喚做すもので候也。いぬる比より故ありて、友を索ねて彼此と、遊歷一稔に及びたり。爾るに今宵思はずも、山路の荒廢堂に憩ひし折、那樓上に令妹の、綁縛せられし爲體を、見るに忍びずその故を、聞けば寃屈の呵責に似たり。寔に不便の事なれば、已ことを得ず解卸して、請るゝ隨に夜と共に、送屆けて俺們も安心。この義によりて今夜半夕、止宿致すも不測の緣。曉なば別を告んのみ。やよ某に管ずに、且令妹を勦り給へ。といへば酒顛二、さゝ候。女弟は納戶にうち臥さして、既に

扶けて倶に樓上より、降りて外面に出る時、壞れし壁の鏝巻竹の、太やかなるを推折て、船虫に取せしかば、船虫は受戴て、杖とし突て辿るゝも、莊介と共侶に、夜の山路を熟たる如く、ゆくこと約半里許、童子簓子酒顚二が、隱宅へはやく來にけり。這里は山院の荒迹なれば、處々に礎あり。只松柏の老たるが、彼此に繁立て、見亘す限り外に家なし。然ども酒顚二が隱家は、原山院の庫裡なりければ、荒たる隨に廣やかにて、坐席は二房か三房かあるべし。這夜件の酒顚二は、支黨の悪棍を、十五六名相聚へて、酒うち喫てありけるを、船虫は然とも知らねど、俺詭りし趣を、はやく良人に聶報ずば、這旅客と對面の折、應答不都合なるべし、と思ひにければ莊介を、霎時門頭に立し置て、遽しく門の戶を、推開き又引闔て、閃りと裡面に找入りしを、酒顚二も及支黨も、灯光に見つゝ聲をかけて、今宵は奈どて遲かりし。今も今とて丙丁と、噂するまで等久たり。といふを船虫手を抗て、推禁め又外面へ、指し示して酒顚二の、身邊に跪居て慿々と、今宵の首尾を聶くにぞ、酒顚二は含笑ながら、幾番となく頷きて、却同惡の甲乙にも、聶き續して箇樣々々と、はやくこゝろを得させしかば、そが儘倶に身を起して、奧へ躱るゝもの多かり。殘るは才に一兩名、啖散せし盃盤を、成壁下に片寄て、其頭に席を儲てをり。爾程に莊介は、憶はず船虫を送り來て、且く門頭に鵠立たる、折から月は雲に

文吾に、仇なす賊婦船虫也とは、神ならぬ身の知るよしなければ、思はずも嗟嘆して、聞くがごときは東人の不仁、儞の薄命、憐むべし。家兄の宿所は何處ぞや。その姓名は何とかいへる。と問へば、船虫涙を禁めて、兄の宿所は這地方より、半里ばかりも侍るめり。片山里なる獵戸にて、名を酒顚二と喚れ侍り、隣に疎き孤屋にて、いとも貧く侍れども、俠氣あれば乾兒多かり。賤妾が厄を釋助けて、宿所へ送り給はらば、さぞな歡び侍りてん。只おん慈悲を願ふのみ。といへば莊介頷きて、そは亦自然の道理也。先解卸して得させんず。と應て軈て腰刀に、附たる小刀子を拔拿て、左手にやをら船虫を、抱抗つゝ梁に、掛たる索を斫棄て、扶卸しつ、兩手を縢げし、その重索を解れたる、船虫は手を捺り、足を捺りつ亂れたる、髪を搔よせ推納ねて、跪きつゝ莊介を、伏拜み又伏おがみて、思ひがけなきおん慈善、何の世にかは忘るべき。手さへ足さへ皮肉疼みて、なほ難義には侍れども、駝れまつらんは憚りあり。徐にあるきて退りてん。いかで送らせ給ひなば、なほこのうへの御恩にこそ。と憑むを莊介推辭難て、いはるゝ趣餘義もなし。宿投後れし折なれば、路の便宜は左も右も、宿所へ送屆け得させん。徐に階子を踏へて降よ。といふに船虫又伏拜みて、大かたならぬ御洪恩、さこそは兄も感心して、今宵のお宿をしはべらん。允させ給へ。と手を膝に、掛てやうやく身を起すを、莊介はなほ勦りて、




犬川荘介

賤き兄に寓居て、劬勞介意をしたらんより、人に仕へて口のうへ、身の皮さへに搾ん、と尋思をしつゝ兄にも告て、那客店へまゐりしは、今茲三月の初旬なりしに、主なる人の早晩に、薄情や賤妾に眷想して、折々夜話て口說れしを、些も倚せず辱めて、逐返したる怨みにて、箱硯に宿置たる、粒銀一顆失たりとて、最喋々しく穿鑿したる、果は賤妾に濡衣を、被せて件の粒銀を、竊みたりとて理も非も分ず、撻つ毆きついひ解くよしを、いひも解せぬ殘忍邪慳、主の威光を輝して、身動させぬ綁縛繩、僮僕輩にも手傳して、けふ黃昏の比よりぞ、這荒廢御堂に牽もて來つゝ、人に見られぬ樓上の、梁に吊りしのみならず、おもひの隨に鞭撻て、翌の夜も又明後の夜も、笞を當てなほ死なずば、藁簀卷にして千隈の河へ、推淪めんとて出てゆきしは、半時ばかり前なりき。恁れば賤妾は寃屈の罪に、屠所の羊となりにたり。方纔九死にして一生を、得がたしとこそ思ひしに、幸ひにして旅ゆく刀禰と、見えさせたまふ方ざまに、遇まつりしは奈落迦にて、彌陀の御光を拜むに似たり。倘いふ事に詭りあらば、州に名だたる彌彥の、神の御罰を稟まつらん。願ふははやく疑ひをも、這綑をも解卸して、兄の宿所へ送らせ給へ。そは再生の御恩に侍り。噫堪がたし苦しや。と身を戰して、血走る眼に、禁難たる紅涙、樹間の雨と降沃ぐ、凋る花と憂かりし事を、誠しやかに口說きけり。莊介これをうち聞て、年來犬田小

爲轉變の、世の去住の苦しさよ。是より信濃に赴きて、那里でもなほ得遇ずば、一トたび甲斐へかへりゆきて、犬山生と替るべし、とは思へども去歳の春より、如干の州を巡り來て、吉左右あらずば犬山に、俟つゝ在りし州の名の、甲斐なきものと思はれん。いかにせましと胆向ふ、心ひとつに慰難て、悵然として照る月を、霎時眺る折しもあれ、這荒廢堂の樓上に、人の呻吟く聲せしかば、荘介駭き且訝りて、肚裏に思ふやう、荒たる堂舍に夜を更て、人の處るこそ怪しけれ。若是家なき山賊歟、しからずば妖怪山鬼の、俺が剛膽を試さんとて、猛可に聲を立たるならん。要こそあれ、と尋思をしつゝ、徐に裡面に找み入て、朽て歩臺間遠になりたる、階子に攜りて樓上に、陟りて見れば月光の、下屋よりよくさし入りて、殘る隈なく明かりけるに、怪むべし一個の女人の、年齡は四十許、面貌の醜からぬが、最も緊しく綑られて、梁に吊られてありけり。思ふにも似ぬことながら、荘介騷ぐ氣色もなく、うち對ひつゝ熟視て、やをれ汝は何物ぞ。人にはあらで變化ならば、那元人の小說に、見れしと聞えたる、亦紅孩兒の類にて、その窮阨の姿を示して、漫に俺に戯るゝ、似而非魔行にこそありつらめ。烏滸なる事を。と冷笑へば、女人はよゝとうち泣て、然な宣ひそ神かけて、賤妾は妖怪變化にあらず。這里よりして程遠からぬ、小千谷の鄉なる客店に、月屬仕へしものに侍り。曩に良人は身まかりつ、貧

ありぬらんと思ふ程に、夜ははや初更の中刻になりけり。うちも續きし五月雨の、天珍しく霽亘りて、十八日の月鮮明に、山峽より升りたる、前路になほも小山ありて、其首に故たる佛堂見えけり。登時荘介思ふやう、左ても右ても宿投後れし、今宵は露宿に暁すとも、思ふに倍して疲勞たる、足を且く休めんとて、件の堂に立よりつゝ、軈て朽たる板緣に、尻をうち掛雨膝捺りて、却堂内を見かへるに、柱傾き破れし櫓に、庚申堂と寫したる、扁額はなほありながら、そも蟢兒の網に包れて、素紗に臨す飛白に似たり。四壁は風雨に洗れて、不破の關屋の廂ならねど、洩る月影の隈もなければ、猶彼此と看て知りぬ。高座破落て、神像在さず、板席菌を生じて、狐兎跡を印したり。這堂三間四方にて、大廈ならねど矮樓あり。土木初は工を盡して、磨建ずばいかにして、恁まで頽破に及びしを、雪にも風にも覆れず有んや。嘉吉應仁の年間よりして、都鄙に鬪戰絕ざれば、神社佛閣も大かたは、兵火に燒れ、亂妨に毀れて、蹟なくなりしも多かれば、是も亦その類にこそ。今より五稔前つ秋、(文明十年七月二日)俺身武藏の大塚に在りしとき、東人の仇を擊たるを、軍木卒川簸上們に誣られて、死刑の場に臨みし折、思ひかけなく犬塚們、那三犬士に拯れし、地名は庚申塚なりき。それは武藏の豐嶋郡、這里は越後の魚沼郡に、那三犬士を索來て、遇ぬ憾をおなじ名の、庚申堂に憩へども、離合は時あり、有

亡の、知れずと聞えし親兵衛の、うへをも索究んとて、ゝ大照文にも恁々と、思ふよしを說示して、莊介は去歲の如月、獨指月院を立出て、武藏に到り、下總に赴きて、行德の里人に、犬田父子の事を問ひしに、小文吾は故鄕に還らず。この故に文五兵衛は、住も熟たる家を售て、市川なる妙眞と共侶に、安房の親族許赴きしが、その次の年の春にやありけん、世を去りにき、と聞えしかば、思ふにも似ず駭歎じて、いよく疑惑の胸安からず。然るにても小文吾は、曳手單節を將てゆきながら、這行德に還らずして、什麼何處へか身を寄せけん、こゝろ得がたき事にこそ、と思ふものから云々と、又里人に問へばとて、正可に知らるべきにあらねば、そが儘踵を旋らして、眞間國府臺までかへり來つ、更に常陸に赴きて、秋の比より玉鉾の、陸奥に旅宿をしつゝ、今玆の春まで那地にあり。五十四郡を徧歷りて、牢都の濱まで漏すことなく、足に信して涉獵りしかども、索る人に得も遇ねば、やうやくに思ひ捨て、越路を投てゆく程に、春過て夏もはや、五月中旬になりにけり。素より急がぬ逆旅なるに、大八の犬江親兵衛は、神躲といふものにて、往方知れずと聞えしかば、山に遇へば峯に登り、谷に臨めば巘岨に立て、身の危きをものともせず。この故に又日屬を經て、越後州魚沼郡の、山里を過る折、其邊の蕃山繁山をも、漏さじとて杖を曳きしかば、この日も山路にゆき暮て、小千谷の鄕へは十町許も、

念して、幾番となく眼包を掯れば、撫るまに〱銷然と、眼内の邪熱退冷て、心地清爽にな
りにけり。よりて且試に、枕邊遠く措したる、行燈を徐と引よせて、戸蓋を掲てうち對ふに、
目𥉌くもあらずなりしかば、憶ず莞爾と獨笑して、是則靈玉の、妙應奇特に疑ひなし。恁ま
で靈驗灼然なる、神寶を身に付ながら、三十餘日禱も得せで、他所に藥を求めしは、駝ひしそ
の子をうち忘れて、人の抱る穉兒を、見つゝ羨むに似たりけり。かへすぐ〱も疎なる、俺が怠
慢を許させ給へ。と念じて亦復眼包を掯れば、物を見ること初にかはらず。枕に被る微塵まで、
夜視にも鮮明なりければ、いよ〱歡びます〱勇て、翌は夙めて那荒廢堂へ、ゆきて假瞽女
をよく見てん。その折にこそ船虫歟、船虫ならぬ歟、檢定て、疑ひ其首に氷解せば、推量をも
て只管に、人に任して身の爲に、人を戮する愆なからん。嗚呼爾也、と胸にのみ、思ふ心のい
そがれても、夏の夜ながら今宵のみ、尙生憎に明やらぬ、丑三の鐘响く比霎時睡眠に就にけり。
不題話表、犬川莊介義任は、曩に犬川道節と共侶に、甲斐州に旅宿をしつゝ、石禾の鄕の
片邊なる、指月院に宿投りし夜、料らずも、大法師と、蜑崎十一郎照文に面會して、曩に行德
にてありし事、犬江親兵衞のうへまでも、聞つゝ哀歡わくよしもなく、權且逗留したりしを、
又道節と商量して、迭代に東北なる、諸州をうち巡りて、なほ又犬塚犬飼犬田、并に生死存

賊もこれらをもて、照驗となることしもあらん歟、是も亦知るべからず。然れば這短刀は、和主權且預り措て、那穿鑿をもし給へかし。といはれて次團太異議に及ばず、先小文吾の身邊なる、那短刀を拿抗て、宣ふ趣寔に爾也。又那賊婦を譴撻て、這短刀の出處をも、問はゞ磯九の仇を知る、便著もあらん歟、料りがたかり。小可預り措くべきのみ。夜ははや既に深初たり、快々睡り給ひねかし。と告別しつ短刀を、引提て奥へ退りけり。爾程に小文吾は、睡られぬ隨に通宵、身の病著と草枕、旅宿の憂苦を遣り難て、獨つら〳〵思惟るに、俺が風眼も早晚と、三十餘日になりにけり。然しも主人の親切に、醫療賣藥甲乙となく、薦めに任して取替引易、久しう用ひたりけれども、只疼痛のみ退きて、物を見ること克はねば、恁ばかり便なきことはなし。草根木皮の效なきも、又神佛の冥助によりて、世に難病の瘥るもの、亦これなしといふべからず。然ばこそあれ往歲、俺身石濱の城内に在りし時、馬加大記が邪計にて、毒害せられたりけん、と思ひし折の多かりしを、年來所藏の靈玉を、口に含みつ、玉液の、奇特によりて腹痛瘥り、不思議に恙なかりしも、亦神佛の冥助ならんを、憶ざりしは疎なりき。今も亦靈玉の、奇特を祈らば翳む睛の、雲も挾霧もうち拂れて、天日を瞻る應驗あらん、と尋思をしつゝ遽しく、枕搔遣り身を起して、夜も日も肌膚を放さゞりける、身護嚢の紐解拔きて、玉を取出つ、祈

さして、途より宿所へかへしたり。他們は年來小可が、角力の弟子で候へば、翌の夜も又いなんといひにき。這里よりして荒廢堂まで、約十町許あり。人家を離れて奥まりたる、蕃山の腰で候へば、白晝でも人の往還罕なり。非如那里へゆくものありて、賊婦が梁に吊られしを、見るといふとも憐みて、資るものは候はず。這頭の人は並て咸、神慮儘を知ざるものなく、神慮儘にせらるゝは、歹人なるを知れば也。抑件の庚申堂は、年々の闘戰に、荒果しより人も詣らず、神像さへに亡なりて、今は要なき荒廢堂なれども、毀も得せでそが儘に、うち捨置は神慮儘の、私刑によりて這郷に、歹人徘徊せざればなり。然れば件の賊婦奴が、なほ詭りて陳ずるとも、三夜に及びて死なずもあらば、千隈河に推淪めて、地方の害を除くべし。こは只大人の與のみならず、這郷人們の爲なれば。といふを小文吾うち聞て、その義はこゝろを得たれども、那假瞽女を強盗賊、然らずば刺客ならん、と思ふは只是推量なり。いまだ招道致さずば、食餌を與へ、苦痛を緩めて、賺して問ふも可かるべし。然るを三夜を限りとして、惴りて殺さば不仁に似たる、後悔ありとも甲斐なからん。恨らくは俺睛翳みて、他を見ること自由ならねば、なほ疑ひを釋に由なし。就て這短刀は、那假瞽女が東西といへども、燒刃の曇り尋常ならねば、人を砍たるものに似たり、といはれしにとりて又思ふに、嚮に磯九郎を殺したる、那盗

事多かり、當所は前内管領、長尾判官景春主の封内にて、主は近曾上毛なる、白井の城に在す也。又當國には春日山に、長尾家の城ありといへども、路遠ければ訴訟人們の、往還に日數を費すのみ。主在さねば讞斷に、動もすれば非理の裁許あり。是その不便の一ッなり。又這里よりして程遠からぬ、三島郡片貝に、長尾家の別館あり。其首には領主のおん母君、箙の大刀自と喚れ給ふが、年來住せ給ひつゝ、みづから政事給へば、亦是女儀の臆斷にて、最屓の沙汰も尠からず、と巷談衢説に聞えたり。是その不便の二ッ也。錢さへ日さへ費すまでに、勞しても功有がたき、領主の廳へまるらんよりは、神慮儘に優ことなし。こは此地方の私刑なれども、昔よりしてこの事あるを、領主にも聞えたり。免許を稟しことならずとて、なでふ後難あるべきや。やよ、うち任し給ひね。とこゝろ得顏に說示しつゝ、却壯佼們に船虫を、牽立さして共侶に、張燈引提て遽しく、里盡處なる庚申の、荒廢堂投て出にけり。恁而その夜亥中の比に、次團太一箇かへり來て、小文吾に報るやう、那賊婦奴は形のごとく、庚申堂へ牽もてゆきて、軈て矮樓の梁に、吊りて土丈二鯽三們に、笞を執らし鞭撻して、幾番となく責問ひしに、素より心太き癖者なれば、撻るゝ毎に叫びしのみ、いまだ招道せざれども、翌も明後も三夜の間、那首にゆきて責懲しなば、竟に衰りて實を吐くべし。よりて土丈二鯽三にも、緈恁々とこゝろ得

さずば、いかにして實を吐くべき。術寛かりき。と呟きて、ふたゝび撻んと立對へば、船虫よよとうち泣て、恁までいひしをなほ疑ふて、强顔き人の恨めしやとて、跣跎しても疾視ても、檻の獸となりし身の、今さらにすべなかりけり。折から次團太が角力の弟子に、泥海土丈二、百堀鯽三と喚做したる、兩個の壯佼這里に來つ。既にして船虫の、生拘られたる緣由を、奴婢們が噂に聞知りて、觀んとて早く次房にをり、方纔次團太が船虫を、撻んとしつるを闞窺て、やよ喃大哥。と喚かけて、簀戶の陰より遽しく、共侶に立出て、次團太にうち對ひて、大哥這奴が大胆なる、刀劍三昧せしよしも、又その陳ずる趣を、搗鬼ならんといはるゝよしも、その大略を聞得たり。現臛臛なることのみなれば、責問れんこと勿論なれども、這首にて笞を中給はゞ、亦復酷く號叫びて、さぞな四鄰を駭さん。恁るものには例もあるに、庚申堂へ將てゆきて、神慮儘にし給はずや。といへば次團太頷きて、寔にその義しかるべし。然ば這里へ將てゆきね。三夜矮樓の梁に、吊りて宵每に鞭撻なば、なでふ首伏せざるべき。準備をせよ。といそがせしを、小文吾霎時と推禁めて、神慮儘といふよしは、嚮にも聞たることながら、そは里人の私刑にして、その刻薄に過たるを、後難あらば爭何せん。願ふは領主へ訴へて、官府沙汰にし給へかし。といふを次團太聞あへず、地方の風儀を知り給はねば、恁宣ふは理りなれども、然では不便の

にも似ぬ大人の大力、投伏せられしは没怪の幸ひ、緬められし折に又、心を屬てつら〳〵と、見れば寔にその人ならず、那籠山には小鬢の内に、一寸許の舊瘢あり。又這大人にはその瘢なし。性起たる折なれば、其首まで念を入れざりし、疎忽の辜を允させ給へ。這短刀は良人の紀念、妾は則犬村氏にて、名をば窗井と喚れ侍り。人に知せぬ宿望も、俺身の素生もうち諦て、報まゐらするは疑ひをも、這綁縛の索をしも、はやく解れん爲なれば、是を御縁に仇討の、後見をして共侶に、寃家を索ね給はらば、こよなき慈善で侍らまし。哀しきかな。と聲立て、口に信する搗鬼の、巧はさしも武藏野に、ありといふなる逃水の、水ならなくに假涙、虚泣しつゝ伏沈むを、次團太見つゝうち聞つゝ、有理と思ふ氣色にて、只顧嘆息したりしかば、小文吾呵呵と冷笑ひて、翁よ、那奴が巧言虚談に、惑ふて實事とな聽給ひそ。他倘寔に烈女にて、良人の爲に讐敵を、撃んと欲するものならば、俺に刃を捉止られて、本意を得遂ずなりぬとも、忽地に胆落て、怕るゝことはなからんを、投伏せられし時に及びて、必死を極めしものに似ず、賊心言語に顯れて、緬められても羞ることなく、陳ずるよしの巧なるも、只その命を惜むのみ。彼紫の朱を奪ひ、碔砆の玉に混ずると、いふことあるを思はずや。俺は一切こゝろ得がたし。といはれて次團太忽地に、曉りて外股うち鳴らして、賢察誠にそのよしあり。這奴飽まで撻懲

短刀も、贓物にて近き比、人を殺せしことあらん。出處來歷支黨まで、問はるゝ隨に招道せよ。いはずば目に物見せんず。と罵りつ杖ふり抗て續ざまに撻懲せば、船虫は吐嗟と叫ぶ、聲苦しげに戰して、やよ主霎時等給へ。恁なるからは何をか隱ん。且いふよしを听給はずや。と悲請ふて已ざりしを、次團太はさもこそとて、權且呵責を止めけり。登時船虫は頭を擡、吻と息つきて、喃主、妾は武藏なる、人の妻ではあらずかし。故郷は則下野にて、赤岩村に隱れなき、赤岩一角武遠と、喚れし鄕士は恥しながら、妾が良人で侍りにき。爾るに良人武遠は、いぬる年故ありて、籠山某甲といふ武藝の弟子に、闇撃にせられにけり。過世牙くて仇を撃べき、兒子一箇もあることなければ、俺身女流にあなれども、那籠山が往方を索ねて、良人の怨を復んず、と思ひ決めしその日より、神に祈り佛に誓ひて、綷の便宜を願まうせしに、ある夜の夢に良人の寃家は、這越路なる魚沼の、郡にあらんと正しき示現に、心勇みて舊里を、潛出でつゝ辛くして、獨這地に來つれども、由緣の人のあらざれば、亦定めたる宿もなし。女按摩に形狀を變て、盲目と見せて里人にも、又旅客にも彼此と、近づくことを得たりし甲斐に、計らず這里に喚入られて、初て大人を見てけるに、面貌年庚聲音まで、那籠山と一對にて、不思議に肖させ給ひしかば、別人也とは思ひもかけず、霎時由斷を覘ふて、撃果さんとしたりしに、思ふ

の故は箇樣〳〵と、今より五稔前の秋、那並四郎が小文吾を、宿所に留めしその夜艾、殺して盤纏を奪略んと、計較たる緈の趣、並に件の並四郎は、小文吾に撃れしを、船虫はなほ詭りて、些も怨る氣色なく、小文吾を出し遣りて、途にて千葉家の郷役なる、畑上語路五郎の手を借りて、搦捕せんと謀りしかども、又小文吾に杪を搔れて、その奸計行れず、緈立地に發覺て、倒その身を細められ、石濱の城へ牽るゝ折、竊に資る人ありて、逐電せしと聞えたる、その事の爲體、又那嵐山の尺八と、小篠落葉の刀の事まで、その崖略を說示して、頤ふに那假瞽女奴は、これ並四郎が妻船虫にて、遠く這頭へ流落來つゝ、俺がこの旅舍に在る事も、眼病にて稍久しく、垂籠てをる事も、這奴何の間にか聞知りて、夫の怨を復さんとて、遂に今宵に暨べる歟。這一條を除きては、仇傚す婦女子あるべしとは、這身に取りて記憶なし。といふに次團太駭嘆じて、旣にその事あらんには、今さら疑ふべくもあらぬ、那奴は件の船虫とか、喚れし賊婦で候はん。いで〳〵。といひつゝも、又身を起して四下を見るに、柱に掛たる一條の、露拂の小竹杖あり。これ究竟。と遽しく、引提て船虫に、佗と立對ひ疾視て、やをれ賊婦、今大人の、いはれし由を聞つらん。汝は那並四とやらんが、鬼妻船虫にこそあらめ。何の比より這頭に來て、何處を宿にしたるぞや。その身一箇にあらずして、必支黨なからずやは。懷にせし

第八輯　卷之二

第七十六回

庚申堂に俠者賊婦を囚ふ
廢毀院に義任船虫を送る

却說石龜屋次團太は、細めたる船虫を、且緣頰なる柱に繫ぎて、他が所持せし短刀を、拿抗つつ左見右見て、鞘に斂めて小文吾の、身邊に措て却いふやう、小可は那賊婦の、僻瞽女なりしを知らずといふとも、慭に大人に薦めし、疎忽の辜を爭何せん。寔に危き事なりき。是覩せ這短刀は、燒刃に大く曇りあり。近屬人を斫たるもの歟、是も亦知るべからず。よりて思ふに那賊婦は、必是旅客の、枕搜の類にあらで、水滸の母夜叉母大虫に、似たる强盜なるべき歟。しからずば人の爲に、おん身を狙擊んとしたる、刺客にもや候はん。思ひ當らせ給ひぬる、よしある事歟、甚麽ぞや。と問ふを小文吾うち聞て、いはるゝ趣寔によしあり。俺も亦然は思へども、いと朽をしくも見ることの、今さら自由ならざれば、正可に厶とはいひがたけれども、那奴が聲は武藏にて、鷗尻の並四郎と喚做したる、奸賊の妻なりし、船虫に似たる所あり。そ

胸うち騒ぎて、吭を吭をといふ聲の、忽地耳に入りしかば、心に深く疑惑ふて、按摩を休るに優ことあらじ、と尋思をしつゝ又推禁めて、已ねく〵然でも痛かり。翌の夜に又憑むべし。大義にこそ。と勞ふたる、辭の下に船虫は、短刀晃りと引拔て、左手に楚と小文吾が、衣領搔抓み引著て、吭を搔んと閃めかす、刃の光は目にや見えけん、小文吾透さず船虫が、利手を丁と捕止て、原來這奴は癖者なりき。睛は見えずとも若們に、輒く撃るゝ俺ならんや。と罵りつ引被ぎて、肩を越さして面前へ、𠟗斗を拍して投伏せたり。這喫哸に次團太は、駭きながら走り來て、見れば犬田に組布れたる、女按摩は假瞽者にて、手に短刀を拔拿たれば、問でもしるき賊也けり、とおもへば情由を聞くに及ばず、壁に掛たる擔索を取て、犬田に代りて船虫を、はや犇々と綑めけり。登時後れて走り聚ひし、妻はさらなり奴婢們まで、怕れて舌を掉ふもあり、或はその兇惡を、憎みて撻よ毆けよとて、いと囂しく罵りしを、次團太大く叱禁めて、恙なかりし小文吾を、祝して且その眼病中に、便なき折の剽勁を、只管感じて已ざりけり。畢竟今小文吾が、船虫を生拘りて、後の話說甚麽ぞや。そは又這次の卷に、解分るを聽ねかし。


下女


小文吾

つ竊に歡びて、いかで那奴を狙撃て、前夫並四郎の、怨を復さばや、と思ふにぞ、是よりして假瞽女に、なりて小千谷を徘徊しつゝ、人の與に按摩を執けり。これによりて石龜屋に、宿投りし旅客の、肩癖を撃たることも、兩三番に及びしかば、小文吾が眼病にて、物を見ることの得ならぬよしさへ、旅舍の噂に聞知りて、既に十二分の喜悦あり。便りもがなと思ふ程に、今計らずも喚入られて、最輒も犬田が身邊に、近づくことを得たれども、小文吾は日屬より、疼痛に懲りて眼を開かず、夜は殊更に燈燭の、光を厭ふて行燈すら、近くは置せぬ折なれば、恁ても他を些も見ず。見ざれば知る由なきものから、船虫は又俺が聲音を、聽覺をることもや、と思へば言寡にして、肩を摩り背を推すのみ。透を得ば懷なる、木天蓼丸を拔出して、背をや刺串ん、押へて頸を搔くべき歟、と腹に問ひ腹に答て、いまだ輒く手を下さず。然とは悟るよしもなき、犬田が身には那靈玉の、擁護愆つべくもあらねば、按摩の指頭皮肉に答て、疼みて堪がたかりければ、おもはずも聲をかけて、やよ今少許寛うせよ。恁推されては堪がたかり。といふを、船虫うち笑ひて、妾が指にちからはなけれど、よく經絡に從ふて、穴所に當れば通ずること多かり。そが御こゝろに稱はずば、緩う致すもいと易かり。と答る間に懷なる、短刀を潛と掖出して、左手に肩を摩りつゝ、右手には柄を握拿て、拔放さんとする程に、小文吾猛可に

かり効のあらずとも、寂然として只獨、をはしますには優べきに。といへば小文吾頷きて、按摩は素より好まねども、療治の爲には歎ふべからず。その瞽女來なば召し給ひね、利くやきかずや試みてん。といふに次團太こゝろ得て、辭して納戸へ退りけり。恁而はや夕饌果て、點燈時候になりしかば、宿の婢妾が件の瞽女の、手を挽きつゝ倶して來つ、小文吾にうち對ひて、嚮に主人のまうされし、按摩刀禰を將てまゐりぬ。といふを小文吾うち聞て、然らば療治を憑む也。俺も亦、いぬる月より眼病にて不便也。女中よ這里へ按内をして、背の方に坐らしねかし。といふに婢妾はこゝろ得て、件の瞽女を小文吾の、後方にやをら推居て、霎時もあらず遽しげに、庖湢のかたへ退りけり。當下瞽女は小文吾に、冷熱を演安否を諮ねて、目の病著は逆上によりて、發るも嘗のことに侍れば、且おん肩より揉和らげて、爾後阿鍼をまゐらすべし。許させ給へ。と差寄て、擊肩癖の手拍子は、修羅の鼓にあらねども、噫危きかな小文吾が、命はこの時風前なる、燈燭にしも異ならず。詎か知るべき這瞽女は、是寔の盲目にあらず。甚なるものぞと原るに、亦那賊婦船虫なり。船虫はいぬる比、二十村なる闘牛を、観にゆきたる折、憶ずも、稠人の中よりして、遙に小文吾を見出して、一たびは怕れしが、憖にこゝろに掛れば、それとはなしに彼此と、人に尋ねて小千谷なる、石龜屋に逗留の、客なるよしを云々、と聞つ

も診せなどして、療養等閑ならざりければや、五月初旬になりし比、小文吾が眼中の、疼痛はやうやく瘥るものから、權且も眼を開きて、物を見んと欲すれば、亦復疼て堪がたかり。この故に夜となく日となく、垂籠てのみをるを、次團太は慰かねて、辭敵にならまく思へど、その身の經營、人のうへにも、此彼となく拘連ひて、宿所に在る日は稀也けり。是より先に須本太郎は、使を小千谷へ遣して、磯九郎が與に香奠を次團太に餽りけり。この折小文吾が眼病の、大かたならぬを聞知りて、みづから訪んと思ふ程に、その身も猛可に類中風の、病痾發りて行歩克はず、うち臥たるよし聞えしが、是より病こと年を歴て、竟にむなしくなりしとぞ。こは後々の事なるを、筆の次に寫すのみ。虫龜村の事、この下に話なし。爾程に降みふらずみ、檐の玉水音をのみ聞く、五月中旬になりにけり。恁而有一日次團太は、例のごとく宿所にをらず、その夕つかたにかへり來て、小文吾が徒然を、訊慰めたる語の次に、眼病は肩癖の、凝よりも起るといへば、按摩もその効あるなるべし。いぬる比より一個の瞽女の、齢四十許なるが、黄昏毎に笛吹鳴らして、這邊を過らざる日は稀也。這鄉には昔よりして、女按摩のなかりしに、他は何處より來るやらん。人々に朝膀がられて、療治の評判歹からず。這里に宿投る旅客の、召よせて肩癖を、拍せたるも尠からず。大人も今宵は那瞽女に、肩まれ腰まれ摩し給ひね。然ば

九郎が枉死のよしを、報知せこゝろ得さして、轎夫們に酒を飲せ、飯をも喫せ錢を取せて、虫龜村へ還し遣し、却磯九郎の亡骸は、桶柩に斂め、那轎子にうち乘して、香華院へ送りて葬りけり。こは是枉死のものなれば、里正に訴へ、寺僧に報て、萬事法度に從ひたる、そこらのことは諄々しさに、言省て具にせず。看官宜く察すべし。却說犬田小文吾は、這里に要あるものならねども、磯九郎の枉死によりて、主人は事の多かるを、慰めもせでふり捨て、出てゆかんはさすがにて、おもふにも似ず三四日と、なほ又逗留せし程に、眼中猛可に疼痛を覺て、日を歷る隨に甚しく、物を見ること得ならずなりけり。こはいぬる年渡海の折、風波の暴に推流されて、伊豆の大島三宅島に、月屬を經にければ、八重の潮風に面を撲れ、熟ぬ魚肉に脾肝を損ねて、今這病痾の發りしならん。嚮にも恙ありけるを、津國有馬の湯治によりて、瘥りにき、と思ひしに、なほも餘毒の耗ずやありけん。那四犬士に別れしより、今に至りて環りも會ず、曳手單節の往方はさら也、侄親兵衛が生死存亡、犬坂毛野の在處すら、知るよしもなきそがうへに、盲目にならばいかにして、這宿望を遂やはせん。思ひしことは水に寫く、文字にも似たり化し世に、化し俺この物思ひ、苦しきものは病痾にこそ、と獨つら〳〵過去を、懷ひつゞけて日を彌れば、次團太は正首に、這里の眼藥那里の洗劑とて、日毎に薦めざることなく、醫師に

せまゐらせん、と思ふて弔して來にけれども、這里よりして小千谷まで、路次幾もなくなりたれば、大人に用捨を願ひまうさん。快々これに亡骸を、斂めて送らせ給へかし。といへば小文吾感嘆して、その義塞にしかるべし。縱この事あらずとも、俺いかにして轎子の、馳走を受て還らんや。といへば次團太不樂しげに、そは辱きことながら、倘巳時なる轎子を、亡骸斂めて棄させんは、最惜しかるべきことにこそ。といふを須本太郎聞あへず、そは亦要なき遠慮也。時の用には鼻でも煞ぐに、轎子一箇を何とか思はん。快々斂め給はずや。と諭して軈て轎夫們に、綷恁々と吩咐て、僮僕輩にも手傳せ、却磯九郎の亡骸を。件の轎子に斂めけり。恁而又須本太郎は、僮僕輩兩三名を、隷て遣さんといひしかば、牛裁判們も小千谷まで、送らんとてはや身を起すを、小文吾も次團太も、推禁めしば／＼固辭て、竟にその義に從はず。轎夫們を勞ひて、提燈一張借たるのみ。然けれども須本太郎は、衆人を將て千隈河なる、津口まで送行て、別れて虫龜村へ還りけり。夜河は二更を限りとして、子時より寅時まで、船を出さゞりけれども、相川の村役をも、兼たる須本太郎が送りゆきて、術よく誘へたりければ、件の津に障りなく、一個の篙師起て來つ、はや小文吾を船に乘せて、前岸へ渡しけり。爾程に次團太は、小文吾と共侶に、件の轎子を舁しつゝ、その曉がたに宿所にかへりて、妻にも奴婢にも恁々と、磯

ふてこれを棄たる也。これらはおん身預り措て、後々までも穿鑿の、照驗にせられんことを、只管憑みまうすのみ。那盜賊は二人なりき。一個ははやく行脫しを、夜視なりければ、慥に認定ず、後なる一個も手拭もて、深くも面を覃みしかば、それも安定にいひ易からねど、眼圓に鼻高く、身長五尺五六寸、六尺にも近かるべし。この義もこゝろ得給へかし。又磯九郎が受たる痍は、見給へ右の脇より、裏を掛たる一箇所と、吭に十々滅を刺れしのみ。といふこと毎に須本太郎は、頷きつ嗟嘆して、その義は具にこゝろ得たり。けふは甚麼なる凶日なりけん、俺牛暴れて幾千萬の、人の忽劇になりたるを、幸にして犬田の大人の、助力によりて無異に治り、その歡びを演る間もなく、又這凶事に遇にけり。磯九男の恁なりしも、原はと推せば俺家より、起りし事で候へば、左を見ても右を見ても、心苦しく思ふのみ。といふを小文吾慰めて、禍福は糾ふ繩の如し。仁義をなして災害に、遇る例もなきにあらず。况這磯九郎は、人の教諭を聽ずして、死地に入りたるものなれば、誰か貴老を怨むべき。俺は恁こそ思ふなれ。といへば次團太も亦慰て、但小可が當惑は、今相川なる村長許、ゆかずといふとも亡骸を、這儘にては遣しがたかり。柩の准備を爭何せん。といふを須本太郎うち聞て、その義極めて不便也。尚眞夜中で候へば、里に到りて求るとも、速に整ふべくもあらず。俺這徙轎は、犬田の大人を乘

者等、と喚かけて、後れて走る一個の賊の、袱裹を引留めしに、憶はず胸を揺られて、輾轉びつゝ氣絶やしけん、喚活されし今までも、爾後の事をしらず。傾く月を見て料るに、一晌ばかりも經たりけん。寔に危き事なりき。とばかりならで心にかゝるは、磯九郎が事にこそ。と報るに驚く小文吾も、自餘のものも僉訝りて、そは又怪有の事也けり。小千谷より這畷まで、來つる大哥も他に逢はず、趕蒐來ぬる俺們も、逢ずなりしは疑ふべし。那癖者等が背に駝ふたる、裹の色はいかなりしぞや。と問へば次團太袖引伸して、那袱はこれに似て、花田のごとく見えたりき。といふをうち聞く牛裁判們は、いよ〳〵疑惑の胸安からず。そは俺們が磯九男に、貸て那二種を、包せし袱も、縹色にてありければ、此彼共によく似たり。といふに小文吾又駭きて、しからんには磯九郎の、生死存亡心もとなし。嚮に翁（次團太をいふ）が那癖者に、撞見たるも這邊であらば、迹なからずや。索て見ん。といへば、大家有理と應て、右と左に立別れつゝ、廻れば弦と弓張の、提燈抗て共侶に、渉獵れば果して岡の邊に、細糾の麻索あり。又消殘りし雪の中に、一條の竹槍ありて、血に染たるを見出せし、大家齊一胸を潰して、取抗つ共に見て、噫痛ましや、これあるからは、疑ひもなく磯九男は、件の賊に殺されけん。なほ亡骸もあらんず。と罵りつ又立噪ぐを、小文吾ヤヤと喚鎮めて、見よ、這雪を踏陟りたる、

いかに、と驚きて、喚活んとする程に、牛裁判們も自餘のものも、走り著つゝよしを聞て、抱き起しつ諸聲立て、喚ぶこと約半晌許、次團太俄然とわれに復りて、小文吾を見て不審しげに、思ひがけなや犬田の大人、小夜深たるに這人々と、倶に這邊へ來給ひしは、故こそあらめ、いかにぞや。と問へば小文吾されば とよ、俺は只管磯九郎を、趕留んとて夜を更て、走りて這首まで來つる也。その故は箇樣々々と、向に須本太郎の宿所にて、磯九郎が醉に乘して、衆人の諫を用ひず、牽出物なる錢と綵を、はやく小千谷へもてかへるとて、擔ひ出せし綷の趣、又小文吾がおもふよしをも、言約やかに說示して、和主は亦何等の故に、この所へ來て倒れたる。磯九郎には逢ずや。と問かへされて次團太は、眉根を顰め沈吟じて、そは亦不慮の事なき。磯九郎は日屬より、酒癖ゑきものなれば、きのふも今朝も傚めて、おん身に隷て遣せしに、喫醉たるのみならで、大人共侶に這人々を、勞せしはそも小可までに、面を虧する白物也。那暴牛の風聲の、甲夜に小千谷へ聞えしかば、小可宿所へ走りかへりて、なほ此彼と問合せしに、區々にして分明ならねば、大人の安否を知まくほしさに、ふたゝび宿所を立出て、この畷路まで來る程に、夜ははや亥中の比になりたり。折から兩個の癖者の、袱裹を駝ひしあり。行ちがふとき灯燈の、灯光に見ればそが一人の、衣は鮮血に塗れたり。偸兒ならんと思ひしかば、癖

なりたるあり。これにより酒顚二は、這荒廢院の庫裡ばかり、傾きながらなほ遺りしを、迺己が住所にしつゝ、ある時は博徒を聚合て、袁彦道の技に耽り、錢なき折は夜搶をして、山にも立、人の家にも、竊入つゝ梁上の、君子となる夜の多かりしに、船虫を妻にせしより、同氣必相求め、同病必相憐む、牝牡一對の殘賊なれば、夫を資けて共侶に、屢惡事を做す程に、この日も相川なる、畷路にて、夫婦竊に謀し合せて、磯九郎を殺せし折、船虫が雪窖にて、十十滅を刺したる短刀は、是則別刃にあらず、いぬる年沓掛にて、緣連を誑惑りて、金もろ共に竊取りたる、木天蓼丸の短刀也。船虫越路に流寓ひて、酒顚二の妻になりにし後も、外に出ることある每に、那短刀を懷にして、身の護に做せしとぞ。害心あるもの防害ありとは、慥ることをやいふべからん。閒話休題、爾程に小文吾は、その夜頻りに磯九郎を、趕留んとのみ思ひしかば、牛裁判甲乙と、須本太が家の僮僕輩の、從ひ來るにも來ざるにも管はず。只顧路次を急ぐものから、十刻ばかり後れたる、ことにしあればまだ趕著かで、相川村をもう過ぎつ、那畷路に到るとき、月は漸々に傾きて、眞夜中比になりにけり。慥る折から前程の路に、倒れたるものありしかば、先に進みし小文吾が、逸速く見出して、訝りながら立よりて、月を便りによく見れば、是則別人ならず、小千谷の逆旅主人なる、次團太にてありければ、こは什麼

鬼の目にも涙あり。地獄にも佛なきにあらず。願ふは目今略れたる、その金三が一でも、分ちて返し給ひね。と口に信する虚談を、強盗聞て、しからんには、越に一箇の商量あり。俺も亦いぬる比、女房を喪ひて、譬ば脱劍に鞘なきごとく、縫刺薪水の技はさら也、出納共に極て便なし。俺身は今年四十二歳、和女郎も四十許なるべし。恁れば此彼年庚門第、相應しからずとすべからず。和女郎今より機を易て、俺と夫婦になるならば、常綺羅さして寵愛せん。這商量に乘らずや。と含笑ながら口說きけり。現窮寇は敵を擇まず、窮女は夫を擇まずといふ、鄙語に似たる船虫は、聞つゝ肚裏に思ふやう、繫ぬ船の楫を絕て、よるべの岸もなきこの折に、偸兒也とて承引ずば、俺身は矢庭に殺されん。後はともあれ望に任して、從ふときは憂を轉して、驩と做すに庶かり。思念に及ぶことかは、と胸を決めてうち頷き、神の結びし過世ありて、いはるゝよしの食言ならずば、否にはあらぬ伊奈舟の、最上川ある陸奧へ、いなでおん身に從はん。必な見棄給ひそ。といふに歡ぶ強盗は、氷人なしに布金齎す、妻を娶れる心地して、然らば宿所へ伴去ん。這方へ來ませ。と手を挽きて、小千谷のかたへ將てゆきけり。又原るに這強盗は、童子篇子酒顚二と喚做したる、一所不住の山豪也。當時戰國の沿習にて、神社佛閣も軍兵の、亂妨を免れず、頹破に及ぶも多かる中に、小千谷と塚の山の間なる、山院の荒て無住に

且說毒婦船虫が、何の程にか越後に來つゝ、又強盜の妻になりて、良人と倶に右の如き、大惡事を做せし緣故を、看官猜し得ざるべし。原るに船虫は、嚮に信濃の沓掛にて、籠山逸東太緣連を誑惑りて、那木天蓼の短刀と、盤纏三十金を竊取り、當晚旅宿を逃亡て、足に信して走る程に、當時越後半國は、緣連が主なりける、長尾景春の所領なりしを、知ざりければ忌むよしもなく、那里は米魚の鄕なれば、由緣の人はあらずとも、這身の所寓を討るに、便りよからんと思ひつゝ、知らぬ山路を辿々も、軈て越後に赴きて、なほ彼此と蹈跡つゝ、有一日古志郡なる、金倉山の麓路を過る折、思はず剪徑に撞見て、懷にせし金を、奪略られんとしつる折、賊は一人なりければ、船虫も木天蓼の、懷刀を引拔きて、且く挑戰ひしを、件の賊はものともせで、竟に刃を擊落して、金を遺なく略てけり。然けれども船虫が、女流に似げなき胆勇、擧動をふかく感じて、敢亦これを殺さず。且その獨行をすなる、來歷を諮るに、故鄕は武藏のものなるが、近曾良人を喪ひければ、ふたゝび所媚を討んとて、些の由緣を心當に、遙々這地に來つれども、その人も亦世を去りて、迹絕にきと聞えしかば、憑む樹下に雨漏りて、進退殆難義の折也。陸奥には母黨の、親族あれば那里を投て、赴ばやとおもへども、盤纏なくてはその義も得ならず。うちも累ねて薄命なる、這身のうへを知る人あらば、誰か哀れと思はざらん。

清き、月には有繋憚りて、夫婦潛々笑しげに、うち譚ひつゝ千隈河の、津を投てゆく程に、迥に晃めく小提燈、前路のかたより來るものあり。是則別人ならず、石龜屋次團太が、須本太牛の暴たるよしを、人の噂に聞知りて、小文吾のうへいとゞいたう、心もとなく思ひしかば、獨みづから夜を更て、那里を投て急ぐなる。とは知らねども強盜夫婦は、折歹かりと思ふのみ、只一條なる畷路の、避躱るゝに便なければ、然らぬさまにて船虫を、先に立して行ちがふを、次團太灯光に佶と見て、癖者等。と喚かけて、提燈左に取なほす、右手を伸して袱裹を、引留れども怯ぬ強盜、そが儘弗と振斷て、ふたゝび進むをよせ立じとて、丁と突たる拳の冴は、炎所違はぬ修煉の勁搐に、胸を撲せし次團太は、思はず苦と叫びつゝ、兩三歩倭僂て、忽地撐と倒れたる、音に見かへる船虫ば、一反許行脫て、あぶないことや。といふ口を、みづから窒ぐ不敵の擧動、這首管はずに快ゆきね。と手をもて諭す夜偸の、重擔に撓ぬ足快く、迹を埋めて逃亡けり。

第七十五回

醉客を趕て小文吾次團太に遇ふ
短刀を懷にして假瞽女犬田を按摩す

やくも岡へ引拮けり。登時船虫は、袖うち拂ひ鬢搔抗て、嚮に暗號を定めしに、薄情やおん身の遲かりければ、奴家は竟に組伏せられて、命も既に危かりしを、那奴が身には寸鐵なく、奴家が持る這短刀を、その折はやく捐しかば、辛くも利運になりにたり。今宵はなどて鈍かりしぞ。と怨じて軈て短刀の、鮮血を拭ひ、鞘に斂めて、帶の間へ挿めば、癖者四下を見かへりて、其首に脫落のなかりしかども、惴らば那奴に曉得られん、と思ふによりて些ばかり、術延になりしも沒怪の福悳、渾家に恙あらざれば、そこらの憾はいはずもあれ。歡ぶべきはけふの造化、終日牛の角突を、觀つゝ飽まで飮食して、中夜過てかへる這路にて、最重げなる裹物を、朸に掛たる大男子を、逈に見しより猛可の計較、必錢であるべし、と思ひにければ間道より、先へ走りて形のごとく、諜し合せし脚色の精妙、先や獲物を一覽せん。渾家も快來て見給はずや。と聶きつ步速に、擔荷のほとりへ立よりて、俱に引解く裹の內を、見つゝ此彼莞爾と笑て、料るに違はず永樂十貫、地細の縮も五反あり。又中刀も。と取抗て、腰に跨つゝ、喃船虫、這儘擔ふて走りなば、人の怪むことしもあらん。錢は俺戚駝ひてゆかん、縮は渾家ものせよ。と聶き頷く賊男賊婦が、錢を合して一袱に、包むを背へ駝せてやる。縮は輕し。と船虫が、拿抗て肩にうち掛けし、その袱の織色も、是一對なる虎狼の野心。手拭取出て共侶に、面を罩めど影

も、長の知れたる女流の大刀擊、腕戰ならば目に物見せん、覺期をせよ。と敎圍悍く、矢庭に丁と反覆して、刃を奪取んとせしを、女人も不測の癖者にて、なほ奪れじ、と角ひたる、手さへ臂さへ支ては、進退便なき雪窖の、そこはかとなく挑みけり。浩處に一個の癖者、手に竹槍を引提て、竹叢蔭より突然と、顯れ出つゝ些も猶豫せず、拿たる槍をとりなほして、はや走りよる窖内には、磯九郎が辛して、賊婦を膝に組布て、刃を奪ふて刺んとするに、振落しけんあることなければ、いかにせましと思ふ折、件の癖者聲をかけて、船虫首尾はいかにぞや。と問れて僅に力を得たる、賊婦は下より聲ふり絞りて、やゝ遲かりし。刺外して、組伏られしを知らずや。といふに駭く癖者は、こゝろ得たり。と捍突に、禺煞と刺たる修煉の竹槍、憐むべし磯九郎は、右の腨を裡掛までに、刺串れて霎時も得堪ず、云と噫きて仰反る處を、船虫透さず反覆して、短刀搔撈り、拿るよりはやく、重て串く十々滅の刀尖、春過るまで殘りたる、雪より脆き磯九郎が、露の命は果敢なく滅て、黄泉の客となりにけり。有恁けれども癖者は、突留たる槍をなほ緩めず、ふたゝび聲をふり立て、船虫樣子は甚麽ぞや。と問へば答て、上首尾上首尾。奴家も十々滅を刺たれば、死天の山路へ走りたり。槍に携りて快出ん、やゝ援辷らし給ふな。といへば癖者頷きて、然らば携れ。と竹槍を、引拔きつ又繰降して、携を徐に手繰つゝ、は

りて、出んとするに手がかりなければ、心いよ〱驚憂ひて、人の扶助を俟ものから、日の暮たれば往還も絶て、聲喚嗄せし二晌許、悲しさ限りあらざりき。いかで霎時のおん手を勞して、扶揚させ給へかし。宿所に還らば良人に告て、そのおん報ひは佗とすべし、いかで〱。と哀み乞ふて、伏拜む手は見えねども、聲は涙に隱りたる、憂苦さこそ、と磯九郎は、聞つゝしばしば頷きて、そは亦不慮の災難也。雪は殘れど暖なれば、蛇も蝱も出つらん。那雪頻吹にあふたるものを、穿もて出せし事はあれども、恁る窖に墮たるを、拮るはこれを肇とす。霎時等ね。といひかけて、舊處に退きつ、兩箇の裹を締著たる、索を釋き朸を外して、引提て軈て窖邊に、來つゝふたゝび聲をかけて、やよ喃女中、俺今上より這朸を捍る也。和女郎はこれに楚と携りて、曳るゝ隨に出て來よ。取な外しそよくせよ。とこゝろ得さしつ朸の杪を、徐に手繰降すにぞ、那女房は幾番も、歡びを演るのみ、早には携らざりけるを、磯九郎は焦燥て、何を胡徐胡除快せずや、未歟々々。と問ふ程に、由斷を覗ふ件の女房、朸の杪に手をかけて、力を極めて曳と引く、郤舌を取られし磯九郎は、吐嗟と一聲叫びも果ず、身を倒に雪窖の、底まで撞と落てけり。當下件の女房は、透さず短刀拔拿て、乘しかゝりつ磯九郎が、胸前刺んと閃めかすを、磯九郎は臥ながら、身を遣錯はし、踶退々々、怒れる聲をふり立て、騙賊奴、謀られたりとて

よゝます〳〵、疑惑ふて去も得やらず、隈なき月を獨にして、なほ彼此と看回らすに、聲は正しく樹下なる、殘雪の邊にて、その人土中にある歟とおほしく、形狀はなほも見えざりけり。越に熟尋思を做すに、こは北國の習俗にて、冬春雪の深かる比、獵戶們が雪を穿て、窖藏の如くにしつ、その雪窖に躲居て、鳥を捉ること每にあり。今は四月の初旬にて、里なる雪は消果たれども、日光に疎き巨樹の下、藪陰などにはなほ雪の、小山のごとく殘れるあり。恁れば那里はちかき比まで、鳥を捕るものの、穿做したる、雪窖にもやあらんずらん。然ば夜行をせしものの、愆て件の窖に、陷りしより出がたさに、人の扶助を求る歟、これも亦知るべからず。いで〳〵。といひつゝも、聲するかたに立よりて、見れば果して雪窖也。下は漸々解初けん、さまで深くは見えざれども、上はなほ巖の如く、堅うして且滑也。おもふに違ざりけり。とひとりごちつゝ聲をかけて、窖に墮しは甚なるものぞや。聲は正しく婦人に似たり。何等の故に夜を更て、獨こゝらを過りたる。情由なからずや、いかにぞ。と聲振降して喚り問へば、窖內より答ていふやう、疑ひ給ふは理りなり。妾は千隈の川邊なる、農夫某甲の妻に侍り。けふは那二十村なる、隍廟祭祀で侍るから、牛の角突を觀にゆきて、黃昏時にかへり來にける、這邊にていと大きなる、反鼻に逐れ狼狽て、思はずもこの岡に、陟避んとせし程に、身は雪窖に陷

時こゝらで憩んとて、そが儘に擔をうち卸して、推袒ぎつ月を瞻仰て、腰なる手拭を拔出し、胸毛を浸せし汗を拭ひて、彼此を見かへるに、今來し方の山路なりしは、相川村にてありけんかし。這里は件の村盡處にて、陜野もあり水田もあれど、樹下藪の蔭などには、殘れる雪の多く見えたり。夜艾の野田のことにしおれば、宇津の山邊にあらねども、人には遇ぬ也けり、と口號つゝ悔しさに、獨熟思惟るに、獨には酷く醉にけん、人の意見を聽ずして、恁る重擔を遙々と、もて來ぬるこそ俺ながら、勞して功なき事なりけれ。是よりなほも苦辛して、小千谷の宿までもてゆきぬとも、錢も縮も俺が東西ならぬに、人も憑ぬ擔奴をせしは、只是酒の所爲なれども、痴漢也、と人にいはれん。然とて棄てはいよ〳〵いなれず。益なかりき。と獨言て舌うち鳴らす後悔の、今さら此に立よしなければ、思ひかへしつ擡起して、肩に載せんとせし折から、忽地婦人の叫ぶ聲して、やよ喃妾を助けてたびね。助け給へ。と呼かけたり。登時磯九郎は、思ひがけなき喚聲に、駭きつ且怪みて、急に四下を見かへれども、それかと思ふ人影もあらず。原來是狐狸の、今俺が疲勞れて悔しく思ふ、心の空虚に馮入りて、魅かさんと做にやあらん。いと嗚呼也。と罵りて、袒推斂れつ遽しく、眉毛に屢唾を塗りて、ふたゝび朸に手を掛つゝ、快擡んとする程に、亦復喚聲頻りに起りて、助け給へ。と叫びしかば、磯九郎はい

べし。いでく。といひつゝも、立を主人は禁め難て、しからんには是非に及ばず、然とて遠路の夜行也。箯轎をまゐらせん、うち乘りて、やよ走らし給へ。といへば小文吾頭を掉て、そは淺からぬ馳走なれども、その義によりて時を移さば、いよいよ及び難かるべし。允し給へ。といひ捨て、身裝しつ慌しく、はや玄關に立出れば、主人はなほも奴僕輩を、兩三名呼立て、若們はおん客人に、從ひまつりて快ゆきね。と辭せわしく吩咐て、却後方に合寓たる、牛裁判們にうち對て、各位もとてもの事に、一人途まで送らせ給へ。咱們は箯轎を、吊して迹より趕著ん。這義を憑みまうす也。といふに大家異議もなく、そは宣ふな、こゝろ得たり。甲乙は且く遺りて、主共侶に續きて來よ。迹をたのむ。といひかけて、走り出たる一兩名、後れて來ぬる奴僕輩を、呼掛々々急がして、一町あまり先だちたる、犬田に喘ぐ遲牛の、月を便りに趕ふたりける。案下某再說、鮫守磯九郎は、醉に乘しつ牛裁判們の、皆禁めたる意見を聽かで、十貫の錢五反の縮を、獨朸にうち掛て、須本太が宿所を出しより、只管路次を急ぐものから、又只踉々蹌蹌と、歩の運びの危かりしを、幸ひにして滾もせず、跌きもせず辛して、路二里餘來にければ、夜ははや二更の比になりけり。磯九郎は性として、角力を好めば然ばかりの、膂力なきにあらねども、思ひしよりは持壓りして、背の汗に推流されけん、酒の醉は醒にけり。霎


相川の暗路ニ
次団太賊男女を
こらえんとも
○本文見十九張右


次團太
賊男

うち譚ふこと半晌あまり、夜ははや初更の比及に、主人に引れて又舊の客房に來にければ、牛裁判們は磯九郎が、緈の趣箇樣々々、恁々なりき。と報知するを、小文吾聞つゝ驚きて、そは安からぬ事にこそあれ。這首よりして小千谷まで、一二里の路にはあらず。况千隈の夜河あり。醉狂人の錢帛を擔ふて、一個ゆきなば危からずや。縱恙のあらずとも、他が乾父次團太は、市人なれども俠氣あるに、情由を知らずば某が、財帛に愛て夜深しに、一個磯九郎を還しにけり、と思ひやすらんいと恥かし。時は聊移りしとても、醉たるもののことなれば、いまだ遠くは去べからず。快趕留ん。と立揚るを、須本太郎推禁めて、宣ふよしは理りなれども、みづから趕せ給ふにも及ばじ。僮僕輩を走らしてん。裁判達も心つきなし。よしや禁めても留らねばとて、切て小厮の一兩名も、倶に遣るべきことなるに。といふを大家聞あへず、そは俺們も脫落なく、那人々に恁々と、いひつることはいひしかど、なほ饗膳の最中でありけん、奥へ通達せざりしにや、今までその義に及れざりき。と報るに主人は眼を睜りて、そは那奴們が等閑也。快甲も來よ乙もいね。提燈點して出ずや。と頻りに焦燥て呼立るを、小文吾禁めて、且等給へ。幾個人を走らして、引戻さんとせらるゝとも、俺身みづからゆくにあらずば、磯九郎はなほ云々と、強情張て從ふべからず。思ひがけなき今宵の饗應、歡びは述盡しがたかり。今より暇を給はる

かるべし。と聶きつ、商量したる、そが中に一兩名、庖湢のかたに赴きて、袱朸草鞋まで、手々にもて來て擔爲る程に、自餘のものは磯九郎を、やうやくに推鎭めて、やよ磯九主聞給へ。恁は和主の望に儘して、錢も緡も擔爲りたり。草鞋もこゝにあり。身裝して出ずや。といはれて歡ぶ磯九郎は、二裹の擔荷を見かへりて、是で好これでよし。然らば罷らん。客人にも、主人にもよくこゝろ得てよ。といひつゝ立を、庭門より。と辭をかくるそが一人は、先に走りて推開く、胡枝の折戸も巻石近き、緣頰にははや磯九郎が、裳端折り草鞋を穿に、瑞支へて邪魔になる、中刀取らし手傳ふて、裹の上に挿む。裡面なる二人は朸の兩端、耶と吊揚て乘せて遣る、重擔を肩に受とりて、物とも思はぬ血氣の壯佼、倭僊ながら出てゆくを、心もとなく思ひたる、裁判人們は目送り果て、舊席に坐を占れば、酒客に怕れて次房へ、避たる給侍の婢妾們と、共に小厮も出て來て、亦復酒を薦るにぞ、牛裁判們は磯九郎の、噂をしつゝ小厮に對ひて、さるにても酔たるものに、十貫文の錢をもたして、夜道を遣るば心もとなし。誰々にても見隱れに、送りゆくこそよかゝめれ。這義を奥へまうしてよ。と心を屬れど小厮們は、磯九郎が人もなげなる、似而非廣言を憎がりて、生應して早には立ず。偶立しも奥にゆきて、いはれしよしを、恁々と、執次ものはなかりけり。有恁し程に小文吾は、又那乾淨舍にて、夕饌をたうべなどして、

其首へいなねば濟ぬとて、個磯九郎を客人の、郷導に立られしに、這首の主人が恩義の酬ひに、牽たる縮と樂錢を、受られずとて損さしては、還りて哥々にいひわけなし。杤一本貸し給へ。今より肩にうち乘して、はやく宿所へもてゆかずば、又客人が人柄僞りて、空辭退して果は亦、咱們を哥々に叱らせん。日の暮ぬ間に快ゆくべし。錢も縮も兩個に分て、袱借りて裹ずや。と席薦敲きて急せしを、牛裁判們はなほ和諭て、和主のいふよし無理ならねば、そを用ひぬにあらねども、よく思ふても見給へかし。這里よりして小千谷まで、一里や二里の路にはあらず。日は暮たるに重荷を擔ふて、通宵走るは益なき所行也。然とも翌まで俟れずば、馬を央ふて駝して遣りね。眞夜中比に必屆かん。この義は都て俺們に、任して和主は快就枕りね。やよ喃々。と右左より、只管賺すを磯九郎は、半分聞かず疾視哮りて、牛より起りし事也とて、馬を央ふて何にせん。多寡の知れたる連緡錢、小角力も取る俺なるに、重荷とせらるゝことあらんや。けふは初の九日にて、眞夜中までは月もあり。足の灸にあらねども、五里や三里を走ればとて、甚ばかりのことやはある。快擔僞りて遞與さずや。と頻りに狂ふ生醉も、慾には錯はぬ卑劣の本性、留るべくもあらざれば、牛裁判們は賺難て、かくまでいへば是非もなし。慾に暴立て、なほこのうへの悤劇に及ばゝ、裁判人の甲斐なしとて、主人に怨みられやせん。放て遣るもよ

ば、理なきことを囂々と、繰返したる高聲に、小文吾は只呆れ果て、取るにも足らぬ醉狂人と、口角ひ益なし、と思ひかへして再いはず。牛裁判們はまだ醉ぬ、酒よりはやく興醒て、此彼ひとしく磯九郎を、推鎭んとて捫擇したる、迭代りの辭のかずぐ、果しもあらぬ殺風景に、主人はいとゞ胸苦しく、ひとり小文吾を慰めて、人も我も酒ばかり、怪しきものは候はず。寡言なりしが多辯になるも、柔和なりしも諍ひ怒るは、咸狂水の所爲なるを、御こゝろにな掛け給ひそ。且く絆の鎭るまで、いと徒然に見え給へば、別席にておん湯漬の、夕飯をまゐらすべし。背門のかたには褊小なる、乾淨舍に庭もあり。北國の風土にて、桃も櫻も千葉紅梅も、昨今一度に皆開て、茅の軒端に爛漫たり。はや黄昏に及びしかども、折から霽たる夕月夜には、聊眺めなきにあらず。誘おん案内を仕らん。立せ給へ。と正首なる、心づかひを小文吾は、はやくも猜してこれのみ辭はず。且く這里を外すには、好潮間ぞと思ひしかば、應をしつゝ遽しく、刀を引提て立にけり。爾程に磯九郎は、小文吾が這席に、在らずなりては誰にかも、憚るべくもあらざれば、いよゝます／＼罵り狂ひて、牛裁判們の意見を用ひず、舌もまわらぬ聲ふり立て、各々いはるゝことなれども、咱們が哥々は年こそよりたれ、地方で一二と指れたる、角力の抜手なりければ、暴たる牛の一箇や二箇、組止ること易からんを、けふは火家の囘背にて、

れど、暑に向ふ折なれば、縮は軈て御旅中の、汗衫にも倣さるべし。錢は當所の恒例にて、暴
たる牛を辛くして、捕鎭るものある時は、牛の主より出すこと、三貫文と定めたり。遮莫けふ
の暴牛は、大力士們すら蒐散されて、殆難義に及びしを、料らず大人の御助力にて、綷立地に
鎭りたる、その歡びを稟さんとて、聊主人の心を用ひし、折乾にて候也。敬なき東西を、と叱
らせ給はで、受收給ひなば、主人はさら也俺們まで、いと辱く思ひまつらん。この義を承引
給ひねかし。と口說くを小文吾聞あへず、そは又要なき人情也。嚮にも既にいひけらし。武士
たるものが暴牛を、捕鎭めたりとても、然までに功とすべきにあらず。那折牛を牸めずば、俺
身も矢庭に突倒されて、傷つくこともありぬべし。爾れば人の與のみならで、這身を思ひし故
なるに、約束違ひて甚麼ぞや。力士のごとくせらるゝは、只是意外の恨み也。その義は決して
受叵し。と推辭をうち聞く磯九郎は、折敷搔遣り找み出て、袖巻掲して小文吾を、佶と睨へて、
莞爾とうち笑み、小可醉ていふにはあらねど、大人の了簡甚歹かり。寡慾も事によるべきに、
人の資助になりながら、報ひを固辭ことやはある。こは小可に任させ給へ。今より小千谷へも
て還りて、哥々に見せて羨せん。といふを小文吾冷笑ひて、何を和主が知るよしあらん。角力
の折箱と思へる歟、嗚呼なることを。と禁れども、磯九郎は耳にも掛ず、醉たるものの癖なれ

嚮には小厮を走らして、けふの始末を恁々。とはやく宿所へ報たりければ、妻も兒子も小文吾の、名を聞知りつ、こゝろを得て、大家齊一出迎へたる、欵待態大かたならず。客房へとて案内をしつゝ、上坐に推升して、茶を看め果子を薦め、妻も兒子も暴牛を、捕鎖められし歡びを、云々と演などす。登時主人須本太郎は、婢妾輩がもて來ぬる、酒杯を受とりて、みづから小文吾に薦めけり。けふは祭祀の恒例にて、家毎に酒肉の儲あり。况牛を出せしものは、各々その捷を祈りて、准備に匱しからざれば、有べき限り酒菜を取出て、處陝まで安排べたる、主客の辭讓熟閙しく、牛裁判們も立替り、入代りつゝ提撕て、只管犬田を稱贊す。これにより磯九郎も、席末に列りて、思ひの隨に飲もしつ、啖ひもしつゝ笑ひ興じて、人より先に醉たりければ、傍痛きこと多かり。既にして盃の、數番巡りし時、須本太郎は又更めて、小文吾に羞めていふやう、偶お宿は仕れども、猛の事にて意に儘せず。田舍料理の似而非饗饌、最恥かしく候也。就て一二種の餚あり。こは暴牛を鎮め給ひし、おん報ひとまうさんは、烏滸がましくも思召べし。只獻盃の餚にこそ、と獻し給ひね。と演て後方を見かへれば、牛裁判們がこゝろ得て、次房に准備をしたる、縮麻織五六反と、永樂錢十貫文を、手に／＼取てもて來つゝ、小文吾が目前へ、恭しく安排べて、共侶に薦るやう、只今主人の稟せし如く、相應しからぬ東西にはあ

眞黒牛の、突殺さるゝこともあらんを、人畜共に恙なく、慤まで愛たく隍廟の、祭祀を果せし歡びは、只是大人の賜なり。翌も逗留し給はゞ、小可も亦お宿をせん。喃虫龜の翁、素より田舍の事なれば、おん欵待の何かあらん。然しも他郷に異なるは、糧食にはあらで米の飯、秋冬ならば鮭もあり、小鱈もあれど今頃は、稍雪闕の新世界、野蔬すら尙稀なれば。と相槌打る須本太郎は、含笑ながら頷きて、現錯語なしちがひなし。只手製の御酒ばかり、御意に入れんと思ふのみ。日は傾きぬ誘給へとて、はや小文吾が後に從ひ、先にも立つゝ夜は鳴く、虫龜村へ倡導にぞ。磯九郎さへ又更に、最も興ある心地して、巨擘を掉りつゝ意氣揚々と、犬田が側に隷從ふて、倶に引れてゆく程に、須本太牛を揉倒したる、大力殿をよく觀んとて、今まで殘留りたる、老幼男女幾隊か、樹下結縷草水に立聚ひて、拭翳袖掖き低語て、見えずなるまで目送りけり。却角連二は中途にて、今宵は所要ありと倡へて、辭して家路に還りしかば、大力士們も便路に儘して、別を告るも多かりしを、牛裁判們は慤る時の、所役なれば、と憑れて、なほ小文吾を送りゆくめり。爾程に小文吾は、はやく須本太が宿所に到るに、日の最長き比なれば、向暮として暮もせず、下晡の宿ながら、田舍は殊に長閑なる、その一布地を看回らして、衡門より找み入るに、主人は素より富裕にて、本邨第二の長なれば、妻子あり、奴婢も多かり。

名耳に轟くものから、未だ面を識らざりければ、敬なき業を致したり。允し給へ。とうち陪話るを、小文吾は傍痛し、と思へばこれを慰めて、各々介意し給ふな。武士たるものは戰場にて、名ある勇士を撃てこそ、聊功に誇りもせめ、暴たる牛を制たりとて、何でふみづから負むに足んや。やよ、うち措し給ひね。と技に誇らぬ言の葉に、花をもたせて美しき、答に大家感じたる、そが中に須本太郎は、牛裁判們にうち對ひて、能ある鷹は爪を隱す、といふ鄙語も故あるかな。最大人しき目今の、おん辭に儘しては、御庇に立し甲斐もなし。幾千人の老弱男女が、幸ひにして怪我もせず、絆はや無異に治りたる、歡びもまうすべく、おん報ひもせまくほしきに、今宵のお宿を仕らん。この義を取持給ひてよ。といふに頷く牛裁判們は、又磯九郎にうち對ひて、哥々、目今聞れし如し。誘虫龜へおん伴せん。宜く稟し給ひね。と憑めば有理、と磯九郎は、小文吾を見返りて、何方今宵は小千谷まで、還らせ給ふべくもあらねば、牛主達の所望に任して、那里に泊り給へかし。こは又自然の道理也。誘快々。と勸るを、推辭難たる小文吾は、才にその意に隨ひて、そは左も右もの事ながら、報ひを受べき俺にはあらず。聊たりとも用意せらるゝ、管待は初より、固く斷りまうす也。這義を違へ給ふな。といふに歡ぶ須本太郎、角連二さへ直實だちて、けふ御助力に遇ざりせば、怪我するものも多かるべく、且小可が

暴牛もなきにあらねど、牛力士們が修煉して、軈て捕牸候ひしに、須本太が牛の龍種なればや暴出せしより手に乘らで、不慮の忽劇に及びしに、鬼神を欺くおん身の勇力、輙く牛を推滾して、那厄難を鎭め給ひし、御恩は三國山より高く、又衆人の歡びは、千隈川より深かるべし。小坪で鰐を手捕にしたる、朝夷三郎義秀も、牡鹿の角を裂にきといふ、泉小二郎親衡も、皆是見ぬ世の人なれば、虛實いかにかあるべからん。駭憶ふはおん身の力量、眼前に觀て初て知りぬ。今も亦恁る勇士の、在たるこそ不思議なれ。願ふは本貫尊號旅館を巨細に名告せ給へかし。記錄に留めて後々迄の、話柄に做まく欲す。いかで〳〵。と慇懃なる、言語齊一乞問れたる。犬田が答を俟ずして、找み出たる磯九郎は、さもこそあらめ、と誇良に、はや須本太們にうち對ひて、噫大爺達まだ識らずや。這個刀禰は東國より、武者修行の爲來ましたる、姓は犬田世稱を、小文吾となん喚れ給ふ、海內無雙の猛者なれば、旅亭も一倍擇れけん、小千谷の郷に名もしるき、石龜屋次團太が、一大得意の客人也。なれどもさせる欵待なし。けふこそ這里の鬪牛を、觀せまゐらせんと豫より、約束せられし哥々の名代、おん郷導に立たれども、忽劇で與も忽地に、鮫守の磯九郎を、認らぬことはなからんを、咱們を閣て當面に、事問稟すは無禮ならずや。と訛音高く窘れば、牛裁判は力士と倶に、驚きながら仰見て、現いはるれば磯九主、高

小文吾は、權且牛を疲して、曳と被たるちから聲と、共に烈しき修煉の剽姚、左へ推させて、耶と右へ、揉回したる打播の本事に、然しも悍かる須本太牛は、鈍や頑童に放下さるゝ、猥兒の似く地響拍して、撻と仰反倒れけり。これを觀るもの思はずも、感じて喝と采る聲、谺に答て夥しく、霎時は鳴も已ざりける。登時力士幾名か、走り蒐りつ力を勠して、牛の四足を捉るもあり、又睾丸を攫むもありて、毛をもて紏る牛縻に、鷄の羽多くものせよ。と罵りつ辛くして、鼻に融しつ、太やかなる、絆索を楚と繫著て、哨子鳴らして牽起せば、牛はそが儘鎭りて、身振ひしつゝ立時に、小文吾を見て怕れけん、兩三歩逡巡して、牽るゝ隨に阿容々々と、蕃山のかたに退きけり。有恁し程に小文吾の、案內に立たる磯九郎は、迯も果さで又立聚ふ、衆人と共侶に、間遙に小文吾が、勇敢膂力を目擊したる、こゝろ宛醉るが如く、初は咕み後は又、咱さへ面を起すと思へば、事鎭ると慌しく、はや稠人を搔分て、走り近づき小文吾に、聲をかけ腰を折めて、その歡びを演るにぞ、那大力士牛裁判們は、二頭の牛の主と聞えし、須本太角連二を先に立して、含笑ながら出て來つ、皆小文吾にうに對ひ、跪坐て齊一額をつきて、俺們はけふの結番の、此彼二頭の牛の主、虫龜村なる須本太郎、逃入村なる角連二、竝に大力士某甲某乙、牛裁判們で候也。當所の牛の角突は、年每に間斷なければ、牛の放るゝこともあり、又

南總里見八犬傳

東都　曲亭主人編次

第八輯　卷之一

第七十四回　牛を牪て悌順咎恩錢を辭ふ　枌を卸して礒九殘雪窖に墜つ

再說、犬田小文吾悌順は、那龍種なる暴牛の、突もて來ぬる勢ひ猛く、當るべうもあらざりしを、些も騷ぐ氣色なく、閃りと反して左右の手に、角を楚と捕駐たり。然ども怯ぬ怒牛の奮激、四蹄を壤に踏入までに、推倒さんと角へども、小文吾も亦一身の、力を極め挑あふて、一歩だにも退かず。千曳の石の地中より、見れ出て立たる如く、叉烏獲が奔牛の尾を援留めしも恪やと覺えて、和漢に儔多からぬ、稀有の壯觀でありければ、初に酷く蒐散されて、辟易したる牛力士們は、亦這綷の爲體を、看つゝ再胆を潰して、彼よ〳〵。と計りに、手を抗足を空にしつ、衆皆四下に聚ふものから、怕れて近くは找み得ず、呆れて齊一目戍りてをり。然程に

第九輯 卷之四

第九輯 卷之五

第九輯 卷之六

南總里見八犬傳 目錄 三

蟹麻呂者。伊勢松阪人。殿村常久一稱也。別號巖軒。善研究國學。而所發明不尠矣。是以其著字通保物語年立。千種根左志。各一卷有之。皆刻于家。然性謙讓。而不遊於名利間。是故其書雖刻成。而自非知音之友。未嘗與諸人。嗚呼可惜焉。文政十三年。庚寅秋七月十六日病沒。享歲五十二。是歌易簀之前月所咏云。因附錄簡端楮餘。

蓑笠漁隱再識

いはのやのかにまろおぢが、八犬傳をめでよろこびて、

よみたる八うた。

たをやめのはなのたもとにおひたてど　こゝろは雲をしののをすゝき

あたうちてたのみよりつるとしごろの　めぐみもかへす犬川のなみ

これやこのやしなひとりていぬかひの　ありておやには似ざりけむ蜂

もゆる火のなかにのがれて犬山の　わざすてつるもこころたかしや

きえぬべき露のしら玉　神も手にとりてもていぬえにはふかしな

おひかかる犬田のくろのすまひ草　したにくちたるゐのくつちかな

おほろけのかりの色かはをみなへし　おたをもつくすはなのひとゝき

いぬむらのかきねのくず葉うらみをも　かへせる露のたまやうれしき

油然有所感。而肅然知所懼。一日有客。余對客腐談如前條。時八犬傳第八輯。全稿方成。欲序未果。卽次是言。代序以顏于簡端。

天保三年如月望　蓑笠漁隱撰

懸禁竊盜之旨哉。雖然。集虛假之詞而綴虛假之文。事之與文。素所無之。徵諸華胥乎。抑討於南柯乎。胸中有物。則求之于內。胸中無物。則求之於外。內外撮合。然後許多脚色出焉。於戲噫嘻。誰徐悟立談之旨於言外。世人多不思之。好閱稗史者。啻喜虛假之詞之奇中出奇。且有千情萬形可笑可悲。可怒可罵之闇合已矣。不閱者。不擇巧拙。亦唯謂虛假之詞之誣世惑俗。一毫無益於名教。而擯斥之。至甚焉者。燒琴烹鶴。其故何也。爲膠柱不解。不悟幻境爲仙家。除此之外。厭常喜怪。是故徒好聽鬼而不樂觀鬼。昔者葉公好畫龍。而懼眞龍。當時呈畫龍者賞矣。致眞龍者黜矣。余亦爲婦幼。呈畫龍也久矣。尙幸不能致眞龍焉。此拙編所以行于今。儻有與余同愚者。而思及于此。乃觀畫龍。如觀眞龍。其

以至二三。不足怪矣。時好名者。相羨以爲雅事。因無其堂閣樓臺。亦自號某堂某樓主人。夫有名而無實。是爲虛名。虛名與身俱亡。不傳于後世。雖有十數號。與坊賈記本錢字號一般。非但文人墨客有別號。貴賤有家號。又有綽號。萬物有方言。多異名。至諸家本草。乃藥物異名最煩多。非學而得焉。識別殆不輙。故老氏曰。名可名。非常名。漆園亦曰。名實之賓。名實兩忘。始可知非常之名也。由此觀之。余之有十數號。猶無也。古之高人。許人聞名。不許人見面。余胡爲望高人。然惜身而不思名。比肩於稗官者流。而意織筆耕。不斅造化小兒與之爲狡猾也。豈思名者所庶幾。能察是意者。可俱評稗史焉。未得是意者。何遽知作者之觀世寓情。有寓言以奬忠孝。戲謔中辨貞淫。猶且正是非昭法戒。又善懲隱

八犬傳第八輯自序

曲亭主人。江戶隱士也。別號多有。名平居綴文處。爲著作堂。其次名小書齋爲蠹齋。繙國史舊錄。奇文諸雜書時號彫窩。閱儒書佛經。諸子百家之書時號玄同。自序於稗史小說時號簑笠。耽戲墨時號曲亭。編兒戲小策子時稱馬琴。下俚巴人。其曲不高。和者彌衆。是以馬琴曲亭二號。著于世云。（曲亭山名。見漢書陳湯傳及大明一統志。馬琴取野相公索婦詞句以命之。相公詞曰。才非馬卿彈琴未能。身異鳳史吹簫猶拙。見菅原爲長十訓抄。）是它有雷水。狂齋。半閒。信天翁。愚山人數號。約一十二號。皆臨時隨意。莫弗署矣。或笑其別號之多。主人乃辨之曰。古人有表字。而無別號。或稱本貫。或以所居地名相呼耳。近世別號。始自儒流。間亦有堂閣樓臺精舍草菴。則名此而號某堂某樓主人。此後世有別號。所

爐邊に携へ行き、輕く片手に捧げ得べき書籍は、要するに、最も有用なる書籍なり。

ジョンソン

南總里見八犬傳

參

